

# ガールズバンドに振り回される日常

レイハントン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どこにでも居るちよつとだらけた高校生―旭日夕（あさひゆう）。毎日母親に叩き起こされるも、遅刻ギリギリで登校していた夕。しかし、ある日母親が病気で亡くなってしまふ。さらに本当の親ではないことを父親から告げられ夕は絶望の淵に立たされるが、ある出来事のおかげで誓いを立て前に進むことにした。

そして隣に住む幼なじみ―氷川紗夜にプライドを捨て毎朝起こしてもらふことに。お互いいろいろ抱えていることを知りながら、それでもいつも通りに接する2人。いつしか2人の距離は縮まり……。

これは旭日夕と氷川紗夜、さらにはガールズバンドとバイト先のCIRCLEに集った個性豊かなメンバーに振り回される日々。

巻き込まれ体質な彼は果たしてどうなってしまうのか。君は見届けることが出来るか……

※第11話から読むことを強くおすすめします。

# 目次

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| キャラクター紹介                      | 1   |
| シーズン1 高校2年生編                  |     |
| 第0話 動きだす時間                    | 11  |
| 第1話 今日もマイペース                  | 19  |
| 第2話 余計なひとこと                   | 27  |
| 第3話 夕と紗夜                      | 35  |
| 第4話 日常                        | 48  |
| 第5話 夕と日菜                      | 58  |
| 第6話 C i R C L E               | 70  |
| 第7話 変わりゆく日常                   | 81  |
| 第8話 G l i t t e r * G r e e n | 91  |
| 第9話 後輩とパン屋の娘とツンデレ             | 101 |
| 第10話 神は才能を2つはくれない             | 111 |
| バンドストーリー編                     |     |
| 第11話 歌姫との出会いは唐突               | 122 |
| 第12話 成すべきと思つたことを              | 136 |
| 第13話 墮天使あこ                    | 143 |
| 第14話 S P A C E                | 153 |
| 第15話 強い思い                     | 163 |
| 第16話 セッション                    | 173 |
| 第17話 混ぜるな危険                   | 182 |
| 第18話 スカウト                     | 191 |
| 第19話 嫌な予感                     | 201 |

|      |                      |     |
|------|----------------------|-----|
| 第20話 | それぞれの思い              | 210 |
| 第21話 | 可能性                  | 220 |
| 第22話 | 5人の音                 | 229 |
| 第23話 | Roselia 前編           | 239 |
| 第23話 | Roselia 後半           | 251 |
| 第24話 | すれ違い                 | 261 |
| 第25話 | 暗雲                   | 272 |
| 第26話 | 祝! Roselia 雑誌掲載記念お茶会 | 284 |
| 第27話 | 山積みの問題               | 295 |
| 第28話 | 愚直な努力                | 303 |
| 第29話 | 努力の意味                | 313 |
| 第30話 | 冷たい言葉                | 322 |
| 第31話 | 道標                   | 332 |
| 第32話 | 聖地                   | 343 |
| 第33話 | 進むためには               | 354 |
| 第34話 | 消えた笑顔                | 363 |
| 第35話 | 繋がり                  | 373 |
| 第36話 | クライブ                 | 387 |
| 第37話 | 雨上がりの空               | 400 |
| 第38話 | FUTURE WORLD FES.    | 410 |
| 第39話 | ハッピーラッキー             | 425 |
| 第40話 | 束の間の日常               | 435 |
| 第41話 | Afterglow            | 446 |
| 第42話 | Pastel*Palettes      | 455 |
| 第43話 | 諦めない                 | 467 |

|                      |               |     |
|----------------------|---------------|-----|
| 第44話                 | ハロー、ハッピーワールド! | 477 |
| 第45話                 | 終わりと新たなる始まり   | 486 |
| Episode 1            | 過去            | 495 |
| 第46話                 | お使い           | 502 |
| Special              | Episode       |     |
| 除夜の鐘                 |               | 511 |
| バレンタイン               |               | 520 |
| ホワイトデー               |               | 531 |
| 2022年氷川紗夜・氷川日菜誕生日記念回 |               | 539 |
| 2023年氷川紗夜誕生日記念回      |               | 548 |
| 2024年氷川紗夜誕生日記念回      |               | 558 |
| 非日常                  |               |     |
| 雪ついでいろんなことが起きる       |               | 568 |
| ケモミミの破壊力は抜群          |               | 577 |
| 梅雨は帰ってもらって           |               | 586 |
| 突然やってきた夏             |               | 596 |
| 見えないものが見えるのは怖い       |               | 606 |
| いつか訪れるかもしれない未来       |               | 615 |

## キャラクター紹介

### キャラクター紹介

- ・ざっくりとした説明が載っています
- ・ネタバレは含みません
- ・読みはじめの前で、登場人物を知りたくない場合はブラウザバックを推奨します。

### ☆主人公

旭日夕（あさひ ゆう）

学校 花咲川高校

クラス 2年C組

趣味 音楽を聴く（アニソン）

ゲーム

昼寝

ネットサーフィン

- ・ C i R C L E でバイトをしている
- ・ 紗夜と日菜の幼なじみ
- ・ 巻き込まれ体質
- ・ 冷たい雰囲気
- ・ 無表情だが優しい一面もある
- ・ 親とは血の繋がりが無い
- ・ だいたい首にヘッドホンをかけている

（授業中は外している。紗夜からもらったもので、ケーブル着脱式の有線）

左腕に時計（日菜からもらったもの）

右腕にはレザーブレスレット（母親からもらったもの）

- ・ 赤みがかかった黒髪。前髪は長め。真っ赤な瞳
- ・ 身長は175cm

### ○服装

- ・ 季節関係なくヘッドホンを首にしている。色は黒色。

春

ワイシャツの下は半袖。ネクタイを緩め、第1ボタンとブレザーのボタンを開けている。靴は黒色に黄色のラインが入っているハイカットのスニーカー。

夏

長袖のワイシャツを腕まくり第3ボタンまで開いている。通気性の良い黒色のスニーカー。

秋

春と同じだが、ワイシャツの下は長袖。変わらずブレザーは全開。靴は春と同じ。

冬

着崩して居るのは変わらず。ブレザーのしたに黄色いパーカーを着ている。チャックはちゃんと閉まっている。靴は春と同じ。

○私服

春

黒いズボン（スラックスやカーゴパンツ）。白いシャツの上に黄色いパーカーを着ている。首にはヘッドホン。基本リュックだが、ギターを弾くようになってからはショルダーバックに。靴は黄色に黒いラインのハイカットのスニーカー。

夏

白いズボン。黄色い半袖のパーカー（チャックなし）。首には変わらずヘッドホン。靴も同じ。

秋〜冬

下のシャツも長袖に。黄色のパーカーの上に紺色のジャケットを着ている。ヘッドホンと靴は変わらず。

☆友達

南雲紘翔（なぐも ひろと）

学校 花咲川高校

クラス 2年C組

趣味 読書

ピアノ

人物

・優しい性格

・主人公の相棒

・茶髪の少し長めの髪。瞳も髪の色と同じ

・身長は175cm

・CiRCLEでバイトをしている

・母親は元芸能人

・意外と小言が多い

松風智紀（まつかぜ ともき）

学校 花咲川高校

クラス 2年C組

趣味 サッカー

カラオケ

人物

・夕と涼子と腐れ縁の親友

・サッカー部のレギュラー

・球技系が得意

・結構モテる

・ボケ担当のはずが、いつもツツコミ

・黒髪短髪のイケメン

・身長178cm

瀬名涼子（せな りょうこ）

学校 花咲川高校

クラス 2年C組

趣味 音楽を聴く

楽器のカタログを読む

人物

・夕と智紀とは腐れ縁の親友

・CiRCLEでバイトをしている

・機材が好き

・中学まではバスケット部

・気が効く性格



・黒髪のポニーテール。長さはショートボブ  
・身長は163cm

月島葵刃（つきしま あおば）

学校 花咲川高校

クラス 2年B組

趣味 修行

散歩

人物

・月島家の次男

・兄、姉、妹が居る

・部活、修行をサボる為母親からよく逃げている

・運動系では無類の強さを誇る

・自覚なし系天才

・家は今井家の隣

・緑がかった黒髪。緑色の瞳

・身長は176cm

戦樹憐歌（せんじゆ れんか）

学校 花咲川高校

クラス 2年B組

趣味 ゲーム

人物

・憐子、あことはNFO初期のゲーム友達

・ゲームの類は無類の強さを誇る

・凄まじい反射神経を持っている

・典型的なお人好し

・白金家と割と近い

・オレンジがかった茶髪。オレンジ色の瞳。

・身長170cm

神原大輝（かんばら だいき）

学校 花咲川高校

クラス 2年B組

趣味 ネットゲーム

機材を調べる

楽器の演奏

人物

・江戸川楽器店のバイトをしている

・友希那、リサの2人が一緒にバンドをしていた時に出会ってから  
の腐れ縁

・趣味の範囲だがギター、ベース、ドラム、キーボードなどの楽器  
の演奏が出来る

・機材のことになると止まらない

・お客さんの前では猫をかぶる

・茶色よりの黒髪

・身長175cm

☆CiRCLEのバイト仲間

○大学生組

天堂奈菜（てんどう なな）

学年 大学4年生

趣味 ランニング

人物

・バイトリーター

・めちやくちや仕事出来る

・全体を把握できる視野の持ち主

・主人公を信頼している

・怒るとすごく怖い

・藤紫色の長い髪。ポニーテール

・身長は170cm

海藤蒼真（かいとう そうま）

学年 大学2年生

趣味 音楽を聴く

人物

・お兄さんの存在だがいまいちなりきれない

・急に適当になったり、仕事押し付ける

・気づいたら居ない

・頼んだことでミスした時はちゃんと庇ってくれるいいところも

・片目が黒髪で隠れる長さ

・身長は180cm

四十崎李乃（あいさきりの）

学年 大学1年生

趣味 猫カフェめぐり

人物

・お姉さんの存在

・無類の猫好き

・美人でモテる

・男性客にウケがいい

・たまに徹夜モードでポンコツになる

・茶髪のセミロング

・身長は163cm

○高2年生組

旭日夕を参照

瀬名涼子を参照

南雲紘翔を参照

萩野凧（はぎの なぎ）

学校 月ノ森女子学園 2年生

趣味 音楽を聴く（アイドル系）

ライブに行く

人物

・タと同年だけどCIRCLEのバイトの先輩

・背が小さいことがコンプレックス

・頑張り屋だが、空回りする

・アイドル大好きで追っかけをしている

例え北海道でも行く

- ・茶髪のアトトレート
- ・身長は150cm

○高校1年生組

早乙女麗香（すおとめ れいか）  
学校 月ノ森女子学園 1年生  
趣味 お茶をすること

人物

- ・仕事はしないけどたまに頼りになる
- ・いつも執事がつきまといっている
- 姿は見えない

- ・失礼なお客さん対応は最強

（執事が殺気を向けているから）

- ・早乙女財閥の一人娘で溺愛されている
- ・誰とでもお茶をする（主に女性）
- ・栗色の髪。ハーフアップ

- ・身長は154cm

鈴音ユキ（すずね ゆき）

学校 花咲川高校 1年生

趣味 日本のことを調べる

音楽を聴く（アニソン）

人物

- ・ロシア人と日本人のハーフ
- ・月島道場に通っている
- ・涼子のことを尊敬している
- ・なんだかんだ夕のことも尊敬している
- ・時折バカになる
- ・真宗とは合わないが認めている
- ・長い銀髪。後ろでまとめている
- ・身長は157cm

柏崎真宗（かしわぎ まさむね）

学校 花咲川高校 1年生

趣味 ライブ鑑賞（自宅で）

人物

- ・ 女性恐怖症。克服しようと頑張っている
- ・ 夕のことを尊敬している
- ・ 鈴音ユキには嫌いの感情が前に出る
- ・ パシリの存在
- ・ 涼子は苦手だが頼りにしてる
- ・ 鈴音ユキとは合わないが認めている
- ・ 灰色の短い髪
- ・ 身長は170cm

○高校3年生組

市野木匠（いちのき たくみ）

学校 荒滝高校 3年生

趣味 ナンパ

人物

- ・ ムードメーカー
- ・ ナンパバカ
- ・ 誰とでも仲良くなれる
- ・ 女子ウケが微妙
- ・ 忙しい時だけ真面目
- ・ 意外と頭が良い。学年20位以内
- ・ そこそこ長い金髪。いつもセットしている
- ・ 身長は177cm

☆その他友人

弦巻鋼太（つるまき こうた）

趣味 研究

人間観察

人物

- ・ こころの兄で重度のシスコン
  - ・ 発明家で毎日研究、開発ばかりをしている
- 壊しては作っての繰り返し

- ・夕のことは何かと気に入っている
  - ・片瀬兄とは仲があまり良くないが、信頼はしている
  - ・安全第一を考えているが自分は適応外でまずは自分が試す
  - ・こころを楽しませる為ならなんでも作る
  - ・黄色い髪の毛の短髪で、デコだし
  - ・身長176cm
- 片瀬雅仁（かたせ まさひと）  
趣味 こころの観察

人物

- ・真希那の兄
- ・こころのボディガード
- ・こころの事を溺愛している
- ・体術、武術はかなりの腕前
- ・気配を消していつのまにか居る
- ・黒髪短髪
- ・身長178cm

片瀬真希那（かたせ まきな）

趣味 こころの観察

人物

- ・雅仁の妹
- ・こころのボディガード
- ・こころの事を溺愛している
- ・兄同様体術、武術はかなりの腕前
- ・いつの間にか居る
- ・いつもサングラスをかけている
- ・黒髪だが、茶色に染めている
- ・髪の毛の長さは腰に届くくらい
- ・身長168cm

狩場虚生（かりば きょう）

C i R C L E の スタッフ

趣味 景色を眺めること

## 人物

- ・ C i R C L Eでのお兄さんの存在
- ・ 仕事をしつかりこなす
- ・ 話しやすい人物
- ・ 弦巻鋼太とは知り合い
- ・ 深い赤色の髪。赤っぽい黒の瞳。
- ・ 身長177cm

## シーズン1 高校2年生編 第0話 動きだす時間

### 第0話 動き出す時間

#### 商店街

今日は3月に入って最初の土曜日。俺は母さんの赤いギターが入ったケースを背負って、ある場所に向かっていった。

ことの発端は2月末でバイトを辞めた日。帰り際オーナーから言われたことだ。

『向き合う向き合わないは夕の勝手だ。でも、ギターのメンテナンスくらいはちゃんとしてやりな』

言われるまで気づくことが出来なかった。自分のことではなかったのかもしれないが、何よりも……思い出さなく……なかったのかもな。

オーナーは母さんと昔からの知り合いで、俺のことを気にかけてくれたんだと思う。

寝室のクローゼットから探しだして今に至るわけだ。

母さんが体調崩してから開けていた様子はないのに、中身を確認したら割と綺麗だった。半年くらいは手入れされてないはずなのに。まあそういう時は一旦詳しい奴に見てもらった方がいい。そう判断した。

商店街を抜けて少し先に進むと、目的地が見えた。楽器はやっぱり楽器店に持つていくべきだな。

商店街から数十分歩いてたどり着いたのは江戸川楽器店。母さんがよく来ていたお店だ。

ドアを抜けて中に入ると、やはり店番をしている友人が居た。

「おータか。珍しいな」

「まずはいらっしやいませじゃないのか？ 大輝」

コイツは神原大輝。クラスは違うが同じ高校に通う友達だ。顔見知りというか、友達だと人が変わったようにこの態度で接客する。お



客さんだとガラッと変わる。オンオフがしつかりしていると  
聞こえは言いな。

「夕だしいいかなって。それよりもそのギター？ ベース？ はどう  
した？ バンドでもやるのか？」

「違う。これは母さんのギターだ」

「はあ?! あの赤薔薇のアリスのギター?!」

「そんなに驚くことか？」

そう言いながら店員さんとお客さんが向かい合って話せるスぺー  
スの方へと移動してギターケースを下ろした。

ちなみに赤薔薇のアリスって言うのは学生時代に付いた母さんの  
通り名だ。詳しい話はいつの日か。

そんなことよりも。大輝も楽器オタクみたいな所がある。話始め  
ると、次から次へと理解出来ない単語を並べてくる。

「わざわざ見せに来てくれたのか?!」

「んなわけないだろ。メンテナンスしてほしいんだよ。半年くらい手  
入れされてないっぽいから」

ケースから出すと、俺を押しつけて母さんのギターをまじまじと見  
始めた。

「うお〜! Grass RootsのG—FR—62GTじゃねえ  
か!!」

「そんなにすごいのか？」

「もう生産してないからな。それよりもかなり使い込まれてるのに綺  
麗だ。メンテナンスをちゃんとしてたんだな」

そこまではよかったんだが、この後わけわからんことをペラペラ話  
しだしたから俺はもれなくスルーさせてもらった。わからんもんは  
わからん。……ちやんと調べておくか。

昨日の夜に思ったことだが、ぎつとギターのことを調べただけで情  
報量が多い。メーカー、形、使い心地、色。他に選ぶ基準を考え出し  
たらキリがない。なんで母さんはこの赤いギターにしたんだろうか。  
色は間違いない好きいな色だからだろうか。

「ってことだ。わかってくれたか？」

「わかるかバカ。とりあえずメンテナンス頼めるか？」

「もちろん。そんな時間はかからないと思うんだけど、どうする？」

「だったら待ってる」

「了解。すぐ取りかかる」

ギターのメンテナンスを大輝に頼み、俺は一旦江戸川楽器店を後にした。その後は朝ご飯を食べていないことを思い出し、やまぶきベーカリーに買いに行った。ついでに昼ご飯も買うために。

やまぶきベーカリーで用事を済ませた俺は江戸川楽器店へと戻った。

店内へと足を踏み入れるとそこには。

「ん？ 奇遇だな」

ちょうど何かを買いに来ていた紗夜の姿があった。

「そうね。夕は何をしにここへ？」

一瞬隠そうとも思ったが特に隠す理由もない。

「……母さんのギターをメンテナンスに出しに来たんだ」

「それって……」

「別に弾きたいとかではない。辞めたバイト先のオーナーに言われたんだ。メンテナンスくらいはしてやりなってる」

「そう。メンテナンスは大事よ。ちゃんとすることね」

「わかってる」

どう……なんだろうな。そのままの形で残すっていう方法もあったとは思う。でも、朽ちてゆくのは、それはそれで見るに耐えない。結果的には来てよかった。

「いらつしやいませ。氷川さん、旭日さん」

コイツ猫被つたな。ニコニコ営業スマイル浮かべて。よく瞬時に変えられるな。

「2人は知り合いなんですか？」

「幼なじみだ。話したことなかったか？」

「初耳ですね」

誰に言っ誰に言っでないのかよくわからなくなってきたな。

「夕と神原さんはどうなんでしょうか」

「クラスは違いますが友達ですよ」

「そうですか。しっかりしていますね」

おそらく俺への当てつけだろう。あなたももう少し、しっかりしたらどうなの？　と言葉ではなく圧で伝えてくるんだが。実際問題お店で働いてる友達にはタメ口だよな……？

「いえいえ。旭日さんもやる時はやる人間ですよ？」

「フオローになつてないからな」

「すいません。今、ギター持ってきますね」

ニコニコ笑顔を浮かべてそういうと、ギターを取りに奥へと戻っていった。

いじるだけいじって楽しんで終わりとは。知り合いじゃない奴の前だとあの化けの皮は剥がせないだろうな。ととと厄介だ。

「お待たせしました。特に破損している所はありませんでしたので、基本調整のみとなります」

となると3000円か。破損しているところがなかったのはよかった。これからも大切にしないとな。

自分の支払いを先に済ませ、紗夜に一声かけてから外に出た。

「外で待ってる」

「わかったわ」

支払いを終えた俺は江戸川楽器店を後にした。

慣れないギターの重さだ。今までこうしてメンテナンスに持つてくるとか、外に弾きに行くことはなかったからな。少し新鮮な気持ちになる。……多少なりとも重いものを背負って紗夜は肩が凝らないんだろうか。

1人呆けていると、楽器店のドアが開いた。中から出てきたのはもちろん紗夜。

そして――嵐は突然やってくる。

「あれ？ おねーちゃんどゆーくん？ 何してるの？」

突然聞こえてきた日菜の声に紗夜が一瞬驚く。そしてこの状況は非常にまずいと思ったんだろう。焦りが見える。

紗夜は日菜にギターを弾いていることを秘密にしている。知られれば絶対真似をされるから。

「楽器屋から出てきたけど」

「（今、日菜に知られたら……）」

だが、こういう時。慌てても仕方ない。

「そうだ。母さんのギターをメンテナンスしてもらいに来たんだ。ついでにメンテナンス用品も買う予定だったから、紗夜には荷物多かつたら手伝ってもらおうと思っついてついでにきたもらった」

「そっかー。でも、あんまり荷物ないような」

「夜ご飯の買い物もしないといけないからな。増えるのはこれからさ」

表情1つ変えずに嘘を吐き続けた。無表情というのは、こういう時は非常にありがたく感じてしまう。

「なるほどね！ あたしまだ行く所あるから。じゃあねー！」

「気をつけてな」

突然現れたかと思った矢先、すぐにどこかへ走って行ってしまった。本当に嵐みたいな奴だ。

一難は去ったが、紗夜の表情は晴れない。

「ごめんなさい……また、嘘を」

「気にするな。今更1つや2つ増えたところで変わりはない」

そうは言っても簡単にはい、そうですかとはならない。俺はどうなったって構わないのに。紗夜はいつもそうやって心配してくれる。優しいな……。

ふと昔のことを思い出した。

「夕……お嫁さんもらうならどっちがいい？」

「寝言は寝てから言ってくれ」

ソファーに寝つ転がりながらテレビを観ていると、ダイニングテーブルで飲みまくっている母さんが突然わけわからないことを言い始めた。明日は休みのようで、最初から飛ばしている。これは二日酔い確定だな。

「あんたはいつも冷たいわね。そんなことじゃ紗夜に振り向いてもらえないわよー」

「なんで紗夜が出てくるんだ」

「そ、そうなのか?! 父さん、もう結婚とか考えないといけない年?!」  
「当たり前でしょー? 夕はもう高校1年生よ?」

いや、高校1年生なんだからまだ結婚とかいう話じゃないだろ。そもそも、そんな先のことなんて考えている暇はない。俺は星座の特集を見るので、忙しいんだ。酔っ払いに構っている暇は――。

「ちよっと聞いているのー?」

「邪魔なんだけど。あと酒臭い」

「はあー? 冷たい態度だけじゃなくて冷たい言葉まで……」

いきなり目の前に来たと思ったら今度は泣き崩れた。情緒不安定というか、なんというか。本当に酔っ払っているといつもこうだ。被害者ヅラしてるけど、こっちが被害者だからな。

再び俺の視界入ってきた。

「2人とはなにもないの?」

「ない。だいたい、紗夜と日菜が恋愛するタイプに見えるか?」

「わかってないわね。女の子はみんな夢を見るものなの。紗夜と日菜だつて恋の1つや2つするのよ」

そんなもんなのか。なんだか実感がわかないな……2人の隣に俺以外の別の男が親しげに居る。

なんだ……? なんで紗夜の顔が思い浮かぶんだ? それにこの感覚。すごく……。

「今、紗夜のこと考えた?」

「いや、邪魔だからどいてくれないかなって」

「またまた。嘘ついちゃって」

本当に鬱陶しい。父さんはどこ行つた？ いつもみたい羨まし  
そうに見てないで助けてほしいんだけど。

「……夕」

名前を呼ぶと、酔っているにしてはふざけている感じは一切なく。  
優しい笑顔を浮かべながら母さんは言った。

「あなたが繋ぎ止めてあげるのよ？ 今は無理かもしれないけど、い  
つの日か。必ず夕の力が必要になる時がくる。その時は……ちゃん  
と向き合つてあげなさい」

真剣な話をしている時の顔だ。

「なんだそれ。その時が来たらの話だろ？」

微笑んでからそう……答えた。

その時にでも。言ってくればいいのに。

正直何を言っているのか……あの時の俺にはよくわからなかった。  
でも今は……。

「夕？ どうかしたの？」

「いや……なんでもない。買い物して帰ろう」

嘘にしないために。買い物をするべく次の目的地へと向かった。

紗夜の手を——引きながら。

旭日家 寝室

夜。

あれから数週間が過ぎた。高校2年生の生活はさほど変わらず、バ  
イトの日以外は退屈な毎日を過ごしている。

そう。新しいバイト先が見つかったんだ。今までの経験を活かせ  
ると思う。

風呂上がりにはだいたいベランダで涼んでいるが、今日は違った。

母さんの寝室。正確には母さんと父さんの寝室だが、今のままで残りたいという父さんの思いからそのままの形で残っている。

俺はこうして時折、忍び込んでいる。別に寂しいとかそういうわけじゃない。人は忘却をする生き物だ。辛いことを忘れて楽になろうとする。だから俺は……こうして忘れないように足を運んでいるんだ。他にもいろいろとある。

ふとベッドの横に視線を向けた。その先にはギタースタンドがある。置かれているのは母さんの残していった赤いギターだ。特に弾くわけでもなく。時折手入れして。ただ……置かれている。

自分のバンドのことなんていつきい話きなかったのは、過去のことか本当に恥ずかしかつたからなのか……。それともまた別の理由か。話してはくれなかつたけど、消えてしまわないように残したいとも思う。CDとか動画とかじゃなくて。自分で弾いて。だけど……。

俺は母さんの音楽とは向き合えない。

今の状態じゃ心の底から楽しめないんだ。

そんなの母さんに失礼になる。いつもお酒を片手に楽しそうに音楽について語る姿が今でも鮮明に記憶に残っている。いや……記憶にこびりついていると言った方が正しい。絶対に忘れたくないと思っただからか。それとも……いつの日か。

母さんの音楽と向き合うためか。

その答えはわからない。でも、いつかは向き合いたい。心の底から楽しいと思いつながら……母さんのギターを弾いてみたい。

そう思いながら俺は時折、母さんの部屋で弾いている。お下がりでもらった真つ白なギターを。

いつか向き合えて……母さんのバンドが奏でた曲を。あの赤いギターで弾くために。

「それから……どうでもいい報告。やっぱ朝は起きられないみたいだ。だから、紗夜に頼んだよ」

いつかは……必ず起きるようにはするから。

『知ってた。あんたはそういう子だもん』

聞こえるはずのない。母さんの声が聞こえた気がした。

## 第1話 今日もマイペース

いつしか彼は言った。

『終わりなんて意外とすぐかもしれない。だから今この瞬間を精一杯生きるんだ』

平日の昼間だというのに制服を着た少女は赤いヘッドホンをして、ぼーっと川沿いの道を歩いていた。背中まで届くターコイズ色の長い綺麗な髪が時折風で揺れる。

ふと日に照らされてキラキラ輝く川に視線を向ける。普段の自分ならこんな時間帯にこの道に来ることはなかっただろう。

そんな時、右肩にかけるカバンから通知音が鳴った。しかしヘッドホンをしているからか少女には通知音が聞こえていないようだ。

ふと口からこぼれた彼の名前は空に消えていった。



いつか別れる時は来てしまうものだ。どれだけ一緒に居たいと……願っても。それが周りの目を気にしてのものなのか、お互いの夢の邪魔をしたくないということなのかは……わからない。

夢ってというのは時に力をくれる。叶えるために一生懸命努力して。どれだけ辛いことがあっても、弱音を吐かずにただ突き進む。それが叶った時はもちろん嬉しいものだ。他人の夢が叶った時でさえ、そういう気持ちになるのだから。……自分の夢が叶った時はどうなんだろう。

でも、その自分の願いが叶うということは。大切な人の夢を奪うと



いうことになる。そんな残酷なこと……出来るはずもない。今まで  
どれだけの苦勞をしてきたと思う？　すぐ側で見てきた自分でさえ  
わからない。

俺なんかの本当の夢は叶わなくていいんだ。そうすることで大切  
な人の夢が……叶って。その先の将来が明るければ。俺の一個人の  
夢なんてどうでもいい。

大切な人の夢が叶うこと……それが俺の自分でも気づかない偽り  
の夢なんだ。

それでも俺は……自分の信念を貫くと。決めたんだ。

朝。夜型人間、朝が弱い人には辛い時間だろう。朝だというのに  
ベッドに寝転がり、ぼーつとしているのだから。どうして朝は来るん  
だ？　と何回思ったことか。しかし、起きるのが苦手と言っても学校  
は許してはくれない。

だから仕事で居ないことが多い父親にではなく、朝起こしてくれと  
プライドを捨てて隣の家に住む幼なじみに頼んだんだ。だがな……。

「なぜこうなった……」

完全に目が覚めた俺は上半身を起こして、隣で眠る幼なじみの  
氷川日菜ひかわひなに視線を向ける。

ターコイズ色のショートボブ。一部をいつも三つ編みにしている。  
誰が見ても可愛いと思う顔。こんなのが隣で寝てたら、な？　今日は  
休みかと思ってしまう。いや……休みなのに制服なのはおかしいか。

朝起こしてもらったところか人の布団。しかも隣、気持ちよさそうに  
寝てやがる。いったいどういうことだ？　今すぐにも叩き起こした  
いが、その怒りさえもコイツの寝顔を見ていると薄れてくる。

「日菜。起きろ」

優しくゆすって起こすが特に起きる様子はない。

「おい。学校遅刻するぞ」

今度は頬を突つつく。

「ん〜もう……ゆーくんってば〜」

「寝ぼけてる場合か。起こしに来た奴が寝ててどうするよ……」

いつまでもこうしているわけにはいかない。少し強めにゆすると、ゆつくりまぶたを持ち上げ2、3回目をしばたかせた。完全に目が覚めたのかいきなり上半身を起こしてきた。そんなことをされてみる。顔が近い。

「ゆーくんおはよー！ 早くしないと遅刻しちゃうよ！」

「誰のせいだと思ってる。起こしに来た奴が寝てどうする」

「いや〜ゆーくんが気持ちよさそうに寝てるからつい〜」

「お前な……」

笑顔を浮かべてぽりぽりと後頭部をかく日菜。どうもこの笑顔を見ると調子が狂う。なんか全てがばかばかしく……。待てよなんか忘れてるような。

ふと時間をスマホで確認する。それから5秒停止。

「あれー。このままじゃ遅刻だねー」

「誰のせいだと思ってる」

拳を硬く握りしめるが一旦落ち着こう。

前言撤回。コイツの笑顔を見ても調子狂わないことがわかった。それと同時に慌ただしく動き出す。

「日菜、すぐ行くから外で待ってる」

「はーい」

日菜を先に下で待たせることで準備してすぐに出発することが出来る。まあ普通に起きていればこんなことにはならないんだけどな。いつまで経っても朝が弱いのは相変わらずだ。

ハンガーにかかっていた制服に着替える。第一ボタンどころか第二ボタンまで開け、ネクタイを緩く絞めて完全に制服を着崩している状態だ。そこにヘッドホンを首にかければ完成。

こんな着崩した着方をすればもう1人の幼なじみ。日菜の双子の姉、氷川紗夜ひかわさよに叱られるだろうな。日菜と違ってしっかりしているから。

ほぼいつも通りな朝の支度を終え、あまり物が入っていないリュックとスマホを持って家を後にした。もちろん鍵をかけて。駐輪場に置いてあるマウンテンバイクを引っ張り出して敷地の外に出ると、日菜は壁に寄りかかって空を見上げていた。

「行くぞ、日菜」

「うん。今日はいい天気だね」

「そうだな。能気なやつも居るくらいだ」

「それってどういう意味？」

「さあな」と言つて荷台を付けたマウンテンバイクにまたがると文句を言いつつ後ろに乗る日菜。腰に手を回したのを確認し、全速力でこぎ始める。ちなみに言っておくが、家から日菜の通う羽丘女子学園はねおかじょしがくえんと俺の通う花咲川高校はなさきがわこうこうはそこそ遠い。だから飛ばさないとな。

「今日少し早くなーい？」

「見事に寝坊したからな。飛ばさないと俺が遅刻する」

「そっかー！」

いやいや。起こす係のお前が寝てたんだよ日菜。毎度毎度この調子じゃないがたまにこういうことになる。どこか抜けてるのかマイペースというか……。なんにしてもいつも起こしに来るのは日菜じゃなく、紗夜のほうだ。だが今日はなぜか日菜に任せた。……。なにか悪いことでもしたか？ 身に覚えは一切ないのだがな。

そこそこの速度で二人乗りという絶対に良い子は真似をしてはいけない方法である程度の場所まで走ってきたようだ。ちらほら羽丘の制服を着た生徒が見える。余談だが羽丘、紗夜の通う花咲川女子学園はなさきがわじょしがくえんは中高一貫の偏差値の高い”女子高”だ。

「さすがゆーくん。あつという間だね！」

「今日は飛ばしたからな。あまり褒められたスピードじゃない」

アイツに見つかつたらただじゃ済まないだろうな。

「おねーちゃんが知つたら怒られるね」

「デジャブになるようなことを言うな」

そういう冗談は現実になりかねないからやめてほしい。紗夜にバレると長い長いお説教タイムが始まる。軽く30分は小言言われる

からたまったもんじゃない。その時は日菜も巻き込んでやるか。もとはといえば起こしに来たアイツが寝てたのが発端だし。

とりあえず時間には間に合いそうだ。最悪遅刻は俺だけで済むようにはしてやるか。花高は羽丘よりも奥にあるから必然的に遅刻つてなつたら、するのは俺だけなんだが。まあそれもいつものことに近いから問題ない。

羽丘付近までくると流石に生徒の目が気になるな。すると友達を見つけたのか日菜が挨拶をする。

「あー！ リサちーだ！ おはよー！」

「余計目立つからやめろ」

ただでさえ男女で居るんだからな。挨拶なんてしたらさらに目立つだろ。主に俺が。

「相変わらずだねー。二人とも」

通り過ぎる間に聞こえてきた今井<sup>いまい</sup>リサの声。正直最初見たときはバリバリのギャルかと思った。茶髪のロングヘアー。手にはネイル。おまけにピアスマで付けてる。どっからどう見てもギャルだ。

「あれで料理とか上手いから驚きだよねー」

「人は見かけによらないってことだ」

「でも、見た目通りの人も居るよ？」

「おい。誰のこと見ながら言ってる？」

後ろで笑ってごまかしてるが、誤魔化せてない。明らかに俺のこと言ってるだろコイツ。確かに見た目通りの奴だっって言われることは多いがな。

羽丘の校門に少し離れたところで一旦止まる。そしてふと妙な寒気に襲われた。紗夜にバレたか？

「ゆーくん、どうしたの？」

「いや……なんでもない。頑張ってるよ」

「ゆーくんもねー!」

ぶんぶん手を降ってくる日菜に軽く手を振り返してから俺は少し急ぎめで学校へと走った。遅刻はしないで済みそうなのはいいが、さっきの寒気はなんだ?

そんなことを考えながらふと空を見上げてケツポケットに手を置いた。

「やらかした。財布置いてきたな」

ため息を吐き出してから学校までの道のりを自転車でする。

小さい頃からいつも振り回されていたのは今ではいい思い出だな。特に元気過ぎる奴に連れ回された記憶ばかりだが。

いつからだろう。2人が一緒に居る時間が減ったのは。

なんとか遅刻せずに教室へとたどり着いた。すでに朝練を終えた生徒もいる。つまり本当にギリギリだったってことだ。まあ遅刻じゃないしセーフだろ。

「おはよー夕君。遅刻ギリギリだね」

「おはよう。セーフだセーフ」

教室の1番左端の席に向かう途中、腐れ縁の1人。瀬名涼子せなりようこに朝の挨拶と皮肉を交わす。いつも決まった時間には学校に来ているあたり、さすがだと思う。俺にはとても出来ない芸当だ。

「おーすつ夕。いつにも増して眠そうだな」

「目が空いてるだけマシだ」

「閉じてたら歩けないだろ」

今度はボケたがりのくせにいつの間にかツツコミに回っている腐れ縁の1人。松風智紀まつかぜともきが話しかけてくる。コイツは朝練でもっと早い時間に起きているからもっとすごい。俺には一生かかっても不可能だ。

机の横にリュックを引つ掛けて席に着く。少し騒がしい教室ではなく、外を眺めながらぼーっとし始める。だいたい話しかけてくるのは2人だけ。別にクラスメイトと仲が悪いわけではない。挨拶をさ

れば返すし。目があったら挨拶をするし。まあよく無愛想と言われるからそのせいだろう。

教室から見える中庭には満開の桜。季節は春。4月に入ってから割と経つのにまだ散りきっていない。

ふと中庭を歩く1年生が見えた。今年もそれなりに人が入ったらしい。花女と羽丘の板挟みなのにな……いや、板挟みだからこそ人が多いのか。

「絶対それはない」

「わかってないわねー。普段そういうことをしないからこそそのギャップでしょ?」

前の席で話す2人の女子。いったいなんの会話なのだろう。なんか嫌な予感がする。

「こうなったら旭日君あさひに聞いてみよう」

「白黒はつきりつけないとね」

……いったい何を決めようとしてるんだ? ギャップがどうか言ってたから人の話だろうか。

「旭日君!」

「な、なんだよ」

どちらもすごい形相だ。思わず圧倒されてしまう。

「罵られるなら美人系か可愛い系どっちがいい?」

「もちろん美人系だよ?! ね!」

「いいえ、可愛い系一択でしょ?!」

なんだそれ……朝からどんな話題持ち出して話してるんだよ。しかもそれを俺に聞いたつてことは、いじめられるのが好きと? 悪いが俺にそんな趣味はない。

「どちらも好きじゃない。というかなんの話だ?」

話の趣旨がわからん。わかったところでどちらも賛同出来んが。

「知らないの? 今年入った1年生にハーフのめつつちゃ可愛い子が居てさ」

「あれはどう考えても美人系だって。しかもズバズバものを言うてるタイプだね」

「あれはどう見ても可愛い系よ。あの冷たい女王とまで言われた冬月先輩に物申したとか」

会話の中で議論するな。話が入ってこないだろ。というよりも冬月先輩？ 冷たい女王？ どちらも知らないんだが？ 俺がおかしいわけじゃないよな……。

「なにっ?! あの冬月先輩に物申した奴が居るのか?!」

だから誰だよ。途中から話に入ってきたのによくそんなこと言えたな、クラスメイトの男子。

「とんでもない子が入ってきたようね……」

また違うクラスメイト。今度は女子が話に割って入ってくる。

そんなにすごいのか？ 冬月先輩。名前も顔も知らなかったが。1年居て認知出来ないって本当に実在するのかその人。それともあまりにも俺の興味がなさすぎるのか？

話が一区切り着いたところでホームルーム開始5分前の鐘が鳴った。話していたクラスメイトも自分の席へと戻っていく。

朝からわけのわからない会話に巻き込まれ、結局物申した人は誰だったのか。ハーフの可愛い系？ 美人系？ なら1人しか思いつかないんだが。

しばらくぼーっとしていると担任の先生(知り合い)が入ってきた。今年も去年と同じ担任の先生だ。

今日も1日頑張るとするか。まあぼーっとして終わりだろうが。そしてそれがもう1人の幼なじみにバレた時はお小言をたくさんもらう。どれだけ言われても改善しないのは……懲りないからだろうな。きつと。

## 第2話 余計なひとこと

### 第2話 余計なひとこと

——夕。もう朝よ？

誰かの声が聞こえてくる。まだ寝始めて1時間くらいだぞ？ 誰であろうと……紗夜以外は起こすのは許さん。起きる時間でもないのにおこされるのが1番嫌いなんだよ。

——いい加減起きなさい。

ゆつくり目を開けると、ぼやける視界の中には水色の髪？ が見える。長さがはつきりしない。日菜か？ それとも……紗夜か？ それとも……。

「やつと起きた。なかなか起きないから心配したのよ？」

ん？ ……心配？ 何かが俺の中に引つかかる。失礼になるだろうが、言わしてもらいたい。

「……ね、熱でもあるのか？」

「熱？ 夕、熱でもあるの？」

そう言うのと人のベッドに日菜と同じように侵入してくる。俺の前髪と自分の前髪をあげると、そつとおでこをくつつけてきた。

何回でも言うぞ。コイツどうした？ いつも紗夜と違いすぎる。

「んー熱はないわね。でも汗がすごいじゃない」

冷や汗がな。

「特に体調悪そうには見えないけど、休んだ方が良さそう」

おいおい。悪い夢なら覚めてくれ……。

「とりあえず汗拭いてあげるわ」

「い、いや……待て。紗夜？ お前今日どこかおかしい——」

そこまで言った所で完全に覚醒した。壁に掛けてある時計に視線を向けると、紗夜が来る前の時間。つまり起こしにくる前に起きたわけだ。こんなこと1ヶ月に1回あるかどうかの確率。それを今日引いたと言われてしまえばそれまでだが、今日は絶対違う。

しばらくすると、部屋に近づく足音が聞こえてきた。おそらく紗夜だろう。



ドアが開き、紗夜と視線が交差する。珍しく起きている俺に少し驚いた表情を浮かべていた。

「今日は……雨でも降るのかしら?」

「今日は訳ありだ」

いつもと変わらない紗夜。この違和感が全くない会話。どうやらあれは夢だったらしい。

「訳あり?」

「妙に優しい紗夜の夢を見た……」

「なっ……普段の私は優しくないってこと?」

「そういうわけじゃ……」

俺の言葉が届く前に紗夜は大きめの音を立てながらドアを閉めて行ってしまった。どうやら逆鱗とまではいかないが、気に障ってしまったらしい。

別に優しくない紗夜が嫌いなわけではない。優しいよりも普段みたいに厳しい方が俺的には居心地がいいだけなんだ。昔からガミガミ言ってくる奴だったからな。それがないとどうも調子が狂う。

「夕なんて知らない……バカ」

その言葉が俺に届くことはなかった。

「さて……どう謝るか」

珍しく早起き出来た俺は朝ごはんのパンを食べながら準備を進めた。

1日考えた結果。紗夜にどう謝るか考えてたからか、授業中寝ることとはなかった。が、同時に解決策が生まれることもなかった。起きてたのが珍しかったのか、腐れ縁の1人、智紀が「お前どうした?」って言うてきたな。俺だっけ起きてる時はある……考えないといけない事がある時限定だが。

ふと窓の外を見る。まだ4月。暗くなり始める時間ではない。若干の夕焼け空になりつつある空を見上げる。

「旭日君。そろそろ教室閉めるよー」

「今出ます」

いつの間にか俺だけになっていたとはな。他の奴らはみんな部活だバイトで忙しいんだろう。生憎俺は今日シフトに入っていない。こういう時は大抵ネットサーフィンをしているか、寝ているか、ゲームをしているかだ。本当の暇人だな……。まあ仕方ない。

教室を後にした俺は昇降口で靴に履き替えて、校門を抜けた。このまま真っ直ぐ帰っても答えは出そうにない。そんな時はいつも寄る場所がある。

### 商店街。

「いらっしやいませ、旭日先輩」

「いつもの頼む」

羽沢珈琲店。商店街にある俺の行きつけの店の一つ。ここはだいぶ通ってる店だな。週1回は来てる。特にコーヒーが美味しい。言い方は悪いが珈琲店でも美味しくない所はある。その代わり別の物が美味しいことが多い。

奥の席に座ると、この看板娘——羽沢はぎわつぐみがお冷やをお盆に乗せて持ってきてくれた。変わらずエプロンがよく似合うな。

羽沢は羽丘の高校1年生。とても頑張り屋だけど、時折無理をしてしまう。だがとてもいい子だ。とてもいい子っていうのが肝だからな。

「また悩みごとですか？」

「まあ…そんな所だ。よくわかったな」

「ここに来たってことはそうなのかなって」

気が効くというのかなんというか。いい子なんだ、羽沢は。

「なるほど。悩みがなくても来るときはあるさ」

「ふふっ。わかってますよ」

笑顔で告げるとキッチンの方へと向かっていった。だいぶここに通ってるからか、考えが少しずつ読まれ始めたな。紗夜ほど危険じゃないが、危険になると困る。いやまず、どうやって考え読むんだ？

ふと店内を見渡していると、時折見かける2人組みを見つけた。両方とも花女。紗夜と同じ学校の生徒だ。年は…：わからん。片方は水色の髪をサイドテールにしている、もう片方はクリーム色の髪が背中の上まで届いている。クリーム色の髪の方はここ以外の場所でも見た気がする…：気のせいかな。

「お待たせしました。アイスコーヒーです」

アイスコーヒーを1つ。ガムシロップとミルクが入った小さいカップをそれぞれ1つ。そしてもう1つアイスコーヒー…：ん？もう1つ？

「休憩もらったので、一緒にいいですか？」

「そういうことか。構わない」

「ありがとうございます」

エプロンを外して椅子の背もたれにかけてから座る羽沢。たまにこうして2人でコーヒー飲んだりしてる。その度にどこからかいやな視線を感じる気がするんだが、気のせいだろうか。いや…：気のせいじゃない気が。

「そういうえば今度の悩みはなんですか？」

「いつものやつだ。また幼なじみを怒らせた」

「あはは…：仲良いですね」

「仲良かったら怒らせたりしないだろ」

アイスコーヒーをブラックのまま一口飲む。この苦すぎず、かといって甘くない絶妙なコーヒーが美味しい。今度はミルクと砂糖を入れてスプーンでかき混ぜた。すると、先にミルクと砂糖を入れてかき混ぜ始めていた羽沢が口を開いた。

「今日はなに言って怒らせちゃったんですか？」

「妙に優しくしてくる夢を見たって言って言ったら機嫌を損ねた」

「その幼なじみさん、普段は優しくくないんですか？」

コーヒーを一口飲み、静かにカップを置いた。

「優しくない……ってわけじゃない。なんだろうな。変に優しくされるよりもありのままできてほしいんだ」

「なるほど……それならきちんと伝えてあげてください。そうすればすぐ解決すると思いますよ」

「そうか。……そうさせてもらう」

羽沢にはいつもこの手の悩みをいつも相談している。ほぼ苦笑いするがな。どうも女子の気持ちというのが理解できない。羽沢にも羽沢の幼なじみにも乙女心がわかってないと言われた。だが一つ言わせてもらおうと自分の気持ちは自分しかわからないと思う。人っていうのはなかなか難しい。

再びコーヒーを飲み、テーブルにおくと何やらスマホを操作していた羽沢が画面を俺の向きに合わせてテーブルに置いた。

「最近オープンしたカフェなんですけど知ってます？」

「あーこれか。新しいカフェができたことしかまだわかってない」

コーヒーが好きでよくカフェ巡りすることが多いが今回新しくできたカフェの情報は調べてないな。最近の夜は忙しくてな。日菜の相手したり、バイトしたりとか。

「ドッグカフェみたいなんですけど、スイーツとかコーヒーも美味しそうなんですよ」

「なによりワンちゃんが可愛い」

「まてまて。また急に人の話に入ってくるな上原<sup>うえはら</sup>」

いつものごとくピンク色の髪のおさげが会話に割って入ってくる。名前は上原ひまり。1つ年下の羽沢の幼なじみで、同じ学校に通っている。あの日菜とたまに登校するもんだから、割と俺は有名人らしい。全く困ったもんだ。

「旭日先輩お疲れ様です！ ここに来たということはまた悩みですか？」

「まあな。急に現れては人の話に割って入ってくる輩に悩んでな」

「えー?! それって私のこと?!」

「当たり前だ」

「まったくコイツは。流石に慣れてはきたが鬱陶しい。毎回ケーキねだつてくるし、凶々しい奴だ。……憎めないのがさらに腹立つな。」

「旭日先輩に悩みがあると思つてきたんですよー?」

「お前はただ単に俺が居れば何か奢ってもらえると思つたんだろ?」

「そ、そんなことないですよー」

「凶星だな。隠すの下手くそか」

今日早すぎるまったくコイツはと言いたくなるほどだが、何気に話してるからあまり責められないのも事実。ほとんど上原の恋ばなとかダイエツトがどうかだけだな。

「そ、そんな旭日先輩にこれあげちゃいます!」

「なんだこれは」

上原が鞆から取り出して置いたのは新しく出来たドッグカフェの割引券らしきもの。いやそうなんだろう。

「これ使えば安くなるので旭日先輩にプレゼントしちゃいます!」

「どうも。だからってケーキは奢らないからな」

「で、ですよね」

さて。そろそろいい時間だし帰るか。紗夜に謝らないといけなしな。そういつまでも怒つては……ないはず。

「そろそろ帰るな」

「はい。また来てくださいね」

そう言うのと笑顔を浮かべる。その笑顔がどこかあの優しい紗夜に似ていた。

「もちろん。あとショートケーキとチョコレートケーキを2人に」

「えー?! 良いんですか?!」

「割引券もらったしな」

それだけ言つて、コーヒーを飲み干しテーブルに置く。リュックを持って会計するためにカウンターへと向かった。

「太るなよ、上原」

「づっ……痛いところを」

会計を済ませた俺は歩いて家へと向かった。

時は過ぎて夜。簡単な夜ご飯を済ませ、俺は自分の部屋の窓を開けた。特に景色が言い訳じやないが、たまに星が少し綺麗に見える。ま  
ずは出てきてもらわないとな。

スマホで紗夜に連絡を取り、ベランダに出てきてくれるように頼む。

「今日ばかりはダメかもな」

すぐに返事が返ってくるわけもない。

とりあえず部屋に戻ってベッドに寝転がった。この時間はギター  
の練習してる。つてことは気づかなくてもおかしくはないか。

思えば紗夜を怒らせた時はほとんど同じような感じだった気がする。なかなか起きない時は容赦なく平手打ちかましてくるくせに、調子悪かった次の日はゆすって起こしてくれた時もそうだな。余計なことを言って怒らせた。

最後にもう一度だけ確認しようと再びベランダに出た。すると開かずの窓だと思っていた窓が開く音がした。急いでベランダに出ると、ジト目で俺のことを見る紗夜の姿があった。

「紗夜…今日は悪かった」

「話はそれだけかしら？」

よっぽど怒っていたのか帰ろうとする。

「待ってくれ！ 別に優しい紗夜が嫌なわけじゃない。いつも通りの紗夜がいいんだ。妙に優しいと調子が狂う」

羽沢に言われた通り思ったことを伝えたが、当の本人はなぜか俺と同じ方向を見ている。なぜ急に背を向けた？

「きゅ、急にそんなこと言われても……私は別に怒ってないわよ」

「本当か？ 朝急に出て行ったのは？」

「あ、あれは……日直だったのを思い出しのよ」

「そうか……」

本当かどうかは怪しいところだが、まあ怒ってないならそれでいいか。普通に居てくれる方が居心地がいいしな。……次は怒らせない

ように気をつけるでしょう。

「課題は何も出なかったの？」

「今日はなかった。あの学校課題多すぎるんだよ」

「仕方ないわ。そういう学校なのよ」

にしても多すぎる。確かにそこそこの学力ないと入れない高校ではあるが、週4回も出してくるのは、中学サボりまくっていた俺にはキツイものがある。中学で楽をしてると後がツライからみんな気をつけるよ。

「そうだ。新しく出来たドッグカフェに今度行くんだけど来るか？」

「ドッグカフェ？ ……ゆ、夕が行きたいって言うならいいわよ？」

そうは言ってるけど若干顔がいきいきしてるな。クールな感じで見られることがほとんどだが、主に子犬。ふわふわしたものが好きだ。自分が好きなことをあまり表に出さないから、言い過ぎるとめんどくさいことになる。

「俺が行きたいだけだ。割引券2つもらったしな」

「そ、そう」

「今度の日曜日辺りでいいか？」

「ええ。それで構わないわ」

こうして機嫌が直ってくれたついでにその埋め合わせも出来そうだなによりって感じだな。すんなり許してくれたのがいまいち腑に落ちないが、本人がいいと言うならいいか。

なんとか解決してよかった。今度は……気を付けないな。

## 第3話 夕と紗夜

### 第3話 夕と紗夜

日曜日の朝。今日は以前紗夜と約束したドッグカフェに行く日。当然ながらも通りに紗夜に起こしてくれ、と頼んだはいいが少しおかしなことになっている。気がする夕。

ベッドの上に寝転がったままで、まだ意識は覚醒しきっていない。そんな中、半開きの目でも入り口付近に居る紗夜に視線を向ける。

「紗夜……もう時間か？」

「起こしてしまつてごめんなさい。まだ寝てて大丈夫よ」

「そう……か。じゃあ……そう……」

言い切る前に意識を手放してしまう。

起こすつもりはなかったが、タイミング悪く一瞬目を覚ましてしまったらしい。しかし、さすがというべきか。一瞬で再び眠りにつくのはすごいと思う。

静かに歩み寄り布団をかけ直してあげた。相変わらず枕があるのに使わないらしい。もはやなんのために置いてあるのかと疑問に思う。

「いつも……ありがとう」

その言葉が、彼に届くことはない。

「ゆーくん！ ゆーくん！ そとでおにごっこしようよー！」

「ひなー！ ゆうはわたしとあそぶやくそくしてたのよ？」

「まてまて。……じゃあいつしよにあそぼう」

ずいぶん懐かしい記憶だ。小さい頃はよくああやって2人に遊ぼうってねだられた。学校終わりは3人で宿題を終わらせて、遅くまで遊んで怒られて。そんな日々がずっとつづ——



ふと目を覚ます。そういえば朝早くに紗夜が来ていたような……。眠くてあまり覚えてないが、なんの理由で早く来たんだろうか。リアルすぎる夢……。だとしたら。いや、やめておこう。

ベッドから降りて軽く背伸びをする。まだ完全にはつきりとしな  
い意識の中、リビングに向かう。この時間はまだ父さんは寝てる……  
よな？ リビングから聞こえてくるテレビの音にドアを開ける手が  
止まる。となるとやっぱり。

意を決してリビングに通じるドアを開けた。

「紗夜か」

「自分で起きてきたの？」

あまり見慣れない光景なのか少しだけ驚いたような表情を浮かべる紗夜。

「たまたま目が……。それより悪いな。1回起きたような気もするんだが」

「大丈夫よ。まだ出かける時間じゃないから」

いや、それはそうかもしれない……。まあそう言ってくれるならいいか。そんなことよりも腹減ったな。割と遅い時間に起きたし。

「雨は降らないみたいね」

「それはよかった。いろいろと面倒だし」

何食わぬ顔をしてダイニングテーブルに座ると、スクランブルエッグが乗った皿、トーストが2枚乗った皿、サラダが乗った皿が出てきた。これはありがたい。自分で何か用意する気もあまりないというぐーたらぶりが発揮していたところだ。

「ありがとな」

「え、ええ……。食べて片付けをしてから行きましょう」

「だな。いただきます」

ここでも俺のめんどくささは発揮した。スクランブルエッグをトーストの上に乗せはじめる。それを見て明らかに呆れたため息が聞こえてきた。

「別々に食べるという発想はないのかしら？」

「いやだって。めんど……こうした方が美味しそうだったから」

明らかに取り繕えてないが、それでも問題はないらしい。乗せ終わると同時に俺はあるものがないかテーブルの上を探す。

「ケチャップなら今とってくるけど」

「悪いな」

なぜ伝わったのかは謎だがまあいい。持ってきてもらう間にサラダでも食べるとしよう。

一旦トーストを皿の上に置いてからサラダを食べはじめ。

「久しぶりに野菜食べた気がする」

「そうだと思って、用意したたのよ。もっとバランスのいい食事をしてない」と

「わかつてはいるんだけどな」

「わかつてるだけでは意味がないわ。行動に移さないと」

この言よう。いつもの紗夜だ。だが言わせてほしい。ほぼ1人暮らし状態の男が出来ることなんてたかが知れてる。料理する男子の方が俺は少ないと思う。だいたい買って済ませた方がはるかに楽だしな。作ると片付けと洗いものというめんどくさいのが待っている。

「それが出来たら」

「苦労しないのでしょうか？ 聞き飽きたわ」

「そ、そうか……」

なぜか朝から怒られてるんだが？ 俺が悪いのはわかるけど、そんな朝から怒らなくてもな。

持ってきてくれたケチャップをトーストの上にかけてはじめる。

「カフェまでは電車でもいいのよね？」

「駅の近くだからな。前にも話したけど、人混み大丈夫か？」

なんて聞きながらケチャップをかけたトーストにかぶりつく。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫よ」

「ならいい。無理はするなよ」

紗夜は昔から人混みが苦手らしい。対照的に日菜は催し物が好きでよく行くこうって誘われた。そこにいつも紗夜は居なかったな。日曜日の電車は出かけたりする人で溢れかえるのは目に見える。だ

から別の方法でもいいって提案したんだが……。本人が大丈夫って言うなら信じるか。余計なお節介はやめておこう。

紗夜の作ってくれた朝ご飯を済ませ、家の戸締りを確認して家を出た。俺の家から駅まではそう遠くない。歩いて数分くらいか。

今日の外は雲が多めだ。天気予報では雨は降らないらしいが少し心配だな。折りたたみ傘の1つでも持っていれば安心か。

「雨は降らないみたいだけど、一応折りたたみ傘持ってきたわ。夕の分も」

「……俺の折りたたみ傘いつ持ってきた？」

「夕が寝てる時よ」

さすが紗夜だな。出かける時いつも頼りなる。俺か？ 雨降ったらその時はその時だ。カバンにパソコンが入ってなければいつでもダッシュで家に帰れる。

そうだ。寝てる時といえば。

「寝てる時にありがたうって聞こえたような気がするんだが。テレビでも観てたのか？」

「そうだけど……うるさかったかしら？」

「いや、なんとなく」

寝落ちの寸前というか。寝ている時って不思議だよな。夢なのか現実なのかよくわからん。

ふと紗夜に視線を向けた。

「顔赤くないか？」

「き、気のせいよ」

そんな暑いわけでもないはずだが。感じ方は人それぞれか。

特に問題はないという紗夜を横目に駅まで雑談しながら歩いた。時折当たる紗夜の手は少し冷たく感じた。

数十分歩き、着いた駅だが案の定人がたくさん居る。人混みが苦手な人は酔ってもおかしくなくらいに。俺は特に大丈夫だが、問題は紗夜だ。

「大丈夫か？」

「ええ……2駅くらいでしょ？」

「2駅だが、この時間と日にちを考えるとかなり多いぞ」

時間は午前10時前後。日曜日。東京。この条件がそろえば大抵人が多いのは目に見えている。17年も住んでいればおのずとわかることだ。

「考えても仕方ない。行くか」

「えっ？　ちよつと夕?!」

紗夜の手を握り、人ごみの中に紛れていった。この人の多さだ。誰も見ていないだろう。それに好き好んで人のつないでる手なんか見ないだろう。

「改札通る準備しておけよ。それと…手離すな」

「え、ええ……」

改札を2人で順番に通り返し、人があまり居ないであろう端の方まで移動する。

紗夜の手は少し冷たい。手が冷たい人は心が暖かいと聞いたことがある人がほとんどだろう。外から見ると厳しい紗夜だけど、優しい一面だってある。

さすがに端の方に来ると人の数が減る。手を繋いだまま列の最後尾に並ぶ。

「……そろそろ離してくれないかしら？」

申し訳なさそうに言われ、手を繋いでいたことを思い出した。そつと繋いでいた手を離す。

「悪い。急に握ったりして」

「気にしないで」

本人が大丈夫というならと思うが、俺はどうも思えない。さつきから目を合わせてくれない上に、少し距離を取られた気がする。それで

も無理に追求せず、電車が来るであろう方向に視線を向けた。

さすが東京。少しすると目的の地方方面に行く電車が来るアナウンスが入った。

「そろそろ来るみたいだな」

「そうみたいね」

こうやって話している間にも電車の走ってくる音が聞こえる。数秒もしないうちに俺と紗夜の前を通過。2人の間を抜ける風。ふと右に視線を向けると、左手で髪を抑える紗夜の姿が目に入る。ぐーたらな俺にはもったいない美人な幼なじみ。もつとちゃんとした奴と幼なじみだったら紗夜はどうなっていたんだろうか。2人は――

「夕?」

「なんでもない」

少しぼーっとしすぎたか。

2人で電車に乗り込むが、かなりぎゅうぎゅう詰めだ。ドアが閉まると同時に少し体制も楽になる。そう思っていた。

「2駅だから我慢してくれ」

「わ、わかってるわよ」

ぎゅうぎゅう詰め過ぎて俺は今紗夜の目の前に居る。顔の近さは今までで1番近いんじゃないかと思う。電車が発車する小さな揺れ。どンドンスピードが上がっていくのがわかる外の景色。視界の1部に映る紗夜の顔が少し赤い気がするのはいのせいだろうか。

「5、10分くらいよね?」

「まあそのくらいだな。東京は駅の感覚が近いから長く感じる」

「確かにそうね。いつもよりも長い気が――」

紗夜が話していた時。割と大きな電車の揺れが車内を襲った。さすがに何も掴まないで立つてられるほど俺は鍛えていない。

ドンと軽めに音を立てながら紗夜の顔の左に手を着いた。言う所の壁ドンというやつだ。

「悪い。悪気はないんだ」

「わ、わかってるわよ……。わかってる……」

今までこんな距離が近かったことがあっただろうか。いや……

確実はない。

こんなまじまじと紗夜を見たのは初めてだ。整った顔立ち。日菜とは対照的に垂れた目。綺麗な緑色の瞳。長いまつ毛。街中でモデルにスカウトされてもおかしくない。

「夕…？ 私の顔に何か付いてる？」

「いや。綺麗だなって思ってたさ」

「け、景色が？」

「そ、そうだな」

その言葉の直後。紗夜が重たいため息を吐き出した。この場合はなんて言うのが正解だったのだろうか。教えてくれ。

電車で2つ先の駅にたどり着いた俺と紗夜。人混みの中、また手を引きながら駅を抜ける。駅を出れば少しはマシになるもんだ。次々目の前を通って行く人の間を縫ってカフェがある方に歩く。少し歩いていくとある行列にたどり着いた。

「ここみたいだな」

「ええ。さすがの行列ね」

「この前開店したばかりだしな。待てば大丈夫そうだし待つか」

「そうね」

待っている間俺は特にやることはない。すると紗夜は鞆から楽譜を取り出した。

「ごめんなさい。こんな時まで」

「気にするな。来週だろ？ ライブ」

「ええ。ありがとう」

ライブか。今回は割と長くバンドとして活動出来てるな。話を聞くと、どうも紗夜と価値観が合う人間が居ないらしい。音楽のことになるとひとときわ自分にも他人にも厳しくなるからな。妥協という言葉おそらく紗夜にはない。

そのせいなんだろうな。バンドのメンバーとは磁石のように反発しあい最後は紗夜だけ脱退。なかなかバンドメンバーが見つからな

い。なら代わりにと言ってやりたい気も昔はあった。だが紗夜の夢を叶えるのはなんとなく俺じゃないと勝手に思い込んでいつもフォーする側に回っている。

FUTURE WORLD FES.

紗夜の目指す音楽の祭典。

「夢か……」

1人ポツンと放った一言。誰の耳に入るわけでもない。

俺には夢はない。だけど守ることは出来る。

昔テレビでやってた特撮のヒーローが言ってた言葉だ。その後には始まる女の子向けの番組を観るためにいつも日菜と紗夜に捕まっていたのを今でもよく覚えてる。

「どうしたの夕？ 思いつめた顔して」

「なんでもない」

いつか紗夜と日菜の夢を守れる日が来るのかもな。

行列に並んで30分くらい経っただろうか。ようやくお店の中に入る事が出来た。あまり待たなくて済んだのはラッキーだったな。見た感じ1時間は余裕で待ちそうだったし。

お店のドアは二重になっている。カフェの中に子犬がリードなしで放たれてるから、逃げないようにだろうな。ふと隣を見るとにやにやが止まらない紗夜の姿が目に入った。

あまり触れないでおくか……。それとも少しばかりいじるか。

「紗夜。口元緩み過ぎてるぞ」

「わ、わかってるわ」

まあ今回は仕方ない。店内には様々な種類の子犬が居るんだからな。もふもふしたもの。特に犬が好きなら紗夜の口元が緩むのも仕方ない。いつもの姿からは想像できないな……。

「いらっしやいませ。何名様でしょうか？」

「2人です」

「2名様ですね。席に案内します」

奥の席に案内され、席に座ると店員が水の入ったコップをお盆に乗せてやってくる。

「ご注文お決まりになりましたらそのボタンを押してください」  
笑顔でそう告げていくと俺たちの席から離れていった。対応はこのカフェと変わらないか。ただ看板娘と一緒にお茶出来ないくらい。それが出来る方がおかしいな。

「夕はコーヒーよね？」

「ああ。紗夜はどうする？」

メニューを見ずに会話を進めていくが、さすがになかった時が恥ずかしい。横に置いてあるメニューを取ってお互いが見えるように真横にしてテーブルの上に置いた。パラパラとめくっていくと、普通にコーヒー類の飲み物はあるようだ。少し変わってるのは子犬にあげる用のおやつがあることくらいか。

「せっかくドッグカフェに来たんだ。あげてみるか？」

「私は別に……」

あげたいって顔してるけどな。

俺は構わず店員さんと呼ぶためにボタンを押した。少しするとファミレスなどでよくみる物を持って、来てくれた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「アイスコーヒー2つと、この子犬に上げるようのおやつを1つ」

「かしこまりました。アイスコーヒーとおやつですね？ 少々お待ちください」

注文を聞いた店員は奥へと戻って行った。背もたれに深く腰をかきながら左手を後ろに回す。頼んだものが来るまでは時間かかるだろうな。思ったよりも人が多いし。そんなことを考えていると、一匹の黒い柴犬が近寄ってくる。

視線を向けると俺の左手をぺろぺろと舐めてきた。頭を指で撫でてやるとどこかへと行ってしまふ。ふと視線を起こすといつの間にか別の子犬を抱えた紗夜の姿が映る。

「もふもふ具合はどうだ？」

「チワワはもふもふしてるタイプじゃないわ」

「じゃあつるつるか？」



「さらさらの方が正しいと思うけど」

なるほどな。確かにさらさらしてそんな毛並みだ。それに小さいな。こうして紗夜と話しているが犬の犬種はよくわからん。強いてわかるのは柴犬とかそこら辺の有名どころだけだ。小学生の時はよく犬の図鑑とか一緒に見たのは今でも懐かしい思い出だな。

「そういうえば昔子犬飼いたがってたな」

「昔の話よ。うちはずっと世話する人が居ないから飼えなかったけど」

「だだこねてたような気も」

「こねてないわよ」

若干顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。普段学校じゃこんな感じには周りには見えないんだろうな。風紀委員らしいから校則とかは絶対に破らなそうだ。俺なんて制服はちゃんと着てないし、授業中はぼーっとしてるか寝てるかだな。真面目に受けないといけない。そう思っても実行できない。

「お待たせしました。アイスコーヒーとおやつになります」

注文したコーヒーの入ったガラスのコップ2つとおやつが乗った皿をお盆に乗せて運んできた。コーヒー、ミルク、ガムシロップをそれぞれ置いていく。自分の分を取り、まずはコーヒーの匂いを確かめた。

普通のブラックの香りだ。手抜きだったらどうしてくれようか。

今度は一口コーヒーをブラックの状態で飲む。

普通に美味しい。まだ羽沢珈琲店の方が好みだけど。

「夕つていつもその飲み方するわよね？」

「ブラックも好きだからな。それに元が美味しくないミルクとガムシロップ入れても美味しいかわからん」

今まで沢山のコーヒー店に足を運んだが、未だに羽沢珈琲店を超えるコーヒーには出会えてない。

コーヒーを飲みながらふと窓の外を見ると雨が降っていた。紗夜の言った通りになったか。降りたたみ傘持ってきておいてよかった。

俺の視線の先が気になったのか紗夜も同じ方に顔を向けた。数

秒程度眺めたあと顔を戻すが、うつむき気味にチワワを見見始めた。そして頭を優しく撫でる。

「どれだけ可愛くても、この子たちを捨ててしまう人が居るのよね？」  
「……………世の中には心優しい人ばかりじゃないからな」

そう言つてコーヒーを飲むが、妙に冷たく感じた。

たぶん紗夜はあの日のことを思い出したんだろう。どうしようもなくなくて。悔しくて。泣いたあの日を。今でも鮮明に覚えてる。

『この子が可哀想』

そう言つて涙を流した紗夜の姿を。

あれは高校1年の梅雨の時時だ。降りしきる雨の中、たまたま帰り道で一緒になった日。いつもとは違う帰り道で2人揃つて歩いて帰っていた時。道の端でぐったりしている犬が俺たちの目に入った。近寄る紗夜の後ろに着いていくと、泥で汚れて、所々怪我をしている。

「この犬……………怪我してるわね」

「そうだな。飼い犬っぽいし、捨てられたか迷子か」

犬には首輪が付いていて飼い犬ということとは十分わかった。しかし捨てられたか、逃げてしまったのかはわからない。まあこういうのには近寄らないのが面倒ごとを避ける道だ。

だが紗夜は違った。

「可哀想……………」

そう言つてしゃがんで撫で始めた。

「紗夜。あまり触ったりするな。噛みつかれでもしたら大変なこと  
に」

しかし聞いている様子はない。噛みつかれでもしたら狂犬病とかいろいろあるのにな。

「ねえ夕……………この世界は冷たいのね」

紗夜の頬を伝う涙。傘を差しているのに雨に濡れるはずがない。

自分がやったことじゃないのになぜ涙を流す？

「この犬知ってるの。時々散歩をしているのを見たことがあるけど、いつも飼い主に怒られてた」

だから捨てられたって言うのか？ どう考えても紗夜せいじゃない。なのになぜ。」

「私が言えばこの子はこうならなくて済んだのかしら？ こんな辛い思いしなくて済んだの？」

「俺にはわからない。だけど——」

紗夜の隣にしゃがみこみ涙をそつと拭った。

「世界は冷たいのかもしれない。人それぞれだからな。でも………紗夜はその優しい心を。暖かい心を忘れないでくれよ」

自分の傘を閉じて地面に置く。そして犬をそつと優しく両腕で持ち上げた。

「言っただろ？ 世の中優しい人ばかりじゃない。だけど紗夜は優しい心を忘れるなんて」

「………普段から真面目にしてくれれば言うことなしなのに」

「普段から真面目で居るのは疲れる」

厳しそうに見えて結局紗夜は優しい。ただその優しさをなかなか人や自分に向けられないだけなんだ。それさえわかればいつかきつと。

わかっているても無意識にポロツと出してしまった言葉が、結果的な今の状態になっているわけだが。いつかは……」紗夜は優しいな”って言える日は来るのだろうか。

コーヒーを飲んでガラスのコップを置く。いつの間にか降っていた雨はどんどん弱まっている。外に雨が降っている様子はこの遠い席じゃ確認出来ないほどに。

だが、暗い表情だった紗夜はどこか楽しそうに子犬たちに頼ん

だおやつをあげていた。こんな日常が……ずっと続けばいいな。



ないものほどねだってしまう。

どう願おうが、奇跡が起きようがあの日々の日常は戻らない。彼の残したものはあまりにも大きすぎた。

忘れたいのに忘れられない。

辛いはずなのに涙は一粒足りともでない。まるで乾いてしまったかのように。

赤いヘッドホンを首にかけたまま少女はベッドに寝転がっていた。天井を見つめ続けてどれくらいの間が過ぎたのだろう。

過ぎ去った時間すらも確認するのが面倒になってしまった。ただ時間を無駄にしているのがわかっていても動けない。

彼の姿が……頭から離れない。

ドアの隙間から彼女を見つめる一人の少女。心配な表情を浮かべ見守る。

「おねーちゃん……」

その言葉が届くことはない。

## 第4話 日常

### 第4話 日常

ある日の放課後。スマホに珍しい人からメッセージが来ていた。相手はあの Glitter, Green のボーカル。牛込うしごめゆり先輩だ。SPACEでバイトをし始めてから仲良くなった人で、いつもライブあるたびにチケット取っておいてくれるのはありがたい。バイトを辞めてからもこうして接してくれるし。いい先輩だ。

ただグリグリのメンバーに若干苦手な先輩が居るんだ。それはもうぐいぐいくる先輩がな。いつも困ってる。

ってことでなんやかんやでいつもグリグリのライブに行ってるわけだ。場所がSPACEなのがちよつとだけ、気まずかったりする。働いていた場所に行くってなんだか…な。でも、そのオーナーにはすぐくお世話になったから挨拶はしないと。

「あれ？ 夕君今日バイトだったけ？」

「ただだとしたら帰り支度をしていると涼子が声をかけてきた。バイトがない日はいつも早く帰るからな。まあ羽沢珈琲店に直行なんだが。」

「いや、今日はない」

「そうだよ。珍しい、いつもすぐ帰るのに」

「ちよつと考え事をな」

「ただだとしたら帰り支度してただけだが。あとゆり先輩に返事返してたのもあるか。」

「そういえば、今度グリグリのライブあるけどまたお呼ばれしてるの？」

「まあな。涼子も来るか？」

「行きたいけど、ちよつとバイトなんだよね〜その日」

「俺が入ってないからその代わりか？ でも萩野とか海藤さんとかも居るしな。なににせよ今回も1人か。」

「じゃあ私、バイトあるから行くね」

「おう。また明日な」

「うん。また明日」

涼子を見送り、ちょうど帰り支度を済ませた俺は教室を後にした。さてさて、今日はどこを寄り道して帰るか。……久しぶりにポテトでも食べるか。たまにあるよな。ポテト食べたくなる時。

日菜が居そうな気もするがその時はその時か。

花高を出て商店街の方へと向かう。夕方だからか高校生がやたらと多い。俺も含めてなんだがな。花高、花女、羽丘は割と部活やってる人が多いイメージだけど、意外とそうでもないか。

「部活どうするか決めた?」

「まだ。どの部活もいいよね」

「わたしはもう決めたよ!」

「えー?! どの部活?!」

なるのほどな。体験入部の時期だから帰る人が多いのか。今はまだ体験入部の期間だった気もするが、すでに決めているのか今日は体験しなかったのか。どちらにせよ人が多いなんとなくの理由はわかった。

そう言えば紗夜は弓道部だったな。部活、委員会、生徒会。責任感が強い紗夜だからこそ出来ることだな。俺には絶対無理だ。バイトだけで手一杯。

しばらく歩くとお目当てのファストフード店が見えた。ここの店には確か丸山まるやまがバイトしてたはず。

お店に入るとそこそこ人が居るようだ。席はほとんど埋まってる。仕方ないから今日は持ち帰りにするか。

列に並び、順番が来るまでスマホをいじる。特にメッセージはない。ホームに映る予定がスカスカのカレンダーにはライブの日の記載しかないという。それ以外は特に書くこともないしな。

……そういえば。近いうちに新人の面接があるとかないとか。たぶん新人の教育係は俺と涼子だろうな。SPACEでバイトをしていたからか、特に仕事を教わるといのはなかった。萩野はぎのが残念がってたのは記憶に新しい。バイトの知識とか経験がここまで役に立つとは思わなかった。ライブハウスは場所によって変わってくることもあるからな。

「次のお客様どうぞ」

もう俺の順番か。そしてこの声。今日はあたりのようだ。別の意味で。

「旭日君?! 珍しいね」

「そうか? 今日もとちってないか?」

「そ、そんなことないよ〜!」

この前ポテトLサイズ2個頼んだのにMサイズ2個来たんだが?

「持ち帰りでポテト”L”サイズ2個とスマイルください」

「Lだけ強調しなくても大丈夫だよ。それとさらっとスマイル頼んでるし……」

いやな。アイドルの卵らしいから笑顔の練習も必要だろうと思っただな。決して遊んでるわけじゃないんだ。遊んでるわけじゃ。

「以上でよろしいでしょうか?」

「はい。……引きつってるから30点だな」

「うう〜酷い〜」

冗談だよとだけ言い残して列から離れた。今日の丸山も面白かったな。素があれなんだから尚更面白い。あの性格と言動は一部に人気出そうな気がするんだが。なかなか上手くないって嘆いてた。

ポテトを受け取りファストフード店を後にした。そういえばたまにカフェで見かける水色の髪の子は居なかったな。

結局いつも通り商店街の方へと来てしまった。なんだかんだここに落ち着くんだよな。よく母さんも足を運んでたし、そのせいかな。それに結構商店街の人から頼りにされてたし。

足を進めてたどり着いたのは。いつも立ち寄っている羽沢珈琲店。コロッケが上手い北沢精肉店<sup>きたざわ</sup>。高校生に人気のやまぶきベーカリーの3店舗が並ぶ十字路。

今日はどうするか……すでに揚げ物をつまみながら歩いてきてるわけだが。今日は揚げ物マシマシにするか。それに父さんがコロッケ食べたいて嘆いてたし、ついでに買っていこう。

というわけで北沢精肉店に立ち寄る。

「旭日先輩、いらっしやいませー！」

「北沢、今日も元気だな」

このオレンジ色のショートカットの元気な子が北沢はぐみ。北沢精肉店の店長の娘さんで花女に通う高校1年生。ちなみにお兄さんも居るけど、あまり会ったことがない。

「コロッケ5つと鶏もも肉200グラム頼む」

「毎度ありー！ 少々お待ちください」

そう言うと頼んだ物を用意し始めた。鶏肉は俺の夕飯だ。肉は1番鳥が好きなんだよ。タンパク質もあっていいぞ。切つてレンチンするだけだしな。ここでも俺のぐーたらなところが出てしまう。

「部活はどうした？」

「今日は店番父ちゃんに頼まれてたから帰ってきたよ」

「なるほどな。ソフトボール部には新入生来たのか？」

「何人か来たけど、今日は体験入部ない日なんだ」

なるほどな。だから花女の生徒がやたらと多かったのか。帰る生徒がほとんどだろうしな。

「お待たせしました」

コロッケの入った紙袋と鶏肉の入った紙袋を受け取る前にお金をトレーの上に置いた。支払いが終わり、両方の紙袋をリュックへとしまっ。



「店番頑張れよ」

「うん！ 頑張るよ！」

北沢精肉店を後にした俺はそのまま羽沢珈琲店へと入っていった。結局ここに来てしまうほどコーヒーが美味しんだよ。それにケーキもなかなか。

ドアを開けて中に入ると、からんからんとベルが鳴った。  
「いらっしやいませ。好きな席にどうぞ」

案内してくれたのは茶髪のショートカットの子。羽沢珈琲店の看板娘の羽沢つぐみ。

彼女に案内され、席を見渡すと見知った顔が2人。1人は黒髪ショートに赤いメツシユが入ったクールな子、美竹蘭<sup>みたけらん</sup>。パツと見怖い感じだが、とてもいい子だ。……語彙力がないのか、いい子しか言っていないような気がする。

羽沢と同じ羽丘に通う高校1年生。そしてもう1人は。

「お。ゆー先輩。よかつたら隣どうぞ」

「そうか？ 悪いな」

このおつとりとした話し方。白髪のショートカットが特徴。そしてパンが大好き。名前は青葉モカ<sup>あおば</sup>。羽沢と同じ羽丘に通う高校1年生。もちろんいい子だ。

「旭日先輩、いつものでいいですか？」

「いつのもので」

何回も通って、最初に同じ物を頼むうちいつもので伝わるようになった。すっかり常連つてやつだ。

羽沢、モカ、蘭、あと2人居るんだがみんな幼なじみなんだと。基本5人で居るのをよく見かけるが、みんなそれぞれ個性があって面白い。

「上原と巴<sup>ともえ</sup>はどうした？」

「2人とも部活です」

「羽丘は体験入部あるんだな」

いつの間にかおいてあったお冷やを飲む。モカの前にはケーキが2つ。美竹の前には紅茶のみ。モカは本当によく食べるな。この前

ケーキ3つくらい奢った気がするんだが。

「ゆー先輩の学校は体験入部ないんですか?」

「うちもあるな。サッカー部のやつが張り切ってた」

「花高って結構部活盛んですよね?」

「割とな。俺はバイト優先だからやらないが」

クラスの半分以上は部活やってる気がする。よく確認してないならなんとも言えないが。全国とか結構行ったりしてるから強いんだな。特にサッカー部。1年の頃からレギュラーの智紀はやっぱりすごいんだろう。

話していると羽沢がブレンドコーヒーを持ってきてくれた。

「お待たせしました。ブレンドコーヒーです」

「ありがとう」

砂糖とミルクをいれずにまずはブラックを楽しむ。

「大人ですな〜」

「ブラックをまず楽しまないと」

今度は砂糖とミルクを入れてかき混ぜてからひと口飲む。……美  
味い。

「あ、そうだ。先輩ちよつといいですか?」

「なんだ?」

「スタジオいつ空いてるかわかったりします?」

「ちよつと待っててくれ」

美竹達は幼なじみ5人で結成したバンドでバンド名はAfter glow。ライブに出ると結構お客さんが来てくれるから、声をかけることがおおい。お得意様ってやつだな。スタジオでの練習もよく来てくれるし。

そしてこんなこともあろうかと昨日の時点での予約一覧をメモつてある。少しばかり変わってる部分があるから、アイツに連絡しておくか。

「どの日がいいんだ?」

「……この日がいいんですけど、空いてないならこつちで」

ノートを指差した日とバイト先の後輩から送ってもらった予約

リストの日を見ると最初に言った日が空いていることがわかった。

「最初の方で大丈夫だ。予約しておくよ」

「いつもありがとうございます」

「その代わり今度ライブあったら頼むぞ」

「任せてくださいよ」

これで集客は約束されたようなものか。後は後輩に連絡しておけば……たぶん大丈夫なはず。入ったばかりでいろいろ大変だし、仕方ないが心配ごととはそこじゃないんだ。

「ゆー先輩はバンドとかやらないんですかー？」

「バンドか……俺は聴かせる方よりも聴く方がいい。それに表舞台よりも裏方の方が自分っぽい気がするし」

「ライブの時の先輩、いい感じにピリピリしててなんか気合い入ります」

そんなピリピリしてるか？ ライブの時は普段よりもお客さんの入がすごいし、外のカフェも忙しくなるから必然的に動かないといけないからな。それにこつちの不手際でライブを遅らせたくないし。

C i R C L Eでのバイトを始めてまだ1ヶ月って言うのが信じられないくらいいろいろな仕事をやらせてもらってる。ありがたいことだ。

ちよつとは変わったのかな。俺は。

気づけば5時半をとっくに過ぎていた。2人と話していたらあつという間だ。そろそろ帰ってやることやるか。

「それじゃ俺はそろそろ帰る」

「モカ、あたし達も帰ろ」

「はい」

伝票を持ってレジに行こうとするとなぜか美竹に止められた。

「それ、あたし達の分も入ってるんですけど」

「あー別に気にするな。大きいのしか持ってないんだ」

別々の会計だとお店も面倒だろうしな。それにコーヒー、紅茶、ケーキくらいなんてこともない。

会計を済ませたのに俺はその場から動かずレシートを凝視していた。なんか微妙に長いレシートなんだよ。そりゃあそうだ。ケーキが4つくらい並んでる。1つは美竹だとしてもモカの奴3つも食ってたのか。

「本当によく食べるな、モカは」

「えへへ〜」

褒めてねえよ。

羽沢珈琲店を後にした俺は美竹達と別れて帰路に着いた。予想外の出費だがまあそれはいい。

冷えたポテトを食べながら歩く帰り道を見ているとなんでか昔のことを思い出す。ポテトのせいじゃない。この夕方から夜になっていく時間だろう。

中学の時、たまたま帰り道で会ったんだよな。紗夜と日菜に。そんな2人が並んで歩く姿を後ろから眺めてた。昔ほどの会話はそこにはなかったが。

「食べながら歩くななんてあまりよくないわよ」

「いやな。この時間腹減るだろ?」

後ろから声をかけられたが、当たり前のように答える。食べながら歩いているのを注意してくる人なんて1人しかいないからな。

「家まで我慢すればいいでしょう?」

「それが出来たら苦労しないかもな」

隣に並んで歩く紗夜に冷えたポテトを差し出した。なんだかんだ言いつつも冷えたポテトに手をつける。昔から2人揃ってジャンクフード好きだからな。そのせいか、俺もポテトをよく買って食べている気がする。

「今日の星は綺麗だな」

「……そうね」

山とか行けばもつと綺麗に見えるんだろうな。星に全く興味がないと言えば嘘になる。真つ暗な夜に輝く光。小さい頃、母さんがよく星ぎを教えてくれたっけ。

そういえば日菜は確か天文部だったな。よくわからん活動してるみたいだが、本当に大丈夫なんだろうか。そのうち廃部になったりしてな。

それともう一つ思い出したことがある。

「紗夜。星の鼓動って聞こえると思うか？」

「急にどうしたのよ。夕らしくないことを聞くわね」

『夕先輩！ 私、星の鼓動を聞いたことがあるんですよ！』

「そうだな。気にしないでくれ」

元気にしてるといいな。

「ゆーくんゆーくん！ 土曜日暇？」

「なんだ藪から棒に」

数日後。帰り道で待ち伏せしていた日菜に捕まり、適当に寄り道していた時だ。自転車を押して歩く中、急に隣に来て言い始めた。ふい過ぎる日菜の発言に嫌な予感がする。大抵こう言う場合はどこかに連れ回されるパターンだ。

「観たい映画があるから連れて行って！」

「……仕方ないな」

「やった〜！ さすがゆーくん」

この前紗夜と2人で出かけたからな。今回ばかりは断れない。それに今度の土曜日はバイトないしな。・・・ないの知ってたわけじゃない？ よな。

「当日行つて観れるやつか？」

「たぶん大丈夫！」

「若干怪しいなおい」

人気の映画になってくると予約しないと見れないとかザラにあるからな。人気のアニメが映画化すると予約も出来ないとか。

まあこの場合は見れなくても日菜のことだ。別のことをその場で考えつくから心配ない。ある意味日菜と居ると退屈しないぞ。

「なんとかなるよ！」

「そうなるといいな」

俺と出かけるつてなるとだいたい紗夜も誘うんだけどな。今回はそういう言動がないから誘ってないのか。いろいろ腑に落ちないところがあるが、今は気にしないでおこう。

「そういえば土曜日バイトないの？」

「ん？ 知つてて言ったんじゃないのか？」

「ううん。違うよ？」

知らなかったんだな。なんだこのプチ奇跡。というか最初にまずバイトないか確認してくれ日菜よ。そんなところも日菜らしいが。

## 第5話 夕と日菜

### 第5話 夕と日菜

「マジでお前なんなんだよ!」

教室に鳴り響いた平手打ちの音。ちょうど通りかかった教室の前で見た光景はかなり衝撃的だった。

共に育った幼なじみがクラスメイトであろう男の子にビンタをされていたからだ。そんなものを見て黙って居られるほど俺は腐っていない。真っ先に乗り込んで行って、ビンタをしたであろう男の子に襲いかかった。

「なにしてんだお前! 日菜がなにをした?!」

「うるせー! コイツいつもいつも勉強してないくせに100点ばかり取るから!!」

お互いつかみ合いあっちこっちに押し出そうともがく。俺の方が強い力だったんだろう。机を勢いよくズラしながら相手を床に押し倒した。そして馬乗りになって胸ぐらを掴む。

「そんなことでひっぱたいていい理由にならないだろ!」

「お前もなんだよ……! そいつの味方かよ……!」

相手は涙を流しながら俺に訴えてきた。確かに日菜は周りから見れば天才という部類に入る人間だろう。でもだからってビンタされていいわけがない。傷つけられる理由にはならないんだ。いくら天才だからって……日菜は。

「もういいよ、ゆうくん……! 私が悪いの!」

「悪くない! 日菜はなににも!」

頭に血が上った俺は拳を振り上げて相手を殴ろうとした。しかしこんなことをしていれば誰かが止めに入る。

「やめろって!」

後ろから押さえつけるようにして相手から引き剥がしてきたのは、のちに友達になる松風智紀だった。

なぜだ? 俺は日菜をはたいた奴を殴ろうとしているだけだぞ?

何も悪くない日菜をはたいた奴を。

天才だからって邪険に扱う意味が俺にはわからない。

ふと目を覚ますと覗き込むように日菜が俺の事を見ていた。

「おはよう、ゆーくん」

「おはよう、日菜。今何時だ？」

「9時半くらいだよ。起こしてって頼んだ時間」

そう言うのと俺の横に座ってくる。

日菜は紗夜と違って美人系ではない。可愛い系だな。天真爛漫な性格で男子からも人気があった。でも結局俺のところに来るもんだから、周りの男子からはいい目では見てもらえなかったな。あれはめんどくさかった。

「そうか……」

ゆっくり上半身を起こして後頭部を左手でかく。そのまま日菜の頭に手をそつと乗せて優しく撫でた。

「お前は変わる必要はないからな」

「どうしたのー？ くすぐりたいよ」

結局あの案件は俺が全ての責任を負った。日菜を守れただけでも俺は十分だったから問題はない。もう5年前の話だがな。ちょうどそのくらいだったか。紗夜が日菜に一線を引くのが目に見えてきたのは。

「今日の夕くん優しいね」

「いつも優しくしてるだろ？」

「えー。嘘だよ」

「嘘言ってるのはお前だ。遅刻しそうな時送ってやってるだろ」

全くコイツは。俺が優しくするのはわかっていることだろ。

撫でるのをやめて軽く背伸びをする。昨日の夜は少し夜更かしをした割にはあんまり眠くないな。睡眠の質が良かったのか？

ふと日菜に視線を向けると、机の上に置いてある腕時計を見ていた。



「ずっとその時計してくれてるよね？」

「まあな。日菜から貰ったものだし。いちいちスマホで時間確認しなくて済む」

一昨年の誕生日プレゼントなんだ。日菜からの。物は大事にしな  
いと怒られるからな。

スマホを持ってベッドを降りる。カーテンは日菜が開けたらしく  
開いていた。今頃は紗夜がギターの練習をしていることだろう。

紗夜は日菜にギターをやっていることを隠している。知られたら  
真似されるからって思ってるからだと思う。実際紗夜のやってきた  
ことを真似しない方が少なかった。日菜としてはただ一緒に楽し  
みたいだけなんだろうけど。

「日菜。着替えるから、リビングで待っていてくれ」

「はい」

返事をするので部屋を出て行く。付けっぱなしの電気は消えてて、閉  
めたカーテンが開いている。確信はないが、30分前くらいからうち  
に上がり込んでるな。人の部屋で何をしてたのんだろうな。ちなみ  
に俺の部屋から本を探し出そうとしても無駄だ。拾わないし買わな  
いからな。

そんなことを考えていても仕方ない。昨日用意していた服に着替  
え始めた。

私服に着替えてリビングに行くと、テーブルの上にカップが2つ置  
いてあった。台所に居るんであろう日菜が用意したんだろうな。し  
かもコーヒー。

「まだインスタント残ってたのか？」

「そーだよ？」

てつきりないもんだと思ってた。父さんが仕事行く前に飲んでい  
たり、放課後バイトない日に帰ってきて飲んでたりだな。

テーブルにつこうとすると、今度は丸い皿にトースターで焼かれた  
パンを1枚乗せて持ってきた。うちに食パンなんてあったらどうか  
と思いつきながら椅子に座る。ゆっくり行動してる中、日菜はせつせと朝

ごはんを用意してくれている。こんな珍しいことがあるのだろうか。  
「珍しく気合い入ってるな」

家庭的なことが出来るのに越したことはない。紗夜にとっては難しいみたいだけど、彼女は彼女で頑張ってるみたいだし応援していい。日菜は……どこで覚えたんだろうな。調べてきたとか言いそうだから怖い。

とりあえずブラックのまま一口飲む。

「……変なのは入れてないんだな」

「当たり前でしょー」

「そうなんだが」

日菜はあれだ。ファミレスに行くとかオースな飲み物作ってるタイプだからな。少し疑ってしまうのも仕方ないことだから勘弁してほしい。

「ゆーくんいつもなに塗ってるの?」

「適当」

「適当じゃあ…今日はマーガリン塗るね!」

そう言う俺のぶんのトーストに冷蔵庫から持ってきたマーガリンを塗り始めた。端から端まで塗るタイプの俺と違って日菜は端まで塗らないタイプのようだ。……気になる。

なんて考えているとトーストの端の方をちぎって俺に差し出す。

「はい、あーん」

「子供か。自分で食える」

「子供扱いしてるわけじゃないよ」

全く意図が掴めないが、バカにされているようにも思えない。ここはとりあえず差し出されたトーストを食べた。

「素直じゃないな」

「わかったから、お前もさっさと食べろ」

なぜだろう。今日の日菜はいつもと違う気がする。そもそも一緒に居てバタバタしていない方が珍しい。たまにはこんな日も。

「ゆーくん、電車止まってるみたいだよ?」

「……は?」

「今確認したら人身事故だった」

前言撤回。やっぱバタバタするのは変わらないみたいだ。

「早く外行って待ってる。善は急げだ」

「はい」

さてと。そんな遠くないしバスとかで行くのがいいが、きつとぎゅうぎゅうになるんだろうな。

とりあえずトーストをすぐに食べ終え、歯磨きをしながら家の中の戸締りを同時にした。遅刻しそうな時ほど何かを忘れるもんだ。気をつけないとな。

何度も遅刻しかけているからだろうか。出かける前に確認することがすんわり終わり、意外と早く家を出ることが出来た。

「とつとと行くぞ」

「うん！」

自転車の2人乗りが1番早いんだが休みの日だし危ないからやめておこう。ということは走っていくしかないわけだ。

「まだ電車止まってるか？」

小走りしながらスマホでいろいろ調べている日菜を横目に聞くとやはりまだ動いてないらしい。ってことは走るのは確定か。

「体力は保証出来ないからな」

「わかってるよ！」

スマホをしまうのを確認してから駅に向かって走り始めた。その様子を窓から見る紗夜に俺は気付くことはなかった。

「なんとか間に合ったね」

「俺、映画で寝る自信しかないんだが？」

「もう疲れたのー？」

そこそこのスピードで駅まで走ってきたわけだが。なんとかバスに乗れた。あとは終点で降りるだけなんだけど、いかんせん走ったからな。ものすごく疲れた。インドア派にはきつい。

「この調子なら間に合いそうだ」

「だねー。さすがゆうくん」

「いや、俺は何にもしてないんだが」

ただ電車からバスにただけであって。なんて思っても日菜はどこか楽しそうで、全く疲れを感じなかった。

映画というのは苦手だ。なぜなら暗い空間に1時間、2時間座っていないければいけないからだ。明るいとこでやっている授業中さえ眠るんだぞ？ そんな俺には起きてるのは不可能に近い。

走ってる途中で明らかに日菜は楽しんでるように見えたのは気のせいではないんだらう。スリリングなことをいつも求めているような気がする……。日菜らしいっちゃ日菜らしいか。

つてなわけで絶賛暗い場所で座ってるわけだがもう眠い。隣でまだ映画も始まってないのにポップコーンを食べながら広告の映像を見ている日菜を横目にあくびをした。

「ゆうくん眠いの？」

「この環境寝てくださいって言ってるようなもんだろ？」

「えーゆうくんだけだよー」

俺以外にも居るだろ。例えばあそこの女子同士で来てる……寝るわけがないか。じゃあ右下の方のカップルも……寝ないか。ほう……俺だけとは。

「おかしいだろ」

「あはは！ ゆーくん面白いな」

「どこがだ」

日菜の笑いの感覚は何年一緒に居てもわからないものだ。天才と凡人では感覚の差もある。テストに例えるのが一番簡単だが、あえて例えないでおく。

同じような広告に飽きかけていたところ、ようやく映画の本編が始

まった。今回は半分くらいは観てやろうという気持ちを持って映画に望んだ。

「ゆうくん…なんで助けてくれたの？」

小学校の帰り道。ふと日菜が立ち止まって言った。暗い表情を浮かべて。

「あたりまえだろ？ 幼なじみなんだから」

「でも…ゆうくんまで怒られちゃった」

「だから気にするなって」

俺は日菜の手を取って歩き始めた。

見ただけで何でも出来てしまう日菜は昔から努力している人に恨まれることが多かった。今回の出来事もその類だ。努力している人から恨まれるのは100歩譲ってもいい。俺が一番許せないのは、そいつに合わせっておかしいだろって言うやつだ。何も被害にあつていない奴がなぜそんなことを言える？ おかしな話だ。

確かに他人に合わせることも大事だと思う。だが本当にそれでいいのか？ 毎回同じように他人に合わせて人を馬鹿にして。

「日菜は変わらなくいいんだからな。またなにかあつたら俺が守るから」

「うん……。ありがとう、ゆうくん」

教えてくれ。俺はあと何回日菜を守ればいい？ あと何回守れば、普通に過ごせる日常が来る？

次に目を覚ました時は見事に映画が終わって、そしてなぜか日菜は楽しそうに俺を見てにこにこしていた。一体何があつたんだ？

しかし、聞いても答えてくれる日菜ではなかった。

映画を見終わった俺と日菜は映画館を後にして、近くの大形シヨツ

ピングモールに向かっていた。

「昼はどうするか」

「ん〜ハンバーグ食べたい!」

ハンバーグか。たまにはそういうのもいいな。

「でもこの時間人多いよね」

「昼時だからな。仕方ない」

シヨツピングモール内のフードコートとかファミレス等は人で溢れかえってるんだろうな。もう少し時間をずらしたい所だ。人が多いところはなにかと面倒だからな。

「少し時間を潰してから行くか」

「そうだね。とりあえずぐるって回ろうよ!」

「行き先は任せる」

その言葉が地獄の始まりだったことを俺はまだ知らない。

いいか。日菜と出かける時はちゃんと寝て、体力を回復しておかないといけないぞ。でないと疲れてしまうからな。絶対俺がそうだ。

「ゆーくん今度はあっち!」

「落ち着け。店は逃げないから…」

昔からそうだ。日菜はあっちこっちにすぐ行ってしまう。目を離すとすぐに見失って。こういうシヨツピングモール内で何度迷子センターからの呼び出しがあったことか。

なんて考えながら日菜の背中を追っていると、服屋の前で足を止めた。

「どうした」

「ううん。……おねーちゃんに似合いそうな服があるなーって思ってた」

日菜の視線の先を追うと、そこには白いワンピースがマネキンに着せられていた。確かに日菜の言う通り……かもな。ああいった服を着るような性格はしていないが、紗夜には似合うと思う。

「いつか……見に来れるといいな」

「うん」

「それまで楽しみは取っておけよ。待てば待つほど、その時が嬉しくなるもんだ」

そう言つて日菜の頭をポンと叩く。俺の言つたいつかは果たして……いつなんだろうか。1年後か？ それとも2年後？ いや、もつと先かもしれない。

いつかは向き合う日が来るんだとは思う。その時は俺も覚悟を決めて、2人の話を聞かないといけない。何があつても……最後まで見届けたいんだ。

「で、日菜の行きたかったところはここか？」

「えつとね、ノートが買える所に行きたいんだー」

「ノート？ 買い換える時期過ぎてないか？」

「ちようど書くところがなくなっちゃって」

普通学年上がる時に買い換えるはずなんだが。どうやら日菜はそういうのは気にしないらしいな。というよりも、日菜はノートを書いているんだろうか。基本聞けば覚えるからノートなんて要らな……聞けば覚えるって異次元だよな。

「あとはお母さんから買い物頼まれてるから、雑貨屋さんも行きたい！」

「とりあえずはノートも雑貨屋行けば買えるだろうし、行くとするか」「うんー」

ちやつかり買い物頼んでるあたり、おばさんらしいな。遊びに行くことを知っているってことはもちろん……おじさんも知ってるよな……。今度会ったらどやされそうだ。俺に対して当たり強いし。

考えてても仕方ない。今は日菜との買い物を優先しよう。

はい。というこで日菜とはぐれてしまったわけだが。いったいどこに行つた？ あのお転婆娘は。

雑貨屋までの道を面倒だからと言ってエスカレーター等を使ったのがまずかったか？ それとも途中のゲームセンター内を通ったことか？ どちらにせよ人混みの中をスルスル通り抜けることをやめた方がよかったな。

さてと……どうしたものか。俺は今、さっきの服屋のところまで戻ってきた。あわよくばここに居ればいいなと思ったが。そんなことはなかった。

連絡したが、恐らく日菜のスマホの充電がないのだろう。よく電池切れるからな……全く。何のためのスマホなんだか。

とりあえず、今出来そうなことを考えよう。まずは闇雲に探すのは避けたい。無駄に体力使うし。次は最上階、もしくは下からどんだん下か上に向かっていく。これはどこかですれ違う可能性があるから避けたい。あとは……迷子センターは高校生にもなって頼りたくない。

はぐれる前に、はぐれた時の合流地点を決めておけばよかったな。そんなことを考えても後の祭りだ。残る選択肢は……日菜の思考パターンを先読みして探す。結局はこうなる運命か。

雑貨屋にずっと居てくれるならすぐに解決するが……はぐれた時無闇に動くほど日菜も馬鹿ではない。なんなら買い物普通に続けそう。俺が見つけてくれることを信じて。

それならば……買い物済ませてレストランに向かったと見るか。行き先はハンバーグが食べられるレストランだな。

いざ目的地を決めて進もうとした直後。泣きじやくる小さい女の子が居た。迷子なのだろう。だったら他の人が迷子センターにでも連れて……。

「日菜……悪い」

そう小さくてつぶやいてから、女の子の元へと歩いた。

おねーちゃん……なんて言われたらさ。見て見ぬふりなんて出来ない。

少なくとも、俺はその子と日菜を重ねてしまったんだろう。ぼんやりとしか覚えていないが、いつの日かの迷子になった時の話だ。雪が降



る帰り道で2人から聞いた思い出の話。

迷子センター。

とりあえず迷子センターに連れていき、探している人を呼び出してもらおうべく来たわけだ。日菜には悪いことをしてしまった。はぐれた上にまた一から探さないといけないしな。

「あー！ ゆーくん居た！」

なんて考えていると、後ろの方から日菜の声が聞こえてきた。それと同時に俺の後ろに女の子が隠れてしまう。怖い人じゃないんだが。そしてなぜか向こうも女の子を連れている。恐らく同じような状況になったのだろうと想像が出来る。

「日菜も迷子を連れてきたのか？」

「うん。ゆーくんも同じみたいだね」

「まあ合流出来たし、よかつたな」

とりあえずひと段落し、安堵の息を吐く。すると俺が連れてきた迷子の女の子がチラツと様子を見るためにゆっくり顔を覗かせる。

「おねーちゃん!!」

そう言うとい目散に走っていく。どうやら日菜が連れてきた子が俺の連れてきた子のお姉さんだったようだ。どちらもまだ小学生だろう。

「もう！ 勝手にどっかいつちやダメって言ったでしょ！」

「ごめんなさい……」

こうしてみると……やっぱり昔の紗夜と日菜を思い出すな。

「なんかさ。昔の自分を見てみたい」

「そうだな。ホント……そっくりだ」

そう言うってから日菜のことを撫でてから、離ればなれになってしまった姉妹の元まで歩み寄った。2人の目線に合わせるようにしやがむ。

「もう迷子にならないようにな」

「うん！　ありがとう、お兄ちゃん！」

「お姉さんもありがとうございます」

「うん！」

小さい姉妹を見送りひと段落したところで本題に入った。

「スマホの充電ないだろ」

「気がついたらなかった。ごめんね」

「バッテリー貸すから充電しておけ。また探すのはごめんだ」

まあ見失うとわかってて見失ってしまった俺も十分悪いな。2度目はないように気をつけるとしよう。

「少し遅くなったが、昼食べて帰るか」

「そうだね！　ハンバーグハンバーグ♪」

なんだかご機嫌そうな日菜。いい意味でも悪い意味でも気にしないのが、コイツのいいところなのかもな。

日菜……お前は変わってくれるなよ。

先に行ってしまう彼女の背中を見つめながらそんなことをふと思った。

「ゆーくん早く早く！」

「今行く」

いつの日か今度は。3人で来たいもんだ。

## 第6話 CiRCLE

### 第6話 CiRCLE

今日は世間で言う土曜日。高校生である俺は特に部活をやっている訳ではないので休みだ。CiRCLEでのバイトも今日はシフトが入っていない。

何もない日は寝ていたい時間まで基本寝ているんだがな。今日だけはちよつと違った。

寝癖のある頭をぼりぼりかきながら、着信音で眠りから呼び覚ましたスマホを耳に当てる。

「どうした……?」

「お休み中のところ……げほっ、げほっ! すいません……」

電話の相手はバイト先に最近入った鈴音<sup>すずね</sup>だ。なにやら咳き込んでいる。これはあれだな。あれだよな。

「不甲斐ないばかりに……げほっ。風邪を引いてしまいました……」

「それは災難だったな。お大事に。じゃあ」

「ちよつと待つてください! げほっ、げほっ!!」

わかっている。どんな要件かなんてわかっているさ。バイトを代わってほしいんだろう。だが他にもバイトを代わってくれる人はいくらでも居る。土曜日くらい休んでも。な?」

なぜ代わる代わらないの話が出てくるのかって? 鈴音は優秀すぎてな。仕事をスポンジのように覚えていき、なんと即戦力へ。驚きだろ?」

「私自身もバイトに穴を開けたくは……げほっ、げほっ! ないんですけど……お母様が許してくれなくて」

「だろ。熱がある中、バイト行けなんて基本言わないだろう」

「いえ! 私は40度の熱があろうとも、頭が割れそうな頭痛でも行きます!!」

うるさいんだよな……。

大きい声にすぐに耳から遠ざけ、傾合いを見てまた近づける。

「熱でバカになったか?」

よっぽど重症なんだろうな。それとも本音なのか。まあどつちにしろ俺に電話をかけてきている時点で察したよ。涼子は外せない用事があるんだろうな。でなければもう解決している。

優秀と言ってもまだ居ても居なくても大丈夫なようにシフトは組まれて……。

『そういえばまりなさんが、今回のシフトは最低限の人数しか入れられなかったって言ってたよ』

『じゃあ一人抜けるのも苦しいな。だってさ旭日』

それにこういう時は大抵グループのメッセージに来るんだが。どうやらそういうことらしい。シフトを決めているのはオーナーだから、今回はやってくれたみたいだ。

「とりあえず休んで風邪を治せ。いいな？」

「この恩は必ず……」

「返さなくていい。真宗と喧嘩さえしなければ」

「あ、それは無理な話です」

なんなのコイツ？ 真宗と喧嘩するのが趣味と言わんばかりに喧嘩しようとするな。困るのは俺たちなんだが……。

いつまでもグダるわけにもいかない。行かないという選択肢は用意されてないし。

通話を終了し、急いでバイトに行く準備を進める。こういう時ほどバイクが便利と思ったことはない。

C i R C L E。ロビー。

準備してから30分後。我ながら早く来れたと思う。制服ちゃんと着れてないが。こんな状態で紗夜に見られればお小言をもらうことこの上なし。そんなことを言っていると本当に現れそうだからやめておこう。

シャツのボタンを締めながらロビーに来ると、ちょうど個人練習にでも来たのか紗夜と受付をする四十崎あいさきさんの姿があった。

「夕？ 今日もバイトなの？」

神は俺を見捨てた。

「まあ…そんなところだ」

絶対指摘してくるだろうな。名札付けてないし。ポケットだし。無線機と繋がってるイヤホンは首にかけてるし。

「身だしなみくらいちゃんとしなさい」

「まあまあ。夕君代わりで急いで来てくれたから多めに見てあげて」

「……そういうことなら」

四十崎さんのおかげで助かった。まあ俺自身が気をつければ言われることじゃないんだがな。てつきり誰も居ないと思って。

受付を済ませた紗夜はスタジオへと入っていった。

「ありがとうございます」

「気にしないで。急な呼び出しだったんだから。……でも今回は運悪かったね。たまたま最低限しか人居ない時で」

「本当ですよ」

この人は四十崎李乃さんあいさきりの。大学1年生。CiRCLEでのバイト歴は2年。優しいお姉さんタイプで、真宗まさむねにだけなぜか厳しい。茶髪のセミロングの人。

美人でよくお茶を誘われるらしいが、今のところ恋愛には微塵も興味ないためほぼ断っている。無類の猫好きで猫カフェには一緒に行くらしいが、猫としか戯れていない。将来の夢は猫をたくさん飼える所に住むことらしい。その為にCiRCLEでバイトをしている。

「こういう貧乏くじを引くのはいつも夕君だね」

「まあ仕方ないです。市野木さんなんて適当な理由つけて来ないでしょう？」

「確かに」

市野木匠さんいちのきたくみ。俺の1つ上の先輩だが学校が違う。金髪のイケイケな人。俺はあまり好きではないタイプの先輩の1人だ。

女の人を見つけるとところ構わずナンパする。もはやそれが口癖なのでは？ と思う程に。大抵「ごめんなさい」されて終わりだがな。だが、この人のすごいところはめげないところだ。

ちなみにさつき電話かけてきたのは鈴音ユキ。俺と同じ高校の後輩。涼子をこよなく慕うロシア人と日本人のハーフ。長い銀髪を後ろの低い位置でまとめている人。

容姿端麗、文武両道。はつきりとした物言いをする。特徴はたくさんあるがなによりも……もう1人の後輩の柏崎真宗とよく意見が合わず口喧嘩をする。あとは風邪を引くとバカになる。

真宗に関しては午後に来るみたいだから、話はまたその時にするか。

涼子に関してだが、とても気がきくいい人だな。セミロングの黒い髪をいつもポニーテールにしている人。

さりげないフォロワーが得意で、いつも助けられている。機材が好きでこのバイトを始めたそうだ。元々バスケット部のバリバリの運動部。よく智樹と連れ回された。

CIRCLEにはユニークな人が集まっている。というかユニークな人しか居ないので？　と思うほどに。

身だしなみを整え終わると同時に後ろの方から声が聞こえてきた。

「あ、夕君。今日は突然ごめんね」

振り返るとやはりまりなさんのようだ。

「慣れてるので大丈夫ですよ」

「そう言ってくれるとありがたいよ……」

本当に申し訳なさそうに言うまりなさん。別にこの人が気にすることではないんだ。俺よりもバイト歴長いのに自ら出てこない人たちが主に悪い。

この人は月島まりなさん。CIRCLEのスタッフの人で黒髪のショートヘアーの人。気さくで優しい人で、怒ったところを見たことがない。それといつも忙しそうにしている、見てるこっちが心配になるレベル。この人の手だけは煩わしてはいけない。

「李乃ちゃん。ちょっと手伝ってほしいことがあるんだけど、いいかな？」

「はい、わかりました。夕君あとお願いね」

「了解」

さてと今日もマイペースに仕事しますかね。

スタジオの方へと行つてしまった2人を見送り、ロビーでお客さんが来るまでぼーっとすることにした。

受付、掃除をしてはぼーっとしてを繰り返しているとグループメッセージにお見舞いメッセージが飛び交った。だいたいお大事になるに1人だけ『早く治してお茶行こう』とか息を吐くようにナンパするやつとか居るからな。ちなみにこのグループはバイトメンバーだけのやつだ。スタッフさん込みのはまた別にある。

賑わうカフェを外から眺めていると、早速同じシフトの人が出入りする。ポスター貼り替えたりとか、カフェテリアの掃除とかやることはたくさんあるもんな。

ロビーに来ると話しかけてきた。

「夕君、毎度大変だね」

「電話来たものですから」

「じゃあ俺の時も頼もうかな」

「それは市野木さんに頼んでください」

今話しているのは四十崎さんとは違う大学に通っている大学2年生の人。海藤蒼真かいとうそうまさん。少し長めの黒髪で片目がいつも隠れている。

普通に仕事してくれるんだが… …時々めんどうだなんて思う時があるらしく、気付いたら居ない。つまり仕事を押し付けられる。

「今日は晴れていて休みだから人がたくさんだね」

「繁盛している感じですね。時給増やしてほしいです」

「それはオーナーに相談しないと」

ついでに海藤さんがたまに仕事押し付けて姿消すんですって言うつてやろうかな。まあ真宗や鈴音ほど大変じゃないからまだいいか。市野木さんよりは遥かにマシだ。

それと今オーナーという単語が出てきたが、この人もまた忙しい人なのかあまり姿を見かけない。実質C i R C L Eの代表はまりなさ

んだ。イベントとかでも主体になって動いているし。

会話をしているとスタジオから3人お客さんが出てきた。ちょうど終わりの時間らしい。

「俺が清掃に行くよ」

「……お願いします」

俺的には掃除の方がいいんだが。まあ仕方ない。会計とかだけ済ませてあとは終わりだろうしな。

2人はフライヤーやチラシが貼ってある方へ。1人が受付に来た。

「明日って空いてないですよね?」

「そうですね。2日後の16時から18時までには空いてますよ?」

「じゃあその日をお願いします」

「かしこまりました。ではお待ちしています」

次回の受付を済ませて、お客さんがC i R C L Eを出て行くのを見送ってから気を抜く。

あの3人は高校生だから平日だと夕方がいいって話だ。昼間は大学生とかが多めな印象だ。あとは個人的に練習に来る主婦の人とか。まあガラガラの時もある。

こういう時は楽しいんだがな。

なんてのも束の間。5分くらい経った頃にまりなさんから仕事を頼まれたみたいで結局俺がスタジオの清掃をした。どっちもやる羽目になるとは……。

気づけば1時間経っていた。お客さんとか予約の電話とかがそこそこあったし、やることもまあまああったからな。あつという間だ。

ロビーで次回C i R C L Eにて行われるイベントの内容を見てみると扉が開いた。お客さんではなく、バイトの人だ。

「あら、旭日さん。ごきげんよう」

「お疲れ。今日は真面目に仕事してるんだな」



「いつもしてますわよ?」

嘘つけ。ニコニコ笑顔ですぐ嘘つくなコイツは。

この上品な話し方をする子は早乙女麗華<sup>すおとめれいか</sup>。 ”さおとめ” じゃなくて”すおとめ”な。何回も間違えると笑顔でキレてくるから怖いんだよ。栗色の髪をハーフアップにしている。

普段はあんまり仕事しないお嬢様なんだが。なぜそれでも許されるかって? それは早乙女がああ弦巻財閥に並ぶ早乙女財閥<sup>すおとめ</sup>の御令嬢だから。怒鳴ったりしたら何されるかわからないのが怖いところだが、そんなこと言ったら始まらない。ちなみに真宗、鈴音より少し先にバイトメンバーに加わった。

「休憩か?」

「はい。それよりも鈴音さんは大丈夫なのでしょうか?」

「大丈夫だろ。電話でも元気にしてたぞ?」

「それならいいのですが」

ここであっさり大丈夫じゃなさそうだった。なんて言ったら鈴音が可哀想になつてしまう。かかりつけの医者をおたくさん引き連れて鈴音家へ突撃してしまうから。

いい意味でも悪い意味でもこの子はぶっ飛んでる。海藤さんと同じように忙しい時はちゃんと働いてくれているし。

「ところで旭日さん。BLとはなんでしょうか」

早乙女はいきなりぶち込んでくる。

… :箱入り娘な感じしないのに、実は箱入り娘でしたという早乙女の質問。

そう。早乙女麗華という人間は箱入り娘なのだ。だが、世間でよく見る清楚な雰囲気、子供はキスしたら出来るみたいな感じの子ではない。隙あらばお客さんとおしゃべり（本人は世間勉強といいはる）をするわ、こうして気になったことをすぐストレートに聞いてくる。見た目とはまた違った印象だ。

そして聞いてきたことに対する答え方によっては……な？ 殺されかねん。

「そうだな。まずは言葉のなりたちから説明しようか」

「いえ…意味を知りたいだけなので、言葉のなりたちは結構ですわ」

「そうか？ どこから話すか」

俺の知っている（以前クラスの女子になぜか巻き込まれた際に得た情報）ことを語り始めた。

BLとはboys' loveの略称。男性キャラクター同士の恋愛模様や性的な表現を含む関係性を描いた作品ジャンルで主に女性を描いているらしい。読者層は女の人が多い。

「まあ…男性同士の恋愛などをそのように呼ぶのですね」

「そうだな。1つ言っておくが、全部受け売りだということは忘れるな。頼むから」

「わかりました。間違っても旭日さんから詳しく聞いたとおっしゃるな。ということですね」

そうなんだが…。…こう、もう少し言い方を考えてくれないだろうか。なにも俺の名前を出す必要性はないわけで。

ちなみにだが、どこからともなくお付きの人が現れる時があるから注意だ。場合によって………な？

時は過ぎて午後。気づけば午前中が終わっているという素晴らしい時間の過ぎ方だ。ということは早乙女と海藤さんに代わって真宗と萩野が入るってことか。メンバーの入れ替えだ。多少は楽になるかなってぐらいか……。

その前に休憩行くとするでしょう。

ロビーを後にして、事務所の方へと訪れた。

「お疲れ。急な呼び出しに応じてくれてありがとう」

ちやうど天堂てんどうさんと出くわしたようだ。

「いえ。今度都合悪い時に鈴音に代わってもらうので」

「それがいい」

この人はバイトリーダーの天堂てんどう奈々さん。大学4年生だ。厳しくしっかりしていて、本当に頼りになる人。長い薄紫色の髪をいつもポニーテールにしている。

「旭日、すまないが見てもらえるか？ 壊れてしまったようだ」

そう言つて渡してきたのは無線機。

「……………充電ないだけです。代わりのやつ使ってください」

「そうか。すまない」

そしてこの人はすごい。C i R C L Eでバイトをしているのにも関わらず機械音痴。機材の操作は一切出来ない。未だにガラケーで、メールがまともに打てない。電話は出来るんだけど……………。それを含めても周りの状況をよく見ていて、指示が的確だ。機械以外は完璧。

「君は本当に笑わないんだな。友達には笑われたよ」

「人それぞれですから。天堂さんの場合はおそらくギャップかと」

「ギャップか。私はなんでも出来そうないメージとよく言われる」

だいたい合ってるよな。そこが男の人に受けるかどうかはわからない。少なくとも俺は機械いじりが出来ないと無理というのはない。スマホで連絡取れば。

天堂さんのとの会話を終え、俺はそのまま休憩へと入った。

C i R C L E ロビー。

「はいもう一回！」

「か、勘弁してくださいよ〜」

休憩から戻ると、なにやら萩野はぎのと真宗が格闘しているところを目撃

した。

「あ！ 夕先輩助けてください！」

「こらー！ すぐ旭日君に頼らない！」

「ええ〜……萩野先輩のお、鬼！」

そう言う俺の所まで走ってきて後ろに隠れる。これはこれは面倒な現場を目撃してしまったようだな。

紹介しよう。今、後ろに隠れているのが柏崎真宗。かしわぎまことむね 同じ高校の後輩だ。まだ入って数日しか経っていない。ちなみに鈴音も。

真宗は軽い女性恐怖症らしい。なんでも環境がそうさせてしまったとか。父親は単身赴任。母親、2人の姉、妹との生活を毎日送っていると前に聞いた。CIRCLEでバイトをしているのはそんな自分を変えたいから。まだ結果という結果は出ていないが。

「旭日君からも何か言っつてよー。すぐ頼りに行こうとするんだから」

真宗に怒っているのは同じバイト仲間の萩野凧。はぎのなぎ 同い年だが通っている高校は違う。確か月ノ森女子学園というお嬢様高校。

背が低いのがコンプレックスでその話題に触れると怒る。とても頑張り屋だが、から回ってしまうこともしばしば。無類のアイドル好きで、アイドルの話が始まるとめんどい。長い茶髪のストレートの子。

「まだ入ったばかりだし仕方ない。ゆっくりで俺は良いと思う」

「ん〜旭日君がそう言うなら」

「いろいろ教えたい気持ちはわかるが、真宗は女の人が苦手だから余計にな」

「でもユキちゃんとは話せるじゃん」

それはそうなんだよな。なぜか真宗は同時期に入った鈴音とは話せる。……これにもいろいろわけがあつてだな。

簡潔に説明するとだ。2人のバイト初日。俺と涼子の2人で面倒を見ることになり。いろいろ教えていくうちに鈴音が真宗に対して煽り的なことを言ったら、口喧嘩に発展。それ以来緊張よりも嫌いという感情がどうやら先に来るようになった。

「あれは話しているというより喧嘩してるって言った方が正しいだ

ろ」

「た、確かに……」

「まあ真宗。萩野もいろいろ教えてあげたいみたいだし、話くらいは聞いてみる。これも練習だ」

「わ、わかりました。夕先輩がそう言うなら頑張ります！」

返事だけはいいいんだよな……言い方は悪いが。でも仕事は少しずつ覚えてきてはいるから大丈夫だろう。

真宗を萩野に任せ、恐らく誰もしていないであろうトイレの清掃へと向かった。

中に入ってチェックシートを確認すると案の定まだ誰も手をつけていないようだ。

「さて、やるか」

掃除用具が入っている扉を開け、用具を取り出し、清掃を始めた。今思えばもう戦力として数えられている鈴音は正直すごいと思う。あつという間に仕事覚えるし。真面目だし。だからこそ、真宗は焦っているのだろう。自分も早く覚えないうつて。

焦る必要なんて全然ないと思う。覚える速度なんて人それぞれだし。俺なんて覚えようとしなければ何一つ頭の中に入ってこない。もちろん授業だってそうだ。本当はダメだからな？ でも興味ないことって覚えられないよなっていう言い訳。

音楽関係は母さんの影響で興味があつた。バンドのこともたくさん聞いたし、楽器のことも。やっぱり軽音部の顧問だったからか、知識はかなり持っていた。それをお酒片手に楽しそうに語るもんだから俺まで覚えてしまったわけだ。

本当。楽しそうだったよ。

この先。C i R C L Eという場所でいろんな波乱が待ち受けていることを。俺はまだ知らない。

## 第7話 変わりゆく日常

### 第7話 変わりゆく日常

あれからというものの。何ら変わらない毎日を過ごしている。なぜ何も変わらないと言い切れるかって？ そんなの簡単なことさ。

「旭日先輩、ごちそうさまです！」

「ひまりちゃん、旭日先輩に奢ってもらい過ぎだよ」

「それに食べすぎ」

放課後こうして羽沢珈琲店に居るんだからな。今日はプラス1名居る。ショートカットで赤メツシユが入っているクールな子、美竹蘭みたけらんだ。たまに会うくらいだけどな。今日はそのたまにの日だ。

「先輩も甘やかしすぎです」

「そう言うな美竹。俺は上原に自業自得という言葉を教えてやりたいだけだ」

「なるほど」

そこを理解されると色々誤解を招くからやめてほしいんだが？

まあ可愛い後輩のためにただケーキを奢っているだけだ。他意はない。……それでも奢りすぎか？

「いつもダイエツトダイエツトって言ってるんだから少しは控えなよ」

「わかってるよ」

そう言いながらも美味しそうにケーキを頬張る上原。本当に体重気にしてる女子か？ ふと考えると日菜と紗夜はジャンクフード類が好きで食べてるのをよく見るな。なぜあの2人は体重を気にしない？ 世の中には不思議なことがあるもんだな。

気にしたら負けだと思いコーヒーを一口飲んだ。……美味しい。

「よくブラックのコーヒー飲めますね」

「美竹は苦いの苦手か？」

「ビターチョコとかなら少しだけ平気です……」

ブラック好きな人はあまり多いとは言えないな。苦すぎるってのが1番の理由か。飲んで慣れれば少しは変われると思うんだけどな。

なかなか厳しいものがあるか。

「今日は宇田川姉待ちか？」

「巴待ちなのもありますけど、スタジオが時間まで空いてなくて」「そういうことか」

バンドの練習となると場所は大切だよな。家がデカけりゃいいが、普通の家だとまず無理か。ここら辺はライブハウスなるものが近い所にあるらしいからいいみたいだが。主に紗夜と羽沢たちの情報だ。

コーヒーを飲みながら羽沢たちの雑談を聞いていると、テーブルに置いてある俺のスマホが震えた。通知欄に紗夜の名前。内容は次のライブのチケットの件らしい。

「幼なじみさんからですか？」

「まあな」

スマホを手に取り返事を返すべくロックを解除した。昔の紗夜は聞きたいことがあると敬語で聞いてきたっけな。メッセージなのに。今はストレートにタメで話してくれるからありがたい。その方が話しやすいしな。

『今週土曜日のライブの件なのだけけれど。チケットの取り置きしてもらえる？』

『もちろん。名前送つといてくれ』とだけ返してスマホを閉じてテーブルの上に置いた。今度は通知オフにして。

「旭日先輩ってパソコンめっちゃめっちゃ得意でしたよね？」

「なんだそのトゲのある言い方は」

「そう意味じゃないですよ」

本気で言ってるわけじゃないんだけどな。なぜそんなに苦笑いを浮かべる。さては……何かやましいことがあるな上原よ。

「実はポスター作ってほしくて」

「ポスターか。出来ないこともない」

「本当ですか?! じゃあ——」

喜びの声をあげようとする上原の言葉を遮るように俺は言った。

「待て待て。なんでポスターなんだ？」

「ライブにもっとお客さん来てほしいな〜って話してて、宣伝のため

に！」

なるほどな。それでポスター。まあ悪くない考えなんだけど。

「作ったものにアドバイスはいいけど、1から作るのはいが悪いが断る」

「ええ。ケチですわね」

ブーイングがすごいな。主に1人だけ。

「自分達でまずは作った方が自分達らしさが出るだろ？」

「確かに。あたし達らしさ……か」

同意してくれたのは美竹だけか。1から作るのはい難しいところがある。実際自分達で作ってきてお店に置いてくださってお願いしに来るバンドも少なくないからな。宣伝って結構大事だし。

「て、ことだから。まずは頑張り」

「もう少し考えてみます」

決して俺がやるのがめんどろとかそういう話ではないからな。あくまでも自分達でやった方が今後の役にとかも立つだろうって話だ。いずれは1から企画して単独ライブとか……な。

別の日の放課後。

今日はなにをするか。

そんなことを考えながらだらだらと帰り支度をする。バイトもない。部活はやってない。毎日羽沢珈琲店に行くのもどうかと思う。いや行ってもいいんだが、もっと他にやるべきことがあるのでは？  
と思ってしまう。

「帰らないの？」

「涼子か。放課後なにしようかなって」

「羽沢珈琲店は行かないの？」

「昨日行ったしな」

「昨日も行ったんだね……」

2日続けて行くのはリスクが生じる。モカが居ると、飛ぶように金



がなくなる。つい美味しそうにケーキを食べるもんだからついつい奢ってしまふ。上原は……餌付け？ 的な。結局は金がかかるということだ。カフェのケーキやコーヒーマーは美味いが、それだけお金がかかってしまふ。

「今度の花フェスどうするの？」

「出る出る。今練習してるよ！」

「本当?! 絶対見るから頑張ってるね！」

さて……どうしたものか。

「今年の花フェスも盛り上がりそうだね」

「そうだな。涼子も出るんだろ？」

「うん。花女の友達とね」

花高の伝統？ というのかわからんが、毎年1年生歓迎会の名目も兼ねて開かれる行事がある。まあこの話はまた今度しよう。まだまだ先の話だ。

「とりあえず。俺は帰る」

「うん。また明日ね」

「また明日」

涼子は何か用事があるのだろう。帰り支度を終えた俺はその場で別れて、学校を後にした。

この時間帯はどうも羽丘の生徒が多いな。近くに校舎があるから必然的に多くもなるか。日菜に会えばどつか適当に寄り道して帰ることになる。もちろんバイトがなければ。会う時間帯が早いと高確率で遊びにどこか行こうと言い出すからな。

歩いていると見知りかけている茶髪の長い髪と知らない白髪の長い髪が見えた。どちらも羽丘の生徒。スカートの色からして日菜と同級生。羽丘はスカートの色で学年がわかるんだ。2年は青。1年は緑。3年は茶色。

特にかかわりはないからスルーだな。この時一瞬見えた顔に見覚

えがあつたのは気のせいだろうか。あの髪色と顔どこかで……。

曲がり角を緩やかに曲がっていくと背中まで届く見慣れた水色の髪が見えた。確実に紗夜だろう。

「紗夜。今帰りか？」

少し早歩きをして隣まで行つて声をかける。

「今日は日菜と一緒にじゃないのね」

「そんな毎日一緒に居ないさ」

昔は3人でよく一緒に遊んでいたんだけどな。いつしか2人に減つた。俺と日菜。俺と紗夜という別れかたで。

「今日も練習か？」

「ええ。もうすぐライブがあるから」

「今度は上手く出来そうか？」

「……上手くやってみせるわよ」

俺の上手くやれるかは果たしてどうとらえたんだろうか。正直ギターを上手く弾けるかよりも、今度のバンド仲間とは上手くやってくれるかの方が俺は心配だ。何度紗夜だけハブはれただろう。気持ちをおわかつてくれない奴らに何度文句を言いに行こうと思つただろう。全部紗夜に止められて行けなかったが。

「今度はきつと大丈夫よ」

「……ならいい」

なぜ言えない。そんなの嘘だつてわかっているのに。バンド関係の話であまりいい話を聞いたことがないからという判断ではダメなのはわかっている。どうしても紗夜の中に一步踏み出すことをしようとしてないのは、本当に困つた様子を見せないからだろうか。

駅付近まで出るとさすがに人通りが増える。花女の生徒やら羽丘の生徒やらサラリーマンやらで人が溢れかえっている。人を避けながら歩いていると、ふと紗夜の足が止まり後ろに振り返つた。それに気づいたのは少し先まで歩いた時。

「紗夜？」

「ごめんなさい。ケース当たってしまいました？」

「あ、全然大丈夫っ！」

「そうですか。では」

どうやら紗夜の背負っているギターケースが紫色のツイーンテールの子に当たってしまったようだ。特に問題に発展することなく解決したのかすぐに追いついてきた。つてか今の宇多川妹じゃんか。

ふと後ろから聞こえてきたバンドという単語が少し気にはなったが、今は頭の片隅に追いやった。

「大丈夫か？」

「ええ。ケースが当たってしまっただけよ」

「そうか」

ふと辺りを見るとたくさんの人でごった返している。

「今日も人が多いな」

「駅の近くだもの」

2つの女子校の最寄駅だもんな。制服可愛いとかで人気の花女。進学校として有名な羽丘。どっちも偏差値高いんだよな。トップの成績の紗夜と日菜。

「ここでもいいわ」

「おう。帰り遅くなるなら連絡しろよ。最近物騒だし」

「ありがとう。でもたまに寝てるじゃない」

「グーの音も出ないこと言うな。努力はする」

紗夜と別れ、とりあえず端の方に移動してスマホを取り出した。通知欄には特に意味がないスタンプ連打の痕跡。あとで智紀はしばらくとしてだ。

「はあー」

ふと重なったため息。聞こえてきたのは右の方。

「とは言ったものの……」

今井リサ。日菜と同学年の羽丘の生徒。たまに日菜を送る時声をかけている。日菜がな。……とかさつきすれ違ったな。

「あ。ヒナの幼なじみさん」

「ひと昔前のギャルさん」

「酷い。やっぱ見た感じの人っぽい」

「どういう意味だ」

あれか。見た感じ冷たそうな人ってか？ 悪いが冷たいんじゃないやなくてこれが通常運転なんだ。昔から無表情だの、仏頂面だの言われてきたからな。ん？ 冷たいを否定出来ていない。

「ねね。この後暇？」

「暇だったとしても君には付き合わないけど？」

「うわ。先手取られたよ」

その誘い方だとすぐバレるだろ。どう考えても。

「旭日君って面白いね」

「どこがだ。用がないなら帰らせてもらう」

駅の方へと歩き始めると見事に通路を塞がれてしまう。

「あーちよつとちよつと！ コーヒーおごるから少しだけ付き合つてよ」

なん…だと。コーヒーが飲める。

「……仕方ない」

コーヒーが飲めるならここは仕方ないことにするか。決してコーヒーで釣られたわけじゃないからな。ここ重要。

（本当にコーヒーで釣れたよ。ヒナの言ってた通りだよ）

紗夜を送った後は特にやる事がなかった俺は今井リサにアクセサリーショップに連れていかれ、散々どれが似合うか聞かれた挙句やつと近くのカフェに来た。ここに来るまでにざつと1時間。よくアクセサリーショップであんなに時間潰せるな。関心だ。

「ごめんね。新しく出来たばかりだったからつい長居しちゃつて」

「本当だ。コーヒーがなかったら帰ってたところだ」

なんて冗談でしょー？ とか言っていたが割とマジで帰ろうかと思つたぞ。ああいう店には行かないから何がなんだかわからん。紗夜と一緒に初めて楽器店行った以来だな。この気持ちになるのは。あれもわけわからなかった。

「ヒナとはずっと居るの？」

「まあ……ずっとだな。幼なじみだし」

産まれた時かららしい。詳しくはよくわからん。産まれた時のことなんて覚えてる人は居ないだろ。小さい頃よく3人で遊んだものだ。

「アタシも幼なじみとずっと一緒だから同じだね」

「あんたも幼なじみが居るのか？」

「うん。すっごい頑固だけど」

頑固な幼なじみか。俺のところも似たようなものだな。紗夜はあぁ見えて退かない所がある。妥協がないというかなんというか。悪い所ではないんだ。決して。

「学校じゃ日菜はどんな感じなんだ？」

「気になる？」

「少しは」

なにやらかしてるかわからないな。俺に迷惑がかかるのはもう慣れてるからいいが、他の人に迷惑がかかっていると話が変わる。それにまた誰かにいじめられてるかもしれない。

ふと脳裏に浮かぶのはあの時日菜をぶった奴の憎しみが宿った瞳と悔しそうな表情。

「んーアタシもみかけるだけだからなく。あ、でもいろんな人と話してるのは見るかな」

「そうか。ならいい」

ひとまずは安心だな。

コーヒーを一口飲むと、カフェオレを飲んだ今井が次の質問を投げかけてきた。

「旭日君は学校でなにしてるの？」

「寝てるかぼーっとしてる」

なんの躊躇いも戸惑いもなく答える。

「ね、寝てるんだ」

「あれは催眠術の一種だろ？」

「うんとは言えないけど、アタシもたまーに違うこと考えちゃうなく」  
苦笑いを浮かべながら話す今井の話はかなり共感出来る。あんなのずっと毎日一日中聞かされてられる方が無理なんだ。そんな奴が居る

なら俺からすると超人だ。俺よりも存在価値がある。

「やばっ。そろそろ帰らないと」

時間を確認するなり急ぎの様子で言った今井。アクセサリーシヨップが足を引っ張ったな。

「送るか？」

「大丈夫。旭日君は意外と優しいんだね」

「意外とは余計だ」

まだ残っているコーヒを飲みほし、このお茶代も俺が出そうとしたが見事に今井に断られた。バイトしてるから大丈夫と結構強引に押されてしまったな。まあしつこくしすぎてもだし仕方ないか。

別れ際に見せた笑顔と「またお茶しよ」の言葉がどうにも頭から離れなかったのはここだけの話だ。なんか負けた気がする。

それに……前にも同じようなことがあった気がする。初めてお茶をしたはずなのに。ただのデジャブか。



午後の授業はどうしても眠気に襲われてしまう。船を漕いでいる生徒。なんとか眠気に勝とうと腕をつねったりする生徒。中には突っ伏してしまっている生徒も。窓からのそよ風が心地いいのもあるのだろう。

するとターコイズ色の長い髪の少女は黒板からふと外に視線を向ける。

あの時なら真面目に授業を受けているのかと心配していたが、今はそんな心配をすることはない。そんなバカバカしい心配の方がいくらかマシだと思うのは何故だろうか。

その時——強い風が教室に吹き込んだ。

きつちり書かれたノートのパージを何枚もめくった。前髪を押さ

えながら少女は目を瞑る。

『心配するな……必ず帰ってくるから』

彼の言葉が聞こえた気がした。

直後、いつもカバンにしまっているはずのスマホが机の中で光った。幸いにもマナーモードになっていたらしい。

画面には母親からのメッセージが映し出されている。

メッセージを見た瞬間——涙が溢れて止まらなかった。

ノートにぽたぽたと落ちる涙は止まることを知らない。顔を手で覆い、嗚咽をなんとか堪える。

「——のバカ……」

これは彼が残した当たり前な日常の話。

## 第8話 Glitter\*Green

### 第8話 Glitter\*Green

放課後。突然だが今日はグリグリのライブ当日。ライブが始まるのはもう少し後の時間だ。かと言って学校で時間を潰すのもなかなか。

教室には俺を含めて残っている生徒はあまり多くはない。

「あれー？ 夕君じゃん」

「ん？ なんだ、葵刃あおばか」

今声をかけてきたのは月島葵刃つきしまあおば。ここら辺じゃ有名な月島道場の跡取り候補。剣道、柔道、空手だの武術系を一通り出来る。智紀とはまた違った運動神経の持ち主。智紀は球技って言ったところだ。

ちなみに昨日会った青葉モカとごっちゃんになるからどちらも名前呼びしてる。

「部活はどうした？」

「サボりー。毎日毎日めんどいもん」

お前など言いたい所だが、その考えにはちよつと同感。というより本人は道場継ぐ気はないらしいからやらないとのこと。本当にコイツは自由だ。俺以上に。

「道場にも行かないのか？」

「今日は花女に出張中。ボクはそのうち帰るよ」

「そりゃあ家だからな」

葵刃のお母さん。つまり月島道場でいろいろ教えている人はたまに花女の剣道部やら弓道部やらに教えに行ってるみたいだ。花女のOBみたいだからな。ちなみに俺の母親も花女のOBだ。

「ん？ ……あちゃー」

「どうした？」

「ちよつと面倒なことになりそうだからボクは帰るね」

「急だな。気をつけて帰れよ」

俺がそう言うのと葵刃はわかっているよとだけ言い残して、ペランダの方へと走っていく。窓を飛び越えてそのまま下へと飛び降りてしま



う。

さつき言った気をつけてって言葉返せ。毎度のことながら世の中には恐ろしい身体能力を持ったやつが居るもんだ。そしてバカと天才は紙一重。

残ってる人達も驚いてベランダの下を覗きに行ってしまった。

「帰るか」

リュックを背負って教室を出ると右側から鬼の形相で誰かさんを探し回ってる剣道部が走ってきた。まあ普通全国レベルの奴が居たらああなるわな。

月島葵刃。本当に風みたいな奴だ。

高校を後にした俺は着替える為に一旦家に帰ることにした。

帰り道を一人で歩く中、花女に差し掛かった。なんだかんだ知り合いが多い高校だ。確か女優？ が通っているらしい。詳しい話はよくわからないが。芸能人が通うとなるといろいろ大変だろうな。

女優ではないんだけど羽丘の演劇部には女子から人気の生徒が居る。演劇部には何度か用事があった、その時話たがよくわからない人だった。なんか憊いって言ってたな。

今思えばいろいろ巻き込まれていないか？

「はあー……」

思わずため息が出てしまった。そんな俺のことを呼ぶ声が聞こえてきたような気がした。

「ゆーくーんー！」

その呼び方をするのは一人しかいないんだ。そして人が居るからそんな大声で遠くから呼ぶのは控えてほしい。何度も言ってるんだけどな。

「大声で呼ぶなって何度も言ってるだろ？」

「はーい。ごめんなさい」

わかればよろしいと言いたいけど次もやるだろう。でも毎回少しずつ

つよくなつてはきてるんだ。もつと前は大声で何回も呼ばれたからな。

「ゆうくんこの後暇?」

「いや、用事がある」

「そつかく。ライブ一緒に行きたかつたんだけどな」

ライブ? 日菜にしては珍しいな。今までライブの誘いはなかったぞ。……ライブか。

「ちなみになんのライブだ?」

「えつとね、Glitter\*Greenってバンドのライブ!」

世の中こんな偶然もあるもんだな。今から同じバンドのライブに行こうとしてるんだからな。まあちょうどいい。たまにはこういう日もあつて。

「奇遇だな。俺もグリグリのライブに行くんだ」

「ホント?!じゃあ一緒に行こうよー! ゆうくん!」

「わかつたわかつた」

ぐいぐい近寄ってくる日菜を引き離して答える。今日はいつも以上に来るな。俺とライブ行けるのがそんなに嬉しいのか? たまに喜ぶ基準がわからない時がある。

「ライブにはよく行くの?」

「知り合いのバンドが出る時はな。それに今日行くところ元バイト先だから挨拶しないと」

「そつかく。ゆうくん、ライブハウスでバイトしてたもんね。今もだけど」

音楽関係のことを学べるのはライブハウスだからな。SPACEではオーナーにきつちり働かされたよ。それに母さんと知り合いらしくてたまに昔のことを聞いていたし。めちやくちや厳しい母さんだったけど、昔はかなりやんちゃしてたらしい。

「日菜はどうなんだ?」

「あたしは初めて行くよ。最近流行ってるって聞いたから行ってみたいなくって思つて」

「なるほどな。ガールズバンド時代かも」

ライブハウスでバイトしてるのもあるけど、本当にガールズバンドがここ近年増えている。そしてSPACEはガールズバンドの聖地と呼ばれていて、ライブのオーデイションが厳しくて有名だ。

それに緊張するといつも通りのパフオーマンスをしにくい。オーナーの威圧感がそうさせるんだろう。あの人雰囲気怖いから。

「どんなライブになるのかな」

「グリグリは毎回盛り上がるから、きつと楽しいと思う」

「うん！ ゆーくんも一緒だし、るんってしそう！」

このたまに聞く「るん」ってのがいまち俺にはわかっていない。楽しかったり、嬉しかったりするとよく言ってるイメージがあるんだけどな。

楽しそうに俺の少し前を歩く日菜。こうしてみると紗夜と正反対って感じた。双子ってそんなもんなのか？ この2人しか見たことないからわからんが。

「ゆーくん、家の前で待っててね？」

「ん？ ああ、先に行ったりしないからゆつくりでいいぞ」

「はーい！」

気づけばもう家の前に着いていた。日菜とは会話が尽きないからか、帰り道があつという間に感じる。

元気に返事をするとかへと帰っていく。俺も着替えて準備をするために自宅へと帰っていった。

## ライブハウスSPACE

着替えてSPACE来たのはいいものの。すでにライブハウスの前には行列が出来ていた。本当にすごいんだよここ。ほとんど女の人だけだ。

日菜と一緒に行列の最後尾に並び、順番が来るまで待つ。今日出演の中に知らないバンドも多いが、オーナーが合格を出したバンドだ。いいライブをしてくれるだろう。

「日菜、中に入ったたらちよつと挨拶してくるから先に行つてくれ」  
「うん。わかった」

俺が辞めてから新しく入ったバイトは居るんだろうか。入つてもすぐ辞める人とか居たからな。ライブハウスのバイトは音楽が好きじゃないとなかなか辛いところもある。音楽が好きだから1年近くも続いた。

そんなSPACEにはかなりお世話になったけど、それでも俺はこのバイトを辞めた。理由はいろいろあるが、1番は1年学んだことをちゃんと活かせるか試したかったから。後はそうだな……。

行列がどんどん進んでいき、ライブハウスの中に入った。受付まで進むと、知り合いのスタッフが声をかけてきた。

「いらつしやい、夕君」

「1ヶ月ぶりですね」

「そうね。元気そうでよかった。隣のは彼女？」

にやにやししながら聞いてくるけど違う。ちよつと嫌な予感するんだが。

「幼なじみですよ」

「えええ」

「えええじゃない。話をややこしくするな。高校生1枚と取置きのお願ひします」

「そつかく。残念」

残念つてなんですかと言いつつ、ドリンクチケットが付いたチケットをお金を払って受け取った。

「オーナーは控室の方に居ると思うよ」

「ありがとうございます」

軽く会釈してから受付から離れる。

「日菜、飲み物はそこでもらえるからな。俺はちよつと行つてくる」

「はーい。先中に入ってるね」

「おう」

ドリンクカウンターには寄らずに俺は1人控室の方へと向かった。そういえばドリンクカウンターの所に居た子、見ない顔だったな。新

しく雇ったバイトだろうか。

控室のドアを3回ノックすると、誰かが開けてくれた。

「おや。久しぶりだね、元気してたかい？」

ドアを開けてくれたのはオーナーだった。いつもの厳しい雰囲気とは違って、少し優しい感じ。なんか…：…な。

「元気ですよ。オーナーもお元気そうで」

「年寄り扱いするんじゃないよ」

俺からしたら十分…：…この先はやめておこう。命が危ない気がする。

楽屋の中に入ると、今日出演バンドの人やスタッフさんがライブの準備をしてがやがやしていた。この時間は忙しいんだよな。

「ゆりに誘われたのかい？」

「そうです。久しぶりに来ないかって」

「最近全然顔出さないからね」

12月に母さんが亡くなって、1ヶ月はバイト行かなかったからな。行かなかつたと言うより、気持ちの整理が着いたら来なつてオーナーに言われたんだ。結局いろいろあつて2月いっぱい辞めてしまった。

「先月からC i R C L E っでライブハウスでバイトしていて。なかなか来られなくてすいません」

「いいんだよ。学んだこと活かせてるなら」

「それはもちろん。オーナーに仕込まれますから」

ライブハウスのオーナーは厳しいけど知識や技術は本物だ。それにちやんとした信念がある。オーディションでは毎回決まったことを聞く。

『やりきったかい？』

本人が本気で演奏していて、今が最高のパフォーマンスだと思えるなら即答出来る。仮に即答できなくても目や態度を見れば一目瞭然だ。

「そういえばオー…：…」

ふと寒気が。

「夕ちゃんだー!!」

俺の言葉を言葉を遮りながらあの先輩が現れてしまった。

「げっ、ひなこ先輩……」

「元氣してたかーい?!」

そう言いながらぐいぐい近寄ってくるのはグリグリのドラム担当、二十騎にじっきひなこ先輩。花女に通う高校3年生。誰が言ったかグリグリのヤベー奴。まさにそうなんだよな。それにテンション高いし。

「近い近い。先輩近いんですよいつも」

「そんなことないよ」

そんなことしかないんですよ。こうなると大抵止めてくれるのが。

「ここら。離れなさい」

「ええー」

俺からひなこ先輩を引き離してくれたのは、同じくグリグリのメンバ―でギター担当、鵜沢うざわリイ先輩。花女に通う高校3年生。良識ある先輩でいつも助けてくれる。マジありがたい。

「ごめんなさいね。いつも」

「いえいえ。もう慣れました」

謝ってくれたのはグリグリのキーボード担当、鰐部わにべ七菜なな先輩。2人と同じ学校、学年。花女の現生徒会長なんだけど、グリグリのキーボードをやっているのは知らない人がほとんど。理由は眼鏡を外すと別人みたいになるから。見た目の方だな。

「元氣そうでよかった。今日は来てくれてありがとう」

「いえいえ。ライブ楽しみにしてますよ、ゆり先輩」

「任せて。最高のライブにするから」

今日呼んでくれたのがこの人。グリグリのボーカル、ベース担当の牛込うしごめゆり先輩。3人と同じ高校、学年。とても頼りになる先輩の1人だ。

グリグリと出会ったのはバイトを始めてすぐの時。オーナーのオーディションに毎回通るし、演奏の実力もすごい。グリグリが目当てでくる人が大勢いるのがまたすごい所だ。

「旭日先輩、こんにちは」

「こんにちは。りみも元気そうだな」

今挨拶してくれたのがゆり先輩の妹、牛込りみ。花女の1年生。黒髪ショートボブの子で、パンが好き。俺と同じやまぶきベーカリーの常連客。よくチョココロネを買っているのを見る。大人しくていい子だ。

「そういえば高等部が上がったんだよな」

「はい。まだ慣れてはいないんですけど…」

確か花女も羽丘も外部生が入ってくるんだよな。羽丘は進学校だから外部から入るのは結構厳しいだろうな。まあ花女も負けなくらい偏差値高いが。

「そのうち慣れるさ。……俺はそろそろ戻りますね。応援してますよ」

挨拶を済ませた俺は控室を後にした。

ライブ会場に行くと、すでにお客さんがたくさん入っていた。たぶん日菜は最前列に居るだろう。後から来たのに流石に前の方には行けないから、一応そのことだけをメッセージで日菜に伝えた。

ただ後ろすぎるのも見づらい。ちょうど右端が空いてるし、そこに行くか。

俺はまだ知らない。この日を境に別の運命の歯車が回りはじめたことを。

ライブが始まるとあつという間に時間が過ぎていく。Glitter\*Greenの出番は最初。その盛り上がりは後半まで続くの

かと心配なくらいだ。もちろん他のバンドも引けを取らないほど盛り上がった。ライブは大盛況で終わったが、まだ熱が冷めないのかその場に残って話して居る人がほとんどだ。

「ゆーくん！ ゆーくん！ ライブ、すっごいるんっ♪ って来た！」

「そ、そうか。それならよかった」

日菜もたまーにぐいぐい近寄ってくることもある。本当に近いんだよなー。ライブで距離感バグったか？

「そろそろ帰るぞ。帰りながら話そう」「うん！」

今日の日菜はいつも以上にテンションが高い。それもライブのせいだから仕方ないか。それだけあのライブは素晴らしかった。オーナーはライブはその場で楽しむものっていつて映像には残さないけど、残しても俺は全然いいと思う。場合よっては販売すれば……………。

「ゆーくん悪い顔してるよ？」

「してない。なんだ？ 悪い顔って」

「バイト始めてからたまーに出る顔？」

「なんだそりゃ」

危ない危ない。儲けられるとか考えてたらそんな顔になっているのか。今度から気をつけないとな。

そういえばライブ会場でお客さんが赤いギターを持った不思議な子が居たって話をしたのを聞いた。それにバンドがどうとかって。凛々子さんとオーナーもなんか話してたな。確か、ギター持ったあの子不思議な子でしたねって。まずギター持ったってどういうことだ？ じかにもってライブ観にくる奴が居たんだろうか。正直どうでもいいんだけどな。なぜか引つかかる。

「今度はどうしたの？ 難しい顔してるよ？」

「いや……………なんでもない。たまにはSPACEに顔出さないとダメなと思ってただけだ」

「そっかー。ゆーくん色々な人から話しかけられてたもんね」

「ありがたいことにな」



S P A C Eのみんなは辞めた俺にも普通に接してくれた。バイトしてた頃は気づかなかったこともたくさんある。今でもあそこでバイトしていたら俺は何か変わっていただろうか。いや………変わら  
ず学校とバイトの日々を送っていただろうか。

## 第9話 後輩とパン屋の娘とツンデレ

第9話 後輩とパン屋の娘とツンデレ

Glitter\*Greenのライブから数日。

放課後。花高から自転車（今日は紗夜に起こされてから二度寝してしまつた為）を漕いで向かったのは商店街。この時間になると主婦の人や小学生、高校生が多く見られる。特に部活をやっていない高校生だな。俺もだが……。

1つ目のよく行く店は羽沢珈琲店。2つ目はパンが美味しいあの店。

やまぶきベーカリー。商店街に通う人で知らない人が居ないんじゃないかって程人気なパン屋。店長には娘さんが居る。ここ最近では店番していることが多い。前はあまり見なかったんだが……あるきっかけだろう。親の手伝いはいいことだ。

自転車を外に留めて鍵を2つかける。お店のドアを開けて入るとベルの音が鳴り響く。

「いらつしやいませ、旭日先輩」

「おつかれ、山吹。今日も店番か？」

やまぶきベーカリーの看板娘と言ってもいいだろう。名前は山吹沙綾<sup>やまぶきさあや</sup>。セミロングの髪をいつもポニーテールにしている。紗夜と同じ高校に通う1年生だ。

「はい。もうすっかり常連ですね」

「まあな。否定はしない」

この店も結構通つててな。いつの間にか山吹とも仲が良くなつた。年は1つ下なのにすごくしつかりしている。紗夜から厳しさを抜いて代わりに優しさを入れたみたいだ。……怒られそうだからやめとくか。

「部活とかやってないんですね？」

「めんどくさいからな。勧誘はされたが断った」

トレイとトングを取つて今日買っていくパンを眺める。バイトで得たお金は基本好きなものに消えてゆく。その一部がやまぶきベー

カリーのパンなわけだ。

「今日のおすすめは？」

「全部です」

迷いない笑顔で答えられた。けどそういうことじゃない。

「よし全部買っていいこう。とはならん」

「えー？ 旭日先輩なら出来ると思いますよ〜」

「その自信はどっから来るんだ？」

なんて山吹といつもの冗談を話していると、お店のドアが開いた。ベルの音とともに訪れたのは。

「あー！ やっぱり夕先輩だ！ それにさーやも！」

これまた少し厄介なのが来たな。とは思いつつ嫌なわけではないので普通に対応する。

「久しぶりだな香澄。元気にしてたか？」

「はい！ 夕先輩も元気そうですね」

元氣そうに見えるか？ 俺は普段からはしゃいだりしないタイプだぞ。

この元氣なのは戸山香澄<sup>とやまかすみ</sup>。中学の時に少し訳あって仲良くなった後輩だ。猫耳みたいな髪型をしているが、本人は星形と言っている。

それにしても頭が良いってわけじゃないのによく花女に入れたもんだ。裏口入学とかじゃないよな？ 俺は心配だ……。

「香澄のこと知ってるんですか？」

「ああ。中学の後輩。まさか山吹と仲良かったなんてな」

「入学式で捕まっただんですよ」

苦笑いに近い笑顔を浮かべながら言う山吹。

「なるほどな。それは災難だ」

「え〜酷い〜」

今度はクスクス笑う山吹。外から見ると親と子供。いや、姉と妹っ  
て感じがするな。まあ実際山吹には弟と妹が居るんだ。あまり会っ  
たことはない。

「夕先輩このあと暇ですか？」

「急にどうした？」

「久しぶりに会ったから少し話したいな〜って」  
「そういうことか」

俺も1年コイツが何してたのか気になる。人様に迷惑かけてないかとか、勉強はどうしたとか。やる気だけはあるけど、いざやるとなかなか集中力がなかったからな。香澄は。

「なんか食いたいのあったら買っていいぞ」  
「やった〜」

自分が買う分をトレイに乗せてからトングをセットで香澄に渡した。ついでに財布から買える分のお金を渡す。

「山吹。また来る」

「毎度ありがとうございます」

「外で待ってるぞ」

「はい」

支払いが香澄に任せて俺は一足先にやまぶきベーカリーを後にした。

山吹とはここ最近の付き合いだが、割と仲が良い気がする。そんなことはないと言われればそうなんだが。冗談を言い合えるくらいがちょうどいい。

自転車の鍵を2つとも外し、香澄が来るのを待った。数分もしないうちにあるドアの開く音が聞こえてくる。

「お待ちせしました！・それとお釣りです」

いや早いな。どんな会計したんだよ。

お釣りを受け取り財布に入れる。話すとは言ったものの場所が決まっらないな。

「じゃあ適当に場所見つけて話すか」

「ん〜。それなら良いところがありますよ」

「そんな所があるのか。なら場所は香澄に任せる」

早速、こっちですと言って歩き始める香澄。その後ろを自転車を押して着いていく。こうして香澄の後ろ姿を見ながら自転車を押すのは1年ぶりか。月日が経つのは早い。

「相変わらず楽しそうだな」

「はい！ 新しい場所で友達出来て、部活の体験してもう最高ですよ」

「お前らしい。だが授業は変わらず寝てるんだろ？」

「そ、そんなことないですよ。夕先輩も同じじゃないんですか？」

「否定はしない」

あんなもん催眠療法か何かだろ？ 話を聞いてるだけでどんどん眠くなってくるのはおかしい。中でも眠くなるような声をしている人が居るとほぼ100%の確率で寝るな。

「そうだ！ 最近私、バンドやりたいな〜って思ったんですよ！」

バンド？ 最近の女子高生はみんなバンドを始めたがる季節なのか？

「急だな。誰かに誘われたりしたか？」

「この前ありさとライブ見に行ったんですけど、その時キラキラドキドキして」

待て待て。誰だありさって。新しい友達の名前言われたってわからんぞ俺は。……新しい友達が出来るのは良いことだ。

「それで始めようとしてるのか？」

「はい。そのうちライブやるので、夕先輩も呼びますね！」

「ああ。楽しみにしてる」

ここ最近バンド始める奴が多い気がするな。日菜には内緒にしてるみたいだが、紗夜もバンドを組んでいる。あまり長続きはしていないみたいだが。羽沢と上原も幼なじみとバンド組んでるみたいだな。これはガールズバンド時代到来だったりするか？

なんて考えているといつの間にか香澄との距離が空いていた。少し足早に歩いていくと少し細い道へと入って行く。時折香澄が見ている星のシール？ ようなものが目に入る。出会った時から星が好きみたいだから目に入るのも仕方ないか。

だが道が入り組み過ぎだ。

「香澄。どこに行くんだ？」

少し不安が出たので香澄に聞いてみる。

「さっき言ってたありさの家です」

「急に押しかけて大丈夫なのか？ しかも知らん奴まで居て」

「大丈夫ですよ！ ありさなんだかんた優しいので！」

本当か？ いくらなんでも知らない奴まで歓迎してくれるのは少し怪しいぞ。そもそもどこで出会って、なに繋がりで仲良くなったんだ？ 謎が多過ぎて着いて行くしか選択肢がないのが辛すぎる。

しばらく道を曲がったり進んだりすると立派な門らしきものと木の塀に囲まれたデカイ家が視界に入ってきた。こんな所にこんなデカイ家があったとは知らなかったぞ。

「ここがありさの家です」

「デカイな。それに遠い」

「夕先輩ならすぐじゃないですか」

「否定しづらいな」

自転車を漕ぐのは割と早い方だと勝手に思ってるだけだから気にしないでくれ。早ければ早いほど喜ぶのは日菜。怒るのは紗夜。これ重要だ。

すると香澄は門の小さなドアをノックもせず開けると中に入ってしまった。普通勝手に入っているものなのか。つうかインターホン付いてるしな。

仕方なく俺も自転車に鍵をかけて勝手に入った。この場合は仕方ない許してくれ紗夜。

「あーりーさー！ 遊びに来たよー！」

これでもかと言うくらい大きな声。元気があってよろしいが、近所迷惑的に考えると全然よろしくない。元気なのは香澄の取り柄だから許してやってほしい。

しばらくすると2階の窓が開いた。そして。

「うっせー！ 大声で人の名前呼ぶなー！」

ド正論。グーの音も出ない。しかしそれはブーメランだぞ金髪ツインテールの香澄の友達。なんなら君の方が声デカイ。

「ありさ〜。先輩連れてきた〜」

「ちよっ?! ……戸山さん。先輩を連れてくるなら早めに言ってくれるかしら?」

急に声のボリュウム下がって言葉遣い変わったぞ。それに全然聞こえないんだが？

「だって、夕先輩」

「ああ。とりあえずめんどくせえのはわかった」

これはまた骨が折れそうな奴が出てきたもんだ。

あの後、近くの蔵の移動して自己紹介からスタートした。中には沢山の段ボールやら荷物がある。片付けをしているんだろうか。

金髪ツインテールの子は市ヶ谷有咲<sup>いちがやありさ</sup>。香澄と同じ花咲川の生徒。性格はツンデレそのものだな。だが俺が一番驚いたのは自主休講をしていることだ。

「君が自主休講してる子なんだな」

「私のこと知ってるんですか？」

「まあな。幼なじみが同じ高校で、前に話を少し聞いたことを記憶の隅から引つ張りだしてきた」

つまりほとんど覚えていなかったと言うことだ。だが少し違うのは記憶に埃が被っていただけであって、忘れていたわけではない。聞いたのは4月の頭なだけだな。記憶力が無さすぎる。

「入学式に代表者が休んで、初日からたるんでるって」「うっ……」

「あんまり気負うなよ。少ししつかりし過ぎてる奴なんだ」

買ってきたメロンパンを袋から取り出して一口食べた。結構厳しめな口調で話すようだが、目上に対して敬語だ。実は口悪いパターンはさつき見たしな。

「旭日先輩はコイ……戸山さんとどういう関係なんですか？」

「いや、猫かぶらなくていいぞ？ 中学の時から先輩後輩。結構大変だ」

「そ、そうですか。なんかそれ、すげーわかります」

変わり方がすごいな。そしてなんの話？ と言わんばかりに首を傾げる当の本人だが、一緒に居ると大変だって言ってるんだよ。元気

が良すぎるのも時には……な？

「本当に旭日先輩が普通な人でよかったです」

「ずいぶん香澄に悩まされてるようだな。だがこのくらいでへばってたら、もたないぞ？」

「えー?! マジですか?」

「マジだ。マジ」

言われてる本人もいつの間にか俺の買ってあげたパンを食べている。揃って紗夜にお叱りを受けるやつだな。行儀悪いわよって。

香澄もなんだかんだ、俺を真似てしまった部分ある。あとは智紀の悪い部分か。なぜ涼子のいい部分を真似なかったんだらうなコイツは。

「悪い奴ではないんだ。ただ少し勘違いを招いたりする」

「勘違い…ですか?」

「ああ。少し昔話をしよう。香澄には内緒だぞ」

俺はそう市ヶ谷に告げてパンの入っている袋を鞆にしまった。

「香澄。自転車敷地内に停めさせてくれるみたいだから市ヶ谷さんと移動しに行ってくる」

「はーい」

香澄に告げて俺と市ヶ谷さんは蔵を後にした。蔵の外に移動し、あの程度離れたところで一旦立ち止まる。

「さてと。どこから話すか」

あれは中学2年生の2月の寒い季節だった。世間ではバレンタインデーという言葉が飛び交う。学校でもその話題でもちきりだったな。

「なあなあ、お前何個貰った?」

「3つくらいかなー」

「はい、これ友チョコ」

「ありがとう」



あっちこっちでチョコの話か。別に食ってないのに口の中が甘く感じる。毎年毎年飽きないのな。

俺は対して行事ごとに興味はない。周りで行事ごとに興味があるのは日菜くらいか。この前は氷川家と一緒にスキーに連れてかれ。夏は海、花火。数えたらきりがない。

学校が楽しいなんて思ったことは一度もない。特にやりたい勉強もないしな。ここに来るくらいなら家で寝ているか、バイクいじってる方がいくらかましだ。

わいわい騒いでいる教室は居心地が悪い。

時は過ぎて放課後。授業がすべて終わりみんな部活へと行くんだが、今日はどこの部活もないようだ。今日は寒いからとつと帰るか。どうせ日菜は家に速攻帰ってこたつにでも入ってるんだろうな。そして寝て紗夜に怒られる。いつものパターンだ。

今日は早めに帰ろうとさっさと準備をして教室を後にした。スリーブで温まった教室を出ると、廊下はひととき寒い。吐く息も白くなる。階段を下りて、昇降口で靴に履き替える。駐輪場に行くと今の時間帯に帰ろうとしている生徒は少ないようだ。

自分の自転車を引っ張り出して一足先に家の方へと漕ぎ始めた。途中まで帰ったところで大事なものを学校に忘れてきたことを思い出した俺は再び引き返し、あの子と出会った。少し息を切らしながら登る階段は妙に辛く、教室がある廊下は長く感じた。教室のドアの前まで辿り着くと、中から何やら声が聞こえてきたが強めにドアを開け放つ。

そこには男子生徒に両肩を捕まれた猫耳みたいな髪型をしている同じ中学の女子生徒の姿があった。

「取り込み中悪かったな。すぐ済む」

そう言っ教室に入る。無神経にも程がある？ それはど正論だが早く帰りたいんでな。

「待ってって！ 普通見なかったことにしてドア閉めるだろ！」

「そんな時間俺にはない。すぐ終わるんだ。そのあと楽しいめ」

告白してる途中なんだか、いけないことをしてるのかは俺にはどうでもいい。日菜から朝もらったチョコを忘れてくるのは本人に悪いからな。ちゃんと食わないと。

「んだよアイツ……」

舌打ちの後に聞こえてきた声に特に反応することなく自分の机の中からラップピングされた箱を取り出した。すぐに見つかり後は帰るだけ。なのになぜだろう。俺はそのまま後ろに振り返った。

「嫌なら断れ。嫌なもん引きずって過ごしても何にもいいことなんか  
ない」

「お前何言って——」

「どうなんだ？」

別に助けるメリットはない。なのになぜだろう。少しでも俺に良心があったのかもな。

「なんとなくで人助けしたんですか？」

「まあそうなる。もの好きなんだ。たぶん」

自転車を敷地内に移動して鍵をかけた。

「もう俺は側に居てやれない。強いように見えて香澄は弱い所もあるんだ。だから市ヶ谷さん。香澄のこと頼むな」

きつと市ヶ谷さんなら。いい友達になつてくれると思った。苦勞する部分もたくさん……というより、苦勞する部分が大半だろう。でも、一緒に居ると楽しいのは保証出来る。

「何かあったら言ってくれ。連絡先は香澄から適当に聞いてくれれば  
いいから。それから、学校も悪くないもんだぞ？ 意外と」

「そう……ですか。何かあれば相談します」

めんどくさがりだけど、根は真面目そうない子みたいだな。市ヶ谷さんは。

また1人。知り合いが増えた。  
そしてなぜか蔵の片付けを手伝わされた。

## 第10話 神は才能を2つはくれない

第10話 神は才能を2つはくれない

ある日の放課後。帰り道である人物に捕まった。その子は唐突に現れ、眩しい程の笑顔を浮かべてこう言ったのだ。

「夕！ 久しぶりね！」

名前は弦巻つるまきこころ。黄色い長い髪に斜めに切り揃えられた前髪が特徴。性格は天真爛漫。を通り越して毎日テンションがやたら高いものすごい元気な子だ。一緒に居ると香澄より疲れる……。ちなみに相手が年上だろうが関係なく呼び捨てで呼ぶ。

「久しぶりだな。楽しいこと探しは捗ってるか？」

「もちろん！ 夕も一緒にどうかしら」

「そう…だな」

たまには会いに行くとするか。あの人に。

1人歩いていくこころの背中を追いかける。

「鋼太こうたさんは元気か？」

「最近見てないわ」

ということ。また研究室に籠っているんだろうな。今度はいったい何を発明しようとしているんだか……。出会った時はエンジンエンジンを小型化して空を飛ばうとしてたな。発明バカと言っても差し支えないだろう。

「夕様お久しぶりですね」

「急に後ろに気配なく現れないでくれますか？」

弦巻家は早乙女家と並ぶ財閥。そうともなれば執事やボディガードガードくらい普通に居る。なんだったら家にメイドも居るな。

そして俺の背後に音、気配なく現れたのはこころの執事―片瀬雅仁かたせまさひとさん。ちなみにこの人は居たり居なかったり。基本いつも付きまといっているのは黒服と呼ばれる女の人。

「今日、明日はバイトがないようなのでこころ様を差し向けてみました」

「サラッと人のスケジュール把握しないでください」

同じように気配なく現れたのはさっきの黒服のリーダー——片瀬真希那さんかたせまきな。雅仁さんの妹さんだ。この2人は揃ってこころを溺愛している。親より親バカしてるんじゃないかって思うほどに。

「お元氣そうでなによりです」

「まあ……以前よりかはって感じですよ」

「真希那さんも相変わらず無理難題を処理ですか？」

「いえ。こころ様のおっしゃることは無理難題などでは。全て容易いことです」

その日に海外行きたいなんて無理難題を解決出来るほど世の中都合よく出来てない気がするんだが……。

そんな都合の良い世界を鋼太さんが受け入れるはずもないか。全て思い通りにいくのなら、それほどつまらない人生はないなんて言う人だからな。

「雅仁さんはなんで居るんですか？」

「今日は用事がないので付きまっています」

「それはそれでどうかと思いますけど……」

「今日だけで写真50程撮りました」

「お兄さま！ 仕事中に……私は70枚ほどです」

注意するのかもしれないと思ったら写真の話始めたんだが？ しかも50枚とかどんだけ撮るんだよ。毎日見れるんだからそんなに撮らなくても……な？

「今日は寄り道して帰りましょう！」

「寄り道もいいけど、今日は鋼太さんに会いたいから、まっすぐ帰らないか？」

「そうね……兄さんの顔も見てみたいわね」

こころの寄り道はだんだん寄り道のレベルじゃなくなるからな。こうして軌道修正してやらないとめんどごとことになる。

ちなみに後ろに居た2人は一瞬でどこかに去った。隠れて見守るのが仕事らしいからな。見守る……ね。さつき散々写真の話してたような。

何回か帰り道から脱線しかけたが、なんとか弦巻家にたどり着いた。大豪邸という言葉がこれほどまでに似合う家はそうないだろう。勝手に開く門をくぐって敷地内に入る。ここらから玄関までが長い。もういつそのことゴルフ場とか走るやつ用意した方がいいのでは？　と思う。まあ車も入れるからその方が早いかな。

なんて考えながらふと空を見上げて立ち止まった。そこには鳥と呼ぶには大きくて、飛行機というには小さすぎるものが浮いていた。俺の目が腐っていなければおそらく”人が”飛んでいるのだろう。

いつから人は飛ぶことが出来たのだろうか。空から落ちることは出来ても飛ぶことは……な。

「久しぶりだなー！」

いや全く聞こえないんだが……。おそらくあれが今日会いにきた人物だろうな。いつか空を飛ぶ発明をするとは言っていたが、本当に完成させるとは、思いもしなかった。

降りてくるまでに紹介しておこう。あの人は弦巻鋼太さん。こちらの兄で発明家。妹ゆずりの好奇心と探究心で、毎日何かを作っては壊しを繰り返している。

鋼太さんとは母さんが亡くなった後に出会った。自分を見失った俺にたくさんのことを見せて、教えてくれたいわば恩人。たくさん鋼太さんの言葉は覚えているが、特に印象に残っているのは。

『神は才能を2つはくれない。俺は1つのことを突き詰めても飽きない才能しか持ち合わせてない』

俺には。なんの才能があるのだろうか。

「よつと……待たせて悪いな」

背中にエンジンのようなものを背負った鋼太さんがようやく降りてきた。

「元氣そうだなにより」

「鋼太さんも相変わらずですね。とうとう飛べるものを作って」

「いやーそれがまだまだでさ。これ以上小型化すると出力安定しない

し、課題だらけだよ」

それ以上小型化してどうするんですか……。浮いているように見せたいとかそんなところだろうか。そうだったらもはや革命だよな。

「積もる話もあるだろうし。中に入るか」

「そうですね」

「……雰囲気変わったな、夕」

そう笑顔を浮かべて言う鋼太さん。

少なくとも変わったのは。

「鋼太さんのおかげですよ」

「俺はただいろんなもん見せてやっただけさ」

それが今の俺を作ったんですよ。どうしようもなく、やる気のない旭日夕という人間を。少しばかり考えるようにしてくれたのは。

鋼太さんと過ごした日のことはその時が来たら話そう。

鋼太さんと話をした次の日。

今日も1日頑張った。6時間中、3時間も起きていたな。数学、現代国語、体育、美術、HR、化学。ん？ 体育はノーカン？ そんなの知るか。起きていたら起きていたに入るんだ。

昨日に引き続き今日もバイトはない。どこかに行こうとも思ったが、あいにく雨が降りそうだったからな。しばらく学校で智樹に捕まり、アップに付き合わされていた。帰宅部にやらせることじゃない。

そうしたら雨が降ってききましたというな。幸いぐーたらで怠惰な性格がここぞとばかりに発揮した。なんと教室のベランダにある、傘置き場に旭日と書いてある傘があるではないか。

紗夜に怒られそうな展開だが、今回ばかりは助かった。きっと許してくれるだろう。根拠はない。

忘れ物というのもたまには役に立つものだ。

商店街を抜けて歩いていると前から見知った人物が2人。平行に走ってくるのが見えた。傘を差さずに、なにやら荷物を抱えているようだ。

「夕先輩?!」

「いったいどういう状況だ?」

2人の後を小走りで追いかける。ついでに傘を差してあげた。

「ギターケース落としちゃって……それで」

「楽器店に運んでるんです」

「なるほどな。江戸川楽器店まであともう少しだ。頑張れ」

ここまで傘を差さずによくきたもんだ。よっぽど焦っていたんだろうな。ケース落をとしてしまつて。おそらくよっぽどケースがポンコツじゃない限り、ギター本体は大丈夫だろうが。見てみないとわからないか。

走ること数分。江戸川楽器店にたどり着いた俺たちは、早速中に入った。ここは知り合いが2人バイトをしている。その1人が居るようだ。ぬいぐるみで遊んでいる店員さんが。

「いらっしやー」

「こんにちは。リイ先輩」

「旭日君?」

グリグリのリイ先輩。いつもひな先輩から俺を守ってくれるとて、もとても優しい先輩だ。

「はあ……はあ。落としちゃつて……修理お願い出来ますか?」

香澄がそう言うのと俺達の前に来てリイ先輩は言った。両手を腰に当てて堂々と。

「任せてー!」

頼りになりそうな予感。



「店長―」

そうでもなかった。まあそうだよな……なんとなくわかってたさ。

テーブルに向き合うように座る2人。俺は香澄の後ろに立って、タオルで髪やら服を拭いている。

修理する間になんと優しいリイ先輩は俺、香澄、市ヶ谷さんにタオルを貸してくれた。2人と比べれば、さほど濡れていないありがたい。

なんだか2人の間には重い空気が流れているようだ。

「ごめん……」

すると香澄が謝った。だいぶ落ち込んでる様子で。ということはギターケースを落としたのは香澄ってことか。

「大丈夫でしょ」

そう市ヶ谷さんが言うのと1人泣き始める。なぜそこまで責任を感じているんだろうか。持ち主が怒っている様子はないし。というかさっきからずっとスマホいじってばかりだな。

「泣くな香澄。まだ治らないって決まったわけじゃないだろう？」

頭を撫でると、「はい……」と言って涙を拭う。ここまで弱っている様子の香澄を見るのは初めてかもしれない。いつもはワイワイしてる奴だからな。

「そんな高い位置から落としたのか？」

「いえ。そこまで高くはなかったです」

「……弦が切れちゃった……」

「なら、ヘッドが折れてなきや大丈夫だ」

「そうなんですか?!」

勢いよく今度は立ち上がって後ろに振り返った。忙しい奴だ。泣いたり驚いたり。ギターが戻ってきたら次は喜ぶんだろう。まあ忙しい奴だが、この裏表がない感じが香澄のいいところだな。

するとギターの修理が終わり、リイ先輩と店長さんが戻ってきた。

「おまたせー」

「はっ……！」

修理に出した赤いギター。確か名前はランダムスターだったか……？？ それは綺麗に直っていた。

「完璧」

すると香澄は立ち上がり泣きながらヨタヨタとギターに近づいていった。我が子が帰ってきたのかのよう。

「良かった〜！ 良かった〜！ ごめんね！ ごめんね〜！」

なぜここまでそのギターに執着しているのかわからない。ランダムスターがよっぽど好きなんだろうという答えにしか辿りつかないんだが？

実際そうなのだろう。持ち主ではないのに。

「ネググ反つてたから直しておいたよー。ケースはもうダメ」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

ネググも反つてたんだな。まあケースの具合からしてもうダメなのは明白だった。取手が取れていたのを見ると、だいぶ傷んでいたのか。

「いくらですか？」

「基本調整、学割で3000円」

指を3本立ててそう言うリイ先輩。そしてこういう場合誰が払うのが正解なんだろうか。

「私払うよー」

「金は大丈夫なのか？」

「大丈夫です！」

結局香澄が全額支払った。なかったら俺が立て替えておこうと思っただが、この場合はキッチンと払えたようだ。

いきなり来たのにしっかり対応してくれたし、やはりこのお店はいいな。紗夜も道具を買いに来ているところだし。

江戸川楽器店をあとにした俺達は夕焼け空の下を市ヶ谷家に向

かつて歩いてきた。外はすでに雨がやんでいて、そこら辺に水たまりが出来ていた。夕日が反射してなかなか綺麗な光景が視界に映る。

ランダムスターは香澄が大事に両手で持ち運び、俺は壊れたギターケースを市ヶ谷の代わりに持っている。

「良かった〜」

本当に嬉しそうだな。香澄は。

それにしてもランダムスターって結構レアなやつじゃなかったか？ バイト先の雑誌を適当に読んでいた時に見た気がする。何10万って価格で取引されるはず。これはさっきの楽器店でバイトをしている同級生の話がソースだ。

なんて考えているとふと市ヶ谷さんが口を開いた。

「……持って帰れば？」

「え？」

「出品取り下げたから」

出品って……もともと売るつもりだったのか？ それをわかっていても払ったんだな、香澄は。壊した責任。ではないんだろうな。

「なんで？」

「大事にする？」

「する！」

香澄の言葉に返事ではなく、逆に聞き返す市ヶ谷さんだが。香澄は笑顔で答えた。きつと大事にしてくれるだろう。そう思ったのか。

「よし。540円」

「え？」

「オクの取り下げ手数料。30万はおまけしといてやる」

「うん！」

……30万？ 高校生の口からとんでもない数字が聞こえてきたんだが？ 実際聞くととんでもないな。ランダムスター。

そして香澄は元気良く答えたものの……。

「あと300円しかない……」

さっき3000円のが響いてるんだろう。お小遣い制の家では大変厳しい値段だからな。3000円って。

「やっぱ売る！」

「ダメ〜！」

売るとは言ったものの、笑顔を浮かべているあたり本気ではないだろう。……なんだろうな。2人を昔の紗夜と日菜に重ねてしまう。

そんな2人の様子を見てみると、後ろに振り返った香澄と目が合う。

「夕先輩なんだか嬉しそう」

「香澄もちゃんと友達作れるんだなって思ってたな」

「母親が我が子を見るような目、してますよ？ 先輩」

「実際そうなのかもな」

俺はそう言うのと財布をカバンから取り出した。小銭を漁りちやうど540円を見つけ、市ヶ谷さんに差し出す。

「取り下げ料」

「いえ、そんな！ 先輩からはもらえせん」

「なら香澄の代わりに立て替える。今度返してもらえば構わないし」

それでも頑なに受け取ろうとしない。お、これはもしかすると、デレという部分を見られる瞬間なのか？ そんなことを考えていると。

「ご…540円くらい…どうってことないんで、大丈夫です」

「そうか？ ならいいんだが」

なんか無理矢理黙らせたみたいで悪いな。別にそういった意図があったわけじゃないんだが。君は…優しいんだな。

「じゃあ今度何かお土産持つてくる」

「わーい！」

「香澄には初心者でも出来るギターの教科者な」

「えー?! 食べ物じゃないんですかー?!」

なんですぐ食べ物に行き着くんだけいつは……。餌付けし過ぎたか？ 今思えば智紀と涼子の3人で出かけた時は俺たちがお金出していたからな。昼飯とかおやつとか。

というか教科書の方が絶対いいだろ。教える人誰も居ないんだから。

しばらく歩き市ヶ谷さん家の蔵に着いた。中に入ると市ヶ谷さんのおばあちゃんが片付いた中の様子を見ていた。以前来た時に帰る前に挨拶だけしたから一応顔見知りだ。

それにしても……前と比べるとかなりスッキリした様子。2人で頑張ったんだな。結構な量あつたらうに。

「ばあちゃん……」

「綺麗になったね。約束通りここは有咲の部屋にして」

市ヶ谷さんのおばあちゃんは「はい」と言って鍵を渡した。次は入り口から見て、右の床が一部だけ色が違う所に移動してフタを持ち上げる。

「え？」

上におばあちゃんを残して、下に降りると地下室の割には綺麗な部屋が広がっていた。右側にテーブルがあつて、緑色のソファもある。以前も使っていたのだろうか。

「ええっと」

階段を降りてすぐのところにある機材の前に市ヶ谷さんはしゃがみこんだ。これはスピーカーだな。しかも年代ものっぽそう。後で写真撮らせてもらえるか交渉するか。

すると今度はシールドを香澄に「刺して」と言って渡す。それをラダムスターのボディの下の方に刺しこんだ。

市ヶ谷さんが頷くとボタンを押してOFFからONに切り替えた。香澄は少し緊張した様子でゆっくり弦に触れて弾く。

いつも聞くギターの音が部屋に響いた。そんな事よりもちゃんと音がなったことにビツクリしているんだろうか。

「凄……。凄……。凄……。凄……」

「はいはい」

「凄……。凄……。凄……」

まるで話を聞く気もなく同じ感想をひたすら話す。こういう時の香澄はなかなか話を聞いてくれないが、とても楽しそうで、嬉しそう

だ。

「香澄！」

名前を呼ばれると一旦話すのを止め、市ヶ谷さんの方を見た。俺は構わず機材を眺める。おそらく市ヶ谷さんの顔は赤くなっていることだろう。

「こ、ここで練習すれば？」

「え？」

「ただし！……、ご飯……」

「え？」

「い、嫌ならいいけど！」

すると香澄は嬉しそうに市ヶ谷さんに飛びついた。ホント、人によく抱きつくよな。中学生の頃からなら変わりない姿に呆れ半分、安心半分ってところか。香澄はどこに居ても香澄のようだ。

「市ヶ谷さん。これからもどうしようもないくらいにバカ一直線の奴をよろしくな」

「夕先輩ひどい！」

「褒めてるんだよ」

その誰に対しても変わらず接するところは戸山香澄という人間を表していると言ってもいい。どこまでも真っ直ぐで。迷いが無い。

だからこそ。あまり楽しくなかった中学が楽しく思えることが出来たんだろう。

そんなことを考えながら2人を眺める。俺の視線は香澄の持つ赤いギターに向いていた。帰ったらメンテナンスしないとな。

「そうだ！ 夕先輩ってギター弾けますか？」

「……弾けない」

「そうですかー。残念」

平気な顔をして嘘を吐いた。酷いことだとはわかっていても。取り繕う気にもならない。

本当はたまに……弾いているのに。それを言えない理由が俺を縛りつける。

## バンドストーリー編

### 第11話 歌姫との出会いは唐突

第11話 歌姫との出会いは唐突

旭日家 自室

声が聞こえる。誰かの声が。

「夕……」

誰だ？

「いい加減起きないさい！」

誰なんだ？ 俺を呼んでいる……のか？

「学校遅刻するわよ?! 昨日、遅刻したんだから起きなさい！」

この声は……紗夜？

ゆっくりと目を開けた。まだ視界がボヤけているが、はっきりとわかることがある。あの髪の色。声。容赦なく人の布団を引き剥がしてくるのは。

「紗……夜。もう朝——」

そこまで言ったところで飛び起きた。

「なんだ……何にも」

「急にどうしたのよ。具合でも悪いの？」

怒られるかと思ったが、あまりの奇行に心配されてしまった。具合は悪くない。むしろ調子がいいくらいだ。

「妙にリアルな夢を見たような……見てないような」

「本当に大丈夫なの？ ……前にも刺される夢を見たとか言っていたけれど」

「そんなこともあったな。……まあ大丈夫だ」

ストレスなのか。寝不足なのか。理由はよくわからんが、大丈夫だろう。こうして生きているわけだし。……刺される夢とかはあんまりよくなってネットに書いてあった……。

「私は先に行くわね」

「気をつけてな。それと、ライブ頑張れよ」

部屋を出て行く紗夜を見送り、俺は再びベッドに倒れ込んだ。

今日は紗夜が出るライブの日だ。開始時間は夕方だが、学校が終わったらすぐC i R C L Eに行かないと。準備やらなんやらで俺たちスタッフは働かなければいけない。

前日遅くまで残っていたから、帰るのが遅かったのもあって今日は寝不足気味だ。いつも通りに起こしてもらったが、また変なことを言ってしまった。

起きた時間的には全然学校に間に合うが、すぐには動きたくない。と言っても現実には動かないといけないから無理なようだ。

「今日も頑張るか……」

ふと机の上のパソコンに目を向ける。ネットサーフィンの途中で寝落ちパターンだったんだろう。電源が付いたままだ。

パソコンの電源を落としてリビングへと向かった。

リビングに行くとき珍しく父さんがコップを片手にノートパソコンをいじっていた。

「おはよう、夕。さつき紗夜ちゃんに会ったよ」

「おはよう。いつも助かってる」

それにしても今日は珍しいな。

「夜勤明けじゃないのか？」

「明日休みだし、たまには夕の顔も見えておかないと思ってる」

父さんの仕事はサーバーエンジニア。24時間体制で監視したり……まあ結構大変な仕事だっことを知ってもらえればいい。でもそういった仕事をする人が居ないと、ネット関係のものは使い物にならない。

「コーヒー飲むかい？」

「評価が変わるといいな」

「言ってくれるね」

とは言ったものの父さんの作るコーヒーは本当に美味しくない。



味が安定していない。甘過ぎたり、苦過ぎたり。さて、今日はいったいどんな味になるのか。

スマホをポケットから取り出して、誰かから連絡が来ていないか確認した。さすが遅くまで寝ているだけはある。通知がごっそり溜まってる。まず1つは紗夜。もう1つは日菜。なぜ日菜？　そして智紀。あとはほっといいいやつだな。

「よーし。出来たぞ、夕」

意気込んで持ってきたコーヒーをテーブルに置く父さん。しかし、なぜかコーヒーの色ではなく白く濁っている。

「何入れた？」

「牛乳」

「もはやコーヒーじゃなくてカフェオレだ」

やっぱり俺の父さんは少しズレてる。

だとしたら……めんどくさがりなところはいったいどっちから来てるんだ？　父さんはああ見えて結構マメなんだよな。じゃあ母さんか？　ああ見えてしつかりしてたんだよな。

「今日はバイトかい？」

「バイトだよ。ライブの日」

「ライブか。大変だね」

大変と言えば大変なんだが。今日はバイトリージャーもスタッフさんもたくさん居るし大丈夫だろう。

それに今日はある人の歌を聞きたいのもあるんだ。あまり歌に興味を示さないから、割と珍しいことでもある。

「夕が居ないと回らないか？」

「割と居なくても問題は無いけど、毎回駆り出される」

「居ないとダメなんじゃないか」

果たしてそうなのだろうか。おそらくめんどろな人たちの面倒を見る人がいないからなんだろうけど。そう言えば、ここ最近の後輩の面倒を見ることが増えたな。

「夕。何事も経験だ」

父さんの言葉はどこか重くて心に響いた。

いつも通りの時間に家を出た。ふと駐輪場に止めてあるバイクに視線がいく。

高校入ってすぐに免許をとらせてもらったんだ。母さんがたまにバイク乗っててカッコいいと思ったのがきっかけで興味を持った。ちなみに今乗ってるのは母さんのバイク。高校の校則で登校する時に乗るのはダメだが。

もうすぐ1年経つから2人乗りが出来る。人を乗せて走る勇気もないし、基本は乗せることはないだろう。

いつまでも見えていても校則が変わるわけじゃない。学校へと足を向けた。

しばらく歩き花女付近にたどり着いた。今更ながらせめて自転車で来ればよかったと思う。だがな……最近運動不足気味でな。体力が落ちた気がする。

「おはよう、夕君」

「涼子か。おはよう。今日は遅いんだな？」

「昨日遅くまで残ってたからね」

流石に涼子も無理があるか。機材トラブルさえなければすぐに帰ることが出来ただけだな。厄介なものだよ。全く。

「夕せんぱーい！ 涼子せんぱーい！」

「ねえ、なんかギターの声聞こえない？」

「それに香澄の声も」

香澄の声はまだわかる。だが何でギターの音まで聞こえてくるんだ？ ……まさか、な。そんなわけないよな？ だって登校中だぞ？

俺はしばらく会わないうちに奴の恐ろしさを忘れていた。

「おっはようございまーす！」

「おはよう……香澄ちゃん。それと、久しぶりだね」

「はい！ 元気そうでしたです！」

朝からギターを弾きながら登校とは。市ヶ谷さんも大変なことで。心中お察ししますという言葉をここで使うことになるとは。香澄の後ろから走ってくる市ヶ谷さんに視線を向けながらそんなことを思う。本当に大変そうだな。

「香澄！ やめろって言ってんだろ!？」

「おはよう、市ヶ谷さん。朝から大変だな」

「お、おはようございます……先輩。と」

そうか。涼子のことはまだ知らないんだよな。

「俺の腐れ縁の1人」

「瀬名涼子です。香澄ちゃんがお世話になってます」

「あ、はい……市ヶ谷有咲です。お世話してます」

言葉の通りだな、全く。そしてたちが悪いのは香澄自身気にしていないということ。そんな状態紗夜に見られたらあとが怖いぞ？ というか、生徒会に取り締まれるだろう。

「まあなんだ。……頑張れ」

「私たちの思いは託したよ」

「丸投げはキツイです……先輩」

こうして朝からとんでもない光景を目にした俺と涼子は香澄たちと別れて学校へと向かった。そして「あり得ないからー！」と花女の校門付近から声が聞こえてきたのを聞いた俺はそつと思う。

だろうな。と。

「ライブ頑張らないとね」

「機材トラブルがなければいいな」

ライブか。今度紗夜にファーストフード店でポテトでも奢るか。ここ最近ライブの練習で頑張ってたし。人間ご褒美がないとしんどい。何かあるたびにご褒美だと思ってコーヒー飲みに行ってる奴が言っても信用性はないか。

時は過ぎて、あつという間に放課後。決してぼーっとして過ごしたわけじゃない。

学校から数十分ほどで着いたのは俺のバイト先でもあるライブハウスCIRCLE。ついでに言うのと昨日も今井と来た。このコーヒーはなかなか美味いぞ。

今日はライブがあるからかいつもより人が多い。特に女子。学生が大半だろうか。ガールズバンドは学生の間で流行ってるらしいしな。俺の通う学校でも話題になっている。

周りを少し見渡すと、ある1人の人物が視界に入った。背中の辺りまで届く白髪。キリツとした目。黄色い瞳。間違いない。

湊友希那。

紗夜の演奏を聴きに行く以外で唯一ライブを見た人物。スタジオオの予約にもよく来るお客さんの1人だからよく覚えている。

そんな時、ふとあることが気になった俺は真意を確かめるために声をかけた。

「湊友希那…:さん?」

「あなたは…:こここのスタッフの人。それにリサが話してた」

「今井を知って…:前に一緒に居た人ですか?」

「敬語はいらわないわ」

とりあえず繋がりはあつたというかこの前出来たばかりだったな。世の中狭いもんだ。

周りから見ればかなり目立っていることだろう。湊友希那のライブを何度か観に行ったことがあるが、どんでもない歓声で鼓膜が破れるかと思った。紗夜の時も結構な歓声上がるけどその比じゃない。別に紗夜が負けてるとかそういう意味じゃないからな。

「いつもソロだな。あんた」

「いいメンバーが見つからないだけ」

「つてことはいいい人が居たらスカウトするのか？」

「そうね。フェスの為に必要だから」

フェス？ それよりも湊友希那はまだ氷川紗夜というギタリストを知らないのか？ なら今すぐ知るべきだと俺は思う。もしかしたら紗夜なら。

「メンバー探してるなら、氷川紗夜って名前。覚えておいた方が今後の為になる」

「氷川…紗夜？」

「ああ」

少しばかり考えた後に振り返った。そして。

「覚えておくわ」

そう言つて湊友希那はライブハウスの方へと足を運んで行つた。……なぜだろう。ずっと前にもこんな話をしたような気がする。湊友希那と話すのはこれが初めてなのに。

休みの日。用事ついでに外に出たわけだが、なぜだか遠回りをして帰りたくなってしまった。気づけば見慣れない場所に來ていた。いつもとはかなり違う帰り道をマウンテンバイクで颯爽と走る。角があれば右へ左へ当てもなく曲がり、進んだ先には大きな川が流れる土手が現れた。

ランニングをする人。犬の散歩をする人。買い物帰りの主婦。部活終わりの学生。よく見る光景が広がる中進んでいくと、白髪の長い髪の学生が川を眺めながら歌っていた。俺はその歌に惹かれて自転車を止めて聞き入った。

知らない人が歌っているのにここまで心惹かれたのは初めてかもしれない。しかも同年代くらいか。見た目だけだからなんとも言えないが。背は紗夜と日菜と同じくらい。

スマホが震えたので取り出してみる。……別に噂をしたわけじゃ

ないんだがな。

「どうした？ 日菜」

通話ボタンを押して電話に出るととても元気な声が聞こえてくる。

「ゆーくん！ 早く帰ってきてよー！」

「うるさいなー……。なんでだよ」

「お姉ちゃんと3人でテレビ見るって約束じゃん！」

そう言えばそんな約束もしてたな、ははは。完全に忘れていた。

「わかったから。大人しく待ってろ」

「早く帰ってきてよね！」

「ああ」

通話を終了してスマホをポケットにしまい。家の方へと走り出した。せつかくいい歌を聴いていたのに。まあ、この世に奇跡という言葉があつてまた出会えるのなら今度は話しかけてみよう。

なんて考えて帰って、意外にも紗夜に説教を食らってしまったのは意外すぎた。

「気のせいかな」

俺はなにかを思い出しかけたが、こんなことをしている場合ではないことを思い出した。興味ないものの暗記は好きではなくてな。強く印象に残らなければなおさら。今、誰かから強めのツツコミが入った気がする……………。

考えごとを一旦やめ、とりあえず中に入る。ロビーの前を通ると、受付をしている涼子を手伝に来たあるバイト仲間に遭遇した。

「あら、旭日さん。お手伝い変わってくださるんですか？」

「んなわけないだろ、しつかり働け早乙女<sup>すおとめ</sup>」

隙あらばサボろうとするんだからな。それが本心なのか冗談なのかはよくわからない。ライブの日は結構真面目なんだが。

「ケチなのですね旭日さんは」

「これが普通なんだよ。俺は別に仕事あるし」

「リーダーが居るからってしつかりしなくても」

おい待て。その言い方だとリーダーが居ない時はサボってるみたいな言い方だろ。実際間違ってる部分もあるが、基本働いてるからな。あ…当たり前か。

「天堂さん、旭日さんのこと探してましたわよ？」

「それはもつと早く言ってくれ」

ロビーを後にして、更衣室に向かった。

外には四十崎さん、萩野、普通のスタッフさん。中には涼子、早乙女、海藤さん。あと天堂さんか。ライブの日でもスタジオの貸し出しとかはしてるから、余計に人手がかかってしまう。

着替えて事務所に行くと、バイトリーダーの天堂奈菜さんに遭遇した。

「旭日遅かったな」

「すいません。考えごととしてて」

ふつと笑ってから「問題ない」と言う天堂さん。この人はバイト仲間の中でもっとも頼れる人だ。たまに厳しいけど、それはこちらを思ってることだしな。

「今日は人が多いからな。音楽ライターもたくさんだよ」

「湊友希那目当てでしょうね」

天堂さんと会話をしながら無線機を腰に引っ掛けて、片耳にイヤホンをする。ちゃんと制服を着れているか鏡で最終チェックをした。今日ばかりはちゃんとしなさいといけないからな。

「出演者のチェック1回してるからもう1回頼む。終わったらまりなさんに報告も忘れずにな」

「了解。様子見て萩野中に入れちゃいますね」

「話が早くて助かるよ」

天堂さんと別れてからまずはチェックリストを持って出演者の居

る控室を回った。

開演30分前だからさすがに遅れている人は居ないだろう。でも割と居たりするんだよな。少し困る。電車とかで来てるひとは遅延とかも影響してしまうから、仕方ないと言えば仕方ないのだが。前のバイト先、SPACEでは遅れるのは許されない。最悪出禁だ。

ここはそこまで厳しくはないから大丈夫なはず。あまりいい目では見られないだろうけど。

出演者の確認をしているということは自ずと紗夜の顔も見ることになる。控室に入って全員居るか確認した際には1人静かに座っていた。メンバーは紗夜を含めて3人。残りの2人は会話をしていた。今回もあまり仲は良くないらしい。

2回目の出演者のチェックを済ませてまりなさんに報告。その後、様子を見て萩野に受付を手伝うように指示を飛ばして、ステージの準備を手伝った。

そしてあつという間に開演時間となった。紗夜の出番は思ったよりも早い。さつきも言ったが、あまり仲は良くないから今回キリかもな。このバンドも。

紗夜のレベルは確かに高い。でも周りとの意識の差が亀裂を生んでしまう。そうして何度も組んでは解散を繰り返して、仲間に対する気持ち荒んでいった。

もちろん辛い思いを紗夜にしてほしくない。何度も手を差し伸べようとした。だが俺に助けられるのを嫌う。

だからいつも表立って手助けはしない。ライブ近くになったら日菜を家から連れ出したり。どれだけ忙しくてもライブだけは見に行つて、少しでもためになればと気づいたことを言う。

いつになったら。紗夜の努力は……報われるんだろうか。



ライブが始まり、周りが騒がしくなる中。俺は舞台袖で遠くを眺めるように演奏者たちを見た。みんな楽しそうに演奏している。いつか紗夜にもこんな日がくればいいな……。

ライブというものは時間が経つのが早い。あつという間に紗夜の出番。ちゃんと覚えていてくれるなら湊友希那もここに来ているはず。

ドアの方を眺めていると静かに入ってくる人物が1人。少し離れた場所からでもわかる。あの威圧感のある姿は。

これで湊友希那が認めれば紗夜はバンドに誘われるのだろうか。悪くはないどころか、いい話に俺はなると思う。

なんて考えていると紗夜のバンドが出ないと行けない時間になった。

「ではお願いします」

ステージに上がり、MCを少し挟んでから演奏が始まった。相変わらず1人だけずば抜けて上手い。それ故にバランスが悪くなっている。

「珍しいね。いつも虚な目で眺めている君が」

「そんな虚な目ですか？」

普段はしっかり見ているわけじゃないからか、天堂さんが声をかけってきた。

「頭ひとつ抜けているね。君のお気に入り」

「幼なじみなんですよ」

「なるほど」とだけ言うと同じように演奏に見入る。するとぼそつと声が聞こえてきた。

「どれだけの練習をしているんだろうね。彼女は」

「たくさん……ですわね」

この場はそう言うしかない。紗夜の練習量は俺では測りきれないからな。むしろ聞きたいくらいさ。

演奏が終盤に入り終わりが見えてきた。毎日聴いていたからだろ

うか。最後の最後で紗夜にミスが出た。多分周りが気づかない程度の。

曲が終わり挨拶を始める。

「ありがとうございました」

演奏が終わり周りから黄色い歓声が一斉に上がると同時にステージ裏に戻ってくる紗夜の表情が一瞬曇った。あれは完全にあのことを悔やんでるな。

ふと湊友希那に視線を向けると、見知らぬ人が3人話しかけていた。当の彼女は特に返事を返すわけでもなく1人、出口に向かっていった。ガン無視とはなかなかだな湊友希那。

何か気に障ったことがあったのかは遠すぎてわからない。

天堂さんも居るから大丈夫だろうと、一旦会場を後にして控室に向かった。

「このバンドはもう先がないわね」

すると同じことを考えていたのか、湊友希那が居た。直後聞こえてきた冷たく突き放すような紗夜の一言。だが俺の中に戸惑いや驚きはない。遅くない未来。こうなっていただろうと思っただからだ。

するともう我慢の限界だったのだろう。紗夜のバンドメンバーが大きな声を上げて彼女に訴えた。

「もう無理！ あなたとはやっていけない!!」

それを聞いた湊友希那は多少驚いた表情を浮かべていた。いきなりドアの向こうで喧嘩をしていれば当然の反応か。

「私は事実を言っているだけよ。今の練習では先はないの。バンド全体の意識を変えないと……」

声を荒げられても特に揺らぐことはなかった。冷静に淡々と今思っていることを3人のメンバーに伝えている。辛辣な物言いだ。

「ずっと聞いているのか？」

「興味があるのよ。あの子に」

湊友希那が人の喧嘩を聞くのが趣味にはとても思えないが、止めないのを見ると趣味なのかもな。……そんなことはないか。悪趣味にも程があるもんな。って人のこと言えないか、俺も。

「いくらパフォーマン스로誤魔化しても、基礎のレベルを上げなければ、後から出てきたバンドに追い抜かれるわ」

紗夜の言ってることは正しい。基礎のレベルがなければ最高のパフォーマンスは出来ない。どのバンドも基礎の練習はみんな欠かさずやっているだろう。その絶対の土台があったから応用が効くパフォーマンスに発展する。

「でも……いくらそうでも！ あなたが入ってから、私たちまだ高校生なのにみんな課題と練習で寝る時間もないのよ……！」

メンバーの言うこともまた正しい。いくら高校生だからと言っても、本文は勉強。どこまでもバンドにかけられるわけではないか。趣味に時間をかけてる俺が言えたことじゃないが……。

「……ねえ紗夜。あなたの理想はわかる。でもあなたには、バンドの技術以外に大切なものはないの？」

バンドのリーダー的な人が 悩むような質問を投げかけるも紗夜は一瞬にして答えてしまう。まるでその質問を待っていたかのように。

「ないわ。そうでなければわざわざ時間と労力をかけて集まって、バンドなんかやらない」

紗夜の冷たい言葉に一番怒りを露わにしているメンバーが再び声を上げた。

「っ……！ 酷いよ！ 私たちは確かに、いつかプロを……って目指して集まったけど。でも仲間なんだよ!」

「仲間？ 馴れ合いがしたいだけなら、楽器もスタジオもライブハウスも要らない。高校生らしく、カラオケかファミレスにでも集まって騒いでいれば十分でしょう?」

酷い言葉だ。同じバンド仲間だと言ってくれたメンバーの気持ちも考えないで放った一言だったが、俺の中に怒りは存在しない。だが……その考えをぶつける相手は違うと思う。

「似てるか？ あんとと」

「ええ。すごく似てるわ。考え方が」

「そうだよな。あんとも馴れ合いとか要らないみたいな顔してたよ。会った時から。」

「……最低！ もういい！ こんなバンド解散よ！」

「落ち着きなって、私たちがバラバラになる必要はない。この中で考え方が違うのは1人だけ。……紗夜？ そうだよな」

「落ち着いた声音で言う紗夜のバンドメンバー。今日の前で1つのバンドが解散の危機に晒されているが、この流れは誰も止められない。」

「……そうね。私が抜けるから、あなたたちは続けて。その方がお互いの為になると思う。今までありがとう」

「その言葉に本当に感謝の念が込められているのだろうか。いいや、恐らく皮肉が大半だろうな。ここ最近の紗夜はかなりピリピリしてたし。俺には特段強い当たりはなかった。小さい当たりすらも。」

「逆にそれが……不安だった。何も言ってくれないことが。」

## 第12話 成すべきと思つたことを

第12話 成すべきと思つたことを

少しすると控室のドアが開いて紗夜が出てきた。

「……っ！ ……ごめんささい。人が居たのに気づきませんでした」

「さっき、あなたがステージで演奏しているのを見たわ」

喧嘩のことなどどうでもいいと言わんばかりに次の話に進めた。多少というかかなり強引だな。そして紗夜は俺に視線を合わせようとしな。もはや居ない扱いだ。たぶん気まずいんだろう。

「……そうですか。ラストの曲、アウトロで油断して、コードチェンジが遅れてしまいました。拙いものを見せてしまって、申し訳ありません」

やっぱりミスってたのか。ほんの一瞬間に出てたのを俺は見逃していない。一般の人ならわかる人はほぼいないだろうな。あそこで気付いた人は何人居たのか……。

「確かに…ほんの一瞬、遅れていた。でも、ほとんど気にならない程度だったわ。……あなたは気づいたのかしら？」

「なんとなくは」

怪しいと言いたげな表情を浮かべながら、「そう」とだけ返してきた。

「……紗夜って言ったわね。あなたに提案があるの。……私とバンドを組んでほしい」

「え？」

これはうれしい誤算と云つていい。一度セッションなりもう1度演奏を聴いてからとなつてもおかしくはない状況。それがバンドを組んでほしいという話にまで飛躍したのだから。

「私とあなたで……バンド？ すみませんが、あなたの實力もわかりませんし、今はお答え出来ません」

当然の反応だろう。さっきの事も考えると實力のわからない人と簡単にバンドを組むという考えはもうないだろう。夢のためには少しでも實力がないと辛い。

「私はこのライブハウスは初めてなんですが、あなたは常連の方なんですか？」

「そうね。私は湊友希那。今はソロでボーカルをしてる」

自己紹介を淡々と済ませてから本題の話を始めた。

”FUTURE WORLD FES.” に出る為のメンバーを探しているの。あなた位なら、聞いたことない？」

するとFUTURE WORLD FES. という単語に紗夜が驚きの表情に変わる。音楽の最高峰と呼ばれる大会ともなるとこの際知らない人の方が少ないだろう。特にバンド活動をガチでやっているなら。

「私もFUTURE WORLD FES. には以前から出たいと……でも、フェスに出るためのコンテストですらプロでも落選が当たり前のこのジャンルでは原点と言われるイベントですよ？」

「そうね。この前の結果でもプロが普通に落とされていたわ」

「私はいくつもバンドを組んできました。けれど、アマチュアでもコンテストには出られるとはいえ、実力が足りず、諦めてきた……」

なかなか認識や目指すべき先が合うメンバーに出会えていなかったからな。長続きしない理由はまさに”FUTURE WORLD FES.” に出場というわけだ。

「ですから、それなりに実力と覚悟のある方でなければ……」

ここまです言われても湊友希那が折れることはなかった。変わらぬ表情で淡々と答えを紗夜に返す。これも自信の表れか。

「あなたと私が組めばいいける。私の出番は次の次。聴いてもらえればわかるわ」

「待ってください」

いくつもバンドを解散してきたからだろう。そう簡単には頷かない。たぶんこれ以上時間を無駄にはしてられない……と思っっている。解散しては組んでを繰り返している紗夜には。

「たとえば実力があっても、あなたが音楽に対してどこまで本気なのかは、一度聴いたくらいではわかりません」

「それは、才能があっても、あぐらをかいて努力しない人間のように見

えるということ?」

表情1つ変えなかつた湊友希那が少し真剣な表情を浮かべて言葉を紗夜に返す。徐々に嫌悪な雰囲気になりつつこの場。湊友希那がなぜフェスに出たいのかはわからないが、実力という点では申し分ない。少し口を挟ませてもらおう。

「まあ待て、紗夜。彼女は本気でフェスに出ようと歌っている。だからまずは聴いてみたらどうだ? その後でも考えるのは十分間に合うと思う」

「……わかつたわ。とりあえず聴くだけ聴きます」

よし。きつとこの話は紗夜の分岐点になるはずなんだ。フェスに出られるか出られないかの。なら俺は成すべきと思つたことをするだけだ。

先にステージの方へと行ってしまった湊友希那を追いかけることなく、俺と紗夜の2人だけになった。さっきの言い合いの事もあるのだろう。静寂がこの場を支配している。

「なにも……言わないのね」

「紗夜の気持ちはわかつているつもりだ。まだ焦る必要はないと思う」

「そう……」

戻ろうかと1歩踏み出した直後。紗夜が口を開いた。

「夕はあの人と知り合いなの?」

「知り合いというか友達の友達つてやつだ」

「そう。その割には仲が良いのね」

「別に良くはない。今日初めて話した」

あれを会話と捉えていいのかは不安になる。

「紗夜。湊の歌は本物だ」

「どうしてそこまで押すのかしら？」

「……現にライブの時は大抵聴いてるしな」

「夕が？ 珍しいこともあるのね」

本当に。自分が一番思ってる。対して興味がないものには目もくれないが、また聴きたいと思った歌。それが湊が歌っている歌だ。

なぜかはわからないが少し懐かしきもある。まるで昔聴いたことがあるような。どうしても思い出せないが。

ふと気になったことを紗夜に伝えた。

「まだ諦めてなかったんだな。フェスのこと」

「……当たり前よ。私の夢なの。日菜と比べられない為にも、必ず出場してみせる」

その言葉を最後に紗夜との会話を終えた。

少しだけ紗夜と話してから舞台袖へと向かった。急に居なくなったことに対して少しだけお小言を天堂さんからもらってしまったが。

☆

あなたは優しすぎる。

何度思ったことだろう。冷静さを欠いていたとは言え、思ったことをストレートに伝えすぎてしまった。それなのに……彼は見捨てない。

「私に……その優しさはもつたいない」

その言葉が彼。旭日夕に届くことはない。

本当にいつか返せるのだろうか。今まで受けた恩を。

☆

舞台袖に戻ると相変わらずお客さんの熱気がすごい。しかも次の次は湊友希那の定番だからな。なおさらすごいか。それにしても前の方詰めすぎだろ。

別に芸能人じゃないんだから近くで見れるぞ。話すとなんだこイツって思いたくることが多々あるが。

そんな中ふとさっきの紗夜との会話を思い出した。



比べられない為にも……か。紗夜は昔からよく日菜と比べられて育ってきた。勉強。普段の生活からなまでに。すっかりした姉となんでも出来る天才。そこにやる気のない俺が居れば当然俺が浮くわけだからよく見られがちだ。

だが俺が居なければどうだ？　いくら努力しても追いつけない秀才と見ただけで出来る天才。当然褒められるのは日菜。昔から比べられてきたからなのだろう。その反動が今来ている。

2人の道が完全に別れてしまったかのように今は一緒に居る所は見ない。

「準備に手間取って悪いな」

少し機材トラブルで押ししてしまっている。そんな中特に変わった様子もなく湊友希那は俺の後ろで目を瞑って立っている。

「機材トラブルは仕方ないことよ」

「そうか」

舞台袖から再び観客席を見ると、なんか騒がしそうなツイントールの子を見つけた。

あの制服羽丘の奴か。昔羽沢たちが着てたな。……あれは、よく見たら宇多川妹だな。

ふと隣の紗夜に視線を向けるとずいぶんご立腹なんだろう。今にも注意してやろうかという表情を浮かべている。

そういう所には厳しいからな。紗夜は……。

「旭日、もう出していいぞ」

「つてことだ。よろしく頼む」

「ええ」

湊友希那が会場に現れると、一気に湧き上がると同時に耳を塞ぎたくなるような大きな声が響く。そして湊友希那の歌声が会場を包み込む。

この歌を聴く為だけにバイトやら部活やらを休んでくる学生とかが大勢いるんだろうな。世に言う休日というやつだし。

いつ聴いても不思議だ。ただの歌のはずなのに。言葉ひとつひとつでイメージが出来る。一体どれだけの時間、歌うことに費やしてきた

たのだろうか。

とてつもない時間なんだろう。

俺になんか想像も出来ないくらいなの。

ライブが終わり、控室に俺を含めた3人が居る。今度はちゃんと抜けることを伝えたから大丈夫だろう。

「どうだった？ 私の歌」

「なにも……言うことはないわ。私が今まで聴いたどの音楽よりも、あなたの歌は素晴らしかった」

紗夜が褒めるなんてあまり見ないレアなシーンだな。まあ今回ばかりは当然だろう。湊なら紗夜が目指す理想。いや、理想のその先に行けるはずだ。アマチュアでフェスに出ることも夢じゃない。

「あなたと組ませてほしい。そして……」

言葉の途中で俯く紗夜。特に急かす様子はなく次の言葉を待つ。

「FUTURE WORLD FES.に出たい。あなたとなら、私の理想……頂点を目指せる」

「私もよ。よろしくね」

2人にとつてはまだスタート地点に立ったただけ。これから長く険しい道が続くんだろう。今度は夢の先まで続くことを信じたいものだ。それに……このバンドの行く先を知りたくなった。

「今更で悪いわね。なぜあなたが居るの？」

「ただ見に来ただけだ。気にするな」

相変わらず冷たい女だ。悪いことはしていないはずなのに。

「あなたここのバイトなのよね？」

「そうだが？」

「なら練習の時間はとりやすそうね」

それはあれか。スタジオを使えるようにねじ込めと？ まあ出来ないこともないがそれはあまり好ましくない。

「空いている時間を教えて欲しいの」

「別に構わないが……」

ねじ込むとか変なこと考えて……ないよな？ 空いてる時間教えるくらいなら出来る。というかそれだけでいいなら楽だ。

「空いてない時に無理矢理にでもスタジオを空けてくれるならやってほしいところね」

「本気で言ってるのか？」

「当たり前よ。私に妥協はない」

妥協ないって……少しは相手側のことも考えてほしい。

「出来ないなら構わないわ」

「空いてる日くらいなら前もって連絡はできる。それで勘弁してくれ」

「そうしてもらえると助かるわ」

こうして今、2人のバンドが誕生した。今の俺にできることは2人が分裂しないように見守るだけか。

このバンドが予想を大きく上回るバンドになっていくことをまだ俺は知らない。

## 第13話 墮天使あこ

### 第13話 墮天使あこ

「友希那さん！ バンドに入れてください!!」

「帰って。あなたに用はないわ」

今日も今日とて敗北。これで一体何回目の敗北だろうな。3、4回くらいか？ まあなんにしても何回挑んだところで負けて終わるのは、今は”目に見えてる。この女にどつ直球に頼んでも許してもらえないわけではない。

じゃあこの場合はどうしたらいいかって？ そんなもん簡単だ。

……自分の実力を示せばいい。少し強引でもいいから。

いきなりなことわからぬ事があるがほとんどだろう。この話をするには数日前にバンドを結成した帰りに戻る。

バイトの合間くらいならとバンドを手伝うことにした。その後、俺たち3人はライブハウスを後にしたが、外はすでに暗くなり始めていた。1人で帰るには危険な時間帯だ。

「……あなたと組めることになってよかったわ。もうスタジオの予約、入れていい？ 時間を無駄にしたくないの」

いやいや。この先の方針もまだ完全には定まってないのに決めることか？ まずはメンバー集めが優先だろ。

「同感だわ。もう一度確認ですが、他に決まっているメンバーは？」

ナイスだ紗夜。この女には俺が何言っても通じない。あれか。男苦手だったりするパターンか？

「いいえ。まだ誰も。その男が言った通り、ベース、ドラムのリズム隊。そしてこのジャンルに最も重要な役割のキーボード」

「ないと思うが当てはあるのか？」

「当てがあればもう探してるわ」

棘のある言い方だな。いちいちこれに反応するわけにもいかな

い。ここは俺もスルーさせてもらう。

「あと3人……急ぎましよう。実力と向上心のあるメンバーを見つけ、少しでも練習時間を確保し——」

「最高の音楽を作り、最高のコンディションで、コンテストに挑む」  
「……本当にあなたとはいいい音楽が作れそう」

2人はなかなかいい雰囲気だな。今のところは解散臭はしない。このまま仲良しこよしで行ってもらいたいもんだ。仲良しとはまた違うのか。

「あなたも。少しは期待してる」

「少しだけ……まあ期待に答える努力はするさ」

やれることはやる。めんどくさいが引き受けたのは自分だ。文句を言わずやるさ。

湊を見ているとふとあることを思い出した。

「そう言えば曲はどうするんだ？」

「……そうね。メロディはさつき聴いてもらったのを、私の方で詰めてみるわ」

「では私の方で、今までの経験をまとめてみます。注意すべきことはたくさんありますから」

意外と話が進むのが早いな。使えるもんは使うのは構わない。同じメロディーを使いまわしするのはよくないが。

もう帰る雰囲気な2人。俺はまだバイトが残ってるからな。無理言ってちよつと出てきているだけだし。時間的にもそうかと思いながら一歩足を踏み出した直後。

出合いは唐突にやってくる。

「ゆ、ゆ、友希那だ……。友希那だよりりん……。！」

どこか緊張したような表情と言葉。たぶんというか100%湊のファンなのだろう。その後の言葉でそれが確信に変わる。宇多川巴の妹あこは湊のファンだったのか。それにしてもなぜ俺に気付かない。

「ど、どうしよう、ここで待ってたら会えるかもって言ったら本当に……本当に会え……っ」

「あ……あこちゃん……私、もう……帰……!」

隣の人めっちゃ帰ったそうにしてるぞ。あこは湊に会えて周り見えなくなつて、片方はすごい帰ったそうにしてて。いったいなんなんだ？

憧れの人が目の前に居て緊張するのはわかる。たぶん俺も憧れの人人居たらそうなるだろうから。

「あ、あのっ！ さっきの話、本当ですか?! 友希那……さん、バンド組むんですか?」

「そうね。その予定よ」

「……バンド! ……あ、あこっ、ずっと友希那さんのファンでした!」

この話だとサインくださいが普通な状況だろうな。でも湊の奴が簡単にサインなんてしてやるとは思えない。握手くらいが良いところだろう。

しかし、次の言葉に俺は思わず驚きの表情が出てしまった。

「だ……だからお願いっ! あこも入れてっ!」

「……?! あこ……ちゃん?」

「お前マジか?」

あこが頼んできたのはサインのお願いではなかった。予想を遥かに超え、バンドに入れてほしいという願い。湊がどう答えるのか少し楽しみながら次の言葉を待つ。

「あこ、世界で2番目に上手いドラマーですっ! 1番はお姉ちゃんなんですけど! だから……もし、もし……一緒に組めたら……」

流石に組むとなると話は変わってくる。ここでドラマーまで揃えられたら言うことなしたが、それは叶わないな。世界で2番目に上手いという口説き文句では湊が頷くはずはない。

「ちよつとあなた、私たちは本気でバンドを……」

「遊びはよそでやって。私は2番目を自慢するような人間とは組まない。……行くわよ、紗夜」

バイトがあるからいいんだが。せめて自己紹介くらいはさせて欲しかった。今更ながら出来るわけもなく、今回は仕方ないと飲み込むしかない。

落ち込むあこを視界の端に映ると同時に帰りたそうにしていた黒髪の花女の生徒がじつと見ているのが気になった。

ここ最近見たことあるようなという感覚を感じがちだ。紗夜の迎え行ったりしているし1、2回は見たことがあるかもしれない。しかし、俺が感じた見たことあるという感覚とは違う。

「バイト、ちゃんやるのよ?」

「ああ。気をつけて帰れよ」

出会いはいつだって唐突に訪れる。

「(あの人……前に……話をしたことが……ある人だ)」

落ち込んでいるあこに声をかけることなく、バイトへと戻っていった。俺ってそんなに影薄いか?

抜けていた分すっかり働いたが、天堂さんにちよつとどやされたけど。

夜。バイトから帰った俺はとりあえず自室のベランダに出ることがほとんどだ。今日の出来事を思い出したり、ぼーっとするために。たまに先客が居たりする。

それは紗夜だ。部屋が隣同士だからな。

だが今日はあまり多くを話さない。強く当たったことをまだ気にしているのだろうか。別に俺が言うことでもないんだがな。

「巻き込んでごめんなさい」

「なんで謝る? 決めたのは自分だ。気にするな」

「そう……」

ライブ……か。出演する日にちとかはわかっていると思う。俺のやることといえば、何番目に出てもらうか。この2人が揃って出る時に

どのくらい人が来てくれそうか。告知の方法。ひいきにはなつてしまいが、ここだけの話。初めてではない。あるだろ？ 常連さんでお客さんも多く来る時は。

「お互い頑張らないとな」

「そうね」

それからお互いに会話はなかったが、夜は老けていった。

次の日。今日は平手打ちをかわしたが、直後から飛んできた枕によつて俺の朝は始まった。起きない俺が悪いのはよくわかつている。しかし、平手打ちをかわしたら、枕が飛んでくるとは聞いていない。これをご褒美と思えばいいのか……？ 俺は。

父さんは夜間明けで爆睡だし、さっさと用意を済ませて学校へ向かった。

起きられるようになるまでは、俺の平穏な朝は迎えられそうにない。

商店街 やまぶきベーカリー周辺

なんと昨日に続いて今日も香澄たちに遭遇した。そしてなにやら箱を持っているようだ。

「おはようございます！」

「おはよう。その箱なんだ？」

「これですか？ これはですね〜」

「作戦みたいです」

なんだ作戦とは。朝からいったいなにをする気なのだろうか。

すると香澄はやまぶきベーカリーの店内へと入っていった。少しすると、箱だけを山吹に渡して戻ってくる。プレゼントでもあげたのか？ サプライズ的な作戦。

「夕先輩、隠れましょう」



「隠れる？ お前は朝から何を言ってる——」

「早くしないとりみりん来ちゃいます！」

腕を引つ張られて曲がり角に身を潜める。半ば強引に。わけわからんから流れに身を任せることにしよう。そうでもしないとやっていけない……。

しばらく待っていると、やまぶきベーカリーにりみが訪れた。りみりんってまさかのゆりさんの妹さんだったとは。けど、何を企んでいるのかはわからないままだ。

「この茶番いつまで続くんだ？」

「香澄次第です、先輩」

市ヶ谷さんと話していると、りみがさっきの箱を持ってやまぶきベーカリーから出てきた。そして同時に香澄と市ヶ谷さんが曲がり角から出て行く。

「確保——」

「ばっちこーい!!」

……は？

「えっ？ なに、香澄ちゃん?!」

「とりやあー！ 捕まえた〜！」

叫んだ香澄はりみに抱きついた。すると箱を落としてしまったようだ。

「作戦終了」

そう言っって箱を拾って再びりみに渡す市ヶ谷さん。もう、わけがわからないんだが？ それと確保って叫んだの市ヶ谷さんなんだな。ぶっ飛び過ぎてて今思考が追いついたんだが？

「ふああ〜。帰る」

「えっ？ 今日行く日って」

「疲れた」

「ええ〜」

作戦っっていう作戦でもなかったが、疲れたのは俺も同感だ。居るだけで疲れるというのが戸山香澄という人間。エネルギーを吸い取られているかのようだ。

「香澄ちゃん」

「ごめん。やつぱりちゃんと聞きたくて。無理に誘っちゃったのごめんね。でも、バンド自体は嫌じゃないって言ってたから。なにかあったのかなって」

なるほどな。りみをバンドメンバーに誘っていたわけか。だけど断られた。

だからゆり先輩から、『もし見かけたら様子を見てくれるとありがたいな』ってメッセージが来たのか。心配、なんだな。

「りみりと話すの楽しかった。バンドのこととか、ライブのこととか。いろいろ教えてもらってドキドキした」

こういう時の香澄は素直に気持ちをド直球で伝える。だから……より深く分かりあえるのかもしれない。

「りみりん、出来ることがあつたら言つて。私、一緒にやりたい。りみりんのお姉さんみたいに——」

「ごめん……なさい。ごめんなさい……。私……」

「りみりんごめん。ごめんね！ 言いたくなかつたら全然！」

「違う……違うの……！」

するとりみは箱を抱えたまま走つて行つてしまった。いったいなにが縛り付けているんだろう。言うのが辛いことを聞かれたから。ではなさそうだ。それなら……。

考えても答えは出ない。だがあのまま放つておくことはしないんだろう。香澄のことだからな。

「香澄。あまり思いつめるなよ」

「はい……」

「きつとなにかしらの理由があると思う。それが何かまではわからないが、本人が話すまでは無理に聞き出さない方がいいかもな」

そう言い残して、学校の方へと歩き始めた。なんだかんだ言つて、最後まで様子を見ているんだな。市ヶ谷さんは。

放課後。バンドの練習中。俺はスタジオに訪れていた。少しでも時間を無駄にはしたくないということなので、俺は聞きたいことが湊に山ほどある。

「湊。連絡先くれ」

ということとで連絡先を催促してみる。

「な、なによ急に……」

「夕。いきなりは非常識だと思っわ」

なにその反応。ド直球はダメだと？ シンプルでいいだろ。すまん、ふざけただけだ。

「おいおい。時間無駄にしたくない奴がなに言ってる。こっちは聞きたいことが山ほどあるんだ」

「そういうことなら先に言いなさいよ」

確かにな。たまにあるだろ？ ふざけたくなる時が。滅多に見られない湊の焦り顔が見れたから俺はもう満足だ。

「あなた性格悪いわね」

「たまに言われる」

呆れたようなため息が横から聞こえてくるがスルーだ。どうせ怒られるだけだしな。

結局湊が要件がわかってくれたので連絡先を手早く交換。ついでに名前も丁寧に教えてやった。

「都合いい時間教えてくれると助かる」

「わかったわ。寝落ちしないことね」

「一言余計だ」

とりあえず意見交換だ。バイトは真面目先輩さん居るし大丈夫だろう。あといちおう市野木さん。

俺は絶賛困っている。というより意見が違い過ぎることにな。

早速意見交換をしているが、湊とは全然意見が合わない。

「その演出だといまいち盛り上がりにかけるんじゃないか？」

「あなたの意見もわかるわ。でもそれだと全体を見れていない」

さつきから曲のことで何度も何度も同じことを言っては言われを繰り返している。曲にまでは口出しをする話ではなかったが、意見を求められたから話たらこうなった。確かに湊の意見も間違っではないし、ありだ。だが、緩急を作った方がいい。

と、まあここまで意見は真つ二つなわけだ。今に始まったことじゃない。なんなら昨日の夜に連絡を取り合ってからだ。これからの練習の方針でももめたな。

「いいか？ 1つの可能性よりもいろんな可能性があった方がいいだろう？」

「……それはそうね。でも他の可能性もあると思うわ」

「なら、探求しないとな」

3人だけの空間で練習はまだまだ続く。

危うくバイトのことは忘れかけていたが。思い出したからセーフだ。今日は人が多めだからな。そろそろ戻るか。

時間というのはあつという間だ。数時間の長い練習が終わり、3人で片付けをしてライブハウスを後にした。外はすっかり夕焼けの間帯だ。俺はまだまだバイトだがな。

「友希那さん！ 待ってましたよ！」

「あなたはこの前の」

また来たのか宇多川妹よ。この前冷たく突き放されるように言われたのに、メンタル強すぎだろ。あの紗夜も驚いてるしな。

「あれ?! 旭日先輩?!」

「今気づいたのかお前は。前からずっといたんだが？」

「ホ、ホントですか？ すいません……」

そのしよんぼりした顔。つつい許したくなってしまう。まあ今回はさほど問題など感じないからいいさ。

「気にするな。それより何か言いに来たんじやないのか？」

「そ、そうでした！ お願ひします！ あこをバンドに入れてくださいー！」

やはりその件か。頭を下げてお願いするが。

「帰って」

その一言だけで話は終わってしまう。

何度も同じやり方じや結果は見えてるのにな。ただ……ほっとくのも少し気が引ける。もう1回来る根性があったら少しばかり手助けをしてやるか。

「知り合いなのか？」

「まあな。よく行く喫茶店にたまに来る子だ」

「そう。それはそうと、あなた少し気になってるでしょ」

「多少な。……紗夜は気にするな」

そう言つて、先に行つてしまつた湊の後ろ姿を眺めてから、断られた少女の方へと視線を向けた。何度断られようとも諦めない姿勢は嫌いじゃない。

## 第14話 SPACE

### 第14話 SPACE

次の日。ライブハウスSPACEに向かう道中。

今日はグリグリライブの日だ。ということでバイトは休み。毎回来てと言ってくれているんだ。行かないという選択肢はない。

修学旅行から帰ってきてすぐにライブとは。ゆりさんもすごいことをする。俺はそんなこと出来ないな。

せっかくグリグリライブだと言うのに天気は雨。傘を持っていかないといけないから少々めんどくさい。少し遠いしバイクで行くって手もあるんだが、雨の日は出来るだけ乗らないようにしている。危ないし。

ライブが始まるのは17時ごろ。1時間前に来ていれば間違いない。うっかり昼寝して遅れるという可能性がなきにしもあらずだし。SPACEまでの道のりを歩き、ようやくたどり着いた。すると。

「あれ？ 夕先輩?!」

「香澄と市ヶ谷さんか。2人もライブ見にきたのか？」

「はい！ グリグリを見に来ました！」

「私は香澄の付き添いです」

すっかり仲良しになったな。いろいろ苦勞はしているだろうけど……。まあその分香澄と居ると飽きないっていうのだけは利点だからな。いい意味でも、悪い意味でも。

3人で中には入ると、受付にはオーナーが座っていた。

「こんにちは。オーナー」

「夕かい。久しぶりだね」

「はい。相変わらずお元気そうで」

「どういう意味だい？」

そのまんまの意味なんだが。別に年寄り扱いではない。

ここにオーナーが居るということはスタジオには璃々子さんと他のスタッフさんが居るんだろうな。

「こんにちは。ライブ見に来ました。高校生です」

「1人600円」

「この前もらったんですけど」

なぜか香澄の話はスルー。まあ以前のチケットはな。

「ドリンクチケット。あっちで好きなもの頼みな」

「えっ?!」

「前の使わなかったんですけど」

「残念だけど当日限りだ」

そういうことだ。ライブハウスとか、ライブで買えるドリンク代つて結構高いイメージだよな。某なんとかランドとかなんとかスタジオの中で買えるものも同じくらいか。あとは登山出来る山にある自販機とか。

「夕、教育がなっていないんじゃないかい?」

「これがこの2人の持ち味なので。多めに見てください」

「……そうかい」

いつもならもつと言ってくるのに。珍しいこともあるもんだ。

受付を後にした俺たちは一旦空いているテーブルの方へと向かった。ふと市ヶ谷さんに視線を向けると、なんだか申し訳なさそうな感じを出していた。

「気にするな。ああは言ってるが、優しい人だから」

「本当ですか……?」

「注意受けるのも先輩の役目だからな」

知り合ってあまり時間が経ってるわけじゃないのに、後輩扱いするのは少しまずかっただろうか。学校は違えど、香澄の友達だしいいかと思っただが。

それぞれ飲み物を買って、テーブルに着くやいなや、香澄がカバンをあさりペンライトを2つ取り出した。ライブには大事なものだな。

「じゃーん! 待ってきた?」

「振らないし」

「えー? 貸そっか?」

そんな話をしていると。

「おっ」

スタジオの方からギターのと「ギターOKです」という言葉が聞こえてきた。ライブ前の最終チェックだろうな。当然だがバンドによって変わってくるからしつかりメモしておかないと詰む。

「チェックか」

「いえーいー」

「はえーよ」

適切かつ迅速な市ヶ谷さんのツツコミ。慣れていると見るしかないな。これは。普段もこんな感じなんだろう……きつと。

2人が会話しているのをよそに各バンドのチェックの音を聞いていると、なかなかゆり先輩たちの番が来ないことに気づいた。確かもう帰ってきているはずだと思ったんだが。

結局ゆり先輩たちのチェックはなく、ライブが始まってしまった。

俺はこのスタッフじゃないし、どうすることも出来ない。信じて待つことくらい……か。

「ありがとうー!」

「いえーい!!」

気づけばあつというまにグリグリの出番まで回ってきてしまった。ライブというのは早いものだな。

「いえーい!」

「はいはい」

「いえーい」

「先輩、そんなキャラでしたっけ……?」

「ライブだからな」

いつもの舞台袖から見る癖でな。つい楽しむというのを忘れてしまう。もうすぐ終わる頃か。次のバンドの準備は出来てるかなんて気にしてしまう。

それにな。他に気になることがたくさんある。

「りみりんどうしたんだらうね。次グリグリだよ?」



「姉ちゃんのところにも居んじやねえの？」

「うーん」

さつきからというか。ここに来てからりみの姿を見ていない。たぶん楽屋にでも居るんだと思うけど、ずっと居るといふ点に引つかかる。もしかすると……。

「あれ？」

「違くね？」

どうやら嫌な予感が当たってしまったようだ。

「マジ?!」

さつきまで出演していたバンドの人たちだろう。話を聞くなり「すみません！」と言いなながらライブ会場を後にした。たぶんというか、グリグリが来ていない。いや……なんらかの理由で遅れているんだろう。忘れているなんてことは絶対ないだろうし。

すると香澄もライブ会場を出て行ってしまう。

「ちよっ香澄?!」

「全く……」

仕方なく俺と市ヶ谷さんも香澄の後を追いかけた。

「出来るだけ引っ張ってもらえる？」

「わかりました。やってみます！」

楽屋の方へと来た俺たち。やけに忙しくスタッフと出演者が動いているのがわかる。

入り口付近で心配そうな表情を浮かべるりみの姿があった。

「りみりん！」

「あつ、香澄ちゃん。お姉ちゃんたち、まだ来てなくて……」

「えっ？」

だからこんなに忙しく動いてるわけか。グリグリが来るまでの時間稼ぎ。一度出たバンドが出て来ればお客さんに不審感が出てくるところだが、そこは出演者がなんとかしてくれるだろう。

「昨日まで修学旅行で、台風で飛行機遅れてこつち向かってるけど、ライブにはもう!」

「来るまで待つのは?」

「いや、それは……」

そんなことをあの人が許すわけがない。おそらく時間を引つ張ることさえ完全に納得はしていなさそうだし。

「ダメー! なにがあるろうとお客さんを待たせるのはダメ。穴を開けたら二度とうちの敷居は跨がせないよ」

確かにライブハウスはバンドの為に存在する。でもやっぱり聴きに来てくれるお客さんが1番大事なんだ。出演者が居ないと話にならないが、結局来てくれるお客さんが居ないともっと話にならない。

「出来るだけ時間、伸ばしてみるから」

りみの肩を叩きながら出演者の人が言う、舞台の方へと向かっていった。その返答にくらい返事を返すが、それも仕方ないことだろう。さつきあんなことを言われたんだからな。

「やばくね?」

「やばいな。でも、どうすることも出来ない」

時間がだけがどんどん過ぎていく。1バンドの演奏がまた1つ。確実に終わっていく。流石に何度も出るといことは出来ない。時間稼ぎも限度があるだろうし。

邪魔にならないようはじの方で壁に寄りかかって様子を浮かべていると、ちようど見知ったスタッフの人が入ってきた。

「旭日君?! 来てたんだ?」

「はい。こんな状況で申し訳ないです」

「ううん。……間に合うかわからないけど、頑張るから待ってて」

結局間に合うことを祈るしか。今は出来ないか。

結果から言うと、間に合わなかった。時間稼ぎも限界だったしな。

「ほーら片付け！」

「マジなんなの？」

「邪魔」

悔しい気持ちはわかる。でもそれが現実なんだ。まあもう少し出来たこともあるだろうけど、今の立場を考えると。どうしようもない。

ギターが弾ければ……舞台上に飛び出して行くことが。出来たんだろうか。

そんなことを考えていると、香澄がじつと舞台を見ているのに気づいた。

「香澄。バカなことは……」

そこまで言ったところで言葉を止めてしまった。

なぜ止めなかったんだろう。少しでも時間を稼げればという到底叶うはずもない賭けに縋りたかったのか。それとも……こんな状況でもどうにかしたいという香澄の思いを邪魔したくなかったのか。

違う……香澄は今。俺が出来ないことをしようとしているんだ。それを止めたくなかった。

余程緊張しているんだろう。手と足が同時に出てしまう程。それでも確実に一步。また一步と、歩みを進めていく。

そして——舞台上に出てしまった。その姿を静かに舞台袖から見守る。いったい何をするのかと思えば、小さな声でキラキラ星を歌い始めた。

だがお客さんは香澄に釘付けだ。

「ちよつと……！　なにやってんだよ！　先輩も止めてください！」

「無理だ。ああなったら止められない」

一度これだと思ったら、どこまでも。潔いいくらいに真っ直ぐ突き進むからな。

すると香澄は歌いながらステージにあつた何かを取って舞台袖にやってくる。迷いなく市ヶ谷さんの手に何かを持たせてから引張っていった。

「はあ？　カスタネツ……おわっ?!　先輩助け——」

「頑張れ、市ヶ谷さん。君なら出来る」

どうやらカスタネットらしい。

舞台上立つというのは緊張してしまうものだ。お客さんに見られて固まってしまった。それでも香澄は歌い続ける。その精神力は凄まじい。

「なぜ…止めないんですか？」

「それはこっちのセリフだ。あんたこそ、なぜ止めなかったんだい？ わかっていただろう？」

オーナーにはバレていたか。

「俺は…賭けてみたかったんです。香澄の行動で未来が変わるところに」

「変わったね。まるで陽子みたいだ」

「それはどういう…」

前に母さんは言ったらしい。

『じゃあ遅れてるバンドが来るまで、私たちがお客さんを楽しませます。いつ来るんだろう…なんて思う暇がないくらいに！』

昔から。そういうところは変わらないらしい。

香澄たちの頑張りは本当に素晴らしいものだと思う。だが、時間稼ぎにはやはり限度はつきもの。必ず終わりが来てしまう。しかし、今度はまた別の人が舞台へと足を踏み入れた。

あれだけ緊張や失敗を怖がっていたのに。感化されてなのか…？ りみがいつの間にか持ってたベースと共に。

「オーナー、これ以上は…」

今自分が出来ることは。

「止めないでください。これは…あの3人がいろんな思いを背負って選んだ道なんです。責任は俺が取ります。呼び込みでも、手伝いで…バイト代なんてどうでもいいです。だからあの3人を…止めないであげてください」

深々と頭を下げてながら言葉を並べる。諦めなければきつと…。

3度目のキラキラ星の演奏が終わり、4度目に入ろうとした直後。「お待たせー！」

香澄たちの行動は無駄にならなかった。本当にギリギリだったが、間に合ったようだ。

## 楽屋

ライブ後。無事成功とは言い難いもの。お客さんは満足してくれたようで。まあ結果的にはOKということだな。あくまで結果的だが。

「みなさん、本当にごめんなさい……!」

「私達も勝手にステージに上がって……ごめんなさい!」

どちらも申し訳なさそうな表情を浮かべて謝る。信じたのは俺だが、もう少し反省してくれ、香澄よ。

「オーナー、ご迷惑をおかけしてすみませんでした。あの、私達……」  
穴を開けかけたのだから当然だろう。

「……客が満足して帰ったならそれでいい。けど、次はないよ。気をつけな」

「オーナー……!」

どうやら許してくれるようだ。だが崖っぷちなのは変わらないか。今回はイレギュラーだったから。なんて言ってもダメだろうな。修学旅行後、沖縄という点を考えたら出ないという選択肢もあったし。

「ゆりさん達、許してもらえてよかったね!」

「うん……」

喜んでいられるのも束の間。香澄たちの元にスタッフが歩みよる。

「ちよつとあなた達、もう二度とあんなことしちやダメだよ!」

「わあ! ご、ごめんなさい!」

「結果的にグリグリの記事ができて、お客さんが喜んでくれたからよかったけど、ダメなものはダメ! わかった?!」

怒られて当然なんだが……止めなかった俺も同罪だろう。だからこのことに関しては注意が来らん。さて、どうしたものか……。

「は、はい！ もうしません！」

「あと、旭日君にちゃんとお礼言うんだよ？ 止めないでくれって庇ってくれたんだから」

「えっ？ そうなんですか？」

「余計なこと言わないでくださいよ……」

「えー？ かつこよかったよ」

あの時出来ることはそれくらいだったからな。楽器が演奏出来るわけでも、舞台の上に立つことが出来たわけでもない。今回は上手くい方後に繋がってくれたからよかった。

香澄、市ヶ谷さん、りみの3人は楽屋の外へと出した。これからお説教タイムだろうな。

「間に合わなかったらどうする気だったんだい？」

意外にもお説教っていう感じではなかった。

「そうですね……さつきも言いましたけど、また働きますよ？」

「そんなのごめんだね。……次はないよ。しっかり言い聞かせておきな」

「ありがとうございます」

深々と頭を下げながらお礼を言う。次はない……俺も出禁寸前つてわけか。

SPACEを後にした俺たち4人。雨はすっかりあがり、雲の間から星が見える。今日はヒヤヒヤする1日だったな。

「よおーし！ 次は文化祭だー！」

「はああー?!」

今回のことより一層バンド活動をしたくなつたのだろう。昔から事あるごとにこうやって大きな声を出していたな。香澄は。

きつとこの先。まだまだ苦勞する部分はたくさんあるだろう。け

ど……負けずに頑張ってほしいもんだ。

## 第15話 強い思い

第15話 強い思い

C i R C L E カフェテリア

キラキラ星事件（勝手に命名した）から数日。

「友希那さん！ バンドに……！」

「そろそろ諦めてください」

あー今日も平和だなー。

今日も現れた宇多川妹。本当に諦めが悪いようだ。……こう何度も同じことを繰り返すのはあまり良くないな。

ふざけている様子もない。むしろ真面目に頼み込んでいるし早いうちに手を打つとしようか。いちおう知り合いだしな。

習慣化しつつある宇多川妹の願いをひと蹴りして行ってしまう。今日はスルーすることなく彼女の元に向かった。

「夕？」

「悪い。ちよつとな」

「……あなたも物好きね」

そう言うのと湊と同じ方向に歩いて行った。紗夜の言う通り俺は物好きなんだろうな。ああやって頑張ってるのを見ると、めんどくさいって気持ちよりも上回って助けたくなる。

「ぐぬうっ！ 今日もダメえく？ 諦めないもんっ。あこ本気なのに

……なんで伝わらないのかなあ？」

「いろいろダメだからだ。少しは考えたらどうだ？」

「え、ええく？ でもどうしたら」

あんなに断られたらどうしようもないような気がするが、今回は1つ試せそうなのがある。前も言ってた方法だ。押してダメなら引いてみる。引いてもダメなら……スライドしてみろか？

「旭日先輩は友希那さんとどういう関係なんですか？」

「ただの知り合いだ」

「そうなんですネ」

そうなんですよ。まさかこんなにも大変なことになるとは思わな



かったが……。

「いい事を1つ教えてやる」

「いい事？」

首を傾げて俺の姿を見るあこ。教えることはもちろん教えるが、あとはコイツ次第か。よくも悪くもな。

「湊はただお願いするだけじゃダメだ。それはわかってるだろ」

「……も、もちろんですよ」

本当か？ 若干というか。普通に怪しい。

「いいか？ お前の実力を示してやらないと」

「実力……？」

「ああ。どれだけ演奏が出来るのかだな。出来れば苦労はしないが無理矢理にでも聴いてもらうとか」

「なるほど……！ どうしたら聴いてもらえるのか具体的に考えてみますっ！」

「頑張れよ。あこの気持ちは痛い程伝わってる。もしもの時はなんとかさせてみる」

それだけ言い残してお店の中へと戻っていった。

なんでなんだろう。宇田川あこという存在がどうにも気になる。いい方に転んでくれると良いんだけどな。……まあ大丈夫だろう。

実際問題、湊を納得させて演奏を聴いてもらうなんて無理があると思う。いつそのこと1回聴いてダメならそこで終わりにでもしない限りはな。紗夜から説得するのもまあ無理だろう。そうなる俺の出来ることは少ないか。

晴れない気分の中、バイトへと戻って行った。

あれから数日。

眠いな……寝るか？

放課後の教室で寝てやろうかと考えたがそれは無理な相談だ。暇していると先生に目をつけられる。昨日遅くまでゲームなんてする

じやなかった。……あるだろ？ ついつい時間忘れること。

それにバイトもあるが、サボるにサボれん。今日はめんどくさい組み合わせのメンバーな上に、ご立腹になるのが2人も居るんじゃない。ここは大人しく紗夜と合流してライブハウスに行くか。さて、一応忠告はあこにしたわけだが……少しは考えてくるだろう。

あれから数日が経ったが、あこが現れる様子はなかった。諦めたという可能性は……なくはない。それかなんらかの方法をとっているのか。はたまた同じ手で来るのか。頭打ちにはなっていないことを祈ろう。

ふと教室を見渡すと、残っているのは俺だけではないらしい。まばらに残っているクラスメイトの中に1人、大量のノートを整理している。そういえば数学の時間ノート集めたな。

南雲紘翔……同じクラスだが話したことはない奴だ。教室では本読んだりとか、たまに誰かと話してるな。結構大人しいイメージだ。向こうは……俺のことはわからないだろうな。教室では寝てるかぼーつと外を眺めてるだけだし。

1クラス分のノートの量は多いし、全員分あるか確認するのも大変だろう。まだ時間はあるし焦る必要はない。

席を立って南雲の元へと向かう。

「手伝おうか？」

「……旭日君？ あ、でも悪いよ。僕が頼まれた仕事だし」  
なんだ。名前知ってるのか。

「誰かに手伝ってもらうのはダメとも言ってたろ？」

「……そうだね。じゃあお願いしようかな」

どうやら全員分があるのは確認済みらしい。その証拠に半分に分けられたノートの山の片方を持ち始めた。あとはもう片方を俺が持てばいいわけだ。

「じゃあ行くか」

「うん」

ノートの山を持って教室を後にした。

俺たちの教室は3階だ。職員室までが遠い。エレベーターとかつ

かないんだろうかと、何度も思った。

「旭日君は放課後なにしてるの？」

「バイトだ。そっちは？」

「僕は暇……してるかな。本読んだり、ピアノ弾いたり」

「ピアノ弾けるのか。どっかで聞いたことがあるような」

「自己紹介かな……？」

「それだ」

なんとなく南雲だけ覚えてるんだよな。その他の奴は……なんだ。パンチが強すぎて覚えていたくなかった。中には真顔でBLが好きですとか。エモすぎるのを見ると鼻血が止まりませんとか。どうも個性的すぎた。

「あのクラスは個性的すぎる」

「旭日君も授業中だろうと寝るって言ってたような……」

そんなこと言ったっけか。

『旭日夕です。趣味はネットサーフィン、寝ること、ゲームです。特に寝るのが好きで、授業中だろうと寝ます』

……あ、言ったわ。それにしても……。

「よく覚えてるな」

「あはは……特に印象的だったから」

俺以外にもぶっ飛んでる奴はたくさん居たのにな。

南雲紘翔。とても不思議な感じがする。

手伝いを終え、帰る準備をしていると机の上に置いてあるスマホが震えた。画面を見ると紗夜から、先に行ってるというメッセージが来ていた。

「気合い入ってるな」

紗夜のメッセージに湊と一緒に向かうとだけ返してすぐに学校を

後にした。

さて。今日も頑張りますか。

羽丘女子学園 校門前

「え!? 友希那、今の話ってマジ?!」

少々早歩きで羽丘に来た俺だったが、たまたま湊は今井と取り込み中で、そこにたどり着いてしまったから少し話を聞くことにした。ここで話すのは良いが、周りの視線が痛いからどうにかしてほしいものだ。

たまにあの人なんだとか聞こえてくるが、おそらく日菜の件だろう。もう付き合っていないとか言うのめんどくさいな。

「本当よ。バンドを組んだわ、紗夜って子と。それからこの男は……召使い?」

チラ見してから言う湊だが、俺だけ呼び方がおかしい。知らん顔してた俺はいつたいたいどうすればいい。なんだ召使いって。

「あれー? 旭日君も一緒なんだね」

「まあな。毎日苦勞させられてる」

「あははく……」

なんとなく想像出来るんだろう。苦笑いを浮かべている。こうまでストイックな幼なじみを持つと大変だ。

話が少し脱線してしまったな。

「まだギターとボーカルだけだけど、コンテストに向けて、新しい曲も出来上がってきてる」

「バイトの合間にエグいお願いしてこられたのは俺だけだな」

「あなたに出来ないようなお願いはしてないつもりだけど」

「ならもう少し素直に人の話を聞くことを覚えてくれ」

出来ると思っただけ頼られてるのはこの際素直に喜んでおこう。だが1つ思うことがある。

話をするために電話をすると毎回遅い時間まで意見の食い違いで引つ張られるんだよ。お陰でこっちの睡眠時間は減っていく一方だ。その分学校で寝てるわけだが。おっとこれは説教コースか？

「そっか……あははっ、なーんだ☆ 教えてくれなかったからびつくりしたじゃん！」

少しだけだ寂しそうな顔をしたのは幻覚だろうか。

それよりも湊は今井に言ってなかったのか。まあ……必要なさそうと思っただけなら言わなそうな性格してるしな。言っただけでいいのに。

そうは言う今井だが一瞬見せたあの表情はなんなんだろう。とうとうこの日が来てしまったかのような表情は。

「友希那がついにバンドか。アタシ以外とつるまないで1人で居るからさ。結構心配してたんだよね」

「リサ……でも私は、本気だから。私もその子も、FUTURE WORLD FES.に出たい。目標が一致したから組んだだけよ」

確かに目標は一致してるはずだ。ただこの先も目標が一緒だからと言って続くかどうかはわからない。現に紗夜がそうだから。でもなんだろうな……湊と紗夜はストイックすぎるところが似てるからなさそうだ。

「それにこれは、お父さんの……」

突然変わった悔しそうな表情。今井は何かを知っているんだろう。何も言うことなく次の言葉を並べる。

「ん。……わかってる。目的は置いといて、アタシは嬉しいよ。友希那と一緒に、練習してくれる仲間が出来たってことだし」

仲間か。普通はそう考えるんだろうけど、湊は馴れ合いは要らないとか言いそうだな。……流石に言い過ぎか。というか言い過ぎであってくれ。

「でもさ、どーすんの？ FUTURE WORLD FES.のコンテストって、3人以上が条件じゃなかった？」

「だいたい痛いところを突いてくるのな。俺もその件では困ってるんだ」

「そうなの?」

こっちはこっちで話を進めていると、話を一刀両断するように湊が個人の話を続けた。

「バンドを組むこと。止めないの?」

湊の言葉にある事を思い出した。紗夜が湊とバンドを組んだ日の夜。家まで送った時に言われた一言。

『止めないの? また同じことになるかもしれないのに』

その言葉に返す言葉なんて相場が決まってる。

『俺が止めればやめるのか? 紗夜の夢は俺なんかの言葉で止まるほど安くはないだろ?』

「友希那は、アタシが止めたら、やめるの?」

「リサ……」

だよな。幼なじみを見守る幼なじみなんてみんなそうさ。結局心配で、何かあったらほっとけないんだ。めんどくさいと言いながら助ける俺が良い例だな。

「ゆ、友希那さん、お願いしますっ!」

お、おう。いきなり来たあこが湊に頭を下げてお願いをしに来た。だがそれは前と同じ方法だ。それでは……。

すかさず反応したのは湊ではなく今井の方だ。

「リサ、知り合いなの?」

「あこと知り合いなんだな」

「どうして名前知ってるのよ」

その話はどうでもいいんだが? あれだけお願いしてくる相手の名前も……知らない方が普通か。

「お願い! お願いお願いお願いしますっ! 絶対いいドラム叩きます! お願いします!」

いきなりのお願い攻撃に戸惑う者は居なかったが、冷静に対処しようとした俺の代わりに今井が対処を始めた。

「ちよつとちよつと。話が見えないんだけど。あこ、ドラムやってるんだっけ? 友希那のバンドに入れてもらいたいのか?」

「うん! でも、何度も断られちゃって……。そしたら旭日先輩に言

われて考えたんですっ！」

おい。なに余計なことしてるんだよみたいな目を俺に向けてくる湊。後で殺される勢いなんだが？俺は少しだけアドバイスをしただけだ。それにほっとけないだろ。

「……どうしたらあこの本気が伝わるかなって考えて、それで、えつと」

言いたい言葉がたくさんあるんだろう。少し切羽詰まりながら話すのを静かに見守る。

「友希那さんの歌う曲、全部叩けるようになって来ました！ いっぱいいっぱい練習してきて……その」

最初は迷いがあった表情だったあこだが、真剣な眼差しで湊に負けないくらい堂々と言った。

「お願いです！一回だけ！一回だけでいいから一緒に演奏させてください！それでダメだったらもう諦めるから」

それでも湊友希那は折れない。

「何度も言ってるけど、……遊びじゃないの」

「まあまあ、友希那。いいじゃん、一回くらい一緒にやってあげなよ。旭日君もそう思うでしょ？」

ここは合わせてほしいみたいなのウイंकを俺に飛ばしてくるが、そんなこと最初からわかってるさ。種を蒔いたのは俺だからな。刈り取らなければいけない。

「まあな。湊、お前と音楽をしようと思ってこんなにお問い合わせしてるんだぞ？」

「そうそう。それに……」

あこの鞆からはみ出していたノートのようなものを今井が引っ張り出して湊に見せながら言った。

かなりボロボロのスコアだ。それを見るからに考えられるのは一つ。

「あこの使ってるスコア……こんなにボロボロになるくらい、何度も何度も練習してるってことでしょう？」

「かなり使い込んでるな。努力してる証拠だ」

「ね？ 友希那。あこのことは同じ部活だし知ってるけど、やるときはやる子だよ？」

どっちにしても本当に練習してきたかは、セッションすればわかることだ。出来なければ真実が表に出るだけ。

だが俺はどうせ出来ないだろうという勘は働かなかつた。むしろ……。

「はあ……わかつたわ。一曲セッションするだけよ」

あの湊がとうとう折れた。さすがは今井だ。湊友希那がどういう人間かわかつての行動がほとんどだったな。俺なんかよりもずっと彼女のことを理解している。

「ほ、本当ですか!! ……本当?! やつたあ……! リサ姉、旭日先輩ありがとう!」

「別に俺はなにもしてない」

「やつたーっ。よしっ。友希那! アタシもセッション見学していい?」

めつちや喜ぶあこを目の前に隣からよくわからないことを言う奴が出てきた。一曲セッションするだけなのに今井が来たいと言い出すとはかなり意外だ。

「別に……いいけど。どうしたの急に。スタジオなんて、随分来てないのに」

「えっ。ど、どうって……別に? ライブハウス以外で歌ってる友希那も、たまには見てみたいじゃん?」

一瞬どこかを見ながら話すと、すぐに湊に視線を戻す。若干怪しさが見えるな。

だが見学くらいなら俺は居てもらっても全然構わない。仕事内容は変わらないからな。それにバイト先が少し儲かる程度。

「そ、それに。紗夜って子がどんな子かなのかも気になるしさ」

今井がそう言うのと湊が俺に視線を向けてきた。特に言うことはないたため、小さくうなずいた。それでわかってくれたんだろう。

「……そう。好きにしたら」

「やったっ♪」



少しずつだけど、湊とは言葉を交わさなくても話せるようになって気がするのは気のせいかな。これからやるのが決まったからか、湊は1人ライブハウスの方へと歩いて行ってしまおうが、その隣に並んだ。「なぜあの子なの？」

「直感。あとは純粹にあこが出す音を聞いてみたい」

「そう……でも、実力がなかった時は」

「わかってるさ」

フェスに出るためには生半可な気持ちと技術じゃダメだって言うんだろ？ 確かに技術と気持ちは大事だ。でもな……その2つだけじゃ、自分の求める音は出ないと思う。

このセツシヨンがどう転ぶかでこの先の運命は変わる。

この時、スマホに届いている紗夜からのお怒りメールに気づくことはなかった。

## 第16話 セッション

### 第16話 セッション

ということ、俺の目の前にはかなり怒ってる紗夜が居る。いつも以上に冷たい目。俺の能力に痛い視線への耐性はない。つまりゲームとかならガンガン体力を削られているわけだ。

湊たちよりも早くライブハウスに着いて入るなり、俺に向けられた冷たい視線は凍りつくようだった。確かに連絡しないこと嫌うのをわかっててしなかったのは俺の落ち度だ。

ただ今回だけは目を瞑ってほしい。いろいろあったんだ……。

「弁解の余地は？」

「あると思う？」

「厳しいな」

薄々気づいてはいたさ。でも、慈悲というものもあるだろ？ いやむしろあってくれ。ないと死んでしまう。それに早く着替えないとバイトが……。

「少し遅れるの一言くらいあってもいいと思うのだけれど」

「それは……そうだな。だが人と話してる時にスマホを見る奴が居るか？」

「湊さんに断りを入れてからでも出来る。そう思うのは私だけかしら？」

グーの音も出ない……まさにその通りだ。だがあそこで紗夜にメールを返すからいいか？ とも言いづらい……。どちらにせよ詰みだ。

「もう少しすればわかる。とりあえず説教なら帰ってからいくらでも受けるから今は勘弁してくれ」

「……わかったわ。湊さんは？」

わかつちやうんだな。

「今日は湊さん御一行だ」

ふと後ろに振り返るとちやうど湊、今井、あこの3人がライブハウスへと入ってきた。入るなり1人だけセッションが上がってるのが

居るな。

「懐かしいなあ。このスタジオオーって感じの空気。最後に入ったの中2の夏休みだっけ？」

「中1よ。忘れたの？ 中2の時は、海にばかり行ってたじゃない」

海か……あまりいい思い出はないな。俺もよく日菜に連れられて行った記憶があるが、特に楽しい思い出はない。暑いし濡れるしでいい事ないだろ。

「えっ。海って友希那さんも行ったんですか？ ま、まさかビーチでライブしたり……？ 超カッコイイ……」

「そんなわけあるか」

「私は行ってない」

行ってないんかい。というツッコミをグツと堪えて口をつぐむ。ここ最近ツッコミをしたくてたまらない時があるんだが？

「湊さん、この人たちは？」

会話が終わると同時に紗夜が疑問をぶつけてくる。まあ疑問の1つや2つ持つのもおかしくはない。だって一気に人が増えすぎだしな。

「あ、あいさつ遅れちゃってごめんね！ アタシ今井リサ。友希那の幼なじみで、今日は見学に来ましたっ♪」

普通な感じの自己紹介を済ませる今井。そんな自己紹介俺にはなかった気がするんだが？

「宇田川あこですっ！ 今日ドラムのオーディションをしてもらいに来ましたっ！」

「オーディション？」

紗夜の視線が俺に向いた。とりあえず俺の意思ではないことを示すために首を左右に振る。

「ごめんなさい、リサが……あ、いいえ。私がその……彼女のテストを許したの」

「ということとは……実力のある方なんですよね？」

少し威圧的な紗夜の態度にあこの生唾を飲み込む音がすぐ後ろでも聞こえた。ハードルが上がったわけだから当然だろう。ここで緊

張しても仕方ない。

そつと肩を叩いて小さい声であこに言った。

「落ち着け。自信を持つんだ」

「はい……」

小さな返事が聞こえてきた。実力さえあればこのオーディションは通る。

「努力はしているらしいわ。勝手に練習時間を使ってごめんさない。5分で終わらせるから」

「いえ。湊さんの選出なら、私は構いません。……ただ少し……意外です」

俺だった場合はダメなわけかと思っていると、紗夜が一瞬口ごもった。

「あなたはどんな形であれ、音楽に私情を持ち込まない人だと思っただから」

「その価値観はあなたと合致しているつもりよ。実力がなければ2人とも帰ってもらうから」

ん？ 2人？ まさか俺も入ってたりするの？ 手伝いの素質見る的な？

「はいっ、わかってますっ！」

「えっ、アタシも？」

あー、今井の方が。自分で言っていてあれだが、手伝いの素質ってなんだ。

今井の場合は驚いても仕方のないことだ。一瞬やる気ないならお前もだぞ？ みたいな表情をされた気がするが気のせいだろう。

「見学は終わり。紗夜の顔ならもう見たでしょ？ ……リサ。昔、遊びで入ってた時とは違うの」

どこか申し訳なさそうに言う湊。幼なじみという関係からか、あまり今井に対して強めには言わない辺り気まずいんだろう。その気持ちには痛いほどわかる。

「……あつ。そ、そうだったね。あはは、ごめんごめん。その時はすぐ帰るって♪ なんかアタシ一瞬、昔に戻った気になっちゃったな

」  
寂しそうな表情を浮かべて話す今井。昔はこんな感じではなかったんだろう。もつと仲が良くてお互いを信頼してた感じで。

「リサ姉！ あこ絶対、合格するように頑張るからっ！」

「ん。そうだね。よしっ、あこファイトっ！」

気合が入ったようで何よりだ。……このオーディションで決まる。このバンドの音楽性が。

話を済ませた俺たちはスタジオへとぞろぞろ入っていく。これはあこのオーディションだ。ドラムなどの準備は本人たちにやらせる。じゃあ俺はなにをやるかって？ 椅子を出してもろもろ準備を始める。

「旭日。いつものセッティングで頼めるかしら？」

「自分たちでやるんじゃないのか？」

「時間短縮よ。あなたの方が早い」

「……わかった」

手早くマイクとギター以外の調整をいつもと同じようにセッティングを始める。5分つてことは本当に1曲だけなんだろうな。

チラッとあこの様子を見ると手慣れた様子でドラムのセッティングをしていた。結構熱心な子だし、ある程度の実力があるなら普通に入れてもいいと思う。向上心つてのはやっぱり大事だ。

「出来ればベースも居ると、リズム隊として総合的な評価が出来るんだけど……」

「確かにね。他の所から連れてくるってわけにもいかない」

「そうね。こればかりは仕方ないわ。このまま……」

マイクのセッティングを終わらせ、ギターのセッティングをしながら話していると、意外な人物が名乗りを上げた。

「あ、あのさっ。アタシが弾いちやダメかな？」

「リサ？」

「えっ、リサ姉ベースリストだったの?!」

マジか。ベースやってたとは意外だな。昔からギャルっぽくはなかったってことか？ いや待て。今はそれどころの話じゃない。

この場で驚いているのは殆どの人だろう。あの湊も流石に驚いている。顔にはでてないのは俺と少しだけ意外って思っているであろう紗夜だけか。

「昔ちよつとやってたんだよね。誰もいないんでしょ？ だったらアタシ弾くよ♪ 待ってて、ベース借りてくるから」

そう言うのと今井はドアの方に向かって行つた。本当にこの状況でやるとはな。メンタルが強いといふかなんというか。今の周りのレベルに見合つてなければ浮くだけ。楽しみが1つ増えた。

俺は着替えるために事務所へと向かつた。道中カタカタ震えていた真宗が居たのだが、大方俺に説教する紗夜を見て恐怖したんだろう。まあ無理もない。俺も怖い。

ロビーの方を涼子と真宗に任せてスタジオに入る。少しすると借りてきたベースを持って今井が戻ってきた。戻ってくるなりセッティングを始めたから本当に最近までやっていたんだろうな。どうやるんだっけと止まるのはほんの一瞬。

「相当ビシバシ鍛えられてたんだな」

「まあね。旭日君もでしょ?」

「俺は元から出来る」

「嘘。さすがだね」

それだけのために手伝いしてるようなもんだからな。SPAC Eでは頻繁にライブしてたからな。嫌でも覚える。覚えるまでが結構大変だったよ。オーナーの厳しいお言葉が飛んでくるしで。

「いいよ、準備オツケー☆」

考えごとをしているといつのか終わっていたようだ。とりあえず俺は湊たちから離れて椅子に座る。

この演奏は……録音しておくか。この先何かの役に立つかもしれないしな。

「湊さん。今井さんは経験者なんですか？」

「一応。譜面で一通り弾くことは、今でも出来ると思う」

「一通り……ね」

怪しい視線。ではなくその指で弾けるのか？ という意味も込めた視線を今井に送る紗夜。ずいぶんこわーい視線を向けるものだ。背筋が凍るぞ。

「あつ、このネイル？ 大丈夫、大丈夫！ アタシ、指弾きはしないから」

察しがいいのか今井が反応した。

「ベースはスタジオの備品ですから、変な弾き方をして、楽器を痛めないでくださいね。私はあくまで宇田川さんのテストなら、問題はありません」

楽器が優先か。紗夜らしい。どんなに忙しくても自分のギターのメンテナンスは欠かしてないからな。忙しい時でもいかに早く終わらせられるか工夫しながらやっつけてからまず終わらないってことがない。

「壊したとしても旭日が居るから大丈夫よ」

「どう考えても大丈夫じゃないだろ」

全部俺に丸投げか。なんとか出来んでもないがめんどいからやめてくれ。怒られ役は慣れてるけども。

「それじゃ、いくわよ」

あこ。あとは全てを出し切るだけだぞ。悔いの残らないようにやりきるんだな。

曲が始まるのと同時に音の録音を開始した。最初はなんの変哲も無い始まり。むしろドラムとベースが居るお陰でいつもよりいい。

……おそらく本人たちが一番思っているだろう。いつもとはかなり違うことを。外から聴いている俺でさえその確かな違いに気づくのだから。

あれがしばらくやってない人間のベースの音だろうか。猛特訓をしてきたとはいえ初めてのセッションで出せる音なのだろうか。

見えない力に……引つ張られている？

この音はこの4人でなければ出せない音。

今心から思う。録音だけじゃなくて録画しておけばよかったと。

セッションが終わったが誰もすぐには言葉を発しなかった。無音に近い中、俺は録音を止めてさっきのセッションがちゃんと録れているかの確認作業に入る。

「あの……さっきからみんな、黙ってるけど……あこ……バンドに入れないんですか？」

悲しそうな表情を浮かべて言葉を並べるあこ。そういえば結果は言ってなかったな。

「そ……そうだったわね。ごめんなさい。いいわ、合格よ。紗夜、旭日の意見は？」

「問題ない」

「いえ。私も同意見です。ただ……」

その先の言葉を並べようとすると、急に叫び始める者が1人。

「いやったあーっ!!」

少し声が大きい。音が聞こえづらいじゃないか。

「それにしても、なんか、なんか、すごかった!!! 初めて合わせたのに、勝手に体が動いて!!」

「アタシも……! あこもそう思ったんだ! なんか、なんかいい感じの演奏だったよねっ♪ ……てことは2人も?」

この感じはおそらく自分たちだけじゃないと察っしたのでだろう。未だ不思議な感じの中に居る2人に話しかける今井。

「そうですね。夕、これは……」



「ああ。条件が揃わなければ出ないその瞬間だけの音……」  
こんな身近に体験出来るとは思わなかった。しかも1回も合わせないメンバーで出来たのが一番の驚いた部分だ。

「その場所、曲、楽器、機材、……メンバー。技術やコンディションではない、その時、その瞬間にしか揃い得ない条件下でだけ奏でられる『音』」

「バンドの……醍醐味とでも言うのかしら。ミュージシャンの誰もが体験できるものではない……」

醍醐味か。確かに紗夜の言う通りその他のバンドも同じ現象が起きてのかと言われれば違ふと俺は思いたい。そこかしこで起きていたら奇跡とは言わないしな。

「雑誌のインタビューなどで見かけたことがあるけれど、まさか……」

「なっ、なんかそれってっ、……キセキみたいだねっ!」

「うん! マジック! って感じ♪」

まだ驚きを隠せていない紗夜とは違い興奮している2人はまた怒られそうな言葉を並べる。

「その言い方は肯定出来ないけれど……でも、そうね。皆さん、貴重な体験ありがとう。あとはベースとキーボードのメンバーさえいれば……」

ん? この際ベースを担当するメンバーが必要なのか?

1人そう思っているとあこが代わりに疑問をぶつけてくれた。

「え? ベースならここにリサ姉がいるじゃん!」

「いや、アタシは、その……ヘルプで弾いただけで……」

渋っていると追い討ちをかけるように紗夜が口を開いた。

「今井さんは湊さんの幼なじみで、友達として、あくまで宇田川さんのオーディションに付き合うために、弾いただけ。そうですよね?」

ヘルプで弾いただけなのは確かだ。だがここで今井を蹴つていいのか?

ほんの少しだけ心配になったが、その心配もすぐに消えた。威圧的な紗夜に物怖じせずあこが言葉を並べる。

「でもバンドメンバー探してるんだよね? こんないい演奏できたの

になんでメンバーにしないの……う？」

「…確かに。技術的にはまだ、メンバーとは認められないわ」

紗夜の代わりに今度は湊が答える。手強い2人だ。この2人を領させるのはなかなか辛い。

「あ……そ、そりゃそうだよね、あはは……」

明らかに落ち込んだ様子の彼女を救ったのはこれまた意外な人物だった。

「ただ……足りないところはあるけれど、確かに今のセッションはよかった。紗夜も、それは認めるでしょう？」

「私は……！ 確かに今の楽曲だけに限れば、よかったです……」

周りにも自分にも厳しいあの紗夜が認めるのならばもう断る理由はない。入るといふ流れになった今最初に声をあげたのは。

「なら、バンド組もうよ！ この4人で！」

「え？ マジで？」

だろうな。驚くのも無理はない。

「そうね。……勝手に話を進めてごめんなさいね。旭日。あなたの意見を聞かせてほしい」

「俺はなにも異論を唱える気はない。このバンドにはあこと今井が必要だからな」

俺が何かをしているから声をかけなかったんだろうなと思いつつ、俺は言葉を並べていった。気遣いといえるのかわからないが、そういう所は俺的にはありがたい。

「さっきの演奏、録音してあるわね？」

「もちろんだ。……なぜ知ってる」

「なんとなくよ」

なんとなくでわかるものか？ 普通。まあいい。今のセッションはこの先きつと役に立つはずだ。

「素晴らしい演奏をしたとはいえブランクを感じる」

そう言うってから今井を見ると見事に視線を別の方向に逸らした。これから忙しくなりそうだな。

これであとは1人……か。

## 第17話 混ぜるな危険

### 第17話 混ぜるな危険

玄関先で事件は起きた。

「で？ なんだ？」

寝癖付きの頭をかきながら言い放つ。連絡もよこさずいきなり来た拳句に悪びれもせずへらへらしてる奴が居るとムカつくよな。

「いや。部活休みなんだけど遊ぶやつ居なくてな」

で、俺のところに来たと。……しばき回してやろうかと一瞬の殺意が芽生えたが、智紀の能天気さを見てるとバカバカしくなってくる。というか今日バイトだったらどうするつもりだったんだ？ こいつは。

「用意するから部屋来いよ」

「助かるわく心の友よ」

「お前は剛田タ○シか」

「ジャ○アンじゃないんかい！ あれ？ なんでオレがツツコミをしてる？」

まさかのボケをボケで返すという荒技。これで相手は混乱してしまっただろう。ボケたはずなのにツツコミをしているというな。……朝から何をしているんだろうか。

仕方なく家に入れた。部屋に入るなり俺のベッドにダイブする智紀。うち来ると毎回こんなだからな。そして注意するのは俺ではなく涼子という。

「夕の布団は最高だなく」

「いい睡眠はいい寝具からだろ？」

良くぞ聞いてくれた。俺の買った布団は自分にあつたものをお金を惜しまず買ったものだ。自分に合っているから最高に寝心地がいい。なお余計起きれなくなったのは気のせいだ。

「それはわかるけど、こんなので寝てるから起きれねえんじやね？」

「確かに。一理ない」

「ないんかい」

俺はそんなの認めない。認めないからな。寝具が良すぎて起きれないなんて。

人の寝床で勝手にゴロゴロしながら智紀がふと口を開いた。

「ここで紗夜さんとあんなことやこんなことを」

「してない。潰すぞ」

「な、なんだよ潰すぞって」

言葉を通りの意味だが？ 俺だってやる時はやるからな？ ここ  
で話終わってしまうぞ。いろんな意味で。

「いいよなく。可愛い幼なじみが居てさ」

そんな良いもんでもないからな。実際。可愛いかったり、美人だったりすると尚更。俺の場合はどっちも該当するのがまた厄介なところだ。妬まれたり、恨まれたり明らかに俺に対して抱かなくていいものばかり抱いてくる男子。智紀はただ言ってる感しかないんだよな。心から思っていない的な。

「涼子ちゃんが居るけど、仲の良い女友達って感じしかどうもしない」  
「その気持ちはわからなくはない」

友達になつてから俺たちといるんなことをしてきたからな。例えばサッカー、バスケ、テニス、キャッチボール。他にもよくメントスコーラとかイタズラもたくさんしてきた。涼子は意外とアグレッシブだ。

「とりあえず着替えて外に行くか」

「そうすつかー」

これはいつもの行き当たりばったり確定だな。

そういえばこういう時はだいたい日菜が来たりするんだけどな。ここ最近休みの日とかあんまり姿を見かけない。いったいなにしてるんだ？

出かける準備をして外に出たのはいい。まあ特に行くところがな

い時はだいたいゲームセンターに来る。ここで起きることと言えば俺、もしくは智紀の友達にばったり会う。もしくはゲームにハマって長時間滞在。ぐるっと回って出る。だいたいこんなもんか。

「夕、今日は誰か居そうか?」

「誰かは居そうだな」

「じゃあ探そうぜー」

なぜそうなるのかはよくわからないが、まあ誰かしらは居そうな気がするのには確かだ。日曜日だしな。例えばプリクラ撮りに来ている女子とか友達とアーケードゲームをやりに来ている男。もしくは……。

「あそこでシューティングゲームしてるのって」

「もう発見したか。世にも珍しいゲーマーを」

よくあるゾンビを撃つだけのシューティングゲームでノーダメ、出てきた瞬間射殺するというもはやいじめに近いことをしている青年。俺もたまにオンラインゲームをやるのだがはつきり言って強い上に知識が違う。

「さすがだなく。ゾンビに同情するわ」

「このゲーセンもそろそろアイツの名前で埋まるぞ」

ハイスコアの1〜10位はおそらく同じ名前なんだろう。しばらく眺めた後、終わった頃を見計らって近づいていく。

「れんか 隣歌」

「ん? あっ、夕君に智紀君。珍しいね」

「今日は部活休みなんだよ」

銃型のコントローラーを元の位置に戻してから再び向き直る。彼の名前は戦樹隣歌。せんじゆれんか 同じ高校に通う友達。俺とクラスは違うが、葵刃や大輝と同じクラスだ。ゲームの類が右に出る人が居ないのでとはいうくらい上手い。

こうして隣歌と休みの日に会うのは新鮮だ。基本オンラインゲームな上に、電話で話すくらいだし。

「夕君もバイトないんだ?」

「今日はな」

今頃混ぜるな危険コンビに手を焼いてるんだろうな四十崎さん。今度バイトのシフト変わってあげるか。それか猫カフェにでも行ってもらって癒やされてもらおう。

「バンドの練習もか？」

「それは休憩とかの合間に顔出してるだけだからな。休みの日までわざわざ出向かない」

「バンド？」

「そうか。バンドの手伝い？ アドバイス？ をしているのは智紀と涼子にしか言っただけだったか。特段話すことでもないが。……もしかしたら。」

「今、あるバンドの手伝いのことをしててな。憐歌の知り合いにピアノとかキーボードやってる人居ないか？」

「んん。心当たりはあるよ？」

「心当たりがあるだけでもすごいんだが？ それにしてもピアノかキーボード出来る知り合いが憐歌に居るのが少し驚いた。ゲーム関係の友達ならいっぱい居そうなんだけどな。」

「でもねー。人前に出るのは苦手だからどうだろ」

「それは確かにきついな。ライブなんて人しくないくらいだ」

「まさしく智紀の言う通りなんだが、人前に出るのを無理強いするわけにもいかない。また探しかないか。」

「でも、様子見て聞いてみるよ」

「悪いな。……ところでその人は誰なんだ？」

「僕のゲーム仲間で夕君もたまに一緒にゲームやってる人だよ？」

「一緒にゲームやってる人か……どっちだ？ 聖墮天使あこ姫か Rin Rinか。チャットでしか話したことないし、話してる感じでもわからん。オンラインの友達なんてわかるのは性別くらいなものか。」

「よくわからんが急ぎじゃなくていいからな」

「うん。……そうだ、よかったら僕もいいかな？」

「もちろんもちろん。人は多い方がいいしな！」

「こうして憐歌がパーティーに加わった。こうなるとやることはだい

たい決まってしまうわけだが。今日は仕方ない。それに負け越しているからな。

「じゃあ恒例の行きますか!」

「誰が一番メダルを稼げるかだね」

「悪いが今日こそ勝たせてもらおう」

ちなみに今のところ10回以上やってきたが憐歌が圧倒的に強い。2回くらい僅差で勝ったことはあるが、厳しいな。智紀に負けたくないには頑張ろう。

結局憐歌の圧勝で終わったのはここだけの話。

旭日家 自室 ベランダ

夜。風呂上がりにはベランダで涼んでいた。あの後、どのゲームで挑んでも負けたため、全敗。シューティングゲームとかレースゲームとかなら負けるのはわかる。だが、エアホッケーでもボコボコにされていた智紀を見ると、運動得意とは? と思ってしまう。あれって反射神経だよな?

そんなことを考えながら夜空を見上げる。流星に見すぎて飽きた……というか、あの星座はなんだろうとか最近考え始めてきた。

今度調べてみるとしよう。

1人夜空を眺めていると、窓が開く音が聞こえてきた。

「今日の練習はどうだった?」

「そうね……今井さんにはまだ練習が必要ね。宇田川さんは時々何を言っているかわからないから、もっとコミュニケーションを取らないといけないわ」

要するにどちらもまだまだだつてことか。今井に関してはただのブランクだろうから、そのうち大丈夫になるとして。あこに関してはどうにもならないだろ、それ。たぶんだが、コミュニケーションを取ってもわからないと思う。ただ単にカッコいいことを言いたいお年頃なだけだ。

「技術は大丈夫だろうし、そのうち慣れてくると思う」

「そうだと……いいのだけれど」

「心配な気持ちはわかる。まだ焦る必要はない。フェスは逃げないし」

年1回しか開催されないから、それほどチャンスが多いとは言えない。だが、焦る気持ちで練習しても結果が出るとは思えないんだ。……キーボードが居ないことでより拍車がかかっているんだろうな。

「夕には、夢はないの？」

「夢か……」

前に日菜にも同じことを聞かれたな。あの時はよくわからない反応だった。

「紗夜と日菜が幸せで居てくれれば、それでいい」

「……居られないとしたら？」

「そうだな……」

「(私はなにを聞いて……)」

その時は。

「俺が幸せにしてあげたいと思う」

2人が仲良くすることが必ずしも幸せに繋がる。ということではないのかもしれない。それでも……2人には笑っていてほしいんだ。以前のよう。仲良く話したりしてさ。

そうなれるように。俺は何かをしてあげたい。介入するのが良くないなら。背中を押してあげたい。

「紗夜？ どうかしたのか？」

なぜか返事1つない。怒らせることを言ったか？

「(それって……告……白？ い、いいえ。夕に限ってそんなことは……そんなこと……あるはず)」

「気に触ることを言ったなら謝る」

「そ、そうじゃないわ。少し考えごとよ」

「……ならいいが」

この防災用の壁があるから少し身を乗り出さないと表情とか全く見えないんだよな。まあ……大丈夫ならいいか。



「練習に戻るわね」

「そうか。頑張れよ」

「ええ……」

再び窓が開く音が聞こえてきた。

紗夜が戻った後も、俺は少しだけベランダに残った。

さっきの会話の途中。顔を真っ赤にしていたことを俺はこの先知ることはなかった。

花咲川高校 教室

次の日の放課後。

今日も今日とて授業中うとうととしてしまったり、聞いていなかったりしてしまった。だが後悔はない。紗夜にバレなければどうとでもなる。

「夕君。今日もバイト?」

「隣歌か。まあな」

声をかけてきたのは隣のクラスの戦樹隣歌。たまりにオンラインゲームで遊ぶからこうして誘いに来てくれる。メッセーじじゃないところが隣歌らしい。

「今日もゲームの誘いか?」

「それもあつたけど、よかつたら昨日話したピアノ出来る子紹介しようと思つて」

「なるほど。悪いな」

せっかくの誘いに申し訳ないが、本人もいっていいってと笑顔で浮かべて答えてくれた。ホントいい奴なんだよな。ゲームになるとまたとんでもなく上手いし。ギャップだな。

「明日の夜なら出来るからゲームはその時だな」

「わかつたよ」

隣歌とゲームの約束をして教室を後にした。確か今日のメンバーは……鈴音と真宗の混ぜるな危険コンビ。これは非常にまずい。特

に混ぜるな危険コンビは尋常じゃないんだ。

「せんぱーい！ お迎えにあがりました！」

「あがるんじゃない」

混ぜるな危険コンビの片割れが来たぞ。

「涼子先輩。 お迎えにあがりました」

「私、今日はバイトじゃないよ？」

「はっ?! そ、そんな！」

お前わざとだろ。シフト全然見てないやつの子供じゃないからな。もしくは自分のシフトしか見てない奴。

以前も紹介したと思う。鈴音ユキは涼子を尊敬している後輩。補足としては葵刃の両親が経営している道場に通っている。剣道、弓道、柔道。あらゆる武術で無双してくるらしい。見かけによらずって感じだな。

「尊敬する先輩のシフトも確認してないとはなく」

「はい？ シフトがあってもなくてもお迎えに上がるのが基本では？」

どっちも間違ってるんだよな。別に俺と涼子のシフトをこの2人が知る必要はない。それと迎えには来なくていいんだが。

「はー？ シフトがないのに迎えに来てどうするんだよ！」

「先輩と一緒に帰るに決まってるわ。あなたは旭日先輩とは一緒に帰らないみたいだけど？」

いや帰る方向違うだろ。すっごい嘆いてじゃんか。この世の終わりにみたいに。

「なっ！ 一緒に帰る時だってあるし！」

「あらー？ 一度も見たことありませんけど、どうしたのかしら？」

まさに鈴音の言う通りなんだが、そろそろ喧嘩辞めてバイト先行つてくれないかな。教室だと迷惑なんだよ。

この様子もすっかり周りでは受け入れられてしまったのか、クラスのみんなはまたやってるよ的な視線をむけている。もはや風物詩だ。「わかったから、鈴音は早くバイト先行つてくれ。涼子はシフト入ってないことだし」

「……旭日先輩がそう言うなら」

意外と言うことを聞くから真宗よりも全然いい子なんだよな。本当の問題児はというとな。

「そうだそうだ！ 早く行け！」

この有様である。だから鈴音に勝てないんだよな。

「真宗、そういう所だからな」

「なにがすか？」

コイツがバカだっということはよくわかったことだし、さっさと行くか。これ以上注目を浴びたくもないしな。

## 第18話 スカウト

第18話 スカウト

羽丘女子学園付近

結局鈴音を先に行かせたのは正解だったみたいだな。うるさいのが1人居るが、スルーしていればそのうち大人しくなる。駅に向かわないとC i R C L Eには行けないからな。真宗は自ずと静かになるってわけだ。

「あれー？ 旭日君じゃん」

羽丘の校門前にたどり着くとちやうど見知った人が2人。

「今井と湊か」

ここは女子ばかりだからな。真宗には辛いだろう。だから大人しくなる。

「先行つてていいぞ」

「そ、そっすか？ じゃあお言葉に甘えて〜」

そう言うともものすごいスピードで走り去っていった。女性恐怖症なら仕方ない。ここは女子しかいないから。まあ女で女にモテてるすごいのは居るけど。

「今のは？」

「バイトの後輩」

「そ、そっか。それにしても早いね〜」

「いろいろあつてな」

ここでそのことを話すと横の人に殺されかねないからやめておこう。なんだその早く歩けよみたいな顔は。怖いんですけど。おこの時の紗夜くらいに。

「早く歩きなさいよ」

「言ったよこの人」

いつものように罵られていると。

「あ。友希那さん！ とりサ姉、旭日先輩！ 今日も練習よろしくですっ！」

宇田川妹が現れた。真宗と違ってこっちは可愛げがあつていいな。

あいつも悪い奴ではないんだけど、いかんせん鈴音と喧嘩が多すぎる。

「お、あこ。なんか日課になってきたね。あこの顔、見ない日ないな」

「ダンス部も一緒だしねっ。一緒に踊って、演奏して、友希那さんの歌の力になるっ」

途中おかしくないか？

「ちよつとちよつと、アタシ達バンドでは踊らないよ？ ま、スタジオオ行こっか」

そうだな。早くしないと殺意が俺に飛んできそうだ。

「私は先に行くわ」

「ええ？ 先もなにも、行き先一緒じゃん！」

だがすでに歩いて行ってしまった湊。もつとこう……愛想良く出来ないもんかな。俺も人のこと言えないんだけど。せめて一緒に行くくらいいいと思う。

「つて、もう、友希那！ 追いかけてよつ、あこ！」

「うんっ！」

ようやく歩き出した方がいいが、あこによって通せんぼされてしまう湊。

「友希那さん待ったっ！ とーせんぼっ」

「……どいて」

おー怖い怖い。背筋が凍るようだ。

結局あこを避けて行ってしまった。

「つてやり過ぎちゃったか。ごめんごめん！」

「やり過ぎは良くない。怖い思いするの俺なんだからな？」

「あはは。行くところ一緒なんだから、並んで歩くくらいいいでしょ？」

笑って誤魔化されてしまったがまあいい。わかってて反応されないのよりは遙かにな。

思い出すのは智紀と涼子が喧嘩した時。悪いのは完全に智紀なんだが、いかんせん謝らない。だから完全にしかと食らってたな。あの

時の涼子もなかなか……。

「……はあ。わかったわ。なら少し、静かにして。でないと刺すわよ」

「絶対俺だろそれ。言い回し怖いんだよ」

「やった！ いえーいつ!!」

いやいや。いえーいつじゃないんだよ。どこぞのハイテンション芸人じゃあるまいし。それに2人揃ってはしゃいでいるとだな。

「……あなた達を加入させたのは、早計だったかも……」

ため息を吐き出してから出てきた言葉には領けないが、理解は出来る。うるさくするなと言ってもうるさくする奴をさつきまで見てたしな。

一通り騒いだあとあこが何かに気づいた様子。

「つてあれ!! リサ姉その指どうしたの?」

その言葉に全員が今井の指に視線が向いた。

「ネイル……全部はがしちゃったボロボロ……?」

「なんだ、心境の変化か?」

「えっ。い、いや……こらは……その」

上手く誤魔化す言葉が出てこないんだろう。戸惑っている。別に誤魔化す必要はないと思うが。本人からするとダメなのだろう。

「ほ、ほら? なんかなイルするだけがギャルじゃないし? 爪からシフトチェンジってゆーの? イメチェンイメチェン!」

お、おう。誤魔化せてはいないが、真面目に取り組もうって気持ちには伝わってくる。それよりもギャルって感じを出そうとしたんだな。今はあんまり見かけないような……。

こういう時そつとしておいてやるのがいいんだがな。宇多川妹はストレートだ。

「でも……リサ姉……もしかしてベース弾くのに」

「いいからいいから。シフトチェンジらしいし」

フォローをなんとなく入れてみるがそれでも食いつこうとする宇多川妹。さながらカミツキガメみたいだ。

「そんなことよりさつ、あこー! 練習終わったらクレープ食べない?

あの、裏通りにできたやつ」

そんな話ですり替えられるわけ——

「クレープっ!! 知ってる知ってる! 引っつも混んでるところだよねっ!」

すり替えられるんかい。まだまだ中学生つてことなのかはたまた少し抜けているのか。

なんて1人眺めていると今まで話に入ってこなかった湊が話しかけてきた。

「リサ。ネイルを取るの正しいわ。でもペースは守らないと、指を壊して……」

「わかってるってば。旭日君は1バイトだよ。友希那も一緒に、っていいかないかあ。あははは」

今日は夜までだから。あの2人の面倒も見ないといけないし。バイトよりも混ぜるな危険コンビの相手の方が面倒だから。

「アタシ生クリーム増し増しでいこつと!」

「どこぞのラーメン屋だな」

「あははくそうかも」

頑張つて無理はしてないと言いたいのか。はたまた本当に無理はしてないのか。今の今井を見てもわからない。さすがに幼なじみともなれば心配の1つもするんだな。

湊の心配そうな表情が俺の視界の端に映る。

今井達と話しながらC i R C L Eに来るとあつという間だ。いつもは裏から入る所を今日は表から一緒に入った。ロビーには四十崎さんと鈴音の姿はなく、困ったことに奴の姿しかない。

「いらっしや……ませく」

”い”はどこいった。それに安心したような顔してるけど、俺はま

だ何にも準備してないんだからな？ 助けを求める相手が違うぞ真宗。

「予約していた湊です」

「ひゃい！ しょ、少々お待ちを〜」

あれは緊張しているのか。はたまた苦手な女の人が居て今すぐにも逃げたいけど、逃げられないから葛藤しているのか。どっちにしろかみかみだな。

慣れない手付きで頑張る真宗を見てみると、今井が肘でつついてきた。

「前から思ってたんだけど、あれって緊張してるの？」

「いや……緊張とは少し違うな。真宗は女性恐怖症なんだよ」

「女性恐怖症？」

確か理由は、上に姉が2人。妹が2人。母親が居て、父親は単身赴任。つまり家では男1人ということだな。しかも長女と4女がとても厳しいらしい。何年も女ばかりの生活で女性恐怖症になったと本人が言っていた。

なぜこのバイトを始めたか。それは自分を変えるため。今はなかなか成果が出ないが、努力しているのはわかっている。

「だから温かい目で見えてやってくれ」

「う、うん。わかったよ」

さてフォローでもするとしよう。いちおう教育担当は俺だからな。

ここは先輩らしく……と思っただけだ。

「お客様申し訳ありません！」

見かねた鈴音が現れ、真宗の代わりに接客をはじめた。このパターンは正解なんだが、終わった後に問題が多く発生する。まあ見ていれればわかることだ。だいたい予想つくだろう？ さっきの2人を見てみると。

「いえ。急いでいるわけではないので」

湊は割と真宗に対して怒ったりはしない。話したわけでもないんだがな。厳しい一面ばかり見てきたから俺の感覚が麻痺しているだろう。



結局手際よく湊達をスタジオへと通してひと段落が着いた。俺と  
真宗しか居ないのを確認して鈴音が口を開く。

「柏崎！　またあなたって人は！」

「あーもう、うるさいうるさい!!　人が頑張ってる時に！」

「頑張っているならもつとこう……！　スムーズに！」

「出来たら苦労しねえよ!!」

こうしてまた喧嘩が始まるのだ。今回の場合は慣れようと頑張った。待たせてはいけないから代わった。個人的な意見としてはどちらも正しいからなんとも言えん。どうするか……。

「もつと練習すべきだわ」

「してますー。ノートに穴が空くくらいしてますー」

その例えはわからん。例えるの下手くそかコイツは。

「どうせ妹さんでしょ？」

「そ、そんなわけねえだろ！　ばーか！　ばーか！」

子供か。語彙力皆無だな。ほらみろ、鈴音も四十崎さんも呆れて……。

ふと視線を右に向けると、いつも整っている長い髪がボサボサになって  
いる四十崎さんの姿が目に入った。

「あはは。2人とも元気だな。お姉さんもガンバツチャウゾー」

こ、この四十崎さんは徹夜明けの姿。いつもは絶対に言わないような  
ことを言ってる辺り、二徹は硬いな。いや待てよ……。

よく姿を見てみると、ワイシャツのボタンが1つずっかけ間違えて  
いる……という話は。三徹か？　・・・そんなことを言ってる場合  
じゃない。

「はいはい。2人とも、仕事に戻れ。今回は2人とも正しいから気に  
するな。ミスしても俺が何度だって頭下げて謝るから」

「わかりました……すいません」

「もつと頑張ります……」

素直でよろしい。……今日は気合入れて頑張るとするか。

C i R C L E    ロビー

「ごめんね〜夕君。迷惑かけちゃって……」

と言いながら落ち込んでいるのは四十崎さん（三徹の姿）。とりあえず少しでも寝てくるよう勧めてちようど帰ってきた所だ。30分くらいは仮眠出来ただろう。帰ってもらってもよかったんだけどな。本人が頑張りたいてって言ってたし、尊重した。

「懐かしいなく。前もこうして夕君に頑張ってもらっちゃったよね」

「懐かしいってそんなに日は経ってないですよ？」

「そうだったけ？」

実際そうなのである。俺がSPACEを辞めてからあまり日が経たないうちに、C i R C L Eでバイトをすることになったのも割と最近だ。

「あの出来事がなかったら、夕君はここに居なかったかもだね」

「そうですね。ライブハウスって結構ありますし」

ちよつとだけ昔の話をしよう。

SPACEを辞めてから数日。特にやることがなかった俺は久しぶりに何も仕事がない状態でライブを見たくなり、近くのライブハウスに訪れた。

ライブハウスC i R C L E。駅から比較的近く、外にはカフェ、個人練やグループでの練習が可能。ライブも定期的に行われているライブハウスだ。カフェにしか来たことがないから中はよくわからない。

今日は知らないバンドのライブを観に来たわけだが……中に入るととんでもないことになっていた。

ロビーにはボサボサの茶髪の長い髪の女性スタッフ。その隣で電

話をしてなにやら焦っている黒髪のセミロングの女性スタッフ。慌ただしく働いている背の小さい女性スタッフ。

「ええ!? インフルエンザ?!」

「レポート……終わるかな……」

「あれっ?! 次何やるんだっけ?!」

なんだこの状況。本当に今日はライブがあるんだろうか。開始2時間前だと言うのに全く進んでいる様子がない。……帰るか。

「困ったなく。海藤君もインフルエンザで休み。スタッフの数が足りない……」

その様子からして、でしょうねとしか言いようがない。

「レポート……レポート」

別の意味で大丈夫だろうか。二徹みたいな顔してますけども。

「はわわ〜! ど、どうします?!」

とりあえず落ち着こうか。慌ててもいいことはない。

「どこかにライブハウスで働いてた人居ないかな〜……なんてね……」

そんな遠くを見ながら言われてもな……。

結局手伝うことにした俺はなんとかライブを乗り切り、見事バイトとして働かないかとスカウトを受けたわけだ。今思えば手伝ったことをよかったと思っっている。こんなユニークな人がたくさん集まるバイト先なんてそうそうないからな。

「夕君に頼り切りにならないように頑張らないと!」

「四十崎さん……まずはボタン留め直しましょう」

「あはは〜」

ちよつと抜けている? というより頑張りすぎてしまう四十崎さ

ん。普段はしつかりしているし、手際もいい。お客さん（男性の）からの受けもいい。たまに徹夜モードで来るけど、それでも居ないよりは遥かにマシだ。

ユニークな人は他にも居るけど、それはまた今度。

あれから数時間後。仕事を進めていると、スタジオから紗夜達が出てきたようだ。

「今日もハードだった〜」

今井が疲労感出して言っているのを横目に残りの2人はピンピンしてる。今までの練習量の差なのだろう。まだまだ練習出来そうですみたいな表情浮かべてるからな。湊と紗夜は

「次回の予約。いいかしら？」

「明日か？」

「空いているなら」

まあ普通に空いているんだが2人の顔を見る。あ、明日もこんなハードな練習を？　みたいな表情を浮かべている。嘘でも空いてないって言ってやりたいが、心を鬼にするしかない。

「空いてる。場所はいつものところで予約しておく」

「ありがとう」

手続きを済ませると早々に外へと出ていく紗夜達。鈴音はもう上がったし、四十崎先輩居るから大丈夫だろう。4人の後を追うように俺も外へと出た。

「ちよ、せんぱーい?!」

「後は任せた」

後ろでピーピー喚いてるけど無視だ。

「はあーっ。疲れた」

今井と宇多川妹が揃って同じことを言う中、間髪入れず紗夜が話し出す。

「みなさん、少しいいですか？ オリジナル曲がまとまってきたので、課題曲を増やそうと思います」

もはや死刑宣告。見ろ2人の顔を。この辺りの曲で……と言って見せるリストにはずらりと曲が並んでいる。なんか前にワードでリストを綺麗に作れないかって聞かれたけどこのことだったのか。2人には悪いことをしてしまった。

「バンドの底上げには最適なりすとだと思うわ。来週までに全員練習してくること」

オーバークイル。やめてやれ。2人の体力はとつくに0なんだ。「く、クレープ……」

なんか可哀想になってきたが頑張れとしか言えない。むしろ逆効果なまでである。

「そんな落ち込むな2人とも。クレープくらい奢ってやるから」

「旭日君」

「旭日先輩」

糖分は必須だからな。もちろん適切な量だが。とりすぎると体に悪影響でしかない。

なんて考えていると。

「夕。今日お母さんが夕ご飯作ってくれてるのだけれど」

「悪い。今日は遅いからリビングにでも置いておいてくれるか？」

「……わかったわ」

毎度毎度ありがたいことだ。母さんが亡くなってからというものたまに作ってくれるんだ。おばさんが。お、おじさんは俺に圧強くて苦手なんだけど……。

「ん？ どういうこと？」

「いろいろあるんだ。今度気が向いたら話す。もう暗いし、気をつけてな」

それだけ言い残して俺はCIRCLEに戻っていった。そんなほいほい人に話せるようなことじゃないからな。

## 第19話 嫌な予感

### 第19話 嫌な予感

数日後。この前約束通り2人にクレープを奢ったんだが、お礼に缶コーヒーを今井からもらった。しかも俺の好きなブランドのやつ。そういう細かいところに気が効くのが今井の良いところだ。宇多川からはなにも貰ってないからな？

「旭日君、旭日君。今日も彼女来てるのかい？」

「紗夜達ですか？」

C i R C L Eのバイト中。ロビーで暇そうにしてると海藤先輩が話しかけてきた。ちなみに今日のメンバーは萩野と海藤さんだが、天道さんも居るから平和も平和。気が楽でついつい眠くなる。

「そうそう。今度のイベントなんだけどね」

「枠が余ってるって話ですか？」

「話が早くて助かるよ。交渉したら出てくれると思うかい？」

まあ普通に考えて出てくれるだろう。確か有名なライブだしな。ここら辺じゃメジャーのスカウトにも来る登竜門的なライブ。枠があるならねじ込んでやろうかと思っただけど、今回はすんなりいけそうだ。

「出てくれると思いますよ。他に出るバンドないなら無理にでも押し通します」

「それなら頼もしい。いやうちようどよかった」

これに出れば少しは知名度も上がってフェスに近づければいいんだけどな。現実はその上手くはいかないか。上手くいつてるなら紗夜が何度もバンドから追い出されたりしないし。

するとちようどスタジオの清掃から萩野が戻ってきたようだ。

「さっきのスタジオだけど、隅っこの方かなり汚れてたよ？」

「俺は埃が溜まってたらちゃんとやるぞ」

「夕君と同じく」

いや、そもそも海藤さんは掃除あんまり行かないよな？ だいたいその場に居る人に押し付けて自分はロビーに居るし。となると、他に怪しいのは。

「じゃあ市野木さん？」

「そうだろ。あの人適当だし」

「女の子の扱いは丁寧なのにね」

「いろんな人に声かけてる時点で丁寧でもクズ野郎確定ですよ？」

「当たりが強いね」

市野木さんのことが嫌いなわけではない。仕事よりもナンパ優先するところとか、女の人のお願い事はすぐ受けるくせに男の人のお願い事は断るところとか。どちらも良い言い方をすれば素直だしな。

でも知っているんだ。あの人はえーと言いつつも気づかぬうちにやってくれることを。最初から素直にやってくれるのなら、言うことはないんだが。

「まあ使う回数少ないスタジオだからな。基本手前のスタジオを優先で埋めるし」

「使っていないスタジオの清掃の回数を増やすよりも、ちゃんとやったかどうか確認した方が良さそうだね」

「萩野の言う通りだな。次回からそうしてみるか」

「その時は頼むね。2人とも」

「海藤さんもやるんですよ」

なぜ最初から人任せ前提なのだろうか。まあ言ってもニコニコしてかわされるだけだからいいでしょう。それ以外のことはちゃんとやってくれるし。

数時間後。ロビーで機材の手入れをしていると聞きなれた声が聞こえてきた。

「ちよつと、宇田川さんも今井さんも。ここは通路なんだから、ダラダラしないで」

あの言い方。紗夜しかいない。俺が言われてるわけじゃないのになぜか罪悪感。

「そうよ。迷惑なら旭日にかけてちようだい」

おかしい。俺にだけかけていい迷惑とはいったいなんなんだ？

誰だ、いじめると喜ぶなんて教えたのは。何度も言うが俺はMじゃない。罵られても嬉しくないならな。

「すみません。次回の予約、いいですか？」

海藤さんが居るからだろうか。さつきと全く違うんだが？ さりげにここは俺がと手で制してから接客する海藤さん。結構サボってるの見るけど、普通に仕事出来る人なんだよな。無駄な燃費は消費しない的な感じ。

「毎度どうも、友希那ちゃん。そうだ、来月のことなんだけどき。予定どうかな？ 他でライブの予定とか入れちゃってる？」

「いえ、私たちはまだ…。」

俺に一度聞いてるのにも関わらず相手としつかりコミュニケーションを取る。真宗にも見習ってほしい。相手がどんな人であろうと海藤さんは顔色ひとつ変えない。

「あつ。最近ソロからバンドに変えたんだっけ？ じゃあ大丈夫かな？ 急遽イベントに穴が開いちゃってね。他に頼めそうな人、いなくてさ〜」

間髪入れず話きつたよ。それにこの頼まれ方だと断りづらいよな。他に頼めそうな人居ないなんて言われたら余計に。まあこの話を断る理由、湊たちにはないだろう。

「わかりました。そのお話受けます」

「ありがとうございます。今度詳細旭日君から伝えてもらおうね」

「…：そこは俺なんですな」

後は任せたいみたいな雰囲気醸し出してるけど、そこまでやったなら最後までやってほしいものだ。

次回の予約をしてからC i R C L Eを後にする4人。なんだろう。



こういう時の嫌な予感ほど当たる。ロビーを後にして4人の後を追った。気づかれぬように。

「すごいっ……早速ライブ出演が決まった！メジャーのスカウトも来るって噂のイベント」

ライブが決まったのが嬉しいんだろう。すごい嬉しそうだ。

さっきの話にもう少し補足すると実際にスカウトされていた所を見たことがある。去年の話だからCIRCLEでバイトはしてないが。たまたま見に行った時だ。

「も……もしかして、あこ達も……？」

「確かにこの地区のバンドにとっては、登竜門と呼ばれているイベントね」

よく知ってらっしゃる。紗夜なら当たり前か。と言うよりもライブハウスに來ている人なら、知らない人の方が少ない気もする。

「けれど私達はメジャーと言うより、もっと……」

「そう。もっと高みを目指しているわ。……メジャーは決して、音楽の頂点じゃない」

今思えばFUTURE WORLD FES. に出る以外の目標は聞いてないな。まあフェスに出る為に集まったようなものか。

「あこ。そう思えない人は、このバンドに要らないわ」

「えっ。そうなんですか？でも……メジャーデビューしたらあこも、カッコいい人になれるかなって……」

割と冷たいことを言われている宇田川だがケロッとしている。カッコいいか……宇田川はよくお姉さん。つまり宇田川巴の話をすることがほとんどだ。本当に好きなのだろう。紗夜と日菜とはまるで違う姉妹の形。

「どこがカッコいいの？メジャーなんて『音楽を売るため』の場所よ。本当の音楽のことなんて、なにもわかってない……」

音楽を売るための場所。そう言えなくもないか。売れないバンドや歌手は年々見なくなってしまうものだ。

「全てがそうではないと、私は思いますけれど？」

珍しいこともあるもんだな。紗夜と湊の意見が割れた。

「湊さん……どうしたのかしら。なんだかムキになっているようにも見える)」

嫌な予感というのは唐突に訪れる。

わかっている”つもり”はいつも怖い。

「でも、そうね。私達は『自分たちだけの』頂点を見つげるためにここに居るはず」

繋ぎ止めていた”つもり”なのに。気づけば紗夜手は俺の手から離れていた。だけどそれに俺はまだ気づけていない。単にあこの態度に我慢の限界がきた。なんて思うしかなかった。

「宇多川さん。あなた、よくお姉さんの話をしているけれど、あなたが音楽をやりたいのではなく、お姉さんに憧れて、お姉さんのようになりたいだけなら、私達とはなく、お姉さんとバンドを組んだ方がいいわ」

やたらとお姉さんという単語を口にする紗夜。それに加えて姉妹の話。感情に任せて話している。いつもの紗夜らしくない。

「あ、あこはこのバンドがいいですっ！ お、おねーちゃんもドラムだし……っ。だからっ、あこも、おねーちゃんみたいになりたくて、ドラムを……」

「お姉ちゃん……」

一瞬見せたあの表情。俺はどこかで一度見ている。どこだ……？

記憶を遡っている束の間。紗夜の言葉は止まらない。

「宇田川さん。……私は今、あなたの技術は認めています。でも、あなたのカッコいいは、ただの『真似』だわ」

「……っ。ち、違うもんっ！ あ、あこは……っ！」

「違うない！ じゃあ答えてみて。お姉さんではない、あなた自身にとつてのカッコいいって、何なのかしら？」

中学生相手に大人気ない。普段の紗夜ならあり得ない行動な気もするが、周りから見ればそこまで複雑な問題には見えて居ないのだから。おそらく紗夜がただあこの普段の態度、考え方に怒っているだけ。

「そ、それは……」

若干というか。普通に涙目になっている宇田川。

「わかったでしょう。あなたのその意識は、バンドを高める為に、必ず変えて貰わないと困る」

流石に見てられないので、4人のもとに歩いて行く。

「紗夜、その辺にしておけ。高校生が中学生を泣かすな」

もちろん居たの？ みたいな表情を浮かべてくる。盗み聞きよくないけど、こうでもしないと。

俺はあこの頭にそつと手を置いた。悪いな。すぐに止めに入つてやりたかったんだけど、紗夜の思いを少しは知らない。一度だつて真つ直ぐ気持ちをぶつけてきたことがないんだからな。

「旭日君のいう通りだよ紗夜。その辺でっ」

もう少し早く仲裁して欲しかった間はあるがこの場合は仕方ない。紗夜の迫力は結構あった。

「あこはこう見えてしつかりしてる所あるし、……ちゃんと自分で考えられるって、ね？ ほら、あこ」

「……う、うん」

今井のフォローによって多少は取り繕えたか。それでも今のこの空気は重い。まるで鉛のようだ。

「でしたら構いませんが。今井さん自身も大丈夫ですか？ このジャンルやシーンについての知識はあるの？ それにブランクのせいで、大分無理してるみたいだけれど」

ふと今井の指を見る。だいぶ傷だらけなの誰が見てもすぐにわかる。湊だけじゃなく紗夜も気づいていたようだ。

「あーうんっ。この指は心配しないでっ。……それにこのジャンルについては、なんてゆるーかその、うん。アタシは昔から、友希那から話……聞いてたし」

とところどころ言葉が止まる所はあったが、湊から聞いていたのであれば多少は大丈夫なのだろう。知識だけで言ったら俺なんかよりもあるしな。

「(……そっか。友希那のお父さんのこと知ってるの、バンドでアタシだけなんだ……。友希那はいつ話すつもりなんだろう……)」

結構なことになっていながらも関わらず何か考え事をしているようだ。湊友希那は。もう少しはメンバーのことを見てやればいいのに。

「……友希那？」

「それよりもキーボードよ。ずっと探してるけど……キーボードなしでこのジャンル特有の音の厚みは出せない。ライブが決まったのに……」

「うーん。……とにかくみんなで、もっと探してみるしか、ないよね……」

心当たりならあるんだが、やっぱり人前に出るのが苦手というのが引つかかる。そういう人をわざわざ観客の前に引っ張り出すのは絶対に良くない。

「旭日君？」

それに問題は山積みだな。紗夜のこと。どうするか。無理に話を聞いたって言うてくれるわけでもない。理由がわかっているのに解決策が出ないのかもしれないところだ。……その理由も本当に正しいのか？ 俺は一度だつて……。

「おーい。もしもーし」

「考え事してるみたいね」

何かないか？ 無理矢理じゃなくて、自然に話を聞く方法。それが

「旭日君！」

「ん？ 呼んだか？」

「さつきからずっと呼んでるよ。アタシ達はもう帰るね」

「悪い。気をつけてな」

それだけ言い残してC i R C L Eに戻っていった。立て続けに盗み聞きをしてしまものは流石にまずいよな。今度は今井から聞くなりするか。

「(やっぱり……なにも言わないのね。あなたは……)」

どうしたらいいのか……まだ明確な答えは……出ない。

次の日 昼休み

珍しく昼寝をすることなく過ごしている。というのも少し訳ありだ。香澄の持つているランダムスターについて大輝に聞きたいことがあるんでな。

というわけで。B組に訪れ、本人が居ないか見ると1番前の席で憐歌と話している姿が目に入った。机の間を抜けて2人の元へと向かい、大輝の席の前に立つ。

「大輝、今いいか？」

「おう…っつか起きてるの珍しいな」

「夕君毎日寝てるわけじゃないでしょ？」

「…どうだったかな」

「え〜」

割と寝ていたりする。30分でも寝ることが出来るならそれはそれで大変素晴らしいことだ。午後の授業にも差し支えるしな。まあ俺は寝ても起きてても差し支えるが。

「ところで何か話があるのか？」

「ギターに関してなんだが……」

ちやうど話そうとした時、スマホに何か通知が来たようだ。内容だけ見るために電源ボタンを押した。

『ランダムスター持つてる人って変態なんですか?!』

いったいどういう意味だ。変態ではない。だが変ではあるな。

「ランダムスター持つてる人は変態なのか？」

「まあ…そうだな。長くなるぞ」

「構わない。それを聞きにきたんだ」

ランダムスターについてしばらく話を聞いた。

午後 授業中

結論から言うと、初心者向けのギターではないらしい。順を追うと

だ。まず香澄の持っているランダムスターは変形ギターという種類。そこは俺もなんとなくわかる。形は結構独特だしな。

次に変態という意味だが。ギタリストにとっては褒め言葉らしい。つまり俺は紗夜に対して変態と言えば褒め言葉になる……とは到底思えないんだが。ギタリストでない俺が言ってもビンタされそうだが話が脱線してしまったな。つまり相当なテクニックを持っている人が愛用していたりすると大輝は言っていた。

あとはオリジナルとは違って香澄のはカスタムらしい。以前送ってきた画像を見せたら、あれやこれや情報が出てきて俺には理解不能だった。ここまで楽器に詳しいのは大輝を含めて2人知っている。どちらも知識量は変態だな。

簡単に説明するとだな。ランダムスターは変形型で、初心者にはあまりおすすり出来ないギター。テクニックを要する。こんなところか。

「——じゃあここを珍しく起きている旭日。読んでみる」

しまった。今は現代国語の時間だったな。

指名されてしまったので、とりあえず立ってみる。チラッと涼子の方を見ると、右手で3と左手で8を表していた。次に右手で右側を指して、左手で5を表す。つまり38ページの右から5行目だな。

とりあえず指定されたところを読んでみた。

「いつもその調子で頼むぞ」

「はい」

いつも涼子には助けられているな。聞いていないというのも瞬時に察してくれたし。後で飲み物でもおごろうか。

## 第20話 それぞれの思い

第20話 それぞれの思い

ここ最近を結果的に言くと、バンドメンバーが2人も増えた。残りは1人なわけだ。だが問題はさらに増えてくる。

例えば、ブランクのある今井の演奏の仕方では気付いたことを言う。因みに言っておくがベースを弾いたことがある経験はない。出来てアドバイス程度だ。そのアドバイスもこうした方がもつとよくなるのでは？ 的なのやつ。

あこはなんだ……バンドに1人は必要だよな？ ムードメーカー。4人になればいいよライブが目に見えてくる。って事で衣装関係の話も出てくるわけだ。男の俺が女子にスリーサイズを聞いて作るわけにはいかない。まあ、もちろん元から作れはしないが……。

バイトの合間の手伝いが本格化してきたような気がするが、一旦置いておこう。

練習とバンドの練習がちやうど終わった後、紗夜を家まで送り届けた俺は気分転換に外を出歩いてた。俗に言う散歩ってやつだ。バンド活動の手伝いも考えることがたくさんあるんだが、ここ最近は何の考え事もある。

どうやら日菜が紗夜のやっていることに気づいたらしい。真似をするまでには至っていないが正直時間の問題だ。日菜はただ、仲良くしたいだけなんだよな……紗夜と。昔みたいに3人で過ごしたいだけなんだ。きつと。

その純粋な思いさえ。紗夜には届いていない。

ぐるっと家の近くを散歩し終え、家に戻った。すると玄関の前で体育座りをしている人が1人。

「日菜？ こんな時間にどうした？」

俯いているからだろう。帰ってきたことに気付いていない日菜に声をかけると、ゆっくりと顔を上げる。

「ゆー……くん。おかえり」

「ただいま。……座ってないで中に入れよ」

だいたい察しはつく。大方紗夜になんか言われたんだろうな。今更なに言われようとも落ち込む日菜ではないんだが、5回に1回くらいこうして俺の所にくる。

なぜ俺なんだ？ と最初は疑問に思った。おばさんとおじさんに相談すればいいのにつて何度も言った。

問題はそれほど簡単で単純じゃない。難しくて複雑だ。

家の中に日菜を入れ、1人足先にリビングへと入った。電気を付けて中に入るとテーブルの上にお金と書き置きが置いてあるのが目に入る。

「夜飯代か？」

相変わらず父さんは忙しいみたいだ。そこまで気にしなくてもいいことを気にしてくれている。

夕へ。急遽仕事が入ってしまったので、これでなにか買って食べてください。

夜ご飯くらいちゃんと食べている。なんなら昼と夜しか食べていないくらいに。

とりあえず置いてあった金を持ってリビングを出た。玄関に日菜の姿はなく、靴が無造作に置かれていた。たぶん俺の部屋にでも居るんだろう。

電気を消して俺の部屋に向かうとドアが少しだけ開いて隙間が見えていた。そこから光が漏れてくるわけでもなく、ただ暗闇が支配している。

ドアを開いて中に入って最初に目に入ったのは、俺のベッドの上で体育座りしてる日菜の姿。

「ゆーくんはここからいつもギターの音聴いてるの？」

「流石に壁越しには聞こえない。……たまに聴かせてもらう程度だ」

「…そっか。あたしには……わかんないや」

そう言うと俯いてしまう日菜。今日はだいぶやられたようだな。いつもは前向きに考えるくせに。らしくない。



なんて言葉を並べても冷たく感じるだけってことは痛いほど学んだ。こういう時すべきことも。

俺はそつと日菜の隣に座った。

「大丈夫。紗夜は本気で嫌ってなんかない」

頭をそつと撫でてやると体重を預けてくるように寄りかかってきた。同い年というより妹って感じたな。日菜は。

「……ゆーくんのそういうところズルイ……」

「ズルイってなんだよ」

「ズルいからズルイのー!」

少しは元気が出てきたのか寄りかかるのをやめて抗議してくる。結局何がズルかったのかはよくわからん。なにかがズルかったんだろう。

「どつか連れて行ってほしいな……」

「そう言うと思ってた。すぐ行けるか?」

「うん! さすがゆーくん!」

そう言うのと日菜は一足先に俺の部屋を出て行ってしまった。俺が行かないや出かけられないのを忘れているんだろうか。……ありえなくはないのが日菜の悪い所だな。

試しにベランダに出てみたが、紗夜の部屋の窓が開いているわけは当然ない。

いったい何があったんだろうか。

こればかりは2人に聞いても答えてはくれないだろうな。

部屋に入ってそつと窓とカーテンを閉じて後にした。すれ違いというのは簡単に起きてしまうらしい。

どこかに出かけようとする姿を見ている紗夜に俺は気づかない。

「ねえ〜！ どうして自転車なの〜？」

「たまにはいいだろ？」

後ろでピーピー騒ぐ日菜をよそに近くのコンビニに直行している。俺は普段不摂生だから歩かないと太る。2人乗りを見られるといういろ大変だが別にお巡りさんがうろついているわけでもないし、いいか。

良い子のみんなはダメだからな？

「ゆーくん、お姉ちゃんと腕でも組んだ？」

「ん？ 別に組んでないぞ」

「ホントー？ ゆーくんからお姉ちゃんの匂いがするー」

鼻効き過ぎな。あと本当に腕組んで歩いてないからな。そこの君。嘘だ〜みたいな目で見ないでくれ。

じゃあなぜ俺から紗夜の匂いがするのかって？ たぶんだが。

「練習の時だろうな。録音した音を紗夜と確認してたから、その時割と近かった」

「そっか〜。ゆーくんも頑張ってるんだね」

「当たり前だろう？ 頑張らないといろいろ面倒なんだよ」

湊と紗夜には本当に困る時があるほど頑張り屋だからな。思ってる以上に。

この前なんて湊と遅くまで通話しながら今後についての話と音楽性について話し合ったからな。まあ次の日は安定の寝坊だ。俺だけ。なんだかおかしい気もする。

「ゆーくん！ ゆーくん！ 通り過ぎてるよ!？」

「悪いな」

急いでブレーキをかけて止まると、日菜が俺に勢いよく寄りかかってきた。そうなるとう当然全体重がかかってくるわけだ。男子ならわかるよな。この気持ち。

「ごめんね、ゆーくん」

「気にするな。通り過ぎた俺が悪い」  
なんか視線が痛い気がする。

「本当に良かったのか？」  
「うん！」

元気よく返事を返してくる日菜だが、手に持っているのはコーヒーマ味のアイス。2つに分けられるやつだ。食べたことあるだろ？

そのかたわれでいって日菜が言うもだから、あげたわけだ。普通に1つ買えばよかったのに、なぜ俺のから取ったんだろうか。

片手で自転車を押しながら歩く中、少し前を歩く日菜の背中を眺めながらアイスを食べる。……久しぶりに食うと美味しいな。

「ゆーくんは将来の夢とかあるの？」

「急にどうした？」

「いいからいいから」

「……将来か」

今を生きるのに精一杯で特に考えたこともなかったな。将来の……夢。

「普通に暮らせばいいさ」

「それだけー？」

「それだけって言われてもな」

「……あー。もう一つだけあったな。」

「紗夜と日菜が幸せでいてくれれば俺はそれだけでいい」

今までどれだけ辛い思いをしてきたのを見てきたのかはわからな  
い。させたことももちろんあったはずだ。2人を近くで見えてきたか  
らこそ、幸せになってもらいたい。

「……もー……なにそれ……」

「ん？ 何か言ったか？」

「なんでもなーい！」

「いったい日菜はなんて言ったんだ？」

その真相を知るのは本人だけ……か。

1人早歩きで行ってしまいう日菜を追うために俺も足早で自転車を押して行った。

## 商店街

次の日の放課後。今日はバイトも用事もないことだし羽沢珈琲店に行こうと思い、商店街に訪れた。相変わらず学生や主婦の人が多い。まあ夕方だしな。

ちなみに今日のバイトメンバーは真宗、天道さん、萩野、早乙女。もの見事に真宗以外みんな女の人だ。大変だよな。いろんな意味で。

様々なお店から漂ってくる美味しそうな匂いを我慢しながら歩いていると、いつも行事ごとを相談してくれる商店街の人に呼び止められた。

「あら、夕君いいところに！」

「こんばんは。どうかしました？」

「前に相談したバイトの件よ」

バイトの件……あーあれか。着ぐるみを発注して商店街のマスコットにしようって話だったか。モチーフは確か……クマ？ で、色がピンクとかって言う。

話の発端は商店街にもっと来てもらうにはって話からだ。そこでマスコットはどうかという話に発展。じゃあ外注して作ってもらおうというところに落ち着いたわけだ。

「もうすぐマスコットの着ぐるみが届くみたいだね。サイトの方にも募集出したからそのうち誰か来てくれるかも」

着ぐるみの中に入るからな。結構時給高めって言う話だ。夏は暑いし、冬は蒸れるから絶対大変だろうな……。まあ大学生とか男の人が来てくれるといいか。女の人じゃ厳しいところがあるし。「ならよかったです」

「相談乗ってくれたお礼に持って行って」

そう言つて渡してくれたのは袋に入つたなにか。

「漬物。よかつたら食べて」

「ありがとうございます」

今回は特に役に立ったというところは感じなかったが、そう言つてもらえるならいいか。父さんのいいつまみになりそうだ。

あれから日菜は特に落ち込む様子はなくいつも通り元気だ。本当に落ち込んでいたのかつてレベルで。

まあもともとあまり落ち込むタイプじゃないからな。日菜は目に見えていいんだが、問題は紗夜だ。全く表に出さないから、フオローのしようがない。

いよいよ、紗夜と日菜の関係もマズイ状況になつてきたか……。なんて考えながら俺はライブハウスの外の近くで流れる川を眺めていた。

放課後、ライブハウスでの練習はいつも通り行われている。バイトの休憩時間を利用して外に出てきたわけだ。

ここ最近は悩みの種が増えて困る。だが放つておける問題でもない。いよいよ見守るとか言えない状況かもな……。だが。

「どーしたの？ そんな深刻そうな顔して」

「今井か……。いや、やること多いなって」

「わかるー。練習でついていくのが精一杯だなくアタシ」

そう言うお手すりの上に缶コーヒを置いてきた。

「缶コーヒー？」

「あれ？ 缶コーヒーはダメだった？」

「いや。ダメではない……。悪いな」

缶コーヒーを受け取つて、早速開けて一口飲んだ。やっぱりコーヒーは美味しいな。しかもブラックという辺り、今井はわかっている。

「旭日君はすごいなく。友希那たちと対等に話せてさ」

「あの2人と対等に話せるようになるは大変だぞ？ 意見の食い違いが起こった時なんてめんどくさそうだろう？」

「あー確かに。でも…もう少し友希那の力になりたいんだよね」

同じだ。紗夜と日菜の力になりたいと何度思ったことか。

ふと思った。なぜ湊はあそこまでフェスにこだわるのかを。出会った頃から目指していたのはわかるんだが、理由がわからない。

「なぜ湊はあそこまでFUTURE WORLD FES.にこだわるんだ？」

「……友希那には内緒だよ？」

なにか訳ありらしい。

「わかってる。これ以上バンドメンバーの関係がギスギスするのも困るしな」

「ならよかった」

缶コーヒーを飲みながら再びゆっくり流れる川を眺める。

少しすると今井がゆっくり口を開いた。

「友希那のお父さんはね、ミュージシャンだったの。かなり人気があつて、メジャーで活躍してて。フェスに出るのが夢で。……でも、フェスには出られなかったんだ」

まるで自分のことのように話す今井。きつとたくさん悩んできたんだろうな。

「出られなかった？」

「うん。確か友希那は、”売れる音楽”を強要されてて、”今の君たちの音楽は要らない”って切り捨てられたって言ってたかな」

売れる音楽。

今の君たちの音楽は要らない。

売れるための音楽と、フェスみたいなどころに出るための音楽は明らかに違いが出る。FUTURE WORLD FES. っていうのはよっぽど本気じゃないと出れないらしい。湊のお父さんがいい例だ。

「そうか……。じゃあ二の舞になるわけにはいかない…よな」

「うん。だからこそ、アタシがもつと頑張らなくちゃいけない」

もう今まで以上に頑張ってるだろ？

手すりを掴む今井その手……前まで付いてたネイルはすっかりなくなり、代わりに小さな傷が増えている。どうやら頑張り屋なのは2人じゃないようだ。

「今井。俺には迷惑を好きなかだけかけてくれていいが、心配だけはかけさせないでくれよ？」

「旭日君……ありがとう。意外に優しいんだね」

「意外には余計だ」

飲み干した缶コーヒートを足元に置いた。今度は夕日をバックに映える景色を眺め始める。

「旭日夕の夕つて、もしかして夕日の夕から付けられたの？」

「……4割正解」

「えー？ なになに？ じゃあ教えてよ」

「気が向いたらな」

俺はそれだけ言い残してその場をあとにした。もちろん飲み干した缶コーヒーを持って。

昔の話だ。

俺の母さんは高校1年生の12月に亡くなった。ある日、遺品のあたる部屋に忍び込んだ日のこと。

何かないかと探って出てきたのは雰囲気紗夜と日菜に似た人と写っている赤みがかった茶髪の人。髪の長さは今の紗夜くらいか。これは俺と紗夜、日菜が産まれる前だろうな。

次の写真を見た時、真っ赤な髪の隣の人は誰だ？ と一瞬思ったが、さほど気にはならなかった。その隣は母さんなんだろうなって思うところだが、いかんせん俺が似ているところはあまりない。

この時はあまり気にせず、何十枚つてある写真を見漁った。

ちよいちよい父さんとイチャついてる写真が腹立つけど、仲良いなとツツコミを入れて怒りを収めたな。

母さんは美人で優しい所もあつたけど、朝は容赦なかつた。毎回ベッドから引きづり出されていたのは今でも鮮明に覚えてる。生きていたら俺も今とは違っていたかもしれない。寝坊癖は変わらなそうだが……。

結局大量の写真を見終わり、最後に1枚の紙を見つけた。そこには綺麗な字で旭日夕と名前の由来が書いてあつた。

昼と夜を繋ぐ夕日のように誰かの絆を繋げてあげるような優しい人になってほしい。

だから俺は決めた。途切れそうな日菜と紗夜の絆を繋げるんだつて。

その日からよく考え始めた。2人の関係について。深く入り込みすぎてもダメ。浅すぎてもダメ。結局まだ迷ったりしているが、今は……見守りながらできることをしていく。

最後に。母さん。夕つて名前をくれて、ありがとう。



## 第21話 可能性

### 第21話 可能性

C i R C L E ロビー

とある日。お客さんの出入りが無い時間帯。すなわちあの人。市野木さんがぐだぐだとうるさくなる時間帯でもあるわけだ。

「旭日ー。なぜ女の子が来ないんだ……」

「その言葉後ろにいる涼子に面と向かって言えますか？」

今までにない軽蔑しきつた目で見られていることをこの人は知らない。本当にどうかしている。無神経というか、気にしなすぎと言うか。

「だってここはガールズバンドを応援するために作られたところだろうか？」

「まりなさんはそう言ってみましたけど、実際は……」

言いたいことはわかる。特段すごくお客さんが練習しに来るわけでもない。かと言ってすつからかんといいわけでもない。つまり中途半端ってやつだな。マイナス面に振り切っているよりは遥かにマシなんだが。

「ライブ開催しても来るバンドが減ってるのは事実だしなー」

「市野木さんがナンパばかりするからだと思えますよ？」

「いやいや涼子ちゃん。みんなカフェテリアメインでバンド興味ないだけじゃない？」

「やっぱりSPACEの方が人気なのかな」

「前に旭日がバイトしてたところか。前に行ったことあるけど、オーナー怖くね？」

怖いなんてまだ良い方だ。C i R C L Eのオーナーなんて居るかどうかすらわからないんだから。今日もまりなさんからは来ているとは聞いた。しかし姿が全く見当たらない。前世は忍者で姿を隠すのが得意なのだろうか。

「お前よく頑張れたな」

「まあ、悪い人ではないので。しっかり仕事していれば言われること

もないですしね」

「いいな夕君。遠くてもよかったからSPACEでバイトしたかった」

涼子の住むところは俺の家の反対側と言っても良いくらいだからな。つまり商店街がある方とは逆。必然的にSPACEから遠くになってしまう。

ちなみに俺の家からも割と近い。だから選んだっていうのが一番デカイ。

「旭日を見てるとちゃんとしているのはわかるな。入ったばかりなのに仕事覚えるの早すぎたし」

「意外と物覚え早いんですよー。こう見えて人並み以上のスポーツも出来ますし」

「それは意外。雰囲気からはとても汲み取れないぜ」

「スポーツに関しては涼子ともう1人の友達に連れ回されただけなので」

遠回しにバカにしれている気もしくないが、まあそれも致し方ないか。外から見てもやる気ある雰囲気とは、とても言えないからな。

だべって時間が過ぎていくバイトとは……。

時が経つのは早いものです。1週間が過ぎていた。今日も俺はバイトで休憩の合間に来ているわけだが。バンドの雰囲気はどこか重たい。それも仕方ないことなただけだな。

今はラウンジで休憩中らしい。

「あれから……1週間か」

「どうしよう……全然見つからないよお」

まあ都合よく見つかるわけもない。隣歌から聞いた話をしようとも思ったが、なんだかんだ集まってしまったからな。奇跡的に見つかるかと思った。

「短期間にこの4人が集まったことの方が異常よ」

「異常どころの話じゃないだろ。ライブハウスでバイトしてきたけど、こんなすぐに集まった所見たことない」

「私は妥協してまでメンバーを揃えたくない」

確かにここまでのレベルにくるとな。妥協じゃ嫌にもなる。

「そうね。下手なものを聴かせるよりは、いつそ居ない方がマシかもしれない……。オリジナル曲は、キーボードありきで作ったけれど……」

オリジナル曲はキーボードありきで作ってたのか。バンドの問題はよく聞くけど曲とかどういうことを具体的にしているのかはわからないな。

「でもそれってさ。せっかく作った曲を、ベストな状態で聴かせられないってことだよね……?」

「そうなるだろ。さっきも言ったがここまで揃っただけ良い方だ。集まらない所なんて半年くらい集まらなかったからな」

それでも諦めきれないきれないのか今井が珍しく食い下がってきた。

「……ちよつと待って! アタシ友達なら多いし、音楽の経験とか関係なしに知り合い全員に電話してみる……っ」

珍しいこと? というか、ここまで本気なんだなっつてことを改めて感じる。半端な気持ちでこのバンドには居られないからな。主にきびしー2人が居るから。今にも噛みついてきそうな目してるし。

「あつ! じゃああこも! ”自分達だけの頂点”……”あこらだけの”カッコイイ、やりたいもん!!」

そう言うなあこも誰かに電話をかけ始めた。こういう悪あがきって大事なんだよな。意外と。よく格闘ゲームをしているとあがきって聞くけど、やるのとやらないのでは変わってくるからな。まあ、憐歌が言ってたんだけど。

「止めないのか?」

「休憩中だから良いわ。それに……」

「それに?」

「なんでもないわ」

もしかしたら。なんてことにかけてたくもなるか。気持ちはわかる。こうなったらいよいよ憐歌に頼んでみるしかないか。

一旦スタジオを後にしようとするが、さっきからなんかじつと見られてる気がする。俺の顔に何か付いてるのだろうか。

「湊、なんか俺の顔に付いてるか？」

「いいえ。あなたの雰囲気誰かに似てる気がするのよ」

「誰かに？」

音楽に詳しい湊のことだ。もしかすると俺の母さんのことを知っているのかもな。でも今話すことじゃない。いずれ話す時は来るんだろうけど。

「気のせいだろ」

「そう……かしら」

いつもなら気にも止めないのに今日に限ってはなんだ。ややこしいことになる前に俺はさっさと退散するでしょう。まだバイト中だし。

ラウンジを後にした俺は外の空気を吸うためにCIRCLEの外に出た。

「この歌ってD i V Aのだよね？」

「そうそう。もう解散しちゃったけど」

D i V A。2人組の音楽ユニットだったな。確か片方は引退して、もう片方はまだ残ってたはず。名前は……そう。東雲早希だ。

「懐かしい歌だな」

ふと左に視線を向けると、私服姿の人が立っていた。お客さん……それともスタッフの人か？ 少なくともバイトの人ではないと思う。

「あなたは……」

「まりなさんから聞いてないのか？ オレは狩場虚生<sup>かりばきよう</sup>。ここのスタッ

フだ」

狩場虚生…さん。初めて聞く名前だ。

「はじめまして。旭日夕です」

「まりなさんから聞いている。頼れる人物って」

「そんなことは……」

あるとはとても言い切れないな。普段のバイトをしている態度を考えると。……それにしてもこの人はなんだか話しやすいな。初めて話すはずなのに。

「狩場さんは今までどこへ？」

「オーナーの手伝いとか、いろいろとな。やっとこつちに帰ってこれた」

「そうだったんですね」

「何かあったら言ってくれ」

そう言い残すと狩場さんはCIRCLEの中へと入っていった。

天道さんとはまた違った感じで頼れる雰囲気がある人だ。2人が揃ったら本格的に言われたことをやっているだけで良さそうだな。

なんて考えながらお店の中へと戻っていった。

夜。バイト終わりに夜ご飯の買い物して帰宅。すぐに風呂、ご飯という流れでやることを済ませた。ちゃんと父さんの夜ご飯も用意したし大丈夫だろう。

部屋に行って早速パソコンの電源を付けた。いつものゲーミングチェアに座り、憐歌にメッセージを飛ばす。返事が返ってくる間にNF0を立ち上げておかなきゃな。割と良い性能だから立ち上がるのも早いし、PCゲームはだいたい快適に出来る。ちなみに自作だ。

少しすると憐歌からメッセージが返ってきた。どうやら今日は1人でNF0をやっているらしい。メッセージのやりとりはめんどうなので電話をかける。

『おつかれさま』

「おう。今日は大輝居ないんだな」

『今日は予定あるって』

人にはいろいろな予定があるからな。毎度言ってるが俺は基本ネットサーフィンをしているか寝ているかだ。最近は悩ませる出来事が多いからぼーっと考え事をする機会が多いな。

「そうだ。この前話したピアノが弾ける人の件なんだが、解決しそうだ」

『本当？ ならちようどよかった』

「よかった？」

『ゲーム友達なんだけどね。今日ちようど連絡あつて、バンドのキーボード？ のテスト受けるみたい』

そういうタイミングがいいこともあるんだな。湊達はちようどキーボードが出来そうな人を見つけて、隣歌のゲーム友達はキーボードの誘いを受けたわけだ。……別々のバンドだよな？

「その受けるバンド名聞いたか？」

『ううん。でも確か、最近バンドを組んだらしいよ？ もともとソロ活動してたみたいけど』

ってことは。俺の考えが正しければ……休憩中に電話した相手は恐らく隣歌のゲーム友達。隣歌に頼もうとしていた相手も隣歌のゲーム友達。つまりどっちにしろ同じ相手にたどり着いていたわけか。世の中意外とせまいな。

でも人前に出るのが苦手なのに大丈夫なのだろうか。いろいろあこから聞いているはずだからその点も含めて了承はするだろう。人前なんて慣れていくしかどうしようもないからな。

『夕君？ 聞いている？』

「あー悪い。ちよつと考え事してた」

『そっか。今日はイベント高速周回でいいんだよね？』

「ああ。まだ報酬受け取りきれなくてな」

毎回恒例になりつつあるイベント周回。バイトで忙しいからな。こういう時じゃないとたくさん回れない。まあ普通は毎イベント周

回ってキツいはずなんだけど、隣歌が居ると出来るのがすごいところだ。のほほんとしてるけど聞けばあれやこれや答えが返ってくる。

「今日もよろしくな」

『任せて』

こうして夜更かし確定コースへと足を踏み入れた。

23時過ぎに紗夜から『夜更かしはほどほどに』というメッセージが来ていたが、それに気づくことはなかった。

翌日。今日も俺はバイトだ。

「ふあく。眠い……」

「夜中までゲームしているからでしょう？」

1時までしかしてないからセーフ。と言いたい所だが、次の日の用事があることをゲームの最中にすっかり忘れていたからアウトのようだ。

そもそも今日のテストに俺は必要か？ 合格かどうか判断するのはあくまでも湊と紗夜。関係ない俺は不必要……と言いたいが、前回のセッションのようなことが起こらないとも限らないから行く。

「そういえば今日、白金さんの友達も来るって言ってたわね」

「そうだな。もともとその友達にピアノ弾ける子が居るって聞いてたんだけど」

あ、ヤバい。口が滑ってしまった。

「なぜそれを言わなかったの？」

「他に居るかもって思ったから最後の最後にしたんだよ」

紗夜の鋭い視線が刺さるが、今回は見逃してくれたらしい。

なんとか取り繕えた……のか？

ま、結局白金燐子さんにたどり着いたわかだが。なんか聞いたことあるような、ないような名前なんだよな。NFOをたまに一緒にやつ

てるRin Rinさんってことくらいしか知らないはずなんだけ  
ど。

確か紗夜は同じクラスだったはず。前にそんな話を聞いたような  
聞いてないような。大人しい子らしい。大人しい………子？

俺の頭の中にはすごい量のチャットの文面が頭に浮かんでいた。  
ほぼ俺と同じ速度で返ってくる。

しばらく歩きCiRCLEがある最寄りの駅まで移動すること数  
分。目的地にたどり着いた。

2人でポツリポツリ会話しながら待っていると、ちょうど見知った  
顔が1人と前にCiRCLEのライブで見たことがある人が現れた。

「おはよう、夕君」

「おはよう。その子が例の？」

「うん。君の知ってるRinRinだよ」

長い黒髪。大人しそうな雰囲気。NFOしてる時はめっちゃめっちゃ  
頼りになるけど、リアルだと優しくていい子そう。小言も言ってこ  
なさそうだな。なぜそこを重要視しているのだろうか。

「とりあえず歩きながら話そう」

そう言ってCiRCLEのある方に歩き始めた。恐らく湊と今井  
は先に行っているはずだ。後はあこも。俺達が合流すればとりあえ  
ずは揃うか。

「はじめまして、氷川紗夜さん。話はあこちゃんからよく聞いてます  
よ」

「宇田川さんから？」

「オンラインゲームやる時よく話を聞くから」

隣歌って意外とコミュニケーション能力高いんだよな。初めて話  
した時も俺からじゃなくて向こうから話しかけてきたくらいだし。  
ゲームやってる時もそうだが、気が効くんだよな。



紗夜と隣歌が話しているのを後ろから眺めながら、隣を歩く白金に声をかけた。

「はじめまして……ではないか。NFOではいつも助かってる」

「いえ……こちらこそ。タンクじゃないのに……タゲ取ってくれて……助かってます」

繋がりが今のところゲームしかないから会話はこんなもんだらう。リアルでこうして話すのは苦手そうだし、あまり話しかけないでおくか。

「(な、何か……話さないと)」

「旭日さん……は、いつから……NFOやって……るんですか？」

「高1の時だな」

「そう……ですか」

なんだろう。気を使われてるような。

「無理して話題見つけなくても大丈夫だ。無言は慣れてるし」

「(私が……話の苦手なこと……気づいたのかな?)」

俺はあまり話しかけられる方ではないんだよな。無表情な上に目つきが多少悪いらしい。もちろん素行不良なわけでも、絶賛反抗期なわけでもない。そんな余裕はなかったしな。

よくは説明出来ないけど、白金との無言の空気は嫌いじゃない。嫌いでもずつと黙っていることには変わりないけどな。

しばらく歩いているとようやく集合場所が見えてきた。

「隣ちゃん、大丈夫？」

「うん……少し緊張……してるけど。大丈夫」

いよいよだな。もしかすると今日、5人目のメンバーが決まるかもしれない。そうしたらいよいよフェスに向けての練習が始まる。そう簡単な道のりではない。だけど、心のどこかで不思議といける気がする。

運命という歯車が今。少し動き出した。

## 第22話 5人の音

第22話 5人の音

C i R C L E カフェテリア

予想通り湊、今井、あこの姿があった。俺達を見つめるなり、あこが手を振りながら大きな声を上げる。

「あつ。れんさん、りんりんいたーっ!」

今日も元気なことだ。その元気はどこか湧いてくるのやら。

3人の所に行くと、あこがすぐに白金に歩み寄って話しかけ始めた。

「もーっ。ピアノ弾けたなんて驚きだよっ! 何年も付き合ってるのに、全然知らなかったあ。れんさんも教えてくれなかったし!」

「てつきり僕はもう知ってるのかと思ったよ」

「あこちゃん……ごめんなさい……伝える機会が……」

2人が会っている時はわからないが、少なくともNFOをやっている時にピアノの話題は全く上がらないな。いつも通りのくだらない雑談を永遠4人または5人でしているわけだし。

「あつ、違うの。悲しいとかじゃなくて、びつくりしただけなの」

「この子が燐子ちゃん? ヘーっ。あこの友達って言うから、なんてゆーか……似たよーなタイプの子想像してたけど」

話に割って入ってきたのは今井。偏見ではあるけど、あこの友達となると似たようなタイプって想像するのはわかる。俺もチャットを見た感じ結構話すタイプの人かと思っただしな。実際は全く違ったが。「りんりんはすっごいんだよっ。ネットゲでは無敵なんだからっ!」

「ゲ、ゲームの……話は……あこちゃん……あんまり……!」

「音楽の話が聞きたいわ。燐子さんといったかしら? 課題曲はあなたのレベルに合ってた?」

まさに一刀両断。今日はセッションをしに来たわけだし。そして湊の問いに白金が必死に答え始めた。だいぶ緊張しているんだろうな。そりゃあそうか。結果次第ではこのバンドのメンバーになる上にライブにも出ないといけないわけだし。

「友希那…さん…！ あ…わ、わた…し。動画と…その…たくさん一緒に」

「動画？ 演奏レベルを確認したいのだけれど、それは難しかったという意味？」

なかなか会話が噛み合わない。それでも話は次々に進んでいく。今度は紗夜が話し始めた。

「白金さん。同じクラスだけど、こうして話すのは初めてね。ピアノ、有名なコンクールでの受賞歴もあるそうですね。いつも学校では静かなので、こういった場に来るとは思いませんでした」

受賞歴もあるんだな。そうすると結構すごいじゃないか？ 確かにピアノのコンクールはいかに正確に演奏出来るかだったはず。となると譜面通りに演奏するのは普通に出来そうだな。

「…コンクールは…小さな…ころの、話で…。わたし…ただ」

威圧的な態度ではないけど、少々圧が強い2人だからな。思ったように話せないのはわかる。俺もその圧に押されることがほとんどだ。湊に至っては聞いた上で、バツサリ切り捨てるからな。

「(ただ、この人達と…演奏したい。その気持ちだけで…わたし…来てしまったけど…)」

なかなか続かない会話に紗夜が心配そうな言葉を並べ始めた。

「宇田川さん。本当に大丈夫なんでしょうね？」

「りんりんはあこの戦友で、大大親友ですつ。だから、あこは絶対大丈夫って信じてますつ！」

「…っ！ あこちゃん…」

戦友って。それはゲームの話だろうよ。さっきから俺の隣で隣歌は頑張れみたいな感じで見てるけど、少しくらいフォロー入れてやれよな。

「でも、この子が演奏しているの、見たことないでしょう」

「なくても、信じてますっ!!」

すごい信頼感だ。そしてその信頼感が今の白金にどれだけ重くのしかかることか。いや…もしかすると、期待に応えようとして頑張れるかもしれない。

「……オーディションはあなたの時と同じで、1曲だけよ。それでダメなら帰ってもらおう」

いつもの厳しいセツトだな。こう言う時の湊は冷たいというか、きっぱりしているというか。

「はいっ！ がんばりますっ！」

白金が答える所をなぜかあこが答えた。確かにセツションとはいえあこも頑張らないといけないんだが、1番頑張らないといけないのは白金なんだよ。

「あはは、あこ。頑張るのはあんたじゃないでしょ」

「あこちゃんらしいな」

呑気なもんだな、憐歌。この様子を見ると本当にただ見学に来ただけのようだ。

「はい……わたし…が、がん… ぱり…ます」

「……はあ。期待に応えてくれることを、祈っているわ」

「なるようにしかならないだろ」

そう言ってお店の方へと向かって歩きだすと、俺の隣に憐歌が歩み寄ってきた。

「憐ちゃん、大丈夫そうでよかったよ」

「あれで大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃなかったらここには来ないからね」

なるほどな。確かに大人しい子だし、自分からオーディション受けたって言った時点で相当覚悟はしているみたいだな。何事も自分から挑戦するっていうのは意外と怖いもんだ。失敗したらどうしようなんて思うし。

「それにいざとなったら夕君も居るしね」

「俺をあまり当てにするな。ただのバイトなんだから」

俺には紗夜達ほど音楽の才能なんてない。強いて言えば多少知識がある程度か。

C i R C L Eの中に入ると、ロビーには涼子と鈴音が受付をしていた。早乙女だと必ずと言っていいほど変わってきてくださる？ と言ってくるんだよ。真面目に仕事をしてほしい。

「あれ？ 夕君早くない？」

受付の前で一旦立ち止まって答える。

「今日は湊達のオーディションの日なんだよ」

「ということはキーボード出来る人見つかったんだね」

「加入出来るかはまた別の話だけど」

そう言い残して俺は着替えるために事務所の方へと向かった。

私服から着替えて向かったのはAスタジオ。おそらくすでにセッションする準備は整っているだろう。

ノックをしてから扉を開けて中に入ると、ちょうどセッションが始まる前だったらしい。いつもの定位置に湊達が着いている。俺は離れて様子を見ている隣歌の隣に立った。

「いきますよ。白金さん、いいですか？」

「は、はい……」

緊張した様子で紗夜に答える白金。

始まる前にスマホを録画モードにして手に持った。もしかするとこのセッションも良いものになるかもしれないからな。

そしていよいよセッションが始まった。

セッションが始まって数秒。5人の音の一体感に驚きを隠せない。キーボードが居ることと普段とはかなり違うのはわかる。だがそれだけじゃない。

「(すごい……動画と合わせるより、ぜんぜん……)」

前回のセッションと同じ。その場でしか出せない音が2回も聴けていることに正直驚きを隠せない。

「……………この子……………！ 何なの？ 私、このキーボードに引き寄せられて……。——いえ。違うわ。この感覚……………」

「(この感じ…同じだ…！ 初めて4人で演ったときと…！ それに…。…友希那。昔みたいに…)」

「(やつぱ……りりんは無敵だねっ！)」

「(…楽しい……！ 1人より……ぜんぜん。楽しい……！ もっと……弾きたい。わたし……弾きたい！)」

演奏はあつという間に終わってしまった。だがずっと頭の中に残っている。スマホの録画をずっとしたままなのさえ忘れてしまうセツシヨン。これはもしかするかもしれない。

「なんか……すごかった。4人より……………」

「私は問題ないと思いました。……………ただ。ちなみに、湊さんの意見は？」

「……………なぜ？ ……こんなこと、何度も……………おかしいわ」

たぶんあのその場でしか出せない音に2度も遭遇したことに多少混乱してるのかもな。水分補給をしながらだが、まるで聞いていない。実際のところ俺も同じ気持ちだ。この短期間で2回も聴けるなんて普通思わない。

「えっ。そ、それって……………こ、こんなによかったのにダメってこと？ な、なんでですかっ？」

話を全く聞いていなかった湊の言葉と宇田川のなんとも言えない食い違い。合ってるけど合っていないのがすごいな。

数秒後。ようやく反応した。

「あ……………いえ、演奏は問題ないわ。技術も表現力も合格よ。……………旭日、あなたの意見を聞かせてほしい」

「……………毎度毎度。なんで俺なんだ？」

「それは、私も疑問に思うわ」

紗夜も疑問に思ってしまう辺り俺はやはりポンコツなのだろうか。

別に意見を言うのは構わない。全くと言っていいほど楽器の演奏経験なんてないし、演奏を見たきただけだ。湊が欲しがるような意見を出すのは厳しい。

「ふざけているわけじゃないのよ。ただ、あなたの観察眼は素晴らしい。だから聞いてるのよ」

その言葉。あの人もよく言ってたよ。『あんたは人のことをよく見てる。その観察眼は素晴らしいよ』ってな。ミスとか焦りはよっぽど顔や態度に出ない人の方が稀だ。例としては紗夜か。

まあ1番見てわかるのは本気で演奏してるかしてないかだな。そう言った部分では……SPACEのオーナーと同じだった。

「特に着眼点がよくテレビに出ている東雲早希と似ている」

あーあの。元D i V Aって音楽ユニットの人か。なんか冷たい人だよな。すごい厳しいって話だし……そんな話ではない。

「なるほどな。……確かに、今のセッションは良かった。なんらかの形で合わせていたのは容易に想像出来る。他の曲でも同じく出来るだろうな」

「そう……ならぜひ加入して」

俺の言葉を否定することなく飲み込み、加入が決まった。今思えば練習を見てから意見を言った時否定することはなかったな。練習以外での当たりは妙に強いが。

「……あ……」

「や……やったあー!! やっぱりりんりんはすごい最強だよ!! この短い期間でノーミスだったもんねっ!」

短期間。それだけの時間でよくここまで合うものだ。さつきも言ったがなんらかの形で合わせていたとは思う。それを差し引いても今のセッションは素晴らしかったと思う。

今思い出したスマホの録画を止めた。後で要らない部分を切らないとな。

「やっぱり隣ちゃんはすごいや」

「こんなことならもつと早く話を聞いてればよかった」

「確かに。でも何か引つかかる……」

その何かについてはすぐには出てこないようだ。俺と2人で話しているよそでこれでもかと喜んでる宇田川と白金。

「あ……りがとう。でも……家で……動画と、一緒に……何度も……弾い

てたから」

「あー、あこがあげた練習動画のこと？ あれで練習してたんだ」

やっぱりな。練習動画ってことは前に撮影したやつか。何かのヒントになればと思っただけだが、ここで実を結ぶとは。何事もやってみなくちゃわからないってことか。……要らない部分の編集大変だったんだけどな。

「……なるほど……」

「妙に一体感があったとは思いましたが……」

「あなたの観察眼も侮れないわね。さすがだわ」

「なんだ急に……気持ち悪い」

隣でくすくす笑ってる隣歌だが普段こんなことないんだからな？

そんな褒められたら普通に気持ち悪い。普段の態度見てるとなおさら。……とうとう飴と鞭の使い方を覚えたのか？

「いいわ。あこ、燐子さん、……リサ。あなた達も含めて、一度この5人でライブに出る」

出るとは言いつつも宇田川と今井は含まれてなかったのか。あの了承の仕方だと4人で出るみたいなきもちだったんだけどな。

「ラ、ライブ……!? うそ……」

「あー、このことか」

「このこと？」

引つかかる要素がわかったのか、珍しくどうしようという表情を浮かべている。ライブに出るのが何か問題でもあるのか？ その件も了承して……。

「やったねー！ じゃあ……燐子ちゃん。いや、燐子。これからもよろしく！」

喜ぶ今井だが、白金の様子の変化に気づいたようだ。今の白金を見てわからない人は居ないと思うが。

「……って燐子、どうしたの？ 慌てて。なんか顔色悪いよ!? あこ、ちゃんと説明した？」

「したよっつ。バンドしよって！ スタジオであこ達と一緒に、キーボード弾きに来てっつて！」



……はあ。ここにきて全てをあここに任せたのが仇になりかけてる。ちゃんと伝えることを確認しなかった俺たちも悪いがその言い方だとな。普通なら。

「……うくん、あこ。その説明、ちよつと足りないかも」

「そうなるよな。人前が苦手ならなおさら」

「あははく。あこちゃんらしいけど……」

見ろ。あの憐歌が苦笑いを浮かべてるぞ。白金の事情を知っているなら一番伝えないといけない部分だろ。一緒に弾けるかどうかよりも。そしてそんなことを言うとは大体は。

「わた…し、そこまで……考えて……」

「なら、もう帰って」

だろうな。湊友希那がそう言わないわけがない。もともとバンドを組む以上ライブをするなんて必須だからな。だがもう少し言い方と言うものがある。そこも紗夜と似ている。

「どんなに力があっても、やる気のない人間に、割く時間はない。他のキーボードを探すだけよ」

そう言う彼女は真剣そのものだ。そんな湊の姿を見ると憐歌は数歩前に出て白金の方に向いた。庇護するような言葉を言うんだろうか。

「憐ちゃん、この人は本気だよ？ 本気で音楽と向き合ってる。……憐ちゃんは違う？」

意外にも憐歌は全く違う言葉をかけた。ああ……そうか。ゲームの類には本気で打ち込む憐歌だからこそ、わかるんだろう。湊がどれほど本気なのか。

「ここでやめるのも1つの手だと思う。一度挑戦して情報を集めるのは基本だからね」

「憐さん?! ゆ、友希那さ——」

宇田川の言葉を遮ったのは意外な人物だった。

「……っ…わ、わた…し。……きたい！」

「っ!? り、りんりんの大きな声、初めて……」

長い時間一緒にいる宇田川が驚いてるってことは本当に大人しい

子なんだろう。ここまで様子を見てると少々驚くのはわかるが。正直このまま引き下がると思ってた。

「わ、わたし……皆さんと。弾きたいです……つ。が、がんばります……。お、おねがい……します……！」

「……そう。燐子。その気持ち、ライブで見せてもらおうわ」

なんとか5人揃ったということでもいいだろうか。まだ不安要素が多すぎるが、この5人なら……ライブをしても大丈夫だろう。後は白金の気が滅入らないようにフォローでも入れないとな。でないとな。パルタ2人がやらかしそうだ。

「夕君。時々燐ちゃんの様子見てくれると嬉しいんだけど」

「そのつもりだ。じゃないとあの2人に潰されかねない」

「ありがとう。……やっぱり夕君はすごいね」

今の会話でなぜそう思ったんだ？ 今までの会話だって。

「湊さんの言葉に何も言わなかった。普通あんな言い方したら怒るでしょ」

そのことか。まあ憐歌の言葉もわからなくはない。

「湊友希那はそういう奴ってわかってるからな。それに音楽にかける情熱を知ればああ言ってしまうのも納得してしまう」

「本気だからだね。僕にも少しだけわかるよ」

「ああ。遊びじゃないんだ」

だからこそ紗夜と湊は分かり合ってる。お互いに本気だから。FUTURE WORLD FES. に出るために。その為には同じ気持ちのメンバーでなければついては来れない。だから今までだって……。

「じゃあ僕はそろそろ帰るね。ライブ観に行くから」

それだけ言い残して憐歌は1人帰っていった。まあこのまま白金含めて練習だろうしな。セッションだけして終わりとかさすがに。俺もいつまでもバイトに穴を開けとくわけにもいかないから戻るとするか。

「俺もバイトに戻る。時間厳守で頼む」

「わかっているわ」

以前セッションをした時のものと一緒にバックアップをとっておくとするか。いつの日か…こんな音をずっと奏でられる日が来るのだろうか。

5人揃ったはずなのに。俺の中でまだ不安は拭いきれない。

## 第23話 Roselia 前編

第23話 Roselia 前編

花咲川高校 教室

あれから時は過ぎてライブ前日の授業中。

俺はいつもより上の空で授業を受けていた。明日はいよいよ紗夜達のライブの日。同時にバイトがものすごい忙しい日でもある。ライブなのだから仕方ないことだ。なにも問題が起きずに普通に終わってくれば1番良いんだけどな。

機材トラブルとかがあつてなかなかそうもいかない時がある。お客さんを待たせるのは絶対にダメだからな。SPACEのオーナーがよく言っていた言葉だ。

紗夜も以前のようなことにはならないだろう。これで少しは心配しなくて済みそうだな。俺は明日のライブが円滑に進められるよう頑張ればいい。

上の空で受けていた授業はいつの間にか終わり、すでにお昼の時間になった。ここ最近昼を抜いていることが紗夜になぜかバレて、お小言を少々いただいたわけだが。なぜバレてしまうんだろう。これはあれだ。誰かが告げ口しているか、バレてしまう運命なんだな。

バレてしまう運命は納得いかないが、告げ口しているような奴は俺の周りに居ない。……はずだ。智紀と涼子が紗夜と話しているのはほとんど見ないからな。

「なーに難しい顔してるんだよ」

「別になんでもない」

「ホントかー？ あれだろ。明日のライブのことだろ」

全く違うんだが、こうなるとしつこいからな。適当に話合わせておくか。

話そうとすると俺の前の空いている席に智紀が座った。

「明日は紗夜さんが出るもんな」

「そうだな。人がたくさん来そうだ」

そう言いながら鞆から前日に買ったやまぶきベーカリーのパンを5個だした。

「お前の鞆にはパンしか詰まってないのか？」

「朝食ってないんだよ」

そうは言ってるけど智紀なんて弁当に加えて売店で買ってきたのであるうおにぎり2つあるからな。部活があるとはいえ、お前もなかなか食ってる方だと思う。

「2人ともすごいね」

「涼子かー。珍しいな、こっち来るなんて」

「友達はいいいのか？」

「うん。明日のライブのこと話したかったし」

お昼は俺の所に智紀が来たり、来なかったり。涼子は基本友達と過ごしていることが多いが、ライブの前日になるとこうして話に来る。

隣の席に座ると、机を俺達の方へと向け椅子に座った。

「明日かー。オレも行ってえなー」

「エースストライカーが休んだら大変だろ」

「まあなく」

まんざらでもない顔しやがった。実際上手いわけなんだが、少しは謙遜というものをだな。……………しないかコイツは。

「そういえばさ。紗夜ちゃん達のバンド名ってもう決まってるの？」

「今日言いに来るとき。結構悩んでたみたいだな」

「そんな時間かかってもいいもんなのか？ 明日なのに」

「そこは夕君の腕の見せ所だよ」

なんだその智紀のなるほどもみたいな顔は。バンド名決まってるやと大変なんだからな。出演バンド名のところどう誤魔化すのか考えないといけないんだから。1バンドだけバンド名決まってるないポスターなんて見たことないだろ？

「で、あのアイディアってことか」

「それなんだけど、私じゃ思いつかなかったよ」

そう涼子が言うと、スマホの画面を俺達に見せてきた。

「たまたま上手くいっただけだ」

「ご謙遜を〜」

お前は少しくらい謙遜しろ。

出演バンドを書いた所には、”あの歌姫がバンドを結成!”とだけ書いてある。別に秘密にする必要もないが、バンド名が決まってない以上こうするしかなかった。まあ気になって来てくれる人も居るだろうし、湊は知名度が結構あるからな。歌姫とだけ書けばわかる。

スマホの画面を裏にして机の上におきながら会話を続ける涼子。

「その効果かわからないけど、チケットすぐ売り切れだったしね」

「へ〜。さすがだな。巷で話題の湊友希那は」

「追加でライブしてもまだ儲けられるな」

「夕君、悪い顔だよ」

いやいや。儲けられるならそれに越したことはない。いつそのことライブ配信なんてしたらもっと儲けられるんじゃないかって思うくらいだ。今の世の中はネットだからな。

「部活引退したら3人でバンドでもやらね？」

「唐突だな。急にどうした？」

「前からやってみたかったんだよ」

バンドか……。誰が何をやるのか全く想像出来ないんだが。

「面白そうだけど、なんか想像出来ないね」

「同意見だ」

「やるってなった時考えればいいんじゃない？」

なんて適当な奴なんだ。言い出しつpegがこんなんでは先が思いやられる。……。とは言うものの、心のどこかでは少しだけ期待したのは内緒だ。

C i R C L E    ロビー

放課後。

学校が終わってすぐにバイト先に来たわけだが、絶賛忙しい。学生が多く来る時間帯と俺のシフトが重なるからなんだが。

外のカフェにも花女、羽丘、月ノ森の生徒が多く見受けられる。ちなみに月ノ森はお嬢様の高校……前に駅前でギャルっぽい子を見たが、たぶんそうだ。

「やつぱりこの時間はすごいね〜」

「そうですね。高校生がわんさか来ますから」

まあ仕方のないことだ。外のスタッフさんも忙しそだが、回ってないわけではない。よつぽどの時は呼ばれるんだけどな。たまにスツツフなのに一緒にお茶してる奴がいるのがなんとも言えないところだ。

予約して来てくれたお客さんを一通り通し終えた辺りで一旦落ちて着いた。

「そうだ夕君。男の人に今度お茶行かないって誘われたんだけど……これってデートかな？」

予約リストを眺めながら四十崎さんがいつもの出来事を話しかけてくる。

「デートって考えるのが妥当じゃないですか？」

「でも誘われたカフェが猫カフェなんだよね〜」

「なるほど」

3度の飯より猫が好きと自分で断言していた四十崎を猫で釣るとは。頭がいいのか、バカなのか。ちなみに四十崎さんとは何回か猫カフェに行ったけど、俺の話どころか存在そっちのけで猫とずっと戯れていた。俺は俺でコーヒーとか飲みに来たかっただけだからいいけど。つまりそういうことだ。

「いいんじゃないですか。ただで猫と遊べますよ？」

「だよね〜じゃなくて、さすがにそれは悪いよ」

バツの悪い表情を浮かべる四十崎さん。この人は本当に優しい人だ。

「いやいや。こういう時は相手がお金出してくれるんですから甘えなと。なんなら巻き上げる勢いでいった方がいいです」

「夕君ってたまに心ないこと言うよね……」

そんなことはないと思う……はずだ。最近そういうことを言われることが増えた気がする。

なんて考えているとC i R C L Eの扉が開いた。いつもの御一行だ。今日はちゃんと制服着てるし大丈夫だろう。

「こんにちは、友希那ちゃん」

「こんにちは。予約していた湊です」

「はい。いつものスタジオですね」

この時間はだいたい誰か居るからな。俺が相手をすることはほとんどないんだが。

「旭日先輩、今日はちゃんと制服着てるんですねっ！」

「あこく。旭日君だっちゃんとしてる時はしてるよ」

「だらけている時の方が多いわ」

あこにまで言われるようになったか。それに今井は全くフオーロになってない。紗夜に至ってはトドメ刺しに来たからな。確かにだらけていることは多いが何もそこまで指摘しなくても。まだあまり俺のことを知らない白金が勘違いしてしまうだろ。

「旭日さんって……しっかりしてる……イメージだけど」

「りんりん。それはゲームの中での話だよ？」

「おい。俺だっちゃんとしてる時はあるからな」

全く……いらん誤解を与えるんじゃない。敬ってくれる後輩は羽沢達だけだよ。若干一名怪しいのがいるがな。

「お喋りはそのくらいにして、早く行くわよ」

「はい」

ようやくスタジオの方へと向かっていくRoselia一行。移動する直前、四十崎さんが何やら湊に耳打ちをしたような気が……。気のせいだろうか。

「湊に何か言いました？」

「ううん。時間だけ気をつけてねって」

「そうですか」

小声で言う必要あったのだろうか。まあ深入りする必要もないし



いいか。後でバンド名聞いておかないとな。  
また平穏な日常へと戻っていく。

しばらく経った頃。

四十崎さんは、さっきまで使われていたスタジオの掃除へと行つた。俺は引き続きロビーで受付をしている。まあ次の予約を表に書いてあるだけだが。

「ちょうどいいところに」

「天堂さん？　どうかしました？」

「次のライブで聞きたいことがあつてな」

次のライブつて明日のやつのことだろうか。思い当たることは1つだけだ。

「君の幼なじみが居るバンドの名前まだ決まってるやないようだが」

「それに関してはもう少し待ってもらつても大丈夫ですか？」

「わかった。ずいぶん肩入れするんだね」

「そういうわけでは……………」

「冗談だよ」

天堂さんが言うのと冗談に聞こえないのは俺だけだろうか。いや、決してそんなことはないはず。…………天堂さんも冗談を言うんだな。

すると何かの音が聞こえてきた。これは…………電話か？

「電話鳴ってませんか？」

「私か？」

「おそらく」

バイト中は通知切ってるからな。俺ではない。

自分のスマホを取り出し、電話をかけてきた相手を確認するなりすぐに切ってしまった。バイト中だからと言っても、大事な用かもしれない。それすらもわかりきっているなら話は別だが。

「いいんですか？」

「構わない。またお見合いの相手だ」

「お見合い？」

「旭日が気にすることはない」

そう言う天堂さんはふっと笑って事務所の方へと戻っていった。確かにしつかりした性格な上に美人だ。お見合いの話も来て当然と言えば当然か。……ちゃんと天堂さんという人の内側を知りたいと思う人たち。なんだろうか。

あれから早いもので1時間が過ぎていた。もうぼちぼち日が沈み始める時間帯だ。今日は珍しくあの人とシフトが被ってるのに絡まれている。まあ絡んでこなくていいんだが。

オレンジ色に染まる外の風景をぼーっと眺めているとスタジオのある通路の方から足音が聞こえてきた。

「なーに黄昏てるの？ 旭日君」

この声は今井か。彼女の声が聞こえてきた方に視線を向けた。

「休憩か？」

「まあ、そんなところ。旭日君は？ もしかしてサボリー？」

「んなわけあるか。ロビーに誰か居ないと困るだろ？」

今は暇だがこの後が忙しいんだ。学生の次は入れ替えて社会人が多く来るんだよな。仕事終わりとか大学のサークル終わりとか。どの時間も絶えずお客さんは居るって感じだ。

「そつか。そう言えば市野木さん見ないね」

「見ない方がいいだろ。あんなナンパバカ」

「一応年上だよ？」

市野木さんは以前紹介したから補足しよう。テンションが高く、コミュニケーション抜群。ただしバイトの目的が可愛い女の子を見るためという不純極まりない為やはり残念な先輩。真宗とは正反対だな。一応ムードメーカー的な人。

「まあ一応だがな」

「あはは〜… …あたし、飲み物買ってくるね」

今井もさりげに一応つて言ってるからな。なんか年上って感じがしないんだよ。あの人。

「チョリース。リサちゃん元気ー？ 今度お茶しない？」

今時間かない挨拶をしながら扉を開けて入ってくる市野木さんが今井と入れ違いで現れた。それでも仕事はちゃんとするからなんとも言えないんだよな。

「こんにちは、元気ですよ。お茶はまた今度の機会に」

「そりゃあ残念」

まずは息をするようにナンパをするんじゃない。全くこの人は… …気がつくといつもナンパをしている。どこにでもいるナンパ野郎だ。

今井が外に出ていくのを確認してから声をかけた。

「後輩からの頼みなんですけど、早乙女なんとかしてきてくれませんか？」

「あーそれはムリぽー」

なんだその腹立つ言い方は。

「あの子早乙女財閥の一人娘だよ？ 何されるかわからないじゃん」

その気持ちはわからなくもないけど、それを言ったら俺も同じなんだが？ なんなら肅清されてもおかしくないレベルまできている気がしてならない。

「ところで旭日… …話があるんだけど」

「また面白そうなバンド見つけたって話ですか？」

「いいや… …君の幼なじみのバンドのキーボードの子を紹介してほしい」

どうやら張つ倒すだけじゃ物足りないらしい。もういつそのことを頭を吹き飛ばした方がいいのではないだろうか。なに堂々とキメ顔で言ってるの？ 絶対ナンパする気だよな？

「あの子に声をかけないなんて、オレのナンパ道に反く行為だ!!」

「よろしい。戦争だ」

「怖い怖い!!」

何がナンパ道だ。アンタはナンパしてる暇があるなら外でビラ配ってきたらいい。ついでにお客さんも連れてくるんだぞ？ 売り上げに貢献するんだ。

「相変わらず君はケチだなく。可愛い子の1人や2人ナンパさせてくれよ〜」

「お客さんに手をだすな。バイト以外の時にやれ」

「お、おう。先輩としての威厳がない……」

アンタにはもともとなかったから安心しろ。見ず知らずの人に息を吐くように声をかけられることは素晴らしいことだが、その才能の使い方を間違っているからやはりダメだ。

「じゃあ外行ってくるんで、お願いしますね」

「ほーい。任せておけて」

信用できないんだが？

カフェテリアに出ると例の如くお客さんと楽しそうに会話している早乙女の姿が。前にも少し話したとは思いうから、こちらも補足。

早乙女は月ノ森に通う高校1年生。ナンパする先輩と違うところは本当にお客さんがライブを見に来てくれるという所だ。本人はライブが本当に好きで情熱的に語る。それに影響されて見に来てくれるって話だ。

ただバイト中だから注意しないといけない。そこは疎かにはできない。

「楽しいお話中すいません。早乙女さん、バイト中ですので」

「あら旭日さん。わざわざご忠告ありがとうございます」

なんだその今いいところだったのにみたいな顔は。一応注意しないとダメなんだから仕方ないだろ。こういう役回りは慣れてるからいいが。

「え〜麗華ちゃんもう行っちゃうの?」

「もう少しだけ話そうよ〜」

「ただけ仲良くなってるんだよ。もはやそれは才能と呼んでもいいくらいだ。」

「つておっしやられてるんですけど……」

「一応バイト中だ」

「そうですね。ならもう少しだけ」

「そう言いながら女子会を再び始める早乙女。これは弱ったな。あまりよろしくはないが、ここまでだ。ライブの時はテキパキ仕事をこなしてくれるんだが。普段からはそうもいかない。」

「旭日さん、紅茶のおかわり持ってきていただけます?」

「……俺が行くのか?」

「お願いしますね」

「この純粹な笑顔に悪意は全く感じられない。さすが早乙女麗華。純粹ゆえの狂気だな。」

「結局紅茶を取りに行ったわけだが……俺は知っている。早乙女がシフトに入っている時は1人多めに人が入っていることを。」

「全くC i R C L Eにはユニークな人多すぎる。飽きないだろう?」

「再びロビーに戻るとさつきまでテンション高かった人がまるで蛇に睨まれたカエルのように動けずいた。なぜかと言うとだな。市野木さんの前には狩場さんが腕を組んで睨んでいるからだ。」

「いやホント……真面目にやるんで……」

「その言葉は聞き飽きた。次からは気をつけるんだな」

「はい……」

「注意してもなおす気のない人があんなに反省している。ここ2週間くらい狩場さんを見てきたが、大抵の人は頭が上がらないらしい。まりなさんと違ってちゃんと注意をする人だからな。いや、まりなさんも注意はしてるが優しい人だからあまり強くは言わないだけか。」

「とりあえず今空いてるスタジオの掃除してきてくれ」

「わかりました。全部ですか？」

「全部だ」

「で、ですよ〜」

すると市野木さんは大人しく空いているスタジオの掃除へと向かった。軽くため息を吐き出すと、近くに居る俺の存在に気づいて話しかけてきた。

「あの人はいつもあんな感じで困る。旭日も大変だろうか？」

「まあ…でも市野木さんはそういう人だって割り切っているので。忙しい時はちゃんと仕事してくれますし」

「心が広いな。だがサボり過ぎはよくない」

「そこは同意します」

この後、取り置きの件をすっかり忘れていたことを思い出した。結局狩場さん監査のもと早乙女が自分で処理をしていたが。

旭日家 自室 ベランダ

今日のバイトもハードだった。別の意味で。ナンパバカとお嬢様を相手にするのは結構疲れる。特にナンパバカ。一応先輩だけどあの人は使える時と使えない時がはっきりしている。まりなさんも大変なはずだ。

「俺もしっかりしないとな……」

明日はライブだから余計に気合を入れなければいけない。トラブルがあるとお客さんや出演者にも迷惑だし。SPACEの時は何故かスタッフと出演者が協力して対処してたな。あれはあれでよかった。

とりあえず何かあっても今は狩場さん、まりなさん、天堂さんが居るから大丈夫だろう。

夜空を眺めていると、隣の窓が開く音が聞こえてきた。

「今日も遅かったのね」

「明日はライブだしな」

いつからだろうか。仕切り越しの相手を確認しないで話すようになったのは。ベランダに出るのは基本俺と紗夜とだからってのもあるけど、普通は確認するよな。ちよつと乗り出せば見えるんだが。

「いい演奏出来そうか？」

「もちろんよ。練習の成果を出す時だもの」

今回はライブ終わったら解散なんてことはおそらくないだろう。もしかするとFUTURE WORLD FES. だって夢じゃないかもしれない。

いつからか紗夜はフェスを追うようになった。日菜と比べられない為に。その夢が叶ったら……紗夜はどうするんだろうか。ギターはやめてしまうのだろうか。

「紗夜……」

「どうしたの？」

「……いや。明日頑張れよ」

そう言い残して俺は部屋に戻っていった。

仮にフェスに出たらギターをやめるって言ったら俺は……たぶん止めるんだろう。たとえどんな思いで弾いていたとしても。

紗夜の音が1番心地よくて、好きだ。

## 第23話 Roselia 後半

### 第23話 Roselia 後編

CiRCLE カフェテリア

とうとうこの日がやってきた。湊達、5人の初ライブ。噂を聞きつけてか、すでにお客さんが押し寄せて来ている。毎度のことながら結構大変だ。あの天道さんも少しばかり大変そうだ。

「夕せんぱーい！ ヘルプ！ マジヘルプです!!」

俺は主にあいつの世話が大変だ。近くにまりなさんが居るんだから外に居る俺に言うんな。そしてそんな大きな声で俺を呼ぶんじゃない。

「それだけお客さんが来ているのか確認し終わると、ちょうど来たみたいだ。」

「あつ、旭日先輩だ！ あこ達のお出迎えですか？」

「んなわけないだろ。お客さんどれだけ来てるのか見に来ただけだ」

そう言うってからふと白金の方に視線を向けた。だいぶ緊張しているみたいだな。もともと人前に出るのが苦手みたいだから、仕方ないことか。隣歌もその点は心配みたいだな。

「ほらりんりん、このボード見て元気出して！ あこ達のバンド名だよっ！」

「Roselia……そっか。友希那、色々考えてたけどこれにしたんだ」

その色々を知りたいもんだな。バンド名が決まるのはずいぶんかった。おかげでボード作るのもポスター作るのも結構大変だったな。まあ割とあることだ。

「よーしっ！ Roselia 初ライブ!! 行くぞー！」

おーっ！

「……っ！ おー……」

おいおい。大丈夫なのか？

「……って、えっ？ りんりんだけじゃなくて、リサ姉も緊張……」



？」

「し………っ！　してない、してないよ………ダンスの大会でも、一緒にステージ出てるじゃん？　あははは………」

チラツと俺の方に視線を向けてきた今井。それは気づいてないよね？　の視線なのか。はたまた助けてくれという視線なのか。まあおそらく前者だろうな。今井が緊張しているのは少し意外だ。

「………はあ。とか言って、参った……。めちやくちや緊張してるじゃんアタシ……。旭日君……。気づいてる……。よね？」

ここは何も言わずにスルーしておくか。いざとなったら人間やるしかないんだ。

「ほらほらいくよー！　時間ギリギリ！　あの2人に怒られちゃう！」

そういえばすでに2人が来ているのを忘れてた。怒ってないといっただけだな。

## 楽屋

今井達と楽屋に入ると、少々怒っている紗夜の姿があった。まあそうだな。怒ってない方が紗夜らしくない。

「1分35秒の遅刻よ」

秒単位で怒られたら少しキツイものがある。それにきっちり数えているのも紗夜らしい。そしてなぜそのお怒りの視線が向いているんだろうか。俺は一応スタッフなんだけども。

どれどれ。出演者が全員揃っているか確認したのを確認するだけだがちゃんとやらないと。ダブルチェックってやつだ。

「ご、ごめんごめん！　おーっ！　って気合い入れてたからさ。2人とも一緒にやりたかったな」

「馴れ合いはやめて。気持ちの整理は、個人で済ませてきてもらわないと困るわ」

おーってやるくらい許してやってもいい気がするが、湊と紗夜の場合はそれも嫌らしい。この空気感に適應している3人がむしろすご

いのではないだろうか。

「……っ！ う、うんっ。大丈夫だって。それくらいちゃんと出来るよ〜」

さつきから緊張してるし、本当なんだろうか。若干心配なんだが。「本当かな……アタシ。ベースをやらなくなっただって、友希那と釣り合わないと思っただから……」

そんな彼女達の話聞きつつ手に持っている出演者リストと照らし合わせる。このメンバーはすでに顔見知りなだけだな。一応つてことで。

「わ、わ……たしも。皆さんと……演奏するって……決めたから……。が、頑張り……ます」

「口ではなく、音での証明をお願いね」

キツイ言い方だな。白金だって頑張ってきてるんだ。後は何も問題なく演奏出来れば白金の技術力なら大丈夫だろう。

話を聞きながらだが全員居るのを確認出来た。途中体調崩す人が居たりしなければ問題なく進めることができるだろう。

「……バンドの技術が足りないのは、アタシだけ。……やるしかない。結果を出して、友希那の隣に居るんだ……」

ここまで来たらやるしかないかと決心がついたのか今井の表情が変わった。残りは宇田川は なんだが、さつきから彼女に緊張という2文字は感じられない。さすがと言うべきか。

「Roselia／闇のドラマー!! あこもがんばりますっ！ Roseliaつて響きがカッコイイ……あ、そういえば。なんでバンド名、Roseliaなんですか？」

受付をした時、理由までは聞かなかったな。Roselia……薔薇が関係してるのはわかる。あとはなんだ。

「薔薇のRoseと、椿のCamelliaからとったわ。特に、青い薔薇……そんな、イメージだから……」

「イメージ？」

青い薔薇。花言葉は確か……なんだったけか。

「(青い薔薇……花言葉は”不可能を成し遂げる”……だっけ)」

そんなことを考えながらリストにペケを付け終わると、ちょうど控室の扉がノックの後に開いた。視線を向けた先には萩野。多分ダブルチェックの件だろう。

「失礼します。ダブルチェック終わった？」

「ちょうどな。音響とかの方はどうだ？」

「問題ないみたい。トラブルさえなければ」

「起きても大丈夫なようにしておかないとな。今日は結構大きいイベントだし」

わかっているよとだけ言い残して萩野は戻っていった。この時間だと人の入りが多くなるからロビーの方に誰か回さないとな。たぶん萩野が行ってくれるから大丈夫か？ 次は忙しいとテンパる真宗に助言は…。いいか。それとまりなさんに報告。

「失礼します。あ、居た居た！ たくん、出演者は全員居るかな？」

ちょうど良いところにまりなさんが来てくれた。今日はあまり動かなくて済みそうだな。

「今最後の確認取れたところですよ。お客さんの入り多いですよ」

「結構来てるね。今日は音楽ライターの人とか特に」

登竜門と言われるだけあるな。時間ある時たまに話したりするだけど、今日はいかんせん人が多い。イベントが大きいのと、今回は湊が居るのも結構あると俺は思う。

「そういうイベントですから。人足りないなら萩野を回して、真宗は問答無用でドリントカーに回してもらえますか？」

「うん。伝えておくね」

「あと天堂さん見かけたら、すぐヘルプ行ってくて伝えておいてほしいです」

「了解」

まりなさんを見送り、ライブ開始までにやることを整理しながら考える。音響と照明はリハからいじってないから大丈夫。ライブに合わせて操作するのは慣れてる人だから大丈夫。

大体はやったから、開演時間近くなったら最初の出演者に声をかけないとな。

「旭日君ってなんて言うか。……意外と仕事出来る人なんだね」

「そうですね。夕はああ見えて頼りにされているのよ」

「普段はやる気をあまり感じられないのに。人は見かけによらないのね」

お前らな。俺だってちゃんとやる時はやるんだよ。普段から頑張るといざとなった時、頑張れないだろ？ 普段出来ないことは本番でも出来ないって言うけど、そこはちゃんと出来てる。

「んじゃあ、時間になったら呼びに来るから」

それだけ言い残して俺は控室を後にした。

さてと。1つ1つやることを片付けていかなければ。

時間はあっという間に過ぎて、Roseliaの出番までもう少し。舞台袖で機材の準備が整うのを見ていた。後ろには紗夜達がスタンバイしている。

こうして舞台袖からステージを眺めるのは何度目だろう。しかも熱気がかなりすごい中をだ。この熱気は今まであまり経験がないほど熱い。

なんて考えていると準備が終わり狩場さんがこっちに戻ってきた。

「準備完了。いつでも大丈夫だ」

「ありがとうございます。では、Roseliaの皆さん。ステージの方へ」

そう言うのと湊達がステージへと出ていく。最後尾の紗夜が通り過ぎる直後。手のひらを出す。

母さんが昔からよくやっていたことだ。何かあるたびにやるものだから俺まで癖がついてしまった。そして紗夜は何にも言わずに乗ってくれる。

ハイタッチを交わすと颯爽とステージに出て行った。

今日ここに。Roseliaというバンドが戦慄を巻き起こす。

ライブ中。旭日夕は舞台袖からとんでもない光景を目の当たりにしていた。

「ラスト、聴いてください。」BLACK SHOUT」

友希那がそう言っただけで大きな歓声が上がった。すでに2曲終えているというのにまだ盛り上がるらしい。こんな大きな歓声は何度も上がるのはGlitter\*Greenくらいかと夕は心の中で思う。

「友希那ー！！」

鳴り止まない歓声の中。

「高校生でこのレベル！ Roselia……。この子達話題出ますよ。今月のPV数、トップも狙えるかも！」

ライブの様子を見にきていた音楽ライターの人が興奮した様子で隣の音楽ライターと話している。この歓声の中だとなかなか声が聞こえづらい。

「今までどこのスカウトも受けなかったが……。友希那はバンドが組みたかったのか……？」

だが今はそんなのがどうでもいいくらい、Roseliaというバンドは輝いている。頭の割れそうな歓声の中、ラストの曲を歌うボーカー。それを支える音。全員が全員お互いの音を意識しているのか。はたまた無意識なのか。それほど5人の音は重なっている。

「わーいっ！ ほらもつと見てっ！ Roseliaって超ーっカッコイイでしょっ！」

「(不思議……。あんなに緊張してたのに……。わたし……。楽しんでる。こんな自分が居るなんて……。知らなかった)」

「(……。やっぱりこのバンドには、何かある。1人の時より、ずっと上

手く弾ける……！」

「(今井さんのベース。また上手くなってる。宇田川さんも白金さんも……。そしてこの前よりも、もつと”音”に引き寄せられる……。！」

「(行けるかもしれない。このバンドなら!)」

それぞれの思いが交錯する中。舞台袖の彼は彼女達を眺めていた。きつとこのバンドなら。変えてくれるかもしれない。彼女を。運命という歯車を。

そんな時。ふと同じような光景を目にしたような気がした。正夢というには臆げで、気のせいにしては少し鮮明だ。ライブの光景を何度も見ているからだろうと考えを落とし込んで、頭の片隅においやつた。

夜。

バイトが終わり、ヘッドホンをしながら暗い夜道を歩く。

今日のライブはRoseliaとしてかなり大きいものとなるだろう。記録に残しておきたかったが、そうもいかない。それくらい印象に残るライブだった。

これはもしかすると本当にFUTURE WORLD FES.に出場も夢じゃないかもしれない。プロも落選当たり前のイベントに高校生。しかも最近結成したばかりのバンドが。

でも同時に思ってしまう。それが達成された時。紗夜は日菜と向き合えるのだろうか。比べられない為と言っていたけど、フェスに出ることで本当に比べられないのだろうか。

ふと立ち止まって考え込む。そもそも紗夜は今でも日菜と比べられているのだろうか。俺は……比べてはいないはず。いや、一概にも言い切れないか。

出かける時はどっちがどうか思ってるのは事実だ。でも、それを一度だって2人に言ったことはない。別に嫌ではないんだ。

紗夜と日菜は双子ではあるけど、全く同じ人間ではない。

「らしくないな。早く帰ろう」

今日はなぜかいつも以上に考え込んでしまった。

家に帰ると、父さんはすでにリビングで爆睡していた。毎日お疲れ様としか言いようがない。ふとテーブルに視線を向けると、俺の分のご飯が置いてあった。スーパーの売れ残りの弁当だが文句は言えない。ありがたく弁当を持って自分の部屋に持っていった。

持ってきた弁当を机の上に置いてから、荷物を無造作に床へと置く。すぐに食べるのではなく、リュックから飲みかけのお茶を持ってベランダに出て行った。

手すりに寄りかかりながらお茶をひと口飲む。ランダム再生されている曲を手動で適当に何回か飛ばしてから止めた。流れたのは某ロボットアニメ。飛行機が人型になったり足だけ出たりするアニメの挿入歌だ。この曲は割と好きでよく聞いている。

ぼーっとしながら口ずさみ始めた。

カラオケには智紀と涼子としか行かないし、俺はあんまり歌わない。人前で歌うのはあまり好きじゃないからだ。

一通り口ずさみ終わり、隣から視線を感じるのでヘッドホンを外して視線を向ける。

「ずいぶん上機嫌ね」

「そうか？ 紗夜もライブ中楽しそうだったがな」

「べ、別に楽しそうには。……いい演奏は出来たと思うわ」

楽しいは否定するのか。まあいいけどな。いい演奏か。本人達もそれを感じることが出来たならよかった。あんなライブしておいて何も感じないは流石にな。

「あなたの歌い方。誰かに似ている気がする」

「ん？ 誰かについて、母さんから教わったわけじゃないんだけどな」

「おばさんじゃないわ。………もつと違う誰か」

違う誰か。それがわかることはなかったけど、少なくとも母さんじゃないらしい。鼻歌くらいは聞いたことあるけど、本格的に歌っていることを聞いたことはなかったからな。

「ごめんなさい。今のは忘れてちようだい」

「……ああ」

母さんの歌か……。音楽のことは、話しか聞いてなかったな。実際に歌を聴いたりとか、ギターを演奏してもらったりとか。いちおうCDとか演奏している動画のデータは残っている。まだ一度も見れてはいないが。

「夕？ 何か考え事？」

「まあな……その時が来たのかもって」

「その時っていったい何を指しているの？」

「母さんの音楽」

そう言うのと紗夜は少し驚いた表情を浮かべた。もしかすると紗夜は意図的に避けていたことを察していたのかもな。

「母さんからは話しか聞いたことがなかったからさ。少し知りたくなかった」

「そう。私もおばさんの音楽には興味があるわ」

「まだ向き合えるかはわからない。母さんの音楽の話を思い出すとな……：自分のことを許せない自分がいることを強く感じる」

俺1人のせいじゃないってわかってる。気づいていたとしても、どうにか出来ていたのか？ と言われれば否定しきれないのも事実だ。

結局完全には断ち切れていないんだ。

「（……おばさんは癌で亡くなったのよね。確かかなり見つかりづらい癌で。夕は何も悪くはない。けれど……私はそれを真っ直ぐ伝えられない）」

向き合えたら……いつか。紗夜と一緒にギターを弾いてみたい。

「紗夜……いや、なんでもない。そろそろ戻るな」

「ええ……明日も寝坊しないようにするのよ」

「努力はする」

それだけ言い残して俺は部屋に戻っていった。明日は寝坊せずに



起きたいものだ。なかなか無理な注文か。

## 第24話 すれ違い

### 第24話 すれ違い



江戸川楽器店

晴れ間が広がる空の下でお店の前を清掃する神原大輝。夕と同じ高校の青年で、彼はこのお店のバイトだ。

掃除を終え、店内に戻ると今度はカウンターの方向に向かう。レジが置いてある下の方に段ボール箱が1つ。開けてみると最近結成したアイドルバンドのチラシが入っていた。

「アイドルバンドね。……今はアイドルもバンドをやる時代か」

そう言うと1枚取り出して、近くのボードに貼り付ける。続いて店内にはポスターを持ち帰れるよう、ある程度束にして置いていろいろな場所に置きに行った。

一通り作業を止めて一息着くと、お店の扉が開いた。入り口とは少し離れている為か大輝はすぐに挨拶を交わさず、一旦戻っていく。

「(フェスの話題から……今日が初めての練習。あの子達、ちゃんと課題をクリアできているかしら)」

入り口付近に戻ると顔見知りだったようだ。

「氷川さん、いらっしやい。この間のライブすごかったみたいですね。記事も載ってるみたいですけど、メンバーの皆、もう知ってます?」

そう言うと大輝はレジの近くに置いてあった雑誌の1ページを開いて紗夜に見せる。そこにはRoseliaの5人が映っていた。

「ああ……確かに、カメラを持った方が何人かいらしてましたね」

記事を見てからふと近くのボードに目が写った。そこには――

「そうそう。……って氷川さん? どうかしました? 写真写りは悪くないと思いますけど」

写真と本人を見比べながら言う大輝だが、紗夜はそんな彼に目もくれない。

「……いえ、その……ポスター」

「ああ、これですか。なんかPastel\*Palettesっていうバンド？ グループ？ みたいですよ。この前デビューした」

改めてポスターをまじまじ見ながら説明をする大輝。そのポスターを見ている紗夜が同様していることに気づかぬまま話を進める。「アイドルだかバンドだかわからないですけど、面白いんですよ。……でもなんか、このギターの子、氷川さんに」

「わ……たし……練習がありますから……これで！」

そう言うのと紗夜は神原楽器店をさっさと出て行ってしまった。少しばかり様子がおかしかったようにも見える。よくよくポスターを見てみると本当に似ているが、本人が行ってしまった為真相はわからない。

すると入り口のドアがまた開いた。

「いらつしやい……って今度は憐歌かよ」

「大輝君。さつき氷川さんが出て行ったけど、何かあったの？」

「さあなー。オレが聞きたいくらいだよ」

お店に入ろうとした直後。少し前にお店から出たのであろう紗夜に声をかけた憐歌だったが、見事にスルーされてしまったわけだ。

ふとボードに貼ってあるポスターに憐歌も目がいった。

「このポスターのギターの子」

「そうそう。氷川さんに似てね？」

「雰囲気ちよつと違うけど似てる。双子かな？」

考えても本人に聞かなければ答えは見つからない。



## CIRCLE ロビー

俺は今日も頑張っている。主にこんな人が居てさーという四十崎さんの愚痴を聞くのに。なんか話やすいからつい愚痴ってしまうと言ってた。

四十崎さんは結構モテる。美人だし、気が効くし、大人の魅力もあ

る。だがいかせん猫が好きすぎて男なんか目もくれない。今は彼氏とかいらないと。

会話を終えた俺は事務所からロビーに行くと、なんだか妙に嬉しそうな萩野がチラシを眺めていた。

「どうした？ だらしない顔をして」

「だらしない顔なんてしてないよ。好きな女優さんがアイドルバンド始めたんだ」

「へーそうなのか」

アイドルバンドね。アイドル×バンドですか。なんでもバンドにすればいいわけじゃないと思う。それに女優がバンド。忙しそうだが、考えただけでも目を背けたくなる。

「あつ、この水色の子も可愛い」

特に興味もない俺は片手に持っていた今度のライブのリストを見始めた。

「今度のライブどうするか」

C i R C L Eでのライブにひと枠だけ余ってるんだが、誰に出てもらおうか。無難にA f t e r g l o wでもいいんだけど、今はガルジャムで忙しいだろう。ライブの感じ的にはゴシック系？ だからやっぱり……………」

「まだひと枠決まらないの？」

「まあな。普通にR o s e l i aでいいと思うか？」

「いいんじゃない？」

悩んでいると萩野が声をかけてきた。R o s e l i aが安定なんだが……今日の紗夜。様子がおかしかった気がするんだ。スタジオに入る前に少し話ただけだが、こういう時の勘って意外と当たったりするんだよな。悪い勘だけは。

「とりあえず聞いてくる」

「はい」

ロビーを後にしてR o s e l i aが練習しているスタジオへと足を運んだ。

たぶん大丈夫だろう。

そんな軽い気持ちでスタジオのドアを開ける。

俺は紗夜の気持ちなんて全くわかっていなかった。

スタジオ

「湊、ライブの件で話が——」

「……っ！ いい加減にしてよー！」

ドアを開けた瞬間。一瞬この場が静まり返った。

「お姉ちゃんお姉ちゃんってなんなのよー！」

急に聞こえてきた紗夜の怒鳴り声。今まで一緒に居たけど、こんな姿見たことがない。悪い勘ほど当たってしまったらしい。特に俺の場合。

「憧れられる方がどれだけ負担に感じてるか……わかってないくせに!!! なんでも真似して！ 自分の意志はないの?!」

その言葉をぶつける相手はあこじやないだろ……紗夜。

「姉がすることが全てなら自分なんて要らないじゃない!!」

一度だつて俺にも日菜にも……奥深くしまい込んだ思いは吐き出さなかった。気持ちを押し殺して胸の中にしまう。時折吐き出される言葉はここ最近全てあこに向けていた。

それも仕方ないこと。本当はそう簡単に片付けて良いわけがない。そんなことは、わかっている。わかっているけど……俺は何も出来なかった。どう接してやるのがいいのか。わからなかった。

紗夜は変わった。日菜と差を感じるようになった時と、母さんが亡くなった時。たぶん……紗夜は知ってるんだ。まだ日菜にすら打ち明けてない秘密を。

俺が母さんの……旭日陽子の息子じゃないことを。

本当の母親が別に居る。母さんが亡くなった上にそんなことを聞かされれば……な。母親が別に居るといふ点は、特に気にしたことはない。

誰が産んでくれたとしても育ててくれたのは母さんなのは変わらない。俺は旭日陽子の息子。そう思えるようになるまで時間はかかったが。

そんな出来事の後に関心することでも迷惑をかけたくない。きっと紗夜は……そう思ったんだろう。

沈黙がこの場を支配する中、最初に口を開いたのは今井だった。

「それって、もしかしてヒナのこと……?」

「……日菜?」

復唱するように湊も口を開いた。紗夜とくれば日菜という名前の人物は1人しかいない。今井は知ってたんだな。日菜と紗夜が双子だったこと。学校離れてるとあんがい気づかないもんだよ。

「……っ!! ……私……」

「あ……前にも言われたのに……。紗夜さん……ご、ごめん……なさい」

我に返ったがもう遅い。そして俺が居るといふこともまだ気づいてないだろう。いつもタイムミングが悪い。

あこが何を言ったかはわからないけど本人に悪気があったとは思えない。それに誰が悪いとかこの問題には関係ないんだ。もっと早く俺が手を打ってれば。……いいや。遅かれ早かれこうなっていたのかもな。

「どんな事情があるか知らないけど、Roseliaに私情を持ち込まないで」

こんな状況でも湊友希那という人間は平常運転だ。むしろ頼もしいくらいに。

「それに紗夜。あなたは今日、演奏にも集中できていなかった。帰ってちょうだい」

「……返す言葉もないわ。お先に失礼します。迷惑かけて、ごめん

なさい」

容赦ない言葉。それを今指摘することよりも俺が気になったのは、演奏に集中出来ていなかったことだ。

そんな時ふと萩野の呟いた言葉を思い出した。

『好きな女優がアイドルバンドやるんだよ〜』

『あつ、この水色の子も可愛い』

紗夜が急に取り乱すことなんて理由が絶対にあるはず。

1人片付けを始める紗夜。ギターをケースにしまいふと顔を上げると、ドア付近に居る俺にようやく気づいた。もちろん視線なんて合わせようとしなない。そして何も言わずにスタジオを出て行ってしまった。

すれ違い際に聞こえてきた「ごめんなさい」は申し訳なさが詰まっていた。謝る必要なんて……ないのにな。

「あ……どうしよう？ あこ、たぶん紗夜さんの嫌なこと、言っちゃったんだよね？」

「結果的にはな。でもああなったのも理由がある。今井は心当たりあるんだろ？」

俺がそう聞くと少し驚いた表情を浮かべたが、すぐに話し始める。

「うん……うちの学校に紗夜の双子の妹が居るんだよ。氷川日菜。聞いたことない？」

「あ、ずっとテストで1位で有名な人……」

ずっとテストで1位。テストのことなんて聞かないからわからなかったが、ずっと1位なんだな。日菜らしい。昔からテストでは満点を取ってたのをよく覚えている。もちろん紗夜は少なからず比べられただろうな。時折俺にも向いたがそんなの気にもしなかった。

「休憩時間は終わりよ。何度も言うけど、Roseliaに”私情”は禁止。これ以上話したいなら、あなた達にも帰ってもらおう」

そう言う俺に視線を向けてきた。たぶんというか、早く出てってくれて意味なんだろう。まあライブの件は話さないでおくとしても俺は湊に言いたいことがあるんだ。

なぜ湊の私情という言葉だけが引つかかるのだろう。

「なぜそこまで私情を持ち込まれるのを嫌がるんだ？ 少なくとも何かしらの目的がなければ集まることはないだろ」

「……っ！ 練習の妨げになるからよ」

妨げにか。確かに紗夜にバンド外の事情がなければこうはなっていないかったかもしれない。だが、少なくともその答えでは納得が出来ないのはなぜだろう。

「まあいいさ。あこは今回のこと、気にするなよ。遅かれ早かれこうなってたんだ」

俺はそれだけ言い残してスタジオを後にしようとしてドアを開ける。その直後だった。

「紗夜のこと追いかけないの？ 幼なじみなんですよ?!」

気にしているのか、今井がそんなことを言った。

「今の紗夜に必要なのは俺じゃない。1人で考える時間だ」  
今度こそスタジオを出る。

考える時間が欲しいのは俺の方だ。見守るだけじゃやっぱりダメなんだろうか……。だが、下手に干渉して事態をややこしくするのは避けたい。いったいどうすれば……。

ロビーに戻ると萩野が心配そうに入り口の方を眺めていた。

「氷川さん帰っちゃったよ?」

「ちよつと調子悪いんだと。大丈夫さ」

「なら……いいけど」

息を吐くように嘘をついて誤魔化した。

カウンターのの上に置かれたチラシに目を向ける。そこには5人写っていて、何人か見知った顔が居た。4人も見たことがあるとは。世間も意外と狭いのかもな。

紗夜が取り乱したのも原因はこれなんだろう。

「日菜、どこまで紗夜を追いかけられるんだ?」

ボソツと出た言葉に萩野は気づかない。

とつくに追い越してるんだ。後ろを見ないと気づけない。そういうところまで来てるんだよ、お前は。

氷川日菜という名前の右下にはG.t.と書かれていた。にしても



……丸山、日菜、若宮、喫茶店でよく見る人。

丸山に関しては花女に用があつて言った時必ずと言っていいほど会う。というかぶつかる。そしてプリントをばら撒く。やっと……夢が叶ったんだな。

若宮は羽沢珈琲店でバイトしてる。モデルもやってるみたいだから、その延長線か。アイドルって感じはしなかったが。

喫茶店でよく見かける人は苦手そうなんだってことはよく覚えてる。よく水色の髪の子とお茶をしているな。

後1人は……誰だ？　すごく見たことがあるんだが……つてよく見たら見覚えのある名前。大和麻弥。俺の知っている人と同一人物ならこれは大事だぞ？

「旭日君、やっぱりチラシ気になる？」

「なんとなくな。幼なじみ居るし」

「えー?!　それどういう意味?!」

しまった。自分から墓穴を掘ってしまうとは情けない。

この後めつちやくちやめんどくさかったが、途中お客さんが来たことで難を逃れた。この瞬間はお客さんが神様に見えたよ。

### C i R C L E    ロビー

あれから時は過ぎてもうすぐRoseliaがスタジオから出てくる時間になった。紗夜のこと心配ではないと言えは嘘になる。だが、声をかけたところで……な気もしてしまう。もう少しだけ、様子を見るか？　それとも……ダメだ。一度決めたことを曲げるのか？

「旭日、少しいいか？」

「はい。何かありました？」

ロビーでぼーっとしてっていると、狩場さんが現れた。

「この前言った調子の悪い機材のことだ」

「その件ですか。ステージの方です」

「ここは萩野に任せて一緒に来てくれ」

「わかりました」

先にステージに向かった狩場さんの背中を見送り、ロビーの仕事を代わりにやってもらうよう萩野に頼んでから、俺もステージへと向かった。

### ライブ会場

いつもライブを行っているステージに入るとすでに狩場さんは調子の悪い機材の前に立っていた。このスタジオで調子の悪い機材はスピーカーだ。前から少し怪しいとは思っていたが、とうとうダメになってしまったらしい。その点の報告はまりなさんにはしてあった。

「外側に目立った傷とかはないな。やっぱり中身か」

「倉庫にいちおう予備はありますけど」

「予備と交換しておくか」

「わかりました」

予備を取りに行こうとステージを後にしようとした直後。

「まあ待て。やることはわかったし、少しサボリに行かないか？」

「萩野と市野木さんにどやされますよ？」

「萩野はともかく、市野木に言われる筋合いはない」

ふっと笑ってからそう言う狩場さん。ここ最近一緒に仕事をする機会があったけど、こうして笑った顔は初めて見たな。俺と同じように仏頂面な人かと思っただが、少し違うらしい。

「とりあえず外に行こう」

狩場さんに連れられC i R C L Eの外に出た。

### 川沿いの道

移動する途中で買ってもらった缶コーヒーを飲みながら夕日に照らされる川を眺める。その横でコーヒー片手にあまり人が通らない

ことをいいことに電子タバコを蒸す狩場さん。そんな狩場さんに視線を向ける。

「怒られますよ?」

「大丈夫だ。誰も見てない」

たまに人が通っているけどな。そんなこともお構いなしだ。

「怒られる……か。昔は居たな。こんなどうしようもないオレを怒ってくれた人が」

「そう……ですか」

居たってことは今は……。

「旭日と氷川さんはそういう関係なのか?」

「ただの幼なじみですよ。それ以上でも以下でもない」

「幼なじみか。湊さんと今井さんもそうだったか?」

「確かそうですね」

世の中幼なじみという存在? 組み合わせ? は意外と狭い範囲に存在するらしい。Afterglowの5人もそうだしな。

「オレも昔は居た。もう居ないけどな」

「亡くなられたんですか?」

「いや……離れていった」

タバコを蒸して空を仰ぐ狩場さんからはその言葉の通り、なんだか憎しみを含んだ怒りを感じた。きつと同じようなことになれば、俺も同じように自分を憎むんだろうな……今も似たようなものか。

「ふー……。旭日、君はオレと同じようにはなるなよ。ダメな大人からの忠告だが」

「狩場さんはダメなんかじゃないと思います」

「なぜそう思う?」

視線を狩場さんから川に戻してから答えた。

「市野木さんや早乙女にちゃんと注意出来ていますし、なによりこんな俺にも気にかけてくれます」

「バイトだからと言って差別はダメだろ? オレは……そんな大人にはなりたくない」

まただ。この人から一瞬憎しみのようなものを感じた。今は過去

に踏み込む時ではない。でも……いずれ何かしらの力にはなれると  
いいな。

「そろそろ戻るか」

「そうですね。市野木さんたちにどやされそうですし」

俺たち2人はC i R C L Eへと戻っていった。

## 第25話 暗雲

第25話 暗雲

CIRCLE ロビー

「旭日先輩、お疲れ様ですっ!」

お客さんの居ないロビーで1人ぼーっと外を眺めていると、うちの常連客が訪れた。

「上原か。今日はミスらなかったか?」

「あ、当たり前じゃないですか」

開口1番そんな冗談を言ってみると、どうやら冗談じゃないらしい。

なんか様子がおかしいな。それで隠せていると思っっているのだろう。

「そうかそうか。さすが上原だな。今度練習覗きに行くでしょう」

「もく旭日先輩意地悪しないでくださいよ……」

「悪かったよ」

毎度のことながらこのいじってくださいって雰囲気はなんなんだろうか。それと同時に人柄の良さも伝わってくるが。

「支払いと次の予約したいです」

「料金はいつもと同じな。予約は……いつがいい? 明日の17時とか空いてるが」

「じゃあそれをお願いします!」

ぴったりの料金を受け取り、レシートを上原に渡した。ちなみに支払いにくるのはだいたい上原だ。そしてお他の客さんが居ないと少しだべって帰る。

「旭日先輩、ライブイベントとかないんですか?」

「そうだな……そんな話がオーナーからあったような……なかったような。それにしても急だな」

「さっきライブしたいなーってみんな話してたんですよ!」

この場合は他のバンドメンバー。つまり幼なじみと話していたんだろう。

確かにここ最近Afterglowのライブを見ていない気がする。毎回お客さん来てくれるから、ありがたいんだよな。お互いWIN-WINな関係だ。

「イベントに関してはオーナーがあまりなさんに聞いておく」

「よろしくお願いします」

上原を見送り、姿が見えなくなつてから再びぼーっと外を眺め始めた。

「そう言えば……」

早乙女と市野木さんどこ行つたんだろう。

見つけ次第市野木さんはしばいて、早乙女はなんだ。……ちゃんと仕事しようなつて教えるでしょう。

次の日の放課後。

今日も今日とてバイト。

最近運動不足気味だと紗夜からお叱りを受けてしまった。まあ言われるのは当然か。学校行くときはだいたい自転車、休日バイト先に行くときはバイク。休みの日は家から出ない。言われて当然か。

たまには歩くのもいいかと思つて、今日は自転車ではなく徒歩で通学した。普段はバイトある日は自転車だ。

歩きだと帰りが少しばかり遅くなるが、と言つてもそんなに遠いところでもない。

しばらく歩き、ようやく駅前に着いた……。人。人。人。さすが駅前。たくさん溢れかえつてる。まあ駅前なんてこんな……。もんではないか。

なぜかアカペラで歌う弦巻こころの姿が目に入った。

「うーん？　まだ楽しくないわ。なにが足りないのかしら？　このままじゃ世界を笑顔に出来ないわ」

「こころはなにをしてるんだ？」

「あら。夕じゃない！」

「今度は路上ミュージシャンでも始めた——」

直後。誰かが俺にぶつかってきた。決してぶつかりに来ているとは思ってない。だが少々痛かった。

視線を向けるとそこには。

「ご、ごめんなさい……っ。私っ、道に迷って……。こ、この近くに楽器屋さんがあるって聞いて……」

なにやら重そうな荷物を持ってぶつかってしまったのは、羽沢珈琲店でたまに見かける水色のサイドテールの花女の生徒だった。

「楽器屋さん？ それなら」

「ふっふっふ……いいもの、みつけた!!」

これが……鋼太さんの言っていた、何か良いものを見つけた時のところの笑顔。とても楽しそうだな。

「えっ、えっ?! あっ、制服……花咲川の……?」

「そうよ! あたしは花咲川女子学園高等部1年、弦巻こころ、あなたの名前は? その荷物って楽器でしょ? 今、楽器店について聞いていたわよね?」

こころの質問による質問。こういうおどおどしたタイプの子はこんな波状攻撃みたいな質問されたらテンパって。

「1年生……あ……っ。ま、松原花音と、いいます。たっ、たしかに楽器……ですが」

「やっぱり! 花音ね! ありがとう! あたし、今歌ってるの。だから一緒に演奏してくれるっ?」

相手が先輩だろうと関係なく名前の呼び捨てをする。それが弦巻こころという人間。

そして松原さんの持っている荷物に手をかける。

「へ……? あっ、待って、離して、ください……っ。」

すると松原さんの視線が俺の方へと向いた。悪いが、助けを求めないでくれ……一度言っただけでもないんだ。兄妹揃って聞く耳をもたないんだよ。

「私、このスネアドラムはもう、売るつもりで……」

「売っちゃうの? なんで? あたしと一緒に演奏するんだから、売

るのなんてやめましょうよ！」

「そ、そんな……めちやくちやな……っ。わ、私、もう行くから……」  
まあ普通の人間ならそうなるだろうな。確かにめちやくちやだと思  
う。だけどな。

「めちやくちやじゃないわ！ だってあなたも、世界を笑顔にしたい  
でしょ？」

『俺は自分の発明で世界中の人を笑顔にしたいんだ。……っって言つて  
もこころの受け売りなだけどな』

いつだって本気なんだよな。この2人は。

「い、意味がわかりません……っ！」

ふと腕時計で時間を確認すると、そろそろまずい時間になってい  
た。

「部外者が口を出すのもあれですけど、騙されたと思ってついでに行く  
のもありますよ。途中後悔しますけど、その先は絶対後悔なんてない  
ので。俺はバイトがあるので、失礼します」

それだけ言い残してその場を離れる。

「ター！ 今度あたしの歌、聞いてもらうわよ！」

「楽しみにしてるよ」

振り返らずに答える。

別に松原さんを見捨てたわけじゃない。バイトに遅れそう……な  
のは少しあるが、さっき言った言葉は嘘でもなんでもない。俺がそう  
だったからな。

そそくさとその場を離れてCIRCLEの方へと歩いて行く。途  
中黒髪の花女の生徒がバイトがどうか聞こえてきたが、怪しいバイ  
トには引つかからないでほしいものだ。

そして今度こそあの人だからなんだ？ すごい女子が集まって  
るし……ほとんど羽丘と花女の生徒だ。……ん？ 誰か倒れたぞ。  
大丈夫か？

人だかりを気にしていると、今度はさつき居た方からはドラムの音  
が聴こえてくる。結局その場で演奏しているんだろう。

なんだか今日の駅前はおかしなことはかり起きているようだ。今



度松原さんに羽沢珈琲店で会ったら何か奢ってあげよう……。

松原……松原……道に迷った。なんか聞いたことがあるような……ないような。

### C i R C L E 通路

なんとかバイトの時間に合った俺はロビーに使う途中、まりなさんに出会った。なにやら数枚チラシを持っているようだ。

「お疲れ様です、まりなさん」

「お疲れ様。少し頼みたいことがあるんだけどいいかな？」

「構いませんよ。なんででしょうか？」

そう言うとは枚か持っているチラシの中から一枚。俺に渡してきた。

チラシに目を通すと、どうやらガールズバンド界隈ではメジャーなイベントのやつらしい。その名も。

「ガールズバンドジャムVol. 12。これにうちから1バンドだけ推薦しようと思うんだけど、夕君に当てがないかなって」

「ありますけど……俺の当てでいいんですか？ 結構メジャーなイベントですよ？」

「私が推薦してもいいんだけど、ちょっとやること多くて……。代わりに推薦してほしいなって」

事情はだいたいわかった。当ても割とあるし、問題ないだろう。まあほとんどバンドの人たちが話かけてくるだけだから、当てと云っていいのには謎だ……。

「ガルジャムの件はわかりました」

「うん。お願いね。わからないことは、私かオーナーか奈々ちゃんに聞いてくれる？」

はいとだけ返事を返して、仕事へと戻っていきまりなさんを見送る。俺もロビーに向かう前にしておかなければいけない仕事を思い出し、処理へと向かった。

C i R C L E    ロビー

やることを済ませた俺はロビーへと訪れた。そこには珍しく早乙女が受付をしている姿があった。今日は雨ではなく雪か槍が降るのだろうか。

「お疲れ。珍しいな、早乙女が自らここに居るとは」

「わたくしだつて真面目に仕事くらいします。それに……あの方には任せておけませんし」

早乙女の視線の先を追うと、カウンターの内側。しかも端の方で体育座りでうづくまる真宗の姿が。どうやら戦力外通告を受けたらしい。恐らく、あなたは使い物にならないので仕方ないからわたくしがやりますとでも言われたのだろうか。

女性恐怖症の真宗からすると、その言葉は特に刺さつたであろう。と、言うより真宗でなくてもそんな言葉を浴びせられれば落ち込むか。

「女性恐怖症ということを踏まえても受付が下手すぎます。やる気はあるのですか？ 時々しかやらないわたくしの方が出来て悔しくはないのですか？」

あー見える見えるぞ、俺には。真宗の体にいくつも刺さる矢印を。正論。ド正論なんだが、本人が1番わかっていると思う。だがその前に。

「時々しかやらないというのはどうかと思うがな。真宗には真宗のペースってものがある。そこは自重してやってくれ」

「前々から思っていました。旭日さんはこの方に甘すぎます」

「別に甘いわけではない。早乙女と鈴音が仕事を覚えのが早すぎただけだ」

普通入って数週間っていろいろ教えて行く過程のはず。それをもこの見事に覚えて即戦力級なのがおかしいんだよな。

「とりあえず、ここは俺が見ておくから早乙女は他のところを頼む」  
「わかりました」

受付を離れていく早乙女を見送り、代わりにカウンターに入ると同時にスタジオの扉が開く音が聞こえてきた。

「旭日先輩、お疲れ様です」

「ちようどいいところに」

ちようどいい所で上原に会えた。ガルジヤムの件を話しておくでしょう。

「なにか用ですか？」

「そんなところだ。このイベントなんだが」

さつきまりなさんから渡されたチラシをポケットから取り出して上原に見せる。

「ライブしたいって昨日言ってただろ？ ガールズバンドジヤム。うちからの推薦で出てみないか？」

「えー?! 良いんですか？」

「ああ。最近頑張ってるみたいだしな」

「ありがとうございます！」

チラシを渡すと興奮した様子でスタジオへと戻っていった。……いったい何をしにスタジオから出てきたんだろうか。

## C i R C L E ラウンジ

上原がスタジオに戻って行ってから1時間くらい経った頃だろうか。

あの後、落ち込んでいた真宗を励まし、今日の所は一旦受付意外の仕事を教えた。今はとりあえず真宗にトイレ掃除を頼んだ。

少しカフェテリアに用事があったため、ついでに早乙女の様子を見てきた。今はその様子見の帰りなんだが……。なにやら心配そうな雰囲気の上原がラウンジに居た。

「どうかしたのか？」

「あ、旭日先輩……。蘭の様子が少しおかしくて……。何かあったの

かなって」

美竹の心配をしているんだな。さつきチラツと見たが、何か悩んでるって感じでもなかった気がする。パツと見だからなんとも言えないか。

「何かあれば相談してくるだろう?」

「そう……ですよね」

そんな無責任な言葉ひとつで片付けて良いわけがない。だけど、美竹と上原たちの仲が険悪なイメージもなんとなくの距離感でもない気がする。

それでも言ってこないのは……。

「美竹にも言いたくない事情とかあるとは思うけど、そこをどうかわして聞くのかも大切かもな」

紗夜と同じように何か相談したくない事情があるのか。

「はい……」

それ以上の言葉はかけなかった。少しだけ。ほんの少しだけ嫌な予感がする。その予感が……外れるといいな。

### 商店街

次の日の放課後。俺は寄り道することなく帰宅。と言いたい所だったが智紀に捕まってしまった。ラーメン食いに行こうぜってお前はどこの漫画キャラだ。お! とか言ってそうだな。ちなみに涼子も一緒だ。

「ゆうー。早くしろよー」

「急かさないの」

とか言っている間に用事を済ませないとな。

スマホで日菜にメッセージを飛ばした。もちろん要件はポスターについて。昨日聞いてもよかったんだけどな。そういう気分でもなかったし、本人もポスターが出ているなんて知らなかったようだ。日菜らしい……か?

というよりもいつの間にもアイドルの募集に応募していたのかということだ。全く気づかなかったんだが？

するとメッセージの返事ではなく電話がかかってきた。

『ゆうくんポスター見てくれたの?!』

「見た見た。アイドルやるなんて聞いてない」

『えへへ。驚かせようと思って。ビックリした?!』

ビックリだとも。いろんな驚きでこっちは若干まいってるくらいだ。特に知り合いが多いって点がな。あとは……まああれだ。

「なんでギターにしたんだ？」

『んく……おねーちゃんが弾いてるのを見て、アタシもやりたいって思ったからかな』

「そうか。日菜らしいな」

『うん！ つかおねーちゃんと一緒に弾きたい！』

その純粋な願いが紗夜には大きな足枷になっていることを日菜は知らない。なぜこうもすれ違ってしまうのだろうか。日菜はただ紗夜と仲良くしたいだけなのに。

感情というのは時に頼りになって。時に残酷だ。意思疎通が出来ないと、なおさらな。

『ゆうくん？ 話聞いている？』

「悪い……今度話、聞かせてくれ」

『うん！ 絶対だよ！ ライブにも来てね！』

「わかったよ。じゃあな」

そう言っただけで通話を切った。本人のやりたいことを辞めさせる権利は俺にはない。今出来ることは結局、どう足掻いても進んでしまう時間。少しばかり影響を与えて未来を変えることくらいか。

スマホをポケットにしまってから2人の元に行くと、智紀が「そんなじゃ行くかー」と言っただけで歩き始める。

「難しい顔してどした？」

「夕君ってたまに途方もないこと考えてるよね」

途方もないこと……か。まあそうなるよな。ここでグダグダ考えただけじゃしょうがないことはわかっているつもりだ。それでも考える

のをやめるつもりはない。

人は考えることが出来る生き物だからな。だからこそ過ちを正すことも出来る。

「そうか？ 今日のラーメンなに食べるか考えてただけだ」

「嘘つけ！ お前はラーメンソムリエか！」

「ちよつとなに言ってるかわからない」

「わかれよ!! てかわかってくれよ！」

いつものしようもないやりとりを見て笑う涼子に自分のツッコミで笑う智紀。この2人と居ると別の意味で何もかもどうでもよくなる。

「そうだ夕、日菜っちアイドル始めたんだって？」

「それ！ 私も驚いた。そうなら言ってくればいいのに」

「俺も今日知ったんだよ…」

隣で「マジでか！」と言って驚いてるけど割とマジなんだなこれが。

あれだよ。女の子が好きなのだよ。

「サプライズってやつか？ 日菜っちってそういう素振り見せないからな」

「気づけないのも仕方ないね」

そう言われるとそうだな。サプライズをこれからするってなると、わかりやすい奴はわかりやすいからな。例としては香澄とか丸山はわかりやすい部類だろう。山吹とか今井辺りは日菜と同じタイプか。

「観察が得意な夕でも気づかないとは」

「人を変態みたいに言うな。しばくぞ」

「数回動き見てオレからボール取れるのはお前くらいだよ」

それに関しては何年も見てたらわかるだろ。小学の時は四六時中サツカーだのバスケットの連れ回してくれたんだからな。

昔からよく観察眼がどうかかって言われる。だけど一瞬見ただけじゃわからない。つまりずっと見ているとその違いに気づく感じなんだ。だから対して人と変わらないと思っっている。

「本当だよー。シユートコースまで読んでくるのはちよつと辛い」

「そんな落ち込むことじゃないだろ。たまたまだ」

サッカーとバスケットに関しては何れ回されすぎてもはや素人の域ではない気がする。経験者って言うくらいがちょうどいいな。

この2人とのいつも通りも。悪くない。

だべりながら商店街へと移動してきた俺たち3人。と言っても時間も時間だからな。駅の近くにあるショッピングモールに寄り道してきた。行ったのはゲームセンターだ。そこでだいたい誰が1番メダル稼げるかが始まるんだよな。結果を言ってしまうと、運良く1発大きいのを当てた涼子の勝ち。あるだろ？ スロットでたまたま当たるとかさ。

「いや〜涼子ちゃんの1人勝ちとは……」

「日頃の行いかな〜」

「その理屈だと俺に負けた智紀は災難だな」

「災難とか言うレベルじゃなくね？」

「授業中でも寝てたり、聞いていなかったりがほとんどなのにねー」

聞いていないんじゃない。ただぼーっとしているだけだ。…………

それがいけないことは重々承知している。

「こんばんは。今帰り？」

3人で歩いていると、商店街の顔見知りの人に出会った。前にバイトの件を頼んできたおばさんだ。

「こんばんは。たまには3人でご飯でもって」

「いいわね〜。そういえばねバイトの話なんだけども」

意外にも応募者たくさんなのか？ いいことではあるような。

「商店街のバイトってどんなのだ？」

「着ぐるみ着て風船配ったりだな」

「そうなのよ。受けてくれた人辞めちゃってね」

「やっぱりキツかったんですね」

「女子高校生だったからそうなのかも」

「どのくらい重いかにもよりますけど、着ぐるみ着て動くのは大変そ

うです」

涼子の言う通りだ。俺は着たことがないからどの程度の重さかは知らんが、女子高生が着ぐるみ着て動くのはやっぱり無理があったらしい。まあ見つかっただけでもすごいと思うしな。

「それに、黒いスーツ着た人たちが急に来て買い取っていったのよ」

「あのピンク色のクマを欲しがる人が居るんですね」

「私もびっくりしたわよ」

そんな愉快なことをするのはいったい誰だろう。黒いスーツの人。それだけじゃ誰かまでの特定は出来ない。……買い取りするほど魅力的か？ あの着ぐるみ。

「呼び止めてごめんなさいね」

「いえ。それじゃ俺たちは行きます」

商店街の人と別れた俺たちはラーメン屋のある方へと歩いていく。

「夕っっているんなことしてるのな」

「無理はしないでね？」

「わかってる。今回はそこまで首突っ込んでる話題じゃない」

「ならいいけど」

バイトを疎かにするわけにもいかないからな。

少し時間はかかってしまったが、ようやく向かうことが出来るな。



## 第26話 祝!Roselia雑誌掲載記念お茶会

第26話 祝!Roselia雑誌掲載記念お茶会

CIRCLE ロビー

「ふあ。ねむ……。え。コーヒー全部売り切れ? ……つて、えっ!!  
ちよ!?!」

どうやら休憩に来たのであろう黒髪のセミロングのお客さんが驚く声を上げた。それもそうだろう。ずっとこの場に居た俺でさえ驚いているのだから。

「スタジオのロビーでバリスタがコーヒー入れてる!? あれいいんですか、スタッフさん!?!」

「他のお客さんには今のところ迷惑かけていないので。今のところは」

そう……。今のところは。お客さんが多いなら話は変わるが、今日はあまりスタジオ使つてないからな。

「奥沢さま。コーヒーでさたら、今そこで淹れさせておりますので、しばしお待ちを」

「どうかお受け取りください。ミッシェルです」

今度はこの前買い取つたのであろうミッシェルを持ち出してきた。「これから、こころさまがミッシェルと呼ばれた際は、私たちが着替えるお手伝いをさせていただきます」

「えっ!。 ていうかこれ、あの商店街のマスコットキャラじゃ……」

「買い取りました。バンドとして見栄えするよう、私どもの方でアレンジを加えることも可能です」

買い取りの予想は当たったようだ。それとアレンジを加えるに関してだが、俺の脳裏には一人しか思い浮かばない。きつと、ぬいぐるみの改造?! なにそれ面白そう! とか言うんだろうな……。

「またライブについては、日本一有名なロックフェスの出演権を交渉中です。獲得した折には、ミッシェルとして、それをこころさまに」

そう黒服の人たちが言うのと、奥沢さんは黙ってしまった。そして。「いや、……。それって……。なんかちよつと、違うんじゃないですか?」

いいです。ライブは、あたし、自分で調べてみます。ミッシェルだけお願いします」

意外にも反発したな。まあいきなり有名なロックフェスに出ても……いや。ここらなら緊張なんかせずに歌うんだろう。ノリノリで。ついていけないのは周りのメンバーか。

「左様ですか。ではミッシェルの件だけ承ります」

結局バリスタが淹れてくれたコーヒーを残して黒服の人は居なくなつた。正しい言い方は、身を潜めた、だな。

「ずいぶん肩入れするんですね。あんまりやる気あるようには見えなかつたのですが」

「あつ……いや。あたしは別に」

やる気はないように見えて、意外と友達思いのいい子なのかもな。巻き込まれているだけなら話は変わってくるが。

「ライブの件。どうしても見つからなかつたら、俺に相談してくれればなんとかしますよ?」

「でもそれは」

「もちろん本当に最後の砦って形で」

「あー……それなら。ぜひ、お願いしたいです」

好奇心半分のお節介半分つてところだ。

これで出てくれるなら好都合だな。見た目としては最高にぶつ飛んでて面白そうだ。クマが居るバンドなんて見たことないしな。

「あの、変なことを聞くようで本当にすいません。旭日さんつて……お母さん先生でしたか?」

この子も知っているのか。母さんのことを。だとしたら……話くらいは聞いているか? 全く思い浮かばない。

「母さんを知っているんですね」

「名札に書いてある苗字が一緒だったので」

「俺は旭日夕。旭日陽子先生の息子です」

「あたしは奥沢美咲です。先生とはよく話していて、お世話になりました」

毎日聞かされるくらいだからな。もつとたくさんの生徒たちとコ

コミュニケーションを取っていたんだろう。コミュ力だけは化け物みたいだったし。

「母さんのことを知ってくれていて嬉しいです」

「あの。後輩なので、敬語じゃなくても…」

「お客さんなので……と言いたいところですが。知り合いという形なら」

知り合いの前だと普通にタメで話しているし問題ないだろう。海藤さんたちも割とそうしているし。

「何かあれば相談してくれ。少しは力になれると思う」

「はい。ありがとうございます」

結局何しに来たんだろうと思ったが、奥沢さんはスタジオに戻っていった。あのバリスタの淹れたコーヒーどうしようか。……飲まないのは……もつたいないよな。

あれから少し経った頃。珍しくまりなさんに呼ばれて何人かスタジオに集まっている。どうやら新人の紹介らしい。と言っても見たことがある顔なんだが……。

「今日からシフトに入ってもらう子を紹介するね」

「南雲紘翔と言います。皆さん、よろしくお願いします」

そう言うのと頭を下げる。

この前面接がどうとかって言ってたのはこのことだったのか。しかも知りあいという。世の中本当に狭いもんだな。

「いろいろ教えてもらいたいんだけどー。夕君はちよつと厳しい？」

「いえ。真宗はみんなで面倒見る感じなので構いませんよ」

「……そっか。なら任せちゃおうかな」

「わかりました」

真宗のことよりも今はバイト以外のことで大変なんだけどな。紗夜とは少し疎遠気味だし。なんかイライラしてる感じでな。姿を見ても声をかけてない。練習覗いた感じもなんだかギスギスしてて。あんな状態での練習……。

「よろこく」

ちよつとぼーつとしてるるといつの間にか俺の前に来て手を出していた。

「ああ、こちらこそ」

同じように手を差し出して握手を交わす。

「この前は助かったよ。旭日君」

「気にするな」

結構前のことなのにな。律儀な奴だ。

こうしてまた1つ引き受けてしまったけど、見た感じは大丈夫そうだな。覚えも早そうだし、何より女性恐怖症じゃなさそう。どつかのパシリは女性恐怖症なもんで、ひたすら苦勞をかけている。

「それじゃあまずメンバー紹介から。俺の隣にいるのが海藤蒼真さん。さらつと仕事押し付けてくるから気をつけろ」

「夕君、夕君。それじゃあ面倒なこと押し付ける人になっちゃようよ。」  
だいたいは合っていると思うんだが。まあ仕事がない時にやることがないか聞けば大抵答えてくれるからそこはすごいと思う。まりなさんやオーナーになに頼まれてるんだろうか。

「次に海藤さんの隣に居るのが早乙女麗花。」さおとめ”じゃなくて、”すおとめ”だからな。何度も間違えると怖い。あとサボり癖あるから見つけ次第注意」

「聞きづてなりませんね、旭日さん。わたくしはちゃんと仕事してますわ」

嘘つけ。サボってる方が多いからな。よく知らない人とお茶してるけど、そのお客さん大抵ライブ見ていつてくれるから一概にも迷惑とは言えない。ライブが本当に好きらしい。

「俺の左隣に居るのが萩野風。背のことはあまり言わないでやってくれ。気にしてるみたいだから」

「ちよつと旭日君！　なんでそれ言っちゃうの?!」

みんなは小さい人に向かつてチビとか気安く言わない方がいいぞ。気にしてる人多いから。いじるにしてもちゃんと冗談を言い合える仲になってからにしよう。

「他にもスタッフの人が居るけど、主にはこの人達に聞いてくれ」

上手く話を終わらせようとするが。

「ちよつとちよつと」

「旭日さんの紹介がまだですわ」

その不満そうな表情はなんだ、早乙女。別にいらないだろう。

「同じ高校。同じ学年。同じクラス。何か説明入ります?」

普通じゃない。相手が同じ高校でよかったよ。ここぞという時に釘を刺しておかないとな。特に早乙女は。

結局最初はまりなさんが一通り教えてから俺たちがフォローするという形になった。主にフォローするのが俺の担当だが。

真面目そうだし大丈夫だろう。きつと。

### 羽沢珈琲店

午前のバイトを終えた俺は、疲れを癒すために羽沢珈琲店へと訪れ、コーヒーを飲みつつパソコンの画面を眺めている。

見ているのは昨日のPastel\*Palettes。日菜が居るアイドルバンドのライブの記事だ。

突然だがみんなは、ライブのチケットを前日に渡されたらどうするのだろうか。

普通困るよな。行く予定もないライブのチケットを、しかも前日の夜に渡してくるなんて……。日菜の行動はいつも突拍子過ぎる。そしてタイミングが必ずしも良い。

幸いにも次の日は休みで、予定もない。暇な1日をどう過ごすか考えているところに日菜が突然現れて、ライブのチケットを渡してきた。

無駄にするわけもいかない。場所もそう遠くないようだし、行くことにした。アイドルのライブは初めて行くから少し不安はあるが、問題はないだろう。

今更だが本当にアイドル。芸能人になったんだな……。日菜は。なんて思いながら会場に向かった。幼なじみがアイドルなんて、どこの

漫画の世界だろうとも思う。それくらい。遠い存在だ。

会場にたどり着いたのは開場10分前。グッズ等々買わない勢からすれば、ちょうど良い時間帯だろう。ちなみに着いた最初の感想は人割と多いなだった。

開場され、自分の席（なぜか真ん中の方）に着いた。調べてみれば関係者席だったらしい。一応幼なじみ……いや、この場合は友人と言った方が正しいか。気のせいだとは思うがどこかで見たような人が居たような。

ライブが始まるまでの間にふと聞こえてきた会話の中に少しだけ気になるものがあった。

元子役の白鷺千聖。

名前だけじゃわからなかったが、昔母さんが花女の生徒のことを話してくれたことがあった。その時に出てきたのが、『白鷺千聖って言う元子役の芸能人が居るのよ』って話だ。ちよいちよ羽沢珈琲店で見かけた人が元子役の芸能人とは。

なんて考えていると、ライブが始まった。

真実を知っているというのは……時として残酷だな。

このライブでPastel\*Palettesのみんなが演奏をするわけじゃない。同時にそれは。ファンに嘘をついていることになる。ここに居るファンはフリだなんて思っていないんだろう。

『ライブはするけど演奏をしてるフリだけなんだよね』

『なんだそれ』

『事務所の方針？ らしいよ。あたしはおもしろそーだからいいけど』

なんとも日菜らしい答えだ。

そう考えながら見ていると、試練は突然訪れる。恐らくスピーカーとかアンプの機材トラブルだろう。原因は……電圧とかか？ たまにあるトラブルだな。照明はついていたし、恐らくだが。

結局Pastel\*Palettesのライブは失敗。たくさんの誹謗中傷までネットに上がっている始末だ。

「いらっしやいませー。お好きな席へどうぞ」

「あつ！ 旭日先輩だ！」

「ホントだ。誰か呼んだの？」

「わ、わたしは……なにも……」

「あこでもないよ？」

Pastel\*Palettesにそこまで興味はないが、幼なじみが悪く言われのは良い気分ではないな。……それを言ったら知り合いが4人も居る時点で、何を言われようが良い気分ではないか。

「ヘッドホンしてるから気づかないか」

「どうする？ リサ姉」

「とりあえずここで会ったのも何かの縁だし、誘ってみよう」

「あ、あの……本当に……いいんでしょうか」

「大丈夫大丈夫」

なんか視界にチラチラ見えるな。いったい誰……だ。

「おかしい。なんで俺まで一緒なんだ？」

記事に集中し過ぎてまるで気がつかなかった。

そして偶然会った今井たちとなぜか俺はお茶をしている。

「まあまあ。旭日君もたまには……ね？」

「何がたまにだ。ほぼ毎日会ってるだろ？」

ここ最近バイトばかりなのもあるし、何より練習場所がCiRC LEということもあって俺とRoseliaは顔を合わせることが多い。結成には少しばかり手を貸したが、なぜこうも一緒になる。

「友希那さんも紗夜さんも、連絡したのに来ないなあー。祝！ Roselia、雑誌掲載記念お茶会ー」

Roseliaの雑誌掲載記念お茶会。どう考えても場違いは俺だ。たまたま。本当にたまたま羽沢珈琲店に来たら巻き込まれた。偶然って怖いよな。

「ふ……ふたりとも……」そんな暇ない”って」

だろうな。紗夜に限ってはあれから顔すら合わせてくれない。朝

は起こしに来てくれるが、すぐ出て行くし。お陰で何回遅刻しそうになったか。そもそも俺が頑張つて起きればいいんだが、いかんせん上手くないかない。

「……そういえばさ、3人とも雑誌見てー……どー思った？」

「どう思ったってなんだ？」

どこも変な風には……書かれていなかった気がするがな……書かれては、な。

「あ、えつと、えーつと。……あ！ 友希那さんの”孤高の歌姫”つて、超カッコイイつて思った！」

なんか妙に楽しそうに言うな。何か誤魔化している雰囲気を感じとれる。誤魔化しきれているかはわからんが。

「あ、あれは……確かに……カッコよかつたよね、あこちゃん……」

「別に組みたいって思う相手が居なかつたから1人だつたわけで。ソロで活動していたわけじゃないだろ？」

そう言つてコーヒーを飲む。なんだかんだここは居心地がいいからか、だんだん怒りが収まつてきた。どうせ1人でコーヒー飲んでただけだしな。たまには……たまにか？ いいだろう。

「ちよつ……ねえもう、なんかそうやって誤魔化されると余計凹むからさあ。はつきりいいよつ、3人とも！ あ、待つて。旭日君はダメ」

なにがダメなんだ。そもそもあの雑誌に不都合があつたとは思えない。強いて、強いて言えば。今井がな……なんかこう。あれなんだよ。俺だけ言うなつて意味がわかつた。

「じゃあ……言うけど……リサ姉だけ、ギャルっぽくて浮いてる……」

さすがあこ宇田川。苦笑いを浮かべつつも、そのストローレトにものを言えるところ。巴にそっくりだ。侮れないな、宇田川姉妹。

「ううっ！ やっぱり……友達が言つてた通りか……」

よっぽど気にしているのか、少し落ち込んでいる様子が伺える。するとあこが取り繕うように言葉を並べ始めた。

「で、でもでもっほらっ！ 紗夜さんも演奏はあんなのにちよつと



地味だしつ、なつ、なんていうかき！ リサ姉だけじゃなくて！」

おいおい。他の人を巻き込むな。特に紗夜を。演奏は確かにすごい。服装に関しては……人のこと言えないからやめておこう。俺は地味だとは思わないけどな。紗夜の雰囲気からしてむしろ似合ってると思う。

「問題はそこじゃないだろ。普通ライブの時って”あれ”を着るから”あれ”が出るんだよ」

「あれしか言っていないけど？」

「……統一、感……？」

そうそう。統一感だ。今回は結成したばかりだったから仕方ないとしても、多くのバンドはライブ衣装を用意して、統一感を出す。逆に私服で出てるバンドの方が少ない。

「なるほど……さっすが燐子♪ それだよつ、Roseliaに足りないのは！」

俺は？ なんて思いながらコーヒーを飲み干して、新しいのを注文した。

「……でも考えてみると、燐子と友希那って、結構服の趣味似てない？」

2人ともモノトーンコーデだし」

確かに2人の服装は似てるな。たまにパツと服だけ見るとどっちかわからない時がある。平日は間違えることなんてないんだが。

「あつ、それならあこも一緒だよ！」

「ええ？ あこはちよつと、ほら……」

「その服。白金が作ったんだろ？」

新しくもらったブラックコーヒーをひと口飲んでから答えると、なぜか一瞬静まり返った。

「そ、そうだよ！ あこのこの服、りんりに作って貰ったんだもんつ。りんりん、結構自分の服も作れるんだよ？」

なぜそんなに同様することがある。前々から思ってたことを言うただけだ。

「なんで旭日君わかったの？」

「少しだけ手作り感と妙にぴったり？ な感じがしたから。どっちも

よく見ないと気にならないから、相当良い出来だ」

「友希那が言ってた観察眼っていうの？ 今ならすごいわかる」

どこでわかってるんだ。それじゃあまるでずーつとあこを見てたみたいになるだろ。何回も合ってるうえにさっきのあこの言葉を聞いたらだいたいわかるだろ。同じ見た目ではないなら考えられることは一つだ。

「でも、それって結構すごくない!? これ全然、手作りってわかんないじゃん」

「わたし……いつも……家にいて……時間が……あつたから……」

「時間があつとしても俺は素晴らしいと思う。素人が作ると手作り感が出るって言うしな。今井の言った通りあこの服は全く感じない」

そう言うとき少し恥ずかしそうにしてしまう白金。少し褒め過ぎたか。でも俺は素直にすごいと思った。最初あこに会った時全く手作り感を感じなかったからな。本人に似合っていたのもある。

「あつ。ひらめいちやったかも！……Roseliaで、バンド衣装作るってどうかな？」

「あんまりふざけたのじゃなければいいんじゃないか？」

度が過ぎると怒るだろうしな。……Roseliaとしての個人的なイメージだと、あこが言うようにカツコイイ系とかなんだろうな。歌う曲のことも考えると余計に。

「さっそく友希那さんと紗夜さんに連絡しなくちゃ」

今頃紗夜はギターの練習中だろう。この前のこともあつたし、無理してなければいいんだけどな。いつもの紗夜なら冷静でいられるんだろけど今は……な。多少なりとも声をかけてやりたいが、今はそっとしておこう。

「おーい。旭日君は追加でコーヒー頼む？」

「ん？ ああ、頼む」

少し考え事をしてしていると追加の注文を始めていた。様々な女子会を見てきたが、どこも話すことが違ったりしてある意味面白い。なぜ俺を巻き込むのかはいまいちよくわからんが。

「夕先輩って午前中何してたんですか？」

「バイト」

「働きのだね〜」

働かないと喫茶店でコーヒー飲めないからな。意外と喫茶店と違って長時間いると金かかるんだ。だから金欠にならないようバイトのシフトは結構多く入っている。そのせいか巻き込まれることが多い。

「旭日君って結構頼られてるよね。C i R C L Eで働いて長いの？」

「3月からバイト始めた」

「えっ?! まだ数ヶ月なの？」

そんなに驚くことだろうか。ほぼ毎日入っていれば結構こんな感じになると思ってるんだが。前のバイトもライブハウスだったのもあるんだろう。

「前はSPACEでバイトしてたからな」

「あっ、なるほど。確かガールズバンドの聖地って呼ばれてる所…だよね?」

「あこも知ってるー!」

流星に認知度が高いな。SPACEはライブしかやってないけど、あのオーナーに認められてライブ出来るとなると結構なものだ。

話が盛り上がっていると追加で注文したケーキ類が運ばれてきたん? ケーキが一つ多いな。

「ケーキ一つ多くないか?」

「いつも手伝ってくれる旭日君にと思ったんだけど、甘いのが苦手だった?」

どうやら今井の奢りらしい。別に大したことはしてないんだがな。

「…………いや。チョコレートよりショート派なんだが」

「本当?」

「冗談だ。悪いな」

甘いものはあまり好きではないが……………たまにはこういう日も悪くはないか。

## 第27話 山積みの問題

第27話 山積みの問題

花咲川高校 教室

放課後。人がほとんど居ない教室でぼーっと天井を眺めていた。今日はバイトもない。Roseliaの練習はあるみたのだが、お呼びでないから関係ない。智紀は部活。涼子はバイト。隣歌からも特に誘いはない。葵刃は今日も逃げ回ってる。

ってことは今日は何も無い。たまにはこんな日も悪くない。ということで羽沢珈琲店にでも行って読書かネットサーフィンをするか。少しワクワクしながら帰り支度を始める。今日は少し奮発して高めのコーヒーでも飲んでみるか。それとも甘さ控えめのスイーツでも――。

「ちようどよかった。旭日君に頼みたいことが……」

現れたのは山梨先生。母さんとの教員仲間の1人だ。

終わった。俺の楽しい計画が。

「そんなに絶望しないで。まだ希望はあるから」

「どんな希望ですかそれは……」

まあこの時間に来たということはいつものお願いだろう。渡しに羽丘、もしくは花女に行くだけだから問題無いか。ちやっちゃと終わらせてのんびりしよう。

「いつものお願い出来るかな？ 今日羽丘なんだけど」

そう言うといつもの封筒とクリアファイルを渡された。中身はわからないが。

「花女なら渋るところですが、羽丘なら行きます」

「またまた冗談ばかり〜」

割と冗談ではないんですよ先生。

「とりあえず行ってきます」

「うん。お願いね」

教室から出て行く先生を見送り、帰り支度を済ませた。俺はその足で羽丘に向かった。今日は誰がいるのかな。

羽丘に着いた俺はいつもの学園に入る手続きを済ませて校内へと足を踏み入れていた。何度も来ているから手続きがだんだん適当になっていく気がする。最初はいろいろ書かされたはずなんだが……。花女も同じような感じになりつつある。

つまり俺は出入りしすぎているのかもな。と言っても部活動の交流で花高の部活は来ている。花女は運動系。羽丘は文化系が多いな。花女には葵刃の母親が特別顧問で行ってるから自然とそうなるだろう。さすが全ての武術で世界を取った人物。

通路を歩いていると時折羽丘の生徒とすれ違う。大抵は会釈もないんだが、知り合いだとな。

「やあ。旭日君じゃないか」

「瀬田か。久しぶりだな」

今日1人目の知り合いは瀬田薫。演劇部に所属する2年生。同い年だな。演技が上手いからか。はたまたかつこいいからか。おそらく両方。女子にめっちゃくちやモテる。

女子の方がモテるとか男からしたら結構痛いところか。俺にとっては犬派か猫派くらいどうでもいいことだから別にいいが。

「演劇部の方はどうなんだ？」

「なんの問題もないさ。近々大きな大道具が必要になるみたいだよ」

じゃあ近いうちに一瞬駆り出されそうだな。人手が足りなければの話だが。

俺は人手が足りない時、演劇部の手伝いをしている。最初は柳瀬先生から頼まれたのが初めてだったが、ここで出会った瀬田ともう1人と連絡先を交換してからはたまに呼ばれるようになった。

「人手が足りなくなった時は呼んでくれ」

「頼りにしているよ」

こうして普通に話している時はいいんだけどな。たまに理解不能なことを言い始めるんだ。夢いとか、シエイクスピアがどうかとか。

シエイクスピアのこととも儂いとかもよくわからないから非常に困る。

「そうだ。俺も次のライブ、楽しみにしてるからな」

「ああ。任せてくれ」

ハロー、ハッピーワールド！のギターを担当しているのがこの瀬田薫なんだ。どうやって了承してもらったのかはわからないが、さすがこころだ。こんな人気者を普通引き入れようとは思わない。

「それじゃあこれで失礼するよ」

「またな」

瀬田と別れて職員室へと向かった。

今日はシエイクスピアがどうかかなかったな。

## 職員室

瀬田と話した後、誰とも会う事なく職員室へとたどり着いた。柳瀬先生の元まで行き、持ってきた資料を確認してもらった。

「確認は終わった。毎回すまないな」

「いえ。理由はわかっているのです」

文句を言いつつも来るのは、心配をかけたくないからなんだろう。母さんの家によく飲みに来ていた3人だしな。少なからず面識はあるし、いろいろ教えてもらったのは事実だ。

「相変わらず授業はぼーっと聞いているようだが？」

「……そういう時もありますよ」

「都合悪いといつもそうだな、君は。聞いていない割にはそこそ点数取るのだから、真面目に勉強したらいいのに」

「ここにも紗夜と同じようなことを言ってくる人が……。まだ言い方が柔らかいからマシか。紗夜は呆れると説教始まるしな。」

「勉強以外に興味があるものがあるので今は……」

「最近2年の湊と今井と中等部の宇田川と一緒に居るところを見かけたが、まさか」

「いやそういうことではなくてですね。その3人と幼なじみと花女の

生徒でバンド組んでるんですよ。その手伝いのな」

「人は変わるものだな。あれほどバンドや音楽に興味を示さなかった君が」

「なかつたわけじゃないんですけど……」

母さんの前で音楽の話をすると本当に止まらないからしなかつただけなんて言えない。酔ってる時なんて持論語り始めて本当に手が付けられなかつたし。酔い潰れて寝るのを待つしかないという地獄だつたな。

「まあ構わないさ」

そこまで深く追求はなかつた。

「……夕。1つ頼まれてくれるか？」

「なんですか？」

美奈川先生とは違って変なことは頼んでこないだろう。あの人は普通に変なことを頼んでくるし。

「羽沢つぐみとは面識があると思う。最近無理しているようだから、今日は帰るように伝えておいてくれるか？ 私はまだ仕事が山ほどあつて行けないので頼みたい」

「わかりました」

「助かるよ」

俺もこの前、C i R C L Eのラウンジ話していた様子を見て気になつていたところだ。この前からずいぶん無理をしているようだしな。さすがにあの4人が放っておくわけないと思つて何も言わなかつたんだが、少し事情が違うらしい。

何事もないといいが……。

## 生徒会室

来たはいいものの。まだ会議中か。入るのはよしておこう。

会議をしている教室から見えない位置で会議が終わるのを待つことにした。

「あれ？ 旭日先輩じゃないですか」

待っていると、現れたのはアフグロの2人。

「巴と……上原か」

「なんで私の時だけ微妙な表情なんですか?!」

「していないしてない」

言いがかりもいいところだ。別にいつもテンション高めに絡んでくるからめんどくさいんだよなと思ったただけであって。

「今日は何しに来たんですか?」

「いつものやつと、少し羽沢の様子を——」

そこまで言った直後。生徒会室から大きな声が聞こえてきた。その瞬間。ろくでもないことがふと浮かんでくる。

すぐにドアを開けて中に入ると、横向きの体勢で床に倒れ込む羽沢と突然のことに動揺している生徒会の面々の姿があった。

俺は考えるよりも先に体が動いていた。それは巴も同じらしい。

「……っ！ つぐ！ おい、つぐみ!!」

「つぐ……?」

リュックを近くの机に無造作に置いてから、すぐに羽沢の元へと駆けよる。こうなると一刻を争う。

「羽沢！ 大丈夫か?! 返事をしろ！」

軽く肩を叩きながら声をかけても目を覚ます様子はない。次は頬を口元まで近づけて呼吸の確認。その次は脈があるか確認をする。

「ひまり、救急車！ 早くっ!!」

「………っ」

突然のことに上原は反応出ていないようだ。

「早く!!」

「………っ！ は、はい！」

ようやく状況を飲み込めたのか、返事をしてすぐに救急車を呼ぶためにスマホを出した。

「蘭達はもうスタジオか……? アイツらにも連絡しないと………っ！」

「そんなことは後でいい！ 巴は誰でもいいから先生呼んでこい！」



「わ、わかりました！」

意外と冷静で居るんだな。巴は。おつと……今はそんなことを考えている場合じゃない。最善を尽くすんだ。意識はないが、呼吸はある。まずは体勢を変えておかないとか……！

「その人……！ 人が集まってきたら羽沢が見えないようにしてください！ その人は上原と一緒に下に行つて、救急隊の人が来たら連れてきてください！」

羽沢の体勢を変えながら、それぞれ指示を飛ばして先生が来るまで羽沢に声をかけ続けた。

まさかこんな場面にまた遭遇するとは。母さんには感謝しても仕切れないな。お陰で冷静でいられる。

## 病院 病室

その後はとりあえずスムーズにことが運んだ。案の定何があったのか見に来た生徒が大勢居たものだから、見えないように囲んでくれたのは大変ありがたかった。

到着した救急車には柳瀬先生が乗り、居てもたつても居られない2人は走つて病院へと向かった。放っておけなかった俺も着いて行き、今は病室に居る。

もう落ち着いているが、さつきまで2人の顔には心配の2文字が浮き上がってくるんじゃないかってくらい羽沢を心配していた。

結果から言うとお勞。頑張り過ぎたんだろうな。大丈夫。そう言う子はまず大丈夫ないことはわかっていたことなのに。誰かが言うだろうという思いで見過ごしてしまった。無理に良い言い方をすればそれだけ羽沢のことを心配している人が居るということになる。

……気休めだな。

「先生も大丈夫って言ってたし、そろそろ帰るか」

「そうですね……」

最後にベッドで眠る羽沢の顔を見てから2人は入り口の方へと歩いた。俺もその後を追うように歩く。

「じゃ、アタシ達はこれで失礼します。あとは、よろしくお願いします」

入り口のドアを開け、病室を出てから挨拶をする巴。

「ええ。ありがとうね。そっちの男の子も」

「俺は別に……。やるべきことをしただけですから」

「簡単に出来ることじゃないわよ」

「そう…ですか。ではこれで」

病室を後にした俺たち3人は、受付付近で一旦一息ついた。

「倒れた時はどうなるかと思ったけど、たいしたことなくてよかったな。2、3日休めばよくなるって言ってたし」

「うん……」

医者じゃない俺たちは何がどうなってるのかはわからないからな。いざ大丈夫と言われると、安心するものだ。

「ひまり？」

「私、つぐが倒れてるの見た時に……頭の中が真っ白になっちゃって……。巴に救急車！ って言われてやっとハッとしたの」

ふと倒れた時のことを思い出し、そういうえばそうだったなと振り返る。

「ホント、テンパっちゃって、私。ダメだよね……。もつとしっかりしなきゃ。つぐ、最近見るからに疲れてたんだし、もつとちゃんと休むように言えばよかった……」

「今回の失敗を次に活かせばいいさ。失敗から学ぶことができるのが人だ」

落ち込む上原の頭においてそう言った。受け売りだが、その教えがあったからこそ今の俺が居る。

「アタシはあの時、隣にひまりがいてくれてよかったって思ってるよ。旭日先輩はそれ以上に」

多少なりとも役に立てたならよかった。

「1人だったら不安で何も出来なかったと思う。けど、ひまりが…旭日先輩がいたから、ああやって対処できたんだ」

ああいった状況で近くに見知った人が居るといふのは、すごく心強いものだ。それを1年前に知った。

「ひまりはよく知ってると思うけどさ、アタシだってそんなに強くないんだぜ？ だから、ひまりばかり自分を責めたりしないであれ」

「責めたっていいことはないしな。辛い現実を自分から辛くする必要はない」

俺がそう言うのと巴は上原のほっぺたを軽くひっぱり始めた。それにしてもよく伸び……やめておこう。

「……ほら、笑顔笑顔」

「ひゃ、ひゃう〜！ と、ともええ〜ほっぺひっぱるのやめてえ〜」

すぐに手を引っ込める。全然何言ってるかわからなかったな。

「ははっ。悪い悪い。ひまりには落ち込んだ顔してほしくないんだよ」

「怒った顔はいいわけ〜!？」

「怒った顔はまあ、面白いしいいかなって……」

「も〜！ 巴のばか〜!」

いろいろあったが今は大丈夫そうではかった。そのうち羽沢のご両親も来るだろうし、俺たちは引き上げるとしよう。さてと………この後どうするか。

## 第28話 愚直な努力

第28話 愚直な努力

花咲川女子学園 廊下

俺はある陰謀で花女に来ている。

陰謀と言うと語弊があると思うが、そう呼ばせてほしい。なぜ花女に来ているのかは、後々話すとしてどうか。

今は床に落ちているプリントを花女の生徒と拾っている最中だ。

「1枚踏んでる」

「えっ!? あっ、本当だ…」

「すぐトチるよな。丸山は」

「そ、そんなことないよ!」

そう言うが数々のとちり具合が脳裏によぎる。特に以前話した、ポテトLサイズ2つがMサイズ2つで来たこと。あれはボタンを押し間違えたのか。それとも聞き間違えたのかはわからない。

「今回も悪かったな。完全によそ見してた」

「ううん。私もプリント見ながら歩いてたから」

花女に来て早々、廊下をよそ見しながら歩いていたら大量のプリントを持った丸山にぶつかってしまい、ばら撒いたというわけだ。

「なんだか懐かしいね……」

「去年も同じことがあったな。あの時の方がもっと大変だったが」

「そ、そうだね。でも今は大丈夫だよ!」

「ならいい。今度は気をつける」

「私も気をつけるね」

丸山と別れ、ようやく目的地に向かって歩き始めた。そうだな……丸山とのことも話したいが、今はここに来る前に何があったのか、出来事を話そう。

花咲川高校。現生徒会長は——自意識過剰なところがある。突然

なにを言い出しているのだろうと思うところもあるだろう。ここは1つ、まずは話を聞いてほしい。

俺の通う花高の生徒会長は、前生徒会長の推薦。もしくは生徒会長選挙によって決まる。確か花女も羽丘もそんな感じだ。話を戻そう。

現生徒会長は元々副会長で、前生徒会長の推薦で決まった。まあ全く生徒会のことを知らない俺でもそこら辺の聞こえてくる日常会話でわかるくらい真面目で、行動力のある人物。たが1つ欠点があった。

「ということ、花咲川女子学園に行き慣れている君に仕事を任せたい」

「お断りします」

放送でいきなり呼び出されたかと思っただらこれだ。

「即答だね……！」

「当たり前です。めんどくさいので」

「そ、そこをなんとか……！　僕ではどんな目で見られるかわからないじゃないか！」

現生徒会長は自意識過剰なところがあると思う。気持ちはわからなくもない。

詳しく説明するとだな。女子ばかりの所に行くのは不安で、なにを言われるかわからないと。しかし、俺は言いたい。それは俺も同じなのではと。むしろ剣道部、弓道部、柔道部とかは花女で部活を合同で行っている点を考えると、別に花高の生徒が居てもおかしくないのだ。なぜ合同なのかはまた次の機会に話そう。

そして俺は知らない。昔、現生徒会長が副会長という立場なのがまだ認知されていない時。女子バスケット部の部室に必要な書類を催促しに行き、そこで部長以外の部員が、「あれは誰?」「副会長じゃなかったっけ?」などのコソコソ話を、「なにあの人」「キモくない?」と悪口だと勘違いしたという話を。

「山梨先生が君なら快く引き受けてくれると言っていたのに!」

担任にして生徒会の顧問め。よくも余計な情報をポンコツ生徒会長に教えたな。……あの先生のことだ。悪気は全くないのだろう。

さつき少し出た話だが、なぜ俺が花女に行き慣れているのかは説明する必要があるな。簡単に言うと花高、花女、羽丘でやり取りしている資料を届けるため。ついでに行く先々に居る母さんの教師仲間に見せるためだ。毎回毎回俺が行くわけではないが。

「じゃあ他の生徒会の人と行けば良くないですか？」

「今日は生憎、みんな部活と委員会で居ないのだよ」

「そうなんですか。では頑張ってください」

「待ってくださいよお！」

めんどくさい……。いくら困っている人を助けたいという思いがあっても、この先のことを考えると俺が行くべきではないと思う。

「だったら一緒に行くのが条件です」

「今日は仕事がたくさん残っててね……」

「ふざけてるんですか？」

「そんな怖い顔をしないでくれ……。仕事が残っているのは本当のことなんだ」

本当にこの人が生徒会長でいいのか？　そもそもこんな性格でよく生徒会長になろうと思ったな。

俺は憧れの前生徒会長に推薦されたのが嬉しくて後先考えずにOKしたことを知らない。

結局今回だけはこの理由で来た。花女の生徒会とは面識あるし問題はない。すぐに終わるかと思っただ、来て早々に丸山にぶつかってしまったわけだ。

こうして花女に来るたびに何かしらあるような……ないような……。最近はいろいろあり過ぎて特に気にもならなくなってきた。……。それでいいのか？

そして、やっとたどり着いた生徒会室。ノックを3回してから扉を開ける。

「失礼します。花高から生徒会の書類を届けに来た旭日夕です」

「いらっしやい、旭日君。わざわざありがとうね」

花咲川女子学園の生徒会長。鰯部七菜先輩。Glitter\*Greenのキーボード担当。しかしを周りの人はそれをあまり認知していないが。

わざわざ資料を受け取りに来てくれた先輩に書類を渡した。

「旭日君、生徒会に入っていたかしら？」

「あ、今日は代理で持ってきました」

ポンコツ生徒会長の代わりに。

「そうなのね。ありがとう」

「いえ。俺はこれで失礼します」

会釈をしてから生徒会室を後にした。ただ渡しにくるだけなら、こんな風に一瞬なものには。次は絶対連れてこよう。

そう誓い、おつかいを終えた俺は事務所の方へと足を進める。入る前に入館証をもらわないといけない。帰りはまた逆のことをしないとけないんだ。

ふと廊下で足を止めて窓の外を眺める。

……花女に來慣れている理由は他にもある。母さんは花女の教師だったからな。時折家に忘れていく弁当だったり忘れ物を届けに來ていた。

1年前 花咲川女子学園

放課後。俺は花女に訪れていた。

別に不法侵入してやろうとかそういうわけじゃない。母さんが家に忘れ物をしたと言うので、一旦家に帰ってわざわざ持ってきたんだ。中身はわからん。ベッドの上に置いてある手提げ袋を持ってきてくれとしか言われてないからな。

非常にめんどくさいが、持っていけない方がめんどくさい。後から怒られるのは目に目えるからな。

「めんどくせえな……」

そんな言葉を吐き出しながら廊下を歩き、まずは事務所に通行証的なものを取りに来た。

「こんにちは。旭日陽子先生の忘れ物届けに来たんですけど」

「こんにちは。前みたいに書類書いてもらてるかしら？」

「わかりました」

流石に4度目にもなると書き慣れるものだな。最初は書くのがめんどくさくて帰ろうかと思った。いや、冗談なしに。

すぐに書類を書き終えて受付をしてくれた事務員さんに渡すと、引き換えに通行証……ではなく入館証をもらった。入館証だったか。

ストラップが付いているので、それを首からかけて先へと進んだ。

そういえば今日はどこに居るんだろうか。この前は職員室。その前は……教室。その前は……どこに居たっけか。いろんな所探し回ったような気がする。つまりどこに居るのか予想出来ない。

こうなると職員室に行くのが妥当だろう。美奈川先生も居るだろうし、なんとかしてくれるな。よし、そうしよう。

過度な期待は無駄だということを俺はまだ知らなかった。

### 職員室

なんだろう。職員室入るのってなんか緊張するな。別に母さんが居るかどうか確認するだけなのに。他の先生に今日息子が忘れ物届けに来るくらいは言ってる……よな？ ……考えるのもめんどくさい。さっさと用事済ませて帰ろう。

3回ノックして扉を開けた。

「失礼します。花咲川高校から来ました。母の忘れ物を届けに来たんですけど、旭日陽子先生はいらっしゃいますか？」

開けると案の定先生たちから注目される。そんなに見るもんじやないと思うんだ。

すると近くに座っていた女性の先生が対応してくれた。

「陽子先生の息子さん？　なのね。ちょうどさっき職員室出て行っ



「ちゃったのよ」

「そうなんですか」

「タイミングが悪かったな。」

「たぶん部活だと思っただけ……渡しておこうか？」

「それならそれで……」

『ごめん、夕。私のベッドの上に置いてある手提げ袋今すぐ持ってきてくれない？ 部活で使うから』

「仕方ない……」

「自分で渡しに行きます。軽音楽部ですよね？」

「そうそう。場所わかる？」

「特別棟ですよ。たぶん大丈夫です」

「悪いけれどお願いね」

職員室を後にした俺は特別棟の方へと足を進めた。今度ハンバーグでも作ってもらおう。……そういえば美奈川先生は？

廊下

夕方の校舎というのはあまり人が居ないようだ。すぐく助かる。入館証を持っているとはいえ、部活をしに来たわけでもない他校生が居るのは目に止まるからな。

しばらく歩き、角を曲がった直後——何かにぶつかった。

「いたっ……！」

声と共に宙に舞うプリント。どうやら人にぶつかってしまったようだ。

「すいません。大丈夫ですか？」

床に尻もちを着いているのは花女の生徒。ピンク色のセミロング。年は……わからん。この学校は先輩後輩の区別がつかないからな。

「だ、大丈夫です。よそ見しちゃって……」

「いや……ぶつかったのと……その」

「よっほど痛かったのか。」

それとも俺が嫌だったのかはわからない。

なぜかぶつかつた子は涙を流していた。

「死んだ方がいいですか？」

「違つ……！ これは……本当に……なんでもないんです……だから」  
なんでもないならいいか。プリント拾つて……行けるわけがないよな。

頭を搔いてからプリントを一枚一枚広い上げる。ふと名前が記載されている所が見えた。どうやら高校1年生らしい。同い年だ。

「すいません……手伝わしてしまつて」

「いいですよ。ぶつかつたのは俺ですし。プリント拾うよりも涙拭いた方がいいですよ？ 酷いことになってます」

そう言つてブレザーの上着からハンカチを取り出して渡した。

「ティッシュの方がいいですか？」

「い、いえ……！ ありがとうございます！」

そう言つて受け取ると涙を拭きはじめる。そして……鼻までかんだ。それハンカチなんだが？

「あつ！ す、すいません！ 洗つて返すので……」

泣いた次は顔を赤くして謝っている。忙しい人だなーと思うと同時になんだか笑えてきた。

「ふつ……すいません。忙しい人ですね」

「恥ずかしい……」

とりあえず落ちているプリントを全て拾つてまとめ上げる。これはあれか？ 名前の順的なやつか？

「これ名前の順ですか？」

「そうですね……後はやつておくので……」

「じゃあお願いします」

「(あれ……？ 手伝つてくれる流れじゃ……)」

早く忘れ物届けて家に帰りたい……だがここで無視して行つてしまったとしよう。後々母さんにバレてガミガミ言われる方がめんどいな……その可能性は低いがどうする？ 少しでも自分に不利益をなくすには……。

「やっぱり手伝います」

これ一択。

「あ、はい。ありがとうございます……」

なぜか他校生と廊下でプリントを名前の順に並べる作業をし始めた。とても不思議な感じだ。

それはどうでもいいんだが……なんか見たことあるんだよな。どこでだ？

じつとピンク色のセミロングの子を見つめる。

「すごい見られてる……。も、もしかして私の……ファン?!」

あー思い出した。

「べろべろに酔っ払った母さんが見せてきた写真に写ってた人だ」

「何がですか?! ま、まさか……隠し撮り……?」

「いやいや。俺の母親は旭日陽子先生なんですよ」

「えー?!」

確か名前は……丸山さんだったか。アイドルの研究生で頑張り屋さんとかなんとかすごい自慢してきたんだよな。すごい酒臭かったのしか覚えてなくて危うく忘れるところだった。

「俺の名前は旭日夕。たぶん同じ年」

プリントを整理しながら自己紹介を始めた。

「あなたが陽子先生の息子さん……。私は丸山彩っていいいます」

「同じ年だし、敬語は要らない。先生の息子だからって別に特別じゃないし」

「じゃあ……お言葉に甘えてそうしようかな」

すっかり忘れていたがなんで泣いていたんだろう。

「なんで泣いてたんだ?」

「あっ……それは」

「……唐突だったな。言いたくないならいい」

「(旭日君……聞かないでくれるんだ)」

「相談されてもめんどくさいし」

「えー?!」

そんな大声で叫ばないでくれ。確かに今の発言は勘違いを産むものだったけども。そこまで叫ぶことでもないと思うんだ。

「そういうのは俺じゃなくて母さんに相談した方がいいと思う。ちゃんと聞いてくれる人だし」

「陽子先生に……でも」

そう言うとなぜか黙ってしまおう丸山。それと同時に名前の順にプリントを並べ終わった。

「(前に一度相談してるんだよね……。確かその時は……)」

『機会があれば私の息子と話してみるといいわ。運が良ければ答えが見つかると思う』

「旭日君は……努力が報われない時ってどうする?」

「……めんどくさ……難しい質問だな」

そう言うってプリントの束を持って立ち上がった。

危ない危ない。つい本音が。つうか母さんさしがねだな? 相談

を勧めた直後なのに聞いてくるのは。

「俺は努力とかめんどくさいから基本しない……だけど、ずっと見てきた。確かに報われないこともある。むしろその方が多いと思うのが個人的な意見」

ふと思い出すのは夜遅くまで起きて何かをしている母さんや紗夜のこと。

「でも……俺はずっと続けるのは苦手だから、その努力を続けられるのは1つの武器だと思う。だから努力を諦めるな」

「1つの……武器」

「自分に出来ることをしていけばいいんじゃないか? 俺なんていつもそうだ」

プリントの束を丸山に渡すと、受け取ってくれた。流石に持っているのは勘弁してほしい。さっさと用事を済ませたいし。

「夕? こんな所に居たのね。それと彩も」

後ろに振り返ると、そこには母さんの姿があった。

「ばら撒いたプリント拾ってたら遅れた。ぶつかっただけ俺だけど」

「気をつけなさいよ? どうせぼーつとしてたんでしょ?」

「割と周りは見てた」

「余計ダメじゃない……」

呆れる母さんを前に俺は手提げ袋を渡した。これで俺の用事は終わった。さっさと帰ろう。

「じゃあ俺はこれで」

思ったよりも時間がかかってしまったが……今日はいいか。

## 第29話 努力の意味

第29話 努力の意味

「夕先輩？」

この声は。

声の主を確かめるために後ろに振り返った。

「この人が旭日夕先輩？」

「香澄と……君は誰だ？」

去年のことを思い出していると、香澄とその友達？に出会った。こんな時間までいったい何をしていたんだろうか。補修か？補修なのか？

それに隣の茶髪ストリートロングの子は誰だ？俺の勘が危険だと言っている。

「えっと……あの……！走りながら話しませんか?!」

「なんでそうなるんだよ。慌ててどうした？」

「今から有咲の家行くんです！」

なんだかよくわからないが、急いでいるようだし行かせてやるか。俺はそろそろ帰りたい。

「そうかじゃあまた今——」

「行きましょう」

「ん？どこに？」

なぜか俺は香澄の友達に引っ張られて走り始めた。こうなると着いていくしか方法がないんだが、それよりもまずは入館証を返したい。でないと怒られる。

帰り道

「それでこんな急いで市ヶ谷さんの家に向かっていると」

「そんなところですよ」

香澄の友達。花園たえと話しながら市ヶ谷家に走っていた。

どうやら香澄は最近花園さんと一緒に行動していることが多いらしい。理由はギター仲間だから。しかも2人揃って家庭科の課題が終わらず、放課後一緒にギターケースの袋を作っていた。だいぶツッコミどころが満載だが今はいいか。

そして最近練習にすら来ない香澄に嫌気がさした市ヶ谷さんが痺れを切らし、怒られたと。香澄はよくも悪くも正直だからな。それと2つのタスクをこなすのが苦手だ。

しばらく走り、ようやく市ヶ谷家にたどり着いた。蔵へと先に行つてしまった香澄を見送り、俺は花園さんと2人で門付近に立ち止まった。

「香澄の事情はわかった。君はなんで俺を知っているんだ？」

「陽子先生とオーナーから聞きました。あと凜々子さんから」

つまり……母さんとオーナーはSPACEのか。凜々子さんの名前も出ているし。でもなんでSPACEの話が出てくる？

「君はSPACEでライブをしたことがあるのか？」

「ないです。いつか出たいとは思いますが」

「そうか……じゃあオーナーとの接点は？」

「バイトしてます。それで聞きました」

なるほどな。俺が辞めた後に入った子か。そういえば前にグリグリのライブを見に行った時に見かけたような……そうじゃないような。

オーナーの件はわかったが、母さんを知っているのは花女に通っているからだろうな。

「先輩はギターやらないんですか？」

またギターの話か。

「……今はやらない。母さんの音楽とはまだ向き合えない」

「そうですか。……すごく綺麗な音だったり、熱い情熱を感じる音でした」

「聴いたことがあるのか？」

「一度だけですけど」

確かに花園さんの言う通りだ。母さんの音は綺麗だったり、暑い情

熱を感じる音だった。弾く曲によって変わるんだ。歌い方も。

途方もない練習から産まれた音を。俺が弾いていいわけがない。どんなことがあっても、向き合おうとしない今の俺には。

「母さんのギター。いつ聴いたんだ？」

「去年の文化祭です。軽音部の人と一緒に弾いているのを見ました……。すごくドキドキして、今でも忘れられません」

あの時の母さんは本当に楽しそうだったな。家に帰ってきてもずっとライブの話をしていて。お酒を飲んでいないのにテンション高かったのを今でも鮮明に覚えている。

「そろそろ俺は帰る。香澄には帰ったって言うっておいてくれるか？」

「わかりました。……。少しだけでも、話せてよかったです」

「そうか。俺も母さんの音を覚えていてくれている人に会えてよかったです」

それだけ言い残して俺は市ヶ谷家を後にした。

花園たえ。とても不思議な感じの子だったな。なんていうか……。捉えどころのない感じというのだろう。

俺はまだ知らない。あれは氷山の一角にも過ぎないことを。

## C i R C L E    ロビー

次の日の放課後。

「スタジオ空いたから一旦清掃してきてもらえるか？」

「わかった。次のお客さんはすぐ入らないよね？」

「そうだ。急がなくても大丈夫だ」

「了解。行ってくるね」

スタジオの清掃へと向かう南雲を見送り、受付で一息つく。教えたりにするのは全然構わないのだが、いかんせん真宗という最大最強の後輩がいるせいで上手くいかない部分が多い。もうすでに外で鈴音にスパルタ指導をされている真つ最中だが……。

「あのっ……旭日さん」



1人受付に立っていると以前聞いた覚えのある声が聞こえてきた。その声の主は。

「君はこの前駅に居たというより……こころのバンドの人」

「はい。松原花音です。美咲ちゃんからお話聞いてて、それで」

「ダメで構わない。同い年だし。もしかして話つて母さんのことか？」

「そうです……あつ、そうだよ」

この子も母さんとの繋がりがあるようだが、どんな話をしていたのかはわからない。いろんな生徒が居るからよつぽど記憶に残らない限りはわからない。

「陽子先生にはたくさんお世話になったんだ。特に教室の場所教えてもらったりとかで……」

「教室の場所……？」

苦笑いをしながらそう言った松原だが、いったいどういう意味なのだろうか。

「私ね。よく道に迷っちゃうから」

「……思い出した。確かそんな話を母さんがしていた気がする」

「本当？ えへへ、少し恥ずかしいな」

あれは確か……。

去年の出来事。

「かああ。疲れた時はビールだよね」

「おっさんみたいだな」

ソファアに寄りかかってテレビを見てみると、いつも夕食を食べている足の高いテーブルでビールを飲む母さんの声が聞こえてきた。仕事終わりの1杯はいつもこんな感じだ。

「夕も私の年になればわかるわよ」

「俺は付き合い以外じゃ飲まない」

「じゃあ母さんに付き合いなさい」

いつも話し相手になってるだろ。見ろ、何かつまめる物を作ってる  
父さんが悲しそうな顔で作ってるぞ。

「あなたも早くしてよね〜」

「はい、ただいま!!」

急に元気になったよ。わかりやすいなーホントこの父親は。

言うまでもなく父さんは母さんにデレツデレだ。気持ち悪いほど  
に。なんでこの2人が結婚したのか未だに分からない。家のパワー  
バランス100で例えたら母さん70。俺20。父さん10程度だ  
な。

「そうそう。今日面白い生徒に会ったのよ」

「いつも面白い生徒見つけてくるじゃん」

「何百人って居るんだから当たり前でしょ?」

あんたは1年生の学年主任なんだから、2年、3年は知らなくても  
おかしいことはないんだが? 前は2年生の担任も3年の担任も  
やってたって言ってたっけ。

「夕は高校入って2ヶ月経つけど、校舎の中覚えてる?」

「まあ一応……それが関係あるのか?」

「なんとなくは覚えてる感じよね。今日会った子はね——」

その時の話が今話している子のことだったとは。

「道に迷ってた私のことをよく教室まで連れて行ってくれたり。他の  
生徒に道案内頼んでくれたり。感謝してもしきれないくらいだよ」

「そうか。ならよかった」

「いつかお話出来たら、またしたいな」

「機会があれば構わない」

その時はまた違った話を松原から聞ければいいな。こうして少し  
ずつ母さんのことを知っていきこうと思う。

旭日家 自室

今日も疲れた……。主に真宗のフォローをしながら南雲に教えるのが。というかメンバーが悪かった気がしてならない。俺、南雲、真宗、鈴音、早乙女。な？ おかしいだろ？

真宗と鈴音はやっぱり喧嘩するし。早乙女は気が付いたらお茶してるし。南雲は……。指示をよく聞いて仕事してくれるな。早く一人前になってもらおうとしよう。そうしないと問題児の面倒を見れないからな。

ベッドに寝転がりながら今日のことを思い出していると、インターホンが鳴った。こんな時間に誰だろうか。いや……。おそらくだが。

ベッドから起き上がって玄関の方へと向かい、鍵を開ける。扉を開くと予想通り。

「どうかしたのか？ 日菜」

「うん：おねーちゃんがね」

「また何か言われたって感じ……。でもなさそうだな」

落ち込んでる。というよりは心配そうな表情だ。それも無理はない。ここ最近の紗夜はどこかイラついている。と、言っても原因は1つしか思い当たらないんだが。

「とりあえず入れよ。立って話すのもなんだし」

日菜を家の中に入れてから、自分の部屋に戻っていく。ベッドにダイブというわけにもいかず、とりあえずゲーミングチェアに座った。「お邪魔しまーす。ってゆうーくんの部屋、相変わらずだね」

汚いって言いたいんだろう？ グーの音も出ないからやめてくれ。確かにあちこちに参考書が置いてあるし、鞆は下に置きっぱなし。さらにはゴミ袋ももうすぐいっぱいだ。めんどくさいからと言って大きい袋にしたけど結局あんまり意味ないな。

「掃除はまた今度やるさ……。それよりも紗夜がどうかしたのか？」

「調子悪そうだったから声かけたんだけど、追い出されちゃって……。調子が悪いか。それはどっちの意味なのだろうか。ギターのか。それとも体調なのか。おそらくは……。前者だろうな。少なくともあんなことがあったんだ。だからと言ってどうすることも出来ないの

もまた事実。

「ほつとけ……とは言わないけど、あんまり心配するな。紗夜もいろいろ大変なんだ」

「なんか……ゆうくん変わったよね」

そう言いながら俺のベッドに座る日菜。俺からすればあんまりなんだが。変わる変わらないの話をすれば、相変わらず日菜は日菜だ。パスパレの仕事も楽しいみたいだしな。……丸山、大丈夫なのだろうか。日菜にいじり倒されてなければいいが。

「前ならめんどくさいとか、なんで俺がとか、めんどくさそうな顔してたのに」

「……そうだな」

俺はただ……母さんの残したものを守りたかっただけだ。血の繋がりが無い代わりに。少しでも母さんの思いや行動を残したかった。意外と自分ではわからないものなのかもな。もちろん紗夜も同様だ。

「いつまでも子供じやいられないからな」

「そつかく。でも、あたしは今のゆうくんの方が好きだよ？ るんつてくるー！」

「なんだそれ。……まあせいぜい頑張るよ」

日菜がギターを始めたことで確実に紗夜は変わった。悪い方にとは言い切れないが、良い方とも言えない。紗夜のことだ。負けたくないから無理してでも練習してるんだろうな。

「日菜もパスパレの仕事頑張れよ。話なら聞いてやるから」

「ホント!? じゃあね〜」

しまった……まさか今から始めるとは予測出来なかった。まあ、いか。仕事の話やメンバーの話をごんなに楽しそうに話すんだからな。

日菜が話し始めてから30分が経った頃。

「珍しくずつと話聞いてくれるね」

「いつもは聞いてないみたいな言い方するな」

「本当に聞いているの？」

「聞いている聞いている。丸山をいじるのが楽しいって話だろ？」

「ピンポイント過ぎるよー」

話を聞いている限り大丈夫ではなさそうだな。時折羽沢珈琲店に居合わせる若宮からも話を聞いたりするが、上手くフォローしてくれる大和が居るからだろうな。なんだかんだいい雰囲気なのか？

「楽しそうだな。4人で居ることがほとんどみたいだが」

「そうそう。千聖ちゃんだけ居ないことが多くて」

個人の仕事が忙しいんだろう。元とはいえ子役だし、普通に芸能人だし。何をしているのかはよくわからんが。テレビには疎くてな。パソコンでいろいろ解決してしまうことがほとんどだし。

「この間もね。スタッフの人と話しててさ」

この前のライブの件で文句でも言いに行ってたんだろうか。それとも別の用事か。

「なんか千聖ちゃんはパスパレじゃない別の選択肢を探してるんじゃないかなーって思ったんだよね」

別の選択肢か。子供の頃からずっと芸能界に居るんだよね。今回みたいなことは悪影響でしかない。そう考えると脱退という選択肢もあるか。

「少なくとも日菜にはそう見えただろう？ だったらその線もあるんじゃないか？」

「やっぱりそうなのかなー」

日菜は勘が鋭いからな。それに加えて予想外な行動までするものだから、普通の考えは通用しない。厄介な相手に捕まったな。

「日菜はどうするんだ？ このまま続けるのか？」

「飽きたらやめようかなーって思ってる」

「そうか。日菜らしい」

「うん！ でも今はまだ続けるよ。大っきいところでライブしたいし！ その時はまたゆーくん呼ぶからね」

また関係者席か……居心地がいいような悪いような。でも友達な

のは確かなことだし、そうビクビクするものでもないか。……萩野にはバレないようにしないと殺されそうだな。

「……いつか。おねーちゃんにも、見てもらいたいな」

「……そうだな。俺も紗夜と2人がいい」

「ゆーくんってそういうところあるよね」

「どういうところだ？」

全く身に覚えはないんだが？ そんなことを言われるような発言をした覚えはない。

「ふーん。まあいいけど」

いったいなにがいいんだ……。

たまたに日菜の考えが読めない。

## 第30話 冷たい言葉

第30話 冷たい言葉

CIRCLE ロビー

今日もバイトだ。働き者だろ？ やはりバイトは欠かせない。そんなことを言い始めたらいよいよ終わりか。

そんなことを考えながら、いつも通り外を眺めながらぼーっとしていた。

「おつかれさま」

南雲がロビーに来たようだ。

「お疲れ。スタジオの掃除終わったのか？」

「うん。他に何かやることはある？」

「そうだな。まりなさんに聞いてみてくれるか？ それでもなければ、受付をしてみよう」

「わかったよ」

そう言うときまりなさんを探しに事務所の方へと行った。

本当に真面目でよく働いてくれる。どっかのサボリたがり達とは大違いだ。とは言え、このまま成長して俺がお払い箱になるのも困るな。

そんな事を考えながら、外を眺める。

あれから数分後。南雲はどうやらやることがあるらしい。戻ってこないからな。

そして、なぜかロビーに今井が居る。しんどそうな顔を浮かべて。ちなみに今日もRoseliaのバンド練習があるわけだが。

「旭日……君。助けて……」

おそらく。と言うより、紗夜のことだろう。お怒りの中、個人練をしている姿が恐ろしくてしゃあないってところか。まあ無理もない。なぜかって？ 今の紗夜は時間を1分足りとも無駄にしたくないわけ。

「3人來ない……気まず過ぎてスタジオに居れないよ」

「頑張れ今井。お前なら出来るぞー」

「それ全然応援してないやつじゃん……」

そう言われてもな。なんとかしてやりたいのは山々なんだが。いかせん紗夜とは冷戦状態だな。なかなか心を開いてくれないんだよ。

そもそも今まで遅刻がなかったのに3人も遅刻してるんだ？ あこと白金はともかく、湊まで遅刻だもんな。何かあったんだろう。

「……この前のことでまだ気まずい感じ？」

「まあな。……昔からあまりそういう相談なかったしな」

「そっか。いろいろあるんだね」

昔から紗夜はあまり相談事はしてこなかった。母さんとの関係を知ってからはなおさら。実際どうしたらいいか、まだ迷ってしまうところがある。何も言わないでやるののがいいのか。それとも多少強引でも相談させるののいいのか。

「旭日君ってさ。昔からそんな感じなの？」

「目が死んでるってことか？」

「違う違う！ こう……なんて言うんだろう。誰かのために何かをしてあげること……かな」

「いいや、昔は違った。今よりもっと人にも……自分にも興味がなかった」

よく言えば気にしない性格。悪く言えば無関心。今の生活が保たれるなら、多少悪く言われようが何も気にしない。だから……紗夜のこと。母さんのことも。気づけなかったんだろうな。

「そうなんだ。今はそんな風には見えないよ？」

「今は……な」

先のことなんてわからないもんだよ。

「アタシ、そろそろ戻るね」

「ああ。気まずいとは思うけど、頑張れよ」

「うん！ ありがとう」

スタジオに戻っていく今井を見送り、俺はカフェテラスの方を眺め始める。



母さんならどうしたんだろう。

結局15分遅れと、30分遅れで湊とあこ、白金が到着した。何が  
あったかは聞かなかったが、たぶん紗夜は相当お怒りだろう。

CiRCLE ロビー

「あ、そうだ。夕君、夕君」

「なんですか？」

スタジオの予約リストを見ると、海藤さんが何かを思い出した  
ように声をかけてきた。こういう時の海藤さんってだいたい問題  
持ってくるんだよな……………。

「この前友希那ちゃんが練習後にスカウトされてたんだよ」

「スカウト？ モデルとかですか？」

「あははっ。スタイルいいし、美人だしそっちだったら面白かったか  
もね」

ということは音楽関係ということしか残らない気がするんですけど？  
でもモデルとしてスカウトされてるのはそれはそれで面白い  
な。音楽以外興味ないのでとか言って断ってそう。

「音楽関係の人がフェスに出ないかって」

「フェス。それってFUTURE WORLD FES. ですか？」

「そうじゃないかな？」

思ってもない話だけどそんな話今の湊には関係ないだろ。Ros  
eliaとして出る気だから、その人も無駄足だったな。

「でも本人保留にしてたんだよー」

「え？ 断ってないんですか？」

「うん。なんか渋ってる感じ？ かな」

いったいなんのつもりだ？ 初めて出たライブの後に紗夜から聞

いた話だとRoseliaでコンテスト受けるって話したくせに。

若干のもやもやを感じつつも、まだ保留にしているだけマシかと自分の中で落とし込む。

「でも技術力のあるメンバーも向こうで集めたみたいだけど、さすがにねー」

その言葉がもやもやを加速させた。まだ本当かどうかはわからない。ただ相手の話を飲めば、集めたメンバーの意味なんて――。

「今受けたら集めたメンバー意味なくなっちゃうし」

「そう……ですね」

紗夜の時間はどうなる。あこと燐子のコンテストにRoseliaで出たいって意思はどうなる。そばで支えたいって今井の気持ちはどうなる。

「もやもやするのでちよつと話聞いてきます」

「熱心だね」

「Roselia居なくなったらお客さん減っちゃいますよ?」

「それは困るな。まりなさんが」

海藤さん。あとはオーナーも困ると思う。俺も当てがひとつ減って困る……。

練習しているであろうスタジオにノックもせずドアを開けた。

「ちよつと話が――」

「……………っ。私達とコンテストになんか出場せずに、自分一人本番のステージに立てればいい、そういうことですか?」

怒りに近い紗夜の声。ここ最近ずっと苛立っているからなのかはわからない。口調が荒くなった紗夜の言葉。その言葉だけでだいたい察せれるほど条件が揃ってしまっている。

そして視線が俺の方へと向いた。

「今の話、本当なのか？」

「……っ！……私……は」

「……否定しないんですね。だったら……」

否定の言葉があればどれだけ安心できたか勘違いでしたので終わればどれだけ楽で、笑い話に出来たか。

慌てた様子で今井が話に割って入る。

「ちよ、ちよっと待って！　そう言ったわけじゃないじゃん！　友希那の言い分も、ね」

言ったわけではない。ずっと無言なのがその答えと言っても過言ではないのが心苦しい所だ。

彼女の名前を呼ぶが答えが返ってくることはなかった。

「……っ、ちよっと、なにか……！」

「私達なら、音楽の頂点を目指せる」なんて言って、”自分たちの音楽を”なんて、メンバーをたきつけて……」

あの時。どっちの言葉からも俺は嘘偽りを感じなかった。でも今は。

「……っ。フェスに出られれば、なんでも、誰でもよかった。……そういうことじゃないですか!!」

「……え。それじゃあ……あこたち、そのためだけに、集められたってこと……」

「……あこちゃん、なんにも、そうとは……」

否定がない以上そうとし受け取れない。全員出るためだけのメンバーということになってしまう。そうだとしたら、今までの言葉はあまりにも残酷すぎる。

「あこ達の技術を認めてくれたのも……Roselliaに全部かけるって話も、みんな……嘘だったの……？」

「あこちゃん……待って、どこに……」

「ちよっ、ふたりとも……っ！」

崩壊は加速していく。

1人スタジオを飛び出してしまったあこ。彼女を追いかけて白金

も出て行ってしまおう。残ったのは俺を含めて4人。

「湊さん。私は本当に、あなたの信念を尊敬していました。だからこそ、私も……とても失望したわ」

「紗夜。お願い、少し待ってよ。友希那の話を……。旭日君からもおね——」

「夕は関係ない!! 答えないことが最大の答えだわ!!」

悪い今井。その願いは俺には叶えられそうにない。今止めても。この状況は何ら変わらないからだ。それどころか余計に悪化する気さえする。

「じゃあ、これから先、アタシ達、どうするつもり……?」

「あなたと湊さんは”幼なじみ”。何も変わらないでしょうね」

「そういうことじゃなくて——」

今井の言葉が紗夜に届くことはなかった。きつと彼女が言いたかったのは *Rosealia* としてどうするのかなのだろう。冷静さが無い今の紗夜には言ってもわからない。

「私はまた時間を無駄にしたことで、少し苛立っているの! 申し訳ないけれど、失礼するわ」

そう言うのと紗夜も1人帰る支度をして出て行こうとする。それでも言葉をかけなかった。どの言葉をかけても今、冷静話が出来るとは到底思えないからだ。それにここまで関係が崩壊するなんて予想外だしな。

思わずため息が漏れた。

——☆

すれ違い、ドアの前で立ち止まる紗夜。そして。

「……っ! あなたはまた傍観しているだけで何も言わないのね!!」

日菜には何かを言って!」

振り返ってさつきよりも大きな声で叫ぶ。それでも彼が驚くことはなかった。それどころかいつもと変わらない無愛想な表情で答え

る。あまりに変わらない表情に少し冷たささえ感じるほど。

「今冷静に話し合えるとは到底思えない。違うか？」

「ちよつと2人ともこんな時に——」

ただでさえ悪い状況なのに喧嘩を始めてしまう2人。止めようとリサが口を開くもお構いなしに続けてしまう。

「何も言わない？ 言ったところでこの状況が変わるとは思えない。それと……日菜の話は関係ないだろうか？」

「そうだけれど……」

今なら紗夜の気持ちが変わるちよつどいい機会なのかもしれない。

「いつも相談とかしてこないだろ」

「……っ！ あなたにだけは迷惑をかけたくないだけよ……!!」

「いつ俺が迷惑をかけるなって言った？ 勝手に気を使ってるのは”どっちも”だろ？」

核心を突いたのか。紗夜の様子が少しだけ変わった。その変化を彼が見逃すことはない。

「勝手に……？ それはどういう……意味？」

今でも鮮明に覚えている。

『夕……実は。母さんとは——』

とぼける紗夜だが、頭の中にはあの日。夕の父親が彼に重大なことを告げた瞬間。そして……。

『なにが……人をよく見ている……だ。1番近くに居た人さえ……見れてないくせにっ!!』

部屋を覗いた時、そんなことを言いながらベッドに横たわる夕の姿が。目の位置に腕を置いていて表情は読めない。

ふと机に視線を向けた時、大きなヒビが入るパソコンのモニターが

視界に入った。何度殴ったんだろう。ヒビは複数だ。

そして夕は……1ヶ月間姿を消した。たった1枚の紙切れを残して。

「……俺が母さんと血が繋がってないこと、あの時間聞いてたんだろう？」

その言葉に驚いた表情を紗夜が浮かべた。どうやら本当らしい。

「母さんが死んだうえに血の繋がりもない。精神的に来てるなんて思ったのか？ だから気をつかわなきゃって。迷惑かけないようにつて」

今までそんなことを一言たりとも言わなかったからか、紗夜が言い返してくることはなかった。

昔の彼と今の彼は確かに違う。それでも思い出してしまう。夕日に照らされた彼の頬を伝う止まらない涙を。一度だってそんな姿を見せたことがなかった。どんなに酷いことを言われても聞き流して終わっていたのに。

そう……日菜にビンタをした男の子を押し倒した時に怒られても変わらず聞き流していた。

「さっきも言ったが、勝手に気を使ってるのなんてお互い様だろ？」

表情1つ変えずに言い放つ。いつにも増して冷たい雰囲気だ。

「それに。言ったってお前は言わない。いつもそうだ。少しは頭冷やしてきたらどうだ？ 話はそれからだ」

今までにない冷たい声色で紗夜に言いつけた。最低なことをしてるとわかってる。だが今の気持ちはちゃんと伝えないとダメな気がしてやまない。彼女の気持ちを聞くために。

何も言わずに紗夜はスタジオを出て行ってしまった。



俺の言葉は届いたのだろうか。届いたとしても、紗夜を傷つけたの

は間違いない。それでも俺は……………。

ため息を吐き出してから脱線した話を元に戻す。紗夜のこととはと  
りあえず後回しだ。バイトすつぽかすわけにもいかないからな。

「それよりも、さっきの話だ」

「そうだ。友希那っ。ねえ、今の話、全部本当なの？」

認めたくないのはわかる。今の状況がどれだけ嘘だったらよかつ  
たかなんて誰もが思うことだ。

「本当だったら、なに？」

今井の求めていた答えとは真逆の答えが返ってくる。

「…な、なにして……………。このままじゃRoseliaは…それでいい  
の？」

必死の問いかけも今の湊友希那には届かない。嫌だなんてこの際  
言えないだろ。自分のしてしまったことを考えると。

「(いいんだったら、この前あんな顔、してないはずだよね…………!?)」

今井の必死の問いかけにも湊は反応は示さない。

「ねえ、本当はメンバーになにか言いたいことがあるんじゃない？」

「知らない…………!」

「友希那…………?」

今確かに…………いや。間違いない。今井の言葉に反応した。何かを  
隠すように誤魔化してはいるが。でもなんだ？ 何に反応したんだ  
？

「…………自分でもどうしたらいいのか、わからない…………」

考えても答えなんて出るはずもない。俺は湊友希那ではないから。

「私は…………っ、お父さんの為にフェスに出るの！ 昔からそれだけつ  
て、言ってきたでしょ!」

「…………友希那」

ふと湊の言葉と紗夜の言葉が重なった。フェスの為。いつしかそ  
れは呪いのようにまとわりついて。離さない。

「帰るわ」

「か、帰ってどうするつもり…………?」

「フェスに向けた準備をするだけよ」

「友希那……っ！」

結局止められなかった。なにもかも。俺はまた紗夜の居場所を守ってやれなかった。それどころか……突き放すようなことまで言って傷つけて。

「悪かった……」

それだけ言い残してスタジオを出て行った。

C i R C L E    ロビー

「みんな帰っちゃったけど、何かあったの？」

ロビーに戻ると海藤さんが入り口の方を眺めてそう言った。

「なんかもう。その、いろいろあって」

「珍しくイラついてるね。夕君らしくもない」

らしくない……海藤さん。俺らしいってなんですかね。それにイラついているのは紗夜のことじゃない。湊のことだろう。ただのメンバー集め……か。

「すみません。休憩行ってきます」

それだけ言い残して俺はロビーを後にした。



## 第31話 道標

### 第31話 道標

#### 川沿いの道

ロビーを出た俺は手すりに肘を置いて川を眺めていた。せつかく集まったのに。また紗夜は1人。挙句の果てに喧嘩までしたしな。普段だったらあんなこと絶対ないはずなのに。…紗夜は見ていないように見ていたんだな。俺と日菜のことを。

でも一度だって紗夜が日菜のことを話してきたことはない。俺はどうするのが正解だったんだろうか。あそこで冷たく突き放さずに“はいそうですね”って肯定してやればよかったのか？

Roseliaの崩壊。

紗夜との喧嘩。

「はあー……」

思わず重たいため息が出てくる。

明確な答えなんてない……それがとても。もどかしい。

「悩みごと？」

そう言って隣に現れたのは南雲だった。両手には缶コーヒー。片方は普通のコーヒー。もう片方はブラックのコーヒーだ。

「はい」

そう言とブラックの缶コーヒーを俺に渡してくれた。それを受け取り、今度は手すりに寄りかかるように体勢を変える。

「悪いな」

「僕でよかったら聞くけど。どうかな？」

缶コーヒーを開け、飲んでから答える。

「そうだな……紗夜と喧嘩？ した。自分の思ったこと全部ぶちまけて」

南雲はあははと笑ってから「君たちも喧嘩するんだね」と言った。なんだかコイツと居ると調子狂うな……。それに喧嘩なんて今の一度もしたことがないんだ。

「氷川さんと喧嘩ってよくするの？」

「……するように見えるか？」

「見えない……かな」

喧嘩つてめんどくさいからな。疲れるし。前にも言ったけど女の人には口喧嘩は勝てない。それにその過程に行くまでに俺が折れて、謝る方が絶対に早いからな。

「なんだか羨ましいよ」

お世辞じゃない。本当に羨ましそうな表情を浮かべている。

「どこに魅力を感じたんだ？」

「幼なじみとかそこまで親しい友達って居ないから」

思えば南雲は基本1人でたまに誰かと話している程度だな。昼休みとかは……昼寝ばかりでわからんが、誰かと一緒って言うのはあまり見ない。行き帰りはともかく普段の俺と同じだ。基本1人。

「僕には大切な人とか居ないからわからないけど。旭日君が喧嘩の中で自分の思いを伝えたのは、間違っていないと思う」

「結果がバンドの崩壊と喧嘩でもか？」

俺がそう言うのと南雲は苦笑いを浮かべたから答える。

「それでいいとは思ってないんでしょ？」

見透かされているような気がしてならない。確かにいいとは思わないが、どうすればいいのかはまだわからない。でも紗夜が気持ちをぶつけてくれた今、前に進む時なのかもな。

「君ならなんとか出来そうな気がするよ」

「どうだかな。まあ、なるようにしかならない……か」

さてと。いったい何をどうするのかをまずは考えないと。あの様子だとあこと白金はダメか。紗夜も湊も。つてことは必然的に今井が残るわけだが、諦めてる可能性もある。正直諦めるてはないと思うんだ。なんだかんだお節介を焼くタイプだし。

「打開策は見つかりそう？」

「さあな」

ポケットから母さんの赤色のピックを取り出して、親指で弾いた。それをキャッチする。

「俺には血の繋がってない母親が居たんだ。去年の12月に亡くなっ

たけど」

なぜか南雲には話したくなかった。自分の過去のことを知ってほしくて。

そこから思い出話をする様に思い出を語っていった。

困っている人を見ると放っておけなくて。みんなから頼りにされる。そんな母さんを尊敬してた。まあ……一度だってそのことを伝えたことはないが。

他にはギターが……音楽が大好きでさ。いつもほろ酔いで父さんと俺に音楽のこととか話してくれた。

それと昔結構やんちゃだったらしい。バレるのが嫌で隠してたけど、SPACEのオーナーから聞いてたから知ってる。

だから……いざ亡くなった時に、そんな母さんの代わりになんりたかった。みんなの記憶から消したくなくて。でも……俺なんかじゃ無理だ。そう決めつけたけど、やっぱり諦められなくて。居て当然だった人が居なくなつて……わけわかんなくなつて。逃げた。

「そこで出会った人にいろいろ聞いて。見て。やってみて。答えを出せた」

「どんな……答え？」

「代わりじゃない。俺に出来ることをしようつて。簡単な答えだけど、それを見つけることが出来なかつた」

今話すと長くなるからいつの日か話すが、あの出来事がなければ俺はここに居ない。ずっと迷っていたと思う。

「だから紗夜に伝えたこと自体を間違つてるとは思わない。ただ……もう少し違う伝え方もあつたのかつて」

「そっか。伝えるのつて難しいもんね」

本当に難しい。言葉が少し違うだけで、伝わり方が変わってしまうのだから。

「でも、伝えないよりははるかにいいと、僕は思う。大切な人なら。なおさらね」

「そう……だな。南雲の言う通りかもな」

「友達や幼なじみを大切にする君らしいよ」

大切に……か。少ない友達や幼なじみだからこそ俺は今まで……。それに母さんにも言われてきたことだったし。

だったら最後まで信じることにしよう。紗夜のことを。伝えた言葉を。

だが今はもう少しだけ Roselia のことは考えたい。俺がどれだけ願おうとも、結局5人がまた Roselia として活動したって思わない限りこの話の根本的な解決にはならない。

「そろそろ戻る。昔話に付き合わせて悪い。それとコーヒーありがとうな」

「ううん。君の話の話を聞いてよかったよ。また何かあったら言って」「じゃあその時は……頼むな」

そう言ってからコーヒーをグツと飲みほしてから CIRCL E の方へと戻っていく。コーヒーがブラックな所、俺の好みを知っていたのだろうか。それともたまたまか。それは本人しかわからない。

それに……なんだろうな。最近話始めたのに、前から話していたような感覚。気が合うっていうのかな。

「(そういえばコーヒーはブラックで大丈夫だったみたいでよかった)」



休憩から夕がロビーに戻ると、あまり見ない組み合わせの人達が居た。1人は海藤蒼真。そしてもう1人は。

「おーすつ、旭日。辛気臭い顔してどうした？」

「市野木さん良いところに。お願いなので消えてくれますか？」

「今日も冗談がヘビーだね……もうノックアウト寸前だよ……」

今何か言いましたか？ ばりのすまし顔の夕。いつも通りの日常だが、側からみればなんとも言えない状況だ。後輩に全く威厳がない先輩とそこそこ威厳がある先輩。

「匠には厳しいね、夕君は」

「優しくしてくれるのはまりなさんだけ。ああ、辛い」

「辛くてもなんでもいいんで、スタジオのレンタル時間過ぎてるって  
言いに行ってくださいよ」

そう言い残して夕はバックヤードの方へと行ってしまった。いつ  
もなら自分で声をかけるはずなのにと思う2人だが、特に深く考えな  
い為か、今のRoseliaの状態に気づくことはなかった。

### スタジオ

「おい。Roseliaさーん！ レンタル時間過ぎてるよーって  
……リサちゃん1人?!」

夕の代わりに来たのは匠。部屋を開けて見ると、そこにはリサが1  
人だけ。いつもなら5人で練習しているはず。というよりもすでに  
片付けを終えて帰っている頃だ。

「あ……っ。え、もうそんな時間？ すみません」

「リサちゃん、たしか今日は……バイトの日だっけ？ 練習のあとに  
お疲れ様だねえ」

なぜバイトの事を知っているのか。あまり深く考えないようにす  
るリサ。この人はたまにどこで情報を得たのかわからない事を知っ  
ている時がある。

「あ……はは。そうですねっ。ま、まあRoseliaの活動と運営  
の為に、がんばらないといけませんから……」

「そっか、そうだよね。ところでリサちゃん。今度お茶しない？」

二言目にはこれだ。相変わらずナンパばかりだが、知らない人に声  
をかけているだけあつてか。ずっと話しているといつの間にか話し  
込んでいることが多々ある。たくさん話題を持っているからだろう。

「お茶はまた今度でー……」

「そんな遠慮しなくていいのに。もちろんおれの奢りさ」

彼はまだ知らない。怒りの炎を目に宿して後ろに佇む1人の男を。

「じゃあその財布の中身からになるまで奢ってくださいよー。先輩……」

「あつははく。人はたまにジョークというものを言うのさく。あれー？ 旭日、ちよっ！」

そんなことで彼を誤魔化せるのならいつもの倍、働くことはおそらくないだろう。もはやどちらが先輩となのかわからない。



バイト終わり。俺はぼーっと歩きながら帰っていた。外はすっかり真っ暗で人通りも少ない。遅い時間に終わる時は基本自転車なんだが、ここ最近歩きたい気分が多いんだ。

Bluetoothで繋がれたヘッドホンからはRoseliaの曲が流れている。ふと練習中のみんなの表情が浮かぶ。

楽しそうにドラムを叩くあこ。嬉しそうにキーボードを弾く白金。真剣な表情で歌う湊。その姿を見て嬉しそうに弾く今井。そして——

——時折笑顔を浮かべる紗夜。

正直こうなるとは予想できなかった。紗夜が練習中に笑顔を浮かべるようになるとは。人は人に常に影響を与え続ける。よく母さんが言ってたな。

ぼーっと考え事をしながら歩いてると、音楽が止まり着信音が流れる。ヘッドホンの通話ボタンを押して電話に出た。

「もしもし？」

『突然ごめんね、旭日君』

この声は今井か。珍しいこともあるもんだな。

「別に構わない。なにかあったのか？」

『…：うん。友希那と話してきたんだけどさ』

なるほどな。次の言葉はたぶん。

「本当によかったのかって？」

『すごいなく旭日君は。エスパームみたい』

あの様子からしてたぶん俺と同じことを考えていたんだろう。た  
くさんある答えの中なから選んだのは……。

ただ見守っていればいい。でも実際は正しい方へと導いて  
やるってことも大事。導くってよりかは一緒に考えて、その考えは違  
うとはつきり言つてやること。

俺の答えは今井とはまた違う答えだが、その気持ちはわかる。

「俺は紗夜に冷たい態度をとったこと。間違つたとは思わない。でも  
… …求めていた答えじゃなかった」

ほんの一瞬だけ寄り道をしてしまったが。俺は自分の道を進むこ  
とにしたよ。

「だから見守る。いつの日か…向き合うことを信じて」

『そつか。強いんだね、旭日君。アタシ迷つてばかりでダメだなく』  
「俺はそんな強い人間じゃない。それに向き合うってそう簡単に出来  
ることじゃないんだ」

紗夜みたいにコンプレックスで向き合えないように。母さんのこ  
とを忘れてたくて音楽から目を背けようとした俺のように。簡単に覚  
悟決めて向き合える人間なんてそう多くない。みんな迷うんだよ。  
大切な人を傷つけたくないなら尚更。

「だから向き合えたなら俺はそれでいいと思う。迷つて考えて。相手  
の話を聞くことが大事だと思うんだ」

『… …なんかこの前冷たい態度とってた人の言葉とは思えないな  
〜』

「そう言う時もあるさ。お陰で理由はわかったからいいんだよ」

理由はどうあれあの態度は少し冷たかった感はあるな。別に突き  
放したいわけじゃないし、もう少し別の接し方も… …。例えば優しく  
してみるとか… …それは俺じゃない気がする。

『なんか元気出た！ また相談してもいい？』

「こんな俺で良ければいつでも」

『ありがとう。優しいね、”夕君”は。じゃあね』

「おい、ちよつとま……」

電話が切れてしまった。最後のはどう考えてもおちよくつてるだ

ろ、今井のやつ。全く……安請け合いするのも俺の悪い癖だな。面倒ごとがやってくるのに、自分から拾いに行つてどうするよ。

それでも手を差し伸べるのはきつと母さんがそうしていたからだと思う。俺はどこまで行つても母さんの影響を強く受けるらしい。でも……悪い気はしないな。

また寄り道するかもしれない。それでも俺は……俺の想いを貫く。そう決めたんだ。

旭日家 自室 ベランダ

夜。バイトから帰った俺は何をするわけでもなくベッドでゴロゴロしていた。いつもはすぐに風呂入つて、何かしているんだが、今日はそう言う気分でもない。

ふとベッドから起きてベランダへと足を運んだ。手すりに肘をついてぼーつと外を眺め始める。

諦めきれないという思いで今井が1人動いている。あこと白金も何かしらしてくれているみたいだ。

俺の方は……特に進展はない。そこまで時間は経ってないしな。

喧嘩……か。今までだって俺が口うるさく注意されることはあつても喧嘩まで発展するこはなかった。知ってるか？ 女の人相手に口喧嘩は勝てないんだ。

今思い出しても背筋が凍りそうになる。母さんと父さんの口喧嘩。まあ負けたのは父さんだけだ。

「はあー……」

思わず深いため息が漏れてしまった。

待つことしか出来ない。わかつているからこそ焦つたく思えてしまう。他に何か出来ることはないかと。思わずにはいられない。



こんな時母さんならどうするんだろう。ちゃんと相手に寄り添って考えるんだろうか。それとも思っていることを全部吐き出させるんだろうか。

そんなことを考えていると、ここ最近聞かなかった音が聞こえてくる。窓の開く音だ。紗夜の部屋へと視線を向けると、そこには少し気まづそうな表情を浮かべている彼女の姿があった。

「……私、あなたのことわかってなかった……」

わかってないなんてお互い様だ。一緒に居る期間が長くたって深い部分を知らないんだから。

「いいんだ。そんなことはお互い様だろ？ ……あんな言い方して悪かった。ごめんな」

「(あんなことがあってもあなたは……いつも通り接してくれるのね)」

結局先にあんなこと言ったのは俺だからな。ここは素直に謝った。

「私の方こそ、ごめんなさい……」

沈黙がこの場を支配する。一応仲直りというのは出来たらしい。まだ心地いい沈黙ではないからか、思わず口を開いてしまう。

「気が向いたらでいい。日菜のことで何かあるなら相談してくれよ」

「日菜のことで……」

気づいてないわけないだろ。俺達は小さい頃からずっと一緒だったんだから。コンプレックスを感じてることも。唯一だったギターを真似されて憤りを感じてたことを知ってる。

「……それに母さんのことはもう大丈夫。俺は自分のすべきことをするだけだから。心配してくれてありがとな」

感謝の言葉を伝えただが対して返事はない。視線を向けると、紗夜は俯いていた。手すりを掴む右腕が震えている気がする。

「言えない……言えるわけ……ない」

「紗夜？」

俯いて表情は見えない。だが申し訳ないという思いはなんとなく伝ってくる。

なんで紗夜が悪いと思うんだ？ 悪いのは……気を使わせてし

まった俺なのに。ずっと母さんのことと日菜のことで板挟みにしてしまつたのに。

「ごめんなさい……私……あの時、部屋を……見てしまつた……」

あの時？ あの時って……なんだ？

すぐわかつたはずなのに。気づかないフリをしようとしている。そんなこと……絶対にしてはいけない

「紗夜……もういいんだ。あの時のことは」

どれだけ物に当たろうが、自分を責めたって母さんが帰ってくるわけじゃないことくらいわかつた。それでもああしないとおかしくなりそうだったんだ。あまりにも無力な自分に。結局逃げ出してしまつたが。

血の繋がりなんてどうでもいい。ただ悔しかったのは、病気のことをわかつてあげられなかったことだけ。そして俺はいろんなことを学ぶことができた。

困っている人が居たら手を差し伸べたように。

人生という道で間違つた道に進もうとする人に正しい道を示したように。

「今の俺がやりたいことは誰かを助けることなんだ。母さんがずっとそうしてきたように」

偽善って言われたつていい。らしくないこともわかつてる。それでも——この信念を曲げたくないんだ。

「だから俺はいつまでも側に居る。頼りたい時に……都合よく使ってくれて構わない。少しずつでいい。前に進もう」

「(あなたは……強いよね。私は、自分のことでもいいで……だけど夕は違う。いつも気にかけてくれた)」

紗夜と日菜がわかり合うにはもう少し時間がかかるだろう。これは日菜が変わる変わらないの問題じゃないと、俺は思う。紗夜がどうやって自分として。どう日菜と向き合うのかを選ばないと意味がない。とつくに日菜は向き合おうとしているから。

今はそのことよりも大事なことがある。

「Roselia。本当になくなつていいのか？」

きつと今の紗夜なら。大丈夫。

「……良くない」

そう言うのと口籠ってしまった。

「……さっき日菜に言われて気づいたの。演奏している自分が笑顔だなんて」

そのことやっぱり気づいてないのか。普段の練習見てない日菜が気づくってことはよっぽど変わったのか。それとも単によく紗夜のことを見ているのか。

「楽しいんだよ、きつと。あの5人で演奏するのが」

「……ええ」

Roseliaという存在がどれだけ紗夜に影響を与えたのかがよくわかる。今までの紗夜が演奏中、楽しそうにしているのを見るのはなかった。だけど今は違う。5人で演奏している時の紗夜はよく笑うようになった。

「Roseliaが解散なのは嫌。だけど湊さんの気持ちが変わらない。本当にメンバーが誰でもよかったのかが」

そのことについては本人に聞かないとわからない。素直に話してくれるとは限らないけど。少なくとも今回の場合はしっかり伝えてくれないと変わらない。

何か通知が来たのか、紗夜がスマホの画面を見始めた。

「湊さんから……」

とうとう重たい腰を上げたか。決心がつくまで少し時間がかかったみたいだが、まあ大丈夫だろう。

「もちろん行くんだろ？」

「そのつもりよ」

「そうこなくちや」

そう言い残して俺はベランダを出た。どうやら今井が何かしたらしい。もしくは湊が決心して話をしようと思ったのか。どちらにせよRoseliaがこのまま続くか、解散するかは今度の話し合いにかかっている。こればかりは5人の問題だ。俺が口を挟むのは違うよな。

## 第32話 聖地

第32話 聖地

花咲川高校 教室

放課後。今日はバイトがない。他にも用事はない。つまり……自由だ。しかし、こう言う時に限って何かと邪魔が入るのがお決まりのパターン。

まずは周りの確認だ。智樹は帰りのホームルームが終わると同時に部活へと向かった。涼子はバイト。混ぜるな危険コンビも来ない。山梨先生はクラスメイトとケーキバイキングだのスイーツの話をしている。……本当にスイーツとか好きだよな、あの先生。

今日は大丈夫そうだ。久しぶりに予定がない日になりそうではなかった。

帰り支度を終えて、教室を後にした。

「この前のゲーセンでいいか？」

「もちろん。リベンジマッチだ」

「ほとんど点差なかったと思うけど……」

廊下に出ると、大輝、憐歌、葵刃の珍しい3人組が話しているようだ。リベンジマッチとか言っていたが、いったいなんのリベンジなのだろうか。

「おーす、夕。今帰りか？」

「そうだが。何の話をしていたんだ？」

「憐歌とのエアホッケーのリベンジマッチの話だよ。後少しのところまで負けちゃってね」

「2、3点の差だったけど」

「それでも負けは負けだよ」

エアホッケーでそこまで熱くなれるんだな。体を動かすのが得意な葵刃が負けるとは……。ゲームというジャンルに置いてはやはり憐歌の方が強いんだな。反射神経の差だったりするのだろうか。

「この2人戦い見ると異次元過ぎておもしろーぞ」

「見物客が寄ってくるやつだな」

「夕君も一緒にどうかかな？」

非常に面白そうだが、何も無い日はそうそうあるわけではないからな。今回は遠慮させてもらおう。

「悪いな。今日は家でゆっくりしたい気分なんだ」

「そっかく。なら仕方ないね」

「じゃあまた今度な」

「ボク達は行くね」

なんていい奴らなんだ。智紀たちはこれでもかと思いがつてくるのに。

3人と別れて学校を後にした。

花咲川女子学園 校門

結局どこに行くわけでもなく、真っ直ぐ帰宅することを選んだ。羽沢珈琲店にでも寄ろうかと思ったが、なんだか今日知り合いが居そうな予感がしてな。

帰りの時間帯だからか花女の生徒が多い。すごく当たり前のことなんだが。前は母さんが校門付近で生徒を見送ってたな。俺は毎回見つからないようにコソコソ通っていたけど。親とはいえ、外で何か注意されるのは恥ずかしいものがある。

「やつぱり夕先輩だ！」

……聞こえない聞こえない。香澄の声なんて。

「遠くからよくわかったね、香澄ちゃん」

「ヘッドホン首にかけてるの先輩くらいだからな」

りみと市ヶ谷さんの声まで聞こえる……。あれから上手くやっているようで何よりだ。仲直りもしたようだな。

「冷たそうな雰囲気かわからない？」

「なんかそれわかるかも」

今度は花園さんの声まで聞こえる。というより、ここまで来たら逃

げる事は出来ないか。

一旦立ち止まって後ろに振り返った。

「後ろでコソコソ話してどうした？」

「あはは。夕先輩を見かけたので」

苦笑いを浮かべる香澄ではなく、後ろに居る花園さんに視線を向けた。

「結局、君も香澄に捕まったんだな」

「家庭科の補修の時には捕まりました」

「なるほど。そう言えば、みんな揃ってどっか行くのか？」

4人でバンドでも組んだのだろうか。市ヶ谷さんだけ頑なに組むとは言っていなかったような気もするが。素直じゃないからな。

「そうだった！ SPACCE行くんですけど、夕先輩もどうですか？」

「俺は遠慮し——」

「行きましょう、先輩」

なぜか市ヶ谷さんからの熱い視線。これは……そうか。

「特に用事もないしな。構わない」

「わあーい！ じゃあ行きましょう！」

結局こうなってしまうのが俺の人生なんだな。まあ……いいか。

SPACCEまでの道のりを歩く中、香澄、りみ、花園さんの3人は楽しそうに会話をしている。その後ろを歩く俺と市ヶ谷さんの間には何ひとつ会話は無い。というより、言い出しづらいだろう。

「四六時中香澄と居るのは疲れるか？」

「あー……まあ、そうですね」

キツパリと疲れるって言わないあたり、あまり嫌ではないんだろう。俺も最初は同じ気持ちだったし。過ごしているうちにニンゲン変わってくるもんだ。

「悪い奴ではない。もう少し考えてから行動してほしいところだが」

「めっちゃわかります。いつもいつも考えなしで行動するところ、なおしてほしいですよ」

「そのうち良くなると思う」

「本当ですか？」

「1年も一緒に居たんだ。それくらいわかる」

あーだこーだ言うのは。心配しているからなんだろうな。いつの間にか引きこもりも改善されて、学校に行くようにもなっているように見えるし。友達という存在はとても大きい。俺にとっての智紀や涼子。その他の友達。市ヶ谷さんにとっては香澄やりみ、花園さんと言ったところか。山吹とはどうなんだろうな。

「本当は無理にでも断ることも出来たが、今日は来てよかったと思う」  
「それなら家でゴロゴロしてる方が良くないですか？」

「可愛い後輩の顔を見れたから問題はない」

「あー香澄のこと——」

「市ヶ谷さん含めて全員だ」

ふと視界の端から市ヶ谷さんが消えてしまった。一旦立ち止まり振り返ると、なぜかその場で俯いて立ち止まってしまっていた。

「どうした？」

「い、いえ。なんでも…ないです」

「なら、いいんだが」

落とし物でもしたんだろうか。

「(先輩にとつて…私も後輩なんだ。それに可愛いって。いやいや！可愛いってそう言う意味の可愛いじゃねえだろ。しっかりしろ、私！)」

遠くを眺めて待っていると、いつの間にか追い抜かれていた。歩いていたことに全く気づかなかったんだが。

SPACE 店内

俺は忘れていた。戸山香澄という人間の人間性を。あらかじめどんな用事が聞いておくべきだった……。

「バイト？」

「はい！」

困った様子の凜々子さんに全く迷いのない表情で返事を返す香澄。

「みんなそう…?」

「いえ……」

「みんなでやろうよー!」

「ぎげんなよテメー!」

「わ、私はお母さんたちに聞かないと……」

まるでコントだな……。こうなることをまるで予想出来なかった。ただ単にライブを見に行くだけと思っていた、俺がバカだった。

「いや、本当にすいません……」

謝ると今一番来てほしくない人の声が聞こえてきた。

「準備中だ。関係者以外出ろ」

「げっ……」

「だそうだ。早く出るぞ」

オーナーの目が怖いんだよ……。前に言っただろ? みたいな表情浮かべてるし。

「こんにちは」

「オーナー! バイトさせてください!」

りみが挨拶をすると、唐突に香澄が口を開いた。どれだけバイトしたいんだ?

「そんな時間あんのかい?」

「え?」

まさかのひと蹴りで終わり。言葉の意味としてはわかる。確かにそんな時間はない気がするな。

「花園。仕事だ」

「はい」

「夕。言いたいことがわかるね?」

「オーナーの言わんとしてる事はわかります。本当にすいません。後で言っておくので」

それだけ言っけととりあえず外へと出た。全く悪びれる気もない香澄の背中を眺めていると、すいません……。と市ヶ谷さんの声が聞こえ



てきた。

いいんだ……いいんだが。そろそろ出禁か？ 俺は。

外に出ると、ボード近くにある車止めの上に座る香澄と市ヶ谷さん。2人の前に俺とりみが立った。

「全くお前は……」

「えへへくすいません」

「香澄、少しは先輩の苦労も考えろよな」

「いいんだ。もう慣れた」

心配してくれて居るんだろうな。ありがたいことだが、諦めたから大丈夫だ。

少しすると着替えてきた花園さんが外へと現れた。恐らく今日出演するバンドを表のボードに書きにきたんだろう。

ボードの前にしゃがんでメモを見ながら今日出演バンドの名前を書き始める。

「ダメか」

「いきなりなんなんだよ」

「こればかりは市ヶ谷さんの言うとおりだ」

「SPACEのこと。もっとわかるかなーって思って」

「そうだったんだ」

確かにバイトをしたらわかるかもしれない。だが、手順てものがあることを、香澄には理解してほしい。

「なんで聖地なの？」

「聖地は聖地だよ」

「なるほど」

「全然わかんないんですけど……」

俺も全くの同意見なんだが？ 聖地か……確か。

「えつと……」

なぜ聖地と呼ばれているのか思い出していると、全員がりみに注目した。

「SPACEはガールズバンドのために作られた場所なんだ。オーナーはツアーとかもやるバンドのギターで。ライブハウスの怖くて危なそうってイメージを壊したくて30年前に作ったの。でも……」

そうだ。だいぶ最初に聞いた話で、忘れていたが思い出した。

結局あまり人気は出なかった。

危ないとか怖いとか、それ以前の問題だったんだ。演奏しても大した盛り上がりはなく。拍手もまばら。ライブって感じは全くなかったらしい。まあそれを黙って見ているような人じゃないからな。自分がステージに上がって演奏して。周りを焚きつけた。

1人話を思い出していると、ちょうど話が終わりの頃だったらしい。

「それからオーナーはオーデイションって形でバンドの熱意を見てるの」

「こえ〜」

「実際近くで見るとそう思うな。オーナーは容赦ないから」

今までどれだけのバンドが落とされてきたことか。でもその分、技術や熱意を認められたバンドだってたくさん居る。それを何度も見てきた。

「かっこいいー!」

「カッコいい! よく知ってるね。りみ」

「えつと……お姉ちゃんに聞いたの」

俺もゆり先輩から聞いたような……。凜々子さんから聞いたような……。もしかしたらどっちからも聞いた気がしてきた。

「お姉ちゃんってグリグリのゆりさん?」

「うん。お姉ちゃんたちもファーストライブはここって決めてた」

「それで有言実行な所がすごいと思う」

今思えば俺が入った時はオーデイションに毎回受かっていたからな。他のバンドと出ているからこそ、その凄さがわかる。本当に楽しそうに弾いているし。

「凜々子さん達も先輩のこと、褒めてましたよ？　覚えが早いし、周りをよく見てるって」

「それは初耳だ」

「お姉ちゃんも同じこと言っていました」

「それも初耳だが、覚えないと後が怖かったからな」

俺がそう言うと、確かにと市ヶ谷さんが共感してくれた。彼女にとって苦手な部類に入る人なんだろうな。その気持ちはわかる。

## SPACE ライブ会場

あれから数時間後。SPACEで見るライブはこれで何回目だろうか。というか、初めてグリグリが出ないライブを見た気がする。それでもあつという間だった。

他のお客さんが全員出てから、俺たちも会場を出た。

「ありがとうございます」

「はあく楽しかった〜！　鳥肌立つちゃった！」

「私も！」

りにみ感同感する花園さん。ライブハウスでバイトをしているところという時ほど、楽しい瞬間はない。ライブのたびにチケットを取らなくとも見ることが出来るんだからな。

視界の端で俯いている香澄に声をかける市ヶ谷さん。すると。

「おい、香澄」

「すごかった」

「え？」

「指すごい動いてた！」

「いまさらっ？」

確かにいまさらと思うところもあるだろう。だが、実際に自分で演奏してからわかることもたくさんあるはずだ。香澄は今それを感じていると思う。

「みんな軽そうに弾いてたから！　でも違った。前はわかんなかったけど、おたえの言ってた意味。ちよつとはわかった！」

「そこに気づけただけでも、今日の収穫はあつたな」  
「はい！」

元氣よくそう答えると、ステージの方に視線を向けた。香澄の表情は本当にキラキラと輝いて見える。迷いは一切感じられない。

「やっぱりここでライブしたい！ すつごく大変だと思うけど。私もここでキラキラドキドキしたい！」

「うん！」

「言うと思った」

少しおバカな所もある。だが一度やると言ったことは最後までやり通す信念を同時に持っているのが戸山香澄という人間だ。一緒に居た1年、それを間近で見てきた。

「おたえのこと、ドキドキさせるねっ！」

笑顔で花園さんにそう告げる。というかそういう趣旨だったんだな。

「おたえドキドキ作戦会議く。ライブどうしよう」

「いきなりだな……」

「どこでする？」

「ここは？」

「ダメ」

即答だな……まあ無理もないか。ここでライブをするにはいろいろ足りないものがたくさんある。何より今は技術が必要だな。

ライブ会場から外に移動してきた俺たち。まだどこでライブを行うのか話し合っている。どれもこれも実現可能な案は出てこない。ライブハウス以外だと、あまり場所の案は出てこないものなんだな。

「音楽室は部活で使ってるよね」

「ありさんちは？」

「あゝ蔵？」

「うちかよ……」

「うん！」

今もつとも確実性のある場所だが……。来る人数によつては少し窮屈になるかもな。ライブをする環境としては整い過ぎているくらい防音性に優れているが。

「もう少し他にないか、考えてみるのはどうだ？　蔵は最終手段——」

そこまで言いかけた直後。少し黙つて考えていた花園さんが口を開いた。

「蔵でライブ。……クライブ」

「「は？」」

思わず3人の声が重なった。そしてすぐに理解したんだろう。香澄が同調し始めた。

「クライブ！　クライブ！」

「おい！」

りみが2人のやり取りを見て笑っている。どうやら蔵でライブをすることは確定事項らしい。俺の言いかけたことはどうやら聞こえていなかったのか、忘れられてしまったようだ。

「よーし！　クライブ頑張るぞー！」

「おー！」

「おーいー！」

「もうここまで来たら諦めるしかない」

そう言つて市ヶ谷さんの肩に手を置く。1度決めたら動かないのが香澄だからな。

「おたえまたね！」

「香澄ちゃん?!」

「私の許可を取れー！　香澄ー！」

走つて行く3人の背中をじつと見つめる。

ライブ……。か。ついこの前ギターを弾き始めたと思つたのにな。時の流れは早いものだ。俺は……………。

「先輩？　どうかしました？」

「いや。なんでもない。帰り、気をつけろよ」

それだけ言い残して香澄たちの後を追った。

### 第33話 進むためには――

第33話 進むためには――

朝

今日も朝からバイト……と言いたいが、この日は午前中に用事が出来た。突発的なことで他のバイトメンバーに迷惑をかけてしまうが、そこは目を瞑ってほしい。

自転車で向かっているのは病院。一昨日過労で倒れた羽沢のお見舞いに向かっている。一応現場に居合わせたからな。それに日頃通っている羽沢珈琲店のオーナーの娘さんだ。行かないわけにはいかない。

体調に関しては少し心配だが、看護師さんの大したことはないって言葉を信じることにした。お見舞いの品は2、3日なら持っていかなくても大丈夫だろう。長期間の入院ならまた話は変わってくるが。

病院……。

面会時間も限られている。出来る限り急いで病院へと向かった。

病院 病室

受付で羽沢の居る病室を教えてもらい、扉を開けて中へと入った。

「元気そうだな」

「旭日先輩、来てくれたんですね」

思った以上に元気そうだ。倒れた時とは違って顔色もいい。これじゃあ退屈かもな。

「巴たちはまだ来てないんだな」

「はい。もうすぐ来ると思いますよ」

「そうか。やることなくして退屈じゃないか?」

「えっと……少しだけ」

苦笑いを浮かべながらそう答える羽沢。ベッドの横に置いてある椅子に腰をかけてから鞆から数冊小説を取り出した。

「趣味に合うかはわからないが、気が向いたら読んでみてくれ」  
「ありがとうございます！ せっかくなので読んでみますね！」

と言っても俺からのおすすりめではなく、3度の飯より本が好きな従兄弟からのおすすりめだ。何十冊って紹介してくるもんだから俺の記憶に1番残ったものを買って持ってきたわけだ。電話で話したんだが、1時間くらい引っ張られた……。

「あつ、この小説気になってたんですよ」

「そうなのか？ ならよかった」

「でも珍しいですね。旭日先輩って本読むんですか？」

「それは本が好きな従兄弟からのおすすりめだ」

「そうなんです。ありがとうございます」

本バカもたまには役に立つんだな。まあそのうち紹介するとしよう。

しばらく羽沢と話していると、ノックの音が聞こえてきた。すぐにドアが開いて現れたのは上原達。どうやらお見舞いに来たようだな。俺の方が一足早かった。

「つぐー調子どうって…旭日先輩も来てたんですよ！」

「まあな。2人もお見舞いか？」

「そうです」

来たのは2人だけのようだ。他の2人は……。

「ひまりちゃん、巴ちゃん！ 来てくれたんだね」

2人の姿を見るなり、笑顔を浮かべる羽沢。どこか申し訳なさそう笑顔ではなく、心の底から嬉しそうな笑顔だ。

「よっ。顔色、思ったよりいいな」

「うん。もうほとんどよくなったの。疲れて熱が出ただけみたい。……みんなには迷惑かけちゃって、ごめんね」

「迷惑なんて、そんな訳ないじゃん！ つぐがよくなってよかった



よー！」

1番心配していたであろう上原がそんなことを言う。倒れた日の晩は眠れなかったんじゃないかって勝手に思っている。

「ああ。ほんと、生徒会室で倒れてるのを見た時はどうなるかと思っただぜ」

「え、えへへ……。もう無理はしません！でも、あの時2人が来てくれて本当によかったよ。旭日先輩には感謝してもしきれないくらいです」

「気にするなって言っても無理があるな。たまたま居合わせてよかった」

「本当に尊敬しますよ、旭日先輩」

この子達はひたすらに良い後輩だ。こんなにも先輩を敬ってくれるとは……。どこぞの厨二病な中学生と後先考えずに突き進む奴とは大違いで、人は本当に違うんだなと思ひ知らされる。

「そういえば、蘭ちゃんとモカちゃんはどうしてるの？」

「あー、それは……」

その微妙な表情。まだ解決はしてないか。

「……つぐに隠しても、仕方ないか。実は……」

なにがあつたのか事の経緯を羽沢に話始める巴。喧嘩した所にちやうど居合わせてしまったが、改めて聞くと少し信じられない。あの仲良し5人が喧嘩するようには見えなかったからな。

「……そっか。そんなことがあつたんだね」

自分の居ないところであつた出来事はそれはそれで辛いところだろう。寝て起きたら喧嘩していたなんて普通は嫌だしな。

「蘭のことが心配だったとはいえ、アタシも感情をぶつけすぎた。蘭には本当に申し訳ないことをしたよ。……って、今みたいに、蘭にもうまく謝れればいいんだけどな」

本当に申し訳なきそうな表情を浮かべて言う巴。そう言えたら苦労はしない。そこまで考えているのに空回ってしまうのはやはり……。

「前にも言ったと思うが、俺は伝えてよかったと思う。思っているだ

けじゃ、相手には伝わらない。テレパシーで伝えるなんて出来やしな  
いんだ」

そんなことが出来れば言葉なんていらぬ。

「蘭ちゃんも、きつともう一度話せばわかつてくれるよ」

「……だと、いいんだけど」

「……やっぱり、5人全員揃ってないとちよつと寂しいね」

ずつと一緒にいるとそう感じるものなんだな。紗夜と日菜とは  
ずつと一緒に居るのは事実だが、適切な距離感だったというか。なん  
というか。お互いにそこまで踏み込んではいない。

「私達、みんなと一緒にいられるようになって、バンドはじめてのに  
……」

「……だな」

バンドを始めた理由は一緒に居られるようにか。なんとも A f t  
e r g l o wらしい。

「きっかけはなんだったんだ？ バンドを始めた」

「そもそものきっかけは、中2の頃、クラス替えて蘭だけが別のクラス  
になったことです。それが原因で蘭は、授業に出ずに屋上で過ごすよ  
うになって……」

美竹には悪いとは思うが簡単に想像出来てしまうな。ちようど思  
春期だろうし、ずつと一緒に居ることを考えると仕方ないことか。

「どうしたら前みたいにみんな一緒に時間を作れるかな？ って考え  
た時に、つぐが『バンドやろうよ！』って言ったんです」

「あの時は、突然何を言うんだって思ったけどな」

「あ、あはは……」

苦笑いを浮かべる羽沢だが、少し意外だな。ってきり上原辺りが何  
かに影響されてバンドやろうと言ったものだと思ってた。そうか  
……羽沢なんだな。

「けど、バンドを組み始めてから蘭は、授業に出るようになりました。  
屋上は……蘭だけじゃなくて、アタシら5人の拠点みたいになって」

「うん、そうだったね」

なにも言わず話す2人の言葉に耳を傾ける。

「結成してすぐの頃に屋上で見た夕焼けがチョーキレイで、それでバンド名を夕焼けって意味の『Afterglow』にしたんですよ」  
「英和辞書で片っ端からそれっぽい単語調べたっけ」

「そうそう！　なんか、思い出すと笑える……！」

楽しそうに話す3人を見ると、今までの思い出は本当に楽しいものなんだとわかる。どう感じるかはやっぱり人それぞれだからな。俺みたいに表情の変化がない奴は特に。

「ふふっ。バンドをはじめたての頃は、わからないことばかりだったけど……それも楽しかったよね。みんなと一緒に考えて、いろんな事、経験して……」

「どれも大事な思い出だな」

「はい……！」

笑顔で答える羽沢。

最初はなにをやっていけばいいのかわからないものだ。それを楽しいと思えることはすごく大事なのだろう。

「……蘭は、今、バンド楽しいのかな」

「……え？」

ふと上原がそんなことを言った。

「最近、バンドしてる時の蘭、つらそうな顔ばかりしてる気がするの。演奏も歌も、調子悪そうだし……」

「……もしかして蘭、バンドと家のことで、板挟みになってるのかな」  
全員暗い表情を浮かべている。少なくともなにか悩みがあるのは確かだろう。ここ最近電話をしによくロビーに訪れることが増えたからな。時折大きな声を上げていることもあった。

「バンドが……バンドがもし、蘭ちゃんを苦しめるものになっているんだとしたら、もう、やめたほうがいいのかな……」

「そんな……！」

驚いた表情を浮かべる上原。話が少し急展開な気もする。なにもやめるまではいかなくていいと思う。ライブに出れば目当てで来てくれるお客さんだってたくさんいるんだ。誰かの力になっている。

「バンドは、すごく楽しいよ。みんなと一緒に演奏するのもすごく好

きだけど……でも、つらい思いをしてる友達のことを放ってはおけないよ……」

脳裏に浮かぶ母さんの言葉。

『クラスの子が最近元気ない？ アンタにしては珍しいことを言うのね。……気になるなら放っておかないで手を差し伸べてあげたらどう？ 辛い思いをしているかもしれないし。しない後悔より、する後悔よ』

涼子からの相談ごとをそのまま母さんに伝えた時に言われたことだ。羽沢も同じ気持ちなんだろうな。優しい羽沢らしい。

「アタシもこれ以上蘭をつらい気持ちにさせたくはない。アタシ自身、この間の事で蘭につらい顔をさせてるから……。もう、同じことはしたくない」

「こちらも巴らしい真っ直ぐな気持ちだ。そして2人からそんな風に思ってもらえる美竹はとても幸せだと思う。

だけど……。

「ひまり、どう思う？」

「さみしいけど……でも、これが蘭のためになるのなら、お休みしたほうがいいのか」

悲しそうな表情を浮かべる上原。そんな彼女を見ている中、脳裏に浮かんだのは、普段なら絶対に見せない怒った表情の紗夜。

「蘭自身が落ち着いたら、またバンドをやればいい。ガルジヤムだつて、きつとまた出る機会があるはずだ。今は、蘭のことを1番に考えよう」

「うん、そうだね」

本当に……いいのか？

『あなたはまた何も言ってくれないのね！ 日菜には何か言つて、私には何も言つてくれないじゃない!!』

そして紗夜が大きな声を上げた時の言葉を思い出した。

「それが美竹のためになるのか？」

彼女のためを思つての発言だとは思ふ。だが、バンドと家柄の板挟みが辛いと本人の口からは聞いていない。美竹が思つていても口に

出さないってタイプかもしれないが……。

「ちゃんと本人の口から聞いた方がいいと思う。わかっているつもりは……時にわかっていない時よりも残酷だ」

「蘭ちゃんから直接……ですか」

今の現状それが出来たら苦労しないのは間違いない。わかった上で俺はこんな提案をしている。紗夜と言い合いをして思った。本当の思いを聞きたい時は喧嘩をした方が近道と。

「巴たちの考えを伝えた上でちゃんと聞いてあげるといい」

「それでも……言ってくれない時は」

「そうだな……切り口を変えてみるしかない。具体的な方法は伝えることは出来ないが、1つではないさ」

俺の場合は紗夜との口喧嘩だった。普段は紗夜に対する焦つたい気持ちはぶつけないが、ああいつた口喧嘩をしたからこそ、伝えられたのかもしれない。……そう信じたい。

「根拠はない。でも3人を信じている。話してみるといい」

「はい……！ 旭日先輩にはいつも助けられてばかりですね」

「困った時はお互い様……だろ？」

「陽子さんもよく言っていましたね」

Afterglowのメンバーは母さんと面識があるからな。俺にはない思い出があるんだろう。いつか……聞けるといいな。

しばらく話していると、病室の扉が開いた。ようやく来たようだな。今回の主役とも言うべき人間が。

「つぐく来たよ」

「モカちゃん！ それに、蘭ちゃんも！」

「おう。ゆー先輩も来てたんですな」

「まあな。相変わらず呑気だな」

その緩い話し方で話を聞いていると眠くなってくる。学校の授業と同じ類だ。

「蘭……」

「巴……」

「なんだか気まずい雰囲気か漂っているな。」

「俺は失礼する。羽沢、無理はするなよ」

「あ、はい。本当にありがとうございます」

「じゃあな」

上手く伝えられるかどうかはわからない。だが、伝えなければ一生このままかもしれないとわかっているのなら。きっとこの5人はまた一緒に歩いていけるはずだ。

Roseliaだつてきつと……な。

そんな思いを胸に、静かに病室を後にした。

## 病院 通路

羽沢のお見舞いのことで忘れようとしていたが、どうにも忘れられないらしい。お前の罪なのだから忘れてはならないという神の意思か。それとも……忘却してはいけない記憶なのか。

邪魔にならないよう窓際の方に立ち、外を眺める。

今でも鮮明に覚えている。母さんが亡くなった日のことを。悔しさ。怒り。悲しみ。色んな感情が俺の中で渦巻いていた。中でも一番大きかったのは……怒りだ。なんでもっと早く気づいてあげられなかったのかつて。

結局よくわからなくなつて、俺は家を飛び出した。

「旭日くん？」

現実に引き戻したのは最近ではすっかり聴き慣れた声。

「南雲か……隣の人は」

ふと視線が隣に居る美人の女性に移った。この人はもしかして……。

「お母さんだよ」

「紘翔がいつもお世話になってます」

南雲のお母さんか。それにしても美人な人だな。本人と同じ髪の色。少しだけ薄い気もするが、なによりも澄んだ青色の瞳はどちらも同じらしい。雰囲気もどことなく似ている。

「お友達？」

「え、あつ……」

「そうです。バイト先も同じで、いつも助けられています」

決して嘘を言っているわけではない。前者も後者も。

「そうなのね。お友達が居て安心したわ。この子いつも出かけたたりしないから心配してたのよ」

「お母さん、そんなこと言わなくていいよ……!」

なんか意外な一面が見れたな。普段はもっとうこう……落ち着いた感じで居るし。だからこうして照れている一面がなんだが新鮮に感じる。

なんて考えていると、南雲のお母さんがじつと俺のことを見つめてくる。……何か気に触るような態度だったか？

「お母さん、どうかしたの？」

「ううん。じつと見てごめんなさいね。知り合いに雰囲気似ている気がしただけよ」

「そう……ですか。俺はこれで失礼します」

とりあえずこの場を後にした俺は出入り口の方へと歩き始めた。知り合いに雰囲気が似ているという言葉は少し引っかけたが、今考えるべきことではない。

## 第34話 消えた笑顔

### 第34話 消えた笑顔

今日はRoseliaがバンド活動出来るのかどうか決まる日。湊が指定した時間はまだまだ先だ。今更俺がどうしようが変わらないのはわかっている。それでも少しだけソワソワしながらバイトをこなしていた。

ロビーでスタジオの予約表を見ると、海藤さんがやってきた。

「お疲れさまです、海藤さん」

「お疲れ、夕君。聞いたよ？ この前珍しく午前のバイト休んだんだって？」

この前の午前中といえば、羽沢のお見舞いに行った時か。急な事態だったとはいえいつも行っているお店のマスターの娘さんが倒れたかな。まあ……あの時もいろいろあったな。

「お見舞いですよ。いつも行ってる喫茶店の子が倒れちゃったので」

「あれれー？ 夕君の彼女ー？」

「違いますよ。それに恋愛なんて興味ないんで」

隣でまたまたくとか言ってる海藤さんを横目に予約表をもう一度見返す。この所、新しいバンドが増えたからな。特にぶっ飛んでるのがハロー、ハッピーワールド！だ。あのライブは別の意味で忘れられない。さすが弦巻こころだ。

いつもとあまり変わらないバイトの時間を過ごし、あつという間に午前が過ぎた。

「先に失礼するよ」

「お疲れ様です」

午前中のシフトを終えた海藤さんを見送り、俺は1人口ビーで外を眺め始めた。



海藤さんの代わりに来るのは涼子だから比較的楽だな。

Roseliaがスタジオに入って数分。今頃いろいろ話し合いが続いてるんだろう。今回はスタジオに行く用事はないし、出てくるのを待つしかない。他人事みたいになつてはしまうけど、大丈夫だろう。

休日の日だからかカフェテリアにはたくさんのお客さんが居る。そのなかに紛れ込んでお茶をする輩はシフトに入っていないから、注意に行くこともない。つまりあれだな。暇ってことだ。

「この時間帯はいつもこうなの？」

ぼーっと外を眺めていると、話しかけてきたのは南雲だった。俺が教育係だから仕方ないが、シフトはほとんど同じだな。

「いつもこうだな。夕方になればまた忙しくなるさ」

「そっか。こんな時間もなかなかいいもんだね」

「だろ？」

今、ラウンジに今後のバンド活動について話しているのであろうお客さんが複数人だけ。スタジオは1つを除いて埋まっている。この暇な時間が、俺はなによりも好きだ。考え事をできるからな。もちろん忙しいのもそれはそれでいい。

「旭日君って意外と真面目だよな」

「意外とってなんだ……と言いたいが、学校だとぼーっとしてるか寝てるかだしな」

そんなことをしてるから紗夜に怒られるんだよな。口うるさく言われているうちは心配されてるってことなんだろう。だが、このころはいろいろあつてそうもいかないのが現実。

「僕よりは良いと思う。君はたくさん話せる人が居て、少し羨ましいよ」

「友達。なぜ作らない？」

「えっとね……実は友達作るの苦手で」

あんまり人と関わりたくないタイプなのだろうか。それなのにCIRCLEでバイトは話が変わってくる。別の理由なのか？

「僕の母親は元々芸能人なんだ。DIVAの南雲亜愛梨。聞いたこと

くらいある?」

「芸能人。美人な人だとは思ったが、まさか芸能人だとは」

「本当に知らなかったんだね……」

「名前しか知らなかった」

「そ、そっか」

親が元芸能人だと何が大変なんだろう。普通考えられるのはファンだったりするやつが会いたがる。後はいろいろ期待されるとかそのくらいか。よくわからないが。

「友達になりたいって言う人は大体お母さん目当てでね。それにいろいろプレッシャーで……」

「なるほどな。親が有名人っていうのも大変ってことはわかった」

予想というか、まあ当たってしまったわけだが。こんな状態で俺は違うから友達になろうなんて言ったって信じられるわけがない。今までだってそう言って近づいてくる奴が居たはずだし。だったら少しずつ。手探りで探していくくない……と思う。

「少なくともここで働いてる人はある意味変な人ばかりだから気にしなくても良いと思うけどな」

みんな良い人には変わりないんだけどな。ちよつと特殊過ぎてなんととも言えない。アイドルか……萩野は……いや大丈夫だろう。

「それだと君もそうなっちゃうよ?」

「そうだな。厄介ごとに巻き込まれるのに、自分から巻き込まれにくい変な奴だ」

こればかりは受け入れるしかないんだ。お節介でもバカ真面目でもなんでもいい。母さんの意思を俺は残したいんだ。なかなか上手くはいかないのが現状だがな……。

「君は不思議な人だね。最近話すようになったのに、昔から知ってるみたいな感じだ」

「なんだそれ……って言いたい所だが、俺もそんな気はする」

不思議だ。もしかしたらなんかの繋がりがあるのかもしれない。それがなんなのかはわからないが。そう思える程、南雲に感じるものがある。

「俺も友達を作るのは苦手……いや、作ろうとすらしなかった。1人で居るのが楽だったし」

人と関わるのが本当にめんどくさかった。それでも。智紀と涼子はそんな俺でもいいと言ってくれた。他人にも。何もかも興味がなかった。そんな俺でも。

「信じられる友達が居るってなかなかいいもんだぞ」

「君が言うとなんだか説得力があるね」

「そうか？」

だから今度は。俺の番だ。

「こんな俺でも出来るんだ。……紘翔」

「君となら。良い友達になれる気がするよ。たくん」

そう言うとなんか紘翔は右手を差し出してきた。

なんの迷いもなく俺はその手を握り返して、固い握手を交わした。

「2人ともお疲れ様」

ロビーで話し込んでいると、涼子が来たようだ。いつの間にかそんな時間になっていたらしい。

「南雲君は仕事慣れてきた？」

「うん。おかげさまで」

「慣れてもらわないとポンコツが多い時大変だからな」

主に真宗と市野木さんだが。ポンコツと言うよりは、仕事が手につかない時が多いというか。いや紛れもないポンコツだな。

「そうだ。今のうちに楽器のメンテナンス教えるか」

「それがいいかもね。もうすぐしないといけなかったし」

1部屋空いているしちょうどいい。涼子の言う通りもうすぐメンテナンスしないといけないから、当日バタバタしながら教えるのよりは遙かにましだ。

「じゃあ行くか。……紘翔」

「……うん。たくん」

ちよつとだけ……距離が縮まった気がする。

だがこの日1番驚いたのはふと家の話をしていたことだった。そして帰る方向どころか、俺の家の先の方から絃翔が来ていることに心底驚いたわけだ。いつもは先に帰るからな……。朝も俺より行くの早いみたいだし。

バイト終わり。どこにも寄り道をせずには絃翔を乗せて真つ直ぐ帰宅。バイクから自転車に乗り換えて、目的地を定めずに走らせている。結局辿り着く場所は決まって来るんだが、そこにたどり着くまでの過程が違う。

こうしてたまにサイクリングをしているのは、1人で考えたい時間だ。ここ最近はいろんなことがあり過ぎた。紗夜には冷たくあたってしまったし。羽丘に行けば羽沢が倒れて、ちよつとした騒ぎになった。お見舞いに行けば俺が怒られるし。Roseliaはバラバラになるしで、あげればキリがない。

高校生って多感な時期だからな。いろいろ問題が起きてもしようがない。って言うてる俺も高校生なんだが……。

母さんが生きていたら……もつと普通の生活だったんだろうか。学校で授業受けて。バイトして。友達と遊んで。めんどろごとを自分から引き受けるなんて絶対なかった。何かと理由をつけて、逃げた。その結果が今の紗夜と日菜なんだろう。

俺の行動1つで変わるなんてたいそうなこととは思わない。でも……少しくらいは何か違ったかもしれない。

川沿いの道を走っているとスマホが震え始めた。たぶん電話だろうけど、相手は誰だ？

自転車を道の端に停めてから電話に出た。

「もしもし……」

『もしもし。今、いいかしら?』

一瞬スマホの画面を見ると相手は湊友希那だった。これまた珍しい相手からの電話だ。いったい俺になんの用事だろうか。悪いことをした覚えは全くないんだが。

「大丈夫だ。……何か用か?」

『今回のことであなたにも迷惑かけてしまったから。ごめんなさい』

なんだ。そんなことでわざわざ電話してきたのか。迷惑っていう迷惑はなかった。タイミング悪く気まずい所に毎回現れてしまったのは俺の方だし。

「迷惑とは思ってない。タイミングが悪かったのは俺の方だ」

『なら……いいのだけれど』

その電話をしてきたってことは Roselia の活動は再開するっぽいな。絃翔にメンテナンスのやり方を教えていたら、いつの間にか帰ってたからな。結果を知ることができなかつたし、ちようどいい。

「話はそれだけか?」

『……1つだけ。聞きたいことがある』

「なんだ?」

『あなたのお母さんのことよ』

結構ストレートに聞いてくるんだな。そう聞かれた方が俺は答えやすくもいいんだが。……でもなぜ湊が俺の母さんのことを知りたがるんだろうか。……あ、あんなこと言っておいて気にならない方がおかしいよな。

「俺の母親は旭日陽子だけど、知ってるのか?」

『ええ。前にお父さんから話を聞いたことがあるわ』

「お父さん? どういうことだ?」

なるほどな。母さんと湊のお父さんには接点があつたのか。言わ

れてみれば俺がまだ音楽に興味がない時にテレビに出ていた人とセッションしたとかつて話をしていたな。そこ相手が昔インディーズバンドをやっていた湊のお父さんとは。夢にも思わないだろうそんな話。

『急な話でごめんなさい』

「いや。母さんのことを知れてよかった。ありがとな」

『お礼を言われることじゃないわ』

「礼を言うほどのことだ。またな」

通話を切り、スマホをポケットにしまう。すっかり話し込んでしまったからだろう。辺りは暗い。俺は来た道を引き返し始めた。

意外な接点に少し驚いた。正直母さんの交友関係をたどるとキリがない。SPACEのオーナーは昔の母さんはあんな風じゃなかったって言ってたけど、想像がつかない。バンド一色だったらしいな。……あの父親がよく落とせたな。

世の中わからないもんだな。

急ぎめに帰ってきた俺は自転車を駐輪場に止めてマンションの階段を上がっていく。今日も退屈じゃない1日だったな。他は何もないだろう。そう思った矢先。

「置いてくるだけなんだから、着いてこなくていいわよ」

「えー。たまにはいいじゃん」

珍しいというか。なにをしてるんだというか。2人が一緒に居るのを久しぶりに見た気がする。とか言ってる場合ではない。ちょうど鉢合わせしてしまった。

「ゆーくんおかえり。寄り道してたの?」

「まあな。2人は……ご飯持ってきてくれたんだな」

「たまには食べに来なさいってお母さんが言ってたわよ」

紗夜からタツパーを受け取りながら返事をする。

「ここ最近バイトやらで忙しかったからな。しばらく氷川家に行ってない。こうしてたまにご飯を作ってくれるだけでもありがたいことなのに、心配までかけてしまうとは。」

「お父さんもゆうーくん連れてこいって言ってた!」  
「そ、そうか……近いうちに行く」

おじさんのことはハツキリ言っただけで苦手だ。行くと必ず怖い視線を感じるんだよ……まるでお前には紗夜と日菜は渡さないからなと言わんばかりの目。そう、おじさんは娘を溺愛しているのだ。とても困ったことに。

「日菜、帰るわよ」

「えー、せつかくだしお話ししていいよ」

いい機会か。2人にも話しておくとしてしよう。

「2人に話したいことがある。少しだけでいいから」

「ゆうーくんもこう言ってるし。ね? おねーちゃん」

「……少しだけよ」

たぶん紗夜はわかっていると思う。これから何を話すのか。今までなぜ話さなかったのかは、もうわかっている。俺も紗夜と同じで迷惑をかけたくなかったからだ。あんなこと言っておいて話さないわけにもいかないからな。

紗夜と日菜を家に入れてリビングで改めて話すことにした。普段使わない部屋だからだろう。俺の部屋と違って綺麗だ。

「話ってなに?」

「母さんと俺のことだ」

「そこまで言えば察しがつくだろう。紗夜は気づいたみたいだ。」

「俺は母さんとの血の繋がりが無いんだ。別の母親が居る。それが誰かまではわからないが」

「それって……ゆうーくんとおばさんが親子じゃないってこと、だよね?」

「簡単に言えばそうだな」

「そっか……」

血は繋がってはいない。だけど養子って形で書類上は家族。父さんからそう聞いた。なぜそうなったのか、経緯は聞いてない。聞けば教えてくれるんだろうけど、正直今は知りたいとは思わないんだ。

たとえ血が繋がっていなくなたって。

「それでもゆーくんはゆーくんでしょう？ あたしとおねーちゃんの幼なじみ」

そう笑顔で告げる日菜。こうなるんだろうなとは思っていても、実際言われると少しばかり嬉しくなる。

変わらず接してくれる日菜。気をまわしがちだけど、変わらず接しようとしてくれる紗夜。この事実を告げても変わらないものが、そこにはあった。もちろん変わったこともあるけど、それは良い方向にだ。

「俺は旭日陽子の息子だってことは変わらない」

本当の親と向き合えないといけなくなったとしても。その事実だけは変えたくない。

「さてと。辛気臭い話は終わりにしよう。腹減ったし」

「うん！ そうだっ！ 見たいテレビあったんだ！」

そう言うのとテーブルに置いてあるリモコンを取ってテレビを見始める。帰ってから見ない辺り日菜らしい。

紗夜達が持ってきてくれたおかずはまだ温かいからいいとして。

炊飯器のご飯はレンジで温めないとか。

台所に行つてご飯を用意していると、紗夜が何も言わず用意を手伝い始めた。

「また洗い物ためているのね」

「今度やろうと……」

「その言い訳は聞き飽きたわ」

いつもの紗夜の小言。鬱陶しいはずの言葉なのに、なんだか今はホツとしている。あのまま紗夜が心を閉ざしてしまつたらどうしようとも思った。でも、きっかけ1つで変わったんだ。

何事もどう転ぶかわかんないな。意外と日菜と向き合えるのも早いのかも。



再び訪れる沈黙。前みたいに俺から何か言うわけでもなく、紗夜が何か言うわけでもない。気が向いた方が話すいつもの沈黙。

「夕……日菜の件だけど。私はまだ、向き合える程心の準備が出来てない……だから」

その言葉が出てきただけでも大きな成長だと俺は思う。以前なら一言も発しなかったからな。Roseliaという存在がすぐなからず影響しているのだろう。

「少しづつでいいと思う。何かあったら何度でも背中押してやる」

「あなたがそう言ってくれるなら……その時は頼りにするわ」

変わったのはメンバーの間の関係だけじゃなく、俺と紗夜の関係も少しだけ変わった気がした。



「(夕は変わった。だから私も……)」  
変わってみせる。そう改めて誓う。

ふと彼を見ると、洗った皿をタオルで拭いて元の位置に戻していた。普段ぼーっとしているような腑抜けた表情とは違い、いつもの無愛想な変化しない真顔。

彼が変わったのは考え方や行動だけではない。それに気づいたのはここ最近。

「(あの日から……笑わなくなったわね)」

声を出しながら笑っている姿を見たのは——いつだったろう。

## 第35話 繋がり

第35話 繋がり

旭日家 自室

「私は先に帰っているから」

「はい」

「迷惑をかけてはダメよ」

「わかってるよ」

先に帰って行く紗夜を見送り、自分の部屋に来たわけだが。なぜ日菜が残ったのか皆目検討がつかない。さつき話したことでもなにか疑問があるのだろうか。それとも……。

「ねえ…ゆーくん。努力して必ず報われるものじゃないの？」

いきなり布団にダイブしたかと思えば、突然そんなことを言った。日菜から出てくるとは思えない言葉だ。熱でもあるのか？

そう思いつつも、脳裏に浮かぶのは紗夜と丸山たちのこと。いくら努力してもダメな時はとことんダメだ。多少の努力で追い抜いていく者も居る。

「夢を見るのも？」

むくりと起き上がって今度は布団の上であぐらをかいて、俺に視線を向けてくる。

「本当にどうした？ らしくもないこと聞いてきて、熱でもあるのか？」

ここまで来ると本当に心配だ。別に日菜が言いそうじゃないことを言っているからじゃない。表情がいつもとは違う。疑問におまつている表情ではなく、暗い表情だ。

「大丈夫。ゆーくんはどう思う？」

「……必ず報われるかと言われれば答えは違うとしか言えない。夢を見ることはいいと思う。目標があるのとないのではモチベーションが違う」

「そっか……」

ここ最近は他人に興味があつて楽しいと言っていたのに突然こん

な状態か。いったいなにがあつたらこうなるんだ？　まるでどん底に落ちたみたいな感じだな。

「今日ね。練習してる時に千聖ちゃんが来たんだ。それでね——」

なるほどな。要するに次のライブが決まった。だけどそれが努力してきた結果ではないと白鷺千聖に冷たく突き放されるように丸山が言われたと。それは確かに重い雰囲気にもなるな。

だが白鷺の言ったこともわかる。世の中努力だけじゃどうにもならないのは確かだ。実際に見たわけじゃないが、特に芸能界とかは余計にそう見えてしまう。

「丸山はちゃんと生きてたか？」

「んーどうだろう」

高1からの知り合いだからな。不憫でならないよ。時折母さんも丸山のことを心配している様子はあつた。

『あの子は小さな積み重ねをちゃんと大事にしている。無駄にならないと信じて。だからこそ、その小さな努力が実ってほしい』

そんなことを言ってお酒をちびちび飲んでいた。

日菜は日菜でいろいろ考えるとところがあるんだろう。少し変わったな。

立っているのも疲れた俺は床に座り込んでベッドに寄りかかった。

「必ず報われるわけじゃない。だが、努力という点で大事だと思うのは結果じゃなくて過程だと思う。やってきたことは無駄にはならない」

現に個人レッスンの成果は出ている。そのことは白鷺も褒めていた。あとは……無駄にならないようどうするべきかをちゃんと見えていけば。

「まあ日菜はそんなことを考える必要はない。自分が今1番わかりたいことを学べばいいんだ。それが他人を知ることなんだろう？」

そう言う俺を抱きついてきた。

「……うん！ ゆーくんとはずっと居るからなんとなくわかるけど、彩ちゃんも本当にわからない！」

「それが面白いんだろ？」

「うん！」

よくわからんが元気になってくれてよかった。あと苦しいんだが？ 思ったよりも力強いな……。

パスパレの活動を始めてから日菜も変わりつつあるようだ。良い方向にな。

「日菜。わかったふりだけは気をつけろよ？ いつか綻びが産まれるから」

「……うん。大丈夫だよ」

ならいいんだが。紗夜の気持ちをわかっているふりをしていた俺の二の舞には……ならないでくれよ。

今日の日菜の気持ちも紗夜を苦しめていることは重々承知している。それでも日菜が変わらなければいけないとは、どうしても思えないんだ。それじゃあ以前のような楽しそうに並んで歩く2人の姿を見れない。俺は……そう思う。

花咲川高校 教室 授業中

俺は例のごとく授業を聞かずに外を眺めていた。今の授業は歴史。暗記系なら頑張れば問題なく覚えられる。むしろそれしか得意なところがない。

そんなことは今はどうでもいい。

時折思う。根拠のない自信はどこから湧いてくるのか。今の俺を作り上げたのは母さんの思いを残したいという気持ち。だがそれは答えになってはいない。

なぜ……紗夜と日菜の関係で、変わるべきは紗夜だと思っただろう。日菜じゃ理解出来ないから……違う。結局、明確な理由が見つ

からない。

「いったいな――。」

「ぐっ……………！」

その瞬間、一瞬の強い頭痛と共にある光景が脳裏によぎった。

暗い空から降りしきる雨。雨宿りをしているのか、どこか雨をしのげる場所で暗い表情を浮かべた誰かが居る光景。見覚えのあるような……………ないような場所だ。

「なんだ……………今のは。夢？俺は今、居眠りをしてはいない。だったらいつたい……………」

「旭日、大丈夫か？」

額に手を当てていると、隣に座る男のクラスメイトから小さな声をかけられた。

「大丈夫だ」

「本当か？無理するなよ」

「わかってる」

暗い表情を浮かべていた子は……………誰だろう。考えても答えなど出るはずがなかった。

時は過ぎて放課後。あれから頭痛はなくいつも通りに過ごせた。いったいなんだったんだろうな。

「夕くん、今日一緒に帰らない？」

帰りの支度をしていると、紘翔が現れた。

「この前のC i R C L Eでの会話以来一緒に過ごすことが増えた。今朝も一緒に学校に来たしな。」

「構わないが、寄りたい所があるんだ」

「寄りたいところ？」

「後輩の家……………というか、蔵というか」

「蔵？僕は大丈夫だよ」

「悪いな」

そう。今日は市ヶ谷家の蔵に行かなくてはいけない。結構前に香澄と花園さんが言っていたクライブの練習が本格的に始まったらしくてな。その様子を見に行くってわけだ。どこまで成長したのか少し楽しみだな。

「真宗くん大丈夫かな？」

「CIRCLEのことか。まあ時には試練を与えることも必要だ。……紘翔の方が後輩なのに心配か。真宗……」

「事情が事情だから仕方ないよね。僕だったらどうしていただろう」

CIRCLEでは今頃真宗、天堂さん、萩野、涼子の4人がバイトとして居る。つまり真宗にとっては地獄ってことだ。いざとなったら狩場さんも居るし、大丈夫なことを願うばかりだ。

「なるようにしかならない。とりあえず行こう」  
「うん」

帰りの支度を終わらせ、俺と紘翔は学校を後にした。

## コンビニ

市ヶ谷家に向かう前に手土産を買っていくかと思い、まずはコンビニ二へと立ち寄った。カゴを持って真つ先に向かったのはお菓子などが置いてある所だ。

「こういう新作とかコンビニ限定とか書いてあるとつい買うんだろうな」

「そう言ってるけど、カゴに入れてるじゃないか」

「俺が食べるわけじゃないからな」

「そういう問題かな……。そうだ、後輩って何人くらい居るの？」

「4人だと思う。1人は居たり居なかったりするから、いちおうな」

適当にお菓子をカゴに入れていく横で紘翔が驚きたような表情を浮かべていることに気づいた。特段おかしいことをしているとは思っていないんだが。

「値段も見ずに買うんだね……」

「よくわからないからな。あと飲み物とスイーツを買って行く」

「お金足りるの?」

「そこは気にしなくていい」

俺はあまり物欲というものがない。バイトをし始めたからの大きな買い物はデスクトップPCくらいで、他は思い当たらない。今身につけているものはもらったものばかりだしな。母さんには物欲が無さ過ぎて逆に心配された。

つまり、お金は気にしなくても大丈夫くらいは持つてるってことだ。

「あとはスイーツと飲み物だが……。紘翔、悪いんだが大きいお茶を  
持つてきてくれるか?」

「何本?」

「2本だ」

「わかったよ」

飲み物は紘翔に任せて、一足先にスイーツの置いてある所へ移動してきた。

まずは抹茶味のスイーツ。これは市ヶ谷さんにだ。前に練習を見に行った時に言ってたから、買っていいこうと思う。いつも香澄の相手で大変だろうし。あとは適当に買っていくとしよう。

「持つてきたよ」

「悪いな。会計してくるから外で待つてくれ」

「うん」

そこそこの荷物の量になってはしまいが、空のリュックに入れれば問題ない。教科書とかはテスト前以外は基本持つて帰らない主義なのがこうをそうした。

市ヶ谷家に向かう道中。

「持つてもらって悪いな」

「ううん。そんなに重くないから」

だから持つてもらわなくても必要もなかったのだが、ここは素直に渡した。何事にも気が配れる性格なんだろう。最近一緒に居てそう思った。

そして時折不思議に思う。なぜこんなにも話しやすいのか。昔から一緒に居たような……………」

「そうだ。今から行くところには誰が居るの？」

「1人は中学の後輩。1人は前にバイトをしていた所の常連さんの妹。1人は半引きこもり。1人は……………中学の後輩の友達」

「いろいろ聞きたいことはあるけど、仲の良い後輩が多いよね」

「そうか？　と言いたいが、たくさん思い浮かんだ」

まずはAfterglowの5人。Roseliaだとあこ。CiRCLEだと真宗、鈴音、早乙女。割と多いかもな。部活をやっていないのに。ほとんど商店街とバイトで出来た後輩だが。

「君と居ると退屈しないよ」

「俺も退屈と感じたことはないな」

「毎日何かあるもんね。君は」

「まあな。俺と居ると大変だぞ」

「構わないよ。……………誰も居ない毎日よりはね」

もう少し……………早く出逢えていたらよかったのに。紘翔と居るとそう思う機会が多い。こんな感覚は初めてだ。

## 市ヶ谷家 蔵

あれから数十分歩いた俺と紘翔は市ヶ谷家にたどり着いた。敷地内に入ってから、香澄に連絡をして来るのを待った。

「すごいのが来るぞ」

「すごいのか？」



数分もしないうちに蔵から顔を覗かせ、俺と絃翔を発見するなり勢いよく近づいてくる香澄。

「夕先輩！ 待ってましたよ！」

「おい香澄ー！」

「待っていたのはこれだろ？」

絃翔から荷物を受け取り香澄に渡した。

「そんなことないですよ」

「嘘をつくな」

半分嘘つてくらいか。

「こっちは俺の友達の南雲絃翔だ」

「戸山香澄です！ こっちが有咲です」

「おいこら。……市ヶ谷有咲です」

「猫を被るな、さっきのでバレてるからな」

出会って早々がこれだ。普通の人ならもう疲れるところだからな。

なんて考えていると、横で絃翔が笑っていた。

「なんだか楽しい子たちだね。よろしく、戸山さん、市ヶ谷さん」

「はい！」

「いえ、私は……」

「とりあえず持つて行ってくれるか？」

「わかりました」

渡した荷物を持った香澄は先に蔵へと戻っていく。その後ろ姿を見て市ヶ谷さんがため息を吐き出した。

「それと、これは市ヶ谷さんに」

自分で持つていた袋から、別の袋を取り出して渡した。中身はあれだ。

「私だけにですか？」

「いつも苦勞してるからな」

「あ、ありがとうございます」

中身を見るなり少し驚いたような表情を浮かべていた。

「これって……」

「抹茶味が好きって言ってただろ？」

「はい…そうですね」

何か問題があったか？

「(ほそつと言っただけなのに……)」

いつまでもここに居ても仕方ない。さっさと行くか。

「早く行かないと香澄がうるさいぞ」

「元気でいいじゃないか」

「恐ろしさを知るのはもっと先のことだよ、絃翔君」

他の2人も含めて、待っているであろう蔵へと向かった。

市ヶ谷家 蔵

蔵に入りまずは自己紹介をすぐに済ませた。人見知りしないメンバー……主に香澄と花園さんだが。すぐに絃翔と打ち解けた。

「意外です。南雲先輩みたいな友達が居て」

「失礼だろ」

「否定はしない」

「そこは否定してくださいよ……」

と言われてもな。一般的にはそういう風に見られているってことなんだろうし。

「練習の方はどうなんだ？」

「バッチリです！」

そういう香澄ではなく、りみに視線を向けると。

「まだまだ、だと思えます」

「だ、そうだ。香澄、お前は調子いいのかもしれないが、俺が聞いたのはあくまで全体的なことだ」

「そうなんですか？ えへへ」

全くコイツは。まあ根を上げずにずっと続けているのは褒められることだな。段階的には初心者に少し毛が生えた程度かもしれないが、それでも立派な成長だ。

「それじゃあそのバッチリなのを聞かせてくれるか？」

「もちろんです！」

「ちよ、香澄お前！」

「大丈夫。私たちなら出来るよ！」

別にハードルを上げるつもりは全くなかったんだが、結果的にハードルが上がってしまったらしい。これは悪いことをしてしまった。

「普段、練習してる通りでいいんだからな？」

「任せてください」

各々準備を始め、定位置に着いたらしい。香澄の正面に花園さん。左側に市ヶ谷さん。右側にりみ。こうしてみると花園さんがリードギターみたいだな。

リードギターが担当するのは主旋律。香澄がボーカルとギターだからちよどいいいな。今の香澄には両方こなすのはかなり厳しいだろうし。そう考えると美竹の努力の凄さがわかる。今では同時にこなしているんだからな。

そんなことを考えていると、演奏が始まった。俺は静かに耳を傾ける。

「あゝまた間違えた〜」

まあ予想はしていた。だが、以前と比べるとちゃんとギターを弾けていることに驚いた。キラキラ星をゆっくり弾くのがやっとなかった香澄がな。

りみも市ヶ谷さんもつまづく所があるものの、しっかり練習をしていることがわかる演奏だった。

「でも抑え方よくなったよ」

「本当!？」

「ギター弾いてる人の手になってた」

「だって！」

そうやって手のひらを2人に見せる。

「わかんねー」

「ふふっ。ちよっと合わせてみる？」

「やる！」

俺も見せられたところでわからない。手を触ればある程度はわかるものなのだろうか。よく聞くのは指が綺麗だとか爪が綺麗だとか……。ふと思えば返すと紗夜の手は確かに綺麗だ。前に駅で手を握った時はどうだったかな。人が多くてはぐれたら大変なことくらいしか考えていなかった。

「せーのね！」

「ゆっくりね！」

「たん、たん、たんぐらい？」

「うん！ せーのっ！」

気づけば再び合わせようとしていた。しかし、香澄のミスにより止まってしまう。

「ちよつと！」

「ごめんね！」

「タイミング合わせないと」

花園さんの的確な指摘に今度はちゃんと合わせようと話し合いを始める。

「せーの？ せーのじゃーん？」

「せーのじゃーんで」

「せーの！」

それでもなかなか上手くいかず。

「あつ……」

「香澄ー！」

「難しいく。おたえ〜！」

「今のところは」

そう言うと花園さんがギターを弾き始める。それに釣られるように香澄が弾き始め、りみと市ヶ谷さんも同じように弾き始めた。

4人で演奏している花園さんはどこか楽しそうだ。他の3人も自分達だけで演奏している時よりも上手くなっている。

「C i R C L Eに出ているバンドとはまた違った感じだね」

「そうだな。絃翔にはどう聞こえる？」

「僕には……とても楽しそうな音が聞こえるよ」

「俺も同じだ」

いつの日か。CiRCLEでライブをする日が来るんだろうか。……その時は、頭の中を空っぽにして。聞きたいもんだ。

思い浮かぶ様々な問題。全てはまだ解決していない。今は時間に頼るしかない。それが少しもどかしい。

香澄たちがこの先たどる運命はとても険しく、一筋縄ではいかないことを俺はまだ知らない。

CiRCLE ロビー

次の日。

あの後は一通り聴いて退散した。いつまでも居るわけにはいかな  
いからな。

そういえば外の接客に回した真宗はちゃんと生きているだろうか。  
あと、まりなさんの買い出しを手伝いに行った市野木さん含めていつ  
帰って来るんだろうか。考えだしたらキリがない。

比較的スタジオの掃除からロビー戻ると、見知った顔が。

「あ、旭日さん。お疲れ様です」

「お疲れ。疲れてるようだな」

「まあ……」

奥沢美咲。ハロー、ハッピーワールド！の着ぐるみの中の子。着ぐ  
るみがバンドに居る時点でぶっ飛んでると思うが、5人中4人が楽器  
経験がないというな。

最後に会ったのは1週間前だったな。あれから変わったのだろう  
か。

「練習の方はどうだ？」

「えつとですね……割とバンドしてます」

「……………1週間でそんな変わるもんなのか？」

「みたいです」

「いったいどんな方法使ったらそんな変わるんだ？　こころに関しては日菜と並ぶ天才肌だからまだわかる。松原さんはドラムをやつてらしいからわかる。」

問題は残りの2人だ。瀬田に関してはギターを演奏する役をやつたことがあるから引き受けたという話で、北沢は……………弦が少ないから選んだとか言つてたはずだ。

「ある意味天才の集まりなのかもな」

「本当に苦労しますよ……………」

「だろうな」

奥沢がかわいそうだが、本人もそこまで嫌じゃないから居るんだろうな。この前の様子を見ると。

そんなことを考えながら、ロビーにある自動販売機まで移動した。

「コーヒーでも飲むか？」

「あ、いえ。悪いですよ」

「ただの気まぐれだから気にするな」

お金を入ると申し訳なさそうにコーヒーのボタンを押した。今度は自分の分を買つてポケットに突っ込んだ。

「骨折った甲斐があったな」

「まあ……そうですね。はぐみは本当に練習してきてますし。薫さんはまだ安定はしていませんけど、華があるので」

はぐみは香澄に似てどこまでも真つ直ぐだからな。瀬田は動きながら演奏でもしてるのか？　容易に想像出来てしまう。

「なにより、花音さんが全然叩けていました」

「そういえば駅前では悪いことをしてしまつたつきりだったな。今度会う機会が会つたら謝らないと。」

「こころは……………」

「バク転だろ？」

「よく知ってますね」

「こころの兄さんと知り合いでな。それでいろいろ知ってるわけだ」  
「鋼太さんですね。この前、通気性が向上したミツシエル作ってくれました」

「そのうちなんでも作りそうだ。あの人は」

すっかり話し込んでしまったな。そろそろバイトに戻るとしよう。

奥沢さんとの会話は平和でいい。

「悪いな。休憩だったのに」

「いえいえ。コーヒーありがとうございます」

「それこそ気にしないでくれ。なにかあれば相談してくれ」

「はい」

奥沢を見送りカウンターの方に戻っていった。

「旭日さんって意外と話やすいんだ。表情が全然変わらなくて少し怖いけど」

もう少ししたら真宗の手助けに行くとしよう。そろそろ限界だろうし。

「旭日、悪いんだが少し手伝ってくれないか？」

「わかりました。今行きます」

天堂さんに呼ばれた俺は一旦ロビーを後にした。

平穏な日々は続いていく。

## 第36話 クライブ

### 第36話 クライブ

「えつと……それでぶたれたの?」

「まあそうなる」

今日はクライブの日。そして待ち合わせの相手、絃翔が開口1番に聞いてきたことに答えた。質問はシンプル。なぜほつぺたが赤いのか。

いやな。これは事故であって、俺はあまり悪くないわけだ。部屋を片付けていなかったし、もつと余裕を持って起きればよかった。しかし、そう簡単にはうまくいかない。

少し時間を遡ろう。

### 旭日家 自室

「早くしないとぶつわよ」

俺にとっては開口1番の言葉が平手打ちの宣言。そもそも、朝、平手打ちをかましてこようとする奴がいるのだろうか。……いるんだよな。母さんも容赦なかったが、紗夜も同じくらい容赦がない。おそらく母さんの入れ知恵だろう。

「動きなさい」

いや、確かにせっかくの休みの日に起こしてくれと頼んで悪かったとは思う。今日はとうとうクライブの日だ。しかし、朝が少し早い。絃翔を待たせるわけにはいかないが、かと言って……。

「ぶつだけでは足りないということかしら?」

「なにをする気なんだ? と聞きたい所だが、想像もしたくないな」

「実際に体験した方がいいと思うけれど」

「起きるから勘弁してくれ」

一部の人間にはご褒美だろうが、俺からすると受ける必要のない痛みだ。知ってるか? 紗夜って意外と容赦ないんだからな?



「バンドの調子はどうなんだ？」

とりあえずベットから出て、窓の方まで移動した。軽く背伸びをしながらそんなことを聞いてみる。

「問題ないわ。もうすぐコンテストだからみんな気合いが入ってる」「そうか。ならいい」

以前のように練習が出来ているなら、なんの問題もない。いろいろ問題があったからこそ、Roseliaの結束力が高まっていると信じていたい。

「誰かと待ち合わせはしているの？」

「紘翔がもうすぐ来るはず」

「待たせないようにするのよ」

「わかってる」

とりあえず着替えて行くとするか。朝ご飯は家にあるパンを適当に持っていけばいいな。なければ買えばいいし。

まずは着替えないと話が始まらない。

「私はもう帰——ちよつと!!」

「なんだよ」

上着をベッドに脱ぎ捨てると、なぜか紗夜が怒った。服は着替えた後に畳む……はずだ。

「ど、ど……どうして脱いでるのよ!?!」

「着替えないと出かけられないだろ？」

「私が出て行ってからでもいいでしょう?!」

なんでそんな恥ずかしがってるんだ？ 逆の立場ならそうなるのもわかるが、今更幼なじみの上裸みたくらいで驚くことだろうか。

「早くしないと紘翔を待たせるからな」

「早く起きればこうはならなかったと思うのだけれど……」

そう言っつて後退りして行く紗夜。ふと足元をみると、床に無造作に置かれた教科書があった。このままだと足を滑らせ——

「だから毎日あれほど——きやつ」

「紗夜……!」

なんとか倒れる前に受け止めることが出来た。格好も問題だが、1

番の問題は顔が近いということだ。こんな顔が近いのは……………あの時。

「早く服を着なさい!!」

その瞬間、部屋に頬を叩く綺麗な音が響いた。

「これに懲りたら早く起きなよ?」

「努力はするさ」

こんなにも信用のない努力はないと紗夜に言われてしまうことだろう。

「それに女の子の前で裸になるのもどうかと思う」

「幼なじみでもか?」

「時々、夕くんが氷川さんに対する気持ちだわからない……………」

なぜか微妙な表情を浮かべている。

「逆の立場ならまだわかるが」

「デリカシーをもう少し持とうって話かな」

デリカシーか。紗夜が起こしに来る時は毎回きっちりしているから、朝急いで着替えるということはない。だが、日菜の時は違う。たまに一緒に寝ているし、なんだったら時間ギリギリに起こしに来たりするからな。どうしても間に合わない時は……………。

『ゆうくん痩せた?』

『最近ちゃんとご飯食ってないからかもな』

『おねーちゃんに怒られるよ?』

『日菜が言わなければバレない』

『んー補償は出来ないかなー』

なんだったらジロジロ見てくるレベルだ。

「今日は他に誰か来るのかい?」

「どうだろうな。来たとしてもあまり人数は居ないと思う」

「蔵に入れる人も限られるしね」

「そうだな」

可能性としては香澄の妹の明日香とゆりさんか? あの人は部活

とかもあるしどうだろう。俺としてはひな先輩さえ来なければ問題ない。あの人は悪い人ではないが、一緒に居ると本当に疲れる……。

「まあ、誰が居てもなんとかなるだろう」

「君が言うのと、そんな気がしてくるよ」

足掻いても変わることでもないからな。受け入れないといけない時は、そうするしかないのだから。

#### 市ヶ谷家 敷地内

しばらく歩き市ヶ谷家にたどり着いた。もうすでに何人か来ているようで、敷地内から声が聞こえてくる。どうやら蔵の前で話しているようだ。

「あつ、来た来た。こんにちは、夕とそのお友達」

本当にゆり先輩が居た。まあ気になるよな。

「こんにちは、ゆり先輩」

「こんにちは。それと初めまして、南雲紘翔です」

「うん。話はさつき聞いたよ」

もう来ているのはゆり先輩を含めて3人。1人はもちろんりみ。もう1人は。

「こんにちは、旭日先輩」

「こんにちは。元気そうだな、山吹」

「4日前に会ったばかりですよ」

「ああ…そうだったな」

そう言われてみれば一昨日の帰りにパンを買いに行ったな。それに加えてモカと美竹コンビに鉢合わせし、パンを1つあげた日だ。美竹は呆れた表情を浮かべていたっけか。物忘れが激しいわけではなく、出来事が多すぎるんだ。そこを忘れないでくれ。

「旭日先輩って、南雲さんと友達だったんですね」

「まあな。知ってるのか？」

「はい。たまに來ますよ？ お母さんの方が」  
「なるほどな」

山吹はすごいな。たまに來る人までちゃんと覚えているんだから。お客さんにとってはそれが割と嬉しいはずだ。本当にしっかりしている子だな。

それでも……あの日のことは、まだ。気にしているのだろう。時折だが、悲しい笑顔を浮かべるんだ。山吹は。

「そろそろ香澄が來る頃か？」

「私もそんな気がします」

「じゃあお出迎えだな」

俺たちはおそらくもう來るであろう香澄を出迎えるために敷地外へと出た。

まさに俺の予想は大当たりだった。

「本当に來ましたね」

「香澄は遅刻ってイメージはないからな。むしろ早起きすぎて怒られるくらいだと思う」

怒る相手は主に妹の明日香だろうけど。元気な姉を持つと苦労するよな。

俺たちの方へと向かってくる2人組。1人は香澄。もう1人はその妹―戸山明日香。姉とは違いすごくしっかりとした性格をしている。もちろん頭の良さも違う。真面目でいい子ってことだな。

「おはよう」

「さーやー！」

「わかったわかった……！」

大変だな、山吹も。すぐ香澄に抱きつかれて。俺だったら避けるか、頭を押さえるな。ところ構わず抱きついてくるんだ、香澄は。

「あつ、紹介するね。妹のあっちゃ――」

その直後。

「あーっ！」

「大丈夫?!」

香澄のギターケースのケースに限界が訪れた。しかし、それをもの見事にキャッチしてみせる明日香。さすが運動部だ。

「あつちゃん！　ありがとう〜！」

本当にいちいち抱きつくやつだな。ひつつき虫みたいだ。

「ちよっとー！　いつも姉がお世話になってます」

しつかりものだなくという視線をみんな向けている。まあ……そうなるだろうな。

「来た？」

「先輩?!」

「え？」

「水泳部の部長」

そういえばゆり先輩は水泳部の部長で、明日香は水泳部に入ってるって言ってたな。面識はありそうでなかったのか。当然と言えば当然だな。

ギターケースを袋から取り出して、あらためて背負いなおす香澄を見てみると、明日香が近寄ってきた。

「久しぶりですね、夕先輩」

「久しぶりだな。背、伸びたんじゃないか？」

「少しだけ…ですけど」

テスト期間はよく香澄の家に行ってたからな。主に俺と香澄の成績があまりよろしくなかったから。花女に入れてるってことは下手すると……。

「あの。そちらの方は」

「友達だ」

「南雲紘翔。よろしくね」

今日何回目の自己紹介だろうと思うのは俺だけではないはず。どんな相手でも臆せず行くところは本当にすごいと思う。人当たりがいいんだよな、紘翔は。

「戸山明日香です。よろしく願います」

「戸山さん……だと。同じになっちゃうね」

「姉妹兄弟つてそこが難儀だよな」

「確かに……そうだね」

「周りに姉妹やらが多すぎるんだよ」

戸山姉妹。牛込姉妹。氷川姉妹。宇田川姉妹。もう4組もいるんだぞ？ 鋼太さん含めると5組か。まあ多くても鋼太さんなら、戸山姉とか牛込姉と呼ぶんだろうな。

「香澄たちは花園さんがくるのを待つのか？」

「はい！」

「じゃあ俺たちは先に蔵に行ってるか」

「何か手伝うことがあるかもしれないしね」

花園さんが来たらそれはそれで大変そうだからな。俺は先に離脱しておきたい。なんて浅はかな考えはすぐに打ち砕かれるのであった。

「南雲先輩居ますし、旭日先輩は残ったらどうですか？ そっちに人居すぎてもあれですし」

「確かに。その方がいいかもね」

「ゆり先輩……？」

「南雲君いるしこっちは大丈夫だから、ね？」

山吹沙綾という伏兵がいたことを忘れていた……。しかし、ゆり先輩からはなんなら悪意を感じない。これはこれでもなんにも反論出来ないやつか。困ったもんだ。

「わかりましたよ」

「やったー！」

「なにが嬉しいんだお前は」

時折理解できないところが香澄にはある。

「彼……か」

花園さんを待っている間に話題にあがった彼という存在。3人は

付き合っている人を連れてくると予想しているらしい。が、俺は違う。これはあれだ。全く別のやつだと思う。

「先輩？ 考え事、ですか？」

「いいや。彼というのは、たぶん男ではないと思っただけな」

「あー私もなんとなくはそう思いますよ……」

「だよな。花園さんも香澄ばりにぶっ飛んでるところあるから」

そんな話をしていると、どうやらそのご本人が来たらしい。まず最初に駆け寄って行ったのは香澄だ。

「おたえく。ギターケースの袋破れちゃった〜！」

「私も朝……」

涙目で答える花園さん。同時に限界がくるとは……。

「一緒だ……！」

「仲良しだな……」

「本当にな」

それだけその袋を使っていたってことなのかもな。そもそも、重いギターを袋に入れるという考えが浅はかというか。袋破れた時のことを考えた方が良かったと思う。壊れたら大変だしな。

「あつ！ りみ可愛い」

「えへへ……」

「私も気合い入れてきた！」

「わかんねー……」

「ハムスターだ」

今度は俺に視線を向けてくる。なにも言わずに。

「おはようございます」

「おはよう……。挨拶の間はいらないだろ」

「私服の先輩、めずらしいと思っただけ」

「普段は制服だしな」

「変わらずだしなですね」

「否定はしない」

だらしなからお叱りを受けるわけで。服装を改めてもまた別の部分で怒られるから、もう諦めてるところはあるな。諦めが肝心な時

もある。

「それなに？ アンプ？」

花園さんが持っているカゴに視線を向ける一同。

「ううん。彼」

「えっ？」

まあ人ではない……よな？ な？

市ヶ谷家 蔵

「待てー！」

説明するでしょう。カゴの中はびっくりうさぎでしたとき。まあうさぎとは誰も予想は出来なかった……。問題はそこではなく、香澄が抱っこした直後逃げ出した。そして、蔵の方へと逃げこんだわけだな。

説明雑すぎないか？

「えっ?!」

またまたナイスフォローの明日香。見事にうさぎをキャッチした。

「うさぎどっ?!」

「んん」

抱っこするうさぎを俺たちの方へと向けてくれた。改めて見るとあれだ。うさぎだな。当たり前なんだが。

「よかった〜」

「いきなり離すなー！」

「本当だ。蔵の方だったから良かったが」

「ごめーん」

「オットアイのおっちゃんだよ」

「おっちゃん…」

「おたえ……」

なんだこのカオスな会話は……。この一瞬の会話に香澄たちらしさが詰まっていることに驚きだ。



「ライブは？」

「やります！」

ようやくライブの準備が始まった。座る場所がないということもあり、俺と紘翔は階段付近に居る。

おつちゃんはソファアームに座る明日香の膝の上で大人しくしている。そこが気に入ったんだろうか。

準備が終わった香澄たちに視線を向けると緊張している様子だ。まあ無理もない。初めてのライブな上に、ゆり先輩もいる。バンドを始めたきつかけのバンドのリーダーがいるわけだし。

「……ドキドキしてきた……！」

「私も……！」

「あれ？」

「手汗やばい……！」

それぞれ心を落ち着けている。こういう時こそまずは落ち着くことが大事だ。無理なことは百も承知だが、パニックになってしまう人の中には居たからな。初めて紗夜のライブを見た時とはまた違う感じだ。

「こんにちは。戸山香澄です。クライブに来てくださってありがとうございます。ごぞいます！」

全員が頭を下げた挨拶をする。すると……。

「有咲〜！」

「ばあちゃん?!」

「顔こわばってるぞー香澄」

「夕くん……！」

いやな。こういう時こそヤジを飛ばすことがベストかと。

「今日はおたえと……紗綾、あつちゃん、ゆりさん、おばあちゃん、夕先輩、紘翔先輩をドキドキさせますっ！ してくださったら嬉しいです！」

俺を含めて全員が拍手をする。いよいよ——始まる。

「いきます！ 私の心はチヨココロネ！」

ライブが始まった。緊張していた様子だが、練習の時よりも音が

あっている。それに……みんな楽しそうに演奏してるな。

花園さんが入るのかは別として、この先とんでもないことをする気がしてならない。大きな失敗ではなく。大きな成功。

香澄はいつもそうだ。やると言ったことは必ず叶えて来た。今回も、この先もきつと……。

ほんの一瞬同じような景色がフラッシュバックした。直後、演奏が終わり再び盛大な拍手が部屋に響いた。遅れて俺も拍手をする。

「やったー!!」

「マジやばかった！ 本当にヤバかったって！」

「楽しかった！」

「うん！」

練習してきた甲斐があったと言うものだ。香澄1人だとギターパートが厳しかったが、花園さんというリードギターが居ること以前に増して安定している。まあそれだけではないが、総じて相乗効果というものだろう。

「勝負じゃなかったんですか？」

「そうみたい」

「そんなもの最初からなかった」

いつの間にか勝負というより一緒に演奏しようになっただけだな。

最初の目的を忘れることなんてよくあることだよな？ な？

「だって一緒に弾いた方がドキドキするから」

「ね！ おたええ！」

「香澄！ りみ！ 有咲！」

3人に抱きつく花園さん。なんだかずっと一緒に居るみたいな感じだ。

これで4人か。Roseliaといい、香澄たちといいなぜこんなにも早くバンドが集まるのだろうか。運と呼ぶにはしっくりこない。奇跡と呼ぶには起きすぎている。だったら……。

「運命……か」

「運命？」

「香澄たちがこうして出会ったのも」

「確かに。最初から友達だったみたいなき感じだもんね」

「そうだな。俺も同じことを思った」

4人。どうせなら後1人。ほしいところだな。残りの枠としてはドラムか。そんな人、近くには流石にいない。居てもすでにバンドを組んでいる。

……1人居た…。いや、その選択肢はないか。

ふと4人と話す山吹に視線を向けた。

ライブが終わり蔵の外へと移動してきた俺たち。各々話したい人と話している。俺は紘翔と共にその様子を眺めていた。

「今日は来れてよかったよ」

「そうか？ ならいいが」

「君と居ると色んな人に出会えて面白い」

「気づけば人だらけだ。まだ居るって言ったら驚くか？」

「本当かい？ 少し楽しみだよ」

さほど多くはないが今度紹介しよう。今考えると日菜にはまだ会わせてないな。仕事で時間がないのと、会わせたらそれはそれで面倒ごとになりそうだ。その点は紘翔なら上手かわしてもくれそうだな。

「さて、そろそろ帰るか」

「うん。この後どこかに寄っていく？」

「昼でも行くか」

「いいね」

今日はバイトもなければ、宿題もない……はず。あってもどうとでもなるか。

「俺たちは帰ります」

「夕先輩、紘翔先輩！ 来てくれてありがとうございます！ 次は文化祭でやるのでぜひ！」

「楽しみにしてる」

それだけ言い残して俺と紘翔は市ヶ谷家を後にした。

「そうだ。よくテレビとかで見えるグータッチやらないか？」

「いいね。そういうの一度はやったみたかったんだ」

「じゃあ動作はどうするか……」

2人で話し合いながら歩くこと数分。とりあえず決めた動作でやってみる。

「水平にハイタッチを1回。今度は平を逆にしてもう1回」

「次はグータッチして」

「最後は強めにハイタッチだな」

「あとはこれを流れるように」

早速やってみた。最初だからまるで合わないと思っていたが、案外……合うらしい。まるでずっとやってきたかのような感覚で。

「こんなに合うもんなのか？」

「どうだろう。でも……悪くないね」

「だな。相棒」

何度でも思う。もっと早く。出会っていればよかったと。

## 第37話 雨上がりの空

第37話 雨上がりの空

羽沢珈琲店

午前のバイトを終えた俺は羽沢珈琲店に1人で訪れていた。いつものようにお茶をしに来た。というわけでもないんだ。

この後は用事を終えた絃翔と遊ぶ約束をしている。その時間潰しつてところだな。家に帰っても良かったんだが、今日は誰も居ないと踏んで訪れた。Roselia、アフグロは練習。香澄たちもおそらく蔵で練習をしているはず。

今日こそはゆっくりコーヒーを飲もうと思ったんだが……。なぜか俺は日菜と同じバンドの白鷺千聖とお茶をしている。この際1人でゆっくりお茶をするのはもう諦めた方が良さそうだ。

なぜかニコニコ笑顔を浮かべている。ものすごく怖い。

「本当に表情1つ変わらないんですね」

「え、まあ……。それよりも、なんでわざわざ相席にしたんですか？」  
そう言つて素直に答えてくれるんだろうか。別に素直に答えてくれなさそうと思つているわけではない。そんな雰囲気を感じるだけだ。

「息抜きにでもと思つて来たんですけど、ちょうど見かけたので」

「息抜きならなおさら……」

「聞きたいことがあつて…ダメでしたか？」

「いや、構いませんけど」

意外と素直だったことに少し驚きつつ、思い浮かぶのは日菜が何かしでかしてないかということだけ。その前に、俺と日菜が幼なじみだということを知っているのか？ 言つていてもおかしくはないんだが。

「旭日陽子先生の息子さんでいいんですよね？」

「……そのことですか」

この人も母さんのことを知っているのか。

「亡くなられてしまつて本当に残念です。陽子先生にはとても良くし

てもらいました」

「そう……ですか。ならよかったです」

芸能人の生徒が居るといふ話は聞いていた。それがこの白鷺千聖といふことまでは覚えてはいなかったが。こう何度も知っている生徒に会うんだつたらもう少し真面目に話を聞いていればよかったです何度も思う。

「同じ年……ですよね？ お互い敬語はなしで話しませんか？」

「まあ、いいですけど。出会って間もないのにいいんですか？」

「はい。話はよく聞いてましたよ」

いろいろ知ってますよと言いたげな表情を浮かべている。こう言った知っているのか、知らないのかわからない人が1番苦手だ。違う形で自分を偽っているような感じがする人が。

「じゃあ遠慮なく。日菜は迷惑かけてないか？」

「日菜ちゃん？ どういう関係なのかしら？」

「幼なじみ。小さい頃からの」

「そうなのね。少し空気を読むのが苦手……みたいだけど、今は大丈夫よ」

本人が居て楽しいと言っていたあたり。そうなんだろうな。どこに居ても変わらず自分を貫き通せるところは素直にすごいと思う。まあ……周りの人間が理解ある人ばかりだから問題が起きないんだろう。

「昔から勘が鋭かったりするのかしら？」

「勘……？ そう……だな。鋭い方かもな」

この前日菜が話していたことか。別の選択肢を探していると言っていた。日菜が勘付いていることをわかっている。

この話は伏せておくか。知ったらきつと直接聞いてしまうだろうし。それよりも、俺には聞きたい事がある。

「1つ聞きたい。努力について、なぜそう思う？」

かなり抽象的で理解しづらいことを言ったと思う。主語もないしな。我ながら酷いと思うが、彼女ならわかってくれると思った。

「……………努力は悪いことじゃないわ。むしろ、することが前提だから、

誇れるものでもないと思っっている」

この人も同じなんだろう。

紗夜や丸山たちと同じ部類の人間。

「もし、努力だけを信じて進んだとして、うまくいかなかったら？ その先、何を信じて進んでいけばいいのかしら？」

白鷺千聖の言葉はどこか重みを感じた。確かに言っていることは痛い程わかる。努力の先が必ずしもゴールとは限らない。むしろ、努力の先に辿り着く場所がスタート地点のことがほとんど。

「……………旭日君はどう思うのかしら？」

努力の先の答えはたぶん同じなんだろう。だが、俺が今気にしているのはそこではない。

「同じだと思った」

そう言ってからコーヒーを一口飲んだ。一瞬の沈黙がその場を支配する。

「同じ思いなのね。よかつ——」

「だけど」

言葉を遮るように言っただけから白鷺を見る。

「俺の答えはまた別だ。伝える前に聞かせてほしい。君はいつたいたいんだ？」

「どういう……………意味かしら？」

もう少し説明が必要だな。

「同じ仲間ではないのか？」

「同じ…仲間？」

すると黙り込んでしまった。キツイ言い方をしたわけじゃないんだが。少し遠回し過ぎたか。

数秒の沈黙があっても答えは出てこなかった。

「君のいる世界は仲間が…とか言っただけでいられるような場所じゃないことはわかってるつもりだ。……………だからこそ、せっかく出会えた仲間をもう少し見てあげてもいいと思う」

すぐに返答が返ってくる様子はない。せっかく息抜きに来たのに申し訳ないことをしてしまった。……………それでも。これだけは話して

おきたかったんだ。

「息抜きを台無しにして悪かったな」

コーヒー一杯だけしか飲んでないが、とりあえず1000円だけテーブルに置いて俺は羽沢珈琲店を後にした。

ある日の朝。

今日起こしに来たのは日菜だった。遅刻しない程度には早く起きることが出来たな。と、思いながら普通に日菜の前で着替えている。

「チケットは売れてるのか？」

「んーあんまりかな」

「……無理もないか」

チケットの手売りを始めて今日で3日くらい経つらしい。だが売れ行きはあんまりらしく、その上酷い言葉も浴びせられる始末。事情を知っている者からすると気分のいい情報ではない。さらに幼なじみともあればな。

「それと最近千聖ちゃんの様子が少しおかしいんだよねー」

「そうなのか？」

「うん。迷ってるって感じ」

まさか羽沢珈琲店で話したことをまだ引きずって……。そうだとしても、少しは考えていい事だと思う。なんだろうな。あの人なら自分で必ず答えを見つけられると思うんだ。

「大丈夫だろう。白鷺なら」

「ん？ うん。なんか知ってるって感じの言い方だね」

「前に羽沢珈琲店で相席してな」

「あーだから、千聖ちゃん迷ってるんだね」

「俺が何か言ったとはまだ言ってないんだが？」

制服をとりあえずの形で着た俺はそんなことを言いながら腕時計を付ける。

そういえば紘翔は今日は日直で早く行くって言ってたな。日菜の



ことを紹介するいい機会だと思ったが、仕方ない。  
「知ってるのに何も言わないとは思えないからねー」  
「今回の場合は白鷺から話を振ってきたんだ」  
「そっか。まあ大丈夫だよ。きつと」  
「どこから湧いてくるんだか」  
そつと日菜の頭に手を置いて部屋を後にした。  
「前は笑ったんだけどな……。全然笑ってくれないや」  
そんな思いに気づくことすら。俺は出来なかった。

## 駅前

日菜と話してから数日が経った頃。  
今日はとうとう書くスペースが無くなってしまったノートを買  
替えるために絃翔と駅前ショッピングモールへと立ち寄ってきた。  
「ノート書く意味なんてあるのか？」  
「それは書いてから言ってくれないかい？」  
「書く意味を見出せないから書いてないんだ」  
「せめて授業くらいはちゃんと聞きなよ」  
用事も済んだしとつとと帰りたいたいが……。ちようど駅の前  
に来たら、もれなく通り雨に捕まってしまった。傘はない。さてどう  
したものか……。  
そう考えていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。  
「チケット……。いかがですか?!」  
ノートを買う替える為が目的だが、別の目的として俺はこれを見  
に来た。実際にチケットを手売りしているところをな。  
「あれって……」  
「手売りしてるんだ。自分たちを知ってもらうためにな」  
日菜たちは流石に切り上げたのだろう。こんな土砂降りの中でも  
丸山は1人続けている。それほど次のライブにかける思いが強い  
だろう。

すると絃翔の視線が丸山ではなく、別の方へと向いた。おそらくは

……。

「どうして……あそこまでするのかしら」

「時代は手売りだからか？」

雨宿りしていると、話しかけてきたのはやはり白鷺千聖だった。手伝いに来たという感じは全くしない。むしろ止める気満々で来たんだらうな。無駄なことはやめろって。

「止めてやるな」

「なぜ？ こんなことをしても無駄だと思う」

他にもつといい考えがあるのだろう。白鷺の言う、確かな道が。それは文字通り”確かな道”で前に進むことが出来る素晴らしい道だとは思う。

白鷺の質問に返答を返していなかったな。お互い連絡先を知っているわけでもないし、かと言ってわざわざ連絡を取ることでもない。今ここで返答をしようか。

「努力はして当たり前。だけど必ず報われるわけじゃない。痛いほど白鷺の言うことはわかる。この目で見てきたから」

脳裏に思い浮かぶのは日々努力を積み重ねている人の姿。どれだけ努力を積み重ねても、あつという間に追い抜いていく影。それでも、めげずに立ち上がる姿を何度見てきた。

ある人は毎日欠かさずギターの練習を積み重ねた。

またある人は泥だらけになりながらも真っ直ぐボールを追いかけていた。

またある人は来る日も来る日も研究して、実験して失敗の繰り返しをしていた。

「できないことなんて本人が1番わかっていると思う。努力を積み重ねることではしか見つけれなかった。それ以外なものもないと思っ込んで。そんな奴がどんな困難に直面しても簡単に諦めると思うか？」

俺が見てきた丸山彩という人間も紗夜と同じだ。同じだからこそ……こうして近くに居る人間が放っておけなかったんだらう。そうであってほしい。

「確かな道も大事だ。その道の先はきつと成功だらう。でも……進ん

でいる間の経験も大事だと思う。どれだけうちのめされても。心折られても。それも1つの経験だから」

ある人が言っていた。

『経験ほど自分を成長させるものはない。それが失敗だろうが成功だろうが。結局自分の身に起きないと人は成長しないんだよ』

愚直に己の信念を貫いて進むことも一種の経験。必ず自分のためになる。それが成功に確実に結びつくわけではないというのが、残酷なところだが。

「だから聞きたかった。今の白鷺千聖はなんなのか。1個人の人間か。それとも：Pastel\*Palettesのメンバーか」

「私は……」

「仲間なら、他の道も示してあげられる。この業界を歩き続けてきた……白鷺千聖にしかできないことだと。俺はそう思う」

返答を返すと、少しの間考えこむ。そして——何も言わずに白鷺は丸山の元へと歩いて行った。

道を示すのはとても難しい。幾度となく俺は経験してきたが、やっぱり間違ふことの方が多い。教えたことも正しいかなんてわからない。それでも……多少なりとも、その人のためになるのなら。俺は嬉しい。

「本当に……すごいと思う」

「急にどうした？」

チケットを配る2人を眺めながら返事を返した。

「普段の言動からはとても思い付かないようなことを言う。その言葉は自分の意志があつて、とても重い」

「買い被りすぎだ。ただ俺は丸山彩がどういう人間か教えただけさ」

そうだ……まだ逆転の目はある。ネットというのは良くも悪くも広がるのが早いからな。上手くいけば……いいや。あんな姿を見て上手くいかない方があり得ないな。

2人が手売りしている姿を何枚か写真を撮ってSNSへと捨て垢を作つてあげた。

「写真なんか撮つてどうするの？」

「ネットに上げる。今の2人なら大丈夫だろう」

そう言つて俺は駅にあるコンビニの方へと向かった。

「今度はどこ行くのさ」

「傘買ってくる」

通り雨なのはわかっているが、とつとと帰りたいたい。

### 帰り道

あれからすつかり雨がやんで暗くなった頃。おそらく学校の置き傘になるのであろう買った傘を持ちながら、紘翔と2人で歩いていた。

あの後すぐに解散して1人で夜ご飯を食べに行く予定だったが、紘翔が着いてきてくれた。いつもは1人だから少し新鮮な気分だったな。

「結局すぐやんじやつたね」

「こういう時もあるさ。置き傘にもすればいい」

家にはいつたい何本の傘があつただろう。そのうち学校に持つていかなないと溢れそうだ。まあ学校に置いておいてもそのうち無くなってゐるんだが。あるよな。置き傘取られる時。

「夕くんはパスパレのライブ行くの？」

「ああ。前は前日にチケット渡してきたからな。今回は早めに催促した」

「そっか。僕も気になるし、チケット買ってみようかな」

「後で日菜に頼んでおく」

「本当？　ありがとう」

今更1人2人増えたところで問題ないだろう……たぶん。あとは頼まれたことを日菜が忘れないことを祈るばかりだ。……こうして考えると幼なじみがアイドルっていうのも面白いな。

「やっぱりゆーくんなんだ！」

噂をすればなんとやら。突然現れたのはどうやら日菜のようだ。

「今帰りか？」

「うん！ そつちの人は友達？」

「そうだ。ちようどいい時に来てくれた。こつちは友達の——」

「あーっ！ 前に生徒手帳拾ってくれた人だよね？」

人の言葉を遮ったと思つたら、俺を押し退けて紘翔に近づいていった。そんな距離の詰めかたをしたら誰だつて引いてしまう。日菜はもつと人との接しかたをだな。

「覚えててくれたんだね。君が氷川日菜さん？」

俺は時折、紘翔が恐ろしく感じることもある。余程変な距離の詰めかたをされなければ、基本笑顔で接するからだ。今はまさにその状態。

「うん！ えつと……」

「僕は南雲紘翔。話は夕くんから聞いてるよ」

「そうなの？ あたしはゆーくんから聞いてないんだけどな」

「いつもパスパレの話ばかりするからだろ？」

「そーだっけ？」

そうなんだよ。これでもかかってくらいパスパレの話、自身のことばかり話している。楽しくて話したくなるのはわかるが、そういう言い方はよくないと思う。

なんて考えてると、2人は仲良さげに話し始めていた。

どうしてだろう。前から……一緒に居たような感覚がある。ずっと前からこの3人……いや。4人？ 違う……5人で居たような。

時折こういう上手く説明出来ない不思議な感覚がある。気になるはずなのに……ふとした出来事ですぐに忘れてしまう。

後1人は……誰だ？

「今度ひろくんのチケット持ってくるね」

ん？ 待て。

「ありがとう」

「距離感バグってるのか？ いきなりそんな呼び方」

「大丈夫だよ。気にしないし」

「だつてさ」

「ならいいが」

ここまで来るとどつちがすごいのかよくわからんな。まあ2人がいいなら特に口を出すこともないだろう。

家までの帰り道。

俺は2人が楽しげに話す背中を眺めていた。

## 第38話　FUTURE WORLD FES.

第38話　FUTURE WORLD FES.

CIRCLE　ロビー

Roseliaとしての練習が再開してから早くも数日が過ぎていた。その間にもいろいろあつて、時が流れるのはあつという間だったな。

紗夜たちはいつにも増して厳しい練習を重ねているらしく、練習後の今井とあこはへばっている。白金も疲れた様子は見せて居ないが、来た時よりかはぐったりしているな。残りの2人はわかるだろ？

「今日も延長かな？」

「だろうな。もうすぐフェスだし」

ロビーでぼーっと外を眺めていると、予約リストを眺めていた絃翔が声をかけてきた。

「ここ最近思ったことなんだが、仲良くなつて素が出てきたんだろう。意外と細かいことを注意してきて口うるさい。まるで紗夜みたいだに。」

「相変わらず気の抜けた顔でぼーっと外を眺めているのね」

「そうそうこう言う風に。」

「・・・人にはぼーっとする時間も必要なんだよ」

「なんで居るんだ？　練習は？　つうかなんでこんなタイミングの悪い時にいつも遭遇するんだろうか……。もはや才能なのでは？」

「お疲れ様、氷川さん。休憩？」

「ええ。少し外の空気を吸ってこようと思ったので」

「こうして2人が話してるの新鮮だな。たまに話してるのは見るんだが。改めて考えると絃翔が入ってからまだRoseliaとの絡みを俺は見えていない。俺が居ない所で意外と話してるのか？」

「おつ、今日もこの2人なんだねー」

「今度は今井が現れた。まだへばっている様子はない。これからなんだだろうな。大変なのは。」

「もしかして、南雲君が旭日君のお目付役？」

「あはは。たくんが僕の教育係なんだ」

「なるほど。悪い所ばかり学んじやダメだからね」

「どうも俺はサボリキャラが定着しているらしい。見てない所では結構働いてるんだからな？　主にメンバーが個性的の時だけだが。あえて挙げるなら市野木さん、早乙女、真宗。」

「でもこうして見ると南雲先輩の方が、出来る感じだなあ」

「おい、あこ。人を見た目で判断するのは良くないぞ」

「そ……そうだよ、あこちゃん。旭日さんも……頑張ってる……思うよ」

「思うって白金……。そこは頑張ってるだけで良かったんだぞ。思うじゃ全くフォローになっていない。むしろ怪しさが高まったぞ。」

「ライブの時はしっかりしてるのだから、普段からやればいいのよ」

「あのな湊……人をダメ人間みたいに言ってるが、俺は個性的なメンバーのお目付役なんだ。だから頑張ってる」

「揃いも揃って人を毎回ダメ人間いじり。本心じゃないにしても、このいじりはいい加減飽きた。まあ若干一名だけ本心な気もしくはないんだが。」

呆れてため息を吐き出すと、なぜか絃翔がくすくす笑っていた。

「ごめん。いじられてるたくんがなんか新鮮で」

「お前な。弁解するの大変なんだぞ？」

「大丈夫大丈夫。旭日君の頑張りは知ってるから」

「今更フォロー入れても遅いからな、今井。見ろ、湊と紗夜に関してはフォローする気なんてサラサラない。俺はマゾじゃないからどれだけいじめても喜ばんぞ。」

「それよりも休憩早く行ってきたらどうだ？」

「そうね。お邪魔したわ」

「南雲さん、夕をお願いします」

「頼まんでも今日はサボらないから。」

「うん。任せて」

「おいおい」

任されるんじゃないよ。



嵐が去って行くように5人はC i R C L Eを一旦出て行った。意外にも紘翔はR o s e l i aと結構話すらしい。紗夜に俺を任せられる程に信頼があるようだ。……解せん。

紗夜と紘翔は気が合うのかもな。主に俺に対するおせっかいだが。みんなには自分が芸能人の息子だとは伝えたのだろうか。仮に伝えたとしてもあの5人の態度が変わるとは思えない。

「真剣な顔してどうしたの？」

「いや……なんでもない。紘翔も休憩行ったらどうだ？」

「ん〜。そうしようかな」

ここで俺が行ったら面倒なことになりそうだ。またサボってるだの、本当に休憩なのか？ だの聞いてくるに違いない。

俺は一旦休憩のためにロビーを離れる紘翔を見送り、仕事に戻った。

#### 旭日家 自室

バイト終わり。いつものようにベランダで空を眺めていた。明日はR o s e l i aがコンテストに出る日。だから早く寝て、寝坊しないようにしないといけないんだが。

全く眠くない。それどころか逆に目が冴えてきた。明日のことを考えれば考えるほど、不安になる。コンテストに受かって夢が叶った時、R o s e l i aはどうなるんだろうか。解散という言葉が頭の中にチラつく。

それがなかったらどうなるんだ。音楽の頂点って言うくらいだし、今度は世界とか言い出しそうだな。それともメジャーデビューか。でも湊はメジャーを毛嫌いしていたよな。

なににしても、この先のことはいくら考えてもわからない。決めるのは俺じゃないのにこんなにも考えてしまうのは、やはりR o s e l i aの将来が楽しみなんだろう。

何が起こって。

何に影響を与えて。

どう変わっていくのだろう。

ふと手に持っていたスマホに通知が届く。その通知は俺、智紀、涼子の3人のグループに新たに絃翔を加えたグループに来ているようだ。バイトが一緒になったこととか割と智紀には話していたからな。受け入れが早いようだ。

『よろしくな！話は夕から聞いている』

『珍しいことだよ？夕君から仲良くなったなんて聞くの』

『そうなの？』

『気が合う奴なんてそうそう居ないだろ』

『出た』

『いつもそう言ってるよね』

『まあ仲良くしてやってくれよ！』

お前達は俺の保護者か何かか？人をコミュ症みたいに言いやがって。あながち間違っていないのがまた腹が立つところだな。

『明日駅前に集合？』

『夕君が起きれるなら』

『朝じやないから平気だ。絃翔の家近いから一緒に行くし』

『なぬっ?!』

『じゃあ寝てたら叩き起こしてでも連れてきてね』

『任せて』

任せてじゃないんだ、絃翔。言っておくが朝じやなければ気合いで起きれる。いやこれは真面目に。

明日は遅れるわけにはいかないからな。そんなことをしたら最後だ。

ベランダで1人連絡を取っていると、いつもの音が聞こえてきた。

一応ベランダに出てきた相手を確認する。

「明日は大丈夫そうか？」

「そう見えるかしら？」

「いいや……いよいよだもんな。ずっと目指してたフェスよ予選」

緊張あるいはワクワクがないわけがない。明日は紗夜が……いや。紗夜たちが目指しているFUTURE WORLD FES.

の予選。これに通ればフェスに出れる。目標が叶うんだ。

「夕は緊張することはある?」

「俺だって人間だ。ある」

「例えば...?」

「氷川家に夜ご飯を食べに行く時」

「真面目に答えて」

いや、おじさんの視線。言葉1つ1つから感じ取れる。娘に変なことをしてみろ? 命の補償はないからな? と。こつちとしては平手打ちをされたりしてるんだがな……。

「大真面目だって。それ以外なんて……大したことじゃない。生きるか死ぬかの瀬戸際以上に緊張なんてない」

「……っ! ごめんなさい……」

そんな雰囲気にするつもりはなかったが。悪いことをしてしまった。

「謝るのはこつちだ。気にしてないと言えば嘘になるが、今は振り返ってる場合じゃない」

「(本当に……変わったわね。良い意味でも。悪い意味でも。でもそれは……ある意味変われるという証拠)」

急に黙り込んでしまった。気にするなという方が無理だったか。

「紗夜?」

「いいえ。なんでもないわ」

「なら……いいが」

「もう少し練習するから。また」

「こん詰めすぎるなよ」

「わかっているわ」

部屋へと戻っていく紗夜の後ろ姿を眺める。何度その背中を見送っただろう。そう思うほどここで話した回数が多い。

明日はちゃんと起きないとな。

朝。なんとか起きることが出来た。

マンシヨンの敷地を出てすぐの壁に寄りかかって待っていた。いつも絃翔を待つている場所だ。

結局あれから考えごとばかりしていてすぐには眠れなかった。それでも起きることが出来たのは、少しばかり楽しみだったからだろう。

「おはよう、タくん」

「おはよう。時間通りだな」

「君の方こそ」

「なんとかな。とりあえず行くか」

智紀と涼子と待ち合わせをしている駅の方へと歩き始めた。

「よく寝坊しなかったね」

「今回はな。紗夜たちになにされるかわかったもんじゃない」

「あはは。ちよつと怖そうだね」

「ちよつとじゃないだろ」

紗夜にはお小言をたくさんもらうだろうが、湊はなにをしてくるか本当にわからない。辛辣な言葉を浴びせられそうだ。そんなものは一部の人しか喜ばない。

「タくんはペンライト持ってきた？」

「俺が振るような人に見えるか？」

「見えないけど……いちおう持ってきてるかなって」

「いちおうな」

シオルダーバックに2本ほど詰め込んできたが、おそらく振ることはないだろう。いつもの癖でぼーっと眺めることになりそうだ。その方が集中して聴くことも出来るしな。

「絃翔はライブに行くのは初めてか？」

「ううん。姫さん……馴染みのある名前だと東雲早希さんのライブには何回かお母さんで行ったことがあるよ」

「元々一緒に活動してたもんな。関係者席か？」

「そうそう。バレないかひやひやするよ」

引退したとはいえD i V Aが2人揃っていたらそうなる。今は活

動を控えているとはいえ、日菜も芸能人ということは変わりない。一緒に出かけたりするのも苦労しそうだ。

「そうだ。話は変わるんだけど、1つ聞いてもいいかい？」

「なんだ？」

「氷川さんって双子だったりする？」

「そうか。まだ紘翔には話していなかったな。」

「妹が居る。それがどうかしたのか？」

「君と仲良くなる前、家の前で生徒手帳拾って渡したんだけど、もしかしたらと思つて」

「生徒手帳……。日菜がそんなことを言ってたが、拾ってくれたのは紘翔か」

以前日菜が生徒手帳を落としたという話をしてくれた。まさか落としたことすらわからなかったと言つてた時はいよいよ心配したな。拾ってくれたのが紘翔だったからよかったものの。他の人だったらどうなつていたか。

「迷惑かけたな」

「ううん。すごい元気な子だよな」

「あれでも同じ年なんだけどな」

「良いことだと、僕は思うけど？」

「ないよりはマシか。俺みたいに」

「君は表情がないだけだと思うけど……」

まさかそんな接点があつたとは。……紗夜のことはそのうち気づく時が来るだろうな。話すのはその時にしよう。

## 駅前

「おーす、2人とも」

待ち合わせの時間前に2人は来ていた。まあ当たり前なんだが。

「ボールは一緒じゃないのか？」

「普通一緒じゃねえだろ。オレをなんだと思つてるんだよ」

「サッカーバカ」

駅に着くなり俺と涼子からいじられる智紀。こうして休日と一緒にでかけるのはなんだか新鮮な気分だ。

「ひでーよコイツら。助けてくれー絃翔」

「あはは…。楽しそうでいいと思うよ?」

「いつまでもふざけてないで行くぞ」

「混みそうだしね」

1 いじりをしてから行くのがお決まりみたいなもんだ。

早速移動を始めるとなにやら後ろで智紀が絃翔に泣きついてる。

「いつもこんな扱いだからよー。毎晩枕を濡らしてるんだぜ?」

「そ、そうなの?」

「嘘をつくな」

「布団入ったらすぐ寝てるくせに」

「部活で疲れるんだからしようがないだろ?!」

この通りしようもないやりとりをしながら改札を抜けてホームへと向かった。休日だからか人が多い。乗る時は少し窮屈になりそうだな。あのぎゆうぎゆうな感じはあまり好きではない。

「予選通るかな?」

ホームで電車が来るのを待っていると、涼子がそんなことを聞いてきた。

「どうだろうな。実際に弾いている側でもないし、たくさんバンドを見てきたわけでもないからわからない。だが、1つ言えることはある」

「どんなこと?」

「予選を通ってもおかしくはない實力だつてことだ」

実際通ってしまったばいいんだろ?…。やはりその先が不安になる。目標がなくなった時、あの5人はどうするんだ? 解散か。

それとも目標がないまま突き進むか。それを決めるのは俺ではないから、なんとも言えないが……………。

少なくとも紗夜は……………。

「あ、今紗夜ちゃんのこと考えた?」

「んなわけあるか。通るかの話になんて紗夜が出てくるんだ」  
「当てずっぽうじゃ無理か〜」

外れてはないが俺の方が1枚上手だった。紗夜のことを考えてる時に癖でもあるんだろうか……………。

「紗夜ちゃんだけってわけじゃないけど、みんな緊張してるよね。本当に大きいフェスだし」

「良い緊張にするか、悪い緊張にするかは本人次第だからな。まあ心配しなくても大丈夫だろう」

「そうだね。今のRoseliaなら」

涼子の言う通り。今のRoseliaなら……………きつと。

#### フェス予選会場

「割と人いるのな」

「迷子になるなよ?」

「この人の数で迷子にはならないだろ」

会場に着いたはいいが智紀の言う通り。割と人が多い。普通にプロも出るんだから当たり前と言えば当たり前なんだが……………。

「夕くん、ぼーっとしていると迷子になるよ?」

「悪い。そんなつもりじゃなかったんだが」

この後、4人揃った状態で会場内に入り、自分の席に着くことができた。

そして始まるまで静かに待った。



ざわつく会場の中で、旭日夕は1人ステージをぼーっと眺めていた。やはり舞台袖とは違う。向こうから見る客席もより違う。Circleとは違ってお客さんの数も。

普段のライブとは1番違うのはやはり緊張感だろう。予選に通れば夢だったFUTURE WORLD FES.に出場。晴れて夢が叶う。

先のことを考えてもしようがないはずなのに。なぜこんなにも考えしまっただろうか。

予選が始まり数バンドが演奏したあと。

「次……だね」

「ああ。泣いても笑っても今年の挑戦はこの1回きりだ」

ステージにRoseeliaが現れると会場がざわつく。夕は何も手に持たず腕を組んでじつとステージを見る。

そして夢への挑戦が今——始まった。

今までにない5人の音に夕は目が離せなかった。

ライブを舞台袖から見ることがほとんどだからか。この大勢の観客の中に混じって見るといのはとても新鮮に感じる。と同時に少し遠い存在になってしまったようにも感じていた。

一瞬。ほんの一瞬だけ同じような光景が頭の中に映し出される。気になるようなレベルじゃなかったからか。特に気にすることなくライブを見続ける。

もしかすると本当に夢が叶うのかもしれない。日菜に負けなために目標としてきた夢に手を——。

『結局バレたが、どうするんだ？ ギター、続けるのか？』

『ええ。まだ日菜が真似をすると決まったわけではないわ。それに………夢があるの』

『夢？』

『FUTURE WORLD FES.。これに出て見返す。負けな



いために』

『その夢で本当に……いや。頑張らないとな』

あの時。その先の言葉を伝えていれば。変わったんだろうか。日菜に対する気持ちが出来たい夢への考え方が。

いいの？ 見返すためだけにFUTURE WORLD FE

S. に出るって思いで。

「夕くん？ どうかしたの？」

「いや……いつもと違う感じだなって」

「いつもは舞台袖だもんね」

「ああ」

いつからだろうか。咄嗟に嘘をつくことに慣れてしまったのは。

ライブ終了後。

夕達は結果の紙が張り出されているボードの近くに居た。どんなバンドが通過したのか気になる人達がざわざわと騒いでいる。自分の好きなバンドが通っている人は喜び。逆に落ちた人は落ち込んでいる。1番悔しいのは本人達だろうが、応援している方もなかなか辛いものがある。

「いい演奏だったんだけどね」

「何がダメだったんだろう」

メインステージに立てるバンド名にRoseliaはなかった。入賞筆頭候補と言われていただけであって驚いている人達も多い。

その人混みを眺める2人の女性。1人は壁によりかかり腕を組んでいる長い黒髪のポニーテール。さらにキャップを被っている。もう1人はオフィスカジュアルの服装の女性で、ただ立っているだけだ。

「Roselia落ちましたね」

「想定範囲内だわ。落とした審査員とは気が合うかもね」

「どういう意味でしょうか」

夕も同じように人混みを眺めいるだけで口を開かない。

「夕くんはどうしてだと思っ？」

「さあな。でも……今回はよかったんじゃないか？」

「え?! それってどういう……」

予想外にも落ちた方がよかったと言い始めた。ふざけている様子はない。むしろ真剣な目で絃翔たちに向けて話している。

「個人的なエゴだけど、入賞してメインステージよりも。優勝してメインステージに立ってほしいからな」

「入賞でメインに立たせるよりも、優勝でメインに立たせてあげたいと私は思った」

彼。そして彼女らしい答えに各々も納得した様子。確かに入賞で立つメインステージよりも、優勝で立つメインステージの方が彼女達にとっても嬉しいだろう。今回のライブにはそれだけ大きな可能性を感じたという事だ。少なくともそう思う人は2人ではない。フェスの審査員も同じなのだろう。

「そろそろ帰ろう。腹減ったし」

「そうだね。帰りにファミレス寄る？」

「ファミレスか。僕あんまり行ったことないんだ」

「じゃあファミレスだなっ！ なに食おっかな」

「程々しておくよ。いつも4品くらい頼んでるだから」

そう言うと夕たちは出口の方へと歩き始めた。その直後。ボードの前に居た人たちがざわざわ騒ぎ始めたが、特に気にも止めないで歩く夕。少しだけ気になったのだろう。絃翔だけは後ろをチラッとだけ見た。

「(あの人はもしかして……:……姫さん? でもどうしてここに)」

考えてもわからない疑問を頭の片隅にしまい。再び前を見る絃翔。人混みの中心に居たのは間違いなく元D i V Aの東雲早希―本名は小鳥遊姫。

また彼女も絃翔の後ろ姿と、その前を歩く青年の背中を目で追っていた。不思議とあの青年を見てしまう。

「(絃翔……? 亜愛理から聞いていた通り、友達と一緒にのようね)」

視線を外すと、小鳥遊姫は取り囲むファン達の間を抜けて反対方向へと歩みを進めた。

旭日家 自室 ベランダ

夜中。ベランダの手すりに寄りかかって俺は空を眺めていた。正直言うと眠れないんだ。別に少し食べ過ぎて、帰って来て速攻寝落ちしたわけじゃないからな。さつきまで寝てたわけじゃ……俺はいつたい誰に言い訳してるんだろう。

今日のライブは今まで聴いた中で最高のもの。それでも俺はフェスに落ちて少し安心してしまっている。

最低なのはわかってる。それでも……紗夜達には優勝してメイ NSTEージに立ってほしいんだ。あの5人でしか出せない音で。来年には。

紗夜の夢が。叶うといいな。

俺は……夢なんてあつただろうか。

いくら考えても答えなんて出やしない。少なくとも日菜と分かり合ってほしいとは思う。以前のように……俺はその時……どうしてるんだろうな。

ぼーっと空を眺めていると、静かに窓が開く音が聞こえてきた。

「……夕？ こんな時間にどうしたのよ」

「それはこっちのセリフだ……お互い眠れないんだな」

小さな声で話しかけてきた紗夜。たまにこうして夜中に外に出ることがあるが、今日はかなり珍しいパターンだ。もう12時過ぎなのにこうして話してるんだからな。

「……感想。ずいぶん少ないのね」

「いや、あれだ。語彙力なくなるくらい、いい演奏だったってことだ」  
「そのいい演奏でも……フェスには出られなかった」

気にしてないわけじゃないよな。審査員に何を言われたかまではわからない。でも納得のいく答えはもらったんだろう。なんでメインス

テージに立てなかったのか。理由も含めて。

納得いかない理由だったらもう少し怒ってるだろうしな。特に湊辺りが。俺に八つ当たりをしかねないからな。本当に。

「来年こそは……だな」

「ええ。もうこんな思いはしたくないもの」

先は長いようで短い。毎日充実していれば1年なんてあっという間だろう。でも、何を学んで進んで行くかによってフェスに出られるかどうかは変わってくると思う。なんとなく過ごしていたら無理だろうな。

今までのRoseliaを見てみるとそんなことはない。結成したばかりだというのに、練習量はかなりのものだし。

「あなたは……なんのために私達を手伝っているの？」

「なんのために……か」

「(少なくとも私は……日菜に負けないため。湊さんや今井さん達だって。何かあるはず)」

なんで手伝ってるんだろうな。頼まれたから？ 最初はそうだった。でも今は……。

「理由は特にないな。それに手伝いって言うほどのこともしてないし」

「そう……あなたらしい。いえ、おばさんらしい考えね」

全部を真似するわけじゃない。少なくとも母さんが今まで貫いてきた想いを、ちゃんと残したい。それが……恩返しになるかはわからないけど。

「フェスのことだけじゃない。日菜のとも……少しずつ向き合わないとな」

「ええ……どう足掻いても私は日菜の姉ということは変わらないもの」

「それを言ったら俺も変わらな。2人の幼なじみってことは」「知らない人の方が多いと思うけれど」

実際そうなんだよな。学校も違う。帰りもバラバラなことがほとんど。休日もそこまで一緒に出かけたりはしない。話したとしても

驚かれることの方が多し。

それに……よく言われる。美人と可愛い幼なじみでいいなって。  
「(夕と幼なじみだつて言うど、だいたいの人が驚くけれど……みんなそれだけ。知られてほしい気持ちと……知られてほしくない気持ちが……私の中にはある。もしかしたらそのうち……)」

お互い話さない無言の時間。特に気まずいともなんとも思わない。  
むしろ心地いい時間だ。

「さてと。あんまり夜風に当たると冷えるし、そろそろ戻るか」

「ええ。おやすみなさい」

「おやすみ。また紗夜の音、聴かせてくれ」

そうだ。もう一つ言い忘れていたことがあった。

「それと……むすつとしてるより、笑つてる方がいいと思う」

それだけ言つて俺はあくびをしながら部屋に戻つて行つた。明日はバイトないし、これは昼までコースだな。

そして紗夜がしばらくベランダに居たことは知る由もない。

「いつも不意なんだから……」

## 第39話 ハッピーラッキー

第39話 ハッピーラッキー

羽沢珈琲店

放課後。

特に用事もない俺は羽沢珈琲店で珍しくゆっくりしていた。今日は1人になれると思っただけでパソコンとポケットWi-Fiを持参しているからな。とても有意義な時間を過ごさせている。

今はハロー、ハッピーワールド！のライブについて振り返っている。いろんな意味を含めて忘れることが出来ないライブだったからな。

本番30前の楽屋で参加者が居るか絃翔とダブルチェックをしている時。セトリリストが間違っていたり、ギターの弦が切れたりと参加者側が大変だったという事態に。

そんなことになれば当然不安な気持ちが伝染する。もちろんハロハピも例外ではない。

松原と北沢が揃って緊張して。瀬田は人前でやるような行為ではない緊張のほぐし方をしようとしていたな。

確か……鼻の穴を大きく広げて、ガニ股で……とかなんとか。舞台とはまた大きく違っているし、緊張も無理もない。あの絃翔が本当に大丈夫か俺に確認してくるくらいは大変だったな。

そしていつの間にか居た真希那さん含めた黒服の人たちが、ミッシェル（おそらく鋼太さんが改造した特別使用）を持ってきて、奥沢が着替えて。このミッシェルの登場が意外にも周りを含めて緊張をほぐしたらしい。本当になにがトリガーになるのかわからないと思っただけだ。

俺はライブが始まるまで知らなかった。これがまだ序の口だということ。

始まってみれば不思議なことが起り、ある意味度肝を抜かれた。ちやんとライブでの禁止行為を説明したか不安にさせるほど、弦巻ころという人間の行動は十分すぎた。

開始1分も経たないうちに客席へとダイブ。あの時程、天堂さんの鋭い視線が俺に刺さったことはなかった……。隣に居た絃翔も同様だったろうな。

だがハロー、ハッピーワールド！のライブは意外にもお客さんに好評だった。舞台袖からでもわかる程、どんどん笑顔に変わっていったのを今でも鮮明に覚えている。

そのライブに俺も救われたのは事実だ。好評だったからよかったものの、危うく怒られるところだった。ちゃんと説明はしたんだがな。こころの行動力の予測が不十分でこんなことに…………。

最後に奥沢がすごい謝ってくれたが、そこは気持ちだけ受け取った。説明不足ということにして俺が注意を受けて終わらせた。

ライブというのは本当にいろんな形がある。それをよく思い知ったライブだった。

ハロハピのライブを一通り振り返り終わった直後。ドアの開く音とベルが聞こえてきた。お客さんがお店に入ってきたようだ。

「いらっしやいませ。2名様でよろしいでしょうか」

「はい……。あの、そこ人と相席をお願いします。知り合いなので」ととてもとても嫌な予感。それに聞き覚えのある声だ。

「千聖ちゃんも旭日君と知り合いなの？」

「ええ。そうよ」

もう1人も聞き覚えのある声だ。というか松原と白鷺は友達だと言ったことをすっかり忘れていた。

後ろに振り返ると、ニコニコ笑顔を浮かべている白鷺の姿がそこにはあった。ちよūdいおもちやを見つけたみたいだ。

「突然相席とはどういう要件だ」

「特にないわ。そこに旭日くんが居ただけ」

俺の前に松原が座り、なぜか左隣に白鷺が座った。2人が隣で良く

ないか？　と思うのは俺だけだろうか。そんなことはないはず。

「ご注文はお決まりになったら、お呼びください」

店員さんがこの場を後にしてからメニューを見始める2人をよそに、俺は無くなりかけのコーヒーを飲み干して受け皿に戻した。

「たまに羽丘の人と一緒によね」

「まあな。勝手に相席してくるんだよ」

「ごめんね？　急に押しかけて」

「……構わない。特に何かをしていたわけでもないし」

ついさつきまでハロハピのライブについて考えていたんだが。感想については後で伝えるとしよう。

スペースを取ってしまうパソコンを一旦閉じてカバンへとしまった。

「旭日くんはコーヒー頼むのかしら？」

「そう……だな。頼む」

「花音、決まったら言ってちょうだい」

「うん」

流れるように一緒にお茶をすることになっているが、よくよく考えたら芸能人とお茶をすることに……。最近感覚がバグってきたな。

「それでね、もう何度もミッシェルは美咲ちゃんだつて説明しているのに、こころちゃん達全然わからなくて。気の毒だなんて思うけど、私つい笑っちゃって……」

あれから本当にお喋りをしながらお茶をしている。俺はただひたすら聞いているだけだが。

……さつきからずっと松原が1人話している状況だ。どこか楽しそうに話す彼女を見ると、話を途中で切ってしまうのは申し訳ないと思う。

「つて、ご、ごめん……っ。私、しゃべりすぎたよね！　千聖ちゃん、



お仕事行く時間になっちゃった!？」

「どうやらこの後仕事らしい。バイトとは違うだろうし大変なんだろう。」

「ううん違うの。花音、あなた少し変わったわね。いつも私の話を聞いてくれてたけど……花音がこんなに自分の話をしてくれて、すごく嬉しい」

「ここ最近はずっと変わった」という言葉をよく聞く。それぞれ何かしらの問題を抱えていて。それが浮き彫りになって。

変わったという点では白鷺も同様だ。

「私……変わった?」

「……ええ」

「え、へへっ。本当? じゃあやっぱり、バンドのおかげかも……っ!」

バンド……あのとんでもない集団の中に入れば確かになにかしらは変わりそうだな……。といいつつも、そのとんでもない集団に入るよう背中を押したのは俺だな。

「ハッピー! ラッキー! スマイル! イエーイ!!」

「……ハッピー、ラッキー……?」

「スマイル……? イエーイ?」

「なんだそれは。これは良い方向に変わっているのだろうか……。少し、いや。かなり不安になってきた。」

「バンドの掛け声なんだっ。千聖ちゃんと旭日君も一緒にやる?」

「ハッピー! ラッキー! スマイル! イエーイ!!」

「……え、遠慮させてもらおうわ」

苦笑いを浮かべて断る横で俺は。

「右に同じくと言いたいが、やってもいいな」

「えっ……?!」

「冗談だ」

「表情一つ変えないで言うのを冗談とは受け取れないわよ……」

「そこまで信頼関係がない中でのボケはまずかったようだ。」

「私、お手洗い行ってくるね」

「ええ。行ってらっしゃい」

席を離れる松原を見送り、遠くを眺めるように視線を前に向けた。

「この前は悪かったな。仲良くもない奴からいろいろ言つて」

「いいえ。私は話せてよかったと思つているわ」

てつきり何か言われるものだと思つていたから、返つてきた答えは少し意外なものだった。

「芸能人だと知ると変に気を使われたりするのよ。まるで腫れ物を扱うような……。中にはサイン目当ての子だつて居たわ」

似ている。絃翔と。浮かべる表情も。声音も。白鷺千聖も1人の人間としてなかなか見てもらえなかつたんだろう。普通の友達がただ……ほしいだけなのに。

「それでも旭日君は1人の人間として話してくれた。本当に似ていると思う。陽子先生に」

時折、自分の行いが正しいのか。わからなくなる。そもそも問題、全ての行動が正しいのかなんてわからない。

それを決められる者なんていないと思つてる。物事によつて多数が正しかったり、少数が正しい世界だつたりする以上は。

「旭日君？」

「なんでもない。似ているという言葉だけで十分ありがたいと思つただけだ」

「そう。見かけによらずつて言葉を付け忘れたわ」

「おい……と言いたいが、否定はしない」

くすくす笑う横でコーヒをグツと飲み干し、静かに受け皿に乗せる。

俺の話はいいとして。さっきの話の続きを聞くとしよう。

「話を戻すが、白鷺もそうだったんだな」

「も？ つてことは、旭日君もそうなのかしら？」

俺はまた違った意味でな。幼なじみ目当てに近寄ってくる奴らも中には居た。

「俺じゃなくて友達がな。親が元D i V Aの人なんだ。南雲亜愛理さん」

「息子さんが居るとは聞いていたけど……まさか、あなたが友達とは」「そっちの方がびっくりしたか？」

「冗談よ」

なんだその友達居たのかみたいな感じは。すごく多いわけではないが、それなりに友達はある。昔よりはずっと多い。それに今は相棒だっている。

話していると松原が戻ってきたようだ。

「お待たせ。なに話してたの？」

「旭日君は友達が少ないって話よ」

「そんな話ではなかった。それに白鷺には言われたくないな」

「あら、私は多くの友人よりも親しい友達が居れば十分よ」

にこにこ笑いながら話しているが、本当にそこがしれないな。だが、言っていることはとても共感できる。俺も多くの友達を作ろうと思う人間ではなかったし。今は必然的に増えていっただけであつて…………。

「そうだ。2人に聞きたいことがある」

「聞きたいこと？」

「母さんのことだ。どんな話をしたのか……どんな思い出があるのかを。聞きたい」

母さんの目線からじゃなく。話し相手の目線から写る母さんのことをもつと知りたい。

「長くなるわよ？」

「私も長くなっちゃうかも」

「構わない」

2人からはどんな話が聞けるんだろうな。

C i R C L E    ロビー

次の日の放課後。

今日は割とめんどくさいコンビが揃っている。気がつけばロビー

にいない海藤さん（今頃サボっているのか別の仕事をしているのだろう）。適当なことが大嫌いな鈴音（その居ない人に対して少しイライラ気味）。

働く人が働かない人を注意してくれるのは全然構わない。だがこの2人はそこがめんどくさいわけでないんだ。

「先程、海藤さんがスタジオの方に行きましたけど、戻ってくるの遅くないですか?」

「いつものことだ。そうイライラするな」

次行われるライブの詳細、その次のライブに出演してくれそうなバンドのリスト、そろそろ交換した方が良さそうな備品のリスト、他にも多数の資料を1つ1つ眺めながら答える。

「いつまでその資料見ているんですか?」

「誰にどんな仕事を振ろうか考えてるんだ。適当に振ると大変なのは俺だからな」

ミスした人の尻拭い。天堂さんからのお叱り。なぜまりなさんではないのかは不思議なところだが。あとは任せて狩場さんにも迷惑がかかってしまう。

「鈴音は基本真宗とセットな」

「なぜですか!? 意義ありです!」

本当に真宗と仲が悪いな。喧嘩するほどなんとやらではなくて、シンプルに仲が悪いのはどうしようもない。それでもセットなのは別の理由がある。

「文句を言うな。仕事が出来るからこそ真宗とセットなんだ。フオーを出来るのはお前しかない」

「……わ、わかっていきますよ。そのくらい」

結構簡単に言いくるめられるんだな。実は鈴音ユキという人物は褒めることで割と言うことを聞いてくれる。褒めて伸びるタイプだ。「悪いんだが備品が置いてある所にいつてこのリストのものがあるのか確認してきてもらえるか?」

「わかりました。受付は任せましたよ」

「そこは海藤さんに頼むさ」

気分が良いのか少しスキップ気味で歩いていく鈴音を見送ってから少しすると、海藤さんが戻ってきた。と、言うよりは戻ってこれたと言う方が正しい。

「いやー悪いね、夕君」

「今度はどこ行つてたんですか?」

「まりなさんの手伝い」

ここに鈴音が居たら今頃ぎやーぎやー騒いでいた頃だろうな。それがめんどくさくてロビーから離れてもらったわけだ。

「せめて俺に言つてからにしてください」

「夕君の方が後から入つたはずなのに最近君の指示に従つてばかりだなんて考えたらやるせなくてね」

「持ち場を離れるからかと。天堂さんもよく愚痴ってますよ?」

「奈菜さんが? これはいいよいよマズいな」

6 割冗談。4 割本当つてところだな。愚痴つてはいたけれど、今度持ち場を離れたら1発グーを入れてやろうと言つていた。時には真実をそのまま伝えるよりも偽つた方が良くもある。

「そのうちグーパンチされそうだからちやんとやろう」

残念ながらグーされそうですよ。

「よし、夕君。俺に仕事をくれないか?」

「じゃあロビーに居てください」

「同じ場所でじっとしているのが苦手な俺にかい?」

「グーパンチされたいんですか? それなら話は別ですが」

「わかつたわかつた」

とりあえず資料とワイヤレススピーカーを持ってロビーを後にした。

本当に大丈夫だろうか……………。

時は流れて1時間以上が経過した頃。

結構前にお客さんがスタジオから出ていったので、そのスタジオへ

海藤さんを向かわせたんだが……。やはりすぐには帰ってこない。本当にあの人はマイペースだ。そのうち戻って来るだろうしいいか。』  
『というところで、急遽1バンドだけ探せないかと』

『なるほどな。当てがあれば全然かまわないと思う』

なにやら天堂さんと狩場さんが話しながらロビーに訪れたようだ。

「ん、ちようどいいところに」

「なんですか？」

「次のライブで1枠余ってしまったね」

「旭日に当てはないかと思ってな」

当てか……。割とあるんだがこういう時はどのバンドに声をかければいいんだろうか。無難にアフグロ……。もありだが、ここは最近あつちこつちでライブをしているというあのバンドなんていいかもな。いろいろ心配な点はあるが盛り上がることは間違いなしだ。

「ハロー、ハッピーワールド！　なんてどうですか？」

「旭日の口からそのバンド名が第一声で出てくるとは」

「最近いろんなところでライブをしているようですし、なにより盛り上がると思います」

「問題を起さなければの話だがな」

「そこは祈るばかりですね」

まあ祈ったところではある。あのところがいい具合のライブなんてやる方が難しい。極端だがそこが良いところと鋼太さんと片瀬兄妹は言っていた。

「祈ったところでな気もするが良いと思う。何かあったら責任はオレが取ろう」

「なら決まりですね。旭日、オフアアを頼む」

「それともしダメだった時の保険はちゃんと用意しておいてくれ」

「わかりました」

保健か……。そこら辺はどうかなるだろう。そうと決まれば早速聞いてみるとするか。

「海藤さんがそのうち戻ってくるので、俺はスタジオ行ってきます」

「わかった。ずいぶん戻りが遅いみたいだから締めておくか」

「程々に頼むぞ、天堂」  
海藤さん。なんとというか……その。頑張ってください。

## 第40話 束の間の日常

第40話 束の間の日常

CIRCLE ロビー

「聞いてよ旭日君！」

「な、なんだ急に」

放課後のバイトをしている最中、ロビーに来るなりいきなり呼び止められた。この感じきつと嬉しいことがあったんだろうな。

「お、おはようございます！」

少し遅れてやってきたのは真宗だ。コイツは萩野でも緊張する。天堂さん、鈴音、早乙女以外は比較的話しやすいと思うんだが……いかんせんまだ上手くないかない。

「お疲れさま、真宗君」

「今日は頑張れよ」

「が、頑張ります！」

「やる気だけは人1倍なんだけどなく」

「大事なことだ」

すぐサボりに行ってしまいう人も居るわけだしな。

「それで話ってなんだ？」

「そうそう！ この前、駅前のショッピングモールに行った時に居たの！」

「……誰が？」

「千聖ちゃん！ 白鷺千聖ちゃんと丸山彩ちゃんがチケット手売りしてて！」

あれを見ていたということは……。これは少しまずいかもしれない。

「その時ね。南雲君と旭日君見たんだけど……もしかして千聖ちゃん……」

ついに俺も人生の終点が見えてしまった。白鷺千聖の大ファンな萩野が俺たちの関係を知ってしまった今、生きて帰るといふ選択肢は残されていな——。



「彩ちゃん目当てで駅前に住たの?!」

「真宗、とりあえず手分けしてスタジオの清掃行くぞ」

「え? せ、先輩のお話は……」

「そうだよ! 急にどうでもよくなることなんてある?!」

アホらしい。心配した俺がバカだった。そもそも萩野に知られても紹介してやればいいだけだ。そうすれば命が狙われる心配もない。待て、そもそもなぜ命を狙われるんだ?

「そういう時もある」

「旭日君はそういう時しかないよ?!」

「まあそう怒るな。こっちはヒヤヒヤしていたところを救われたんだ」

「え? どういうこと?」

「なんでもない」

1つ問題が解決…したのかはわからないが、今日は少し真面目に仕事をするとしよう。最近いろんなことがありすぎてぼーっとしている時間が多かったからな。

「今日は気分がいい。女性のお客さんの接客ノルマを5人にしよう」

「いつもは3人ですけど?!」

「5人までだったら罪を俺が被ろう。それを5回まで失敗出来ると思いうか、5回も迷惑をかけてしまうとと思うかは真宗次第だ」

「……っ! 頑張ります!」

白鷺千聖……一緒に居ても居なくても警戒すべき人物の1人だな。こうして本人がこの場に居ないのに危うく被害を受けるところだった。……これに関しては悪いのは萩野か。

そう言えばなぜ萩野が白鷺のファンなのかは聞いたことがなかったな。今度暇があれば聞いてみるとうしよう。

バイト後、暗い夜道を歩く。

今日の真宗は本当に頑張っていた。ノルマ5人を超えてなんと6人も女性のお客さんの接客をした。スムーズに出来たものは1つもなかったが、経験ってことを考えれば大きいと思う。うち1人は上原たちだった。

いつもは10時までバイトをするんだがな。最近はシフトに毎日入ってる上に10時まで居るもんだから逆に減らされた。こつちとしては問題はないんだが。家に帰ってもやることは特にないな。

そういえば最近日菜と話してな――。

「ゆーくんだ！ 今帰り？」

噂をすればなんとやら。日菜が釣れた。

「そうだ。日菜も練習帰りか？」

「うん」

片耳のイヤホンを外してから聴くと元気のいい返事が返ってくる。

「最近練習はどうだ？」

「すつごく楽しいよ。それに千聖ちゃんも練習に来るようになったんだ〜！」

「いったいどんな物で釣ったんだ？」

「釣ってないよー。千聖ちゃんに怒られるよ？」

待て。俺がいつ日菜に白鷺とは知り合いだと伝えた？ 全く身に覚えがない。あれか。白鷺が言ったんだな？ そうとしか考えられない。

「白鷺から話を聞いたのか？」

「うん。一緒にお茶したって言ってたよ。面白い人だって」

それはいったいどういう意味合いの面白いだろうな。まあいい意味の面白いではなさそう。

「なんだか最近の千聖ちゃんは、私が知ってる千聖ちゃんじゃないことばかりしてる気がする」

「それが人って生き物だからな。なにかのきっかけで変わるものさ」

少しは“努力”というものを信じてみる気になったんだろう。本人に言ったらきつと怒られるんだろうけど、自分の考えは頑なに変え

なさそうな人間に見えた。きつかけはやっぱり丸山彩という人間な  
んだらう。どこまで行っても自分を貫いて努力し続ける彼女に少し  
だけ考えが変わった……ってところか。

「おねーちゃんが言ってたんだけどね。他人のことをわかろうとする  
のが大事なんだって。だからもつとみんなのことを知りたい！」

「その場の言葉としては微妙にあってない気がするんだが……」

「えー。そんなことないよー」

「まあいいさ。時間はまだある。ゆっくり知っていければいいと思  
う」

こうして話を聞くと改めて日菜も変わっていつてることを実感す  
る。以前は他人のことを知りたいなんて言葉は言っていなかった。  
パスペレという存在は紗夜にも、日菜にも。そして俺にも今後大きく  
影響してくる存在だと思う。現に紗夜には……。

「ゆーくん？」

「なんでもない」

「ゆーくんってたまに人の話聞かないで考えごとしてるよね」

「否定はしない。そういう性分なんだ」

「(こういうところは変わらないな)」

「どうした？にやにやして」

「ううん！ なんでもない！」

笑顔を浮かべてそういう日菜。なんだかはぐらかされている気も  
するが……まあいいか。

「そうそう。彩ちゃんはねよく千聖ちゃんに言いくるめられてるよ」

「だろいな。丸山よりも白鷺の方が一枚上手な感じがする」

白鷺とは揉めているらしい。正反対そうな2人だからな。仕方な  
いと思う。

それこそ真宗、鈴音、早乙女の3人とまさに同じ。全員の意見が合  
うところなんて見たことがない。人は違うということを体現してい  
る3人だな。

「一枚どころじゃないと思うよ」

「そこは一枚にしておいてやれ」

いざ真面目にライブのことを考えているとなるとメンバーとの意見の食い違いが……現に起きているわけだが。個人の確実なレベルアップか全体の確実なレベルアップ。どちらをとるのかは、意見が割れるだろう。どちらもとつたのがRoseliaなんだが。

「なんにしても今度は大丈夫そうだな」

「うん！ 私もそう思う！」

あとは丸山の努力が今度こそ結果と結びついてくれることを祈るばかりだ。

## C i R C L E ロビー

「本当にすいません！」

俺は絶賛困っている。

目の前には頭を下げて謝ってくれている奥沢さん。そして受付でそんな俺を見て冷たい視線を送る早乙女。そんな状況を心配そうにみる松原。

ざっくり説明するとだな。ライブのオフアールの件を断られたという話。別に気にすることはないんだ。こんな時の保険はちゃんと用意しているし。

「そんなに謝らなくても大丈夫だ。承諾する前だし」

「いえいえ。せっかくお話ししていただいたのに」

頭を上げてからそう答える奥沢さん。

「言った通りだが”出演します”という承諾はまだしていい。出ませんか？ としか聞いてないからな。本当に気にする必要はない。

「それよりも何か急いでいる用事があるんじゃないのか？」

「あ、そうでした！」

「こころがまた無茶なお願いをしてきた感じか」

「まあ……そんなところです」

「今度はどんなお願いなんだ？」

「病院でライブが出来ると言い出して……」

なぜ病院なのかはよくわからないが、これはまた大変なお願いごことだな。病院で楽器を鳴らすのはどう考えても無理な気がする。

「その…なんだ。頑張れよ」

「はい。ありがとうございます」

CIRCLEを出て行く2人を見送り受付に戻る。すると冷たい視線を送っていた早乙女がスツと俺の隣に立った。

「手伝ってあげないんですね」

「バイト中だしな」

「バイトがなければ手伝いました?」

「…なになにが言いたい?」

「Roseliaの時はいろいろ苦労しているように見えたので」

「そうでもない。ただ幼なじみと喧嘩しただけだ」

「幼なじみ…顔を合わせる度に注意されている方ですか?」

「そうなんだが…」

どんな特定の仕方だ。というか注意されているところは割と見られているんだな。目につくような回数、俺は紗夜に注意されているっ  
てことか…。少しは治さないとこの先ヤバそうだ。

「そもそもRoseliaの時も俺はなにもしていない。少しだけ話を聞いただけだ」

「(そういうのを手伝っている…いいえ。気にかけていると言った方が正しいかしら。その言い方だと、今回も同じようなものですね)」

「早乙女?」

「なんでもないですわ。それよりも、先程の方々が戻ってきたようです」

入り口の方に視線を向けると奥沢さんと松原が戻ってきたようだ。

「どうだったんだ?」

「上の人に聞いてみると言われました」

「よく話が通ったな」

「事情を話したら聞いてくれて。それでも不安だけど」

事情……今回はわけありって感じか。

「その事情というのは、なんででしょうか？」

「早乙女？」

「えっと……少し長くなりますよ？」

「大丈夫です。お客さんが来ても旭日さんが居るので」

「堂々とサボる宣言をするな」

とりあえず2人の話を聞くことにした。

「というお話です……」

「そのあかりさんを笑顔にするために……。大変な挑戦ですね」

交通事故で怪我をしたあかりという子を笑顔にしてあげたいらしい。交通事故がよほど怖かったんだろうな。リハビリしないと歩けない。わかっていても一歩前に踏み出せないほど。

そういえば前に商店街を通った時、交通事故がどうか八百屋の人と話したな。その被害者があかりらしい。

「こころらしい考えだな。そのうち鋼太さんも一枚噛んできそうな勢いだ」

「時すでに遅しってやつです」

苦笑いを浮かべてそう答えた。つまりすでに鋼太さんがなにかしらしているのだろう。

「悪いな、引き止めて」

「ううん。またお話しよ」

「そうだな。大変だとは思うが、2人とも頑張れよ」

「ありがとうございます。失礼します」

2人を見送り一息ついた。

「じゃあ俺はハロハピの代役を探してくるからロビーは頼む」  
「わかりました」

とりあえずAスタジオに行ってみるか。

C i R C L E ロビー

あれから数日経ったバイト終わり。

ワイヤレスインターホンを返し忘れていた俺は紘翔と共にロビーを訪れていた。

「今日はなんだかあつという間だったね」

「そうだな」

まさに紘翔の言う通りだ。メンバーがメンバーだったからか、比較的楽にバイトを終えることができた。狩場さんも居たことだし。

「2人とも、もう上がりか？」

噂をすればなんとやら。

「はい。あとお願いします」

「気をつけて帰れよ」

「ありがとうございます」

狩場さんは今日、夜中までだったな。終電間際までC i R C L E のスタジオ貸し出しをしているから残る人は大変だ。

「じゃあ帰ろうか」

「そうだな」

「外に居るの知り合いか？」

そう言われて外に視線を向けると、おそらく俺と紘翔の帰りを待っているであろう日菜の姿があった。

「そうですね。お先に失礼します」

「お先に失礼します」

「お疲れ」

狩場さんに見送ってもらい俺と紘翔は急いでC i R C L E を後にした。

すでに閉まっているカフェテリアに出ると俺たちに気づいた日菜

が駆け寄ってきた。

「お疲れさま！ 来ちゃった！」

「なにが来ちゃっただ。こんな時間に」

「2人が居るからいいかなーって」

「よくはないと思うけど、こんな時間に1人で返すのも良くないね」

真っ直ぐ帰ればいいものを。まあこういう時に来たってことは。

「今日は今日で、なにかあったみたいだな」

「さすがゆうくん。やっぱりわかっちゃう？」

「一段と楽しそうだなって思っただけだ」

よっぽど話したかったからなのか。ただの気まぐれなのか。それは本人にしかわからないことだな。

「歩きながら話そう」

「うん！」

と言った本人は蚊帳の外で2人の会話を聞いている。なんかアイドルっぽさの話をしているようだ。

「やっぱり彩ちゃんもキラキラしてるな〜って思ったの！」

「いったいどういうことだ。俺には今の言葉だけでは到底理解出来ないんだが。」

「わかるかも。チケット配ってる時しか見たことはないけど、その時もなんだかキラキラしてて、アイドルって感じがしたよ」

今のだけでそこまで理解出来たのか？ 絃翔は日菜に対する異様な理解力があるな。俺にもその能力をわけてほしい。

「ゆうくんはどう思う？」

「どう思っって言われてもな……」

俺は最初に会った時の印象が強すぎてキラキラしているというよりは……あの時は別の意味でキラキラしていたな。話が逸れてしまったが、やっぱり印象はドジで少し頼りない感じだ。

だが……一度決めたらどこまでもそれに向かって努力をしていく子なんだなって同時に思った。



「そうだな。ドジで頼りない感じもするが、5人の中では1番アイドルって感じがする」

「そっか。あたしはアイドルって感じしない？」

「日菜はどこまで行っても日菜だ。変わらない。それが良いところだと思う」

同時に悪いところでもあるからまさに紙一重と言っていていいだろう。そんなことよりもなぜキラキラしているかの、アイドルっぽさの話になったんだ？

「それで、この話の意図をそろそろ教えてくれるか？」

「えっとね。実は今日——」

日菜から今日起きた出来事を聞いたが、なぜそんなに楽しそうなのかは俺では理解出来なかった。

丸山は本番で歌わせてもらえないのにな。

「事務所側にも事情があるとは思うけど、それはあんまりだと思っよ」「まあそうだよ。でも、これくらいのことでは彩ちゃんは諦めるのかって。あたしには想像出来ない」

そのことには俺も同感だ。ここまで来て諦めて欲しくないという気持ちが大いだが、せつかく掴めたチャンスが無駄にするのはな。

本番では録音って話はわかったが……納得はできない話だな。だがアイドルっぽいつて話はいまだにわからない。

「麻弥ちゃんが言ってたんだけどね。自分を貫き通そうとする姿が、キラキラ輝いて見えたんですって」

なるほどな。確かに……そう言われるとチケットをめげずに配っている姿が輝いて見えたという絃翔の話も頷ける。待て、絃翔はあの短い言葉から理解したのか？ さすがとしか言いようがない。

「丸山は大丈夫そうだったか？」

「んん千聖ちゃんと話してから、ちよつとだけ元気出たみたいだけど」

「そうか。自分を見失っていなければ大丈夫だろう」

「そうだね」

変わったのは果たしてどっちなんだろうな。今度、会った時に聞いてみるとしよう。

そんなことを考えながら前を歩く2人の背中を眺める。ふと一瞬。同じような光景がフラッシュバックした。

時々。忘れた頃にやってくるこれは……いったいなんなんだろうか。

## 第41話 Afterglow

第41話 Afterglow

CIRCLE ロビー

放課後のバイトが始まって数時間が経過した頃。受付に戻ると天堂さんが資料と睨めっこをしていた。

「戻ったか。旭日、休憩行ってきたいいぞ」

「わかりました。あとお願いします」

今日はバイトが出来る時間ギリギリまで居るからな。30分の休憩がある。

「ガルジヤムの件は大丈夫そうだな」

「はい。当日も観に行ってきます」

「そうか。引き止めて悪かった」

「いえ」

ワイヤレスインターホンを受付に置いてカフェテラスへと向かった。見てないようで見ている人だ。

CIRCLE カフェテラス

「先輩、お疲れさまです」

「お疲れ。美竹たちも休憩か？」

「はい」

俺が受付に居ない間に休憩するためにカフェテラスへと出てきたんだろう。外に出てくる姿は見受けられなかったからな。

「よかったら一緒に一緒にしてくださいよー」

「モカ……お前なー、いつも夕方先輩に奢ってもらおうとしてないか？」

「まさか。そんなことないよー」

「構わないさ。紙袋いっぱいパンをねだられるより紅茶やケーキを奢った方がマシだ」

そう言うてから、まずはコーヒーを買ってくるためにレジの方へと

向かった。今日はスタッフさんしか居ないため、すんなり購入することができた。バイトがいるところは行かない。もちろん一部の人間だけだが。

コーヒー片手に5人の近くの席へと腰を下ろした。

「そうだ。結局あの後はどうなったんだ？」

「えつと……結構大変でした」

俺の問いかけに羽沢が苦笑いを浮かべながら答えてくれた。なんとなくの予想はつくがやはり大変だったんだな。

「モカは相変わらずマイペースだったしな」

「夜寝られない代わりに授業中寝てるとか言ってたよね……」

「モカらしいな」

「えへへ」

「褒めてはいない」

授業中寝てるってことは話を聞いていないのも同然。それなのになぜこうも成績に差が出るのか……睡眠学習が実は最強だったり……？ そんなわけはないか。

「羽沢は週明けから学校行ったんだろ？」

「はい。でもなんで知ってるんですか？」

「前にお店に行った時に聞いてな」

その時にお礼として飲み物の割引券をもらった。しかも何回でも使えるときたもんだ。

「でも結局あの後モカと蘭が喧嘩しちやって大変だったんですよ」

「あたしたち全員看護師さんに怒られましたし」

「だろうな。巴と美竹じゃなくて、モカと美竹がか。なんだか不思議な展開だな」

よくよく話を聞いてみると、美竹のことを思ってモカが煽ったのが始まりらしい。そこからヒートアップして思ってることを全部吐き出して。つまり口喧嘩だな。

だが、隣に居るだけじゃダメっていうことに早く気づけたことは大きいと思う。俺は……それに気づくのに結構かかってしまった。そのせいで紗夜に辛い思いをさせてしまったからな。

「言えた義理じゃないが、時には口喧嘩っていうのもいいもんだと思う。お互い心の奥底にある想いはなかなか言い出せないだろうし。モカの行動は正しかったと思う」

「ゆー先輩に褒めてもらった」

「まあ病室で騒いだのは褒められたことではないがな」

「そこは反省してます……」

俺がその場に居たら喧嘩を止めてしまっていたかもしれない。病室っていうのもあるが、この5人が口喧嘩しているのを見てはいられなかったと思う。出会った時から仲が良かったからな。

脳裏に浮かぶのは母さんと仲良さげに話す5人の姿。

「5人で続けられそうだなによりだ」

「あーその点は……」

今度は上原がなんだか微妙な表情を浮かべた。

「まだなにか問題があるのか?」

「ガルジヤムの演奏次第って感じですよ。父さんに聴いてもらって考えてもらいます」

「そうか。今のAfterglowなら大丈夫だと思う」

この手のライブには毎回参加しているバンドも居る。それが結構有名なバンドだったりするわけだが……美竹たちのことだ。やってやる的な感じでやる気に変えてくれるだろう。

「新曲は……流石に厳しいか」

「やります」

「マジで言ってるのか? あと1週間でもどうにかするってことになるぞ」

……そうか。愚問ってことだな。目を見ればわかる。ここに居る全員が諦めているような目は1人もしていない。むしろやる気に満ち溢れている気がする。

「今回の歌詞、蘭っぽくないんですよ」

「ぽくないってどういうことだ?」

「雰囲気というか……素直ってどうか」

「ちよつとモカ! 先輩にわざわざ言わなくていいって!」

「ら、蘭ちゃん、落ち着いて！」

なんだかごちゃごちゃしてきたが、要約すると。美竹の書いた歌詞がいつもと違うということか。それが良い方に転ぶか、悪い方に転ぶかはまだわからない。今回に限っては悪い予感はないな。

「セットリストを考え直すのとアレンジで結構ギリギリな感じか？」

「そうですね。でもやってみせますよ！」

「期待してる」

俺をよそに騒ぐ美竹とモカ。それを止める羽沢と巴。そしてなんだか嬉しそうにその姿を眺める上原。ずっと心配してたんだろうな。人1倍に。

「よかったな。上原」

「な、なにがですか？」

「やつとひとつになれて」

「はい！」

ここ最近で1番の笑顔を浮かべて上原が返事をする。いつもと変わらない日常が戻りつつあることを改めて実感すると共にすっかり休憩ということを忘れていた。

### ガールズバンドジャム会場

時が過ぎるのはとても早い。あつという間にガールズバンドジャム当日になった。

「結構人が多いね」

「割と有名なフェスだからな」

なんとか寝坊せずに起きることが出来た（紗夜に叩き起こされた）俺は絃翔と共にガルジャムの会場へと訪れた。まりなさんには感謝してもしきれない。

おそらく涼子も来ているだろう。確か友達と見に行くとっていい

たからな。

「Afterglowのメンバーは大丈夫かな？」

「羽沢は緊張してるだろう。あと意外と美竹も緊張してたりしてな」

「どうだろう。緊張するようなイメージはないけど」

「内面まではわからないからな」

緊張しなさそうだな今井があんな感じだったことを考えると、どうもそういうイメージがついてしまう。緊張しなさそうな人に限って緊張しているのな。

この緊張っていうのは難しい。し過ぎててもダメだし。しなさ過ぎてもダメ。ちょうどいいっていうのがなかなか見つからない。

「こればかりは俺たちが心配してもどうにもならないからな」

「そうだね。早めに会場に入っておく？」

「そうするか。人で溢れかえりそうだし」

まだ人が増えると予想した俺たちは、早めに会場内へと向かった。

ガールズバンドジャム 会場内

さすがガールズジャムといったところか。人も多い上にあちこちから聞いたことがある名前のバンド名が話に上がってくる。ガールズジャムについては散々涼子から話を聞いたからな……。話だけならお腹いっぱいだ。

「そういえば、智紀君は来ないんだね」

「Roseliaの時はたまたま部活が休みだっただけで、基本アイツは来れない」

「そっか。残念だね」

まあそうでもない。サッカーバカなだけあって毎日ボールを追い回しているような奴だからな。来たら来たでうるさいし。こういった場には居て良いことの方が少ない。俺は静かに見たいんだが、アイツはどうもしつこく話しかけてくる。

「新曲もセットリストも間にあってよかったね」

「だな。1週間みっちり練習してたし」

「毎日遅くまで延長してたしね。羽沢さんもなんともなくてよかった」

「また倒れたりしないか心配していたが、必要なかったな」

一度あんな状況になればもう大丈夫だろう。それに、1番辛いのは結局自分だ。周りに心配をかけたくないって強く思う人間ほどその気持ちは大きくなる。

☆

いよいよAfterglowの出番が訪れた。前に演奏していたバンドでかなり盛り上がったことを考えると少しプレッシャーか。

だが、そんな心配は何ひとつ要らなかったらしい。

今回の出来事。1つ1つが彼女たちを成長させたのは言うまでもない。おそらくAfterglowを知らない人がほとんどな中、プレッシャーに負けるとなく演奏している。

「Afterglowだっけ……はじめて見たけど、けっこういいカインジじゃん」

「だよね！ ボーカルの子の声、超カッコイイ！」

どうやら受けもいらしい。

「次で最後の曲です。あたしが、道に迷った時……そばにはいつもメンバー達がいてくれた。今、ここに立っていられるのも、4人のおかげだっと思ってる」

この会場にいる全員が蘭の言葉に耳を傾けている。

「……みんな。あたしは、もう迷わない。どんなに迷っても、逃げたりしない。……だから、その気持ちを歌にして、届けたい——！」

彼女たちの力強い演奏に。

夕は目が離せなかった。





ライブ終了後。

「いい演奏だったな」

「うん。前に聴かせてくれた時のような情熱がこもっててよかった」

「ガルジャムに推薦してよかったよ。本当に」

あのまま出場が危うかったら、色々と大変だったからな。こうして丸く収まってなによりだ。また何かライブがあればAfterglowを推薦しやすくもなるいいライブだった。特に最後の曲は。

「Afterglowのみんなを待つ？」

「いいや。CIRCLEで会った時に話でもすれば——」

話しながら歩いていると肩が他の人に当たってしまった。

「すみません」

「いえ、こちらこそ。ん？ 君は……陽子さんの息子さんじゃないか」

「はい？」

よく見るとぶつかってしまったのは美竹のお父さんだった。前に話した時、ライブを観にきてくれると言っていたな。

「お久しぶりです。お葬式……以来ですね」

「そうだね。元気にしているようで、なによりだ」

「ありがとうございます」

美竹のお父さんも母さんと仲の良かった人の1人だ。なぜ花道の家元と仲が良かったのかはわからないが……。

「娘さんのライブはどうでしたか？」

「……お遊びかと思っていましたけど、なかなか良いライブでした」

「蘭さん達はいろいろ壁にぶつかりながらも進んできました。悪いはずがないです」

「そうですか。君が見守ってくれていたおかげかもしれません」

「いいえ。たまたま話を聞いてただけなので、俺はなにもしません」

どんな選択をして先に進むのかを決めたのは紛れもない。Afterglowのメンバー全員だ。俺はほんの少しだけ彼女たちの道

を1つ示しただけ。道を示してやれるほど、経験や知識はないからな。

「だが蘭たちは君に感謝していましたよ？」

「そう…なんですか？」

「話を聞いてくれるだけでも何か与えることが出来ていたんだと私は思います」

美竹たちが言ってたってことはもう会って話してきたのか。家のことも問題なさそうでよかった。この先、Afterglowはもつと伸びるだろう。湊たちもうかうかしてられないな。

「そろそろ失礼します」

「はい。CiRCLEでもAfterglowはライブしているの  
で、今度よかつたら来てください」

「そうさせてもらいます。では」

よくよく見たら門下生？ らしき人たちも居たらしい。その人たち含めて見送り、少し息を吐き出した。

やっぱり貫禄ある人と話すのは疲れる。何か失礼があったらって考えると尚更な。

「あの人が美竹さんのお父さんなんだね」

「そうだ。華道の家元」

「よく緊張せずに話せるね。凄いよ」

「緊張はしないが、気疲れはするさ」

さてと。この後どうするか……………

「紘翔は早く帰らないといけないんだよね？」

「ごめんね、今日の夜は外に食べに行くってなってる」

「気にするな」

このまま家に帰ったところで暇なことは変わりないしな。こういう時は羽沢珈琲店にでも行って、コーヒーを飲んでから家に帰る。この選択肢が1番有意義だ。

「とりあえず帰るか」

「そうだね」

俺と紘翔はガルジヤムの会場を後にした。

ふと会場の方へと振り返り思う。今日のライブも素晴らしいもの  
だったと。

## 第42話 Pastel\*Palettes

### 第42話 Pastel\*Palettes

花咲川女子学園 廊下

放課後。例によって俺は花女に訪れている。頼まれるのはだいたい水曜日辺りってことで、その日のバイトは入れなかったり、1時間遅らせたりって感じた。

美奈川先生はちゃんと仕事をしているのだろうか。ただそれだけが心配だ。

職員室にたどり着き、ノックをしてから中へと入った。

「失礼します。美奈川先生居ますか？」

「あら旭日君、こんにちは。美奈川先生なら自席に居ますよ」

「ありがとうございます」

もはや高校名を言わなくても平気になってしまった。まあ2年くらい経つし、そんなものか。

美奈川先生の居る席まで行くと、今日は珍しく仕事をしていた。

「これ、いつもの」

「ありがとー。毎回悪いね」

「はい」

書類の中身を確認してそのままデスクの引き出しにしまう。

「今日は珍しく仕事をしているんですね」

「珍しくとは失礼な」

「俺が来る時はなにもしてないですよ」

「たまたまやるのがなかったんだね」

だとしたらその確率高すぎるような気がするんですけど？ おかしなこともあるもんだな。

「そうだ。夕君に頼みたいことがあるんだけどいいかな？」

「内容によります」

「ノート提出してもらったんだけど、1クラスだけ足りなくて」

「それを俺に催促しに行かせると？」

「ざつくり言うとなんだけどね」

いや、それはざつくり言わなくてもそうだと思いますけど。それにしても他校の生徒に催促しに行かせるとは。いったいなんなんだ、この先生は。

「丸山さんと知り合いだよね?」

「まあ……そうですけど」

「じゃあよろしくね」

顔見知りなら仕方ない。そういう建前をたてて俺は頼み事を引き受けた。丸山とは少し話してみたいことがあったしな。ちようどいい。

そもそもなぜノートの提出に時間がかかっているんだ?

丸山が居るであろう教室へとやってきたが。空いていたドアから見えたのは案の定ドジを踏んでいるところ。

ゴミ箱をひっくり返してしまっただようだ。1年経っても変わらないな。こういうところは。もはや個性だ。

彼女の元まで近づいていざゴミを拾い始めようとしたが、頬に光るものを見逃すことはできなかった。

「死んだ方がいいか?」

「ち、違うの! これは目にゴミが入って……旭日君初めて会った時もそれ言ってたよね?」

「そうかもしれないな」

そう言ってから散らかしたゴミを拾い始める。

「今日も用事あってきたの?」

「まあな。例のやつだ」

「そっか。大変だね」

「こう何回も来ると、さすがに慣れる」

一通りゴミを拾い終えゴミ箱を元の位置であろう場所に戻す。ふと黒板を見ると日直の所に丸山と書いてあった。時間がかかっ

のはそういうことらしい。

「日直の仕事とノートを集める仕事。やることがたくさんだな」

「う、うん。急いでたらゴミ箱ひっくり返しちゃって……」

「ドジだな」

「い、言われなくてもわかってるよー……」

「レツスンあるんだろ？ 手伝うから早く終わらせるぞ」

手伝うとは言ったものの普通ならおかしい光景だよなと思いつつ、俺は名簿を見ながらノートを名前の順にしている。丸山は日誌を書いているが思うように進まないらしい。レツスンに行きたくて焦っているんだろう。芸能人とはいえ、レツスンが理由では早く帰れないんだろうな。

「日菜から聞いたんだが……次のライブ。歌えそうか？」

「……うん。必ず歌うよ」

「楽しみにしてる」

「旭日君は……覚えてる？」

一旦手を止めて丸山に視線を向けるとちようどあった。

「デビューしたら歌を聴きに来てくれるって約束」

「……その約束か」

丸山。その約束はな。

「俺じゃなくて母さんとの約束だろ？」

「えっ!? あっ……そうだったけ?!」

「記憶違いだったらすまない」

「ううん。旭日君と陽子先生って似てるから勘違いしちゃった」

「似てるかどうかはわからないが……」

代わりにやれることをするということは。約束を代わりに果たすのも。役目だよな。

「母さんの代わりにライブは見に行く。だから絶対……歌を聞かせてくれ」

「うんー!」

日菜から聞いていた話はいったいなんなんだろうと思うくらい。丸山からは迷いは感じられなかった。これも白鷺千聖という人間が

影響しているんだろうか。

旭日家 自室 ベランダ

若干バイトに遅れてしまったが、特に問題なく終えることができた。今日は狩場さんが居たからな。いつもサボり気味の人たちは少しばかり気を張っていたことだろう。

風呂上がり以外で涼んでいた頃。俺はスマホと睨めっこしていた。別にそういう趣味ではない。決して。

着信が来ているんだが、その相手がなぜだがかけてくるとは到底思えない人物なんだ。

とりあえず恐る恐る電話に出た。

「旭日です」

『ずいぶん待たせるのね』

「今まで面と向かってしか話したことがない人から電話が来たら驚くだろ」

『それに関してはごめんなさい。少しあなたと話したかったのよ』

意外な相手から電話が来たかと思えば、意外なことを聞いてしまった。いったいどういう風の吹き回しだろう。

それと日菜が教えたんだろうな……人の連絡先をホイホイ教えないでほしいところだ。

「どうかしたのか？」

『ただの雑談よ。毎日遅くまで起きているみたいだから』

「毎日バイトで遅くまで働いてるからな」

全く。いったい誰から聞いたんだか。まあこの場合ペラペラおしゃべりするのはどう考えても1人しかいないわけだが……。俺の脳裏に浮かぶのはニコニコ笑顔を浮かべる日菜の姿。

ただの雑談にしては遅い時間帯な気もする。

「……眠れないのか？」

『そういう風に見える?』

「いや……と、言いたい人間は緊張する生き物だし、一度失敗して  
る。ぐっすり眠れる方がこの際すごいと思う」

『そうね。本当はぐっすり眠りたいところだけれど』

小さい頃から芸能界に居るとはいえ、緊張あるいは不安なんだろう  
な。失敗の方にも問題があったとは思う。そもそもアイドルバンド  
と言って売り出したのにエアームというのがおかしな話だ。

『旭日君?』

「なんでもない……。丸山とはもめているようだな」

『日菜ちゃんから聞いたの?』

「まあそんなところだ。毎度言いくるめるのも大変だろう?」

『あら、失礼しちゃうわね。私はバンドの成長の為に意見を言っただ  
けよ』

きつと電話の向こうでは普通を装った怖い笑顔を浮かべているん  
だろうな。

そんな時。ふと気になった。なぜ友達である松原やほかのメン  
バーに話相手になってももらわなかったのか。正直俺なんかよりも適  
任な気がしてならない。

「なぜ俺にかけてきた?」

『……言っただでしょう? 単純に雑談したかっただけよ』

「松原でもよかった……違うか?」

『時には聞かない方が、いいこともあるわよ』

……これ以上詮索するのはやめておこう。互いにメリットはない  
しな。

「本番前とかはいつも緊張するの?」

『いいえ。眠れないほどではないわ。それに緊張ではないの……た  
だ。不安なだけ』

「仕方ない。……失敗しないために練習してきたんだろ? だったら  
大丈夫だと思う。あとは自分を信じるだけだ」

『(やっぱり陽子先生みたいなことを言うのね……あなたは)』

しばらく返事は返ってこなかったが、特に催促することもなく俺は



お世辞にも綺麗とは言えない夜空を眺めていた。

『そう……ね』

「信じるものは変わらないだろう？　ただ少しだけ。努力を……丸山彩を信じて見る気になっただけだ」

『旭日君は……どうなのかしら？』

「信じる以前の話だ。俺にはないもの。ただそれだけだ」

昔から面倒ごととは後回し。出来ないものは出来ない。出来るようにしないといけないものだけは出来るようにしてきた。丸山ほど俺は努力を積み重ねることは出来ない。だから……少しだけ羨ましいのかもな。

『遅くにぐめんなさいね』

「構わないさ。暇つぶし程度になるならいつでも。家に居ればな」

『ありがとう。おやすみなさい』

「おやすみ」

『旭日君の詮索しないところ、好きよ』

「なに……切りやがった」

アイドルが。ましては芸能人が一般人に言っている言葉ではないだろう。

まためんどくさいことを引き受けてしまった気もするが……まあいいだろう。明日はいいライブが見れそうだ。

軽く背伸びをして戻ろうとした時。

「誰かと電話していたの？」

紗夜の声だ。

「まあそんなところだ」

こっちも眠れないのだろうか。

「夕は……明日行くのよね？」

「そうだが……気にしてるのか？」

特に返事は返ってこなかった。まだわかりあうことが出来ていないことを考えると気になるのもわかる。

……日菜の音を聞こうとはまだ思えないよな。

「言っただろ？　少しずつでいいって。焦ったところでいいことはな

い」

「わかって……いるわ」

「だったらいい」

ずつと見てきたからか。紗夜はどこか焦っている部分がある。そんな気がしてならない。すっかり見ていないと………いつの日か。母さんのように――。

「夕？」

「いや……なにかあったら言ってくれ」

それだけ言い残して俺は部屋へと戻っていった。

時は過ぎて昼過ぎ。俺は珍しく絃翔が来る前に家の外に出ていた。理由はとても簡単だ。朝から突撃してきた輩が1人居たからな。それはもう勢いよく。

『おはようー!! ライブの日だよ!』

そんなことは言われなくてもわかってる。だがな日菜は事前に会場に入りするから朝から行くんだろうが、俺たち客が入れるのは昼過ぎなんだよ。

とまあ朝から叩き起こされた俺は再び二度寝して出かける1時間前に起きたわけだ。朝早くなければ起きることは苦ではない。

スマホを見ると珍しく少し遅れるというメッセージが来てきた。普段待たせている側としてはなんの問題もない。

ぼーっと空を眺めて5分が経過した頃。

「ごめん! 待たせたよね?」

「本来なら俺のセリフだ。問題ない」

「それもどうかと思うけど」

「確かに。それじゃあ行くか」

ここから会場までは歩きと電車で向かう必要がある。まあ会場は駅から近いところにあるし問題ない。帰りだな問題は。

「紘翔は母親のライブとか観たことあるのか？」

「んー実は観たことはないんだ」

「意外だな。ライブ映像とか残ってないのか？」

「初回盤には付いてるとか……そんな感じだったかな？」

「萩野に聞いた方が早そうだが、面倒だな」

アイドルという4文字を出すとこれでもかと食いついて来るからな。まるで大輝や今日見に行く麻弥みたいだ。マニアっていうのは話出すと止まらなくなる。

「観る機会があればいいな」

「その時は君もどう？」

「気が向いたらな」

今日も他愛無い会話をしながら会場へと向かった。

#### 会場前

さて……会場に着いたのはいい。だが想像以上の人混みに俺と紘翔は呆気に囚われていた。

「すごい人の数だね……」

「パスパレ以外のアイドルも出るからな」

今までライブと言っても芸能人のライブではなかったからな。ここまで人が居るとは思わなかった。あちこちに俗に言うオタクと呼ばれる人たちが居る。法被を着たり、グッズを見せ合ったり、写真を撮っている人も居る。

俺は特にハマっているものはないからな。聴いている音楽もアニソンが中心だが見ていなかったりするものがほとんど。こう言うのを好きな人からすると『にわか』と言うんだろう。

「関係者席でよかったのかもな」

「僕たちもファンだったら一般席の方が楽しいんだと思うけど……」

「身内や友達が出ているから来ているようなもんだしな」

「そう……だね」

「気にすることはない」

こういうファンが居るからライブというのは成り立つわけだからな。なくてはならない存在だ。

俺たち2人は関係者の方から会場へと入っていった。

#### 会場内

関係者席へとやってきた俺たちは自分の席へと座り一息ついた。それとなく辺りを見ていた絃翔が話しかけてくる。

「テレビで観たことがある人が多いね」

「そう…なのか?」

「うん。僕もそこまで詳しくはないけど」

言われてみれば見たことがあるような……ないような。アイドルのライブだからその家族とか友達が多いんだろう。

いつかはここに……紗夜が来るんだろうか。それか同じステージに……いや、それはないな。紗夜がアイドルをやるとは思えない。

可能性としてはこういう大きな会場じゃなくてライブハウスとかのステージとか。あとは……Roseliaがメジャーデビューとかならあり得るかもしれないのか。

「それはないか」

「なにが?」

「いや、こっちの話だ」

絃翔とそんな話をしていると、ステージ以外が暗くなった。



アイドルのライブというのも相当熱気がすごいらしい。  
ステージや会場を見ながら旭日夕はそんなことを思った。

ズレのないコール&レスポンス。事前に練習したわけではないはずなのに、まるで一心同体なのではないかと錯覚するほどだ。身内がアイドルでなければ一生見なかったであろう光景。

「こういうのもいいね。すごく楽しそう」  
「曲によってはペンライトが一色になることがあったりして。すごいな」

2人で思い思いのことを話しながらライブを鑑賞する。ペンライトを振る絃翔とは、違いじつとステージを腕組みしながら眺める夕。  
「夕くんも振ればいいのに」

「いや、俺はいつもこのスタンスだからな。いつもと違う感じで面白い」

「(ペンライト振ってたらそれはそれで違和感があるかも)」

ライブは順調に進み、そして――。

「みなさーん！ こんにちはーっ！私達……」

「『『Pastel\*Palette』です！』」

いよいよ出番が回ってきた。

「まずは1曲、聴いてください！ しゅわりん??どり〜みんな！」

始まってすぐに前回とは全く違うことがわかる。演奏も。歌も。

それはお客さんにも届いているらしい。さっきまでペンライトを振って声援を送っていたお客さんの中にコソコソ話している者が何人か見受けられたからだ。

「(相当、練習したんだろうな。初ライブがこういう大きな会場だと緊張するはずなのに、ちゃんと演奏できている。丸山はたまに音程外してる気もするが……)」

「(こんな大きい会場で堂々として歌えているのは、本当にすごい。……お母さんはどんな気持ちだったんだろう)」

それぞれ思うところがある中、気づけば1曲目の終わりを迎えてい

た。その後のMCでは、ファンに前回の出来事を謝ると同時に自分たちがどういうキャラなのかをアピール出来た。そして2曲目へと続く――。

思った以上の反響の中、Pastel\*Palettesの出番は終わった。



会場 関係者席

「さてと。ライブも終わったことだし、混む前に帰るか」

「そうだね。そうだ、帰る前に楽屋には行かないの？」

「行けるものなのか？」

「たぶん……」

行っても茶化されそうだしな。誰かとは言わないが。誰かとは。こういう時は感想だけ送ってさっさと帰るに限る。

「感想を日菜に送るが、紘翔は何かあるか？」

スマホを渡すとぼちぼち文字を打っていく。俺はもう送る言葉は決まっている。こういう時はあれしかない。

「これでいいかな」

「わかった。……送ったぞ」

「早くない？」

「俺はたった一言だけだからな」

メッセージを送信してからスマホをポケットにしまった。日菜が帰ってきたら少しばかり面倒なことになりそうだが……今日くらいは多めに見るとしよう。

『ライブお疲れ様。演奏も歌もすごく良かった！ おかげで楽しいひと時を過ごせたよ。またライブがあったら絶対観に行くから』

『いいライブだった』

## 第43話 諦めない

### 第43話 諦めない

花咲川女子学園前の通り

紘翔とライブに出かけた日から数日の放課後。俺は特にやることなく商店街をぶらついてた。あいにく紘翔は予定があるらしく一緒には居ない。……一緒に居てくれたらどれだけよかったことか。

「お願いします！ 来てくれると”本当”に助かります！」

なぜか俺はハロハピのメンバーに捕まっている。本当にどこをどうしたら後輩に頭下げられてお願いされる事があるんだろうか。

今回はいったい何をするのか知らないが、とても不安そうな表情を松原が浮かべている。おそらくその元凶である3人はそつちのけで何かを話しているようだが？ マイペースなんだか、バカなんだかよくわからない。

「待て。これからなにかしに行くのか？」

「この前話したあかりちゃんの所に行つて、悟られないように好きなものを聞きます」

「聞きたい点がいくつかあるんだが……」

こうなつたら付いていくか。松原と奥沢さんがかわいそうに見えるてきた。

「とりあえず歩きながら経緯を聞かせてくれ」

「ありがとうございます！」

外に出るとこうなる運命なんだろうな。かと言って家にずっと引きこもっていると、『たまには外に出ろ』とお叱りを受けるし。八方塞がりとはまさにこのことだ。

「夕も来てくれるのね！」

「君が来てくれるのなら…心強い」

「これで百人力だねっ！」

「お前らの中で俺はいったいどんな存在だ」

救世主じゃあるまいし。

「それじゃあ行きましよう！」



3 バカの後をついて行くように歩き始めると、2人が俺の隣に並んだ。

「頼んでおいてあれですけど……巻き込んでしまつて本当にすみません」

「いいさ」

「今日は南雲君は居ないんだね」

「予定があると言っていた」

「そうなんです」

絃翔が居れば少しばかり気が楽だつたんだが……居ない人に頼つても仕方ない。ここは出来ることをやるとしよう。

そういえば病院でなんとかつて言つてたような気もするな……昼休みに聞いたのはいいが、智紀が騒いでいてうまく聞き取れなかった。

「それで。あかりの件はまだ解決してないんだな？」

「うん。なかなか心を開いてくれなくて……」

「どんな子かはわからないが、大人数かつバカみたいに明るいのが3人居るとな。気が引ける」

「あははは……本当に先輩の言う通りですよ……」

「そこが良いところでもあり、今回の場合は欠点になつてゐるわけか」

明る過ぎるというのもそれはそれで問題になるとは……。話を聞いて見ないとわからないか。別の理由かもしれないし。決めるのは早い。

「なんとかして笑つてくれるよう、いろいろやつたんですけど」

「どの方法もダメか」

ライブをしてもダメ。他には……漫才とかやってないよな？ どのメンバーの組み合わせでも笑つてくれるとはとても思えないんだが……。

「ハロハピのライブは子供受けいいと思うんだが……それでもダメとなると」

「潮時なんじゃないかってころには伝えたんですけど、ダメでした」「ころころはそう簡単に折れるとは思えない……というより笑わせるま

でやめないだろう」

奥沢さんと話している中、松原の表情がさつきと同じように暗いことに気づいた。なにか心当たりがありそうな気もするが。

「いろいろありまして、今から悟られないように好きなものを聞きに行こうってなりました」

「なぜ悟られないようになんだ？」

「それはですね」

奥沢さんから作戦会議の内容を聞かせてもらった。

「なるほどな。なぜ悟られないようにするかは微塵もわからないが、好きなものを聞き出した理由はわかった」

今も楽しそうに会話をしながら前を歩く3人の背中に視線を向ける。こころは普通に聞いてしまいそうだし、北沢は……意外と出来そうだな。瀬田は上手いこと聞きだけそうな気もするが、やはり心配だ。

「100%なんとか出来るわけじゃないと思うが、出来ることはするさ」

「はい。頼りにしてます」

やれることをやるしかないよな。

## 病院 病室

来ておいてなんだが……俺は今、帰りたい衝動に駆られている。「……ねえ、なんかみんな変だよ？ 今日は何で色々、あかりに聞くの？」

質問ばかりしていたらそうなる。早くも悟られないようには無理な気がしてならない。

「べ、べべ別に？ なつ、なにか聞き出そうなんてせぜぜ全然つ、してないよーっ？」

下手くそか。

「う、うん……っ。きよ、今日はいい天気だなーっつ」

ま、松原……っ？

「今日、くもりだよ？」

そうなんだよな。曇りなんだよな。

「みんな、あなたがどういう時に笑うのか知りたっただけモゴツ……！」  
今作戦を台無しにしようとした奴の口を塞いだのはミッシェルと奥沢美咲。ナイスだ。

「こころ、あんたはこの作戦に向いてない。黙ってて」

なにか言いたそうにしているこころの口から手をどけると、予想外のことを口に出した。

「どうして？ あたし、ちゃんと遠回しに聞けてるわよ？」

「それを口に出してる時点で、アウトだってわかるまではダメです」

こんなグダグダな感じでは無理か。さてと……どうしたものか。

「前も言ったけど、ほっというて」

「あかり……でも……」

今までなにをしてくきたらこころまで言われるのかはわからないが、本人がそう言うのなら。しつこくするのもよくはない。

「そうか。わかった。では、あかり。君との最後の逢瀬の記念に、私からひとつ、言の葉を贈らせて貰えないかな」

「こころのはっ？」

まあ……そうだよな。

「シェイクスピア曰く、眼前の恐怖も、想像力の生みなす恐怖ほど、恐ろしくはない」

「想像力の……」

「恐怖……っ？」

なにを言い出すのかと思ったが……あながち間違っではないと思っ  
思う。

「それって、どういう意味？」

「まあ、小さい子に、わかりやすく説明するのって難しいよね」  
「意味……っ？」

一瞬瀬田の表情が変わった。

「意味は……つまり、……そういうこと、だよ」

「え？ どういうこと？」

小さい子に察してくれという方が無理か……。奥沢と松原はもう気づいているだろうか。瀬田が意味を知らないことを。

「だから、そういうこと、さ」

「そういうことだな」

「(え？ もしかして薫さん、これ意味わかんないで言ってる？ 旭日先輩も頷いてるけど大丈夫?)」

なにかを察したのかミッシェルが俺の方に顔を向けてきた。俺は何も言わずに頷く。

つまりそういうことだ。

「わかんないよーそれじゃあ」

「ふ……大人になれば……きつと……そうだね。君にもわかる」

「うーん。そうなのかなあ？」

「大人って言っても看護師さんたちみたいなの大人の人だから、気にすることはない」

フォローになつてない気もする。看護師さんは苦笑いだし。

「(絶対そうだ。わかんないで使ってるだけだこの人……)」

大人ではないが、少なくとも高校生の俺でわからないんだ。大人になつたところではわかるとは到底思えない。

「とにかく……あたし行く。もう変なこと聞きに來ないで。かんごしのおねえさーん……」

「ああ〜っ。ちよつと待って！ じゃあ最後に一個だけ！ いつも病室で何してるの？」

その聞き方はうまい。本を読んでいるでも、アニメを観ているでも、何かを聞き出せばこっちのものだ。

しかし、あかりが話してくれる前に看護師さんが来てしまった。さつきまで居た人とは別の人だ。

「あかりちゃんお部屋に……戻るの？」

俺の姿を見るなり少しだけ言葉を詰まらせた。この人……確か。

「お姉ちゃんたちとのお話、もういいの？」

「うん」

「あ、あかり……！」

「…… ジャー」

小さい声でなにかを言ったような……。

「ハッピーレンジャー見る」

「あ、日曜の朝やってるやつ」

日曜日の朝か。俺も昔そんなのを見ていた……記憶がない。昔から休みだろうと学校だろうと関係なく遅くまで寝ていたからな。休日はほとんど智紀と涼子に連れ出されていたし。

「ハロー、ハッピーワールド！ の皆さん。いつも来てくれてありがとう。じゃあ行こうか、あかりちゃん」

「ね、ねえっ、その何とかジャー、毎日見てるの？」

「……ん」

ハロハピの面々に軽く会釈をする看護師さん。あの人は間違いない。母さんの担当だった看護師さんだ。会うのは亡くなって以来か……。

「行っちゃった……」

「旭日君？ どうかしたの？」

「いや……なんでもない」

今回はほとんどなにもしてやれなかったな。……せつかく頼ってくれたんだ。何か出来ることは……。

「ハッピーレンジャーなんじゃない？ ……あかりの好きなものって」

「ええっ。そうなの!？」

「ミッシェルなぜわかるんだ？ 超能力が使えるのか？」

本当に……察しが悪いというか。バカというか。

「いや何となく察せないかな今の流れで。毎日見てるんでしょ。ハッピーレンジャー」

「奥沢さんの言う通りだが、確証がほしいな」

そんな話をしていると。

「お姉ちゃんたち、ハッピーレンジャーの話してる?」

「あかりちゃん、好きだよな。退院したら、ヒーローショー観に行くつて言ってたし」

近くに居た男の子と女の子が教えてくれた。どうやら確実な情報に変わったらしい。

「ふふん。当たり前じゃないのこれ」

「奥沢1人で来た方がよかつたまでであるな」

4人に視線を向けるが、おそらくわかつていない3人と察した者が1人。松原はちゃんとわかつているんだな。

子供たちの目線に合わせるために片膝をついた。

「いつもハッピーレンジャーを見ている時は楽しそうか?」

「うん! 普段あんまり話してくれないけど、ハッピーレンジャーの話はしてくれるよ」

「お兄ちゃんも好きなの?」

「そっちのお姉さんたちは好きかもな。教えてくれてありがとう」

2人の頭の上に手を置いてから立ち上がった。

「悪いが松原は残ってくれるか? 帰りは俺が送っていくから」

「う、うん。私は構わないよ」

「どうして花音さんだけなんですか?」

「ちよつとな。3バカは頼んだぞ、奥沢さん」

とりあえず4人だけを返して松原には残ってもらった。聞きたいこともあるしな。あかりに直接は確認出来なくても、確実にしておきたいことがある。松原のためにも。

4人を見送った俺と松原はロビーの椅子に座っていた。さっきの看護師さんが戻ってくるまでの間だ。

「えつと……どうして私だけなの?」

「松原はなんとなく」理由”わかってるんじゃないのか？　って思っ  
てな」

「理由……？」

「あかりが歩こうとしない理由だ」

そう言ってから横目で松原を見る。来る時に見せたあの表情。な  
んともなくわかっているんじゃないかって。

「100%わかっているわけじゃないよ？　それでもいいなら……」

「構わない」

「前にみんなには少し言ったんだけどね。変わりたい、どうにかした  
い、そう思っても、動けないことがあるからって」

変わりたい………どうにかしたい………か。俺の脳裏には紗夜の姿が  
浮かんでいた。まだその一歩は踏み出せてはいないが、少なくとも変  
わりたいと思っている内の1人だ。その気持ちかわかる松原もそう  
なんだろうな。

「なるほどな。だが………あかりに足りないもの。松原はもうわかって  
るんじゃないのか？」

一瞬の間があつたものの答えてくれた。

「………なんとなくは」

「自分と同じような感じだからこそ、わかった。あとは………道を示し  
てあげればいい」

「道を？　私に出来るかな……？」

「私じゃない。私”たち”だろ？　まだ確信を得ていないなら、得て  
からでも遅くはない。焦らずゆっくり考えればいいさ」

なんでも1人で抱え込もうとするのはよくない。俺みたくには  
なってほしくないからな。どうすればいいのかわからず、途方に暮れ  
てしまった俺のようには。

少しすると看護師さんが戻ってきたようだ。俺の姿を見るなり、会  
釈して歩み寄ってきてくれた。

立ち上がって同じように会釈をする。

「久しぶりですね。元気そうで、なによりです」

「いちおうですが」

元気そうというのは落ち込んではいなくてよかったという意味も含まれているんだろうな。………挨拶をしたくて残っていたわけではない。

「あかりちゃんのことでも聞きたいことがあります」

「どんなこと？」

「足の怪我はもう治ってるんですか？」

「ええ。順調よ」

「そうですか。ありがとうございます」

ということ。あとは勇気だけか。まあ……普通怖いよな。ころや北沢たちのようにみんなが前向きに考えられるわけではない。

「他は大丈夫？」

「はい。俺たちはこれで」

「ちよつと待って！ この後時間あるかな？」

「俺は大丈夫ですけど」

「私も大丈夫です」

「見せたいものがあるから着いてきて」

そう言う看護師さんの後を着いていった。見せたいもの……全然予想がつかない。行ってみるしかないか。

俺と松原は看護師さんと共にある病室へと訪れた。なぜ病院にグランドピアノがあるのかはよくわからないが、その周りに小さい子が集まって歌を歌っている。元アイドルと一緒に。

そして奇遇と言うべきかなんというべきか。

「まさかこんな所で会うとはな」

「そうだね。松原さんが一緒なのは少し意外だけど」

絃翔の用事とはこのことだったんだな。

「毎月何回かこうやってピアノを弾きに來てるんだよ」

「なるほどな。ピアノも出来て歌も上手い。さすが元アイドルだ」

「あはは。お母さんにそういう意識はないと思うけど」



ピアノを弾きながら楽しそうに歌う絃翔の母親に少しだけ、母さんの面影を感じた。……生きていて、出会っていたら。きつと意気投合したんだろうな。

というか元とはいえ芸能人の歌と演奏を生で聴いているのか。しかも伝説のアイドル（萩野情報）の。

そんなことを考えながら演奏と歌を聴いていた時。看護師さんが口を開いた。

「旭日さんが考えた企画なのよ。歌の素晴らしさを伝えたいって」

「母さんらしい話です。自分が歌いたかっただけだと思いますけど」

「自分でも歌いたってよく言ってたのを覚えているわ」

「……そうですか」

どこまで行っても母さんは変わらなかつたんだな。

こうして話を聞くたびに自分の心が締め付けられる思いをする。俺がもつと……ちゃんとしていれば。こんなことにはならなかつた。と。

俺は……本当になにを――。

「今度は僕が弾いてくるから、よかつたら聴いていって」

「そうさせてもらう」

今度はお母さんの方ではなく絃翔がピアノを弾き始めた。そういえば初めて聴くんだよな。絃翔のピアノ。

悔やんだって仕方ないことはわかっている。それでも考えられずにはいられない……俺はまだ一步を踏み出ただけか。

そんなことを考えながら絃翔の奏でる音を聞いていた。

## 第44話 ハロー、ハッピーワールド!

第44話 ハロー、ハッピーワールド!

松原を送った帰り。俺は紘翔と共に帰路を歩いていた。母親とタクシーで帰るのではなく、わざわざ一緒に帰ってくれるのは素直に嬉しい。だが少し申し訳ないとも思う。

「気がついたらいろんなことに巻き込まれてばかりだね。君は」

「そういう星の元に産まれたんだろうな」

「ここまで来るとやはり巻き込まれないようにするのはなく、巻き込まれた時いかにして乗り切るかを考えたほうがいいかもな。」

「あかりちゃんの件だけ。一筋縄じゃないかもね」

「どういう意味だ?」

珍しく心配そうな表情を浮かべる紘翔。

「松原さんが居たから言わなかったけど……あの子、見てわかる通り全く心を開こうとしないんだ。お母さんも悩んでいてね」

「そういうことか。まああれだけ小さな子が居て、1人だけ笑ってなかったら気にもなるか。あの手の子が心を開いてくれるのは一筋縄ではないかない。それは外から見ても容易にわかる。」

「こればかりは俺たちじゃどうしようもない。後は松原たちが上手くやってくれるさ」

「そうだね。どんな方法であかりちゃんを笑顔にするのか気になるよ」

「ある意味、予測不能な奴らだからな」

「そこが良い意味でもあり。悪い意味でもある。今回はそれがよく出ていたと思う。それでもフォロー出来る人間が居る。奥沢さんは酷だろうが、彼女なら出来ると思う。」

「さて、少し寄り道して帰りたいんだが大丈夫か?」

「うん。少し遅くなるとは言ってあるから大丈夫だよ」

「さすが相棒。よくわかってる」

グータッチをかわして俺と紘翔は夕日に照らされた道を歩き続けた。

C i R C L E    ロビー

あれからこころ達に絡まれることはなく。平穏な日常が過ぎていった。

ただそれでも。なにかしら物事が進んでいる……気はするんだ。あの後先考えずに思ったことを実行するころならあり得なくもない話だ。

もしかするともうとつくに解決してたりは……流石に無理があるか。

「またぼーっとしてるわよ」

「ん？ ああ……紗夜か」

今日はスタジオに R o s e l i a が来る日だが……ずいぶん早くなったもんだな。1時間前だぞ。

「自主練か？」

「ええ。空いているスタジオはあるかしら？」

「運がいいな。ちょうど1つ空いている」

特に確認もせずに答えると紗夜の冷たい視線が俺に刺さった。適当なことばかり言っていると思われているだろうか。

「空いていること、確認するか？」

「いいえ。そうではないわ」

じゃあいったい……という言葉を発する前に紗夜が言葉を続けた。

「最近、ぼーっと考え事をしていること。増えた気がする」

「俺がか？ ただぼーっとしているだけだ気に……」

そこまで言いかけて言葉を止めた。

確かに病院に行ってから増えたのかもしれない。でもそれは……後悔とかをしているわけではないんだ。ただ忘れないように思い返してただけで。

それよりも。

「ただぼーっとしているのか、考え事をしているのかよくわかったな」  
「ずっと見ていればわかるわよ」

「……紗夜」

そこまで言ったところで、なぜか紗夜の顔がどんどん赤くなつていった。

「(こ、これじゃあ私がずっと夕のことを……)」

ああ……そういうことか。

「ずっと一緒にいればそれくらいわかるよな」

「……そ、そうだけれど。そうじゃ……ない」

「ん？ 悪い。最後の方聞き取れなかった」

「なんでもない。早く受付を済ませてほしいのだけれど」

なんで若干怒ってるんだ？ 怒らせるようなことを言った覚えは全くないんだが。……単純に練習時間が減るからか。

「悪い。Dスタジオが空いているからそこを使ってくれ」

「ありがとう」

お礼を言つてロビーを離れていく紗夜の背中を横目で見送つてから再び正面に視線を向ける。俺が言葉を詰まらせた辺りから紗夜の後ろに立っていた人物が1人。

なんだか楽しそうだな。ニコニコ笑顔を浮かべて。

「楽しそうだな。早乙女」

「旭日さんは……そういうお方なんですわね」

「どういう意味だ」

それ以上追求しても答えてくれることはなかった。

ロビー

時は過ぎて2時間が過ぎた頃。小休憩で飲むためのコーヒーを自販機で選んでいた。今日は微糖を飲みたい気分だが、いつものブラツクも捨てがたい。

後ろに人が居ることだし、いつものでいいか。

後ろに並んでいたお客さんもどうやら同じものが欲しかったらしい。ちょうど最後の一本だったらしくボタンには売り切れの文字が赤色で光っていた。

「おつ。おつかれ〜美咲ちゃん。今から休憩かい？」

「は、はい。そうです」

「よかったらお茶しない？」

「バイト中じゃないんですか？」

今日は奥沢さんが市野木さんに絡まれているようだ。

「大丈夫大丈夫。いざとなったら旭日が居るし」

「そうですね。俺もいざとなったら市野木さんは仕事もせずにサボってばかりだとチクるしかないですね」

「あー待って待て。冗談だから。な？ 旭日〜目が冗談として捉えてな  
いって〜」

全くこの人は……。しばらく誰も出てこなさそうだしラウンジでいいか。備品のチエック表も確認しないといけないしな。

チエック表を左手に。ブラックの缶コーヒーを右手にソファーに腰を降ろした。少しすると市野木さんに絡まれていた奥沢さんが2人分離れた場所に座った。手には微糖の缶コーヒーが握られている。

「今日はブラックじゃない……」

「はい？」

「いや。ブラックはさつき売り切れたことを思い出した」

「そう…なんですね。一足遅かったです」

奥沢さんはコーヒーを買う時はいつもブラックだったな。

「よければ交換しないか？」

そう言くとキョトンとした表情を浮かべてからすぐに首を左右に振った。

「そ、そんな！ 悪いですよ」

「実はな。微糖の方を買おうと思ったんだが、いつもの癖でブラックを買ってしまってたな」

「あーいつもの癖ですか。……先輩がいいならあたしは構いませんけ

ど」

「決まりだな」

少しだけ嘘をついてしまったが、微糖かブラックで迷っていたから問題ない。奥沢さんがどうかはわからないが。

お互いの缶コーヒーを交換し終え、俺は再び口を開いた。

「大変そうだな」

「そうですね。頭が痛くなる程には……」

あのメンツだしな。無理もないだろう。今度は何をしようとしているのかはわからないが、苦勞せず成し遂げることは出来なさそうだ。ある意味、退屈ではなくなるか……。

「1つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「この前、花音さんに何を話したんですか？」

「大したことじゃない。松原が今なにを思っていて、どうすればいいのかを話しただけだ」

「そうだったんですね」

少なくとも道は1つじゃないことくらいは示せただろう。いったいどんな選択をして進もうとしているんだろうな。周りが周りだから……いや。

土壇場でどうにかしてしまおうのが弦巻、こころという人間か。

「結局今はなにをしているんだ？」

「花音さんに手伝ってもらって曲作ってます」

「ライブか。こころらしい」

「はい……。でもめっちゃくちゃ大変ですけど」

「あのグループで曲作るなんて君にしか出来ないことだと思う。頑張れよ」

それだけ言い残してラウンジを後にした。近いうちライブはするんだろうが……いったいどこでやるつもりなんだ？

病院という単語が浮かんできたが、その可能性もないわけではない。普通は考えられない選択肢。それが残るところがああハロー、ハッピーワールド！ というグループだ。

病院 ロビー

本当にハロー、ハッピーワールド！ というバンドはおかしいのかもしれない。

「まさか病院のロビーでライブを見やるとは思わなかったよ」

「同感だ。話には聞いていたが、実際にやるとはな……」

おそらく奥沢さんが頑張ったか、謎の黒服集団が何かをしたんだろう。後者なら、さすが弦巻財閥といったところか。鋼太さんなら喜んで手を貸すだろうな。

なぜ俺たちが居るかって？ たまたまこころたちと出会って連れてこられた。以上だ。

彼女たちのライブに興味がないわけではないからな。むしろC i R C L E 以外ではどんなライブをしているのか楽しみだ。

噂によるといろんなところでゲリラライブをしていたらしい。どんな場所でも弦巻財閥の力をもってすれば問題なしってことか。

「絃翔〜」

なにやら親友を呼ぶこの声は……。絃翔のお母さんか。何度見ても一般人にはないオーラを感じるな……。

「ライブ終わっちゃった？」

「ううん。これからだよ」

「ならよかった」

会話をかわすと今度は俺の方へと視線を向けてにっこり微笑んだ。

「いつも絃翔がお世話になってます」

「いえいえ。毎日助けられてばかりです」

「本当にね。少しはぐーたらな部分を直してほしいくらいだよ」

「悪かったって」

そんな話をするとう絃翔のお母さんはくすくす笑っていた。

「ごめんなさい。お友達に似ていたからつい」

「いえ。気にしていないので」

どうやら俺と同じような人は身近にも居るらしい。きっとその人もしつこく、厳しく注意されているんだろうな。幸い聞き流すということも出来るからしつこいとは思わない。……だから治らないのか？

すると子供たちを連れだした看護師さんがロビーに現れた。もちろんあかりも一緒に。少し呆れ気味のようだが。

「それじゃあみんなは、座ってねー。あかりちゃんは車いす、ここね」「はぐみちゃんたち、また来たの？」

「そうね。また来てくれたね。なにかたくさん、準備してくれたみたいだよ？」

もう来ないでと言っても、はい。わかりましたで済むような奴らではない。むしろ逆効果まであった。その結果がこうして今から行われるライブ。

あまりやる気を感じられなかった奥沢さんが珍しく頭を抱えていたくらいには、いろいろ準備をしてきたらしいな。

なにやら話しているようだがここからだと聴こえない。

「大丈夫かな」

「まあ大丈夫だろう。心配するべきことは派手に暴れ回ったりしないかだ」

「あらあら、そんな楽しそうことをしてくれる子達なの？」

「お母さん……ここ病院だよ？」

「病院だからと言って、気持ちを伝えることに遠慮をしてみましたはダメなのよ。限度はあるけど」

気持ちを伝えることに遠慮はダメ……か。確かに一理ある。言葉にしたって伝わらないことだってあるんだ。遠慮なんかしてたらなおさら伝わらないか。

そんなことを考えているとライブが始まった。

きつと想いは伝わる。まだ始まって数秒しか経っていないのに、心のどこかではそんなことを感じていた。



ライブ後。すっかり人が居なくなったロビーで俺と紘翔は話しながら横長の椅子に座っていた。

「まさかライブ中にハトが出てくるなんて」

「思いもしなかったな」

普通にマジシャンかと思うほどレベルが高かった。瀬田にあんな特技があったとはな。花びらが舞ったり、ライブ会場の色が変わったりで目まぐるしい演出。こころたちらしいライブだったと。俺は思う。

『できないことなんて、世界にひとつもないのよ！ みんなそれに気づいてないだけなの！』

どうやらその言葉があかりにかなり響いたようで、最終的には自分の足で立つことができた。

敵わないな……こころには。行動と言葉だけで救ってしまう。1人で成し遂げた結果ではなく、5人全員で成し得た結果。仲間の大切さを再認識させられた。

「誰かの力になれるってすごいよね」

「こころまでくるのに強引な部分もあったみたいだが結果的には……力になれる」

「大丈夫。君も誰かの力になっているよ」

「……そうでありたいと願っている」

母さん……俺は俺なりに。出来ることをやっている。間違っしてまうこともあるけど、今は友達が。頼れる親友が居る。

「そうだ。今日の晩御飯うちでどう？」

「父さんに連絡しておく」

最近シフト勤務になって勤務帯が違うからな。今日は遅番で帰ってくるのは夜中だったはずだ。

「じゃあ決まりだね」

「おう」

そう答えて、お互いの拳を突き合わせた。

母さんにも会わせてあげたかったよ。絃翔のことを。

## 第45話 終わりと新たなる始まり

第45話 終わりと新たなる始まり

CIRCLE ロビー

あれだけあつた揉め事は少しずつ片付き平和になった。つまり、ようやくいつも通りの日常が戻ってきたわけだ。長かった……本当に。気がつけば知り合いが次々にバンドを組み、今では4バンド。Afterglowは例外か。高校に入る前から組んでたからな。

今日はお客さんも少ない。ゆっくり考え事をするにはいい機会だ。しかし……。

「珍しいな。早乙女が受付に居るなんて」

「あら、わたくしだってお仕事の1つや2つこなせますわ」

「いつもは気がついていたら居ないだろ」

「今日はそういう気分ですの」

仕事をするしないを気分で決めるのはよくない……よくないが、早乙女はなんと言うか。痒いところに手が届くような人間だ。

適度にサボって、やる時はしっかりとやる子だ。まあ……まりなさんが見ている時、狩場さん及び天堂さんが居る時は、だが。いつも全力では疲れてしまうからな。個人的にはこういうガス抜きは必要だと思ふ。

「ここで働けてよかったです」

「急にどうしたんだ？」

仕事のマニュアルをパラパラめくりながらそんなことを言い始めた。

「……ずっと箱入り娘だったので、こういう外の世界は知らないことばかり。流行りのものや常識を知れてわたくしは満足しています」「まああれだけサボって話ればな……」

「それは旭日さんから仕事のやり方を学んだからです」

「他の人には絶対言うなよ。振りじゃないからな」

後ろ姿しか見えていないが、おそろくいつものニコニコ笑顔を浮かべているんだろうな。

前から思っていたが、お嬢様というだけあって上品だな。1つ1つの動作とか。こころとはまた別のタイプ……いや、あれが特殊なだけか。

勝手なイメージだが、高飛車な感じがする。財閥のお嬢様は。

「旭日さん、あまり話していると」小うるさい子」が来てしまいますわ」

なんというか。時すでに遅しだな。これからめんどろなことが起きるかと思うと、今すぐにでも帰りたくなる。

ロビーに鈴音がやってきたようだ。この2人もまた混ぜるな危険……いや、すでに爆発物みたいな危険なものか。

”小うるさくて”すみません。ですが、仕事中にサボるのはよくないと思えます」

「あらあら。サボりとは侵害ですわ。これも立派な同僚とのコミュニケーション。大事ではなくて?」

「そう言っついてもペラペラおしゃべりしてますよね? お客様とだつて」

1年生組はどうしてこうも互いに仲が悪いんだ……。どちらの言い分も個人的には大事だと思うのが、また注意しづらいところ。

手を動かさなければ、仕事が止まってしまう。サボりにサボって怒られている人を何度も見てきたからな。

コミュニケーションを上手い具合に取ればライブのオフアームしやすくなるだろうし。現にハロー、ハッピーワールド! がライブに出れない時は声をかけてほしいと言ってくれている所もある。

「この前もマナーの悪いお客様にガミガミ言っつて問題になってましたわね」

「それは注意して当たり前なことです」

「言い方というものがあると思えますけど?」

「そ、それは……」

今回は鈴音が押され気味か。

「でもあなただつて、サボりすぎて狩場さん呆れてましたよ?」

「お客様と交流することで集客や参加バンドを増やしているのです」

「ものはいいようですね。バイトをさせてくれているという自覚はないようです」

「うっ……………」

と、思ったら今度は早乙女が。

このままじゃあ、どちらも手付かずで仕事が回らない。ちょうどいい塩梅というものはなかなか見つからないらしいな。仕事よりもこっちの対応の方が最近は困る。

「わかったから。喧嘩ばかりしていると、どちらの言い分も成り立たなくなるぞ」

「旭日先輩はどっちが正しいと思いますか？」

「めんどくさい質問だな……………。この場合どっちにつく必要はないが。」

「どっちも正しい。仕事もコミュニケーションもとらないといけないことがわかってるんだ。あとはやるだけだろ？ 互いに出来ていない部分は補えばいい」

2人が言い返してくることはなかった。出来てない部分がかつているんだろう。個人が苦手なところを出来るようにするっていうのはなかなか難しい話だ。

「なにか反論はあるか？」

「ないです」

「わたくしも」

そこは素直に聞いてくれて嬉しい限りだ。

2人を別々の場所に仕向け、ようやく静かな時間が訪れた。今は絃翔が戻ってきて少し気を抜いている。

「はあ……………」

「どうかしたの？ ため息なんて吐いて」

「早乙女と鈴音が口喧嘩を始めてな」

「あの2人って仲悪いの？」

「いや、人には合う合わないがあるっただけさ」

それを言ったら俺と湊もソリが合わない部分が多々ある。セットリストやライブの演出。醜い争いに結局発展するからあまり多くを語っていないだけで、割と討論している。

「そういえばSPACEってたくんの前のバイト先だよね？」

「そうだが。気になるのか？」

「さつきお客さんがまたオーディションに受からなかったって言うってたから」

「あそこは厳しいからな……。受けるバンドも多いが、落ちるバンドも多い」

「Roseliaはどうなんだろうね」

「……………そうだな」

FUTURE WORLD FES.まで特に大きな大会はないからな。機会があるのならSPACEのオーディションも受けてみるのもいいか。得られるものは必ずあると思うし。

ただ……………いや。バンドに対する、音楽に対する熱意は全員本物だ。大丈夫だろう。

「休憩の時にカフェテリアで話してみる。もうすぐ出てくる頃だろうし」

「休憩だね。ここは僕が見ておくよ」

「話が早くて助かる。あとは任せた」

絃翔にロビーを任せて俺は30分の休憩を取るためにこの場を後にした。

CIRCLE カフェテリア

休憩ついでにとりあえず来てみた方がいいが……………。今日も大変そうだな。主に真宗が。

「オ、オキヤクサマ。お待ちせ……………しております。ご、ご品物をお持ち

しましたです」

女性のお客さん相手に接客をしている。片言になっっているが話せている。……話せているのか？ あれは。

まあそれもそうだろう。なんせ後ろに笑顔を浮かべているはずなのに殺意剥き出しの天堂さんがいるのだから。流石の真宗も殺意には勝てない。

その殺気を察知したのか、早乙女も黙々と接客をしている。やる時はやりますモードってやつか。

「あれー？ 旭日君じゃん」

「ちようどいい所に。もう帰りか、」

「うん。そうだよ？」

タイミング的にはバッチリだったわけだ。

「今って休憩ですよね？ あっ！ もしかして、働かないと落ち着かないってやつですか？」

「あこちゃん……さすがに…それは」

「もはや社畜ね。さすがだわ」

「お前らはいちいち馬鹿にしないと気が済まないのか？」

と言いつつも白金も本当に大丈夫ですよ？ 的な視線を向けている。心配してくれているのはわかるが、そこまで真剣に考えなくても大丈夫だから安心してほしい。その優しさは痛い。

「なら、なぜここに居るのよ」

「何か身近な目標がないかと思ってな。今度、SPACEのオーディション受けないか？」

「SPACE……以前夕がバイトをしていたところよね？」

「そうだ。今のRoseliaなら受かると思う」

大きな目標は依然変わらずFUTURE WORLD FES.で間違いない。だが、さっきも言ったが身近な目標がないとモチベーションにも関わると思った。本当にさっきだが。

「いいじゃん！ どう？ 友希那」

「……少し考えさせて。前向きには考えるわ」

話は決まりだな。あそこは高頻度でライブしてるし先でも大丈夫

だろう。

「あえて言わせてもらう。SPACEのオーディションは生半可な気持ちでは受からない」

「それは旭日が1番わかっていることでしょうか？」

「違くない。これでも一応たくさん落ちたバンドを見てきたからな。警告だ」

ふと一瞬。今井の表情が歪んだ気がする。気のせいだろうか。脅すつもりはなかったんだが。

「話はそれだけだ。俺は休憩に戻る」

「待つて。今日の晩御飯だけだ」

「また用意してくれてるのか？ 悪いが、今日は遅くなるから玄関の前にでも置いておいてくれ」

紗夜の返事を待つこともなく俺は休憩に戻っていった。

毎度ありがたいことだ。いつもコンビニで買うか、家にあるものを食べているだけだからな。なければ食べないで寝ることもある。



「(玄関について……マンションだけど誰かに盗られたらどうするのよ)」

ふと誰もいないリビングで1人食事をする彼の姿が脳裏によぎった。

あまり気に留めたことはなかった。いや……気に留める余裕がなかったせいで見落としていた。父親はシフト勤務で帰宅する時間がバラバラで、会わないことがほとんど。本人も子供ではない。仕事なら仕方ないと割り切っているが……。

本来家族がずっと居ないというのは普通ではない。それが普通になりつつある世の中も本当はおかしいのではないか。

気にすることでもない話。そう思いたいが、いまいち不安な気持ちが拭えない。

「夕先輩って夜ご飯くらい家族と食べないんですか？ お父さんと上



手くいつてないとか」

「宇田川さん」

「こ、ごめんなさい……」

「いえ、怒っているわけではないんです」

つい強めの口調で言ってしまった。彼の詳細な家庭の事情を知らないとはいえ、言わずにはいられなかった。

「こんな時ですけど。みんなも感じませんか？ 夕先輩って壁を作ってるような……。自分のことも全然話してくれないですし」

「他人を……絶対、内側に……入れないって……感じ？ だよね？」

2人が言うことはたぶん間違っていない。彼自身が意図的にやっていることなのか。それとも意図をせずに行っているのか。

「あーなんとなくわかるかも。はぐらかされてる感じもあるしね」

いつの日か彼は息を吐くように嘘を付くようになった。もちろん些細なことなら紗夜はすぐに見抜けるが、大きなこととなると正直わからない。

「あと表情変わらないのもちよつと怖いよね。……そもそも表情変わらないのは元々の？ 紗夜」

「いえ……少なくとも……」

そういつた姿を見せてくれることが当たり前だったから。忘れてしまっていた自分が居たことは事実。

『30分も遅刻。どういうことかしら？』

『悪かったって』

『寝坊？』

『まあ……そんなところだ』

『次からは連絡くらいしなさい』

『そうする。紗夜が優しく助かった』

そう言つて微笑む彼。

よくよく話を聞いてみれば道に迷っている子に道案内をしていたらしい。なぜその場で言わなかったのかはわからない。

「以前は笑っていましたよ」

「そっか……」

「想像出来ないわね。旭日が笑ってるの」

それほど彼の表情はまるで変わらない。あの時自分の思いを吐き出した時でさえ彼は冷静だった。表情一つ変えずに淡々と言葉を並べてくる姿は機械のようにも感じる。

彼が歩いていった方へと視線を向ける紗夜の髪を——風が揺らした。

旭日家 自室 ベランダ

バイト終わり。いつものように風呂上がりにはベランダへと訪れた。今日は先客が居るらしい。

「お疲れ様」

「そつちもな。今日はいろんな意味で疲れた」

「特に大変そうなメンバーではなかった気もするけど」

「そうでもないんだ」

今日あったことを紗夜に話すと少し意外という言葉が帰ってきた。早乙女がサボっているところを見る回数の方が少なかったらしい。紗夜たちは基本カフェテリアの方には出てこないからな。

「俺の話はいい。紗夜はSPACEのオーディションの件、どう思った?」

「私は……受けてみたいと思う。厳しいオーディションだと聞くし」

「そうか。まあいつも通りの演奏なら問題ないと思う。ただステージがいつもとは違うだけだ」

仮に受ければGlitter\*Greenとの共演も観れるということか。鰐部先輩の正体を知ったら驚きそうだな。メガネをかけているか、かけていないかの違いなんだが。

そういえば……この時期なにかあったような気もする。

「紗夜、この時期ってなにかあったか?」

「花女の文化祭？　くらいだと思っけけれど」

「ああそうだ。去年もこのくらいの時期だったな」

文化祭といえど秋とかにあるイメージなんだが……花女は夏休み前という珍しい時期な気がする。屋台はもちろんライブとかもやってたな。母さんが軽音部と一緒に去年演奏していた。

Roseliaは……出るわけがないか。

「これから色々決めないと行けないわね」

「忙しくなるだろうけど、無理はするなよ」

「ええ。タコそもうすぐ花フェスの時期じゃない」

花フェス……うちの高校で開かれる花咲川フェスティバルと呼ばれる音楽祭だ。通称花フェス。去年は生徒会にこき使われたもんだ……。友好関係の花女と羽丘にも出場バンドを募ったり準備で忙しいんだよな。

話を通すのに便利な俺が使いにされてな。まあ仕方ない部分もある。去年の生徒会長はそういう使えるものは使う系の仕事人だったし。

「適当に頑張るさ」

「南雲さんに迷惑をかけないようにするのよ」

「そこは相棒に聞いてみないとわからないな」

「（本当に仲がいいわね。瀬名さんと松風さんは部活や他の友達と居ることも多いから心配していたけど……）」

花フェスまで時間はあるし、その時になったらまた考えればいい。今年も手伝いくらいしかやることはないだろう。

少しでも暖かくなつた風が俺たちの間を吹き抜けていった。

これは始まりの終わり。俺はまた新たな問題へと足を踏み込んでいた。

## Episode 1 過去

Episode 1 過去

とある休日。

紗夜に叩き起こされるといイベントもない日だけあって、俺の朝は平和そのものだった。

今日は暇つぶしを兼ねて買い物に出かけている。ちょうどインスタントのコーヒーもなくなつたところだったしな。

なんて考えながら歩いているともうすぐ駅に着くらしい。人が増えてきた。……できれば知り合いと会うのは避けたい。特に最近はめんどろごとくに巻き込まれることが多いからな。

俺はこの時……まだ気づいていなかった。

過去にちゃんと向き合えていないことを。

☆

ショッピングモール 本屋

ふと視界に入った本に目を奪われた夕は手にとってパラパラと中身を見ていく。時折ページをめくる手が止まったりしたが、最後のページまではそう時間はかからなかった。内容はミステリーのように、ある人物が頭の中に浮かんでいた。

——紗夜が好きそうな本だな。

元の位置に戻し、他にも気になるものがあるかもと店の奥へと足を運んだ。

雑誌のコーナーで気になったのは音楽系のもの。手にとって中身を流し読みで見るのを何冊か繰り返したが特に欲しいと感じるとのはなかった。

一通り雑誌のコーナーを周り終え、文庫本の方へと足を運ぼうとした直後。なんとなく気になつたものが1つ。表紙にはモーターズポーツ特集と書かれていた。

母親の陽子がバイク好きということもあったのか、バイク関係の雑誌に時折紛れていたことをふと思い出し手にとった。途中で飽きたのかここ最近の雑誌ではなかった気もする。

——F1…F2…F3。F4まであるのか。レースと言ってもいろんな種類があるんだな。

実はこういうレースを見に行ってみたいという思いがあったのかもしれない。

雑誌を元の位置に戻して足を進めようとした直後。

「夕？ 珍しいわね。あなたが本屋に居るなんて」

誰かしらに会うとは思っていたが、氷川紗夜とは思っていないかった。休日の今日はギターの練習をしていると踏んでいたからだ。

「たまたまだ。紗夜の方こそ、今日はギターの練習をしてると思ってた」

「少し用事があったのよ。帰ったら練習するわ」

「そうか。じゃあ……」

その場を立ち去ろうとしたが、そう簡単に厄介ごとから逃れることは出来ない。

「そういえば。今度数学の小テストがあると瀬名さんから聞いたのだけれど」

「……それがどうかしたのか？」

「今回は平均点を越えないと補修みたいね」

「平均点くらいなら——」

「65点…前回の点数。そして平均点は70点」

意味はわかるわね？ と言いたげなジト目。無言の圧力。多くは言わない。平均点くらいとれ。聞かなくてもわかっていた。

「前は平均点が高かったんだ。まあ…今回は勉強する」

——今回はって…相変わらずね。

内心呆れているものの、ちゃんとやれば結果は出せることを知っている。そして見張っていないとやらないことも。嫌なことはとことん後回し。それが旭日夕という人間だ。

「なら私も一緒に居ても問題は…ないわね？」

「……別に構わないが」

——そう来たか。どうやら逃げ場ないようだな。  
争うすべはなく紗夜の要求を飲むしかなかった。

ショッピングモール 文房具屋

「ごめんなさい。すぐに済ませるわ」

「わかった」

トートバッグを受け取り、店内に入っていく紗夜の背中を見送った。中身はわからないがそこそこ重い。

ポケットからスマホを取り出した。通知は割と溜まっていたらしく、連絡用のアプリを開いて確認しはじめた。どうやら久しぶりに友人と出かけた涼子からのようだ。メッセージと一緒に添えられているのはケーキや紅茶で、絃翔に向けられたもの。

『このカフェの紅茶たくさん種類あったよ！』

『シンプルにケーキうまそう』

『その色はアッサムかな？ どれも美味しそうだね』

『よくわかったねw』

『紅茶はたくさん見てきたから、なんとなくはわかるよ』

『夕の利きコーヒーみてえだな！』

会話は一旦途切れている。特に自分の返事待ちというわけでもないと思ひ、メッセージアプリを閉じた。

スマホを片手に文房具店の方へと視線を向けると、片手を顎にあて真剣に選んでいる姿が映った。

再びスマホに視線を落とそうとした直後。

「あ、あの……」

過去は再び動き出す。

「旭日…君？　だよね」

その声を聞いたのはいつぶりだろう。すっかり片隅に追いやられていた記憶とは違う容姿に少しだけ戸惑った。

「上島…なのか？」

「覚えてくれてたんだ……」

以前のような元気を感じられる声音ではなかったが、はつきりとわかった。帽子にマスク、上下は黒のジャージ姿だが紛れもない。視線の先には上島朱音、その本人が居る。

「……こんなことを言うのもなんだが。元気だったか？」

「うん。こうやって外に出られるくらいには……まだ怖いけど」

「そうか。ならよか——」

言いかけた言葉をグツと堪えた。ハッキリとした表情まではわからないが、明らかに視線がこちらを向いていない。視線の先を追うために振り返る夕。

わかりきっていたことだが、視線の先にはショッピングに来ている人しか見当たらない。ナイフを振り回す犯罪者がいるわけでもないはずなのに。

いったい何に怯えているのだろうか。

再び彼女の方へ視線を向けた時には、その場にはいなかった。まるで入れ替わったかのように、買い物帰りの紗夜の姿がそこにあった。

「さっき走って行ってしまった人は知り合い？」

「……そんなところだ」

向こうがそう思っていてくれるなら、と毒付いている間に紗夜はその場にしゃがみ込んで紙らしきものを拾った。

「電話…番号？　かしら。アドレスも書いてあったみたいだけど」

「書いてあった？」

差し出された紙を受け取り見てみるとそこには滲んだ数字とアルファベットが書かれていた。

今の一瞬で滲むわけがない。冷えたペットボトルを持っていたわけでも、手洗いの後でもないのだから。思い返せばずっと右手をポケットに入れていた気がする。

「滲んでてなにもわからないな……」

「連絡先よね？ いったいどういう関係なのかしら」

紗夜の問いに夕はすぐには答えなかった。数十秒の沈黙に察したのか再び口を開いた。

「なにかあったのね。今は話さなくても——」

「いや、紗夜には話しておきたい。場所を変えよう」

「無理はしなくていいのよ？」

「そうじゃない。前に進むためにも……必要なことだ」

滲んだ文字が並ぶ紙をそつとシヨルダーバックのポケットに入れた。

——また会えるはずだ。きつと。

## 川沿いの道

駅前のショッピングモールを後にした2人はその足でCiRCLE近くの川沿いの道へと訪れていた。

夕の両手には嫌な顔をされながらCiRCLEのカフェで購入したコーヒー。その片方を紗夜に差し出すと、遠慮しがちで受け取ってくれた。

「どこから話すべきか……」

「あなたの友人関係を把握しているわけではないから、まずはどういう関係か聞かせてほしい」

「友達だ。最初はクラスで顔を合わせたら話す程度の仲だった」

脳裏に浮かぶのは他愛もない話ばかり。朝のホームルームが始まるまでの間や授業の合間の休憩。

ただのクラスメイトから、友達になったのはいつからだろう。彼女の友達が休みの際にはお昼を一緒に食べるようになって。4人で出かけるようになったのは。

「次第に仲良くなつて智樹達と一緒に出かけるようになった。高校1



年の話だ」

「仲が良かったのね」

「今となつては……連絡先も知らないがな。何をしているのかも。なにも……知らない」

ずっとそばで見てきた紗夜にはわかる。いつもと大差ない表情の中ある悲しみが。聞きたいことがいくつも頭の中に浮かんだが、それを1つ1つ聞く勇氣はなかった。彼が再び口を開くまで待つしかできない。

「上島はいじめられてたんだ。俺たちの知らないところで」

「知らないって……そんなに陰湿だったの？　そうであれば気づけるはずよね」

「今なら気づけた、は言い訳だな。紗夜の言うとおり陰湿だった。それに上島は俺たちの前じゃそんな素振りを一切見せなかった」

「暴力はなかった……で、いいのよね」

紗夜の問いに彼は頷くことはなかった。無言は肯定。昔からそうだ。

行き場のないやるせない感情が紗夜の中に傾れ込んでくる。詳細を聞いたわけでもないのにこうなのだから、彼は。いや、彼等はもつとやるせないだろう。

「正直な話をすると俺は詳細な内容を知らない。知る前に逃げ出したからだ」

「1ヶ月くらい連絡が取れなかった期間のこと？」

「そうだ。俺は母さんのことも、上島のことも救えなかった。……全てを投げ出して逃げたんだ」

サラツと独白した内容に思わず、彼を二度見してしまった。おそろく誰にも話していない理由を自分に話してくれたのだ。

「少し待って。あなたは今、重要なことをサラツといわなかった?！」

「なぜそんなに慌てるんだ?」

「今までずっと……話さなかったから。隠しておきたい事だと思ったのよ」

「紗夜ならいいと思った。ただそれだけだ」

他意はない。そうだとわかっていても、嬉しいという感情が湧きあがってくる。なぜそう感じるのかまでは、紗夜自身わかっていない。もちろん「紗夜になら」と言った本人も。

しばらくコーヒーを飲み続けるだけの無言が2人の間を支配した。時折吹き抜ける風が2人の髪や服を揺らす。

「次会えたら……ちゃんと話をしてみようと思う」

「それがいいと思うわ。私も見かけたら連絡しようと思う」

「ありがとな、紗夜」

残り少ないコーヒーをグツと飲み干してから再び口を開いた。

「飲み終わったら帰るか」

「そうね」

彼女が飲み終えるまでの間。夕はスマホをいじるわけでも、急かすわけでもなくなく。じつと遠くを見つめていた。

いつからだろう。彼の隣がこんなにも……落ち着くようになったのは。

妹を妬むようになったあの日から。Roseliaを結成した日から。一步踏み出せた日から。

どれも違う。

「暗くなる前に帰ろう」

ちやうど飲み干して一息ついた頃。そんなことを言いつた。そして、左手を差し出す。

「捨てて来る」

「コーヒー、ありがとう」

「気にするな。俺が飲みたかっただけだ」

空になったカップを両手にカフェの方へと向かって行った。

——少しでも夕の役に立つことが出来れば。

今まで助けられた恩を少しでも返せたら。そう思いながら川沿いの道を並んで歩いた。

## 第46話 お使い

第46話 お使い

旭日家 リビング

朝。

短い休日はあつという間に過ぎ去り、今日も見事に叩き起こされていた。

「毎朝毎朝、寝坊ばかりじゃない」

「努力はしている……」

そんな事を言いながら外の景色を眺めて朝ご飯のパンをかじる。朝から怒っていて疲れないんだろうか、と元凶である彼はふと思う。

「はあ……座って食べることはできないの?」

「こうでもしないと朝ごはんは食べる気が起きない」

「だったらもつと早く起きることね」

「善処はする」

全く出来ていないことを考えると、そろそろ水でもかけられてもおかしくはない。実際は長い説教だろう。考えるだけで恐ろしい。

「遅刻しないようにするのよ」

「わかってる。気をつけてな」

「ええ。夕も」

ガラス越しに映る彼女の姿を眺めていると、ドアノブに手をかけたところで止まった。

「今年も吹祭の手伝い……? をするの?」

「母さんの代わりにな。出来ることは少ないとは思うが」

「そう……私のクラスも」

声小さく最後の方、夕は聞き取れていなかった。

「なにか言ったか?」

「なんでもないわ。それじゃあ」

紗夜を見送ってからTシャツをベッドの上に脱ぎ捨て着替え始める。

——何か伝えたいことがあったんだろうか。

時折、最後の方まで言葉を聞き取れないことがある。聞き返しても決まって『なんでもない』と返してくる辺り、少し気にはなる。

じっくり考えることよりも行動に移したほうがいい。次はちゃんと聞こうという考えを頭の片隅に追いやった。

花咲川女子学園前の通り

旭日夕。高校1年生の頃。

放課後。今日はもれなく資料届けという名のお使いの日。帰り支度が遅かったのと、信号に全て引かかった彼は、花女への到着時刻が大幅に遅れていた。

信号が変わるのを待っていると、彼の後ろを羽丘の生徒が通って行った。ふとそっちの方に視線を向けると、どうやら花女の友達を見つけて走ったらしい。よくよく見れば花女の生徒の片方はどこかで見覚えのある人物。

「途中でシュシュ買って行かない？」

「ライブでお揃いの付けたらよくね？ って話してたの！」

「えー。スタジオの時間に合うかー？」

「いいじゃん！ 可愛いかも」

「じゃあダーシュツ!!」

——元気だな。最近の子は。と言っても俺の最近の子か。

よくよく考えてみれば書類の郵送を1生徒に任せてもいいのか。めんどくさいという思いもあるが、セキュリティ的な意味で大丈夫なのだろうかと思う夕である。書類をなくしてしまったらと考えると怖いものだ。

花咲川女子学園 校内

文句を心の中で済ませた彼は事務所で入館証を受け取り、職員室を

目指していた。時折すれ違う花女の生徒達は特に驚くことはない。主な理由は1つ。花高の男子生徒も部活動や生徒会の仕事で来たりするから。特に剣道部や柔道部は出入りしている。

また1人。前から歩いてくる花女の生徒が。長い黒い髪。俯いているから顔は見えない。

距離が近づくにつれてなぜか左側に寄っていく。避けているのだろう。そして違った直後。何かを落とした気がして、地面に視線を向ける。

「さっきの子が落としたやつ……だよな」

そこにはハンカチが落ちていた。まだ居るかもしれないと歩いていった方へと視線を向けるが、すでに姿はない。

「そんなに怖かったか……?」

中には慣れていない子も居る。男子生徒が居ないから。そう言った理由で女子校に通っている子も多いだろう。

これは母親にでも渡しておけば解決する。ハンカチを拾って再び職員室までの道を歩き始めた。

#### 花咲川女子学園 職員室

「失礼します」

ノックをしてから扉を開けて中へと入ると、ちょうど入り口の近くで母親と他の先生が話していた。

「あら、夕」

「これ、いつもの」

「ありがとね」

その場で渡した封筒を開けて、さらっと中身を確認してくれた。どうやら大丈夫なようだ。

「相変わらず来るのが遅い」

「今日は運の悪いことに帰り支度が遅く、信号に全て引つかかった」

「そう。帰り支度が遅いあたり、来るのが億劫だったってこと?」

「正直に言うとうそになる」

呆れた表情を浮かべる母親の横で、何か話していたのであろう花女の先生は苦笑いを浮かべていた。

文句を言いつつ、必ず仕事は引き受けてくれるのはありがたいことだ。

「帰ったらちゃんと弁当箱出しておきなさい」

「はいはい」

「返事は1回」

「了解しました、母上殿。あ、それとこれ」

さつき拾ったハンカチの落とし物を差し出した。

「落とし物があったから拾った」

「あらそう。ありがとね」

「黒髪の大人しそうな子が落とし物としてた。渡そうとしたらもう居なかったが」

「ん〜……なんとなくわかったから渡しておくわね」

「じゃあ俺は帰る」

後日、無事にハンカチは持ち主に返したという話を聞いた。

## 花咲川高校 教室

そして今。

夕は午前中の時授業を終えて昼休みを絃翔と共に過ごしていた。

小テストの結果をメッセージアプリで紗夜に報告し終え一息つく。

平均点は出ていないが80点は越えたのでひとまず安心していいだろう。

「そういうえばもうすぐ花女の文化祭じゃない?」

「今年も行く?」

「もちろん!」

彼等の近くを通りかかった女子生徒の話がふと聞こえてくる。

「今年こそは花女で彼女作るぞ！」

「お前そう言つて連絡先書いた紙渡してたけど、風紀委員に注意されてたじゃん」

「思い出させないでくれよ……」

「厳しいよなく花女は」

今度は少し離れた位置で話す男子生徒たちの会話。

教室では花女の文化祭。通称咲祭の話題で持ちきりらしい。交流が深いことを考えると頷ける話だ。

そして最後に聞こえてきた話は花女の風紀委員でもある紗夜のこただ。あまりに多かつたからか、彼は去年散々愚痴られたことを頭の片隅で思い出していた。

「文化祭……たくくんは毎年行つてるの？」

「行つてるといふより……連れて行かれると言つた方が正しい」

自ら好んで足を運んだことはない。それでも2人といろんな屋台や出し物に並んだこと、母親と花女の軽音楽部のライブが彼の記憶に強く残っている。あの時の母親は誰よりも楽しんでたということも。

「香澄からなにをやるかは決まってるけど来てくださって誘われてるから行くんだが、紘翔はどうする？」

「僕も行くよ。それにしても……香澄ちゃんらしいね」

「やること決まってるんで辺りがな」

せめてやることを決めてから呼んでほしいと思うがそう言つても聞いてはくれないだろう。

「タ〜！ 助けてくれよ！」

「なんだ急に」

2人の元に訪れるなり机を叩くのは松風智樹だ。

「花女の文化祭午前中から行けねえんだよ！」

「どうでもいい情報わざわざありがとう」

「午後からじゃダメなの？」

「どうせなら午前中から楽しみたいじゃんつてはーなーし」

そんなことだろうとは思つた。いつも騒がなくていいことで騒ぎ、

反応がいちいち大袈裟なのが智樹の特徴と言ってもいい。

「1分1秒でも長く花女の子たちを目に焼き付けねば」

「お前は一度、首でもはねられたらいい。少しはマシな人間になれるぞ」

「物騒すぎる!!」

冗談で片付けるには少しだけ難しいかもしれない。裏を返せば花高に可愛い子はあまりいないという風に受け取る者も居るだろう。もちろんそんな意味としては言っていないのは、夕と絃翔にはわかっている。

「そうだ。生徒会の人を探してたぞ」

「そこは騒いで伝える所だろ」

「そのころは」

「こういう時の生徒会は面倒ごとをついでに押しつけてくる」

「おいおい……………」

今回の要件はもう予想がついていた。花女の文化祭が近い。ヒントはそれだけで十分だ。

手伝いをする事自体は構わないが、本来生徒会側で処理をしないといけないことを毎度押し付けられている感じがしてならないことが引つかかる。

「行かないの？」

「少しからかうだけだ」

「お前たまに意地汚いよな」

「褒め言葉として受け取っておこう」

苦笑いを浮かべる絃翔と智紀。たまに釘を刺さないとあの生徒会長はいつまでも変わらない。現に変わっていないのだから。

### 生徒会室

「と、いうことで。花咲川女子学園からテントなどなどの貸し出し申請書を取ってきて——」



「お断りします」

「ゆ、夕くん……」

とりあえず軽いジャブ程度に断る。

「今日は頑張つて聞いてくれた方だけど相変わらず早いね?!」

「何度も言ってますが、それは生徒会で処理すべきことでは? 力仕事なら喜んで手伝いますが」

「すでにみんな別の案件で忙しくてね。君にしか頼めないんだよ」

「お断りします」

「頑なだね?!」

嘘を吐く人ではない。本当なんだろう。しかし、毎回生徒会の人が居ないのは気がかりだ。

「今日は水曜日だったね。例の日だろう? ついでに頼むよ」

「お断りします」

「今日は一段と頑なだね?!」

いつもより多く断りをいれていると、紘翔が痺れを切らしてしまつた。

「ふざけてないで、受けてあげればいいだろう? 今日は僕も行くんだから」

「今日は諦めるよという言葉を待っていたんだがな」

彼の言う通り、ふざけるのはこちら辺にしておかなければいけない。元々断るつもりもなくなつただ遊んでいただけ。

「放課後までに山梨先生に資料渡しておいてください」

「恩にきるよ」

「それでは失礼します」

快くというわけではないが、引き受けて紘翔と共に生徒会室を後にした。

廊下

——手伝うのは構わないんだが、頑なに俺に頼んでくるのはなんなんだろうか。

「ここまで来るとあの生徒会長は置き物なのではと思ってしまう。現に大半の仕事は副会長が処理しているという噂を耳にする。」

「毎回ああやってふざけてるの?」

「まあな」

見なくてもわかる。隣で呆れ顔を浮かべていることは。

「受けてあげるなら、あそこまでふざける必要はないと思うけど」

「毎行けるとも限らないからな。断れる人間になっておきたい」

「ほどほどにね」

次回は真面目に受けてみようかと考えているとスマホに通知が届いた。結果に対しての返事だろうか。

次は真面目にやりなさい。なんて言葉が頭の中に浮かんできた。

『おたえの作った曲でライブやります!』

『見に来てください!』

新たな唐突な誘いに若干ではあるが困惑した。クライブから日は経っているとしても新曲らしきものが出来るのが早い。才能というものだろうか。

「どうかしたの?」

「いや、香澄たちが文化祭でライブやるらしい」

「また4人の演奏が聴けるんだね」

「そうだな。作曲は花園さんらしい」

話している間に送られてきた写真に視線を向けると、そこには戸山香澄、牛込りみ、花園たえ、市ヶ谷有咲。そして山吹沙綾が写っていた。

今思えばあれからもうすぐ1年経つ。懐かしさと同時に少しだけ……心が痛くなるような感覚が蘇ってきた。

「夕くん?」

「なんでもない。香澄たちの新曲はどんなものになるのかと思ってな」

「この前話してくれた花園さんが作曲なんだね」

「ああ。独特な2人だからな。予想が出来ない」

「意外といい曲になるかもよ?」

「だといいいんだが」

香澄たちの心配もあるが、今は自分の心配もしなくてはいけない。文化祭の準備期間ということは紗夜が居る確率が高い。ネクタイを締めていない、第二ボタンまで空いている。こんな格好では”だらしない”と怒れることは明白。

さすがに学校行事をバンド練習があるからと、ひと蹴りするようなタイプではない。少し遅くまで残って練習に合流。自宅での自主練により力を入れることだろう。

ならば制服をままずきちんと正さなければいけない。

「制服、ちゃんと正さないとね」

「そうだな」

どうやら相棒には筒抜けらしい。

## 除夜の鐘

### 除夜の鐘

「夕。こっちの写真の整理、終わったわ」

「ありがとう。こっちももうすぐ終わる」

今日は紗夜に手伝ってもらって母さんの溜めに溜めた写真の整理をしている。年別、日付別にしてもらったわけだ。写真もよりどりみどりでよ。母さんの中学時代のものから亡くなる直前までの写真。俺だけじゃなく、紗夜や日菜の写真。あとは父さんの写真。本当にたくさんだ。

「意外ね。おばさんならすっかり整理整頓しているかと思ったのだけれど」

「母さんはああ見えて、ガサツなところがあるからな。特に自分のことに関しては」

撮り溜めた写真も例外ではない。おそらく撮って現像してはダンボールに入れていたのだろう。

普通サイズのダンボールから何枚か写真を取り出して、後ろの日付を確認する。これは……。

「除夜の鐘を…聴きに行った時ね」

「そうだな。もう2年経つのか」

取り出した写真は紗夜の言う通り、2年前に除夜の鐘を聴きに行った時の写真だ。今手に持っているのは最後に氷川家、旭日家のみんなで撮ったものだ。

「少し休憩するか」

「そうね」

少しだけ。昔話をしようか。

2年前。

年末。一年の終わり。また、その年の決算や片付けを済ませ、来るべき年の準備をする期間。

正直冬休みだと年末休みという感覚はない。よく母さんは年末休みだーと言っているが俺は学生だしな。

正月。1年の最初の月。また新年を祝う諸行事や、行事の行われる期間だけをいう。

アメリカでは1月1日だけ休みらしい。……正月の休みだけは短いんだなと思つた今日この頃。

みんなはどんな風に年末を過ごしているのだろうか。俺は毎年寝て年を越している。だから今年も……と、言いたいところだが。なにやら日菜が。

「除夜の鐘聞きに行こうよ〜」

「年越しは寝てたい」

中学3年の年末。リビングのソファーに寝転んでスマホをいじつていると、突然日菜が現れてそんなことを言い出した。

そしてなぜ俺も連れて行こうとしているのだろうか。おばさんたちと行くなら俺はいららないと思うんだ。決して行くのがめんどうさいわけじゃ……めんどうくさいな。

「行くのは日菜だけじゃないだろ？」

「そうだよ？ おじさんもおばさんも行くって」

「俺だけ留守番か。まあ問題ない」

それはそれで好都合だ。

「ええ〜。1人でお留守番するの？」

「留守番というか俺は寝てる」

「ホント寝るの好きだよね」

「なんだつたら今も眠い」

まだ夜ご飯も食べてないが。いつでも俺は寝ることが出来るぞ。

なんて言ってもな。日菜を突破しても最終的には母さんを論破しなければ俺は留守番をすることは出来ない。それはほぼ不可能だ。

「あんたも行くの」

「そうくると思った」

なら最初から聞かなくてよくないか？ と最近思うようになった。もうこれはあれだ。無意味なやり取りだ。かと言ってすぐ受け入れるのも嫌だな。

「今年くらいはいいじゃない」

「まあ…今年くらいは」

「煩惱祓ってもらおうといいわ」

108個で足りなかつたらどうしようとか思ったのはここだけの話。おそらく108個も煩惱なんてものは誰でもないと思う。

結局夜遅くに神社に行くことになったわけだが…紗夜は。来るんだらうか。

時は過ぎてあつという間に出かける時間になった。ソファアの上でごろごろしていたら、若干というか。かなり眠くなってしまったな。いつものことなんだが…。 たった1つの救いは珍しくお酒を飲んでいないから、母さんに絡まれることはなかつたってところだけか。酔うと絡んでくるし。

「夕は準備出来たの？ 寝転がってるけど」

「出来てる出来てる」

行く前に着替えるのがめんどろだった俺はご飯を食べ、風呂に入つた後。すぐに出かける服に着替えた。これでギリギリまでごろごろ出来るわけだ。

「じゃあお父さんと外で待ってなさい。すぐに行くから」

「わかった」

流星に防寒着までは着ていられなかつたので、家を出る前に防寒着だけ着た。中学で買わされるウインドブレーカーってやつだな。普段も割と中学校指定のジャージで居ることがほとんどだ。部屋着に着替えるのがめんどくて…。 土日は別だが。

外に出るとすでに氷川家は集合していたらしい。

もちろんそこには言い出しつぺの日菜。それと……あまり乗り気じゃない雰囲気紗夜。

「こんばんは、氷川さん」

「こんばんは。今日は突然ごめんなさいね」

「いえいえ。たまにはいいものですよ」

親同士挨拶をよそに、日菜が俺の元へとやってきた。

「楽しみだね！」

「まあ…少しは。寒いから早く帰りたいが」

「動けばあつたかくなるよ？」

「そこら辺走つてこいと？」

「ゆーくんが走つてるところ想像出来ない」

「あのな。俺だつて走つたりはするからな？」

俺のことをいったいなんだと思つてるんだ日菜の奴。いくらぐーたらでも走らなければ行けない時。つまり学校を遅刻しそうな時くらいは走るぞ。それは間に合う時のみだが……。間に合わない時は諦めて歩く。

「お待たせ〜」

「揃つたし行きましようか」

旭日家と氷川家はこうして時折家族ぐるみで出かけることがある。楽しいと言えば楽しいのだが……。刺さるんだよな。日菜と紗夜のお父さんからの視線が。もちろん何かした覚えはない。

「行こう！ ゆーくん！」

「わかつたから引つ張るな」

本当に。いつも楽しそうだな。

「日菜。夕君を引つ張らないの」

「大丈夫よ。うちの子は頑丈だから」

全然大丈夫じゃないんだが？ 割と日菜の引つ張る力つて強いから普通に痛い。なんて考えていると。

「おつと……！」

日菜の足がもつれて倒れそうになった。それを間一髪なところ

で俺が支える。

「いきなり走るからだ」

「えへへ〜ごめんなさいい」

危ないと思っただけだ。もつと気にしないといけないのに。あまりそういうことをやっているのだな。

母さんたちの前を歩いてきた紗夜がその先に居た俺たちの元に戻ってきた。

「日菜。さっきもお母さんに言われたばかりでしょ？」

おばさん以上に厳しい人から説教されることになる。

「ごめんなさい。おねーちゃん……」

「夕に迷惑ばかりかけないでちょうだい」

「まあまあ。俺は気にしてないから大丈夫だ。……心配してくれてありがとうな」

「私は別に……」

そう言うときを向いて歩いて行ってしまった。紗夜の気持ちはよくわからない。心配じゃなければいいなんだろう。

「あーっ。待ってよ〜おねーちゃん！」

先に行ってしまう2人をじつと眺めながら歩く。

なぜだろう。2人の背中が……ひどく遠く感じる。俺なんかより、優秀で。自分を持っている2人が。少しばかり羨ましかった。俺にはなにもない。才能もなにも。

なにもしてこなかった自分が悪いと言えどもそれまでだが。生きてきた中で自分に才能を見出せなかったんだ。

「夕！ 2人と一緒に居てあげなさい！」

ふとその場で立ち止まって後ろに振り返る。そう言う母さんはなぜか笑顔だった。冷やかしたのだろうか。

それとも。いや……やめておこう。

「わかってるよ」

それだけ言って俺は2人の後を追った。



神社。

割と遠くからでも鐘をつく音が聞こえていたが、こうして近いとさらに大きく聴こえてくるな。

「わく結構居るんだね〜」

「はぐれないようにするのよ」

「はい」

除夜の鐘を聴きに来る人は、割とたくさん居るようだ。一度見失ったら見つけるのは少し苦労するかもな。主に危ないのは日菜と……。

「ちよつとお父さん。すぐあちこち行かないで」

「いや〜珍しくてつい」

普段仕事が忙しいからなんだろうな。こういう風に出かけることもあまりないからな。俺が言うのもなんだけど、親と子供みたいだ。

「ほーら。さっさと行くわよ」

「わかっているよ」

俺たち3人も母さんたちの後を追った。

鐘のある所に向かう道中、ふと日菜が口を開いた。

「そういえばさ。除夜の鐘って108回以上つくところもあるんだって」

「らしいな。場所によるんだっただか？」

「うん！ ここの神社は108回だったけど」

日菜の言う通りで、場所によっては108回以上鳴らすところもある。そもそも除夜の鐘ってなんなんだって思うよな。

除夜の鐘は大晦日の夜に、寺院の梵鐘をつく日本仏教の行事の一つらしい。詳しい話をしてしまうと大変なことになるから、気になった人は一度調べてみるといいかもな。俺も出かける前に少し調べた。

あとはそうだな。108回つくのなら、107回は大晦日について、残り1回は新年につくみたいだ。

鐘の近くに来ると、俺たちと同じように見物客で溢れていた。ちなみに一般の人でも鐘をつけるところはあるらしい。

「音結構すごいね」

「そうだな。疲れそうだ」

「ゆーくんじゃ絶対無理だね」

「こればっかりは言い訳出来ないな」

1回つくだけでも絶対大変なはず。俺だったら10回いかにくらいでギブアップだろうな。体力は少しばかり自信はあるが、筋力なんてほとんどないだろうと思う今日この頃。

みんなで鐘の音を聞いている最中。俺はふと横目で紗夜に視線を向けた。

いつもなら行かないと言うと思った。俺と同じように。理由までは違うと思うが、少なくとも行ってもいい理由があったのだろうか。まあ……いいか。そんなことは。こうして3人で除夜の鐘を聴くことが出来ているのだから。

視線を再び鐘に向ける。

「あけましておめでどうございます」

「あけましておめでどう」

除夜の鐘を聴いているうちに、いつの間にか年が開けていたらしい。あちこちから新年の挨拶が聞こえてくる。俺たちの後ろに居た日菜も母さんたちと新年の挨拶をしているようだ。

「あけましておめでどう。今年もよろしくな」

「あけましておめでどう。こちらこそよろしくね」

初めてか。1番初めの新年の挨拶を家族以外の人にしたのは。

「来年も。また来れるといいな」

「何事もなければ……ね」

「そうだな」

本当に。人生というのは。なにがあるかわからないものだ。

「鐘もつき終わったみたいだし、帰りましようか」

「そうね。さつきよりも冷えてきたし」

言われてみればさつきよりも寒いような寒くないような。

なんて考えていると、さつきと母さんたちが鐘を離れて行った。その後を追うように俺も歩き始める。そして——歩き始めた紗夜が段差か何かにつまずいた。

「あっ……」

「危なっ——」

咄嗟に支えたのはいい。しかし、この状態だと。周りからは完全にハグをしているように見えてしまう。だからと言って突き放すわけにはいかない。

「大……丈夫か？」

「え、ええ……ごめんなさい」

とても顔が近い。整った顔立ちに思わず目をそらしてしまった。いつの間にか、こんなに変わっていたことを俺はずっと気が付かなかったんだな。

お互いの顔があつたのは一瞬だった。

それなのに。その一瞬の時間が……永遠に感じるほど長かった。

幸いにも家族含めて周りには見られていなかったようだ。本当に一瞬だったしな。

紗夜を離すと、足早にその場を離れて行った。

「らしくないな……」

思わず離したくなくなってしまったのは。ここだけの話だ。

最後は思い出したように母さんの持ってきていたカメラで写真を撮った。

「日菜には引つ張り回されてたな」

「変わらないわね、日菜は」

そう言うと、隣に座る紗夜は頭をそつと俺の左肩に乗せてきた。

「そうだな。……だからこそ、俺と紗夜は変わったのかもな」

思い出を振り返るのも。たまにはいいな。

写真をめくりながら、俺も紗夜に寄り添う。

こうして。紗夜と一緒に居られる日々が過ごせるのだから。

## バレンタイン

バレンタイン

紗夜と共に次の写真を見ていくと、懐かしい1枚が出てきた。写っているのはチョコを食べる自分自身と綺麗にラッピングされた贈り物。これはあれだ。

「この写真は……バレンタイン?」

「日付的にそうだな」

一度裏返して日付を確認してから再び表にする。

「中学3年生の時……ね」

「高1の時はもう母さんは居なかったからな」

恐らく体調を崩してからの写真は全くない。少しくらいは撮っておいた方がよかったのかもな。思い出の詰まった写真と一緒にしまっておくのに。

「チョコを食べているの……珍しいわね」

「紗夜から貰ったやつ……だと思っ」

「ちゃんと……食べてくれたのね」

「1番好きな味のチョコだったからな。それに……紗夜から貰ったものだし」

好きな人から貰ったものが嬉しくないわけがない。

そういえば母さんは昔手作りをくれたような気もするけど、最終的に板チョコになった。シンプルでいい。決して作るのがめんどくさくなった。ではないはず。

次の写真は母さんと大量のチョコの箱が映った写真だ。

「昔からこんなに貰っていたのね」

「ちゃんと全部食べるんだから、そこは律儀だな。だいぶ時間は経っていたが」

どの写真もバレンタインらしい写真ばかりだ。と言っても貰ったチョコを写したもののばかりだがな。

バレンタインか……そういえば……。

2月14日。

この日、用事もない俺は部屋で1人。画面に映るある6文字を説明してくれているサイトと睨めっこをしていた。

世間ではバレンタインと呼ばれ、女性から男性へチョコを贈る日……とされているがその実態は違う。独り身の人がカップルに爆発しろと妬む日……でもなく。

第二次世界大戦後まもなく、流通業界や製菓業界によって販売促進のために普及が試みられたが、日本社会に定着したのは1970年代後半であった。

「1970年代……もう少し遅いものだと思っていたが、意外と1900年代なんだな」

毎年2月に売り上げが落ちることに頭をかかえていた菓子店主が企画を発案したと云われている。「女性が男性に対して、親愛の情を込めてチョコレートを贈与する」という「日本型バレンタインデー」の様式が成立したのもこのころであった。

「つまりあれか……お菓子会社の企画が今の風習になったと」

バレンタインってカップルのイベントかと思っただが、元を辿れば意外と違うらしい。考えたお菓子会社はこうなるとは思っててもいなかったんだらうな。

毎年智紀は大量に貰っていたな。運動出来て、人当たりもいいしモテるのも頷ける。だが、俺はこんなにもらったぞ。と言いたげな表情だけは腹が立つ。人が甘いものを好きじゃないことを知っていないが、その顔をしてくるのがさらにな。

ふと時間を見ると、だいぶネットサーフィンをしていたらしい。珍しく午前中に起きたというのにあつという間に午後だ。こんな調子では母さんに怒られてしまう。と言っても母さんは父さんと出かけて居ないが。

「さてと……昼でも買いに行くか」

ようやく重い腰を上げて、俺は出かける準備をした。

準備を終えて（ダラダラしていたらそこそこ時間が経っていた）ようやく家を出た。

ジャージでもいいかと思っただがちゃんとした服装にしたのは、グータラな性格のことを偉いと思う。黒いカーゴパンツに白い長袖。その上に黄色いパーカー。首にかけたヘッドホン。ショルダーバックのいつものスタイル。

氷川家の前を通りかかると、その直後にドアが開いた。

「おっと……」

「夕…?!」

危ない。ギリギリでドアをかわせた。

「紗夜か。そんな驚くことはないだろ?」

「ちようどぼったり会ったものだから」

まあそうなるか。ほぼ通りかかる寸前にドアを開けたみたいだしな。

「紗夜も出かけるのか?」

「わ、私は…ずっと家に閉じこもって居ないか見に行く所だったのよ」

「母さんの差金か」

……なにか隠しているような気もするが、気のせいだろう。母さんめ。紗夜にまでお節介を焼くよう教えているとは。そんなに言われると逆に出かける気が失せるんだよな……。わかってくれる人はわかってくれるはず。

「（こんな所でぼったり会うなんて……。さつと渡そうと思ったのだけれど、これじゃあ無理ね）」

いつまでも話しているわけにはいかないな。もしかしたら母さんが帰ってきてガミガミ言われるかもしれないし。

「じゃあ俺は行くな」

「そ、そう。……気をつけて行くのよ」

「わかってる」

やっぱ……なにかおかしいような。

その違和感の正体に気づくことが出来なかった俺はさっさとこの場を後にした。

## 商店街

まずは昼ごはんだ。いったい何を食べるか……。

商店街に漂う美味しそうな匂い。お好み焼き、パン、コロツケ、それ以外にもたくさんある。

まずは1つ目の候補。やまぶきベーカリーのパン。いつ食べても美味しい。安定の味だ。毎朝食べてる食パンも母さんがやまぶきベーカリーで仕入れてくる。

2つ目の候補。羽沢珈琲店。お昼になるとランチタイムをやっている。普段は母さんとコーヒーを飲みに来たりするんだが、時折ランチタイムを家族で食べに行ったりするんだ。

3つ目の候補。お好み焼き屋さん。店長と母さんが仲が良く、たまに夜ご飯を食べに行く。お好み焼きやもんじやが絶品でな。付い食べ過ぎてしまう。

「あ、夕君。ちようどいいところに」

お昼をどこで食べるか考え込んでいると、出会ったのは涼子だった。

「俺に用があったのか？」

「うん。お昼食べたついでにチョコ渡そうと思ってね」

「そういうことか」

涼子も毎年チョコをくれる。去年はチョコボールキャラメル味。ちなみにチョコボールの中では強いて好きなものを言えばピーナッツだな。

「そうだ。せっかくだし一緒にお昼でもどう？」

「よく昼食べてないってわかったな」

「ん〜直感かな」

伊達に4年間一緒に居るわけじゃないか。俺の思考がわかるんだ



ろうな。たまに先読みされる。それはお互い様だが。

「とりあえず入ろっか」

「そうだな」

どうやら涼子は羽沢珈琲店のランチを選んだらしい。俺としても全く問題ない選択肢だ。

2人でお店の中へと入っていった。

#### 羽沢珈琲店

店内はお昼時を少し過ぎていたからか、席が埋まっているという程ではなかった。それでも8割の席は埋まっている。

「いらっしやいませ。こちらのお席どうぞ」

マスターの娘さんに案内してもらい席に着いた。すごいしつかりしている子で、1つ下の子とは思えない。俺がだらけ過ぎているというのもあるんだが。

「今日はなににしよ〜」

「どれも美味しいから迷うな」

「本当それ」

美味しいものが多いと選ぶのに時間がかかるのは必然的な感じだからな。うちは母さんが終始悩んでいて、1番時間かかっている。俺と父さんはすんなり決めて待つことがほとんどだ。

「今日はパスタにしようかな」

「いいな。俺はチキンライスにする」

「飲み物はどうする?」

「涼子と同じものでいい」

「わかった」

あつという間に頼むものが決まった。これくらいテンポ良く決まるのが良いんだがな。お腹空いてる時ほど早く決めないと、食べきれない分まで頼んでしまいそうになる。

「すいませーん。注文お願いします」

そう言うとすぐに店員さんが来てくれた。

「お待たせしました。御注文承ります」

「ミートソースの Pasta とチキンライス、あとオレンジジュース2つ  
お願いします」

「はい。ミートソースの Pasta とチキンライス、オレンジジュースが  
2つでお間違いないでしょうか」

「はい、大丈夫です」

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文を終えてひと段落した。ふとメニューを見るとバレンタイン  
限定スイーツというデザートがあるらしい。この季節になると割と  
見かける言葉だ。お菓子業界だけじゃなくて、スイーツ業界も同じっ  
てことか。

なんて考えながらメニューを眺めていると、涼子から何かを差し出  
された。

「今年のチョコ。手作りじゃないけど」

「ありがとな。毎年手作りじゃ大変だろ？俺は市販のやつでも全然  
ありがたい」

「あまりチョコもらえない。みたいな言い方してるけど、去年たくさ  
んもらってるじゃん」

「去年のは違うだろ。机の中に入っていたのは俺宛じゃなくて、智紀  
宛のやつだった」

去年バレンタインの季節当たりに席替えがあつてな。たまたま俺  
の席が元々智紀の席だった場所になって、他クラスの人が勘違いでみ  
んなチョコを入れていったんだ。実際、3人で中を見たが全部智紀宛  
だった。思い出すだけで、爆笑していたアイツの笑い声が蘇る。

「毎回自分の席を間違えてた智紀君も悪い」

「二ワトリみたいな脳みそしてるからな。物事によつては」

俺は完全に被害者なわけで。今年はこの季節に席替えなかったか  
ら大丈夫だろう。最初に入れた奴はいったい誰なんだ？

お昼を食べ終えた俺たちは会計を済ませて羽沢珈琲店を後にした。

「じゃあまた明日学校で」

「気をつけてな」

「うん、夕君もね。寝坊しないように」

「頑張ってはみるさ」

涼子と別れた俺は再び商店街をぶらつき始めた。出来れば母さん達よりも後に帰りたい。早く帰ると出かけていたと言っても半分くらい信じてもらえなさそうだし。といつても行きたいところがあるわけでもない。さて、どうするか……。

「とりあえず駅の方に行くか」

何か用事があるわけじゃないが、イヤホンをして駅の方へと向かった。

駅前 ショッピングモール

ショッピングモールの中へと移動してきた俺は人の多さと辺りの景色に圧倒されていた。

どこもかしこもバレンタイン一色。フェアだのなんだの。それにカップルもたくさん居る……。なぜだろう。見ていると、とても不思議な気持ちになる。

羨ましいとか……そんな気持ちじゃない。だってあの人たちはみんなお互いが好きなわけだろ？俺にはよく……わからない。

昔から近くに異性は居たが好きという感情はない。天才が故に一般的な感覚がわからない日菜と、どこか自分を追い詰めているように見える紗夜。どちらも違った意味で心配だ。

異性をを好きになるのは……どんな感じなんだろう。

苦しいんだろうか。それとも……切ないんだろうか。少しもイメージが湧いてこない。

そんなことを考えながら歩いていると誰かに腕を引っ張られた。

一旦立ち止まって、引つ張り主を見る。

「やつぱりイヤホンをしていたのね」

「紗夜……？ どうしてここに」

「用事があったのよ。夕こそ、どうして居るの？」

「俺は散歩？ 暇つぶし？ ってところだ」

イヤホンをしていたから全く紗夜に気づかなかった。おまけに考え事をしていたからなおさらな。

「ぼーっとしながら歩いていると、他の人に迷惑になる。気をつけなさい」

「母さんみたいなことを……」

「何か言った？」

「なんでもない。次は気をつけるさ」

「そう言つてこの前もぼーっと歩いていたじゃない」

「人間出来ることと出来ないことがあるんだ」

「言い訳ばかりしないで」

本当に母さんに見えてきた……。それにこの前つて……いつの話をしているんだ？ 思い当たる節がありすぎてわからん。本当に………見えていないようで見ているところも母さんみたいだな。ここまで言われてなおさない俺も俺だが。

「で、用事つてなんだ？ チョコでも買いに来たのか？」

「ち、違うわ……。参考書を買いに来たの」

「花女つて高等部上がるのに受験ないだろ？」

「ないけれど……勉強よ。成績を落とさないための」

「なるほどな。勉強か……」

俺は今年受験なんだよな。受けるところは一番近い花咲川高校。だが、偏差値が高い。花女と羽丘の滑り止めで受ける人が多いからな。受ける生徒は女子が多いが、部活が強いこともあつてもちろん男子も多い。近いところになんとしてでも行きたい俺は頑張るしかないんだ。

「私よりも。夕の方がキチンと勉強するべきだと思うのだけれど」

「わかつてる。今日だけは現実逃避させてくれ……あとは気合と根性

で頑張るから」

「はあー……しつかりやるのよ」

近くの高校に行くためにもな。そうでなければ朝遅くまで寝ていられない。

帰り道

結局やることがなかった俺は紗夜に着いて行つた。ついでおすすめの参考書を教えてもらつてそれを買つた。

「おすすめの参考書まで教えてもらつて悪いな」

「それでもしないと、全然勉強捗らないでしょう？ 教えたのだから少しは頑張りなさい」

「頑張れるところは頑張る」

「はあー……。キチンとやれば出来るのに……」

ため息の後なんか言つたような……。聞き取れなかつた。

「なんか言つたか？」

「なんでもないわ」

まあいいか。どうせお小言だろうし。今日は散々言われたからな。少しは頑張らないと次は母さんと紗夜の2人に怒られそうだ。……そろそろ真面目に勉強しないと危ないか。

なんて考えながら歩いてしたが、

ふと隣を歩いていた紗夜が居ないことに気づいた。後ろに振り返るとなぜかその場で立ち止まつて俯いている。

「紗夜？ どうかしたのか？」

そう声をかけるとなにやら鞆を漁り始めた。俺はどうとう刺されるだろうか。確かに悪いことはたくさんしてきたが、刺すのは違ふと思う。

冗談を考えていると、ラツピングされた小さな箱を取り出したようだ。

それを持つて俺の方へと歩いてきた。

「これは……？」

「今日は……その…バレン…タイムでしょう？ だから……」

「そう…か。ありがとな」

そう言って受け取る。

なぜだろう……家に帰って開ければいいのに。

「開けても…いいか？」

「え、ええ……」

その場でラッピングを綺麗にとって中身を見る。そこには――。

「ビターチョコレートか」

しかも俺が唯一好んで買うビターチョコレートだ。

「甘いもの…あまり好きではないのでしょうか？ だから……いつも

買ってるやつにしたのよ」

「そうか……」

甘いものは食べられないわけじゃない。ただ自分から進んでは食べないだけで、嫌いではない。そのことは家族にだって言ったことはないんだ。それなのに……紗夜は。

「貰ったチョコで一番嬉しいよ」

チョコを見ながらそう言って、顔を上げるとなぜか頬が赤くなって居る紗夜の姿が。

「顔、赤くないか？」

「な……なんでもないわよー！」

気のせいではないと思うんだが、いいか。

そっぽを向いてしまった彼女が、再び向きなおるのを待ってから口を開いた。

「……本当にありがとう、紗夜」

そう伝えてふっと微笑んだ。

「あの時は恋なんてものを知らなかった。それがわかるのに17年か

かかってしまった」

「それは……お互い様よ」

あれから帰ってチョコを食べていたら写真を撮られた。それが今一緒に見ている写真なわけだ。誰から貰ったのー？ ってしつこく聞いてくきたのが、すく鬱陶しかった記憶がある。そういうのを放っておかない主義だったからな。母さんは。

「そう言えばまだあの箱とラッピング残ってるな」

「ま、まだ残っているの？ 捨ててもよかったのに」

「本当に嬉しかったからな。そう簡単に捨てられなかった」

紗夜がちゃんと俺のことを見ていてくれたことが嬉しかったんだろう。中学の時はそれすらもわからなかったが。

「今年も楽しみにしてる」

「仕方ないわね」

微笑む紗夜を見てから写真をめくった。

## ホワイトデー

ホワイトデー

写真の整理を一通り終えた俺たちはリビングへと移動していた。時間はあつという間にお昼過ぎ。もうすぐ13時に差し掛かるところまでできていた。

やることがあると時間が過ぎるのはとても早く感じる。それは紗夜も例外ではない。時計を見るなり、「もうお昼なのね」と言っていた。

そしてリビングに来るなり、少し慌ただしくお昼の準備をし始めた。普段ならお昼は食わずに昼寝をしているところだが、今日はそんなこともできない。

俺は座っているだけでいいらしい。仕方なくテレビを見ている。

「お腹空いて……いるわけないわね」

「減っているわけでもなく、いっぱいってわけでもない」

「朝、ぎりぎりまで寝てたのだから当たり前だわ」

朝ご飯よりも睡眠派なもんで。まあそんなことを言えば怒られるのは目に見えているが……。

紗夜に視線を向けると、なんだか鋭い視線が向いていた。あまり隠し事は出来ないらしい。

「寝過ぎて逆に体調を崩さないように気をつけるのよ」

「わかってるさ」

なんだかんだ言ってはくるが、結局のところ心配してくれているだけなんだよな。

視線を紗夜からテレビに向けると、なぜかホワイトデーの話をしてきた。今年のホワイトデーは去年の倍は大変だったな。貰った数もそれなりに多かったから、返すのも一苦労だ。

ふと一昨年のことを思い出した。



ホワイトデー。

主にバレンタインデーにお菓子をもたらった男性が、3月14日に相手の女性にお菓子をお返しする日のこと。発祥は意外にも日本だったりする。そして起源はやはりお菓子会社の政策だ。バレンタインというホワイトデーといい考えた人はすごいな。

なんて考えながらリビングのソファーに寝転がりながら天井を見上げていた。

今日は3月13日。明日はホワイトデー。そして買ったものなどない。……つまり大変まずい状況ということだ。

「ゆうーくん。一応聞いておくけど、明日の準備はしたのかなー？」  
珍しく休みの母さんがダイニングテーブルの方から話しかけてくる。さっきまで雑誌読んでただろうに……なんで急に思い出す。

「お母様、明日のことは明日の自分に任せておりますので大丈夫かと」  
なんて、適当なことを言ってみる。あながち適当でもないが。

「今日の自分がなにも出来て居ないのは気のせいかしら？」

「俺がそう何度も同じ轍を踏む人間に見えます？」

「見えてるから言ってるのよ」

おかしいな。完璧に隠せていると思っていたんだが。やはり母親という存在はなんでも見抜いてしまうらしい。恐ろしい……。

「寝てばかりいないで、早く買ってきなさい。貰った数少ないんだから」

「残酷な現実をよく息子に堂々と伝えられるな」

「興味ないでしょ？」

「ないけど」

実際貰った個数は今年と変わらずだった。涼子、香澄、日菜、紗夜の4人。まあ貰っても貰わなくても対して気にはならない。イベントごとには興味ないからな。もらえるものは貰っておく。ただそれだけだ。

ふとちようど1ヶ月前のことを思い出した。紗夜からチョコを貰ったことを。

「イベントに興味がなかったとしても貰ったものはキチンと返しなさい」

「返さないとは言っていない」

「態度が物語ってるわよ……」

ソファアーに寝転がりながら天井を見ているこの行動が、返さない態度に見える？ 確かに動く気は今の今までなかったが。

「後で後でって言ってるから行く気なくなるのよ。お金渡すから早く行ってきなさい」

「はいはい」

「返事は一回」

とりあえず行ってくるでしょう。買うものはショッピングモールで売ってる良さそうなもので大丈夫だろうし。そうと決まれば早速。

こういう時の行動力はあるらしく、さつさと着替えて家を出た。お金とついだからと言って買い物メモを渡されたが……。

#### 駅前のショッピングモール

やはりこういう大型の商業施設に来て正解だ。あちこちでホワイトデー限定やらなんやらやっている。さつさと買って帰ることは出来そう。

しかし、そう上手くいかないのは世の中。たくさんあるものの、種類が多すぎる。正直どれもこれも同じに見えて仕方ない。

ちようど立ち止まった売り場の前に並ぶホワイトチョコレートを見る。そもそもホワイトチョコレートってなんだ？ チョコがただ白くなっただけなのか？ こう言ったことに一切の興味がない俺だが、調べたら面白そうと思う。

商品の隣に置いてあるポップに視線を移す。そこには……ホワイトチョコレートとチョコレートの違いが書いてあった。こんな奇跡があるのだろうか……。

難しいことがたくさん書いてあるが、要するに原料にカカオマスな

るものが入っているかいないからしい。あとはチョコレートの定義的なものが書いてあるが……よくわからん。

カカオ分が35%以上、水分が全重量の3%以下……ただしカカオ分が全重量の21%を下らず……なるほどな。チョコレートにも定義があるってことはわかった。

一旦この売り場を後にして、別の売り場へと向かった。

見れども見れども同じに見える商品の中から選ぶのは至難の技だ。特に俺みたいな奴にはな。これは骨が折れそうだ……。

本当に折れそうだな。あれから1時間彷徨っているが、一向に決まらない。なんでも良いかと思っていた自分をぶん殴りたい。もういつそのことくれた本人に聞いた方が解決するんじゃないかって思う……そうか。なにも難しいことはない。聞けばいいんだ。

決まらなさ過ぎてぼーっと売り場やら別のところを彷徨っていたのはここだけの話。

結局最初の売り場に戻ってきた。ここでお店の人に聞いて……と思っただが。なにやら俺と同じ雰囲気を漂わせる同い年くらいの男が1人。茶色い髪に青色を中心とした服。

すでに片手には2つの箱が。よく見ればこの売り場で1番減っているものだ。つまり売れているということか。

「あのー……もしかして邪魔になってます？」

「あ、いえ」

ふと目が言う。澄んだ青色の瞳。それにどこかで会った気が……。

じっと見過ぎてしまったようだ。もういつそのこと聞いてしまおうか。

「それ、お返しですか？」

「えっ……そうですね……あなたもお返しを探してるんですか？」  
「そうですね」

「これ、おすすめて書いてあったので」  
なるほど。おすすめて書いてあったからか……そんな感じでいいのか？　そもそも俺が難しく考え過ぎていただけ……。

「お返して難しいですね」

「普段あげ慣れていないとそうですね。わかります。でも……」

そう言っていると笑顔で俺の方へと商品を1つ手に取って渡してきた。

「高価なものよりも気持ちのほうが大抵だつて。お母さんが」

「気持ち……か。そうですね。そっちの方が大事ですね」

商品を受け取ると、会釈をして相手は行ってしまった。なんだろう……とても言葉では言い表せないような気持ちだ。

まあ今はそんなことよりも、チョコを買って帰ることが先決だな。だいぶ時間が経ってしまったし。

とりあえず3つだけ買ってこの売り場を後にした。もちろんラッティングをしてもらつて。

残り1つ買って帰りたいたいが……決まらん。なんとなく……紗夜にはちゃんと選んだものをあげたい。考えてくれなかつたら俺の好みなんて知らないと思うんだ。まあそう簡単に決まったら苦労はしてないが。

本人に聞いた方が早いのはわかっている。今度はなんて聞けばいい――

「夕？　こんな所でなにをしているの？」

売り場を見回っていると、ちようどいいタイミングというか。悪いというか。なんとも言えないタイミングで紗夜に出会った。

「いや……バレンタインデーのお返しをな」

「珍しいわね……と言いたいけれど、おばさんに言われて来たのでしょう？」

「まあな……」

よくわかってるな。・・・この際だ。聞いてみるか。

「紗夜、この後何か予定あるか？」

「特にはないけれど……」

「聞きたいことがあってな」

そう言つて今居る売り場の方へと視線を向けた。

「紗夜なら……どれを貰ったら嬉しい？」

「え？」

「いいから」

割と種類が多い中から選ぶのは大変か。俺が同じようなことを言われたら時間かかるな。好きな味がないから余計にな。

そうだ。紗夜もあんまり甘いものを好んで食べているのは見たことがなかったな。コーヒーマもブラックだし。スイーツとかも――。

「これ……かしら」

紗夜が指を差したチョコに視線を向ける。

「これか。少し待っててくれ」

「え、ええ」

指差したものを手に取つて会計を済ませに向かった。本人が選んだものだが……ちゃんと喜んでくれるのか？

不安と期待が入り混じる中、会計を済ませた。ラッピングをしてもらい紗夜の元へと戻る。

「待たせたな。俺はもう帰るんだが……紗夜はどうする？」

「私も用事は済んでいるから帰るわ」

「じゃあ帰るか」

あとは帰りに渡せばいいだろう。それにしてもバレンタインといひ、ホワイトデーといひ紗夜に遭遇する確率が高い気も……たまたまか。

帰り道

紗夜と帰っている時は無言の時間も多い。お互い普段からおしゃべりをする方ではないのもある。別に会話がないことに不満はない。

むしろこの無言すら心地いいと感じる。

だがいつまでも無言というわけにはいかない。なぜならば、さつき買ったチョコを渡さないといけないからだ。ホワイトデーは明日だが……。

「紗夜。少しいいか？」

「どうかしたの？」

「いや……明日渡そうと思ったんだけどな」

一旦立ち止まって袋から最後に買ったチョコを取り出して紗夜に渡した。

「1日早いを受け取ってくれるか？」

「これって……」

「紗夜の好みがよくわからなくてな。どうせなら好きなものをあげたいと思ったから聞いたんだ」

渡したものを受け取ると、紗夜が微笑んだ。

「ありがとう。……ちゃんと考えてくれていたのね」

「俺の好みを知ってくれたからな。逆に知らなくて悪いと思う」

見ているようで、見てなかったんだな。普段からぼーっとして考えことをしているだけだし、言い訳は出来ない。

そもそもなぜ俺は紗夜にだけ……。

「ここまで来て悪い。先に帰っててくれるか？」

「何か買い忘れたの？」

まさにそうなんだよな。お返しに悩み過ぎて大変なことを忘れていた。

「母さんにおつかい頼まれていたのを忘れていた……」

「はあ……早く行って来なさい」

「そうさせてもらう」

全部が全部。上手くいくわけではない。それを思い知った。……後で怒られるんだろうな。

今思えば紗夜のが好きだったから、ちゃんとしたものをあげたいと思っただらうな。その気持ちは紗夜も同じだったんだらうか……。

「夕、お昼の準備終わったわよ」

「今行く」

テレビをつけたまま、ダイニングテーブルに向かうと、用意してくれたのはうどんらしい。

「うどんか」

「一昨年食べたと言ってたじゃない」

「……そうか。よく覚えたな」

「言った本人は覚えていないようだけれど」

「些細なことも覚えてくれてるんだな。ありがとうな」

お礼を言いながら椅子に座った。それにしてもよくうどんなんてものが家にあつたな。正直なにかあつて、なにがないのかは把握出来ていない。特に冷蔵庫に入っていない食材。

「午後も作業でいいのよね？」

「そうだな。まだまだやることが残ってる」

今度は……どんな思い出を、思い出すのだろう。

## 2022年氷川紗夜・氷川日菜誕生日記念回

2022年氷川紗夜・氷川日菜誕生日記念回

CiRCLE ロビー

今日もバイト中に外を眺めていた。

この前少し不思議なことがあったからだ。……あってもなくてもぼーっとはしているが、今は違う。

なぜか日菜に会うとじっと見つめてくるんだ。隠し事を見つけようとしている鋭い視線。

実は紗夜と日菜の2人に秘密にしていることがあってな。これは本人にバレるととても大変なことになってしまう。主に俺が今井と白鷺から叩かれる。

いつも通りに過ごしているはずだが、どこかボロが出てしまっただのかもしれない。

明日3月20日は紗夜と日菜の誕生日だ。RoseliaとPastel\*Palettesの合同で誕生日会を開催することがバレ……しているならまた違った態度になるか。じゃあいい……。考えてもその答えが出ることはなかった。

話は1週間前に遡る。

CiRCLE スタジオ

今日はなぜかとてもスタジオ内が賑やかだ。そしてあまり見ない顔ぶれでもある。

「メンバーは揃ったみたいだから始めよっか」

指揮を取るのは今井リサだ。そんな彼女の隣にはあこと白金の2人。

「あまり時間は取れなくてごめんなさいね」



謝るのは白鷺千聖。そしてその隣には若宮と大和の2人。

そう……なぜかRoseliaとPastel\*Paletteが集まっているんだ。メンバー全員が集まっているわけではないことに意味がある。まあ……リーダーが居ないのはまた違った理由なんだろうな。

「湊さんに言わなくて本当に大丈夫でした？」

「ん〜友希那はぼろつと言っちゃいそうだから、前日に伝えるよ」

まずRoseliaのリーダーである湊が居ない理由はそれだ。誰にも言つてはいけないことを言われてしまうと非常にまずいからな。信じてないわけじゃないんだが……相手が相手だから。

「丸山さんは……」

「彩ちゃんには絶対秘密ね。日菜ちゃんに問い詰められたら言つてしまふもの」

非常に残念な理由でならないが相手が悪かったな。丸山にも悪気があるわけじゃないが、隠し事がいかんせん下手だ。

「とつとと始めるか。紗夜と日菜の誕生日会の話し合い」

「旭日先輩は居て大丈夫なんですか？ 1番近くに居ると思うんですけど」

「旭日君なら大丈夫だと思うよ？」

「ポーカーフェイス。まさにクールな日本人です！」

「イヴちゃん……？ あれはただ単に表情が変わらないだけよ……？」

「おかしい。なぜ急に俺の悪口大会が始まるんだ？ こんなことは全く話が進まないだろ。」

「俺はいいから。さっさと始めろ」

「じゃあまずは場所だね。スタジオは使えそ？」

「終わった後はキッチンと掃除してくれるならどうにかする。まあ心配はしてない」

隠蔽するのはあまり良くないが機材が汚れたりしないようにしておけば大丈夫だろう。Roseliaはお得意様だしな。問題あつても俺が頭を下げてどうにかしよう。

「オツケー☆ 次は……」

「時間ね。私たちパスパレは午後の14時くらいまでなら全員大丈夫よ」

「申し訳ないですけど」

「お仕事なら……仕方ないです」

「丸山も大丈夫なのか？」

「ええ。その日彩ちゃんはレツスンだけだったはずよ」

「友希那もその日は予定ないって」

これで場所、時間、メンバーは大丈夫そうだ。残りは誰が何を準備するか。個人的な作業の話をするとう誕生日プレゼントも用意しないとな。……プレゼント？ プレゼントか。まずいな………全く決まっていないことを思いだした。

「買い出しとかはアタシたちが済ませておくね」

「飲み物とかお菓子？」

「んーそうだね」

「飾り付けとかは……どうしますか？」

後回しにしていたんじゃないかな。どんなものがあるのか考えていただけだ。……どう言っても言い訳にしか聞こえない。

3月に入ってから考えているがまるで思いつかない。本人に聞くのが一番早いんだが……。

「それはこちらで引き受けるわ」

「そうですね。買い物は任せてしまおうわけですし」

「精一杯頑張ります！ それで、旭日さんはどうしますか？」

こういつた誕生日会を極秘で進めているしな。バレてしまつては元も子もない。ただでさえ間の鋭い2人だ。小さな可能性は一つでも潰しておきたい。

「旭日先輩自分の世界に入っちゃってる」

「考え事……かな？」

「無視をするような方ではないです。すごい集中力ですね」

「何を真剣に考えてるんでしょうか」

そもそも毎年なにを贈っていた？ 去年は……ダメだ。覚えてい

ない。こういう時、記憶力のなさを恨む。

記憶に残らないということは自分で真剣に考えて贈っていないかっただらうな。今年はちゃんとしたものを送りたい。特に紗夜には常日頃世話になってるしな。

「はーん。誕生日なにあげようかなって顔だなく☆」

「ええっー?! 旭日先輩まだ決まってるんですか?!」

「考えてたらいつの間にかこんな時期になってしまってるな」

「本当かしら?」

「嘘を付いてもしょうがないだろ。みんなはもう決まっているのか?」

そして全員が頷いた。つまり……そういうことか。俺だけが未だに決まっていないらしい。これは間違いないピンチだ。

「考えてなかったってわけじゃなさそうだね。全く決まってるない感じ?」

「そう……だな」

「そっかそっか。そんなに難しく考えなくて大丈夫。どんなプレゼントでも2人は喜んでくれるよ。特に紗夜はね」

どんなプレゼントでも……か。それが決まらないから苦労している。そう言いたい。だが……本当に喜んでくれる……いや。喜んでほしい。だから、もう少しだけ。ちゃんと考えよう。

「旭日君は置いておいて、他に決めることを決めてしましましょう」  
「はいー」

「日菜さんと紗夜さんに喜んでもらえるよう頑張りましたよ!」  
今井には今度お礼をしないと。ときどきこうして背中を押してもらえるのは……少し不思議な気持ちだ。

それに……いつの間にか。こうして誕生日を祝ってくれる友達がたくさん増えたことに。俺は少しばかり自分のことのように嬉しかった。

いつも家族とお祝いしていて。母さんも毎年プレゼントを渡していたな。俺も出来るだけ渡していた。去年は確か……ペランダでプレゼントを渡したんだっけか。

そうだ。誕生日プレゼントは――。

3月20日 CiRCLE ロビー

今日の作戦はこうらしい。

事前準備として1つ仕掛けた。紗夜にはいつも通り練習でCiRCLEに集合と声をかければおそらく大丈夫だろう。問題は日菜だ。CiRCLEに呼び出す時点で怪しまれてしまう。

そこで日菜には今井から紗夜にサプライズをしたいから上手いことCiRCLEに連れてきてほしい。

紗夜には白鷺から日菜にサプライズをしたいから上手いことCiRCLEに連れてきてほしい。

そう伝えた。隠し事が苦手な紗夜だが、これなら何も意識をすることがなく日菜を連れてこれるだろう。ターゲットが自分からCiRCLEに行こうって誘うんだからな。

怪しまれないように俺はバイトをしている風にロビーに立つ。休みでもよかったが、バイトをしている方が怪しまれないという勝手な推測だ。

いつも以上に外を眺めてぼーつとしているとスタジオから今井がロビーにやってきた。

「旭日君、こっちの準備は終わったよ」

「そうか。紗夜たちもそろそろ来ると思う」

「オツケー。ところでさ、誕生日プレゼントは決まったのかなー？」  
「問題ない。ちゃんと用意したさ」

からかえなかったからか少し残念そうな表情を浮かべる今井。アドバイスくれたのは今井だろう。

川沿いの道の方を眺めていると、どうやら来たみたいだ。

「2人が来たぞ」

「わかった。上手いことお願いね」

「ああ。わかってる」

さてと。下手な芝居をするよりもいつも通り何も知らない風を装っておくでしょう。ここまきたんだ。バレて終わりは嫌だよな。

深呼吸をして、いつもと同じように外を眺め始めた。

### 川沿いの道

時は流れて夜。誕生日会は無事に行われた。もちろんサプライズも綺麗に上手くいった。日菜と紗夜の驚く顔が今でも鮮明に浮かんでくる。後は渡したプレゼントを喜んでくれるか……だな。

終わった後は解散だったが、CIRCLEに人手が足りないということであんなにそのままバイトをすることに。なんとなく予想はついてたから問題ない。結局いつもと変わらない時間になってしまったが。

今頃は家でケーキでも食べてるんだろうな。解散した後、2人で出かけたようだし。不思議と小さい頃より仲が良いように見える。ただ大きく違うのは……そこに自分が居ないということだけ。

「まあ……そんなもんか」

ぼそつと吐き出した言葉は宙へと消えてゆく。ヘッドホンをつけて流れてくる音に耳を傾けながら歩いた。

寂しくないと言えは嘘になる。だが……俺が入ることでまた壊れてしまうのではと。そう思ってしまう。それだけは……絶対に嫌だ。

### マンションの前

夜はまだまだ冷えるようで少し肌寒い。昼間暖かったからそこ

までの厚着はしなかった。こういう気温って1番困るし、めんどくさい。そんなことを思いながら歩き、ようやくマンションに着いた。

しかし……俺の足は止まった。

こんな冷える外で誰かの帰りを待つ人が1人。

「紗夜。どうして外に居るんだ？」

「……そろそろ帰ってくると思って、待っていたのよ」

それはまた悪いことをしてしまった。何時に帰るのか聞いてくれればよかったのにな。

「聞いてくれればよかったのに。何かまずい理由でもあったか？」

「連絡したわ」

「………連絡した？」

ふとスマホを見ると通知が2、3件来ていた。そういえば誕生日パーティーの時から通知を切っていたんだったな。すっかり忘れていた。

「通知切りっぱなしだった。ごめんな、気づかなくて」

「大丈夫よ」

「……怒らないのか？」

「ああいった場ではいつも通知切っているのは知っているわ。それに……それくらいで怒らないわよ」

特に怒っている様子はないが、次からは気をつけよう。寒さは冬ほどではない。それでも少し待たせてしまったのは悪いと思う。それは反省するとしてだ。なぜ待っていたのだろうか。

「俺に用事でもあったのか？」

「プレゼントの……お礼を言いたくて……」

そう言う紗夜の頬は寒いからか。それとも恥ずかしいのか。少しだけ赤くなっていた。その姿に思わずふっと微笑んだ。

結局紗夜にあげたのは白いカーディガン。こういう少し寒い時にも使ってくれればいいなって考えてプレゼントをした。実はもう1つあったりする。

「もう1つあるんだ」

カバンから小物が入っている袋を取り出して、紗夜に差し出した。

「これは？」

「俺が付けているブレスレットの色違い。お揃いのものとか……なかったから」

袋から取り出すとじつと見つめる紗夜。

「ありがとう。すごく…嬉しい」

「ならよかった」

普段からあまりよく見ないのもあるからだろう。こういう時に見る紗夜の笑顔は……すごく素敵だ。ずっと見ていたいほどに。

早速左腕にプレゼントしたブレスレットを付けてくれた。俺の付けているものは母さんから誕生日にもらったものだ。それと色違いのお揃い。紗夜にプレゼントしたのはイメージにぴったりのターコイズカラー。俺のやつは黄色だ。

「大事にするわ」

「そうしてくれると俺も嬉しいよ」

待たせてしまったことは悪かったが、こうして2人きりで渡せたのはよかった。ベランダだといつ邪魔が入るかかわかったもんじやないからな。

そんなことを考えていると、どうやら現れたようだ。

「あれー？ ゆーくん今帰り？」

「ちようどな。紗夜の帰りが遅いから来たのか？」

「まあそんなところ。ゆーくんとお話してたんだね」

「ええ。心配かけてごめんなさい」

「ううん！ 大丈夫！」

「そろそろ帰るか」

いつまでも外に居るわけにはいかない。プレゼントを渡せたことだし、思い残すことはなにもないな。

明日に備えて帰って寝るだけ。そう思っていたが、日菜の予測不能な言葉にその日の晩はすぐに寝付くことは出来なかった。まさか2

人揃って俺の部屋に泊まりにくるとは……。本当に日菜は突拍子もないことを言うな。

最後に……。紗夜、日菜。誕生日おめでとう。



## 2023年氷川紗夜誕生日記念回

2023 氷川紗夜誕生日記念回

花咲川高校 教室

3月上旬の昼休み。

「タくんはプレゼントもう決めたの?」

南雲紘翔の唐突な言葉によって旭日夕は現実には引き戻された。現実逃避をしていた訳ではないが、もうそんな時期かと思ってしまうたのは事実。

3月20日は氷川紗夜と氷川日菜の誕生日。

誕生日プレゼントを必ず用意しないとイケない。というわけでもないが、毎年なにかしら送りあつてきていることを考えると、あげないわけにもいかない。

しかし、旭日夕という人間はギリギリまで決めることが出来ない。氷川紗夜に関して言えば尚更。

「日菜の分は決めた」

「紗夜ちゃんの分は……?」

「まだだ」

「決める気はある?」

「もちろんだ」

嘘をついている様子はない。むしろ真面目に考えている方だろう。投げやりになった時は「終わってないが知らん」と言い出すことを考えたと。

「ずっと一緒に居るが、なにを渡すと喜ぶのかよくわからん」

「(確かに紗夜ちゃんもあまり顔に出さないからね。でも……タくんのプレゼントならなにをあげても喜ぶと思うんだけど)」

かと言って適当なことを言うわけにもいかない。

「今井さんに相談してみるのはどう?」

「めんどくさい事態になりそうだな」

「わからなくもないけど……。白鷺さんはどうかな?」

「もつとめんどくさくなる気がするんだが……。紘翔の言う通り他の誰

かに聞いてみる」

どんな事態になるかは想像つくが、いつまでも迷ってるわけにはいかない。早めに事を進める方がいいことは今までの経験でわかっている。早速2人にほぼ同様のメッセージを送った。

授業中

おそらく返事が返ってくるのは向こうが小休憩の時だろう。そんな事を思いながら、急遽自習になった数学の時間をいいことに外を眺める。

意外と目立たない1番窓際の前から3番目の席。後ろには相棒が居るが、珍しくうたた寝をしている。午後の自習なんてそんなもの。中には突っ伏して寝ているものも何人か見受けられる。

「(プレゼント……)」

直後ポケットに入れているスマホが震えた。

「(今井か)」

取り出す頃には2回は震えていた。届いたメッセージを確認するべくアプリを開くと。

『珍しいこともあるのね』

『あなたがそんな事を聞いてくるだなんて』

『授業中だったらごめんなさい』

相手は今井リサではなく白鷺千聖の方。

『自習だから問題ない』

『どうしてもいい案が思いつかなくてな』

『悪いがどんなのがいいのか教えてほしい』

送って5分もしないうちに次の返答が返ってきた。相手はどうやら授業中ではないらしい。

『問題しかないと思うわ』

『本当になにも思いつかないの?』

『思いついたらこんな相談はしていない』

『それもそうね』

メッセージのやり取りを繰り返すこと5分――。

『どこかへ連れて行ってあげたらいいと思うわ』

『そういう選択肢もあるんだな』

『助かった』

『どういたしまして』

静かにメッセージアプリを閉じ、今度は検索用のアプリを開いた。

授業後。夕は後ろの席に座る紘翔の方へと向いた。

「午後の授業は眠くなるね。少しだけ寝ちゃってた」

「珍しいな」

自分はずっとスマホをいじっていたなんて言った時には小言が待っていてことだろう。

「紘翔。俺は紗夜と出かけることにした」

「えつと……なにがあつたかはわからないけど、いいと思うよ」

そう言ってくれるだけで、それ以上の追求はなかった。

駅前

デート当日。

時は休日の午後。午前中バイトだった為、集合場所は家ではなく駅前。

休日とあつてか、駅前には常に人で溢れかえっている。ちらほら見覚えのある制服を着た人も通っていく。そんな姿を見て、内心「紗夜と2人で居るのを見られると面倒だな」と思う旭日夕。

普段から迷惑をかけている事を考えると、よからぬ噂でさらに迷惑はかけられない。しかし、普段もつとしっかりしようと微塵も思わな

いのは彼の悪い所だろう。

ちなみに今は集合時間の30分だ。

「(10分前に来るだろうと予想して20分前には着くようにしよう  
と思っていたんだが……)」

遅れたら申し訳ないと思い、バイトが終わった1時間後を待ち合わせ時間とした。待たせすぎて紗夜に余計な罪悪感を与えてしまうかもしれない。そこはうまく嘘をつけば問題ないはずだ、と甘い考えに至った。

ふと数日前のことを思い出していた。

C i R C L E Aスタジオ

数日前。Roseliaのバンド練習―ではなく。白金燐子と宇多川あこの2人を引き連れ練習へとやってきた今井リサに突然呼び出された。ちなみに2人は外のカフェに行っている。

「いい? 旭日君。まずは服装を褒めるんだからね?」

Aスタジオに入ってから数十秒も経たずに、リサから突然そんなことを言われた。

「待て。どういうことだ」

「だーかーらっ! 今度紗夜と出かけるんでしょ?」

「そうだが?」

「まず服を褒めること。映画見てる間は寝ないこと。遅刻しないこと。あとは……」

これほどまでにダメな奴認定されているとは思っていなかった。さも出来てないから教えてあげるみたいな感覚で話されていることに、少しばかり憤りを――。

「服を褒めるのはわかった。だが映画見てる間は寝ないはたぶん無理だと言っておく」

感じてはいなかった。

「え〜。そこは頑張る」

「あんな暗い所、寝てくださいと言っているようなもんだろ」

「じゃあなんで映画に……」

そこまで言ったところで口籠る。リサの脳裏に浮かんだのは数日前の出来事。

『ねえ紗夜。映画のチケットいらない?』

『映画のチケット……ごめんささい。映画はあまり興味ないわ』

紗夜がそう答えると困った表情を浮かべながら裏面を見る。

『そつかく。もつたいけど捨てるしかないかな。よくわからないけど、この前やったNFOだっけ? 特典ついてくるんだけど』

『特典……ですか?』

『うん。隣子とあこにも聞いたんだけどホラー系の映画だから隣子だね。見ないと貰えないみたいだし』

差し出されたチケットを受け取りよく見るとそこには。

『この特典は——!』

結局紗夜はチケットを受け取った。特典欲しさに。

「急に黙り込んで、どうかしたのか?」

「ううん……なんでもないよ?」

少しというかかなり怪しいが今は触れないことにした。

「それよりも、映画ってホラーでしょ? それでも寝るの?」

「あの空間自体がダメなんだ。種類は関係ない」

「ん〜。映画以外のところで挽回しよう」

結局デートをする上で気をつけた方が良いことを長々と話されて、休憩時間は潰れた。

そして時は過ぎて15分前。

「夕? 来るの随分早いのね」

今日のデート相手に声をかけられ、ヘッドホンを外す。横から話し

かけられたからか、全く存在に気づかなかった。

「いや、さつき来たところ……だ」

茶色のコート。白色のマフラー。左肩に小さなシオルダーバック。

「(今、服を褒めるのは無理か)」

「夕?」

名前を呼ばれ現実に引き戻された。

「いや、今日も寒いなって」

「寒いって……そう言っていれどマフラーも手袋もしていないじゃないかい」

「ヘッドホンの邪魔になる」

「はあー……毎年毎年聞き飽きたわ」

紗夜が呆れたところで時間を確認し、改札の方へと振り返った。

「行くか」

「ちよつと話はまだ……」

「また今度聞くことにする」

「夕……?」

こうなると長くなることを知っている彼は、手をとって歩き始めた。

「(15分早いが問題ないだろう)」

「(こういう事に対して本当にためらわないわね……)」

昔からそうだ。普通の人間なら躊躇ってしまうようなことも平然とやってのけてしまう。狙ってやっているわけでもない。かと言って100%自然な行動でもない。この場合は。

「(よっぽど小言を言われたくないよね。普段からしつかりしていれば言うことはないのだけれど)」

それはどう足掻いても無理だろう。旭日夕という人間には。

改札を通り抜けて階段を下り、ホームに10号車と記載されている場所まで移動してきた。

「お互い来る時間が早過ぎたな」

「そ、そうね……」

ポケットからスマホを取り出して電車の時間を調べながらそう言

う彼はずっと紗夜の手を握ったままだ。

「決めてなくて悪いんだが映画の後はどうする？ 調べたりはしたが俺にはさっぱりだ」

出かけようと誘ったまではよかったが、その先は微塵も考えられていなかった。特に予定も立てずに行き当たりばったりが彼の性分でもある。

普通は呆れるところだろう。しかし、彼と長い時間を過ごしてきた紗夜にとっては想定内。

「そう言うと思つて、いくつかお店は見つけたわ。コーヒーが美味しいかなカフェも」

「それは助かる。さすが紗夜だ」

スマホから目を離し、彼女に視線を向けてそう言う。

「電車の中で決めましょう。……ずっとスマホ触っていると、手が冷たくなるわよ」

「それもそうだな」

スマホをポケットにしまい、電車が来るであろう方向を眺め始めた。

これでも気づかない。わざとなのか。本当に気づいていないのか。真相は彼のみぞ知るところだを

「離すタイミングを失ってしまった……。まあ嫌なら嫌と言うだろうし、このままでいいか」

結局電車に乗って座るまで離すタイミングはなかった。

### 映画館 3番スクリーン

駅と直結している映画館へと訪れた2人は真つ先にチケットを販売しているレジへと並んで早々に購入。もちろん映画の醍醐味とも言えるポップコーンや飲み物も含めてだ。

席に座って始まるまでの間に流れる広告を夕は眺めていた。

「人が来る前でよかったわね」

「そうだな。とんでもない列になってた」

ちようど人がどつと流れ込んでくる前だったらしい。買い終えて一息ついた頃にはすっかり長蛇の列ができていた。

「特典はの武器は使えそうか？」

「ええ。アンデット系に効果的な片手剣だから、そういった場所では期待できると思う」

「あんまりないからな。アンデット特攻の効果がついた武器って」

「あなたはそういうの関係ないでしょう？ 両刃剣には特攻系のスキルがちゃんと用意されているし」

たまにやっているNFO談義で盛り上がる中、さっきの長蛇の列に並んでいたお客さんが流れ込んできたようだ。

「この映画結構怖いらしいよね〜」

「そうそう！ 評価高いみたいだから楽しみ！」

ちらほらそんな会話が聞こえてくると、顔には出さないが内心少しばかり不安になってくる。驚いた時、隣に座る彼に抱きついてしまわないかも同時に。

「先に謝っておくが、寝たらすまん」

「少しは努力することね」

こうして睡魔との戦いが始まった。

映画が始まって30分。奇跡的にも夕は目を開けていた。しかし、時折スクリーンと左隣を視線が行き来している。

「（意外と力強いよな……痛いし、当たってるしで寝ていられる状況じゃない）」

ゾンビがスクリーンに現れると同時に痛みと気まずさを感じる。

本人は映画に夢中で気付いてない。

他のお客さんに迷惑にならないよう、出来るだけ小さな声で話しか



ける。

「紗夜、もう少し手加減をだな」

「あっ……ご、ごめんなさい」

すぐに左手を離して謝る彼女に視線を向けたまま答えた。

「掴むなどは言っていない。あまり締め付けないでもらえると助かる」

左腕を差し出すと何かゴニョゴニョ言ってからぎゅっと掴んだ。何を言ったのかは追求する必要はないと思いい視線をスクリーンへと向けた。

「(いつの間に掴んでいたのかしら……。でもすぐく落ち着く)」

この日の映画だけは夕が眠ることはなかった。色んな意味で気が気じゃなかったただけかもしれないが……。

### 帰り道

当初の予定を果たした2人は、夕日がほぼ沈んだ夕方の道を歩いていた。

「映画は意外と面白かったな」

「……腕を掴んでいただけで、起きていられるものかしら」

「それは別の意味で気が気じゃなかったというか……」

「どういうこと？」

「知らない方がいい」

結局、紗夜が強く左腕を抱きしめるたびに起こっていたことは気付いていないようだ。

「本当によかったのか？ プレゼントが物じゃなくて」

話をそらすように別の話題を紗夜に振ると、微笑んでから答えた。

「ええ。物をもろうよりも嬉しい」

「ならいいか。男としてこういうことを言うのは情けないが、来年は欲しい物を指定してくれると助かる」

「(来年もくれるってことで……いいのよね?)」

今思えば話す機会がなくなっても毎年誕生日プレゼントだけはもらっていた気もする。ちゃんと渡しなさいと母親から催促されていただけかもしれないが、それでも嬉しい気持ちは変わらない。

「今日はありがとう、夕」

「喜んでもらえたならよかった」

少しだけ勇気を出して。そつと彼の右腕に手を伸ばして腕を組んだ。特に驚く様子もなく、いつもの変わらぬ表情を浮かべる彼の隣を歩く。

誕生日。おめでとう。

## 2024年氷川紗夜誕生日記念回

2024 氷川紗夜誕生日記念回

冬の寒さも薄れてきた 3月。

駅近くのとあるカフェ。窓際の席に少し大きめのテーブルを挟んで座る男性と女性。2人の間にはこれといった会話はない。周りの会話に紛れて聞こえてくるのはノートパソコンのキーボードを叩く音だけ。

音を出している女性に対して、特に手も動かさずにいる男性。行き交う人々の服や髪を揺らす風はまだ冷たそうだ。カフェの窓から外を眺めながら、ふとそんなことを思っていた。

あまりにも眺める時間が長かったのか。とうとう痺れを切らしたようだ。

「手、止まってるわよ」

窓にうつすら映る鋭い視線に思わず背筋が凍る感覚に襲われてる。

「考えてるんだ」

「嘘ばかりつかないで」

一蹴されてしまい重い腰をあげたのか、彼女よりも早いテンポでキーボードを叩きはじめる。

「追加でコーヒー買ってくるわね」

「わかった」

そう言ってから立ち上がる彼女に視線を向けることもなく答える。パソコンの隣に置いてあった空のカップを持って席を立つと、足音がどンドン遠ざかってゆく。

居ないことをいいことに手を止める。という典型的なサボリ癖を出さずになんとか大学のレポートを進めた。

5分もしないうちにカップを2つ乗せたトレイを持った女性が戻ってきた。テーブルに置いてから元の位置に座ると、片方のカップを彼の方へと置く。

「いくらだ」

「お金はいいわ。この前のお礼よ」

「悪いな」

この前というのは以前奢ったカフェ代のことだろう。相手の好意を無駄にするわけにもいかないと思い、ここは素直にお礼を言った。

「紗夜……20日、空いてるか？」

「夜以外なら……」

「そうか。そのまま空けておいてもらえると助かる」

3月20日。

彼女——氷川紗夜にとって特別な日。毎年この日だけは何かしらあると思い、予定を空けていた。今年は高校2年生の時から続けているバンドが事務所に所属したこともあって、少しだけいざこざがあったがどうにかなった。

事務所に所属して前のように大っぴらに彼と出歩くことは出来なくなってしまうが、それでも——たまにこうして一緒に居られることが嬉しい。

『紗夜……』

感傷に浸るといつも思い出してしまう。

『いいタイミングなのかもな』

いつもと変わらないはずの彼の表情が冷たく見える。

『ずっと一緒に——』

嫌だと思うのに。完全に否定出来ない自分が居た。

「どうかしたのか？」

「な、なんでもないわ……」

ふと我に返り、隠すように画面へと視線を落とした。些細な変化でも見つけてくれる彼には隠せない。だがそれでも。

「ならいい。もう少しで終わる。そしたら出よう」

「最初からやればあと30分は早く終わったと思うのだけれど」

「やめてくれ。最初から出来ていたら苦労はしないさ」

変わらないやり取りに少しだけ微笑するとお互い画面へと視線を戻す。この無言の時間さえも心地いい。

叶うことなら……彼のすぐ近くで支えていきたい。この先もずっと。

2日前。

旭日家のリビングへと夕方に訪れたのは氷川紗夜だ。母親の作った夕飯の入ったタッパーを2つテーブルへと置いてから辺りを見回す。

玄関で見た靴は夕のものだけ。彼の父親は仕事で居ないのだろう。リビングに居た形跡もない。

バイトがない日は大抵寝ているか、パソコンでネットサーフィンをしている彼のことだ。部屋にいるのだろうか。

自室の前へと移動して耳を澄ませた。

『海外……ですか？ 俺も一緒に』

「……っ?! 海外……?」

思わず声に出してしまい、慌てて口を閉じる。しばらくしてもドアの開く気配はない。気づかれていないようだ。

『確かに……興味があります。ただ……』

ただの独り言。それで片付けることは出来ない。おそらく誰かと電話をしているのだろう。相手の特定と内容までは特定出来ないが、なんとなく嫌な予感がする。

『C i R C L Eのバイトと大学もありますし、なによりも』

「夕……」

普通なら嬉しいはずなのに。

『今は紗夜の側に居てあげたい』

今だけは。虚しい気持ちでいっぱいだった。

『必ず自分の夢にも繋がるとはわかってはいるんですけど』

時折襲ってくる不安が大きくなる。本当にこのままでいいのか。彼と一緒に居ることが、自分にも相手にも良いことなのか……わからない。

『はい。すみません』

そこで話は終わったのか。声が聞こえてくることはなかった。そ

の場から離れようとしたが、一手遅かったようだ。

「紗夜？」

ちやうど部屋から出てきた夕に見つかってしまった。

「夕飯を持ってきただけよ」

「そうか。もう帰るのか？」

「え、ええ。おじさんは今日遅いのかしら？」

「今週は遅番だ」

帰ってくるのはおそらく夜中だろう。会話が一区切りしたのを見計らい、その場を離れようと口を開いた。今のままではまともに話せないだろう。

「紗夜、明後日は空いてるか？」

「空いてるけれど……なにか用事？」

「レポートを出さないといけなくてな。全く進まない」

「いつものことね……。場所はいつものカフェ？」

「いや、駅周辺で新しいカフェを見つけた。そこなら人のあまり居ない時間を狙える」

「わかったわ。明後日ね」

結局断れずに了承してしまった。あとに彼からいつから居たのかを聞かれたが、バツが悪く感じてしまいはぐらかした。

紗夜とのカフェデートから数日後。RING のカフェテリアでは浮かない表情……ではなく。浮かない雰囲気の方がカウンターからボーツと外を眺めていた。

お客さんは2組。楽しそうに雑談をしているため、呼ばれることはなさそうだ。しかし、隣にムスツとした表情を浮かべながらグラスを拭く同じバイト仲間が1人。こちらの方が刺客かもしれない。

「相変わらずですね。先輩」

「それは、相変わらずやる気がないですねと言いたいのか？ 椎名」

「やる気はいつもないじゃないですか」

「辛辣だな。鈴音でさえもう少し暖かった」

「見捨てられたのでは？」

小さな声でのやり取りを重ねていると、もう1人カウンターへと訪れた。

「お疲れ様。夕くん、椎名さん」

「おつかれ」

「お疲れ様です。南雲先輩」

「態度が急変したが？」

「あはは、いつものことだろ？」

「いつものことだと困るんだが」

冗談を交えつつ会話していると、左手に持っていたタブレットの画面を夕に見せてきた。パツと目に映る情報から思わずため息を漏らした。

R i N Gで行われるライブの日が当初の日付から変わっていた。

「バンドが一枠空いたか……しかも日程の変更まで」

「そこは大した問題じゃないだろ？」

絃翔の言葉に首を傾げる立希をよそに夕は表情を変えずに淡々と答える。

「3月20日。人が少ないうえに俺は休みだ」

「会う約束、してたんでしょう？ 前もって見せておかないと勝手に出てくると思ったからここに来たんだ」

特に話したわけではない。長年一緒に居る彼にはどうやらバレている。その日は紗夜の誕生日で、会うことも。

「それはお前も同じじゃないのか？」

「僕は次の日だから大丈夫」

「容易周到だな。昼間だけでも出るって言う——」

まだ食い下がろうとする彼に意外にも口を開いたのは立希だった。

「よく分かりせんけど、行けばいいじゃないですか。先輩なんか居なくたって凛々子さんも南雲先輩も居ます」

「お前な……」

「他の人に頼れってよく言ってますよね？ 先輩が出来てないじゃない

いですか」

特大ブルーメランに思わず少しだけ表情が歪んだ。成長を感じられて嬉しい気持ちと、言い方をもう少しどうにか出来ないのかと残念な気持ちが交差する。

「わかった……頼ることにする。ホールのことは任せただ椎名」

「えっ?! 先輩! 急に押しつけるのは——」

「すいませーん」

タイミングを狙ったかのようにお客さんから声がかかる。頑張つてと言い残して夕と紘翔はカフェテリアを後にした。

バイトが終わり、帰り際に睨まれたのは言うまでもない。

時は流れて3月20日。

RINGの受付では立希に睨まれる夕の姿があった。

「なにやってるんですか?」

「なにって言われてもな。働いてるとしか言いようがない」

心配だからここに居るわけではない。ちゃんとした理由があるからここに居るわけだが、話をまるで聞く気がない彼女に説明するのは至難の業だ。

「これには深いわけがあつてだな」

「犯罪者はみんなそう言うんです」

「聞いてくれ椎名。用事が午前中だけ潰れたんだ」

「だからってここに居る必要はないですよね?」

「もう1人居ないと受付を回せないだろ?」

ライブは夕方からと言えど、準備というものが存在する。お客さんを放っておくわけにもいかないのがお店というものだ。とりつく島もないとはまさにこのこと。

「だからって先輩じゃなくてもいいと思います」

「今日とはことん食い下がるな。元気そうでなによりだ」



そんな会話をしていると、受付に絃翔が現れた。

「椎名さん、ステージの方で凜々子さんの手伝いをお願い出来る？」

「わかりました」

素直だなという言葉がグツと飲み込み、鋭い視線を向けてきた立希の背中を見送る。姿が完全に見えなくなったのを確認してから、ため息を吐き出した。

「やっぱり午後もダメそう？」

「まだわからない。大丈夫なことを祈るだけだな」

ポケットからスマホを取り出して通知欄を見るが、紗夜からのメッセージや電話もない。

当日にどうしても外せない仕事が入ってしまった、予定をキャンセルせざるを得なかったのは紗夜の方だった。元々無理に入れた休みだったらしく、仕方のないことだと言いつけ聞かせるしかない。

「最近、紗夜の様子がおかしいんだ。だから会って話したかったんだがな」

「心当たりは？」

「たぶん鋼太さんとの話を聞いたんだろうな」

「前に言ってた海外の話だね。ちゃんと聞かなかったのかい？」

「聞いたさ。はぐらかされたし、断ったからそこまで気にしてないと思っただ」

だが現実とは違っていろいろらしい。あの日、レポートと一緒にやった日や、それ以降の態度も少し引かかかることが多かった。

ちゃんと断ったことを伝えるために。誕生日を祝うために会おうと約束した夕だったが、どうやら可能性が少しずつ潰されているらしい。

「ちゃんと伝えた方がいいね」

「そうするつもりさ」

後悔しないためにも。今は信じて待つしかない。

「今日はありがとうございましたー!!」

大きな拍手と共にステージを後にする香澄たち Poppin party のメンバー。そんな姿を夕は会場の端の方で見ている。

『本当にごめんなさい。夜まで終わらなくて……』

『気にするな。紗夜が謝ることじゃない』

『でも今日は……』

『いいんだ。まだ今日は終わってない。終わったら連絡してくれ』

『わかったわ』

淡い希望は消え、メッセージのやり取りはそこで終わった。残念な気持ちはあるが、それを人にぶつけることも、何かに吐き出すこともしては行けない。誰が悪い。そんな話ではないから。

会場を後にした夕はその足で駅へと向かった。3月だと言うのに今日はかなり冷え込んでいるらしい。吐き出す息はほんの少しだけ白い。

改札付近で立ち止まり、広告が映る柱へと背中を預けてヘッドホンで耳を塞いだ。スマホを取り出し、ただその時を静かに待っていた。

ようやく仕事が終わわり、事務所を後にした紗夜は電車で揺られている。送迎を提案してもらったが、1人で考えたいと思い断った。

何事もなければ今頃は……そんなことを考えていたが、あの日の会話がチラつく。本当はこれでよかった。心の底からそう思えてきてしまう。

会って話したい。そんな気持ちすら……今は吐き出せない。

そっと目を閉じて、最寄駅のアナウンスが流れるまで耳を澄ませる。

駅のホームへと降りた紗夜はそのまま改札の方へと歩いた。今日

は早く帰って休みたい。誕生日会があるはずなのに、そんなことを思ってしまうのは今の感情のせいだろう。

改札を通り抜けて、自宅がある出口へと歩いていく。すれ違う人の間を抜けて、駅を出ると同時だった。

左手を誰かに掴まれた。大きく冷たい手。不審者……なんかではない。

「紗夜、シカトはあんまりじゃないか？」

今日ずっと聞いていたはずの声。ゆっくり振り返ると、そこには彼の姿があつた。

「夕……どうしてここに？」

「連絡よこさないからだろう？ だから待ってた」

「ずっと……？」

「そんなわけがあるか。10分前にカフェから出てきたところだ」

嘘つき。こんなにも冷えた手で何を言い出すのだろう。

「帰ろう。今日は冷える」

そつと手を繋ぎ直し、2人は駅を出て行った。

自宅付近の公園に立ち寄り、夕と紗夜はベンチに座っていた。

「ずっと嘘をついていたの……」

「電話の話、聞いてたんだろ？」

「ええ……ごめんなさい」

「いいんだ。紗夜にもちゃんと話すべきだった」

暖かいお茶を両手で包み込むように持ち、俯く紗夜に夕はそつと左手を重ねた。

そして紗夜の右手を軽く持ち上げてあるものを渡す。

「誕生日、おめでとう」

「これは……」

彼がプレゼントしてくれたのはシルバーの指輪。

「センスに対しての文句は避けてくれるとありがたい」

「ありがとう。大事にするわね」

「そうしてくれると嬉しい」

指輪をじつと眺めていると、もう一つ似たような指輪を出した。

「ペアリング？」

「こう言うのもアリかなって思ってたな」

あまり彼らしくないプレゼントに少しだけクスツと笑ってしまっ  
た。

「紗夜、俺はどこにも行かない。だから電話の話は気にするな」

「でも……夕の夢は」

「紗夜と一緒に居ても叶えられる。いや……叶えてみせるさ」

そう言う彼はいつも浮かべない笑みを浮かべていた。

自分にしか見せない、優しい微笑みを。

## 非日常

雪っっているんなことが起きる

雪っっているんなことが起こる

CIRCLE ロビー

「雪だね〜」

「雪ですね〜」

「そうですね。早く帰りたいです」

ロビーに集まる萩野、四十崎さんと共に外を眺めてそんなことを言った。そう……季節は冬で絶賛雪が降っているのだ。近年見ないほどに。雪国からすればそうでもないんだろうな。5センチ積もると言われても。

「今年は結構積もりそうですね」

「そうですね。電車大丈夫かな？」

「まりなさんに言っただけで早めには上がらせてもらった方がよくないですか？」

「旭日君早く帰りたいだけでしょー？」

「こんな日は暖かい部屋で布団に被って寝るのに限る」

「男の子は外で駆け回るものじゃないの？」

「それは小、中学生くらいの子がすることじゃないですかね」

とは言うもののふと去年雪が降った日のことを思い出した。智紀、涼子と共に雪合戦をしたのは今ではいい思い出だな。後半智紀の顔面にだけ雪玉を直撃させ続けたのは爽快感があつてよかった。

「でも寒い日はこたつで暖まるのが一番かもね。猫と一緒にだともっと暖かいんだよ〜」

「四十崎さん、表情緩み切ってますよ」

「私の家こたつないんですよね。ストーブとか暖房ならあるんですけど」

萩野って意外とお嬢様なんだよな。月ノ森通ってるし。

お金持ちの家は床暖房とかあるからこたつとか要らないのかもな。

それとも家によるんだらうか。

こたつと言えば、日菜もよく紗夜に怒られているな。俺も母さんが居た時はよく叱られてたから、一緒に注意されていた。とぼっちりだ。

「この前お友達の家に遊びに行った時思ってたんですけど、こたつで食べるアイスって最高じゃないですか？」

「わかるく。なんでかこたつに入っているとアイス食べたくなるね」

「どんなアイス好きなんですか？」

「バニラアイスをもちで包んだやつが1番好きかな」

「私はチョコ味のアイス。チョコチップ入ってるやつ！」

「夕君は？」

「俺は寝転がりながら食べられるアイスならなんでも」

「夕君らしいね」

寝ながら食べるのをやめなさいと何度叱られたことか。だが辞められないのがこたつや暖かい布団の罪だ。奴らは罪深いんだよ。

「そんなこと言っていると氷川さんに怒られるよ？」

「何で紗夜が出てくる。言われるのは言われるが」

「言われるんだね……」

俺とは違ってしっかりしてるからな。紗夜は。

「でも雪って私たち学生と社会の人や認識違うよね。学校は休みだけど会社は休みにならないし」

「それはあると思います。どれだけ雪が降ろうが、雨が降ろうが休みにはなりませんから。会社によると思いますけど」

もちろん会社によってはリモートとか、出社後は早く帰れと言ってくれるところもある。学校は基本休みになるな。登校後も帰れと言われるし。

だべっているロボットにまりなさんが現れた。

「ちようどよかったよー。雪すごいみたいだから、みんな上がったちゃって」

「助かります。電車止まったら帰れないので」

「その時は私送って行きますよ。今日迎え来てくれるので」

「俺は歩いて帰れる距離なので問題ないです」

早く帰れることに越したことはないからな。あとはこの後シフトに入ってる人にも言わないとか。まだ上がる時間でもないのに上がるわけだし。

「この後シフトに入っている人に連絡——」

そこまで言ったところでC i R C L Eの扉が開いた。

「ユキちゃん?!」

さすが鈴音ユキ。バイトに遅れないよう、早く来たんだな。その心意気は素晴らしい。だが……今日は運が悪かった。

「お疲れさまです。早めに来たんですけど……帰る感じでしょうか」

「まあ……なんだ。そういう時もある」

「私の努力はなんだったんですかー?!」

「あわわわ。落ち着いてユキちゃん!」

この後雪まみれの鈴音をなだめて俺たちバイト組は帰宅した。

そして後日見事に風邪をひいた鈴音ユキだった。当たり前か。

### 旭日家 自室

ある雪の日。今日はバイトもなければ、予定もない。つまり一日中ゴロゴロ出来るわけだ。だから俺は布団で寝ている。

「ゆーくん外で遊ぼうよ」

外は絶賛雪降ってるし、寒いし、眠いしでいろいろ大変だ俺も。

「雪だるま作ろうよ。お願い」

暖かい布団でネットサーフィンをするのも悪くないな。いや、待て。とりあえず二度寝するのが最優先だ。

「起きないとゆーくんがおねーちゃんの悪口言ってたって言っちゃうからね?」

「ないことを捏造するな。俺は1回も紗夜の悪口なんて言ったことはない。もう少し優しく起こしてくれてもいいよなって言ったただけだ」

「そうなのね。じゃあ今度から声をかけるだけにするわ」

「俺が悪かった……せめてゆすつてくれ……」

紗夜まで部屋に来ていたとは。てっきり日菜だけかと思っただが。まあだいたい予想は付いている。同じようにねだられた紗夜が俺のことも巻き込みに来たのだろう。紗夜には悪いがここは退けない。「来週から朝早く行かなくてはいけなくなったわ。これからは日菜にお願いするわね」

「よしわかった。とりあえず着替えるから部屋を出て行ってくれ」「やったー！早くしてね！」

まさか紗夜があんな脅しを使ってくるとは……。毎日日菜に起こされるんじやこっちの身が危険だ。起こすのに飽きて人の部屋漁るし、一緒に寝てたりするしな。毎日遅刻しそうだよ。

用意し終えた俺たちは公園へとやってきた。なぜ公園かって？

日菜が行きたいと言ったからだ。それ以上でも以下でもない。

「すっごーい！こんなに積もってるー！」

「走ると転ぶわよ」

「世の中走らなくても滑る人も居るんだから気をつけろよ」

「どういう意味なのかしら？」

「あまり触れないでくれ」

公園に着くなり走って行ってしまった日菜を眺めながらそんな会話を。周りには小さい子は居ないみたいだな。

「ごめんなさい。夕を巻き込んでしまって」

「構わないさ。暇だったことは変わりない」

「そう……」

日菜と遊ぶのは紗夜1人じゃ荷が重いだらう。見たまんまの元気が有り余ってる奴だ。そつとやちよつと遊んだだけでは満足しない。その子供っぽさが良いところでもあり、時折悪いところでもある。

「おねーちゃん！ ゆーくん！ 雪だるま作ろうー！」



「そうくると思つてな。腕になりそうな木の棒、目になりそうな石、にんじん、バケツは持つてきた」

「ずいぶん準備がいいのね……」

やめてくれ。普段からそれすればいいのにみたいな視線は向けないでくれるか？

「じゃあ、あたしは体作るね」

「俺と紗夜で頭を作ればいいか」

「うん！」

早速雪だるまを作るために小さな雪の玉を作り始める日菜。

「俺たちもやるか」

「ええ。まずは離れた位置から雪玉を転がしましょう」

「そうだな。すでにデカいの作る気満々な奴が居るし」

日菜に大きさを考えるという思考はない。ひたすらに大きなものを作ろうという気概だけは伝わってくる。それを見越して俺と紗夜も大きな雪玉を作り始めた。バランスが良いものが出来ればいいが……。

数分後。

「あはははっ！ 体と頭同じサイズになっちゃったね」

「まさか日菜が規格内のものを作つてくるとは……」

「私としたことが」

それでも割と大きな雪だるまが出来た気もする。なんなら日菜より少し小さいくらいだし。

「2人とも頑張りすぎー」

「お前にだけは言われたくなかった」

そう言つて持つてきた木の棒とバケツ、にんじんを指定の場所に取り付ける。というよりブツ刺した。

「雪だるまとは言い難いが、これでいいだろう」

「そうね。だるまと言うより……だんご？ に近い気もするけど」

「あと一段あれば確かにだん——」

そこまで言ったところで瞬時に雪玉をかわした。

「えーあれかわしたの？」

「横で雪玉作ってるのを見たら誰でも避けるだろ」

2発目も華麗にかわし……。

「ひーなー!!」

避けたら見事に紗夜の顔面に直撃。そして怒り狂ったように日菜と紗夜の雪合戦が始まった。どちらも頭おかしいくらい運動神経がいいから、とんでもないことになっているが。

そして数分後。

「気が済んだか？」

「はあ……はあ……まだよ……まだ引き分けでしょう？」

「当たった回数数えてないんだが？」

「はあ……はあ……あたしもおねーちゃんも32回だよ？」

「なんで覚えてるんだよ……」

俺は2人の熱い戦いについていけない。

めんどくさいし、さっさと終わらせるか。

「次でラス——」

手頃な大きさの雪玉を作って2人に投げつける。

「え？」

「俺の1人勝ちってことで」

「そ、そんな理屈通るわけ——」

「真っ赤な手を見てから言ってくれ。そろそろ帰るぞ」

全く……途中から手袋付けないで雪合戦なんてするからだ。

「カイロ持ってきたから使え」

「えーカイロより暖かいのがいい」

「飲み物なら途中で買ってやるから」

「違うよー」

そう言うとき日菜はポケットに突っ込んでいた俺の左手を無理やり引っ張りだして、握ってきた。すごく冷たいんだが？

「やっぱりゆーくんの手はあったかいね」

「冷たすぎる手だな」

ふと紗夜に視線を向ける。

「……右手でよければ」

「え、ええ……ありがとう」

差し出した右手をそつと両手で握ってくれる紗夜。どちらの手も凍ってしまうような冷たさだ。

「あったかい飲み物買って帰るか」

「あたしコンポタがいい！」

「わかったわかった」

その場で手を温めるだけではなかったらしく、家に着くまでの間両手を握る日菜と紗夜だった。

花咲川高校 昼休み 教室

昨晩の雪がだいぶ積もったようだ。いっぺんして天気は晴れ。積もった雪が徐々に溶け始めているくらいには暖かい今日この頃。

「夕！ 雪合戦しようぜ！」

「おう。気をつけてな」

「わかってるって！ 行ってくる……じゃねえよ！ 夕も行くんだよ！」

「こんな寒い日に外で遊ぶバカがどこに居るんだ？」

「このクラスのみんな」

「そうか。みんなある意味バカだよな」

このまま行くと俺以外のみんなは外に出て雪合戦をするんだろうな。二元気があつていいことだ。

「じゃあ俺は寝るから」

「おいー！ 夕も行くんだって！」

こうして俺は智紀に外まで連れて行かれた。ちなみに次の授業は体育だ。

グラウンド。

珍しく雪が積もっているからか、あちこちで雪合戦が行われている。みんな本当に元気だなー。

「おっしやー！ やるぞ雪合戦！」

「ルールはどうしようか」

「危ないことをしなきゃいいんじゃない？」

「雪玉に石入れるとか？」

「直接攻撃するとか？」

「罵倒するとか？」

「人によってはありじゃない？」

全然有りじゃないと思う。なんだったら公開処刑だろそれ。自分からMですってアピールしてるようなもんだろ。

「そうそう、そんな感じ」

「どんな感じだ」

「チーム分けるために色付けた割り箸持ってきてるよー」

「さっすが」

それはさすが過ぎないか？ もはや雪合戦やる前提で学校来てるよな？ そんなこともあるのか。

「じゃあ出席番号順に引いていってー」

「俺からか」

とりあえず適当に選んで引くと赤色が付いた割り箸だった。

その後も順々に引いていき。

「やっぱり腐れ縁だなオレたち」

「だねー。こころも集まるなんて」

「もはや呪いかもな」

なんだかんだ集まってしまっただな。俺たち3人は。

「そんじゃいつちよかましてやっか！」

「怪我するなよ？ エースストライカー」

「わかってるわかってる」

「期待してるよ」

こうして32人を半々にした雪合戦が始まった。

まあ……たまにはこうして遊ぶのも悪くはないか。ノリの良さだけはどこのクラスにも負けないからな。俺の居る2年C組は。

後半智紀が雪玉を投げるのではなく蹴って次々相手に直撃させ、涼子も元運動部の意地なのか雪玉を相手の顔面に容赦なく当てていった。涼子はたまにこういう怖いところがある。

俺か？ 俺はあれだ。なんかよくわからんが、男子からすごい雪玉が飛んできたからとりあえず避けて雪玉を当てていったよ。

紗夜と日菜という美人と可愛い幼なじみが居ることの嫉妬には気づくことはなかった。

## ケモミミの破壊力は抜群

ケモミミの破壊力は抜群

旭日家 自室

朝。

俺はベッドに横たわったままジト目で見つめてくる紗夜を見ていた。気のせいだろうか。いや気のせいじゃない。なんど自問自答をしたのだろうか……そう思いながらもやつぱり思ってしまう。

気のせいじゃないよな？

何度自問自答したのだろうか。夢なら早く覚めてほしい。いや……これはこれで……待て待て。冷静に考えるんだ。

「やつぱり……変……よね？」

「ちゃんと頬を引つ張ったか？」

「……痛みは感じたけれど」

やはり現実なのか。それならなぜこんなことが起きている？ 目の前に居る紗夜の頭には髪と同じ色の――。

犬耳が生えている。

それだけではない。もれなく尻尾も。

人の心を失くしてしまったと常日頃思う俺だがこれには思わず……可愛いと思った。こういうのは確か……ケモミミというやつか。ネットで見たことがある。

「あまりジロジロ見ないで……」

「いや、いつになったら覚めるんだろうと思ってな。夢だったらどれだけよかったことか」

いろんな意味で。

「今日練習だったよな？ どうするんだ？」

「どうもこうも……このままじゃいけないわ」

「いつそのこと堂々としてればいいんじゃないか？ 隠してる方が違

和感——」

「いい加減布団から出なさい」

被っていた布団を引き剥がされてしまった。こんな大惨事でもしっかりしているんだなとつい感心してしまう。それにしても……紗夜のケモミミは破壊力がありすぎる。いつにも増して見ってしまうな。

「あなたは……こういうのが好き……なの？」

「悪い……つい、な。似合ってるから」

そう言つてベッドから起き上がった。背伸びをしつつ、チラツと紗夜を見るとそっぽを向いていた。しかし、尻尾だけは左右に動いている。嬉しい……のか？ それとも……恥ずかしいのか？

「どうやってC i R C L Eまで行くか」

「いちおう帽子は被ってきたわ。けれど……」

「問題は尻尾か」

耳は帽子でどうにかなるとしてだ。尻尾は……どうしようもないな。上着を着ても隠しきれるかどうか……。

「いつそのことなったらボールみたいに腰に巻き付けるのはどうだ？」

「いろいろ問題よ」

「じゃあどうすれば……」

「ギターケース背負つても見える……よな？」

「後ろは大丈夫そう……ね」

お互い不安しかない。もういつそのこと休んだ方が良いとは思いますが、体調が悪いわけではないしそれは……。と、言うよりその状態で行っても他のメンバーが驚くと思う。

「待て、他のメンバーが見たら——」

そこまで言つたところで俺のスマホが鳴った。かけてきた相手はどうやら今井らしい。とりあえず出てみることにした。

嫌な予感しかしない。

『あ、旭日君……』

「どうした？」

『大変なことになっちゃって……絶対笑わない?』

「笑わない……と言いたいが、内容による」

なんだ。さつきからとてもとても嫌な予感がしてならない。

『じ、実は……アタシと友希那に』

「もういいわかった。今日の練習はやめておけ」

『ちよつとまだ何も言っていないじゃん!!』

「あれだろ? 耳と尻尾でも生えたんだろ?」

『ええっ?! なんでわかるの?! 見てるの?! ど、どこ?!』

「落ち着け。面白いことに紗夜も同じ状態だからだ。タイミングよく電話が来たら誰でもわかる」

なんだか紗夜の視線が鋭いんだが……面白って言ったことにご立腹なんだろう。じゃあなんて表現したらよかった? 非常に残念な状態か?

「あまり予想はしたくないが、おそらくあこと白金もだろうな」

『アタシもそんな気はしてる……』

「いったいどうしたら……」

なるようにしかならないな。

## C i R C L E スタジオ

結局予想は当たってしまい、あこと白金にも生えていた。考えていても仕方ないので、危険を承知でどうにかこうにか怪しまれながら C i R C L E に R o s e l i a が集結した。

そりゃあもうみんなの頭には耳があつて、尻尾も生えてる。何が不思議って普通の耳もちゃんとあるんだからな。

「友希那さんちよー似合ってます!」

「そう?」

「はい! リサ姉も紗夜さんもりんりんも、みんな似合ってるっ!!」

落ち込んでいるのは3人だけ。意外と湊が平気なのはなんでなんだろうと思う。逆に今井が落ち込んでいる。こういう時あこと一緒



に盛り上がってるイメージだが。

「学校どうしよう……」

「このままでは……」

「行け……ないです……よね」

行ったら大騒ぎになることは間違いない。ここまで落ち込むのは、それも仕方ないことだ。ここに来るまでの間、耳と尻尾が生えている人など1人もいなかったのだから。

「まあ……なんだ。そう落ち込むな」

規則性はいつたいなんなのかはわからない。湊、今井、あこには猫系。紗夜と白金は犬系。……学校の問題か？

「音が結構聞こえるから私は気に入ったわ」

「友希那は猫好きだからなく……だから落ち込んでないのかな？」

「呑気に構えてる場合か？ 学校はどうする気だ？」

「行かないわ」

「それはどの類の冗談だ？」

「歌うことに支障がなければいいとは思う。けれど……」

「こうしてないとダメになりそうじゃないですか……?」

俺が悪かった。空元気だったとばかり知らず。

「もう！ どうすればいいの?! どうなっちゃうわけ?!」

「今井さん、落ち着いてください……!」

「焦ったっていいことはない」

「旭日君はいいよね！ 普通なんだから!」

「男に生えたって誰も嬉しくはないだろう」

「旭日君……その発言はちよつと」

「まずはなぜこうなったか考えよう」

耳生えたくらいで逃げたりはしない。今はどうやったら解決出来るのか考えないとな。

「皆さんなにか心当たりがある方は居ますか？」

「って言われてもな」

「寝て起きたらこうなっていたことを考えると、寝ている間に何かさ

れたとしか考えられないわ」

「そうだとしたら……怖い……ですね」

「うん。何されたのかわからないもんね……」

寝ている間の可能性もあるが、それはあまり考えられないな。音もなく侵入することは可能でもなさ無差別ではなくRoseliaを狙ったかだ。意図的な可能性もあるが、そうする理由がわからない。「突然生えたのもうどうしようもないが、理由があるなら考えればわかるかもな。例えば何か飲んだり食べたりして突然変異とか」

「そんなファンタジーなことつてありますか？」

「あくまで可能性だ。他には……」

「魔法……とか」

「白金さんそれは……」

「もう日現実的なことが起こってる時点で否定は出来ない」

「確かに……そうね」

6人居ても答えはなかなか出ない。事例が事例だからな。無理もない

考え続ける中、イヤホンから真宗のヘルプを求める言葉が聞こえてきた。放っておけるわけもない。一旦この場を後にした。

## C i R C L E ロビー

「助かったつす、先輩」

「気にするな。本来は俺が居るべきなんだ」

「そういえば、問題？ は解決したんすか？」

「いいや。全然進展なしつてところだ」

ロビーで団体のお客さんをさばいた後、そんな会話をしていた。間違っても他のお客さんをRoseliaの居るスタジオに入れるわけにはいかない。間違つて案内してしまう可能性もあるしな。

ふと受付の内側の床に置いてあるダンボールが目に入った。

「なんだこのダンボールは」

「俺が来た時からありましたよ？ 先輩も知らないんですね」  
「まあな」

「どうやらガムテープなどで塞がれていないのを見ると、開いているらしい。」

「2人とも、お疲れさまー」

「四十崎さん、お疲れ様です」

「お、お、お……疲れ様ですっ！」

おどおどしていい真宗は置いてだ。

「四十崎さん。このダンボール知ってますか？」

「ダンボール？」

「これなんですけど」

床から持ち上げてカウンターの上に置いた。中身を確認すると、なにやらラベルの付いていないコーラのようだ。本数は5本。

「あーこれね。昨日ころちゃんのお兄さんが持ってきたやつだよ」

「鋼太さんが？ なぜですか？」

「ころちゃん達と一緒に来て……ロシアンコーラを作ったからバイト仲間でぜひって」

「あの人は……またくだらないものを作って」

ロシアンコーラってなんだ？ ハズレがものすごく不味いんだろうけど。それにしても本数が足りないな。ここにあるのは5本。残り5本はどこに行った？

「本数足りませんよ？」

「それは……昨日Roseliaに匠君が配ってて」

「あの人も勝手なことばかりして」

「で、でも市野木先輩も悪いことをしたって謝っていましたよ？」

「ダメだ。処刑する」

「物騒だなく」

全く。これだからナンパバカは。バイト仲間でって分けられたものを勝手に他の人に渡すなんて……な？

「まさか……な？」

「どうかしました?」

「スタジオに戻る」

「了解です」

こんなにも仮説が外れてほしいと思っただことはない。

C i R C L E スタジオ

扉を開けて中に入ると全員の視線が一気に集まる。

「昨日ラベルの付いてないコーラ飲んだ人は手を上げろ」

無言で全員手を上げた。どうやら決まりらしい。

「よかつたな。元に戻るぞ」

「ほ、本当?!」

「嘘だったらどうなるか……わかっているわね?」

「大丈夫だ。今呼ぶから待ってろ」

とりあえず全ての元凶である鋼太さんに電話をかけて、すぐにC i R C L Eに来てもらうように頼んだ。

「いやくまさかR o s e l i aに耳と尻尾が生える日が来るとは」

そう言つてゲラゲラー1人笑う鋼太さん。俺を含めた6人の冷たい視線が刺さっていることも知らずに。

「笑い事じゃないですよ」

「すまんすまん」

中でも紗夜と湊だけは本当に怒っているんだろう。オーラがすごいというか……。まあそんなことに気づくわけもないのが鋼太さんなんだが。

「えつと……わたし達がもらった……コーラが外れ……だったって……  
ことでしょうか」

「そそ。ホントにたまたまだと思っけど。今回は運がなかったな」  
「もう変なもの置いて行かないでくださいよ！」

「作ったら試したくなるのが発明家だからな。後悔は微塵もない」  
「少しは反省してください」

全くもって反省の様子は伺えない。だが、元に戻る薬は元々作って  
いたらしいからすぐ戻るだろう。その準備の良さは完璧と言っ  
べきか。

「本当に元に戻るんですかー？」

「疑っているのか？ 宇田川妹よ」

「少しだけ……」

「大丈夫だ。変化する薬と元に戻る薬は既に自分の体で試している。  
もちろん戻れた」

自分の体で試す。これもまた鋼太さんのすごい所だ。戻れなかつ  
たらいったいどうするんだろうか……。

「じゃあグイツと行って行って」

疑いの眼差しがある中それでも飲むしかないのが現状。諦めて5  
人が一斉にコーラを飲んだ。

そして……不思議なことが起こった。5人の体が光ったと思っ  
たらみるみるうちに元の姿に――。

「戻ったー！」

「あこも！」

「わたしも……戻りました」

「耳と尻尾はもうないようです」

4人共元に戻ったか。これで一件落……4人？

「待て……1人戻ってないのがないか？」

「え？ そ、そんなこと……」

なんだか嫌な予感がするんだが。

「みんな急に大きくなってしまったけれど大丈夫かしら？」

下の方から声が聞こえてきた。全員がそこに視線を向ける。

「ゆ、友希那が……」

「猫になってますよ?!」

「これはどういうことですか?!」

「そ、そんなことが……ありえるんですか?!」

「焦るな。ただ単に猫に……」

なるのか?・普通。ならないよな。

「あれ?・元に戻るやつじゃなくて、さらに成長させるやつだったのかな?」

「鋼太さん……」

結局、湊はちゃんと戻れたがしばらく5人は……いや、俺も含めてコーラを飲むことが出来なかったのは言うまでもない。

## 梅雨は帰ってもらって

梅雨は帰ってもらって

花咲川高校 教室 昼休み

6月後半を過ぎるとこの時期がやってくる。大半の人が嫌いなのではないだろうか。そんなことを思いながらその時期の名前を口にする。

「梅雨か……」

そう……梅雨だ。ここ1週間はほぼ雨。朝少しの間だけやんでいた気もするが、気がつけばまた雨が降っていた。

「洗濯物乾かなくて困るー」

「主婦かお前はって言いたいけど、靴下とか乾かないよねー」

「雨の時の登下校だるい」

「傘が邪魔だよな」

「わかる」

「なあゝ夕。外で練習出来なくて退屈だゝ」

「雨の中サッカーするのは良くないもんね」

「こういう時でも室内のスポーツはいいよな。体育館だし」

とまあ智紀と涼子もこんな感じだ。智紀は特に雨の日はテンションが低い。サッカーをすることが生きがいみたいなのだからな。

「体育館でサッカーするとかどう？」

「お前、窓ガラス何枚割る気だ？」

「カッパ着てサッカー！」

「どうせ途中で脱いで風邪ひいて終わりだ」

「グラウンドに屋根を作る!!」

「将来校長になってから頑張ってくれ」

智紀の言うことをことごとく粉砕していく。俺は間違ったことを言っているつもりは一切ないと思ってる。それでもやりたい時はどこかのスポーツが出来た施設に行つてフットサルでもやってくればいい。と、言ったら本当に行つて知らない人たちと1日フットサルをしてきたと言っていた。

「あーあ。部活早く終わるしこんな時は彼女とデートしたいわー」

「サッカーと添い遂げるとか言ってた奴がなにを抜かすんだ」

「サッカーすることが好きな彼女ならいいとかも言ってたよね?」

「だって彼女とサッカーしたいじゃん?!」

「サッカーバカ」

一人でキーキー騒ぐ智紀をよそに俺は外を眺め始めた。ひたすらに降り注ぐ雨は止まることを知らない。梅雨という季節が1番嫌なのははじめじめするところだろう。

「はあく。こんな天気だし、紗夜と相合傘して帰りたいな」

「怒られても知らないよ?」

だが俺は梅雨が別に嫌いではない。外で何かをする用事はバイトと学校以外はないからな。確かにじめじめするし、傘は邪魔だがこれが1年中続くわけでもない。

「去年は迎えまで来てくれて……好きになっちまいそうだ」

それに雨が降っている時はなんだか静かに感じていい。

「今年も来てくれないかな」

こういううるさい奴が居るから静かな日常が送れないのか。人が黙っていることをいいことに少し調子に乗っているようだ。

「3回は耐えたからな?」

「つ、次は……どうなるんだ?」

「ぶっ飛ばす」

「わ、悪かったって」

微塵も思っていないようなことを言うわけがないだろう。

「でも去年は相合傘したのは事実だろ?」

「良いもんでもない」

「どうして? 結構人気なイベントじゃない?」

イベントって……ゲームじゃないんだぞ。

「俺の場合は小言付きだぞ? それに肩は濡れるし、自分のペースで歩けないし、良いことないだろ」

「(ちゃんと歩幅合わせて、濡れないようにしてあげてるんだ)」

1つ始まると10終わるまで続くからな。困ったもんだよ全く。



あつちこつちから話を持ってくるもんだから、把握してないことまで言われる始末だ。

「人生に一度くらいはしてえなく」

「じゃあ俺がしてやろうか？」

「せ、せめて涼子ちゃんに……」

「私はパスで」

こういう時こそ、断られてて草って言うんだろな。

今年は折りたたみ傘持ってるし大丈夫だろう。紗夜も忘れるような性格ではないし。智紀の望むような展開はない。

放課後。

「夕くん、バイト行こうか」

「そうだな。今日は面倒なコンビはいないし楽そうだ」

帰り支度をしていると紘翔がやってきた。言葉の通り、今日は混ぜるな危険コンビはいない。ここ最近喧嘩の頻度が増した気がしてならないんだよな。

「よし、今日もがんばるかー」

「あまりやる気のない言い方だね……」

「そういう時もある」

そういう時しかないでしょ？ と紘翔の言葉を背に、ベランダに立ち寄る。

「紘翔のはこれか？」

「うん。ありがとう」

傘を取ってから教室を後にしようとした直後。

「最悪、置き傘誰かに取られた」

「傘持ってこなかったわけ？」

「朝は親に送ってもらったし、その時雨止んでたからさ」

「折りたたみ貸そうか？ って言いたかったけど家に干しっぱなしで

置いてきたわ……」

俺たちよりも後に傘を取りに行ったのであろうクラスメイト2人の話が聞こえてきた。

「夕くん？」

「廊下で待っていてくれ」

「わかった」

リュックから折りたたみ傘を取り出してクラスメイトの元へと向かった。

「折りたたみ傘でよければ貸すぞ」

「え？ マジで？」

「明日ちゃんと返してくれるならな」

「もちろん返すって。ホント助かる」

「旭日君優しく」

「じゃあ俺は帰る」

廊下に出て外を見ると、昼よりかは雨が弱まって見えた。このままやんでくれたらいいんだけどな。傘を差さずにCiRCLEまでいける。

## CiRCLE ロビー

案の定、雨はやまなかったがそこまで強くもなかったから足元もあまり濡れずに済んだ。

「2人ともお疲れ様」

「お疲れ様です」

ロビーに行くときまりなさんが珍しく受付の仕事をしていた。

「珍しいですね。まりなさんが受付に居るの」

「そうかな？ 昼間は割と受付に居るよ」

「この時間はバイトに任せられますもんね」

「うん。今日は後、李乃ちゃんと奈葉ちゃんだから安心」

紘翔はともかく俺は安心の部類に入るんだな。受付に居る時なんてほとんどぼーつとしているんだが……。

「そうだ。夕君にお願いがあるんだけどいいかな？」

「なんですか？」

「倉庫の整理を虚生君がしてくれてるから手伝ってきてほしいの」

「わかりました。手が足りなかつたら呼んでください」

「うん。お願いね」

俺はロビーを後にして倉庫の方へと向かった。

手伝ってきて欲しいってことは処分するものとかが結構あるんだろうか。……そういえば備品の予備は数えたりしているが、いらぬものの整理はしていないな。

予備の機材等が置かれている倉庫に来ると、中で狩場さんが1人そこそこ量のある傘を整理していた。

「お疲れ様です、狩場さん」

「旭日か。手伝いにきてくれたのか？」

「はい。……結構数ありますね」

壊れた傘がほとんどだが、壊れていないのもいくつも見受けられる。単純に忘れていったものなんだろうな。

「去年から整理していないらしい。傘もそこそこあるし」

「この傘ってどうするんですか？」

「全部処分だ。ゴミの日に出さないとな」

外のゴミとかを置いておく倉庫に置いてくるとしよう。手前ものから出していかないと広げられないしな。

「傘、外の倉庫に置いてきます」

「悪いな。頼んだ」

10本くらいで束ねられた要らない傘の束を持って今度は外の倉庫へと向かった。

C i R C L E    ロビー

倉庫の整理を終えた俺はロビーに戻った。狩場さんは他にやることがあると行って喫煙所の方に行ってしまった。おそらく休憩だろう。

「お疲れ様、夕君。結構大変だったでしょ？」

「それでもなかったです。狩場さんが整理して俺は運んでいただけなので」

「どうやらロビーにはまりなさんしか居ないようだ。」

「いつまで雨降ってるんだろうね〜」

「明後日には一旦やむみたいですけど」

「明後日かー。洗濯物乾きづらくて困るのよね」

「そうですね。教室でもそんな話をしましたよ」

この季節はみんな思うことは一緒か。うちはすぐに乾燥機を使うから乾かないってことはあまりなかったな。俺含めて家に居る時間が短い人ばかりだったし。

気がつけばもう上がる時間だ。いた今日は特にこれといった問題は起きなかったな。毎日こんな平和ならいいと思う。が、そうもいかないのがC i R C L Eという場所だ。

「紘翔、先上がるぞ」

「うん。お疲れ様」

「お疲れ」

まだ外は雨が降っているようだ。やむ気配はないか。

なんて考えながらC i R C L Eを出るとそこには――。

「紗夜？」

「夕…バイトお疲れ様」

「お疲れ。遅くまで残っていたんだな」

「ええ。区切りの良いところまでやっていたらこんな時間になってしまった」

「なるほどな」

遅くまで練習していた理由はわかったが…なぜ帰らないんだろ  
うか。スタジオには他に知り合いは居ないはずだし。

ふと傘立てを見ると傘が1本もなかった。

「傘ないのか？」

「誰かに持って行かれたようね」

「とんだ不届き者がいたもんだ」

そのまま帰るわけにもいかないしな。かと言って一緒に帰るとなると……。

頭によぎったのは智紀の望むような展開にはならないという自分の言葉。今まさにそういう状況になりつつある。

折りたたみ傘はクラスメイトに貸してしまったしな。廃棄する傘  
の中に使えそうなものもないと言っていた。

仕方ない。意地を張るところでもないしな。

「帰るか」

「えっ？ 帰るって言われても……」

「いいから」

傘を差して一歩踏み出してから振り返った。

「帰る方向同じなんだ。構わないだろ」

「そうだけれど……」

濡る紗夜の右手をとって無理やり傘の中に入れ、出来るだけ紗夜が濡れないように左手で持って歩き始める。

「去年も……同じようなことがあったわね」

「俺が傘を忘れた時だな」

「雨降っていないからって傘も折りたたみ傘も持たずに学校へ行くからよ。時期を考えれば持っていくでしょう？」

「傘な……俺はあまり——」

「手荷物は好きじゃない。だったら折りたたみ傘くらい持ちなさい」  
紗夜には敵わないな。まるで未来を見ているかのように、俺の行動を全て予測してしまう。

「今年を持ってたが、あいにく貸してしまっただけ」  
わかるのは俺も同じなんだろう。遠慮しているのか、距離が少し遠い。それでは肩が濡れてしまうのに。

付き合っているわけでもないのに、こういう行為自体が良くないのかもしれない。周りからはどう見られているのかはわからないからな。

少しだけ左側に距離を詰めた。

付き合っていると思われても俺は嫌ではない。

「腕疲れない?」

「大丈夫だ」

ギターケース背負ってるからいつもより高く差さないといけなのは事実だが、大した問題にはならない。

お互いの間にあまり会話はなかったが、意外とあつという間に自宅付近まで来た。時間帯が遅いからは特に花女や羽丘の生徒らしき人は見なかった。噂になるようなことはないだろう。

歩いていると後ろの方から車が来る音が聞こえてきた。そこそこスピードを出しているようだ。

ふと車道と歩道を隔てている所に目がいった。大きな水溜まり。この状況で水溜まりと車の掛け合わせで生まれる答えは1つ。

「止まれ」

傘を一瞬車道側に向ける。車が通った瞬間——水溜まりの水が大きくこつちにはねてきた。

大丈夫か?

そう言えるのならかつこいいんだろ。現実には上手くないかな

もので、わかっていてもすぐに動くことはできない。

傘を傾けられたのはほんの少し。

結局盛大に水溜りの水を浴びた。

「冷た……………」

「だ、大丈夫……………」

「大丈夫に見えるか？」

制服はびしょ濡れ。髪からは水が滴り落ちて。とても気持ち悪い。

「どこも濡れてないか？」

「え、ええ…ありがとう、夕」

「気にするな」

ふと紗夜の背中に視線を向ける。幸いにも傾けた分がちょうどギターケースを守ったらしい。

「小さい頃にも……………こんなことがあったわね」

「……………あったか？ こんなこと」

「小学生の時、あなたが傘を忘れた時よ」

話を聞いてみるとよくよく俺には覚えがない出来事だった。だが、状況はほぼ同じだったらしく結局水を全部被ったのは俺。昔から背だけは2人よりも高かったからな。

「風邪には気をつけなさい」

「わかってる」

再び俺たちの横を車が通った。

「……………熱を出しても看病くらいなら」

ぼそつと何かを言ったような……………。

「ん？ なにか言ったか？」

「なんでもないわ」

まあ何も無いならいいか。

結局、智紀の思うような展開になってしまったが……………言わなきゃバレないだろう。傘が取られてしまうのはどうにかしないとな。

それと……梅雨明けが近いらしい。



## 突然やってきた夏

突然やってきた夏

旭日家 自室

朝。いつもなら寝坊をするところだが……。今日は違った。

「いつから夏ではないと錯覚していた？」

つい2、3日前は梅雨とか言ってたよな？ 雨降って寒い日とかもあつたよな？ それなのに…なんだこの暑さ……。まだ7月になつたばかりだぞ。

朝起きるのが苦手な俺でもこの暑さには勝てん……。

とりあえずベッドに座り、エアコンを付けるかどうかを格闘すると5分。上着を脱ぎ捨てることで耐えることにした。というよりもうそろそろ紗夜が来る頃だろうしちよいどいい。家を出ないといけない時間でもある。

「めんどろ事になる前に連絡……」

だがしかし。神様は俺を見放した。

「夕？ まだ寝て…い…るの？」

ノックと共に部屋に紗夜が来てしまった。それは同時に終わりを告げる瞬間でもある。弁解が非常にめんどくさい。

「待ってくれ紗夜。これにはわけがあるんだ」

「わけ……ね」

なんだその冷たい目は。露出狂みたいと言いたげな感じだな。

「ちようど準備しようと思つたんだが、その前に紗夜に連絡しておかないと無駄足になると思ってたな……」

「それで？ 言い訳はもう終わりかしら？」

時々本気で紗夜が怖い。

「少しはマシな嘘だとは思わないか？」

「早く着替えたらどうなの？ どうせその場しのぎに上着脱いで、そのまま考えていたのでしょうか？ どうして毎回毎回やるべきことを後回しにするのよ」

「俺が知りたい……」

朝から紗夜の説教を喰らうのはいつぶりだろうか。いつもは呆れて行ってしまうんだが。

今更だが今日は夏服なんだな。

「さすがにこの暑さじゃ冬服は無理か」

「昨日、暑ければ夏服でもいいって学校側から連絡されてはいないの？」

「そんなことを言っていたような言っていなかったような」

「呆れた。連絡くらい聞いておきなさいっていつも言っているでしょう？」

「昨日はそこだけ聞いてなかったんだな」

「嘘ばかり」

実際言っていたかどうか本当に覚えていない。課題提出の教科くらは覚えてはいるんだが………忘れたら面倒な先生の教科だけだな。

「はあー。南雲さんを待たせないようにするのよ」

「わかっている。暑いし頑張りすぎるなよ。倒れるぞ」

「夕も気をつけるのよ」

「俺は頑張りすぎないから大丈夫だ」

「少しは頑張りなさい」

それだけ言い残して紗夜は部屋を出て行った。割と会話をしたよ。うな気もするが………それよりも早く準備しないと。

クローゼットから夏服を引っ張りだすためにベッドから立ち上がった。

マンション前

「遅い」

なんとか夏用のズボンを引っ張りだし、着替えたまではいい。時間がなかったからワイシャツのボタン全開で家を出てきた。そして怒られている。

「5分の遅刻はいつものことだろ? と言いたいが、毎回すまない」

「どうせ朝に夏服引つ張りだしてたんだろ?」

「さすが相棒。よくわかってるな」

「自分のことになるよ、とことん無頓着になるよね。夕くんは」

朝から紗夜と絃翔からのダブルパンチ。

「学校着く前にちゃんとボタン閉めなよ?」

「わかってる」

とりあえず学校へと歩き始めた。

「それにしても急に暑くなつたね」

「本当だな。暑すぎて早く起きた」

「早く起きたのに遅れてくるのはどういう理由なわけ?」

「紗夜に怒られた」

「全く君は……」

同じように紗夜も呆れていた。そういった部分も2人は似ている。

2人揃ったらとんでもないことになりそうだ。

「こう暑いと授業に集中しづらいよね」

「全くだ」

「夕くんはいつも集中してないよね?」

「たまには集中してるさ」

絃翔の疑いの視線が刺さるんだが……。ある意味嘘はついていない。

## 花咲川高校 教室

いつも通りの時間に学校へと着いた。かなり暑いのもあってみんな夏服だ。朝練後の運動部はワイシャツを着ずに窓際で涼んでいる。中には朝の俺同様服を着ていない男子も。

「おう。2人ともおはよう」

「人のことを言えないが服を着たらどうだ?」

「ん？ また紗夜さんに怒られたのか？」

「全くもってその通りだ」

「怒られるの好きだな」

なんてほざいている奴をスルーして自分の席へと向かった。

「おはよー。夕君、紘翔君。よく遅刻しなかったね」

「よく夏服引っ張り出してないってわかったな」

「そりゃあねー。紘翔君が予想できることを私が予想できないとでも？」

「確かにな」

「少しは見返そうとは思わないのかい？」

「思わん、忘れていたものは仕方ない」

いつもの会話を済ませてようやく自分の席へと着いた。リュックを机の横に引っ掛けてからだらしなく座る。

「こんなに暑いと魚はボイルにされてそうだな」

「僕たちが照り焼きにされそうだけど？」

「こんな中、外で体育なんてやったらもれなく熱中症だ」

幸い今日は体育がないから……大丈夫……夫だろう。

「そうだね。こまめに水分補給をしないと」

「しまった。明日の3時間目と今日の3時間目を交換だったか」

「そう……だけど。ジャージを忘れたとか言わないよね？」

「いや、使った次の日には別のやつを必ず持ってきてるから大丈夫だ」

「そこはしっかりとってるんだね……」

まあせいぜい蒸し焼きにならないようにするか。

なんて考えながらワイシャツのボタンを1つずつ開けていくと、智紀たちが居る方から声が聞こえてきた。

「今日の体育、ソフトボールだよな？」

「そうだ！ 今日こそD組をぶっ潰してやんよ!!」

「智紀、またボール蹴っ飛ばすなよ？」

「わかってるわかってる」

どこの時代にこんな猛暑の中、運動できるって盛り上がる奴が居るよ。それに投げてきたボールを蹴っ飛ばす奴も居ない。

時は流れて放課後。

「じゃあ僕はバイト行くね」

「おう、真宗のこと頼む」

「任せて」

グータッチを交わしてから紘翔を見送り、帰り支度を始めた。今日はシフトに入っていないからな。帰ってエアコンの効いた部屋で昼寝でもしよう。

誰かに邪魔をされる前に帰り支度を済ませて学校を後にした。

ちなみに紘翔、真宗以外のメンバーは萩野と早乙女だ。

旭日家 自室

今日は怖いくらいになにもなかったな。

学校、帰り道で誰からも絡まれることもなく家にたどり着くことなど果たしてあるのだろうか。実際、家にあっただらう。これは夢にまでみたなにもない日常が――。

ワイシャツをベッドに脱ぎ捨てながらそんなことを考えていると……。家のインターホンが鳴った。

まだ厄介ごとが来たわけではない。心を落ち着けてから玄関へと向かった。

扉を開けるとそこには。

「急にごめんなさい」

紗夜の姿が。玄関ホールのインターホンではなかったらしい。今思えば相手を確認せずに出てしまったな。

「さつき帰ってきたばかりだから大丈夫だ。それよりも……どうかしたのか？」

「その…実は」

……なんとも不運な出来事だ。自分の部屋のエアコンが壊れてしまったから、リビングで勉強していたが、おばさんが友達と電話をしていて気が散ると。うるさいとは言えないからな。かと言って日菜の部屋は……無理があるか。

「父さんが帰ってくるまでなら、リビングは構わないが……」

「今日は夜勤ではないのね」

「今週はな。いろいろめんどうだから俺の部屋に居ればいい」

「夕はどうする気？」

「俺は……」

これから昼寝なんてほざいてみる。試験が近いのに。怒られることは目に見えている……それに2ヶ月に1回ある実力テストも近いな。

「俺も居ると集中出来ないだろ？ だからリビングで勉強する」

「勉強をするなら一緒にの部屋でも構わないでしょう？」

これは……まずいな。紗夜にはなんにも悪気がある発言じゃない。それ故に断りづらい部分が……まあ今回はいいか。俺の感覚もここ最近でだいぶおかしくなったな。

「わかった」

「荷物をとってくるわね」

「鍵開けとくから勝手に入ってきてくれ」

荷物を取りに行っている間に準備しておくでしょう。

飲み物を取ってくるためにリビングに来た。冷蔵庫からはお茶の入ったペットボトルを。食器棚からコップを2つ。ふとシンクに溜まっている洗いに視線がいったが、見てみぬふりをした。

部屋に戻り、ベッドの前に置いてあるテーブルの上に持ってきたも

のを置いた。

さほど散らかってるわけでもないから大丈夫だろう。あとはまだ着替えていないのをどうにかしておくか。

部屋着に着替えてから制服をハンガーにかけ終えた頃、ちょうど紗夜が入ってきた。

「ちゃんとハンガーにかけたのね」

「言われる前にやっておいた」

「普通は言われなくてもやることだと思うけれど」

「それはごもつともで」

ベッドの前に俺が座り、反対側に紗夜が座った。

今思えば勉強道具は全て学校に置いてきてしまったな。今日は元々こういつた予定ではなかったし、仕方ない。さてどうやって誤魔化したものか。

「次の定期試験の範囲は？」

「ん？ ああ……」

絃翔に送ってもらった試験範囲を紗夜に見せると、なにやら手提げバックから本を数冊取り出した。

「教科書は全部置いてきた……で合ってるのよね？」

「……まあそうだな」

「毎回赤点を回避してる方が不思議ね」

「そこは一夜漬けという最強の必殺技がある」

「付け焼き刃にも程があると思うけれど」

それが何気に通じてしまう。もちろん普段の授業で身につけていないから、いろいろ問題はあるが。

「地頭はいいのよね。昔から」

「運がよかっただけだ」

「（私と違って……やれば出来るのに……。無自覚にやろうとしないのはなぜかしら）」

なんだ……？　じつと顔を見られているような。

「紗夜？　どうかしたのか？」

「いいえ。早く勉強を始めましょう」

「そうだな」

あれからどれくらい時間が経っただろう。ふとそんなことを思いながら視線を天井に向けた。見ただけで覚えられたら苦労しないだろうな。

「夕？」

「なんだ？」

「勉強について覚えることが苦手なのに、よくバイトのことは覚えられたわね」

「そのことか。人間はな……好きなことなら覚えられるらしい」

「はあー、呆れた……」

「まあそう呆れるな。気持ちは多少なりともわかるだろ？」

「そう……だけれど。それでも覚えるべきことはしっかり覚えなさい。だいたいあなたはいつも——」

また始まってしまった……。いったいどんな話からシフトするのか読めない。

「言われないと部屋は片付けない。勉強はしない。本当にだらしないわ」

「それが俺の持ち味だ」

「そんなの魅力になるわけじゃないでしょう？　あなただけよ？　ここまです言われてヘラヘラしてるの」

「いや……な」

なんだろうな。紗夜に注意されるのは嫌ではない。怒られることが好きなわけではないんだ。なんというか……。

「心配……してくれてるんだなって」

「そ、そんなわけ……ないでしょう。バカなこと言っていないで、続き



やるわよ」

「はいはい」

「返事は1回」

「はい」

罵倒されただけな気もするが……まあいいか。

「（バカなんだから……本当に）」

時は過ぎて1時間くらい過ぎた頃。勉強は切り上げ、紗夜はギター  
の練習を始めていた。机の上にタブレットを置き、譜面を見ながら  
ゲーミングチェアに座って弾いている姿をベッドに寄りかかりなが  
らじっと見る。

集中しているからか。それとも本当に気づいていないのか。どち  
らかはわからないが、俺の視線を全く気にしていない。

ぼーつと見ていると寝てしまいそうになる。不思議と紗夜と一緒  
に居ると落ち着く。………なにも気を使わなくて済むからか？ 全  
く気を使わないのも失礼だよな。とは思っても気を使わないのも事  
実。

途切れ途切れに聞こえてくるギターの音。エアコンの涼しい風。  
それに加えて体育があったからか、俺を眠りへと誘うのに十分だっ  
た。

俺は紗夜の前だと――



「……っ！」

途中、ミスをしてしまい手を止めた。何度も引つかかるわけではな  
いが時折ミスをしてしまう。いつもとは少し違う環境だからか。そ  
れとも彼に――。

ふと彼に視線を向けると、腕を組んで寝ていた。見られているわけではないが、それはそれで少し違和感がある。決して見られたいわけではないが、多少の興味も示さないのはなんだか腹が立つ。

「(今考えれば2人きりで部屋に居ようと普段と全然変わらないわね…あなたは。それどころか普段よりもだらしない気もするけれど)」  
一定のリズムで寝息を立てる彼から視線を外して再び練習を始めた。

見えないものが見えるのは怖い

見えないものが見えるのは怖い

CIRCLE スタジオ

とある日のこと。

今井リサは焦っていた。

「(夢……じゃないよね?)」

少し早めにスタジオ入りして練習していた彼女は後から入ってきた紗夜をじっと見ていた。いつもとは完全に違う様子に手が止まってしまう。

「(一旦落ち着かなきゃ。紗夜から見えてるのは……お、オーラ? で間違いないよね?)」

リサの目に映る人にはオーラが漂っていた。今見えているのは白色のオーラ。これが一体なにを示しているのかはわからない。ただわかるのは、自分の置かれている状況。確実におかしいことになっているということ。

「今井さん。私の顔になにか付いてますか?」

「う、ううん。大丈夫だよ」

なんとか誤魔化したのが、じつと見すぎるのもよくない。

「(あれはなんのオーラなんだろう……。やる気? だったら色とかよりも大きさ? とかに現れそうだけど。ていうか見えてるのアタシだけ?)」

仮に紗夜にも見えて見えるのなら当然聞いてくるはず。聞いてこない、表情もいつもと変わらないあたり見えていないのだろう。

「(思い切って聞いてみる? でもそれじゃあ心配されそう……。アタシなら普通オーラ見える? なんて聞いてきたら心配するし)」

悩んでいるとノックと共にドアが開いた。おそらく入ってきたのは彼だろう。

「ん? 紗夜と今井だけか」

「ええ。3人はまだ来ていないわ」

「(旭日君のオーラは紗夜と一緒に。大きさも同じ。ってことはやる気

とかではなさそう)」

言い方は失礼になるがやる気だとしたら彼のはさほど大きくはないだろうと心の奥底で思う。

「そうか。タイミングが悪かったがまあいい。今度のライブのセットリストって決まっているか？」

「今井さんが持っているはずですよ」

2人の視線がリサに向いたが特に反応はない。

「ぼーっとしてどうした？」

「え？ あ、ううん！ なんでもないよ！ セットリストだよね？ ちよっと待ってて」

急いでセットリストをカバンから出して夕に渡しに行く。

「(ヤバい……集中できない……)」

セットリストを眺めてから夕は再び紗夜に向けた。

「今回は緩急なしのストレートか」

「緩急を付けてもよかったけれど、参加バンドを考えたら今のセットリストが良いという意見が多かったわ」

「順番は紗夜の意見か？」

「え、ええ……そうだけれど」

「俺も同じ意見だ。特に3番目から——」

2人の会話する姿をじっと眺めていると少しだけ変化があった。紗夜のオーラが少しだけ黄色っぽく変化したのだ。

「(い、色が変わった……!!? でも旭日君はなにも変わってない……?)」

な、なんだろう。驚くと色が変わる?)」

あまりにも少ない情報では予測するのは不可能に近い。こういう時こそ観察というものが必要なだろう。しかし、少しテンパっているリサにそんな考えは微塵もなかった。

この後も2人の会話する姿を眺めては1人心の中で騒いでいた。

「じゃあ順番が決まったらまた伝えに来る」

「ええ。湊さんにも伝えておくわ」

「頼む」

それだけ言い残すと夕はスタジオを後にしたが、扉は閉まることはなくそのまま開け放たれたまま。

「お疲れ様ですっ!」

「お疲れ様です……」

入ってきたのはあこと燐子の2人。そして2人にも例のごとくオーラが見える。共に白色の。

「お疲れ様です。湊さんを見ましたか？」

「飲み物を買ってから……来るそうです」

「そうですか。湊さんが来たら、早速練習を始めましょう」

「……はい」

いつもと変わらぬメンバーだが、余計なものが見えているせいかソワソワする。あこのオーラだけ白色から徐々に緑色に変化していくのを見るとなおさら。

「今日もババーンって演奏しちゃおう! りんりん!」

「うん……!」

あこだけでなく燐子のオーラも同じように少しだけ緑色に変化した。

「(あーもう! 普段見えないものが見えるってこんなに怖いわけ?!)」

1人心の中で叫んでいると、再びドアが開いた。今度こそ入ってきたのは湊友希那だ。

「待たせたわね」

「いえ、時間通りです」

「そう。早速始めるわよ」

早くきたはずなのに練習が1つも進まなかったのは言うまでもない。



C i R C L E    ロビー

気のせいだろうか。今井の様子が少しおかしかった気がする。

「タくん、ラウンジに置いてあったダンボール知らない?」

「ダンボール?」

スタジオを予約しているお客さんのリストを眺めてきると、絃翔がそんなことを聞いてきた。

「知らないな」

「そっか。Roseliaが来る前まではあったんだけどね」

「萩野と海藤さんも知らないのか?」

「聞いてみたけど知らないって」

「暇だももう少し探してみるか」

いったいなが入っていたのかは知らないが。お客さんの忘れ物

……にしてはダンボールって。新しい備品? としか考えられない。

「中身はなんなんだ?」

「僕もわからない。さっきまで置いてあったし、もしかしたら備品か  
なって」

「なるほどな。ダンボールなんて持ってくる人、居るわけない……  
よな?」

「さすがにね」

心当たりはあるんだが……まさかな? 今日ハロハピのバンド  
練習は入っていないし。鋼太さんが居るはずもない。神出鬼没な人  
でもないしな。

この時。もう少し考えていけば、後々招く出来事を防げたのかもしれない  
なかった。

予約リストではなく、スタジオに入ったお客さんの名簿を見ていな  
かった。そこに奥沢美咲、瀬田薫という名前があったのに。



C i R C L E    スタジオ

あれから1時間の時が過ぎたころ。

「リサ、サビ前にミスが多かったから気をつけて」

「う、うん。ごめん……」

「あまり集中出来ていないようですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫！ 昨日練習し過ぎちゃたかな」

というが内心全くと言っていいほど大丈夫ではなかった。

「全然っ！ 集中出来ない！ 友希那と紗夜は全く変わらないし、あこと燐子は緑になったり黄色になったりするし!!」

演奏してる途中に考察などできるはずもない。未だに規則性やオーラがなにを示しているのかは全くわからなかった。ただ普段からよく感情が表に出る人ほど色の変化はあるように思える。今のリサはそこまで冷静に考えてられてはいない為、気づいていない。

「一旦落ち着こう。前回も変なことがあったけど、旭日君は冷静だったし。……あれは自分だけなんともなかったからな気もするけど……」

すると、いつもと様子がおかしいリサを見かねた友希那が動いた。

「早いけど少し休憩にしましょう」

「もう休憩ですか」

「リサ、切り替えてちょうだい」

「う、うん。外の空気吸ってくる」

そう言うとりサはスタジオを後にした。

☆

C i R C L E    ロビー

時が経つのは早いもんだ。あれから外のカフェに人が雪崩れ込んできたせいでダンボール探しは出来ていない。急いで探すものでもないと思うしな。

俺以外のみんなはカフェの手伝い。今は1人で受付に立っている。外とは違って静かだ。

「あれ？ 1人なの？」

外を眺めていると、誰かが声をかけてきた。と言ってもこの声は1人しかいないんだが。

「休憩早いな」

「うん……アタシが集中出来てないから」

「……そうか」

そういえば紗夜と話している時もなぜか俺たちのことをじっと見ていたな。セツトリストの話をした時も反応が鈍かった。

「なにかあったのか?」

「なんでもないよ」

「嘘をつけ。なんでもない奴が集中出来ないわけがないだろう」

「そ、そうだけどさ……」

歯切れの悪い返答だな。

「笑わない……?」

「笑わない」

「(まだ笑った顔、見たことないから見てみたいけど……。こういう時はすごく安心する)」

少しの間が空けてから今井がわけを話してくれた。

「……とうとう人間の限界を超えたか?」

「そ、そんなわけないでしょ!」

「ここまで来るとそんなことが出来るのは1人しか思い当たらない。すぐにでも元に戻れると思うが……いや、聞くまでもないか。電話してみる」

「うん。お願い」

普段見えないものが見えていたんだ。不安にもなる。さて……さっさと元凶を作った人に電話しないと。本当によく変な薬を作れるもんだ。

スマホで鋼太さんに電話をかけた。

『おかけになった番号は現在使われておりません』



「ふざけてる場合ですか」

『悪い悪い。で、用件はなんだ?』

「今度はオーラが見える薬でも作りました?」

『おおっ?! ロシアンウォーターに当たったのか?!』

なんだロシアンウォーターって……。今度はタチの悪いことにコーラではなく無色の透明らしい。そんなもの、疑えるわけがないだろうに。

見る、今井のあの不安そうな顔。たぶんその水を飲んだんだろうな……。だが一体どこで拾った?

今井も聞いてもらおうとスピーカーに切り替えた。

「効果はなんですか?」

『あれは感情がオーラで見えるんだよ』

「か、感情が……?」

『そうそう。まだ開発段階だから、見える数も少ない上に効果時間も短い』

「だ、そうだ」

「勝手に効果が切れるってこと?」

『今回当たったのは今井リサか。君の言う通りだ。だいたい2時間くらい』

ってことはあと1時間もしないくらいに効果が切れるんじゃないか? 未完成なだけに効果時間は短いんだな。前は戻る薬を飲むまではそのままだったのに。

「ってことだ。後少し頑張れ」

「う、うん。ちなみにどんな感情が見えるのかは……」

『興味深々だな、今井リサ。奥沢美咲と瀬田薫で為した結果を連携しておこう。俺は忙しいからこれで』

そう言うとう電話は切れてしまった。しれつと奥沢さんと瀬田が実験台になってるのは不憫でならないが。

すぐに届いたメッセージを確認する。そこには割と衝撃的な内容が書かれていた。

「この人はいつノーベル賞をもらうんだろうな」

「なになに……実験結果。黄色は喜び、赤は怒り、青は悲しみ、緑は楽しさを表しているようだって……。これ普通にすごくない？」  
「すごいな」

今井にはこの4つの人の感情が見えているわけか。表情に出なくてもわかるわけだな。

「あまり害はなさそうだし、問題ないだろう」

「うん、話聞いてくれてありがとう。旭日君」

「俺はなにもしていない。あと、その水は練習終わったら俺に渡してくれ。処理の仕方を鋼太さんに聞いておくから」

「(普通に捨てるのじゃダメだから……だよ。旭日君ならいっか。変なことには使わないだろうし)」

少しだけ間が空いた。

「わかった。旭日君なら任せられるよ」

それはどう言う意味だ……？

よくわからないまま練習に戻っていく今井の背中を見送った。



### C i R C L E スタジオ

オーラの色の秘密を知った今、演奏中余計に気になりはしたが、あれからの練習は特に問題はなくいつも通りにこなしたりサ。

「リサ、今の感じ。忘れないで」

「うん♪ 友希那もいい感じだったよ！」

「私はいつも通りよ」

「(あ、少しだけ黄色になった。嬉しいんだ、友希那)」

そんなことを思いながら今度はあこと燐子に視線を向ける。2人ともオーラの色は緑。

「(いつも楽しそうに演奏してるな、とは思ってたけど、心から楽しんでるんだ。あこと燐子は)」

普段は見えない景色に不安だった。それを1人の人間に話すだけ

でこんなにも薄れるのかと、改めて相談の大切さを知ったりサ。

ふと冷静に返ったからか。

「宇田川さん。サビ前、かなり走ってましたよ」

「そうね。気持ちだけが先走らないようにして」

「(2人のオーラが少し赤くなった……)」

怒っているのだろう。そう言われてもあこのオーラは変わらず緑色のままなのは、良いところなのか。それとも悪いところなのか。判断に困る。

表情が変わらなくても感情は変わっている。人はみんなそういう

。「(そういえば紗夜、旭日君と話してる時は……オーラが黄色に……。そっか)」

「今井さん。さっきの感じ、忘れないで」

「わかってるよ〜」

あの時のことを思い出して少しだけ笑みが溢れるリサ。彼に気づいてもらえて。共感してもらえて。少なからず嬉しかったんだろう。

「(待って……休憩の時、旭日君とずっと話してたような気がするけど

……。まさかね。流星に見逃してただけだよね?)」

「リサ、練習再開するわよ」

「うん」

見えるオーラが少ないとはいえ、彼女はまだ知らない。あの時の旭日夕の感情がさほど揺れていないことを。

## いつか訪れるかもしれない未来

いつか訪れるかもしれない未来

旭日家 自室

微かに感じる光。

小鳥のさえずり。

そして煩わしい高音が一定のリズムで部屋に鳴り響く。音の出所を思わず遠くに投げたくなる衝動を抑えながら、掴み取る。

半目でスマホの画面を眺めながら、なんとか”スヌーズ”と表示されている、液晶を強めに叩いて音を消すことに成功。

この煩わしい音にいつも助けられていると思うと、憤りしか感じない。しかし、目覚まし1つでめんどろごを避けられるのならそれはそれでいい。

なんとか上体を起こしてベッドから出た。どうやら寝ている間にうつ伏せになっていたらしい。寝落ちした気もするので、確かかどうかはわからない。

時刻は8時過ぎ。朝と言うには少しだけ遅い。カーテンを開け放ち、陽の光を浴びながら今日最初の言葉を発する。

「バイト行くか……」

30分後には出ないと遅刻確定。それでも旭日夕という人間は動かない。ゆつくり時間をかけて私服に着替えてから、シヨルダーバックを片手に持った。

ふとある物を忘れていることを思い出し、机の上に視線を向けた。そこには黒色のヘッドホンが置いてある。じつと見ることで2分。

「(箱にしまわないとな)」

結局横にかけてある白のヘッドホンを首にかけてから、ようやく自室をあとにした。ここまでで20分かかっていたりする。

リビングへとやってきた夕はダイニングテーブルに置いてある、おにぎり2つと水筒を持って家を後にした。

季節は出会いと別れの春。



C i R C L E    ロビー

時期が変わろうがいつもと変わらない。15分前には来て着替えを済ませる。受付に行くの大抵。

「お疲れ様です、まりなさん」

「おつかれ〜」

誰かが居る。今日はまりなさんのようだ。

「ちようどよかった。前に面談した子なんだけど、来週から入ってもらうことにしたわ」

「ということは……教育係が必要ですね」

「うんうん。誰がいいかな?」

付きつきりというのは無理があるからな。2人くらい欲しいところだ。……时期的にもちようどいいか。ものは試しというやつだな。

「真宗と鈴音に任せて、フォローは俺と絃翔と涼子でどうですか?」

「それがいいかもね。悪いんだけどお願いできる?」

「話しは俺からしておきます」

「いつも助かるよ〜」

「気にしないでください」

新人の子は少し気の毒だが、ここは2人の成長のためにも理解してほしい。誰かに教えるのは結構難しいからな。俺も例外じゃない。どうわかりやすく伝えることが出来るのかはかなり悩んだ。

「お疲れ様です」

「お疲れ様、絃翔君」

いつもいいタイミングで現れるな、相棒は。

「お疲れ。いいところに来たな」

「いいところ?」

「今度新しい人が入ってくるから面倒を見る。鈴音と真宗がな」  
「そのサポートだね。相手によっては柏崎君が大変になりそう」

「そうだな。そこはうまいこと、やってくれないと困る」

とりあえず絃翔と諒子が居ればなんとかフォローはできるだろう。あとは入ってくる子がどれだけ頑張れるかだな。

「今日も頑張るか」

「今日”は”の間違いだろ？ 君は」

「そんなことはない」

絃翔といつも通りの会話をしていると、まりなさんが急に笑いだした。

「ふふっ、相変わらずだね。羨ましい」

「そうですか？」

「男の子の友情って感じがして」

「でもたくんと居ると大変ですよ？ 待ち合わせの遅刻は常習犯ですし」

「朝早い時を付けたせ」

そうツツコミを入れるとまたまりなさんは笑ってくれた。俺がここに来てもう2年が経つのか。

月日が流れるのはあつというだな。

## 花咲川高校 教室

誰も居ない教室の片隅で俺はある人物を待っている。理由を聞かれると、正直よくわからないしか答えることはできない。まあその人物が来たらわかるだろう。

いつも授業中に眺めている中庭に集まる花高、花女、羽丘の生徒。今日はほとんどの人が一度は経験する”あれ”の日だからな。人によつては左胸にコサージユを付けている。

気になって調べてみたが、コサージユは元来将来の安全や健康を守る願いが込められているらしい。確か……生徒の新たな門出をお祝いし将来の後押しをする式典にはぴったりのメッセージが含まれた

アイテム。だったはずだ。

無論俺の胸にも付いている。3年間というものはあつという間だ。特に高校2年と3年はな。……こんな思いになるとは、入学したての頃は考えもしなかったな。

特に印象に残っているのはやはり――。

「いつもそうやってよそ見をして、授業を聞いていないのね」

「7割だ」

「3割も聞いているとは思えないのだけれど」

呼び出した？ いや、誘ってきた人物が来てくれたようだ。

「珍しいな、紗夜。最後に”デート”したいだなんて」

「……意地の悪い言い方」

と言いつつも頬が赤い。その表情がどこか懐かしく思える程、今の関係性には距離がある。それも仕方のないことだが、納得しきっていないわけでもない。

「デートと言いつつも先生と生徒会の人たちへの挨拶だろ？」

「ええ。建前は……」

最後の方は声が小さくて聞き取り辛かったが……なんとなくはわかる。

「悪い。最後はなんて言ったんだ？」

「なんでもない」

お互いわかつてる。聞こえていること。聞こえてない振りをしてることを。昔は本当に聞こえていなかったが。

「3年間。いや6年間、楽しかったか？」

「ええ……。たくさん思い出を作ることが出来たわ」

言葉からも。表情からも。紗夜に取って花女で過ごした6年間はとても大切な思い出になってくれたようだ。柔らかい微笑みを浮かべながらそう言ってくれた紗夜を、思わず抱きしめたいと思ってしまう。

「あなたは……どうだった？」

「そう……だな。正直、退屈な時間を過ごすものだと思っていた。だが……そんなことはなかったな。頼もしい親友や友達がたくさん出来

た。別れが惜しいよ」

嘘偽りのない思いを紗夜に伝えた。

「続きは歩きながら話そう。生徒会の人たちも先生たちもまだ居るはずだ。俺も挨拶してないからな」

「すれ違いにならないければいいのだけれど」

そう言った直後。スマホが震えた。スマートウォッチで確認するとどうやらメッセージの通知らしい。

「問題ない。生徒会室で待っているみたいだからな」

「それなら早く行きましょう」

「そうだな」

待たせるとめんどくさそうだな。

そんなことを思いながら日常生活の思い出が詰まった教室を後にした。途中、紗夜の手を取って。

#### 花咲川女子学園 生徒会室

楽しいひと時は流れ、俺たちは花女に戻ってきた。一通り挨拶を終え、最後に寄りたい所があるという紗夜に連れられて俺は今ここに居る。

「さすがに白金と市ヶ谷さんは居ないか」

最後に寄りたかった場所は生徒会室。ある意味俺もここには思い出があったり。2年も通ったからな。

そんなことを考えながら窓から夕焼けを眺めていると紗夜が隣に立った。そしてゆつくりと体を預けてくる。

「綺麗な夕焼けね」

「紗夜の方が綺麗だ……って言ってほしいのか？」

「そういう訳じゃ……」

冗談でもそういう言葉を言ってあげたことはなかったな。”好き



”と伝えたこともあまりなかったように思う。

「楽しかったか？」

「えっ……？」

「俺と一緒に居て」

「当たり前よ。……夕は？ 私と居て……楽しいと思えた？」

「もちろんだ。顔に出なくて悪いとは思う」

「そんなことは……」

こうしている間もあまり変わらないんだろうな。俺の表情は。ポーカールとかでは有利なんだが……。あとはババ抜き。引きが悪くなければ。

今考えることではないな。

「ライブの日は教えてくれ。出来るだけ行くようにはする」

「あなたらしいわね。」出来るだけ」だなんて」

「もしものことがあるかもしれない」

「それって……」

「レポートの提出が間に合わないとか」

「はあ……容易に想像できてしまう辺り、現実になりそうね」

何度も見たその呆れ顔。どんな表情を浮かべていても紗夜は可愛い。いや、怒っている時は例外だな。あのゴミを見るような目は一部の人間には喜ばれそうだ。

「背、伸びたんじゃない？」

「そうか？」

「そうよ……前は肩に頭を乗せられたのに。今は届かないもの」

「前……か。ぼーっとしていないで、さっさと想いを伝えればよかった」

そうすれば……この先も。ずっと一緒に居ることが出来たかもしれない。もつと……楽しい思い出を作っただけが。出来たかもしれない。

「どうかしらね。あなたへの好意を自覚していなければ断っていたと思う。私には……ギターしかなかったもの」

「断られていたとしても……俺はそう簡単に諦めはしない。そんな気がする」

「それはそれで困るわね」

一度気持ちを知ってしまったえば、そう簡単に諦めがつくわけもない。そう考えると気持ちを知ったことが遅かったのは、ある意味よかったのかもな。

「またこうして2人で話せてよかった」

「もうそんな機会がないみたいに言わないでくれ。先はまだ長い。2人で話せる時間なんて作れるさ」

「そうだといいのだけれど」

以前よりは少なくなるんだろう。いろんな意味で。……今は考えるのはやめておくことにする。

ふとガラスに映る彼女を見ると、涙を流していた。

「紗夜？」

不安にさせるようなことでも言ってしまったのだろうか。それとも……。

「あなたと一緒に……この先も歩みたかった」

「高望みだ。それでも……同じで気持ちでよかった」

優しく頭を撫でながら答え、そっと抱きしめた。

「卒業式で泣いたんだろ？　こんなところで……俺のために泣かないでくれ」

「でも私は——っ！」

「お互い、自分で選んだ道だ。俺は後悔していない」

覚悟は——あの日、可能性が見えた時に決めている。後悔はしていない。して……いないはずなんだ。

しばらくするとぼつりと声が聞こえてきた。

「朝は……」

「朝が…なんだ？」

聞き返すと、俺から少しだけ離れて続きを答えてくれた。

「朝はちゃんと起ること……いい？　目を離すとすぐにあなたは——」

「わかっている。努力はするが、たまには許してくれ」

「仕方ないんだから……」

頬を伝う涙を拭ってあげた。そして、今できる精一杯の笑顔を浮かべた紗夜にそつと――。

☆

目を覚ましてから5分。彼はスマホと睨めっこをしていた。

「おかしい」

本来目を覚さないといけない時間はとっくに過ぎている。どう足掻いても紘翔との待ち合わせにも、学校にも間に合わない。

覚えている限りでは、いつも通り紗夜に起こしてもらい目を覚まし、あと5分だけと目を瞑った。ということしか覚えていない。

「はあー……バレたら明日はないか」

想像するだけでも恐ろしい。ゴミを見るような表情を浮かべて小一時間注意を受ける。もういつそのこと、そんな表情で見られることに喜びを覚えたほうがいいのでは？ と考えることもしばしば。

「寝るか」

焦つてもしようがない。ここは連絡すべき相手に連絡をしてゆっくり向かう方がいいかもしれない。そんなことを考え行動に移す。

『悪い』

『寝過ぎしたから先に行つててくれ』

『わかつたけど、ちゃんと学校には来るんだよ？』

『2限辺りには行く』

なんてやりとりを終えて、スマホを手放し枕元に置いた。

「妙にリアルな夢だったな……」

ほとんど覚えてはいないが、リアルな夢だったことだけは覚えている。誰が居たのかも。なにを言っていたのかも。場所も。全てが幻想だったと言われている。そんな気がしてならない。

「卒業なんてまだまだ先の話か」

そして彼は再び目を瞑った。

『朝はちゃんと起ること……いい？ 目を離すとすぐにあなたは—  
—』

ゆっくりと目を開けてため息を吐き出す。

「行くか」

気合いを入れ、ベッドから立ち上がった。

これは……いつか訪れるかもしれない未来。  
未来は無数に存在する。

一概にも確定しているとは——言えない。